

博士（人間科学）学位論文

満洲国・建国大学に於ける武道教育

-- その実態と教育力

The Actual Conditions and Educational Strength of
Budo Education at Kenkoku University in Manchukuo

2003年4月

早稲田大学大学院人間科学研究科

志々田 文明

Shishida, Fumiaki

目次

序論

- (1) 研究の動機 ----- (1)
- (2) 研究の目的 ----- (3)
- (3) 方法としての聞き取り調査 ----- (6)
- (4) 史・資料について ----- (8)
- (5) 先行研究 ----- (14)
 - 1) 建大に関わる先行研究 ----- (15)
 - 2) 建大と武道に関わる先行研究 ----- (23)
- (6) 海外における「帝国主義とスポーツ」に関する研究動向 ----- (26)
- (7) 国内のスポーツ関係学会における研究動向 ----- (30)

第1部 満洲国と建国大学の教育 ----- (32)

第1章 建国大学の環境—満洲国と国都・新京 ----- (32)

- 1. 国際状況と日本 ----- (32)
- 2. 満洲国の建国 ----- (33)
- 3. 満洲国の国家体制 ----- (34)
- 4. 満洲と首都・新京の環境 ----- (37)
 - (1) 満洲とは何か ----- (37)
 - (2) 首都・新京 ----- (38)
 - (3) 新京の構造基盤（インフラストラクチャー） ----- (40)
 - (4) 武道の殿堂・神武殿 ----- (41)
 - (4) 民族の構成 ----- (42)

第2章 満洲国の高等教育と体育政策 ----- (44)

- 1. 満洲国における教育政策 ----- (44)
 - (1) 暫定学制期 ----- (44)
 - (2) 新学制期 ----- (45)
 - (3) 新学制後期 ----- (47)
- 2. 満洲国における高等教育 ----- (47)
- 3. 満洲国と体育 ----- (49)
 - (1) 学校体育 ----- (49)
 - (2) 社会体育 ----- (50)
- 4. 満洲帝国武道会 ----- (52)

第3章 建国大学の教育—思想と制度 ----- (54)

- 1. 建国大学創設の構想と現実 ----- (54)
 - (1) 日本の満蒙認識と石原莞爾 ----- (54)
 - (2) 石原莞爾の「アジア大学」構想 ----- (58)
 - (3) 建国大学の創立過程 ----- (60)
 - (4) 石原構想 ----- (62)
 - 1) 1937年3月構想 ----- (63)
 - 2) 1938年6月構想 ----- (64)
 - (5) 副総長・作田荘一と建国大学の実際 ----- (66)
 - 1) 目的 ----- (66)

- 2) 大学の基盤 ----- (67)
- 3) 教学の基本方針 ----- (67)
- 4) 教育の目標 ----- (69)
- 5) 大学機構 ----- (69)
- 6) カリキュラムの基本方針 ----- (70)
- (6) 建国大学の特徴 (平等と自由) ----- (70)
 - 1) 五族平等 ----- (70)
 - 2) 読書の自由・学問の自由 ----- (73)
- (7) 結論 -- 教育及び武道教育への影響 ----- (75)
 - 1) 影響その1 ----- (75)
 - 2) 影響その2 -- 武道教育への石原の影響 ----- (80)
- 2. 建国大学の目的・組織・実際 ----- (80)
 - (1) 建国大学の目的と建国精神 ----- (81)
 - (2) 大学の組織と実際 ----- (83)
 - 1) 組織 ----- (83)
 - 2) 修業年限 ----- (85)
 - 3) 管轄 ----- (85)
 - 4) 教科内容 ----- (85)
 - 5) 学生の採用数及び学費 ----- (86)
 - 6) 教育の特色 ----- (86)
 - 7) 創設の順序 ----- (86)
 - (3) 建国大学の環境 ----- (87)
 - (4) 入試・学生 ----- (88)
 - 1) 入試 ----- (88)
 - 2) 学生 ----- (90)
 - (5) 塾の教育 ----- (90)
- 第4章 「民族協和」と満洲国 ----- (94)
 - 1. 「民族協和」とは何か ----- (95)
 - (1) 五族共和と五族協和 ----- (95)
 - (2) 「民族協和」の形成過程 ----- (96)
 - (3) 金井章次と「民族協和」 ----- (98)
 - (4) 満洲国と「民族協和」 ----- (99)
 - (5) 協和会の改組と「民族協和」 ----- (101)
 - (6) 「民族協和」の概念 ----- (103)
 - 2. 建国大学における「民族協和」 ----- (103)
 - (1) 根本的矛盾 ----- (103)
 - (2) 議論と対立 ----- (105)
 - (3) 同床異夢 ----- (107)
 - (4) まとめ -- 建国大学の民族協和 ----- (110)
- 第5章 建国大学に於ける武道教育 ----- (112)
 - 1. 武道教育の制度と実際 ----- (112)
 - (1) 講義科目と訓練教育 ----- (112)
 - (2) 学科配当と訓練教育 ----- (114)
 - (3) 毎日の生活 ----- (116)
 - 2. 武道教育の思想 ----- (119)
 - (1) 「武道訓練」設置の意図 -- 副総長・作田荘一の考え方 ----- (119)
 - (2) 武道訓練の思想 ----- (120)

- 第2部 武道教育の実際 ---- (123)
 - 1) 武道場について ---- (123)
 - 2) 養正堂 ---- (124)
- 第6章 剣道の教育 -- 練武・堂々 ---- (126)
 - 1. 武道顧問・島谷八十八 ---- (126)
 - (1) 堂々たる態度と人柄 ---- (126)
 - (2) 剣道技法の特徴 ---- (129)
 - (3) 剣道思想 ---- (131)
 - (4) まとめ一堂々たる剣道 ---- (133)
 - 2. 教員人事 ---- (134)
 - 3. 剣道教育に対する学生の反応 ---- (135)
 - 4. 多様な剣道指導者 ---- (138)
 - 5. 剣道部 ---- (145)
 - (1) 部のはじまり ---- (145)
 - (2) 建大剣道の特性 ---- (146)
 - 1) 実戦性 ---- (146)
 - 2) 練武性 ---- (148)
 - 3) 「自主性」許容の剣道 ---- (148)
 - (3) 対外試合 ---- (149)
 - (4) 部員 ---- (150)
 - (4) 剣道と民族性 ---- (153)
- 第7章 柔道の教育 -- 闘志・自主・自律 ---- (155)
 - 1. 武道顧問・福島清三郎とその思想 ---- (155)
 - (1) 履歴と人柄 ---- (155)
 - 1) 武術専門学校と福島清三郎 ---- (155)
 - 2) 履歴と人柄 ---- (157)
 - 3) 柔道歴と技能特性 ---- (159)
 - 4) 家庭人としての福島 ---- (161)
 - (2) 石原莞爾と福島清三郎 ---- (161)
 - 1) 義方会 ---- (161)
 - 2) 石原莞爾への心服 ---- (164)
 - (3) 武道の思想と建大生 ---- (165)
 - 2. 柔道部と教育 ---- (167)
 - (1) 建大柔道の指導者たち ---- (167)
 - (2) 柔道部創部の頃 ---- (170)
 - (3) 各期の柔道部員 ---- (172)
 - (4) 部風 ---- (176)
 - (5) 試合 ---- (181)
 - 3. 柔道部と東亜連盟思想 ---- (184)
- 第8章 合気武道の教育 -- 非合理主義から合理主義へ ---- (188)
 - 1. 武道顧問・植芝盛平とその技法 ---- (188)
 - (1) 植芝盛平と合気武道 ---- (188)
 - 1) 合気武道の確立 ---- (188)
 - 2) 合気概念 ---- (189)
 - 3) 合気武道技法 ---- (190)
 - (2) 「神技」への驚き--建大生の印象 ---- (191)

- 2. 教官・富木謙治と合気武道教育----- (193)
 - (1) 合気武道採用の経緯----- (193)
 - (2) 植芝盛平と富木謙治----- (194)
 - 1) 富木謙治----- (194)
 - 2) 植芝盛平の驚異----- (195)
 - 3) 合理主義の新道----- (197)
 - (3) その他の指導者・愛好者----- (198)
 - (4) 指導内容----- (200)
 - (5) 合気武道の理論化----- (203)
 - (6) 人柄----- (205)
 - (7) 芸能論と武道----- (206)
- 3. 合気武道部----- (207)
 - (1) 創部の頃----- (207)
 - (2) 部員・部風・民族性----- (208)
 - (3) 活動----- (211)
- 4. おわりに----- (212)
- 第9章 弓道の教育 -- 身心合一・正射必中----- (214)
 - 1. 必修選択科目としての弓道----- (214)
 - 2. 指導者・加川満喜と指導法 -- 身心合一・正射必中----- (216)
 - 3. 加川満喜 -- その履歴・技能・人柄----- (219)
 - 4. 弓道部の創成と学生の弓道教育観----- (221)
 - 5. 校外及び校内活動----- (224)
 - 6. まとめ----- (227)
- 第10章 銃剣道の教育 -- 将校の銃剣道----- (229)
 - 1. はじめに -- 銃剣道の二面性について----- (229)
 - 2. 建大の銃剣道教育の性格----- (232)
 - (1) 軍事訓練の授業----- (233)
 - (2) 銃剣道の授業----- (234)
 - (3) 銃剣道教育の性格----- (235)
 - 3. 銃剣道教員----- (236)
 - 1) 太田登----- (237)
 - 2) 桜井輝夫----- (237)
 - 3) 砂山秀雄----- (239)
 - 4) その他の銃剣道指導者----- (239)
 - 3. 銃剣道教育の変遷----- (240)
 - (1) 授業----- (240)
 - (2) 課外活動の形成----- (241)
 - (3) 活動状況 (1943-1944) ----- (244)
 - (4) 昇段審査----- (246)
 - 4. 教育機能とその教育的意義----- (247)
- 第11章 騎道の教育 -- 民族協和する馬上禅----- (250)
 - 1. 騎道と馬術略史----- (250)
 - 2. 授業としての騎道教育----- (252)
 - (1) 導入の経緯----- (252)
 - (2) 指導者たち----- (253)
 - (3) 教場と馬----- (254)
 - (4) 教育内容----- (255)

- (5) 学生にとっての騎道 ----- (257)
- 3. 課外活動としての騎道教育 ----- (258)
 - (1) 草創の頃 ----- (258)
 - (2) 部員と活動内容 ----- (259)
- 4. 教育的意義 ----- (261)
- 第12章 角力の教育 -- 人格涵養としての角力 ----- (265)
 - 1. 元関脇天龍・和久田三郎 ----- (265)
 - (1) 恩師の訓戒と春秋園事件 ----- (266)
 - (2) 満洲国における和久田三郎 ----- (268)
 - 2. 角力の教育 ----- (270)
 - (1) 授業として ----- (270)
 - (2) 学生の見た天龍と角力 ----- (272)
 - (2) 角力部 ----- (274)
 - 1) 角力部の発足 ----- (274)
 - 2) 角力部の性格 ----- (275)
 - 3) 活動 ----- (276)
 - 3. 角力教育の特性 ----- (278)
- 第13章 講義「武道論」と武道研究 ----- (281)
 - 1. 武学研究班と武道論 ----- (281)
 - (1) 武学研究班設置のプロセス ----- (281)
 - (2) 武学研究班の活動 ----- (283)
 - 2. 講義「武道論」と武学 ----- (284)
 - 3. 講義プリント「武道論講義要綱」 ----- (288)
 - (1) 「武道論講義要綱」の内容 ----- (288)
 - (2) 武道論批判への回答 ----- (290)
- 第14章 建国大学に於ける武道の教育力 ----- (292)
 - 1. 日本武道と建大の武道 ----- (292)
 - (1) 武道の構造 ----- (293)
 - (2) 建大武道教育の特徴 ----- (294)
 - 2. 異民族の武道受容 ----- (297)
 - (1) 評価と留保 ----- (297)
 - (2) 「日本人化」の手段としての武道とその忌避 ----- (300)
 - (3) 充実への逃避 -- 朝鮮人の立場 ----- (303)
 - 3. 他者感覚の涵養 ----- (304)

序論

(1) 研究の動機

建国大学における武道教育を担った中心人物は富木謙治（1900-1979）である。筆者は彼の晩年の教え子であり、富木の死去直後にかねて行っていた調査に基づきその略伝を記した。執筆に際して最も資料の不足をみたのが、満洲^{注1}における富木の具体的足跡であった。本研究の発端はこの部分を解明して富木の評伝を執筆したいという願望であった。

富木とののはじめての出会いは、早稲田大学の体育局合気道部入部後一、二ヶ月が過ぎた頃、新人歓迎茶話会が行われた時であった。30余名の同期生に混じって末席に坐っていると、部長兼師範の富木は物静かで穏やかな口吻で長い話をし、凜とした威厳があたりを厳粛に包んだことが思い出される。以後師弟の関係で折に触れ彼の話を聞くことになるが、歴史的・理論的に展開されるその武道論は、日本武道の価値と意義、将来の課題と我々の役割を語って尽きるところなく、その教育的情熱に少なからざる部員が強い感銘を受けた。富木は武道家でありながらその強さを示すことのない人であった。稽古場に於いても同様で、理論的説明と簡単な示範で修行者に稽古を求め、適宜指導・修正したのち、その大体ができれば誉めるといった風の指導であった。日本武道の優れた理論家であり、実践家としても柔道界、合気道界に味わい深い足跡を残したこの人物は、常住坐臥、古武士然とした見事な姿勢と品格を示していた。しかし武道家としての実力と人格について筆者がその真価を本当に理解するようになるのは、不覚にもその没後に富木の足跡を調べるようになってからである。

後に詳述されるように富木は合気道を柔道のように発展させるためには競技化することが必要と考え続け、戦後の1960年代には早稲田大学においてそのシステムを実現した。合気道競技は、競技のシステムを持たない幾つかの大きな会派に揉まれながらもゆっくりとした足取りではあるが着実に世界に普及しつつある。富木が想定したように剣道競技、柔道競技に続く第三の武道競技として成長するかどうかは現在までのところ予断を許さないが、一つのオリジナルな武道文化の創造という事実だけは動かないだろう。合気道競技の武道史的また体育的意義については富木自身が詳細に論述してきたところであるが、それを生み出す上で重要な実践と思索を行った時期が満洲の建国大学教官時代を中核とした戦前の活動であった。しだいに富木の研究に意義を見出した筆者は、彼の創造の過程で最も重要な時期である満洲国・建国大学^{注2}に於ける活動を関係者が生存する早い時期に調査・記録しておく必要を強く考えるようになった。そしてその研究は同時に、富木が合気道の創始者植芝盛平の最古

^{注1} 満洲の「洲」という字は「州」の旧字と誤解される場合が多く、今なお満州と表記される傾向にある。本論文ではこのミスを繰り返して「正確」に表記するのではなく全て満洲の正字を用いた。本論文の第1章4(1)参照。

^{注2} 満洲国という国家は日本国の傀儡政権による傀儡国家と評価されるところから、歴史学、教育史学においては一般に「満洲国」とカギ括弧を付して使用される。本研究も基本的にこの思想を踏襲するが、記述に際しては煩雑を避けるためカギ括弧を外して使用した。なお満洲国を国家と見なすかどうかについて、山室信一氏は、国籍法ができていないから国家としての体裁をなしていないが、統治機構ができていた点と1937年の治外法権撤廃の段階で形式的には独立国家の体裁を整えた、としてその微妙な性格を示唆している（インタビュー・満洲・満洲国をいかに捉えるべきか、環，藤原書店，Vol. 10：47.）。なお中国政府においては必ずこれを偽満洲国と読んでいる。

参の高弟の一人であったことから合気道史の揺籃期或いは幼少年期の研究をも意味すると考えたのである。

1980年、筆者は建大一期生の百々和氏（神戸大学名誉教授、経済学）を神戸のご自宅に訪問し、建大と富木について初めて本格的な話を伺った。その後の1989年2月、建大で角力を指導した元関脇天龍和久田三郎氏をご自宅に訪ね、3月には、一期生中川敬一郎氏（東京大学名誉教授、経済学）を青山学院大学の研究室に訪ね、それぞれ聞き取り調査を行った。これらの方々からお話を伺う中で筆者の問題関心は、合気道に関わる上記の事柄を越えて、建国大学に於いて武道教育がどのように実施されたのか、という風に拡大されることになった。こうして1990年8月、筆者ははじめて訪中し、中国東北部の長春にある旧建国大学の関係者と史跡を訪ねた。早稲田大学社会科学研究所の依田憲家教授による受け入れ先の吉林大学・孫連壁教授の紹介と初代建国大学同窓会長の齋藤精一氏（建大一期生）のご助力によるものであり、今日に至る「満洲国・建国大学に於ける武道教育」を主題とする研究活動の開始である。齋藤氏の事前の連絡により中国側の建大同窓生多数（その多くは70歳代中頃であった）の盛大な出迎えを受け、全面的な調査協力を受けることとなった。以後今日まで、論文や報告書の作成、史・資料の収集、日本・中国・韓国・モンゴルの建大同窓生の方々との交流を続けることになるが、その間に諸氏の深い見識や高潔な人格から筆者が受けた影響は甚大なものであった。筆者がこの研究を一武道家の研究や合気道という一日本武道の研究に小さく限定することなく、日本近・現代史研究あるいは少なくとも日本近・現代教育史研究のより広い視野の中で捉えることの必要性を痛感したのは、紛れもなくそうした方々の影響である。

このようにして始まった研究は、武道教育の包括的な概要を扱った1991年の論文「『満洲国』建国大学に於ける武道教育」によって開始された。以後今日に至るまでの十四年の間、少しずつではあるが研究を積み上げ、日本武道学会等に於いて論文、研究発表など様々な形で公表してきた。その重点は事実の把握、即ち武道教育の実態を細部にわたって把握する作業に置かれた。具体的には、剣道、柔道、合気武道、弓道、銃剣道、騎道、角力等について課外活動と授業の両面から事実を確認することであり、また武道の講義科目も追跡した。曖昧な根拠の上に如何なる思考も意味をなさないと考えたからである。

武道史の研究は、^{注3} オリンピック東京大会の開催以後、1965年頃（昭和40年代）より組織的に行われるようになった。文部省は武道優遇政策を打ち出すようになる。その第一は高等学校の柔道剣道教員資格試験制度を設けたことである。これは高校卒業程度の学歴の者に試験を課し、合格者に柔道・剣道の教員免許をあたえ、指導者の不足を補うという措置であった。行政の武道を優先するこのような考え方は大学体育学部を中心とする武道系の研究者を喜ばせ、武道学科の設置に向かわせる。文部省は、1965年から始まる数校の大学体育学部における武道学科の設置を認可し、本格的な武道教員養成の施策を開始する。これに呼応するように日本体育学会などに所属して活躍していた武道系の研究者は、政、財界の支持をえて1968年2月に日本武道学会を設立した。同会会則によるとその目的は「国技としての武道の

^{注3} この段落の「『史料・明治武道史』上梓」までの記述は右論文に依拠している。志々田文明(1990) 武道論とその課題, 早稲田大学人間科学研究 3 (1) :161-171.

科学的研究調査を行ない武道学の発達普及につとめ、会員相互の研究上の連絡提携を図る」ことにあった。この学会が最初に直面した問題が「武道とは何か」という定義づけの問題であったことが示すように、課題は武道という名の後ろに山積していたが、ここに武道の科学的研究の公的な場が整えられ、武道学の確立へのスタートがなされた。1967年東京教育大学（筑波大学の前身）に武道学科が設立されると柔道、剣道講座と並んで武道論講座が設置された。武道論講座が「基礎的総合的理論の体系」としての武道学を志向しており、それを哲学的思索としての思想史・論（内容論）と歴史（武道史）、技術論等までの広がりをもって構想したところに、この講座の特色があった。武道論講座1968年次の四つの研究目標の一つは「明治以降における武道および武道（科）教育の展開過程に関する諸問題」であった。この分野の課題に取り組んだのが杉江正敏氏（現大阪大学）ら若き研究学徒であった。指導教官であった渡邊一郎氏は、第四目標に当たる基礎資料として大著『史料・明治武道史』（1971）を上梓し、以後、1980年から1988年まで毎年「近代武道史研究資料」（～）を刊行して後学の研究者に有益なる資料を提供した。近代武道史の包括的な研究は、前述の杉江氏と中村民雄氏（現福島大学）によってリードされてきたとって過言ではない。ただその研究は、当然のことではあるが、日本国内を対象にしてのものであり、海外における日本武道の歴史的研究は、少なくとも武道学会、体育学会、スポーツ史学会などの研究論文のレベルでは見られなかった。

以上から筆者が行ってきた研究は、海外における日本武道の実態を短期間ではあるが徹底的に描いた新しい試みといえる。また本研究は、満洲国の建国大学という特殊・特定の場における七つの個別武道を対象にその思想性を描くという、嘗て例を見ない研究でもあることは明かであり、この研究史的認識が筆者の動機の一つにもなっている。

(2) 研究の目的

さて、本研究の第1の目的は、十数年間の調査研究の蓄積を総合的に再検討し、新たな資料読解、資料調査と考察を加えて、歴史的事実を明らかにすることにある。本研究では第二部第6章から第13章がそれに相当する部分である。その作業の中から初めて、武道教育が満洲国の建国大学において果たした歴史的役割や教育的意義を考察する基盤ができると考えるからであり、各章においてはそれぞれの特性あるいは解明された事実に応じてそのような考察を行っている。また第1章から第5章まででは、それぞれ満洲国、その教育・体育政策、建大教育の思想と制度、建大教育の課題としての「民族協和」、建大教育の制度と実際、また思想等について考察し、実際の第二部の準備的考察として徹底を期した。

第2の目的は、武道の「教育力」についての考察である。筆者は学生時代から合気道を学び、やがてその歴史と理論を研究するようになり今日に至った。武道は武術として長い前史をもつが、明治・近代にいたって剣道、柔道を先頭に学校教育の体育の分野に地歩を占めるようになり、日本に出自をもつ体育教材として戦前はいうに及ばず戦後においても教育行政的に配慮されてきた。そこには武道は日本の「伝統」の身体運動を媒介とした文化であると

いう価値認識がうかがえる。^{注4} 武道も勝敗を競う点においてはスポーツと同じであるが、勝敗に拘泥しない「何か」を求める姿勢は武道各団体の指導層や広範な修行者の間でも自己のアイデンティティとしてこだわりが見られる。そうした意識を表出したものが、1975年に全日本剣道連盟が制定した剣道の理念であろう。そこでは、「剣道は剣の理法の修練による人間形成の道である」とされ、武道は立派な人格を育成することが可能ないわば「文化の力」を持つものとして認識されている。しかし、武道には人間に与える影響力の面でどのような力があるのかという疑問は、長く筆者が漠然と抱いていた問題であった。

ところが近年、文化が「力」を持つことは、1990年代になって注目を浴びている文化帝国主義論の前提ともなっていることを教えられた。それはジョン・トムリンソンの『文化帝国主義』の中の、「人間世界とは、究極的には文化的意志 [cultural will] の働きとして捉えるべきものである。」^{注5} といった一文である。また、E.W.サイードは、自著『オリエンタリズム』（原著1978）で「文化の力 (cultural strength)」という概念を「曖昧で、しかも重要な概念」としていることを学んだ。サイードは、それについて、

「文化の力 (ストレングス) について論じるのは、容易なことではない。--- だが同時に、本書の目的の一つは、オリエンタリズムを、文化的な力の行使の一形態として説明し、分析し、考察しようとするところにある。」

と記して、「文化の力」を論じることの困難性に言及し、^{注6} 続けて、19世紀と20世紀の西洋に関するかぎり、「オリエンタリズム [という文化の力] とは、オリエンタリズムの事物を、詮索、研究、判決、訓練、統治の対象として、教室、法廷、監獄、図鑑のなかに配置するようなオリエンタリズム知識のことなのである」^{注7} としている。

また、サイードは、オリエンタリズムのもつ強力な「文化の力」を個人的体験から、

「この研究に身を投じた個人的動機は、二つのイギリスの植民地で少年時代を過ごした人間として私の『東洋人』意識である。これら植民地と合衆国とで私の受けた教育は、すべて西洋的なものであった。それにもかかわらず、私は幼い日々の記憶を保ち続けてきた。」とし、「多くの点で私のオリエンタリズム研究は、すべてのオリエンタリズムの人々の生活をきわめて強力に律していた文化が、私というオリエンタリズムの臣民に刻みつけたその痕跡を記録する試

^{注4} 志々田文明(1987)「中間まとめ」を考える、体育科教育 35(1) : 28-32.

^{注5} ジョン・トムリンソンは、「人間世界とは、究極的には [人間の] 文化的意志の働きとして捉えるべきもの」として文化の力を前提として議論を進めている。ジョン・トムリンソン (1997) 文化帝国主義, 青土社 : 東京, p.350. 原書では「Ultimately, the shape of the human world has to be conceived as a function of cultural will.」John Tomlinson, Cultural Imperialism : A Critical Introduction, The Johns Hopkins University Press, Baltimore, 1991, p.178.

^{注6} 板垣雄三ほか訳, E.W.サイード (1993) オリエンタリズム・上巻, 平凡社 : 東京, p.101. 原書では、「Cultural strength is not something we can discuss very easily -- and one of the purposes of the present work is to illustrate, analyze, and reflect upon Orientalism as an exercise of cultural strength.」。Edward W. Said, Orientalism : Western Conceptions of the Orient, Penguin Books Ltd., England, 1995, p.40.

^{注7} 同上書, 邦訳, p.101. ただし []内は引用者が補った。以下同様。原書では、「Orientalism, then, is knowledge of the Orient that place things Oriental in class, court, prison, or manual for scrutiny, study, judgment, discipline, or governing.」。ibid., Said, p.41.

みであった。」^{注8}と記している。

サイードが思索の対象とするオリエンタリズムとは、オリエントを対象とする学者の行為や思考様式がオリエントにもたらす力、即ちヨーロッパの支配の様式のことであり、^{注9} 武道も同様に文化であるといっても同列に論じられるようなものではない。しかし武道がそれを学ぶ人々の心身にある「痕跡」を残してきたのは事実であろう。武道という日本文化のもつ「力」とは何であろうか。武道は明治期以来の近代教育の中で着実に地歩を固めて公教育の中に組み込まれる一方、そのことに伴う権威化を追い風として社会の中でも着実に普及し、また学術の場に価値ある研究対象として認識されてきた。今日では、一方で柔道や剣道のようにスポーツ種目の一種として数えられながらも、他方でそれらを武道の範疇によって位置づけることが政策的に認められて、^{注10} 社会的に一般化しつつある。しかしそこにどのような独自性があるのだろうか。また、近代日本において教育教材として徐々に重要視され、人々に影響を与えてきた武道は、満洲でどういう力を発揮したのか。本研究においては、武道が建国大学に集った複数の民族に教育された事実を解明し、また特に建大の武道教育のイデオログであった前述の富木謙治の人と思想を資料によって明らかにすることを通して、武道の「文化の力」をより限定した「教育力」と置き換えてこうした諸点について教育的な観点から考察しようと思う。

建国大学は近代日本の傀儡国家といわれる「満洲国」(1932-1945)^{注11}において1938年に設立され、日本の敗戦まで約7年間存在した大学に過ぎない。だが、満洲国を実態支配した政府と並ぶ柱であった関東軍(中国東北部に駐屯した日本陸軍部隊)の強い後援によって満洲国で最高の文系大学としての権威が与えられていた。その学生は、満洲国国内、日本の内地、併合された朝鮮、植民地台湾などから厳しい選抜試験によって選抜された多民族からなる俊英たちであり、その教官にも事実上の最高責任者であった初代副総長作田莊一以下優秀な人材あるいは個性的な人材が集められた。教育環境は、冬は零下20度にも下がり夏は猛暑という自然環境の適否を保留にすれば、学生に対する経済的配慮(学費無料)、当時内地では考えられない読書や表現の自由などを見ても様々な点で恵まれた環境であったと言わざるを得ないだろう。ただカリキュラムや教育内容については、方法論の成熟度や目指すべき人間観によって限界と特殊性を持っていたことは否定できない。その方法の中で最も注目すべ

^{注8} 同上書、邦訳、p.67. 原書では、「In many ways my study of Orientalism has been attempt to inventory the traces upon me, the oriental object, of the culture whose domination has been so powerful a factor in the life of all Orientals.」。ibid., Said, p.25,

^{注9} その意味合いをサイードは次の3つに分けて説明している。学者(オリエンタリスト)のなす行為。おびただしい作家の著作がある。東洋と西洋の間に設けられた存在論的。認識論的区別にもとづく思考様式。オリエントを支配し再構成し威圧するための西洋の様式。同上、上巻、p.19-22参照。

^{注10} 中曽根内閣時代の臨時教育審議会(1984-87)の4回の答申以来の流れの中で武道はスポーツの範疇から独立してきた。志々田文明(1987)武道をめぐって—スポーツ・格技から武道への問題点、体育科教育1:28-32.

^{注11} 満洲国は「典型的な傀儡、中国のいわゆる偽国、その実態は日本の植民地以外の何物でもなかった」(江口圭一(1992)帝国日本の東アジア支配、近代日本と植民地1 植民地帝国日本、岩波書店:東京、pp.180-181.)といわれるように、その傀儡国家としての特殊性から鉤括弧を付されるのが通例であるが、以下では煩雑さを避けるため省略した。

きものは、「五族」^{注12}といわれた日本、台湾、朝鮮、漢（満洲族、回族を含む）、蒙古、白系ロシア等の諸民族が、約25名ずつ^{注13}一つの塾に起居して生活を送ったことにある。創設時の発想から実践活動を伴う訓練教育が重視され、軍事・農事と並んで武道訓練が必須科目として置かれた。開学数年を経て富木謙治は訓務科長に任命され、武道教育についてはそれより前に取りまとめ役を担っていたと思われる。武道各種目（科目）は体育の代替科目といってよいであろうが、日本人の伝統の精神性を武道によって涵養し、異民族学生を「日本人化」することを目指したものと予想される。筆者は学生時代以来合気道を通して武道に親しんできた者の一人として、日本武道にどれだけの教育力があるのかということについて関心をもってきたが、それについて理解を得るための格好の場がこの建国大学である。その意味で本研究は武道の教育力を知るための事例研究ということになる。

(3) 方法としての聞き取り調査

一般に歴史研究を進展させるためには文字史料の収集が重要であることはいうまでもない。従って「歴史論文は足で書く」といわれるように、歴史家は史料を求めて平素から各地を回って地道な活動をすることが求められる。しかし、近現代史研究のように関係者が生存する場合には、それらの人々から話を聞いて事実を掘り起こしてテキスト化しておくことがそれに勝るとも劣ることがないほど重要である。^{注14}特に本研究のように満洲という日本外地の特殊な場で行われた教育を対象とする場合にはそうである。この方法の有効性については、植民地教育研究者の一人・故野村章氏が1980年代後半の研究動向を紹介しているが、^{注15}筆者もまた常々感じてきたことであった。

本研究では「聞き取り調査」を文献調査と並ぶ主要な方法としている。その主たる理由を改めて述べれば次の点がある。第一に、文字史料が乏しいこと。その原因は多くの学生にとって武道は建大生活の中でそれほど重要なものではないということである。従って史料を聞き取り調査によって生み出す必要があると感じたのである。第二は、現存者がいる場合の研究は、就中特に現存者が高齢の場合においては聞き取り調査こそが優先されるべきであると考えたことにある。文字資料はたとえそれが現在発見できなくても将来発見される可能性があるが、人間の体験はそれが文字化されていない場合には永久に失われる可能性をもつ。したがってこれを記録し文字化する作業は重要な意味をもつのである。もちろん聞き取りの^{注12}五族をどのように数えるかについては建国大学関係者によっても微妙な違いがある。本論で後述する。

^{注13} 前期といわれた予科の場合で、本科に入るとより少なくなる。

^{注14} 思想史家の安丸は事実には「テキストの表象を介してはじめて存在しはじめるという性格があり、これをつきつめると、表象こそが歴史家のとりあげるうる唯一の歴史上の「事実」だということにもなる。」という（安丸良夫（1996）方法としての思想史，校倉書房：東京，p. 24）。テキスト化がなされていない人間の体験の場合は聞き取ってテキストを作成しておくことが急務なのである。

^{注15} 「最近、歴史学とくに現代史研究者のなかに、オーラル・ヒストリーと聞き取りの方法に市民権をもたせるべきだという主張が強まっている。それによると、これまでの史料の評価に関して、文献史料が口述史料よりも信頼度が高いとされることが多く、言葉に対して文字の方が偏重される傾向にあった。しかし、史料批判の上でそれぞれ固有の問題はあるにしても、史料価値に本質的な差はない。」野村章（1991）研究方法論としての聞き取り調査，成城学園『教育研究所年報』第14集，野村章著・野村章先生遺稿集編纂委員会編（1995）「満洲・満洲国」教育史研究序説，pp.197-198。

前提として、一方で文字資料等の周到な分析がなされ適切な質問が用意されなくてはならない。しかし、その完璧を期しては時として生きた資料とも言う歴史の証言者を失ってしまうこともあり素早い対応が必要なのである。そうした理解から筆者は来日中の建大生への取材も適宜行ってきたが、中国、台湾に次ぎの聞き取り調査を行った。（カッコ内敬称略）

・1990年8月20日-29日^{注16}：長春（一期生楊増志、一期生閻徳藩、一期生于家齊、三期生万興治、三期生魏連元、四期生劉興国、六期生高中路、八期生宋紹英）、大連（二期生趙洪、三期生劉光地）

・1992年9月15日-23日^{注17}：大連、瀋陽、長春、哈爾濱、北京（日本の建大同窓会が企画した日本人154名からなる歡喜嶺友好訪中団の特別随員として参加し、旅行中多くの日本人、中国人等の方々から聞き取り調査を行った）

・1999年5月19-22日^{注18}：台湾（一期生李水清）

・1999年8月23-29日^{注19}：大連（一期生楊増志）長春（一期生劉之謙、三期生万興治）、北京（一期生孫群、一期生楊えつ、二期生張玉斌、五期生鉄大章）。この聞き取り調査には一期生齋藤精一氏が同行された。

・2001年9月16日^{注20}：洛陽（一期生尹敬章）

聞き取り調査の前提あるいは並行して行うべき重要な調査としては、手紙による問い合わせ調査がある。被調査者は突然の電話取材や訪問取材に必ずしも応じてくれるわけではない。丁寧な書簡による問い合わせが先行すべきであろう。本研究においては沢山の方々から非常に詳細な回答を盛った書簡あるいは葉書を頂戴し、それを活用することができた。しかし書簡情報だけですむ場合は少なく、何らかの補充調査は必須のものといえる。また多くの場合行間に隠れた情報や意味があるのであり、それらは聞き取り調査によって始めて補うことができる。

聞き取り調査を研究に活用する場合に留意した点は、被調査者の思い違い、思い入れや様々な思惑が混入してきたり、加齢による記憶力の減退から記憶が曖昧になっている場合があることであった。^{注21} 文字史料に比して信頼度が低いとされた所以であり、調査者は聞き取り調査結果を記述した使用するに当たって慎重を期した。調査記録の曖昧性の問題は、事

^{注16} 志々田文明(1990)1990第一回聞き取り調査記録---長春・旧「建国大学」への旅、未刊行。

^{注17} 志々田文明(1993)歡喜嶺友好訪中団に随行して、早稲田大学体育学研究紀要 25：59-64。

^{注18} 志々田文明(1999)聞き取り記録「満洲国」建国大学一期生・李水清氏に伺う。なお、本記録は早稲田大学特定課題研究「『明治・大正・昭和』期早稲田人とアジア太平洋」（後藤乾一教授代表、課題番号：98B-536）の調査報告書の一部。

^{注19} この報告書は現在までのところ、「1999建国大学に於ける武道教育聞き取り調査記録（草稿）」として作成している。

^{注20} 志々田文明(2003)対談・建国大学一期生・尹敬氏に伺う、早稲田大学体育学研究紀要 35。

^{注21} 一期生安光鎬氏は、「『歡喜嶺 逢か』を戴いて帰ってから、愛読するにつけ、永い時間の経ったあとの人間の記憶の頼りなさと、人それぞれの観点の違い、或いは表現の差などで、歴史の裏付けといふものが難しいものだなアといふことをつくづく感じさせられております。」と記している。安光鎬書簡(1991年7月5日)。なお、筆者はお手紙まで頂戴した方に連絡した所、貴方に手紙を出したことはないといわれ思い出して頂くのに苦労したこともある。

前に収集した情報をあらかじめ開示した上で質問すること、複数の人から聞き取り調査を行うことや、記憶を呼び戻すように質問に工夫を加えることなどによってかなり克服することができる。しかし本研究においては加えて次の問題がある。それは中国に現存する旧建大生の方々の中には、自由にその所見を述べるのが憚られる社会的事情があるという問題である。つまり、社会主義国である現在の中国には少なくとも自由主義国と同等の言論の自由がないと思われること、従って本音を知ることが比較的難しく、また発言・記述にイデオロギー的バイアスがかかる可能性があること、第二に、特に文化大革命において建国大学に入学したということだけで迫害を受けた彼らは心に重い傷を受けていると思われること。これらの問題を克服するために、調査資料を叙述するに当たっての扱い方に慎重を期した。

本研究では聞き取り調査の中でも重要人物と思われる方や海外の建国大学生への調査では録音を行うようにし、その場合にはできるだけ文字起こしして報告書等を作成するようにした。もちろん圧倒的に多く活用したのは電話による調査で、この場合はメモを整理してノートしたものを活用した。

建国大学で行われた武道は、剣道、柔道、合気武道、弓道、銃剣道、騎道そして武道に類するものとしての角力であった。一つの大学として公的あるいは準公的にまた課外活動でこれだけの武道教育が組織的に行われたことは注目される。そこで研究に当たっては全ての武道について精査し、不十分ながらも百科全書的な記述を目指した。内容的には、これまで聞き取り調査の成果と史・資料を用いて公的授業及び課外活動としての二つの側面から、実証的にその教育の実態を明らかにすることに努めた。

(4) 史・資料について

筆者が武道に関する一次史料として活用できたものは、建国大学の武道訓練及び武学を担当した富木謙治の戦前の以下の資料である。

- ・富木謙治 (1937) 合気武術教程, 自刊. 本書はこの年8月の発行。
- ・富木謙治 (1938) 柔道の将来と合気武道. この論考は雑誌『柔道』(1938)の4, 5, 8, 9, 10月の各号に連載された。しかしこの連載に対する柔道家の反発・苦情があったようで途中の号から「合気武道」と題名を変更している。
- ・[富木謙治] (1940) 憲兵教習ト柔術教育ニ関スル研究, 新京関東軍憲兵隊教習隊刊行. 関東軍憲兵隊教習隊の囑託であり合気武道を教授していたことやその内容から富木が執筆したか、少なくとも執筆の主要部分に関わったものと判断される。
- ・富木謙治 (1941) 武道訓練について, 建国大学研究院月報 8 : 7.
- ・富木謙治の講義案「武道論講義」
- ・富木謙治 (1942) 日本武道の真髄, 武道公論 4 (11) : 1-8.
- ・富木謙治 (1942) 柔道に於ける離隔態勢の技の体系的研究, 建国大学研究院.
- ・富木謙治 (1943) 形と理法, 建国大学研究院月報 30 : 3.
- ・富木謙治 (1944) 日本武道の美と力, 満洲帝国協和会建国大学分会出版部. 10月15日発行。

この外の武道関係史料としては、建大生の塾生日誌あるいは日記、特に一期生長野直臣氏（1938 1939）、一期生高橋武雄（1938か。一ヶ月程度の部分）、^{注22}二期生藤森孝一氏（1939 1940）、藤井歓一氏（1939 1940）についてはの日記等のコピーを実見し、その一部を使用した。西村十郎氏（1939 1944）、四期生鈴木博氏（1942 1943）、四期生森崎湊の日記等については、西村十郎氏の場合は日記を編集した『楽久我記』を、鈴木博氏の場合は、四期生雑誌『楊柳』掲載のものを、森崎氏の場合は『遺書』をそれぞれ使用した。これらの日記等は当時起こった出来事をその日のうち（時に後日）に記すと共に、場合によっては事実に対する感想や意見が加えられたり、その一部には教官からのコメントが記されておりその史料価値はすこぶる高いものである。なお、塾生日誌とは一期生二期生の場合、大体B5サイズ大で形式が一定しているが、この塾生日誌は塾頭に提出しなくてはならないため、学生の中には別に自分だけの日記をつける場合があった。本研究では原則として日記、日記としてこれらの区別を行った。使用に当たっては、一般に日記等の伴う誰かが見るとを漠然と予測したある種の作為性が伴う場合があることに留意した。

その他の一時史料として、東洋文庫より富木謙治が建大で使用した「武道論講義要綱」等入手しこれを使用した。

建大教職員の人事関係については、極力「満洲国政府公報」に当たるように努め典拠とした。従来の建国大学研究ではその努力が取られてこなかったため、建大の教職員の着任等の基本的事実が曖昧であったが、武道関係については明確化に努めた。ただ、遺憾なことに満洲国政府公報には助教、属官といった教育の現場で優れた指導力を発揮した人々の人事記録が省かれていることである。これらについては聞き取り調査に拠った。

その外、広く建国大学に関しては、『建国大学研究院月報』（創刊号～第45号）に加えて『建国大学塾月報』（創刊号～第7号）、『建国』（建国大学塾雑誌、第1号～第3号）、『建国大学要覧』を入手し、特に『月報』と『要覧』については適宜活用した。『研究院月報』は他の雑誌と異なり、開学時から閉学近くまでほぼ定期的に刊行されている。特にはじめの数年のものは人事・消息欄があり人の移動の様子を理解することができる貴重な史料である。^{注23}

以上の一次、二次史料を調査し、それらのなかから武道関係記事を取り出して執筆に活用していくわけだが、申すまでもなく武道に関する記事量は多くないばかりか断片的な場合が多く、それらからまとまった意味をくみ取るためには関係者からの聞き取り調査が不可欠のものとなった。上述のように聞き取り調査（手紙・電話・対面による）をできるだけ実施した所以である。

^{注22} 筆者は2003年3月1日高橋武雄氏の子息武志氏宅を訪問し聞き取り調査を実施した。そこには高橋氏が1943年秋に一時帰国した際に持ち帰った塾生日誌の一部（ごく短い）、卒業アルバム、当時の学習ノート（支那民族運動概観、支那の歴史と文化上巻、民族問題より古代支那を論ず、支那の民族性と社会一、北一輝著・支那革命外史、猶太問題研究原稿、大東亜戦争の根本問題、世界観の闘士へ、アジア的国家形態とアジア的社会構成（森克己）、西洋政治と思想、東洋に於ける素朴主義の民族と文明主義の社会、等）類が残されていた。

^{注23} 建国大学研究院月報については、湯治万蔵氏、阿蘇谷博氏等よりかなり号につきコピーの寄贈を受けていたが、多数の残部については七期生鈴木昭治郎しより恵贈された。

筆者が後に述べる研究論文等で主に依拠した史・資料には第二次資料と呼ばれる各種刊行物が多い。その主要な原因は日本の敗戦、ソ連軍の満洲攻撃、満洲国の崩壊、建国大学の慌ただしい閉学、教職員らのシベリア抑留という歴史の激変の中で、貴重な一次資料--その内容を語ることはできないが--が失われたからである。ただ建国大学同窓会では、早くからこの問題の重要性を認識し資料の収集に取り組んできた。そうした努力ははじめ「建大史資料」の刊行という形で進められ、^{注24} しばらくの努力を経て、建国大学二期生・湯治万蔵氏の献身的な努力によって『建国大学年表』（湯治万蔵編・建国大学同窓会刊行）^{注25} としてまとめられた。同年表には様々な貴重な史・資料がふんだんに取り込まれており、文字通りの「読む年表」として建国大学を調べたり理解する上で不可欠の労作である。筆者が研究開始以来調査や考察を進める上で座右の書として常に活用し教えられたのはこの年表であった。1999年末には「年表委員会」（委員長坂東勇太郎）が発足し、『建国大学年表』にやむを得ず混入した誤記を訂正するための作業が開始され、2002年5月には遂に『建国大学年表正誤・補遺表』を完成させた。^{注26} これは同年表の編者湯治万蔵氏の発議を受けてなされた同窓会の見識と歴史への責任感を示す作業といえる。

前後するが『建国大学年表』作成以後さらに同窓会は、写真集、文集、記録集、定期刊行物としての会報を刊行するのみならず、物故者が教員から学生へと推移してきた。近年では上級生から当時の話を聞く会を設けて聞き取り記録を残す作業も行われている。こうした作業の集大成が1999年に完成し東洋文庫に寄贈された『建国大学関係資料』（567件）^{注27} であろう。同窓会が1996年に「建国大学資料委員会」（委員長高橋淳夫）を発足させ、組織的に資料の収集を行ってきた努力の集積であった。同資料には、富木謙治の講義案「武道論講義」も収載されている。

巻末の一覧表に記すように、本書以外にも同窓会は沢山の出版物を刊行してきている。建国大学の実態を知る上で特に参考になるのは『写真集 建国大学』（1986）、また『歡喜嶺』（1980）、『歡喜嶺 遙か』（上下巻、1991）などの文集である。『歡喜嶺』は文化大革命終了後直ぐに組織した訪中団の記録である。『歡喜嶺 遙か』に収載された当時の様子などを記した随想の数は261名にのぼり、数は少ないが中国、韓国などからの寄稿も含まれている。同窓会の会報は1954年以来継続して出され、その多彩な活動を教えてくれる。また、同窓会各期で独自に作成している文集も有益ある。一期生は『歡喜嶺 建国大学第一期生文集』（1989）を、二期生は『二期』（1989）、『二期文集』（2002）をそれぞれ1989年に刊行したが、その後の物故者も多く貴重な証言となった。また、三期、四期、七期、八期生

^{注24} 「建大史資料」は第1号から第6号までが刊行された。第6号は年表で、これを発展させたものが湯治万蔵氏編の『建国大学年表』である。刊行年月は以下の通り。建国大学同窓会「建大史」編纂委員会編（1966.9）建大史資料 1、同左編（1967.1）建大史資料 2、同左編（1967.7）建大史資料 3、同左編（1967.11）建大史資料 4、同左編（1971.6）建大史資料 5、同左編（1975.6）建大史資料 6。

^{注25} 湯治万蔵編（1981）建国大学年表、建国大学同窓会建大史編纂委員会、全570頁。

^{注26} 建国大学同窓会年表補遺委員会（2002）建国大学年表正誤・補遺表、建国大学同窓会。同年5月に完成した本表は139頁に及ぶ大部である。

^{注27} 山根幸夫（1999.12.21）建国大学関係史料の受贈、東洋文庫書報 31：31-36。山根氏はこの記事を作成し「注目すべき」資料の紹介を行っている。

などは毎年のように文集を刊行している。この他に個人での出版物も多い。日本ではこの外に、個人によって学生時代の日記の一部や個人の感懐を記した刊行本もかなりの数にのぼる。

こうした動きに触発されたかのように、1997年には中国側で初の文集『回憶偽滿建國大學』^{注28}が作成された。61篇が収載されたこの文集は、冒頭の編者解説によると、^{注29}70歳に達したことから各人の経験や見聞したことを史料として後世に残すこと、1995年は世界ファシズム戦争並びに中国人民抗日戦争勝利50周年に当たること、建大自体が日本軍国主義の中国に対する政治、文化侵略の産物であり歴史の証拠であり、それを知らせる必要性があること、将来の愛国主義教育を行う上で有益であること、の4点を企図して作られた。

さて、次に、中国人と韓国人学生によって書かれた建國大學に関する回想録について見ておきたい。中国については、三つの注目すべき論考がある。はじめのものは、1985年10月に6期生・劉第謙氏によって執筆された「我所了解的偽滿建國大學」である。本書は1990年に高島穰次氏によって「私の知っている建國大學」の題名で翻訳され、筆者はワープロ打ち原稿のコピーを入手したが、その内容は目次に見られるように包括的であり全66頁に及ぶ。^{注30}

< 劉第謙著, 高島穰翻訳「私の知っている偽滿建國大學」目次 >

一. 偽建大の所在地

二. 偽建大の養成目標

三. 植民者の懐柔政策

四. 偽建大の制度

(一)行政機構 1. 学校本部 2. 参議会と評議会 3. 大学院 4. 研究院

(二)学生 1. 学年編制 2. 学生の民族比率 3. 在籍学生総数 4. 卒業生総数 5. 建大教師学生の在籍総数

(三)塾制 1. 2. 3. 4. 5.

五. 愚民政策を基礎とした奴隷化教育

(一)教育特徴 1. 2. 特徴

(二)学習

1. 基礎知識と精神訓練を主体とする前期の訓練(予科) 訓練科目 文化科目

^{注28} 長春市政協文史和學習委員會編(1997) 回憶偽滿建國大學, 長春文史資料總 第49輯. 本書は全518頁の大著であり、やや小規模ではあるが日本側建大同窓会編の『歡喜嶺 遙か』(上下巻)に相当するものといえる。やむを得ないこととはいえ寄稿したら有意義と思われる方々が寄稿を見送った点が筆者には惜まれる。

^{注29} 同上の「編者的話」の1-2頁。但し頁番号は本文からでありここには付されていない。なお、より詳しい和訳及び執筆者名は右を参照。山根幸夫(1998) 中国人学生から見た偽滿建國大學の回憶--反滿抗日, 東方 207: 32-34, 東方書店: 東京。

^{注30} 高島穰次訳, 劉第謙著(1990) 私の知っている偽滿建國大學, 未刊行, 全65頁。(劉第謙(1985) 我所了解的偽滿建國大學, 吉林市政協文史資料研究委員會編(1985) 吉林教育回憶・吉林文史資料第四輯, pp.202-243.所収)。筆者は建大関係者から高島訳コピーを頂戴したがその表紙に「12/2/90」と手書きされた跡があるため1990年翻訳とした。翻訳の分量は全66頁(縦書き1頁は48字×17行=816字)で400字詰め原稿用紙に換算すると約130枚にのぼる。

2.専攻科目に分かれての学習を主体とする後期の課程（本科）

訓練科目 基礎学科(共通科目) 専攻科目

3.教学状況

4.特別講座

(三)生活 1.煩瑣な宗教儀式 2.緊張した日本式生活 3.戦闘の集団生活

(四)統制、分断、籠絡 1.うわべの飾り 2.刀の光剣の影

六. 祖国のために

(一)第一課/(二)団結して心を一つにする/(三)祖国の本、進歩的な本を読む/(四)中国の進歩的な歌を習った/(五)中国語を話した/(六)日本人の学友との交友/(七)偽建大の結末/付録

この論考には使用した資料の出典が明記されておらず、また執筆の目的研究論文として書かれたものではない。しかしその記述は、中国側の同窓への聞き取り内容を取り入れ、また各種の参考資料を読んで書いていると思われ、^{注31} 具体性に詳細な内容の織り込まれた内容が読むものを引きつける。論考では、初代副総長作田荘一の後任者・尾高亀蔵を、建大の犯罪性を代表する責任者として描いている。^{注32} 記述によれば、尾高の学校運営の方針は「奴隷化教育および軍事訓練を強化し、侵略戦争のために死にもの狂いで働く」ことであり、「前任者作田が学術を重視したことを軍事訓練重視と思想統制に改めた」という。^{注33} 建大の教育の特質を「奴隷化教育」として性格判断し、例えば、多くの日本人建大生から建大教育の特長として評価される塾制度を「奴隷化に好都合という特殊な役割のために、特殊な存在価値を持っていた」^{注34} と「奴隷化への手段」と評価する視点には、日本側の論者には必ずしも見られない厳しさがある。事実認識の点では既に宮沢論文が多くの訂正をしているが、建大の性格判断については超えられない溝があるといわざるをえない。

文中に武道訓練に関する記述もあるが、「各種の武道訓練で体育に替え」^{注35} あるいは「主な競技は剣道、柔道、銃剣術で、合気武道は演武だけだった」^{注36} 程度のものしかみえない。

同じく1985年には、中国人学生（5期生）劉世沢氏が「偽満建国大学」（高島穰次翻訳の題名も同名）^{注37} を記している。

本書は日中同窓生の交流が始まった後のもので、分量は劉第謙論考に比べて短く、翻訳では全18頁（1頁は30字×29行＝870字）で以下の小見出しがある。

< 劉世沢著、高島穰次翻訳「偽満建国大学」（1985）目次 >

^{注31} 1981年には多くの基本文献を豊富に登載した湯治万蔵編『建国大学年表』が出版されており、それを活用したと思われる。

^{注32} それに反して作田については比較的客観的に記述し批判がトーンダウンしているようにも思われる。

^{注33} 劉第謙著、高島穰次訳（1990）、前掲書、p.8.

^{注34} 同上、p.24.

^{注35} 同上、p.44.

^{注36} 同上、p.45.

^{注37} 劉世沢著、高島穰次訳（翻訳年不詳）偽満建国大学、未刊行、全18頁。（瀋陽社会科学院編（1985）瀋陽文史資料 9. pp.118-132.に所収）

- 「建大」創立の経過およびその趣旨
- 「建大」の組織機構と制度
- 「建大」の教師と教学内容
- 「建大」の「塾務規定」
- 「建大」の生活方式

本論考も劉第謙著同様の回想文である。その特色は、多くの逸話が紹介される「建大」の「塾務規定」の章にあり、氏は、建大の特色として日本の多くの学生が高く評価する塾教育について「塾舎とは学生に対して奴隷化教育および精神的な奴隷化を実施する重要な場所」^{注38}であったと非常に厳しい評価をしている。取り上げられる体験談は中国人学生側の認識を示すものとして興味深く参考になるが、それらの事柄は氏が入学した1942年以降のものが多く、これをもって建大の塾教育全体を語るには問題が多いと言わざるを得ないであろう。本論考には武道教育に関する記述はほとんどない。

中国側の論考で特に注目されるのが、聶長林氏の『幻の学園・建国大学――中国人学生の証言』^{注39}である。

<聶長林著, 岩崎宏日文校訂「幻の学園・建国大学――中国人学生の証言」(1997)目次構成>

第一部 わが「建国大学」観

はじめに

- 一、日本帝国主義のためにその手先を養成する「建国大学」
- 二、二本軍部に厳しく制御される「建国大学」
- 三、「建国大学」の特殊化と特殊な下心
- 四、「建国大学」の精神訓練 1. 軍事訓練 2. 武道訓練 3. 勤労奉仕 4. 実習 5. 農事訓練 6.

精神訓練

- 五、塾生活 1. 塾の編制 2. 塾生活の段取り 3. 座談会と塾生日誌

六、「建国大学」の末日

第二部 わが「建国大学」生活

- 一、「建国大学」生活の下稽古 二、入塾 三、授業と読書、読書会 四、大逮捕

のショック

- 五、同床異夢 六、大連合読書会 七、脱出を決心 八、東北青年抗日救国団
- 九、出奔すべきか、誰が出奔するか 十、さようなら、「建国大学」

付記(1) 金在景君との別れ 付記(2) W同学との再会

あとがき

この論考は、中国人建大生が執筆したもののなかでも、その明解で力強い主張によって、

^{注38} 同上, pp.9-10.

^{注39} 聶長林(1997) 幻の学園・建国大学――中国人学生の証言, 建国大学四期生会誌楊柳別冊. 全92頁。

山根幸夫氏、王智新氏、田中寛氏が自説論証の切り札的資料として使用されているものである。

最後に、韓国人・洪椿植氏が1999年に著された『ハンキョレ（はらから）の世界 ああ日本』^{注40}をみたい。

< 洪椿植「ハンキョレ（はらから）の世界 ああ日本」(1999.10) 目次構成 >

・一九二一～一九四五年の歲月

- (1) 蘇我氏栄華のご故郷・木川 (2) 王権欲で倒れた李王朝
(3) 日帝は果たして韓国人を開花させたか? (4) 初めて会った日本の友
(5) 京畿中学の日本人先生 (6) 日本の異人建国大学に集る (7) 関東軍に入隊して

・ハンキョレ（はらから）の世界

- (1) 倭と日本と (2) 神籠石 (3) 日本書紀の両面性 (4) ハンキョレの世界 (5) 日本の自立

・韓・日文化の開き

- (1) 桜花と無窮花 (2) 禅文化と風流文化 (3) 言語の開き (4) 大韓人

・放心

韓日の古代史から説き起こす本書は、著者（1921-現在）の半生を中心に韓国人の立場からみた生きた韓日近・現代史及び教育史を簡潔に記し、古事記、日本書紀を詳細に検討して天皇の血統と韓国との関係の深さを教えてくれる。皇民化教育を受けた韓国人の目からみた日本はあまりにも強大であり、そうした東アジアの秩序のなかでどう生きるかを煩悶した洪氏の建国大学に対する思いは、中国人とも異なって注目される。

(5) 先行研究

「満洲国」建国大学における武道教育に関する研究は、管見の限りでは武道史、体育史、スポーツ史等において筆者の「『満洲国』建国大学に於ける武道教育」によって開始され今日に至っており、筆者以外に個別の研究論文を出しているものはいない。ただ、1997年に宮沢恵理子氏が学位論文（国際基督教大学）としてまとめ、出版された『建国大学と民族協和』^{注41}には第2章の訓練科の中で2頁強にわたって武道教育について言及している。その内容は専門外の立場での小さな誤りや認識の十分でない点^{注42}を除けば、著者のねらいに即して概ね適切といえる。しかし筆者の立場では、「また中国武道^{注43}が全く科目に取り入れられな

^{注40} 洪椿植 (1999.10) ハンキョレ（はらから）の世界 ああ日本, 私家版. 全163頁。著者は建国大学二期生。筆者は藤森孝一氏より恵贈された。

^{注41} 宮沢恵理子 (1997) 建国大学と民族協和, 風間書房: 東京, pp.110-112.

^{注42} 選択科目としてあげられた合気武道は必修であった。副総長の作田が敬意を表して過賞した武道師範の言葉に続けて建大の師範名を上げているが、個々に上げられている全てが「日本にて第一流」といえるかどうかは疑問なしとしない。しかしこうした点も、著者の労作の全体の趣旨には影響を与えていないし些かもその価値を損なうものではないことは指摘しておきたい。

^{注43} 中国では日本の武道に相当する用語は武術であり、日本のように精神修養を含意した意味でも武道という名辞は使用しない。

かった事実からみても、建大の武道教育の目的は精神修養と日本文化の伝播にあったといえよう」との総括はやや不十分といえよう。精神修養は武道教育の特徴であり同語反復に陥っているからである。また日本文化の伝播という指摘も、当時建国大学の事実上の創設者で後見人ともいえる関東軍や現場の責任者の副総長作田に武道を日本文化として導入する動機があったとは思えないことを考えると、その意図を読みとる必要がある。武道以外の点に関しては、下記の構成に見られるように329頁に及ぶ詳細な歴史的記述、建大に関する重要で有益な資料の紹介、そして博搜の結果なった文献一覧から構成された建国大学百科事典と称せられるべき労作であり、この時期における傑出した業績であるのみならず今日においても研究者には必読文献といえる。

以下では、建大に関わる先行研究の状況と建大と武道に関わる先行研究の状況とに分けて概観する。宮沢氏の上記論文は前者に入れはじめに目次を示しておく。後者については筆者のものを扱った。

1) 建大に関わる先行研究

< 宮沢恵理子『建国大学と民族協和』（1997）目次構成 >

序

第一章 建国大学の創設（第一節 協和会の青年訓練と建国大学 第二節 石原完爾の大学構想 第三節 辻政信らの大学創設作業 第四節 国民精神文化研究所との関係 第五節 建国大学の創設）

第二章 教育と活動（序 第一節 建国大学の施設 第二節 建国大学の教職員 第三節 訓練科目 第四節 建国大学の学科科目 第六節 副総長の交代 第七節 建国大学の教育・研究活動の問題点）

第三章 学生生活と民族協和の実践（序 第一節 入学生の選抜 第二節 塾生活 第三節 日本人学生の経験 第四節 民族主義運動 第五節 建国大学の塾生勝つがもたらしたもの）

第四章 建国大学の終焉（第一節 建国大学の閉学 第二節 1945年以後の学制の動静）

結論 建国大学と民族協和

建国大学年表 / 資料

建国大学の教育全般を扱った研究論文及びそれに準ずる価値を有する論考については、既に相当数のものが公にされている。本研究で扱われる武道教育の場の特殊性に鑑み、これらを時系列に従って以下に簡単な検討をしておきたい。

研究論文ではないが、建国大学教育の全貌を知る上で、注目される論考が、1942年に竹山増太郎が記した「塾教育を中核とせる建国大学指導者教育」^{注44}である。この論考は、建大創立後3年を経過し、前期課程に3学年が集う、日米戦争の勃発による日満の窮乏化が進む前の、ある意味で建大がもっとも建大らしく機能していた時期に執筆されたもので、その題名

^{注44} 竹山増太郎(1942) 塾教育を中核とせる建国大学指導者教育, 興亜教育 : pp.88-99.

や目次に見られるように塾教育に焦点を当てている。^{注45}

< 竹山増太郎「塾教育を中核とせる建国大学指導者教育」(1942)目次構成 >

はしがき

一、建国大学の由来/二、其の教育要綱/三、機構及予算

四、教育実施の方法

a, 訓務課関係

b, 塾務課 1, 塾の設備 2, 塾に於ける起居 3, 塾の経営 4, 炊事関係 5, 塾は禁煙禁酒を励行する。 6, (処罰方法--志々田注) 7, 塾生活の慰安

c, 研究院

五、教育の成果

この論考の第一の特色は、建国大学に相当詳しい資料及び情報の提供を受け、それらに基づいて丁寧な解説を試みていると思われる点にある。特に未だ未見の副総長作田荘一の試案といわれる「教育要綱」^{注46}を引用使用している点、一部ではあるが学生に対する給付額の総額を項目別に記している点、また第三学年用の宿舍の形状を記している点が注目される。^{注47}塾日課表を掲載し、塾の経営を要領よくまとめている点も参考になる。^{注48}第二には、著者が建国大学を温かい目で見ながらも、その評価については歴史的かつ論理的、詳細に検討を加え、媚びることない客観性を堅持していることである。著者の見識が窺える概説的論考といえる。なお、著者は、「訓練種目中乗馬訓練、農事作業訓練、合気武道を行ふことは、他にその例を見ざる所で、乗馬訓練に於ては校内に乗馬百数十頭を所有し、全員その訓練を受け」^{注49}と記して武道訓練における合気武道の存在に言及している。

研究論文として最初のものは1987年に出された山根幸夫氏の「『満洲』建国大学の一考察」と思われる。^{注50}以下の目次の内容を対象に、設立の経緯、機能、大学の功罪を、著者によれば、日本人の書いたものしか入手できない「極めて乏しい」^{注51}資料状況の中で記したものである。

< 山根幸夫「『満洲』建国大学の一考察」(1987)目次構成 >

はじめに

^{注45} 執筆時期は1941年の後半であろう。

^{注46} 管見するところでは他に「教育要綱」なる資料を使用した文献はなく、その点貴重である。

^{注47} 一期生齋藤精一氏によると、この宿舍は通称長屋塾と呼ばれており一期生は第三学年だけでなく後期一年になっても使用した。後期学生のための塾舎の建設が遅れたためである。この塾舎は1942年2月22日に完成した。満系一期生・柴純然・孫宝珍らが反満抗日運動の嫌疑で3月3日に逮捕される一週間ほど前であった。(齋藤精一書簡, 2003.1.13)

^{注48} しかしながら幾つかの疑わしい点も混入しており、著者が資料収集に加えて周到な取材をしているかどうかについては若干の疑問なしとしない。湯治万蔵氏は、炊事関係の記事、二宮尊徳の詩の斉唱その他に誤りや疑問の点もあると指摘している。

^{注49} 竹山増太郎(1942), 前掲書, p.90.

^{注50} 山根幸夫(1987)「満洲」建国大学の一考察, 早稲田大学社会科学研究所, 社会科学討究 32(1): 97-129.

^{注51} 同上, p.97.

- 一、建国大学の創設
- 二、教員の構成
- 三、学生の教育
- あとがき

この論文は、建国大学によって作成され創設要項や建国大学令など関係基本資料が収載された『建国大学要覧』（康徳8年度版, 1941.7.25）^{注52} 及び戦後に出版された『満洲国史 総論』^{注53} などを中心に執筆されている。特に、資料として以上の外に『満洲建国十年史』^{注54}、『建国大学研究院研究期報』、『建国大学研究院月報』などの存在を指摘してその後の建国大学研究の先鞭をつけた。三章の後半になると感情移入過多の文章がやや目立つが、^{注55} 全体としては建国大学の実態をバランスよく記している。

1990年には齋藤利彦氏の「『満洲国』建国大学の創設と展開--『総力戦』下における高等教育の『革新』」^{注56} が出された。

< 齋藤利彦「『満洲国』建国大学の創設と展開--『総力戦』下における高等教育の『革新』」（1990）目次構成 >

はじめに--問題の設定

- ・ 建国大学の創設とその経緯
- ・ 建国大学の組織と教育の実態（(1)制度と組織 (2)教育・研究の実態）

おわりに--建国大学の歴史的 position

この研究論文は、「はじめに」によれば、^{注57} 「我が国の総力戦体制下における教育に関し一つの考察を加えることを目的として」執筆された近現代教育史の研究論文である。その特色としては、建国大学令、建国大学創設要項、勅書、建国大学研究院令、建国大学学則、建国大学の教授陣（抄）などを十分に掲載した上で具体的に考察を加えていること、^{注58} 同窓会

^{注52} 建国大学要覧(康徳8年度版,1941.7.25) 編者不詳, 奥付に康徳8年7月25日とある。

^{注53} 満洲国史編纂刊行会(1970) 満洲国史 総論, 満蒙同胞援護会. 山根氏は、第四編第四章新学制の制定、建国大学創立の条に詳しく、「本稿は本書に負う所多大」（山根(1087), 前掲書, p.125.）としている。なお満洲国史には他に各論もある。

^{注54} 満洲帝国政府編(1969) 満洲建国十年史, 明治百年史叢書, 原書房:東京. 本書は1945年の満洲国崩壊前に出来上がっていた原稿を、滝川政次郎、衛藤藩吉らの努力で刊行された。

^{注55} 例えば「押しつけ」という言葉の頻出。またp.831にも感情移入の言葉が目立つ。例えば150名ほどいた一期生が「三分の一はどこかへ消えてしまった」というような記述は建国大学教育が失敗に帰していることを暗に示すものとして書かれていると思われるが、筆者が一期生から伺った聞き取り調査では、実際は病気で留年が大半であったという。

^{注56} 齋藤利彦(1990)『満洲国』建国大学の創設と展開--『総力戦』下における高等教育の『革新』, 調査研究報告 30:110-132, 学習院大学東洋文化研究所。

^{注57} 同上, p.110.

^{注58} 著者はこれらの資料を中核資料として使用しているが、原典からの引用が否かを明示していない。原典の所在は未だ確認されていないことから想像すると、これらの資料が収められている建国大学要覧(康徳8年度版,1941.7.25)からの引用と思われる。

が作成した『建大史資料』（1967）に収載された建大生（1939年入学の二期生）の塾生日誌を引用して教育と研究の実態をコンパクトにまとめた点、さらに建国大学の高等教育史に占める位置を「大学の自治」に対する否定的捉え方に着目して考察したことの三点があげられる。なお、山根論文への言及はない。

その翌年1991年に出されたのが筆者の「『満洲国』建国大学に於ける武道教育」であった。^{注59} この論文は「旧「満洲国」に創立された建国大学における武道教育の実態を明らかにする」ことを目的としたもので、近現代日本武道史研究のなかでも従来手つかずであった地域を扱った基礎的研究である。筆者は山根論文から学びながらも、^{注60} 日本の建国大学卒業生等関係者からこの時点で得た新たな資料をも使用して、以下の目次に見られるように満洲国の中における武道教育の実態を包括的に記している。しかし資料的にもまた生存者・関係者が大勢存在するにもかかわらずそうした方々への聞き取り調査も極めて不十分であったことから、筆者自身にとって本論文はなお不十分なものであり、そういう意識がその後研究を発展させていくことになった。

1992年、中久郎氏の「『民族協和』の理想--『満洲国』建国大学の実験」^{注61}が出された。著者は著名な社会学者で建国大学最後の学年の八期生でもある。著者によると、この論考は「設立時の経緯」及び「教職員や学生の塾生活を主とする異民族の人々のあいだの生活実態に論及することを意図して書かれた」。また著者は、「諸文献の記述内容を言わば要約的に論述し」、引用した資料の所在を明示しなかった、建国「大学に関係ない方にも読まれるよう」書かれたと述べている。^{注62} その意味で歴史研究論文としては不備があるが、事実認識に対する評価的記述については著者の社会学者としての見識に支えられて適切な洞察がみられる。^{注63} 特に、収集した資料を特定の歴史観・価値観に沿って並べて断罪する偏向に墮する傾向から免れているのは、著者自身が建大生であった点も大きいであろう。

<中久郎「『民族協和』の理想--『満洲国』建国大学の実験」（1992）目次構成>

はじめに

- 一 満洲国の現実
- 二 建国大学の設立経過と建学の精神
- 三 大学の教育システム
- 四 大学における、とくに中国人学生

おわりに--建国大学の教育から導かれる課題

^{注59} 志々田文明(1991)「満洲国」建国大学に於ける武道教育, 日本武道学会, 武道学研究: 24(1): 9-23.

^{注60} 筆者はこの執筆の段階で残念ながら上記齋藤論文の存在を知らなかった。

^{注61} 中久郎(1992)「民族協和」の理想--「満洲国」建国大学の実験, 戦時下日本社会研究会(1992)戦時下の日本, 行路社: 京都, pp.81-100.

^{注62} 同上, pp.85-86.

^{注63} 例えば、建国大学教育の歴史的意味を、評価の分かれる部分を視野においてまとめた点(中久郎, 前掲書, pp.96-97.)。また、当時社会学は不必要であり、国家学で足りるとされた点について、「それは、満洲や日本の国家の現実を世界的な比較史観点から科学的に認識し、批判的考察を加えたものとは決していえなかった」と評価している(同上, p.93.)。

1993年には山根幸夫氏がさらに「『満洲』建国大学再考」^{注64}を執筆している。本稿は建国大学助教授だった内海庫一郎氏の助言と、建国大学七・八期生会報『八旗』（第十号）、江原節之助の手記「民族の苦悶--創設期の建国大学をめぐって」、竹山増太郎著「塾教育を中核とせる建国大学指導者教育」^{注65}など、山根氏にとっての新資料^{注66}を使用しての再考である。

<山根幸夫「満洲建国大学再考」（1993）目次構成>

はじめに

一 建国大学とは何であったか

二 建国大学の塾教育

おわりに

しかし山根氏の論述は率直に言って前論文に比してやや拙速と思われる断定が多い。^{注67}その原因は使用した資料が限られているという点にある。例えば第二章では一期生の塾頭であった江原の手記をもっぱら多用して建大の初期の様子を描きながら考察を加えているのであるが、一つの資料にもっぱら依拠し、それに対応する聞き取り調査や既に刊行されている一期生、二期生の文集やその他の期で発行している雑誌等を調査していないのは問題であろう。また、江原の記述から、「建国大学は関東軍の方針によって動かされ、その好むがままに運営された」^{注68}と断じているが、その前段部分はいいとしても、後段部分は、副総長作田の「私の在職中には、教育指針は勿論、施設や人事についても、一度たりとも干渉を受けて困ったことはなかった」^{注69}とする率直な発言とも異なり、筆者には違和感を免れない。作田の言を否定する論拠を示すべきであろう。また山根氏は、竹山が作田の試案と思われる「教育要綱」を引用して建国大学教育を性格教育・資質教育・勤労教育の三つから構成されていることを紹介してはいるが、その批判は行っていない。にもかかわらず続いた文章で、竹山が塾教育を「至高の誇りと熾烈なる求道精神が、無味なる塾生活に、常に限りなき光明を点ずる原動力ともなり、活気ある明朗なる塾生活の遂行を可能ならしめているものと思はれる」と評価する下りだけを取り上げ、それを「賛美しているが、余りにも表面的、観念的な把握ではなからうか」と退けている。^{注70}しかしこの部分は「塾生心得」に見られる「誇り」に関わる部分であって、塾全体の評価に関わるものではない。従って竹山はこの文脈では「賛美」する必要はないのである。著者の持つ塾教育に関する無意識のマイナス評価が、

^{注64} 山根幸夫(1993)「満洲」建国大学再考, 駿台史学 89: 35-56, 駿台史学会。

^{注65} 竹山増太郎(1942), 前掲書。

^{注66} 江原の手記は志々田(1991)論文で、また竹山の論考は齋藤(1990)論文でそれぞれ既に使用している。

^{注67} この論文の問題性については、山根氏自身「非常に中途半端なものになって了った」と反省している。山根幸夫(1993), 前掲書, p.49。

^{注68} 同上, p.40。

^{注69} 湯治万蔵編(1981), 前掲書, pp.54-55。

^{注70} 山根幸夫(1993), 前掲書, p.42。

こうした文言に飛びついて引用し、誤った批判することに結果したと思われる。塾教育に関する竹山の記述だけをみても、「塾経営は、試練の時代を経過中にて、その努力に不拘、塾訓練が教育の中核となるだけの実績は、挙げられていない」^{注71}とそのまとめの部分で評価するように、竹山の論考は、その価値観に時代思想の影響を受けてはいても、全体として非常に冷静でバランスのとれたものであることを読み違えるべきではないであろう。

1995年には宮沢恵理子氏の「満洲国における青年組織化と建国大学の創設」^{注72}が出されているが、同氏の学位論文であり刊行された『民族協和と建国大学』の第一章に吸収されたものである。

<宮沢恵理子「満洲国における青年組織化と建国大学の創設」(1995)目次構成>

序

- 一 石原完爾の亜細亜大学構想
- 二 協和会の「建国精神」イデオロギー
- 三 協和会の青年組織化と建国大学
- 四 建国大学の創設
- 五 結び

1996年には山根氏が「『満洲』建国大学に関する書誌」^{注73}を出している。ここには山根氏が過去の二論文で使用しなかった多くの文献の解説がなされており有益なものである。解説は概ね適切ではあるが、批評の部分で若干の偏りも目につく。特に宮沢恵理子氏の労作『建国大学と民族協和』に対し「建国大学の民族協和を積極的に評価している」^{注74}と批判しているが、これは宮沢氏がその結論において「『建国精神』イデオロギーと化した『民族協和』が実現不可能な幻想であり、『見果てぬ夢』ではありえないことを証明している」^{注75}と総括していることを無視した一面的ものといえよう。

さて、前掲の中国側の回想文三氏と同様な視点をとる最近の論考に、王智新氏(宮崎公立大学)の「高等教育--建国大学の場合」(2000)^{注76}がある。構成は以下の通りである。これは建大の「設立構想、準備設置過程と実施状況、学校や教員構成、学生生活などについて」「日本帝国主義の中国侵略時期の教育政策について考察」したものであるが、氏はより直截に「日本帝国主義者が中国東北部において押し進めた『教育』と称する政策や措置は、厳格な意味では、一般に言う教育ではなく、奴隷訓育、奴隷の教化と培養であるというべきであ

^{注71} 竹山増太郎(1942), 前掲書, p.99.

^{注72} 宮沢恵理子(1995) 満洲国における青年組織化と建国大学の創設, アジア文化研究 21 : 55-66, 国際基督教大学アジア文化研究所.

^{注73} 山根幸夫(1996)「満洲」建国大学に関する書誌, 近代中国研究彙報 18 : 117-128, 東洋文庫.

^{注74} 同上, p.127.

^{注75} 宮沢恵理子(1997), 前掲書, p.263.

^{注76} 王智新(2000) 高等教育--建国大学の場合, 王智新編著(2000) 日本の植民地教育・中国からの視点, 社会評論社. pp.181-191.

る」と断ずる。^{注77}

<王智新著、「高等教育--建国大学の場合」目次>

はじめに

- 一、建国大学の淵源
- 二、建国大学の建学理念と学校システム
- 三、建国大学の教員とその組織
- 四、建国大学の学生教育と管理
- 五、おわりに

引用を見ると『建国大学年表』ほか八つの資料を用いて書かれたことがわかるが、一方的な建大観や建大の内部に資料で分け入ろうとしない大雑把な記述が少なくない。例えば、誠実な人柄で慕われた青本敏彦を「武道訓練助教授」としたこと、「日本人の塾頭がいて、学生の言論や行動は四六時中監視されている」として建大存立期の後期に顕著となった傾向を何の留保もなく記していること、^{注78}「軍事課程の軍事・武道訓練11名」と武道を軍事課程と捉えていること、^{注79}などの初歩的な誤りが見える。しかしそれ以上に問題なのは、「用いる資料や分析角度によってさまざまな結論が生まれ」としながらも、中国人の実感だけで「建国大学の理念は他民族を抑圧し、搾取するための植民地理念であり、その実践も、その理念を実現するためのものであった」と断定する実証性に欠けたア priori な価値判断であろう。^{注80}しかしそれにもかかわらず、そのような著者のいうところの「分析角度」が一つの「結論」として重要な一つの側面を照らし出していることは認めたいと思う。

2002年には、田中寛氏（大東文化大学）が「建国大学の理想と実相--皇道主義教育思想とその言語観をめぐって」^{注81}を出した。本稿は研究論文としては比較的長く、以下の構成をとる。

<田中寛「建国大学の理想と実相--皇道主義教育思想とその言語観をめぐって」（2002）目次構成>

要約

はじめに

1. 満洲建国大学の創立と建学精神
 - 1.1 建国大学の浪漫と野望
 - 1.2 建学精神と教学実践
2. 建国大学研究院の機構と研究活動
 - 2.1 建国大学研究院の設置目的と『研究院月報』
 - 2.2 『研究期報』に見る成果

^{注77} 同上, p.181.

^{注78} 同上, p.186.

^{注79} 同上書, p.187.

^{注80} 王智新氏は宮沢恵理子氏の労作に右の書評を寄せている。王智新(1999) 書評：植民地の歴史に何を学ぶか--宮沢恵理子『建国大学と民族協和』, 日本植民地研究 11, 日本植民地研究会.

^{注81} 田中寛(2002) 建国大学の理想と実相--皇道主義教育思想とその言語観をめぐって. 日本植民地教育史研究会運営委員会編(2002) 植民地教育史研究年報第4号 植民地教育の支配責任を問う, 皓星社. 著者は日本語学、日本語教育、日本現代史専攻。

3. 皇道主義教育思想の嚮導

3.1 「国本」としての皇道主義教育思想 3.2 西晋一郎の『文教論』

4. 『研究院月報』に見る日本語論・言語観

4.1 文教政策の〈要諦〉としての言語政策 4.2 建国大学を圍繞する日本語の言説

4.3 「国民錬成」への日本語教育

5. 対極する歴史見解--「異文化間教育」の可能性は受け入れられるか

6. おわりに--「歴史の共有」という視点

田中氏によると本論考は、『研究院月報』や『研究院期報』に依拠して、「そこに具現された皇道主義教育思想、および日本語論、日本語教授をめぐる文化同化政策の言語観、言説原理の一端を見ることによって『王道楽土』『五族（民族）協和』の内包する虚構性を明らかにする」ことを目的として書かれた。^{注82} 1、2章は著者が「主要な史実を確認しておく」^{注83} とする部分であり、これまでの建国大学に関連する研究に見られなかった特長は3章と4章にある。いずれも依拠資料に掲載された論考に基づく考察なのであるが、それらの文献が建国大学の具体的教育実態にどのような関わったのかへの言及はない。5章で再び建国大学が登場し、「総力戦下の建国大学の本質を象徴している」として尾高亀蔵の訓辞（1944）が長く引用され著者の評価がなされるのであるが、建国大学教育を象徴した副総長作田莊一とその思想に言及することなく「本質」を云々するのは適切とはいえないであろう。^{注84} また、前の二つの章の分析との関係は示されない点も論文としてのまとまりに問題を残す。6章ではアジア諸国との「歴史の共有」が必要とされている。その通りであろう。だからこそ始めに「本質」を決定しておいて、その内容に沿った史実のみを証拠として集める手法から脱却し、より丁寧な実証が期待される。^{注85} 事実の一つであるが解釈は立場によって無数にあるからである。^{注86} そういう意味で、「言語教育の目的が単に言語能力獲得だけでなく、言語に付随した民族精神、民族文化（神社参拝なども含めて）を体得することを特別に喚起し」という著者の指摘は、武道教育を含めて日本的な文化を建大の授業で教材として用いる場合の重要な解釈の一つが示唆されていると思われる。

^{注82} 同上, p.144.

^{注83} 同上, p.146.

^{注84} 歴史の背後に潜む本質があるとして、一方で「本質的なもの=重要なもの」とし他方で「本質的でないもの=どうでもいいもの」とする二項対立思考法は、ある場合には歴史を解釈する上で有効であるかもしれないが、それは一つの解釈を構成するものに過ぎない相対的思考法である。かつて帝国主義侵略の研究対象としてそれほど重視されなかった「文化侵略」が、今日本質的なものを示す研究対象として重視されていることは、「本質」が個人の恣意に陥りやすいことを示している。著者はこの論考で「本質を暴露する」(同上, p.165.)「本質をついたもの」(p.180.)という言葉を使用しているが、何を根拠に本質としたのかは示されていない。

^{注85} このことは執筆時点での価値観に基づいて事前に何らかの仮説を持って研究することを否定することではない。問題は自らの価値観をも批判の対処として相対化する柔軟な研究態度を堅持できるかにある。日本人として東アジア諸国に対する謝罪の気持ちとこうした科学的精神は共存することは可能であると筆者は考えるのである。

^{注86} 聶長林氏は「『建大』は思想的麻痺を宣伝する宣教師を養成する」とし、思想的麻痺は「奴隷を繁殖させる有力な手段となる」側面をもったという。それを筆者も否定しない。しかし同時に、その建大からは聶氏のような「反満抗日の愛国学生を繁殖させる」有力な手段でもあったのではないか。

2) 建大と武道に関わる先行研究

< 志々田文明「『満洲国』建国大学に於ける武道教育」(1991)目次構成 >

はじめに(1.目的 2.建大関係資料・先行研究 3.武道関係先行研究と研究方法)

・建大創設の考え方

・建大教育の特色

1.「五族協和」の塾教育 / 2.塾の実勢と教員略歴 / 3.訓練教育

・建大の武道教育

1.武道訓練設置の意図と「養正堂」 / 2.武道教員 / 3.教員人事と武道顧問

・武学研究班と武学

1.研究組織 / 2.武学研究班の活動 / 3.講義「武学」について

結語

この論文(以下第一論文と呼ぶ)は、目次に見えるように、建大の武道教育を包括的、歴史的に把握しようとした論文である。著者は1990年に中国東北部に旧建大卒業生を訪ねて聞き取り調査を実施し、校舎等を実地踏査してこの論文をなした。武道教育の具体的姿が明らかにされていないことが、目次からもわかる。また各章の調査も不十分で追跡調査の必要性を残すものであった。

その後に表示した論考については、目次を省略して簡単に内容を紹介する。

< 志々田文明「建国大学における武道・課外活動 - 「満洲国」建国大学における武道教育(2)」 > (早稲田大学人間科学研究 5(1):105-121, 1992)

この論文(以下第二論文と呼ぶ)は第一論文で割愛された課題解決を狙ったものである。聞き取り調査に基づいて柔道、剣道、合気武道、弓道、角力の五つの武道教育を正科授業と課外活動の二つの側面から概要を明らかにしようとしている。第一論文を直接的に発展させたものであり、本研究第6～第12章の重要な基盤となっている。

< 志々田文明「建国大学の教育と石原莞爾」 > (早稲田大学人間科学研究 6(1):109-123, 1993)

この論文は、建国大学の創設構想を最初に考えたといわれる陸軍きっての戦略家、また満洲事変の首謀者といわれる石原莞爾と建大構想との関係を詳細に論じ、また武道教育との関わりに言及したものである。

< 志々田文明「『民族協和』と建国大学の教育」 > (社会科学討究39(2):355-386, 1993)

この論文では、建大が満洲国のスローガンであり政治イデオロギーであった「民族協和」の実験場といわれたことから、民族協和の概念を歴史的に明らかにすると共に、建大に於ける民族協和の実態の一端を四期生森崎湊の日記に基づいて明らかにしている。なお本論文は、1993年8月9,10日に中国大連市で開催された中国東北教育史国際学術討論会(日本側呼

称「第三回日中『満洲国』教育研究フォーラム」における筆者の報告の準備論文を加筆修正して縮小したものである。

< 志々田文明「武道家福島清三郎と石原莞爾」> (早稲田大学人間科学研究 7(1): 129-141, 1994)

建大には剣道、柔道、合気武道の3名の武道顧問が置かれたが、この論文は、柔道の福島清三郎が石原莞爾の影響を得ていたとの情報から、京都の福島清三郎の子息清氏に聞き取り調査・資料蒐集を行い、両者の関係を明らかにしたものである。

< 志々田文明「建国大学における弓道教育」> (単行本) 武道文化の研究, 第一書房, 1995)

この論文は、建大の弓道指導者加川満喜を中心に弓道教育を解明したものである。

< 志々田文明「『満洲国』建国大学に於ける銃剣道教育」> (武道学研究 32(1): 13-25, 1999)

この論文は、第二論文で扱わなかった銃剣道教育について、日本の銃剣道史から説き起こし包括的に解明したものである。

< 志々田文明「論文『「満洲国」建国大学に於ける銃剣道教育』補遺」> (早稲田大学体育学研究紀要 32: 83-87, 2000)

この資料論文は、上記銃剣道論文に対するある中国人の批判的感想に応じて、上記論文で触れなかった論点を補足的に記述したものである。

< 志々田文明「『満洲国』建国大学に於ける騎道教育」> (武道学研究 34 (3): 1-12, 2002)

この論文も、第二論文で扱わなかった騎道教育について、課外活動の担い手であった一期生小倉久弥氏に聞き取り調査し、それを中心に解明したものである。

以下では、論文ではないが本研究に深く関係する論考を記す。

・志々田文明『大庭英雄師範略伝』(日本合気道協会, 1991)

本書は合気武道の助教であった大庭英雄の伝記である。大庭は、満洲国皇帝以下顯官多数観戦のなか、建国十周年慶祝日滿交歓武道大会(於神武殿)の演武大会に於いて植芝盛平の演武の受けを行った。この演武は観戦者を唸らせた見事なものといわれるが、その時の体験談を聞き取りテープから再現した。

・志々田文明「『満洲国』建国大学と身体運動教育」(体育原理研究 21, 1991)

日本体育学会体育原理専門分科会における建大と武道教育に関する報告を纏めたもの。

・志々田文明「武道と富木謙治」(武道論, 大修館書店, pp.270-290, 1991)

富木謙治に関する簡潔にして詳しい評伝である。年譜と著作一覧も添付されている。

以下の5点は、日米スポーツ等関係事典に執筆したもので合気武道考察の基盤となっている。

- ・志々田文明「合気道」(平凡社大百科事典(1), 平凡社, p.12, 1985)
- ・志々田文明「植芝盛平」(平凡社大百科事典(2), 平凡社, p.167, 1985)
- ・志々田文明「合気道」(最新スポーツ大事典, 大修館書店, pp.1-3, 1987)
- ・志々田文明「合気道」(日本史小百科・武道, 東京堂出版, pp.194-195, 1994)
- ・志々田文明「Aikido」(Encyclopedia of World Sport, 1 ed., Santa Barbara, ABC-CLIO, pp.17-22, 1996)

以下は主な聞き取り調査報告である。

- ・志々田文明編「1990第一回聞き取り調査記録---長春・旧『建国大学』への旅」, 1991.7.5作成。

この調査記録は、第1回訪中の録音テープの主な部分をテープ起こしして作成した。未刊行。文化大革命時代に建大生であったことだけで厳しく指弾され暴力にさらされた体験を持つ多くの中国人旧建大生の心中を忖度し、この記録は回覧厳禁の願いと共にごく一部の関係者にのみ頒布し、本論文に到るまで秘匿された。

- ・志々田文明「歡喜嶺友好訪中団に随行して」(早稲田大学体育研究紀要 25:59-64, 1993)

この報告は1992年の歡喜嶺訪中団随行の際の記録で、建大生からの聞き取り内容の一部のほか、特に合気武道を熱心に稽古した一期生楊えつ^{注87}氏の富木謙治に対する厚い思いを綴った文書を掲載した。^{注88}

- ・志々田文明「建国大学一期生弓削力氏との対談」(早稲田大学体育学研究紀要 26:111-115, 1994)
- ・志々田文明「孫群(孫宝珍)氏 建国大学時代を語る」(「満洲国」教育史研究, 東海教育研究所, pp.110-115, 1994)
- ・志々田文明編「小倉久弥氏聞き取り調査記録」(2001.9.1作成)
一期生小倉氏への訪問聞き取り調査(2000年8月22日実施)の録音テープを起こしたものに2000年9月3日から4日の電話補充調査を注記して作成したもの。未刊行)
- ・志々田文明「建国大学生一期生・尹敬章氏に伺う」(早稲田大学体育学研究紀要 35:93-99, 2003)
- ・志々田文明編「聞き取り記録『満洲国』建国大学一期生・李水清氏に伺う」(2000.3.14作成)

^{注87} 楊えつ氏の名前「えつ」は木偏に「越」という文字が中国の正字であるが、日本語ワープロ辞書に掲載されていないため以下ひらがなで表記する。

^{注88} この報告書は現在に至るまで秘匿されてきた。文化大革命で建大生であったことだけのために政治弾圧を受けた体験から日が浅かったこともあって、万が一にも中国側関係者に累が及ぶことがないように配慮したためである。

以下は、学会報告である。

- ・志々田文明「『満洲国』建国大学における武道教育」（『武道学研究』23(2), 1990）
- ・志々田文明「建国大学の教育と石原莞爾」（『日本武道学会第25回大会プログラム』, p.69, 1992）
- ・志々田文明「『満洲国』建国大学と合気武道及び相撲教育」（『武道学研究』第29巻別冊・日本武道学会第29回大会研究発表抄録, p.36, 1996）

この学会報告のために準備し当日配付した資料論文では、合気武道と角力についてある程度の説明を行った。その後論文に到ることなく、本研究へ発展された。

- ・志々田文明「『満洲国』建大に於ける銃剣道教育」（『武道学研究』第31巻別冊・日本武道学会第31回大会研究発表抄録, p.34, 1998）
- ・志々田文明「『満洲国』建国大学と騎道教育」（『武道学研究』第33巻別冊・日本武道学会第33回大会研究発表抄録, p.3, 2000）
- ・志々田文明「『満洲国』建国大学と剣道教育--武道顧問・島谷八十八を中心に--」（『武道学研究』第35巻別冊・日本武道学会第35回大会研究発表抄録, p.5, 2002）

第二論文以来、剣道教育の個別論文を作成することなしに至ったが、この学会報告の際に配付資料として作成した資料論文は本研究の剣道教育の下敷きになっている。

- ・志々田文明「満洲国『建国大学研究院月報』と武道」（『日本体育学会第35回大会号』, p.187, 2002）

この報告は従来欠が多かった「建国大学研究院月報」のほぼ全部が、建大同窓会鈴木昭治郎氏の協力で蒐集できたことから武道関係事項の一覧表を作成して報告したもの。

以上、筆者自身によってなされてきた研究の進展を論文等から見てきた。この20年近くの間、本研究を行うための一通りの準備作業が行われてきたことが見て取れよう。

(6) 海外における「帝国主義とスポーツ」に関する研究動向

海外に関する満洲国、建国大学、日本武道の三つをキーワードにした先行研究の動向については筆者は暗いのであるが、青沼裕之氏は1997年に、「北米や英国では、英帝国主義とスポーツの問題が研究され始めている」、「帝国主義とスポーツの問題は研究途上にある」と記している。^{注89} この年、日本でもアレン・グットマンの "Sports and Cultural Imperialism" の邦訳『スポーツと帝国--近代スポーツと文化帝国主義』（1997）が出版された。その解説によると、1960年代後半から影響力をもちはじめていたネオ・マルクス主義派のスポーツ社会学者たちは、近代スポーツを疎外された社会のなかの疎外された制度として断罪し、スポーツがなければ暴動や革命へ向かっていたであろう「リビドー」の暴発を、安全に昇華させる手段であると解していた。P.ランメルトに代表される、近代スポーツが文化帝国主義であるとする論は、このような一国内における「下へ」の文化伝播の問題として提起された諸

^{注89} 青沼裕之（1998）学会報告・日本体育学会体育史専門分科会1997年度春季定例研究会EVENING SESSION, ひすば：39, p.11. なお本稿は1997年11月に寄稿されている。

論点が、「外へ」の伝播に拡大されたものである、というのである。^{注90}

グットマンは、「近代スポーツ＝文化帝国主義」論に批判的で、同書で、「文化帝国主義という言い方は」「スポーツの伝播の過程で何が起こったかを描く上において、最適とは言えないと確信させられた。むしろ文化のヘゲモニーという方が的確であろう。」と述べ、グラムシのヘゲモニー概念^{注91}の導入を主張する。^{注92}ネオ・マルクス主義派の主張が実証性に欠けたイデオロギー性の強いものであることを批判しているのである。その上でグットマンは文化ヘゲモニーも文化帝国主義同様に文化の送り手の意図性を含意していることを批判し、受け手の主体性を次のように強調する。

「『競争心』が功を奏して、ひとたびスポーツの世界における独占が粉碎されると、文字通り、ないしは隠喩的な意味で植民地化された人々は、自分たちの自尊心を高めるための、またとない機会を手に入れるのである。『奴らのスポーツで奴らを倒す』ことほど喜ばしいことはないからだ。忠誠心と優越感とを同時に示しうるのだ。」^{注93}

受け手の「emulation（競争心）」が功を奏して、送り手のスポーツによって送り手を打ち負かし、力関係を変化させ、それが「政治的・経済的力関係の変化という、より重要な転換の前触れとなりうる」、また「近代スポーツは、ときおり反植民地主義感情を結晶させる機能をしてきた」^{注94}というのである。一種のガス抜き作用でしかないわけだが、それ以外に適当な方法がない時、近代スポーツは、被支配者の精神の平衡をもたらす生きる力を与えてくれるのであろう。^{注95}グットマンの反論はここでは一応の効果をおさめているといえよう。

しかし石井氏が敢えて批判の可能性を示すように、問題はそれほど楽観的ではない。後述するポストコロニアリズムは近代スポーツを論じているわけではないが、その全体に網をかけているとも思われるからである。

^{注90} 石井昌幸，訳者解説，アレン・グットマン（1997）スポーツと帝国--近代スポーツと文化帝国主義，昭和堂：京都，pp.221-222.

^{注91} ヘゲモニーは通例は一社会集団の他の社会集団に対する政治的、文化的指導の意味である。それが1890年代以降に革命指導の概念に転換された。グラムシはロシア革命を人間の集団意志の結実と受けとめ、経済決定論を批判、ヨーロッパ諸国の革命の挫折から、「市民社会の成熟したヨーロッパではロシアのように権力が政治社会に集中しておらず、教会、学校、組合、マス・メディアなどを通じて大衆の合意に基づくイデオロギー、文化支配、つまり国家のヘゲモニーとして市民社会に拡散されて浸透している。だから国家は単に支配の道具＝暴力装置ではありえず、市民社会の全領域に張りめぐらされた「ヘゲモニー」関係の総体に変質している」とした。（黒沢惟昭，グラムシ，哲学・思想事典（1998），岩波書店，p.388.）

^{注92} 前掲書，石井昌幸，訳者解説，グットマン（1997），p.203.

^{注93} 同上，p.207. 原書では、「Once successful emulation has shattered the ludic monopoly, the literal or metaphorical colonials have a splendid opportunity to enhance their self-esteem, for what can be more delightful than "beating them at their own game"? Simultaneously, one signals allegiance ("It's your game!") and superiority (We're better at it than you are!"). Allen Guttmann, Games & Empires - Modern Sports and Cultural Imperialism, Columbia University Press, New York, 1994, pp.179-180.

^{注94} 同上，p.207.

^{注95} 後に見るように建国大学の満系（中国、蒙古、白系ロシア）学生は一般にこのような反応をとれなかった。武道を日本人学生上達するには建大が教育機能を発揮した時期が短すぎたからである。

今はそのことを考える前に、植民地主義、帝国主義とスポーツに関わる研究動向について見ておきたい。^{注96} ジェームズ・A・マンガン(ストラスクライド Strathclyde 大学)によって精力的に行われている。^{注97} マンガンは教育学を学んだ後に社会人類学を専攻し、その後スポーツ史を研究して、1980年代に2冊の著書をだしている。^{注98}

・ J.A. Mangan (1981) *Athleticism in the Victorian and Edwardian Public Schools : The Emergence and Consolidation of an Educational Ideology*, Cambridge : Cambridge University Press.

・ J.A. Mangan (1986) *The Games Ethic and Imperialism : Aspects of the Diffusion of an Ideal*, London : Viking.

特に前者は Athleticism の生成と展開を究明した古典的好著といわれ、パブリック・スクールを6つに類型化しそれぞれの中から一校ずつを取り上げて調査し、運動競技の精神が礼賛されてくる歴史的過程を分析している。後者は論文集で、Athleticismのイデオロギーと同時代のイギリス帝国主義との関係を究明した作品である。

マンガンの編集した著書の中で「イギリス帝国とスポーツ」というテーマで重要なものは次の二冊である。

・ J.A. Mangan (ed.) (1988) *Pleasure, Profit, Proselytism : British Culture and Sport at Home and Abroad 1700-1914*, London, Preasure, Profit, Proselytism : British Culture and Sport at Home and Abroad 1700-1914", London, Frank Cass.の第二部の部分

・ William J. Baker and J.A. Mangan (ed.) (1987) *Sport in Africa : Essays in Social History*, New York : Africana Publishing Company.

英国では、1980年代半ば以降から Manchester University Press から、*Studies in Imperialism* というシリーズが刊行されている。^{注99} このシリーズにはマンガンも参画しており、"Making Imperial Mentalities : Socialization and British Imperialism" (1990)^{注100} を編集をしている。またこのシリーズでスポーツを全面的に扱ったものとしては、"The Imperial

^{注96} 以下の記述は石井昌幸氏(イギリススポーツ史)から教示を受けた。

^{注97} 今や東アジアの視点からのポストコロニアリズムの必読文献といわれる(姜尚中編(2001) *ポストコロニアリズム*, 作品社:東京, p.202.) 『植民地帝国日本の文化統合』(岩波書店,1996)を執筆した駒込武氏は、同書脱稿後にマンガン教授の下で在外研究を送り、マンガン編集の論文集に以下の論文を寄稿している。J.A. Mangan and Takeshi Komagome (2000) *Militarism, Sacrifice and Emperor Worship : The Expendable Male Body in Facist Japanese Martial Culture*, J.A. Mangan (ed.) (2000) *Superman Supreme : Facist Body as Political Icon -- Global Fascism*, Frank Cass : London.

^{注98} 有賀郁敏他著『スポーツ』(2002, ミネルヴァ書房)の文献解題に石井昌幸氏の簡単な紹介がある。pp.18-20.

^{注99} 石井昌幸氏によると本シリーズの翻訳書は、ロナルド・ハイナム(1998) *セクシュアリティの帝国 : 近代イギリスの性と社会*, 柏書房. 及び、ジョン・M・マッケンジー (2001) *大英帝国のオリエンタリズム : 歴史・理論・諸芸術*, ミネルヴァ書房. などがある。このシリーズが日本でそれほど紹介されないのは、日本では、イギリス帝国研究の主流は世界システム論などを基盤にした経済史的なものが主流で文化史を行っている研究者が少ないこと、また、巻によってレベルの差が大きいことがあるという。

^{注100} J.A. Mangan (ed.) (1981) *Making Imperial Mentalities : Socialization and British Imperialism*, Manchester University Press : Manchester.

Game : Cricket, Culture and Society" (1998)^{注101} がある。このシリーズのGeneral EditorはJohn M. MacKenzieで、彼自身はスポーツ史家ではないがイギリス・スポーツ史を考える上で有益な次の好著を出している。

・ John M. Mackenzie (1988) The Empire of Nature : Hunting, Conservation and British Imperialism, Manchester University Press : Manchester. ^{注102}

このほか、イギリス・スポーツ史学会の指導的人物は、リチャード・コックス（キール大学）、^{注103} トニー・メイソン（ウォリック大学から最近モンホール大学へ移籍）^{注104}、リチャード・ホルト（モンホール大学）^{注105}の諸氏である。特にメイソンには、植民地時代のインドにおけるサッカーに関する論文"Football on the Maidan : Cultural Imperialism in Calcutta"^{注106}と、南米サッカーに関する著書、"Passion of the People? : Football in South Africa"^{注107}がある。なお、イギリスにおいてはスポーツとは実践するものとの考えからスポーツ史研究は1970年代まではピーター・マッキントッシュなど一部のを除いて活発ではなく、^{注108} イギリス・スポーツ史は1970年代後半から1980年代前半にかけてレジャー研究を中心に活性化してきた。これはこの研究に携わることになる研究者の多くが社会経済史や労働運動史を研究していたため、その研究対象は生産場面が中心であったが、消費場面の研究への展開が求められたことによる。

(7) 国内のスポーツ関係学会における研究動向

さて、国内の学会の動きに目を転じると、日本体育学会スポーツ人類学専門分科会は2000年の同学会第51回大会においてシンポジウム「植民地経験とスポーツ文化」を企画した。ここでは旧植民地で行われている近代スポーツについて、支配された国（フィジー）の側と支配した国（イギリス）の側のそれぞれの視点から二人（橋本和也と石井昌幸）のシンポジストが報告し、司会の宇佐見隆憲氏を中心に議論がなされた。

宇佐見氏はまず、サイードの『オリエンタリズム』に端を発する議論の争点を、「人類学者をフィールドに向かわせる知的好奇心が、実は、西欧近代が創り上げた他者支配のための独特な精神様式に他ならないというものであった」^{注109}とし、従来理想とされた人類学者の

^{注101} Brian Stoddart and Keith A. P. Standiford (ed.) (1998) The Imperial Game : Cricket, Culture and Society. 本書も『スポーツ』に解題がある。

^{注102} なお平田雅博 (2000) イギリス帝国と世界システム, 晃洋書房. 第8章及び終章第2節には本書への言及があり、序章第3節にはシリーズ全体の解説がある。

^{注103} リチャード・コックスは著名な書誌学者でイギリス・スポーツ史だけの書誌も出している。

^{注104} トニー・メイソンはスポーツ史の次の好著を出している。Tony Mason (1980) Association Football and English Society--1963-1915, Brighton : Harvester Press.

^{注105} リチャード・ホルト Richard Holt は1989年に『Sport and the British』（スポーツとイギリス人）というイギリス・スポーツの優れた概説書を出している。

^{注106} Tony Mason (1992) Football on the Maidan : Cultural Imperialism in Calcutta, J.A. Mangan (ed.) The Cultural Bond : Sport, Empire, Society, London : Frank Cass.

^{注107} Tony Mason (1995) Passion of the People? : Football in South Africa, London : Verso.

^{注108} 石井昌幸氏によると、その背景には、イギリス・スポーツ史の研究者はスポーツ愛好者ではあるが、日本と異なり必ずしも体育・スポーツの教員ということではないことがある。

^{注109} 以下の本段落の引用は左記文献による。日本体育学会第51回大会号(2000), p.110.

「中立性」が現実には「近代イデオロギーに浸った」ものであったとする批判を紹介した上で、人類学のこの十年間の「研究目的や方法の自省」としての「特筆できるアプローチ」を紹介する。それは、「フィールドというミクロな社会と、それを取り巻くマクロな社会を交差させることで、フィールドに起こっている現象を読み解いていこうとする動き」である。そのような流れを受けてなされるこのシンポジウムは、第二次大戦後に独立を果たし、近代的国民国家として独立した国々においては、植民地時代に導入された近代スポーツが国家主導で定着し、土着化することで強化され、それが世界に向けて発信される現象も起こってきた。こうして植民地経験からスポーツ文化を読み解き、「従来のスポーツ人類学が敬遠しがちだった近代スポーツを対象化し」、合わせて学の「可能性を追求していく」というのである。

このシンポジウムはスポーツ人類学の研究史上の必要性から必然的に生まれた性格をもつものといえるが、近年のグローバリゼーションが近代諸国の文化にもたらす諸問題や、ポストコロニアリズムの提起する問題を考えるとき、体育・スポーツのスポーツの文化的・歴史的研究の世界で、従来スポーツそのものの世界を内向きに扱う傾向のあったスポーツ人文科学の研究傾向を、現代に関わりの深い歴史の文脈に合流させたという点で優れた企画であったといえよう。

さらに2002年には、スポーツ史学会第15回大会においてシンポジウム「東アジアのスポーツ文化に及ぼした植民地主義の影響」が行われ、「韓国における体育の変遷」（申鉉夏）、「建国大学における武道の進出とその波紋」（志々田文明）、「スポーツ史からみる東アジアの植民地問題」（谷釜了正）、「人類学からみる東アジアの植民地問題」（宇佐見隆徳）の報告がなされた^{注110}。企画者の高野一宏氏は、「近代スポーツの移入と伝統スポーツの変容」のテーマが数十年前から問題視されてきたことを踏まえて、「だが、事例を細かにみていくと、近代スポーツはストレートに受容されるとともに、抵抗に遭う場合もあり、また伝統スポーツを保護強化し、復活させようとする試みも見られる」として、「近年イギリスとアメリカを中心とする世界からの近代スポーツの伝播は、はたして文化帝国主義の一例なのかという疑問が投げかけられもする」と問題を提起し、「さらに多くの事例を収集し、ミクロな視座から検証し、それらを総合していく努力を払わねばならない」とした。

こうしたスポーツと植民地主義にかかわる最近の研究動向は、いずれもグットマンの『スポーツと帝国』が1997年に和訳され出版されたことを契機としたものと理解されるが、もう少し広い視野で見ると、その背景には、ポストコロニアリズム（植民地主義後）の研究の最近における顕在化が考えられよう。^{注111} 本橋哲也氏によるとポストコロニアリズムとは次のようなことである。第二次大戦後に多くの植民地は独立を果たしたが、その後も以前とかわらない、あるいはそれ以上の経済的・文化的搾取にさらされ、今や富める国家は国際的な資本・情報・文化表象の操作によって広範な支配体制を確立しつつある。そうした現実に対して、1960年代以降、植民地主義を引き継ぐ西洋中心思考に対する反撥が大きくなってポスト

^{注110} 高野一宏編（2002）『東アジアのスポーツ文化に及ぼした植民地主義の影響』財団法人水野スポーツ振興会2001年度研究助成金研究成果報告書，p.1.

^{注111} 姜尚中編（2001）『ポストコロニアリズム』，作品社：東京。

コロニアリズムが展開し、残存する不平等な現実をどう変革するかを問うてきた。ポストコロニアリズムのポストとは「コロニアリズム以降」を意味しない。現在コロニアリズム（植民地主義）の暴力とそれに対する闘争は、むしろ情報メディアや資本主義のグローバルな発達によって激化しており、それに対する反抗・逆襲・抵抗の論理がポストという接頭辞には含意されている。^{注112} 本橋氏にとってのポストコロニアリズムは「不正義を容認する現状への有効な介入」がめざされ、「近代という植民地が形作ってきた時代に対する自己批判的な視座から有り得た歴史を想像して現在の創造へと生かす」ことが志向されている。^{注113}

こうした研究の視野のなかには、近代スポーツが世界中で展開されていることの問題性が含意されていることは当然であろう。近代スポーツの巨大な求心力の象徴としてのオリンピック大会やサッカー・ワールドカップは、国際的な広告代理産業、情報産業、スポーツ関連商品産業なしでは立ち行かないビック・イベントになっており、それを通しての富まざる国に対する「経済的・文化的搾取」や「広範な支配体制」の確立に一定の役割を否定することはできないだろう。グットマンが批判しきった文化帝国主義論は事態の一側面を突くものとしては未だ有効性を残しているのである。

以上、見てきたスポーツ史や近・現代史の研究動向は、本研究とは直接結びついてはいない。しかし、本研究の対象となる場が植民地に擬せられ傀儡国家であったといわれる満洲国である以上、こうした研究が提起する問題を踏まえて考察する必要があるだろう。一方本研究では、文化帝国主義論の論者から批判を受けるであろう事柄にも取り組み考察していくことになる。満洲国には、戦後、関係者に「見果てぬ夢」（満洲国総務庁官星野直樹）と言わしめた日本人の夢があり、多くの犯罪的行為と並行するように善意の人々もまた生活し行動していた。また、日本人はアジアの「指導民族」であるという矜持は同時に思い上がりでもあり、日本人として反省させられることであったとしても、アジアの人々をしてそう思わせるにたるアジアの強い近代国家を唯一育成していたことも一面の事実なのである。

^{注112} 本橋哲也、「ポストコロニアリズム」の思想的現在, 同上書, pp.30-31

^{注113} 同上, pp.305-306. なお、小森陽一氏の「自らの実践として、植民地主義とその遺制を批判していく行為を実際に遂行して」いこうとする態度も同様の視点と思われる。小森陽一(2001) ポストコロニアル, 岩波書店.

第1部 満洲国と建国大学の教育

第1章 建国大学の環境--満洲国と国都・新京

建国大学が満洲国に設立されるのは建国7年目のことであった。建国大学、そこに集まった日本、朝鮮、漢、蒙、満洲、白系ロシアなどの学生と教員、彼らの真剣な努力と心の葛藤、及び武道教育の特性を理解するためには、満洲国が設立されるに至る国際環境、満洲国の特殊性を理解しなくてはならない。満洲国については既に多くの研究がさまざまな角度からなされている。特に1992年に刊行された『岩波講座近代日本と植民地』全8巻所収の諸論文は、満洲国の存在を近代日本の歩みとの関係で教えられる所が多い。こうした資料と大著『満洲国史』総論及び各論を参考に本章では歴史的・地理的・文化的環境を概観する。

1. 国際状況と日本

本節では建国に至る国際状況を、アジアの植民地化の危機の中で日本が選択した近代日本の対外膨張政策との絡みで略述する。

茂木敏夫論文によると、中国を中心に近代以前に東アジアに成立していた伝統的世界は、基本的には朝貢と冊封によって結びつけられた秩序であり君臣関係に擬制された不平等な関係であったが、中国は朝貢してきた国に対して実質的な支配を及ぼすことはなかった。両国の関係を律する儀礼の手続きを履行しさえすれば内政・外交への干渉は行われず「必ずしも支配--被支配の権力関係を貫徹するものではなかった」。徳治の理念によるゆるやかな秩序は、儀礼を踏み中国の脅威とならない限り中国以外との関係を排除するものではなく、「両属」という現象も認められる、「開かれた、ゆるやかな階層的秩序」であった。^{注114}

19世紀になるとヨーロッパ諸国は、近代ヨーロッパに成立していた自らの世界秩序に基づいて排他的・独占的に行使される平等な主権と「自由貿易」を主張し、中国との関係の改変を主張しはじめた。19世紀半ば、ヨーロッパ諸国は東アジア世界において自らの世界秩序の論理、すなわち「万国公法」（国際法）の論理を貫徹させようとして、中国・清朝に対して武力行使に及んだ。アヘン戦争（1840）、アロー戦争（1856）である。^{注115}ところが、アヘン戦争の結果結ばれた南京条約（1842）は、清朝では徳治の理念によってかえって恩恵として処理され、国際状況の変化を認識するにはいたらなかった。

一方、この事態に「敏感に反応した日本は従来の対外政策を変更（「開国」）して近代的国際関係に適合するための国家権力の再編を試みた。その結果幕府を倒して樹立された明治政府において、「宇内之公法」を受容し「万国対峙」の近代世界に参入して「国威宣揚」をはかることが追求されることとなった。^{注116}そしてこれは、周辺諸国との伝統的関係を近代的な関係に再編することをも不可避とした。明治政府は1870年代末までに周辺の国境画定を

^{注114} 茂木敏夫（1992）『中華帝国の「近代」的再編と日本』、近代日本と植民地 1 植民地帝国日本、岩波書店、pp.61-62.

^{注115} 同上書、pp.62-63.

^{注116} 1871（明治4）年の「米欧使節派遣の事由書」には、列国公法（万国公法）を「天道人道ノ公儀ヲ輔弼スル」ものとして受容し、そこで失われた対等の権利を回復していこうとする明治政府政策形成担当者ら意思が見える。芝原拓自他校注（1988）『対外観 日本近代思想大系12』、岩波書店、pp.17-18.

終えて、朝鮮と日本との「両属」関係にあった対馬および清国と日本との「両属」関係にあった琉球を「一方的に領土に組み込むかたちで近代国民国家としての一元的な領土支配を確立し、同時に一元化した外交権のもとに周辺諸国との関係も近代的条約関係に改変したのである」。^{注117}

これに対して中国は、近隣諸国との伝統的な宗属関係の枠組みにこだわったが、日本の台頭と朝鮮、台湾などへの介入によって、近隣諸国との宗属関係の内実は従来の恩恵的な関係を脱して権力的な「支配-被支配」の関係に変化していった。日清戦争（1894-1895）における日本の勝利は、中国を中心とした伝統的秩序の解体であったのである。

以後日本は、ヨーロッパ列強の植民地政策に学んで自国に隣接する諸国に対して、自らが被った「不平等条約」を結ぼうとしたり、租借地を獲得したりするなかで、^{注118} 植民地を求めて拡大する膨張政策を採用していく。それは「武力によってのみ統合された閉鎖的な経済圏の域をでなかった」^{注119} とはいえ、ついには膨張の最大領域となる「大東亜共栄圏」^{注120} を形成した。江口圭一は、日清戦争から第一次大戦に至る膨張と、「満洲事変後の満洲国・き東・内蒙古までの膨張とを帝国本国を基準とする方位によって再構成」して、「北に南樺太、北西に「満洲国」と朝鮮と関東州、西から南にき東と天津と内蒙古（チャハル）、西から南に向かって山東と揚子江流域と台湾・澎湖諸島、南に南洋群島、唯一の空白の東北は太平洋が広大な天然の要害をなしている」と記しているが^{注121}、満洲国は近代日本が歩んだこのような歴史的文脈の中で登場するのである。

2. 満洲国の建国

満洲国は1931（昭和6）年9月18日の満洲事変を契機に、その半年後の1932年3月に建国が宣言された。前年12月、国際連盟は満洲の現状を調査するための委員会派遣を決議し、リットン調査団が各国を巡って調査に当たった。1932年7月のV.A.G.R.リットンと内田康哉外相との会談では、リットンの、承認に当たって日本は極東に関する多数国間の条約当事国の了解を得べきとの主張に対し、満洲問題は日本の「ヴァイタルインタレスト」及自衛権に關係するものだとして關係国に相談しないことを表明し、欧米列国との協調關係のシンボルとして長期にわたり推進されてきた日本の連盟外交は、満洲国問題に比べれば二義的な重要性であるとされた。この外交政策の一大転換は軍部の要求を満足させたがそれは世界への対決を準備することを意味した。^{注122} 満洲に対する「自主」外交の第一歩として、齋藤内閣は8月に武藤信義大将を満洲国駐劄特命全權大使に任命し日滿議定書の交渉にあたらせた。「日本

^{注117} 茂木, 前掲書, pp.63-64.

^{注118} この間の分析に関しては次の論文参照。ピーター・ドウス (1992) 日本/西欧列強/中国の半植民地化, 近代日本と植民地 2 植民地帝国日本, 岩波書店, pp.61-83.

^{注119} 大江志乃夫 (1992) 第1巻まえがき, 近代日本と植民地 1 植民地帝国日本, 岩波書店, p.vi.

^{注120} 大東亜共栄圏建設構想については次の論文が詳しい。山本有造 (1994) 「大東亜共栄圏」構想とその構造--「大東亜建設審議会」答申を中心に--, 古屋哲夫編, 近代日本のアジア認識, pp.549-581.

^{注121} 江口圭一 (1992) 帝国日本の東アジア支配, 近代日本と植民地 1 植民地帝国日本, 岩波書店, p.184.

^{注122} 緒方貞子 (1966) 満洲事変と政策の形成過程, 原書房, pp.266-268.

の承認と引換えに、満洲国は従来の日中間の条約ならびに協定に基づく日本の権益を尊重することを約すとともに、両国共同して国家の防衛にあたる目的で日本軍が満洲に駐屯することを許すことになっていた」。注¹²³ 9月15日、日満議定書が調印され、日本は満洲国を正式に承認した。1933年2月、国際連盟総会に提出された報告書は日本の反対を押し切って採択され、3月27日、日本は連盟脱退を通告して独自の道を歩むことになった。

満洲事変を主導した目的意識の「直接の原型」を、それに3年3ヶ月先立つ張作霖爆殺事件であった。この事件は、満洲・内蒙古（満蒙）を支配していた張作霖との1921年以來の提携を基本方針とするワシントン体制下の日本の満蒙政策を放棄し、日本自らの実質的な満蒙の支配に向けて踏み出した第一歩であった。首謀者であった関東軍高級参謀河本大作大佐の謀略には陸軍中央部もまたこれを関知ないし黙認していた、という。河本の後任の関東軍高級参謀となった板垣征四郎大佐及び、建国大学構想の発案者となる関東軍参謀石原莞爾中佐は、河本の懸案解決のために練り上げた謀略を進め「日本が満蒙に直接支配する必要を陸軍内部に強く鼓吹した」。注¹²⁴ 満洲事変首謀者たちの満蒙領有案は欧米諸国との戦争をも惹起する可能性が大きく、就中对米ソ戦準備を伴うものと見られ、長期間にわたる持久戦争とならざるを得ないことが予想されていた。「したがって領有された満蒙は、それ自体消耗戦争の重要な政治的経済的社会的基盤たるべきものであり、戦争を目的とする（中略）「高度国防国家」注¹²⁵の フロンティアたるべきものであった」。注¹²⁶ しかし1920年代後半から1930年代初頭の政党政治下の日本には高度国防国家のモデルは存在せず、外交・財政両面にわたって軍縮条約及び金本位制に基づく確固たる国際協調主義が支配していた。そこで石原は対外膨張を先行させ、対外膨張を通して国内改革に着手すべきことを主張した。それは国外の国防国家をモデルとして国内のそれを推進しようとするものであった。これこそが満洲事変の最も深い動機及び理由であり、それらが満洲事変の所産である満洲国の性格を決定した。注¹²⁷

3．満洲国の国家体制

満洲国は成文憲法を定めず、それにかわる「満洲国ヲ統治スル国政ノ根本法」としての政府組織法を建国宣言後間もなく制定し、併せて人権保障法をも制定公布した。1934年に帝政が布かれると政府組織法を改定した組織法を制定公布した。これらは明治憲法をモデルとしたものであったが、その権力分立制は、天皇の立法権行使における帝国議会の「協賛」と満洲国執政ないし皇帝の立法権行使における立法院の「翼賛」との違いにおいて、修正されていた。帝国議会では自己立法が可能であったのに対して、立法院は法律案の発案権をもたず、法案は國務院各部及び法制局において立案された。立法院の「翼賛」機関的性格に、日本の政党支配下の帝国議会に対する満洲国側の批判を見て取れよう。それはまた「日本の国

注¹²³ 同上書, p.270.

注¹²⁴ 三谷太郎 (1992) 満洲国国家体制と日本の国内政治, 近代日本と植民地2 植民地帝国日本, 岩波書店, p.180.

注¹²⁵ 「高度国防国家」体制とは、「戦争という目的に向けて国家及び社会の全機能を集中する体制」。同上書, p.182.

注¹²⁶ 同上書, p.182.

注¹²⁷ 同上書, pp.182-183.

防国家化に適合する帝国議会の将来像を示唆したものともいえる」。^{注128}

しかしこのような立法院さえも満洲国では成立するには至らなかった。別に定められることになっていた法律ができなかったからである。その役割は執政（皇帝）の顧問機関たる参議府が代替し、立法院の「翼賛」機能を事実上独占した。

さて満洲国の法的主権者は執政（皇帝）であり、それに対する憲法的制約は極めて弱かったため専制君主に近かった。しかし君主専制政治は実現しなかった。法的主権者とは別に、超憲法的な政治的主権者・関東軍司令官がいたからである。この政治的主権者が一切の憲法的制約を受けないという点で「他に例を見ない変態的な二重主権国家であった。」^{注129}しかし独立国家としての正統性と安定性を確保していくためにはこうした二重性を克服していかななくてはならない。石原は1932年6月25日付け手記の中で、関東軍司令官の後継者を「統制主義による民衆の代表機関たる一の政治団体あるべしと断ぜざるを得ず」とし、法的主権者を支える大衆的基盤をもった政治的主権者が必要と考えた。関東軍方面からそのような主権的役割を期待されたのが「満洲国唯一の人民動員機関たるべく設立された満洲国協和会であった。」^{注130}

中国を国家なき社会と見る中国観は、内藤湖南（1866-1934,京大教授）のような歴史家の現代中国論のなかに典型的にみられるものであるが、「それはおそらく1910年代からの日本の中国政策の根底にあったのであり、これが満洲事変の首謀者たる板垣や石原の中国観にも影を落としていたように思われる」。満洲には漢民族が全人口の95%をしめていたにもかかわらず、彼らはその中国観から、日本が満洲国の政治の実権を掌握したことを正当化し、日本を除く他民族はそれぞれの天職に応じて満洲国経営を分業すべきであると主張した。「日本の政治的ヘゲモニーの下での諸民族（五族）間の満洲国経営分業体制がいわゆる「民族協和」の実体として考えられたものといえよう」。^{注131}

「民族協和」は「王道楽土」と並んで満洲国の建国の理念として喧伝されたスローガンであった。そのイデオロギーを実効あらしめるための組織が協和会であった。協和会は満洲国発足当時構想された一国一党制の主体としての協和党を換骨奪胎して、1932年7月に発足した。協和会発足直後につくられ、その後も協和会運動の基本文献とされた「満洲国協和会創立の理念」は、当時強い影響力をもっていた石原イデオロギーに従って、協和会を近い将来の根本国策決定機構と規定し、「君主専制政治及び議会専制政治は満洲国に適せず。結局満洲国内に堅実なる唯一政治団体を結成して民衆の支持を獲得し、之により国家の根本国策を決定せしむるを最も適切なりと信ず」とし、「満洲国協和会は此の目的の為創立せられた」と記した。しかし現実の協和会はこうした理念からは遠く、國務総理を会長とし関東軍司令官を名誉顧問とする人民の組織及び動員のための官製団体であり、初期の主要な活動は関東軍の軍事行動が一段落を遂げた後の治安維持及び宣伝活動に限られており、「国务院宣撫員あるいは関東軍囑託としての補助活動を提供する一種の外郭団体にすぎなかった」。同年8月

^{注128} 同上書, pp.184-187.

^{注129} 同上書, p.189.

^{注130} 同上書, pp.189-190.

^{注131} 同上書, pp.190-191.

の関東軍司令官の交代は協和会の非政治化を決定づけ、協和会は国務院総務庁の監督下におかれ、協和会を政党としない方針が改めて確認された。^{注132}

しかし協和会再活性化の機会が訪れる。1934年に満洲国の安定化と日満一体化とを顕示するために満洲国の帝政を企図した。政府組織法（1932）では、満洲国の元首たる執政は前人民の「推挙」によってその地位に就くが、さらに執政が世襲の皇帝になるためには、改めてそれを求める民意の演出が政治上必要であった。その民意の表出機関たることを要請されたのが協和会であった。その後関東軍も皇室中心主義を採用する方針を明確にするとともに、他方で民意の調達を重視し、協和会の指導による下意上達を認めた。こうした関東軍の方針に沿う形で、協和会は1934年9月に中央事務局を改組し満洲国政府と協和会との相互浸透関係を確立し、また1936年7月の改組では協和会を「国民組織」として確立することを意図する組織及び運動の大衆化路線を採用した。^{注133}

こうした事態を追認し、正当化したのが1936年9月に植田謙吉関東軍司令官が発した声明「満洲帝国協和会の根本精神」及びその含意を関係当局及び協和会部内関係者に敷衍説明した板垣征四郎参謀長名の「満洲国の根本理念と協和会の本質に就て」（及び関東軍司令部限りで明らかにされた「満洲国の根本理念と協和会の本質」）であった。植田声明は第一に満洲国の政治の特質として、民主政治的議会政治と専制政治を退ける一方で「民族協和し正しき民意を反映せる官民一途の独創的王道政治」を掲げた。「満洲国の根本理念と協和会の本質に就て」によると、満洲国の政治理念である「王道政治」とは、「天皇の大御心を以て心とする哲人及び哲人的組織体によって運営せらるる政治」であり、皇帝は天皇の代行たる関東軍司令官の後見を得て哲人の役割を果たすとされた。また協和会はもう一つの支えである哲人的組織体の役割を果たすべく期待されていた。^{注134}

植田声明が日本国内各紙によって大きく報じられた一ヶ月半後、新聞が陸軍部内の「有力な改革意見」が報じられた。その提言には政党内閣制の否定が含まれており、総じて「議会の機能を厳格に『立法』に限定し、『行政』から完全に切断することによって 政党を権力の主体たらしめるような『英国流の議院内閣制』を廃絶する意図を示唆したものであった」。^{注135} 政友会・民政党両党はこれを議会政治への脅威と見なして対決する姿勢を示した。1937年1月、衆院本会議場において政府に対する質問演説になった浜田国松は軍部（陸軍）を批判して植田声明に言及し、「或る威力に依って協和会の外は政治団体を禁止して、一国一党の体制を強行することを発表して居るもの」と意味づけながら、満洲における政治思想を軍部が日本内地に入れようとしていることを危険視した。浜田演説後のやりとりで陸軍・政党の両者は全面衝突して広田内閣は総辞職した。^{注136}

広田内閣の後継首班を任ぜられた宇垣一成が陸軍の反対で組閣に失敗した後に成立した林

^{注132} 同上書, pp.192-195.

^{注133} 同上書, pp.195-196.

^{注134} 同上書, pp.197-198.

^{注135} 同上書, p.200.

^{注136} 同上書, pp.201-202.

銑十郎内閣は、政治・及び経済の両面にわたる日満一体化路線を志向する内閣であった。この路線を準備したのが1936年参謀本部戦争指導課長となった石原莞爾を中心とする、満洲事変や満洲国建国に深く関与した「満洲組」といわれたグループであった。^{注137}

この石原莞爾こそが建国大学の原初的な構想を抱いた人物なのであるが、その構想は以上のような歴史的文脈の中で理解されなくてはならないだろう。

4．満洲と首都・新京の環境

(1) 満洲とは何か

ところで、今まで自明の事のように記してきた満洲国の「満洲」とは何処あるいは何を意味するのであろうか。満洲の起源や由来については小峰和夫の『満洲--起源・植民・覇権』に詳しいが、満洲という言葉の由来については明確な回答を保留している。^{注138} しかしこの点についての明解な記述は中国文学の高島俊男や歴史学の神田信夫の論著などに詳しい。

高島によると、^{注139} 満洲とは仏の「マンジュ」であり、満洲とインドの仏「マンジュシリ：文殊師利」とは同じ言葉である。満洲には昔「ジュルチン：女直あるいは女真」という民族が住んでいた。ジュルチンは仏教を信仰し特にマンジュ菩薩を尊崇し、そこで自らの民族名もジュルチンからマンジュとして、後に漢字を使うようになるとこれに「満住」または「満洲」の文字をあてた。

神田によると、^{注140} ヌルハチが建州女直（真）を統一してその国をマンジュ国と称したので、以後その勢力の伸張するにともない、その範囲も拡大したが、民族名としては従来通りジュシェン（女真）であった。ジュシェンの名は、女真人の間でモンゴル人のモンゴ、漢人のニカンとともに並称されていた。満洲と書くことに一定したのは、後継者で清の太宗・ホンタイジがジュシェンと呼ぶことを禁止し、マンジュと呼ぶように命令を下したためであり、これによって民族名になったのである。現在の中国の少数民族の一つ満族はその子孫である。

なお満洲とさんずいを付ける由来について高島は、中国の王朝はみな五行（木火土金水）のいずれかを王朝のシンボルと師、明王朝が「火徳の王朝」としたことに對抗するためであった。国名の清も同じ考えに依った、と記している。^{注141}

高島によると、満洲を地名と理解するようになったのは、西洋人が日本の江戸時代以前にここに来て、この地名を「マンジュ＝満洲の地」即ちマンチュリアと呼んだからである。この点につき塚瀬進は、^{注142} 「満洲を地名で用いたのはヨーロッパ人であり、その発生を矢野仁一は1830年代ごろとしている。中見立夫は日本で満洲という地域名が成立したのはヨーロッパより早く、18世紀末～19世紀はじめであったと考証している」と紹介している。

^{注137} 同上書, p.203.

^{注138} 小峰和夫 (1991) 満洲--起源・植民・覇権, お茶の水書房: 東京, p.123.

^{注139} 高島俊男 (1999) お言葉ですが, 文春文庫, pp.233-237. この文献は宮沢恵理子氏から恵贈された。

^{注140} 神田信夫 (1989) 満洲・漢, 三上次男・神田信夫編 (1989) 東北アジアの民族と歴史, 山川出版社, p.249.

^{注141} 前掲書, 高島俊男, pp.234-235.

^{注142} 塚瀬進 (1998) 満洲国--「民族協和」の実像, pp.21-22.

日本ではこの地域を韃靼と呼んでいたが、明治以後西洋人の呼び方を真似をして満洲と言いつ出した。現在の中国では東北と呼ぶが、清朝の時代には満洲を東省とか東三省などと呼び、中華民国時代は東三省（黒竜江省、吉林省、奉天省）、それ以前は山海関の内側（中国）の意味に対して関外（山海関の外側）といった。

いずれにしる満洲という概念は、民族又は国家名（国民国家ではない）から地域名への変遷があり、中華民国以後の中国は東北という呼称を、日本及びヨーロッパは近代以後、満洲という呼称を使用してきたと整理されよう。この満洲を中華民国が東北、東三省と呼んだのは、中国と不可分の領土であるというメッセージが籠められているといえるが、それは近代国家としての成立を意識したからにほかならないといえよう。^{注143}

さて、古来満洲には様々な民族や部族が対立、融合、同化しながら住んでいた。それを大別すると狩猟のツングース系、遊牧の蒙古系、農耕の漢民族である。これら3系統のうちでも活躍してきたのがツングース系（中華では女真と呼ばれた）であり、満洲から起こった高句麗、渤海、金、清の各王朝は彼らによって創建された。

満洲国の時代は、民族協和が唱えられ、他民族が共に住む国といわれても圧倒的多数は漢民族であった。漢民族王朝の手が満洲へ伸びるのは紀元前202年に始まる前漢の時代である。漢は満洲南部の遼河下流に広がる沃土に恵まれた地に、遼東、遼西の二郡をおいて東方経略を行った。しかし気象条件その他が農耕には過酷すぎて漢民族を容易に寄せ付けなかったため、漢民族が北満洲などに入植するようになるのは18、19世紀からである。前漢時代以後、漢民族による満洲経略は約千年にわたって途絶え、再びその威光が満洲にまで達したのは元を滅ぼして建国した明の時代である。少なくとも明代にまで遡ってみると、満洲とはツングース系の狩猟民族が棲息する地域であり、満洲の主は農耕民族の漢民族ではなくツングースやモンゴルであった。つまり伝統的な社会や風土を形成していたのは農耕民族や農業ではなく、ほとんどの地域は未開発の森林原野におわれていた。小峰によると、近代に連なる16世紀以降の歴史を適切に捉えるためにはこうした点を踏まえることが重要という。^{注144}

満洲事変から「満洲国」建国に至るプロセスの背後に、上述のような満洲という概念のもつ歴史的複雑性があった。日本帝国主義にとってこの複雑性は、近代国家のとしての中国を相手に「満洲国」の成立を正当化する際の不可欠な根拠であったのである。^{注145}

(2) 首都・新京

1895年の日清講和条約締結後、ロシア、フランス、ドイツの三国は日本に干渉して日本が条約によって得た遼東半島を還付させた。ロシアはその恩義を楯に取って清国から清国領内を横断して沿海州方面に至る鉄道敷設権・経営権を獲得し、この権利に基づいて1897年に東

^{注143} 纒々詳述したが、こうした総括的結論は結局岡部牧夫氏の古典的好著の簡潔な記述に帰着する。岡部牧夫(1978) 満洲国, 三省堂選書, pp.9-10.

^{注144} 前掲書, 小峰和夫(1991), pp.6-7.

^{注145} 本論文題目における満洲国の英語表記についてはManchoukuoとManchukuoの二説がある。これにつき鈴木昭治郎氏より研究社大英和辞典第五版及び小学館ランダムハウス英和大辞典第一版では後者が優先されていること、また前者を正しいとする説があることの教示を得た。本論文ではManchukuoを採用した。

清鉄道会社が設立された。1898年、ロシアは遼東半島租借権を獲得すると同時に、哈爾濱より遼東半島に至る鉄道の敷設権を得た。ロシアはこの半島の旅順に軍港を、青泥窪（後に大連）に貿易港を建設して、これを哈爾濱と結ぶ東清鉄道南部支線をつくることによって長年の懸案であった太平洋での不凍港の獲得に成功した。^{注146} 日露戦争の勝利はこの権利をロシアから奪取するものであった。

1905年の日露講和条約は日本に二つの権益をもたらした。それはロシアが中国に対して得ていた旅順・大連の租借権と長春と旅順・大連間の鉄道に関する権利で、日本は満洲に関する日清条約によってこれを承諾させた。日本が獲得した鉄道は南部支線の約四分の三にあたる長春-旅順間700km余りで、鉄道に付属する特権も全て獲得された。^{注147}

「譲渡が実施される時、日本は長春旧市街北西二キロの寛城子駅を長春と見ていたので、寛城子駅から旅順までを主張した。ところがロシア側は長春旧市街から鉄道へ垂線を引いた地点までを主張する。結局は双方の主張をとり入れて、寛城子駅は日露共有となり、満鉄は新たに駅を作ることになった。それが長春駅である。当然、駅施設用地と付属地を買収し、新たに市街地を作らなければならない。」^{注148} それを行ったのが満鉄初代総裁・後藤新平である。「後藤は当初10万坪の予定であった市街地を20万坪に設定しただけでなく、将来は寛城子付属地を包み込む壮大なプランで都市計画を進めた」^{注149} という。

それから二十数年、1932年3月10日、成立間もない満洲国は国都を長春に定め、名称を新京と改めた。その位置は、北緯43度53分で札幌の北方に位置し、東経125度18分、標高218mであった。『満洲国史』各論によると、地勢は、伊通河西方に発達した台地上にあり、はるか東北に石碑峯の連丘を臨むほか一望千里の曠野で、その南方、懷徳より公主嶺を経て伊通に至る一連の丘陵は、地勢上満洲を南北に分ける分水嶺をなしている。夏季は最高気温35度に達するが、7月中の平均最高温度は33ないし34度で概して湿度が低く、冬季の最低温度は零下30度程度で、一月中の平均気温は零下17度前後である。三寒四温の周期的調節により寒気の猛威を和らげている。降雨量は年平均644.4mmで、快晴日数は東京の倍である。^{注150}

満洲国の首都・新京のあたりは「蒙古コルラス旗の広大な放牧地であった」。^{注151} 1802年、清国政府は満洲の封禁を解いて漢人の開墾を許し、城邑の北20km地点の長春堡という小邑に長春庁を置いた。以後長春の名が伝承された。1825年、現在の城内に庁を遷した。長春府の所在地である城内は1865年に造られ東西線1.8km、南北線1.3km、周囲10km、九門をもつ不規則な九角形の城郭であったが、長年風雨にさらされた城壁は崩れて昔日の面影はない、という。1901年帝政ロシアにより東支鉄道が敷設され、寛城子に市街を創設した。その後日露戦

^{注146} 北岡伸一(1988) 後藤新平-外交とヴィジョン, 中公新書, pp.79-80.

^{注147} 同上書, p.82.

^{注148} 河田宏(2002) 満洲建国大学物語, 原書房, pp.22-23. この出典は明らかでないが、参考に敢えて引用した。著者は本書の性格を「事実を中心に」「架空の人物と多少のフィクションを含んでいる」と記している。

^{注149} 同上。

^{注150} 満洲国史編纂刊行会(1971) 満洲国史 各論, 満蒙同胞援護会, p.1010.

^{注151} 前掲書, 満洲建国大学物語, p.22.

争の結果、満鉄線の終端駅になるに及び、長春に満鉄付属地が建設せられて近代的都市の形態を整えるに至った。しかし満洲国建国以前の長春は人口12万の一地方都市に過ぎず、市街の形態も雑然として見るべきものもなく、行政機関を収容可能な庁舎もなかったため、建国と共に事実上の権力主体・関東軍は国都の建設に乗り出した。建設計画の立案は関東軍特務部において行い、1932年12月、計画区域100万平方km国都建設計画概要案を作成した。認可されると、さしあたり人口50万を目標に、第一期事業施行期間5カ年（半年延長され1932.3-1937.12）、執行区域20平方kmとして実行に移された。1933年には国都建設計画法が發布され、国務院国都建設局によって事業が施行された。^{注152}

(3) 新京の構造基盤（インフラストラクチャー）

下図（図1-1：新京案内地図）は1938年12月印刷翌年1月発行の観光図書『新京案内』巻末に付載された地図である。建大は地図内の最南端、建国広場、建国廟の南にある。新京駅南方の旧市街からさらに南方へ扇状に整然と開かれた街並みが一見して理解されよう。

（参照 図1-1：新京案内地図と建国大学）

1990年、筆者は始めて長春を訪問したが、市内を巡って感じたのはゆったりした幹線道路、整然とした街並み、そして樹木の豊かさであった。ここでは建国大学と学生を包んでいた国都・新京の環境について見ておきたい。その建設とその特徴についても『満洲国史』各論に詳しいので、以下それによって概略を見る。^{注153}

満洲国がこの街を建設するに当たって苦心が払われたのは、市面積の21%を占める新京の街路計画とその築造であったという。街路系統では重要建築群の都心分散が図られ、各地区をその機能に応じて区分し、それぞれ副都心を構成するように計画された。すなわち経済都心を大同広場、政治都心を安民広場、文化都心を南嶺広場、市民都心を盛京広場、交通中心を南新京広場として、これらを各地区の主要幹線道路をもって結合された。幹線の幅員は26 60、支線は10 18、補助線はそれ以下とし、幹支線はすべて車道及び歩道に分けられた。幹線道路には緑地帯を設けて緩急車両に分離し、中央は高速車用、その両側を馬車、洋車（人力車）、大車（荷車）、自転車などの緩速車用とし、さらにその両端を歩道とした。主要道路の交差点には周囲60 45のロータリーが設けられた。上記の大同広場などである。また街路標識柱、照明柱が設置されたが、架空線等の路上施設は禁止された。つまり上下水道、ガス等の家庭引き込みの供給管と、電気、電信、電話の架空線等をもすべて背割道路（4）に収容したのである。ために一般街路上には供給管修繕による掘り起こしや架空線施設等を見ることはなかった。市の発展につれて広告物が乱雑に貼布されるようになるとこれを禁止し、広告塔を配置して街路美の維持に努めた。街路樹には全市外にわたって伸張性の高い白楊（どろ柳）五年生を主として、路線によってはネグンドカエデが、また順天大街には榆二五年生が植栽された。架空線のない街路であるため樹木は亭々として茂り、街路照明灯は全街路の歩道と緑樹帯の要所要所に布設されたので、都市美が遺憾なく発揮された。

^{注152} 前掲書、満洲国史 各論, pp. 1010-1011, p.1020.

^{注153} 同上, pp.1010-1023.

公共施設で注目されるのが公園であり、大同、白山、牡丹、順天、和順、黄龍など水と森林の公園が造成された。なかでも黄龍公園は250万㎡の広大な敷地に延長600 の土堰堤によって周囲6km、貯水面積62万坪の人造湖・南湖を完成し、常時満々たる水を湛えて釣り人で賑わう名勝の一つとなった。建国大学生が息抜きの間としたところでもある。大同、牡丹の両公園は合わせて47万平方メートル、園池8万坪有し、人々に親しまれた。なお後述のように、牡丹公園には満洲国の武道の殿堂・神武殿が1940年11月に建設されている。新京の年降水量は平均644.4mmであるが、これらの雨水は集められ付近の各公園に放流し、湛水して園池とされた。下水道施設関連で、汚水は全域水洗式廁を実施した。東洋初といわれる。このほか大広場、総合運動場、賽馬場、ゴルフリンクス、南嶺戦績記念公園などが完成され、運動場を含む公園面積は市街地面積の7%に達した。当時、東京は2.8%、ベルリンは2%、ロンドン9%、ワシントン14%であり、国際水準以上であったことが窺われる。

1936年に都市計画法が公布された。この法に基づき1938年12月国都建設計画法及び同施行令が公布され第二期計画事業の実施が図られた（1942.1完了）。ここでの目標は第一期計画授業の完成にあったが、同時に新たに地域が対象に加わった。それは1937年11月の日満条約により治外法権が撤廃され、新京においても満鉄付屬地行政権が移譲されたために、旧満鉄付屬地、旧北鉄付屬地、商埠地、城内等旧来の特別市公署行政区域が建設の対象となったためである。公園は14箇所が完成された。上記以外のものは、兎玉、忠靈塔外苑、五馬路、翠華、安達街、南湖、湖西（小公園）、和楽街（小公園）である。1942年8月には南嶺国際競技場が完成し、建国十周年を記念した大東亜競技大会が行われている。新京の路面交通は路面軌条電車を運行しない方針であったので地下鉄計画に着手したがその後セメントの配分を受けることが困難になったため中止となった。運行していたバスもガソリンの規制強化困難になった。しかし豊満ダムよりの送電が開始されると、その電力を利用した路面電車を運行することになり、急遽路面軌道を敷設し、日本より車両を購入して市内電車を開通させた。補助機関としての乗用馬車は2700台、洋車は1300台であった。二期にわたる計画により人口50万を収容する国都建設は1942年1月に終了し、国土計画の策定と併行して計画人口を100万人とする第二次国都建設の段階に入ったが敗戦のうちに終わった。

(4) 武道の殿堂・神武殿

1940年11月、神武殿が完成した。これは満洲帝国武道会が、日本紀元2600年の記念事業として、新京市牡丹公園内に建設したもので、満洲国の武道の殿堂というべき建築物であった。以後各種の大会がここで行われるようになったため、後章で見るように、建大の学生も課外活動で武道を愛好するものはここに参集したのである。当時の雑誌「新武道」の表紙側グラビア記事によってその概要を紹介しておきたい。

「神武殿の建築は、武道の精神を究め、承流宣化の実践道を修めしむる本義に則り、質実剛健を旨とし、日本古来の様子を基調としたもので、

構造 主体鉄筋コンクリート造、大屋根鉄骨トラス組、壁体煉瓦積み

建坪 二,八九八平方米

公費 百四十万円

一階は柔剣道大道場と角力道場、弓道場、小道場、試切道場、襖道場の各道場、貴賓室、事務室、師範室、会議室があり、地階に支度部屋、予備室、食堂その他の付属施設がある。

本建築の設計は、満洲帝国武道会技師宮地二郎氏の苦心に成り、康德六年九月、竹中工務店の手によって工を起し、延べ人員六万七千四百余の労務と、一年二ヶ月の日子を費やして竣工したもの、以来各種の武道場において挙行、今夏は建国十周年記念の大会で、盛大に行われることになっている。」

大体の概要が理解される。建大で兼務講師として角力を教えた和久田三郎の著書に、神武殿に関する記述があるので、さらに補っておこう。

「大きく自慢したいのが、(中略)11月23日に落成式をあげた満洲国の中央道場「神武殿」の竣工である。新京市牡丹公園地内に、公費実に140万円、内地にもまだないという堂々たるもの、この角力道場開きには、とくに肥後の熊本から吉田司家のおいでを乞い、いとも厳肅なる式典を行った。私も力士で殆ど日本全国を巡業して歩いたが、まずこのくらい立派な建物は滅多にあるまいと自負したい。満洲国ぜんたいの武術の大殿堂であって、柔道、剣道、銃剣道、弓道の四大部門にむろん角道を加え、徹底的に、これが普及・拡充をはかる中央本部となった」^{注154} という。

なお、筆者は1991年の初訪中の際、この建物をじっくりと見学する機会を得、その後も1999年に同様の機会を得た。戦後、この建物は吉林大学内にあり、初訪中の時から劇場あるいは劇の稽古場として使用されていたが、内装はかなり古びている感じで、あまり使用されていないような印象も受けた。1999年の見学の際は、外に神武殿としての歴史を記す掲示板も立てられより内装も整備されており、立派に現役として活躍している姿を見て、歴史の不思議を感じたものである。

(5) 民族の構成

民族協和を標榜した満洲国と首都・新京の民族構成を見ておこう。満洲国政府がはじめて臨時国勢調査を行ったのは1940年10月1日である。人的資源の実態の把握、国籍制度の確立その他施政上の基礎資料を得るためのものであった。^{注155} 日本が1902(明治35)年に調査にかんする法律を公布し、1920(大正9)年になってようやく第一次の調査を行ったことを考えると必要に迫られた素早い施策であった。これによって従来通称「三千万国民」といわれていた数字が「四千三百万国民」に改まり、官民ともに識字の必要が痛感され、その運動を盛り上げる機運をつくった。その調査報告書の第1巻は1941年11月に刊行された。その主な内容(1940年10月1日現在)は表1-1に示す通りであるが、若干の解説を加えよう。^{注156}

(参照 表1-1: 満洲国民族構成比)

^{注154} 和久田三郎(1955)相撲風雲録, 池田書店, pp.249-250.

^{注155} 同上書, p.56.

^{注156} 同上書, pp.57-59.

a. 総人口：43,202,880人。当時の諸外国の国勢調査の結果と比較すると、イタリアに次ぎ世界第9位。人口密度は1平方km当たり33.2人で、ソ連（8人）、アメリカ（17人）より高く、日本内地（190人）よりはるかに低かった。

新京特別市ほか17市は、4,592,876人、市部以外は38,610,004人で、それぞれ10.63%、89.37%であった。

市別人口順位は、奉天市（1,133,710人）、哈爾濱市（660,756人）、新京特別市（555,009人）の順で、ハイラル市（41,401人）が最も少なかった。

b. 民族。下表に見られるように、総人口に占める漢民族の割合は85%と圧倒的といえる数字であった。日本民族の割合は2%弱に過ぎず、併合していた朝鮮の民族を入れてもわずか5%であった。

c. 性別及び年齢。総人口を男女別に見ると、男子23,908,082人、女子19,294,798人で、女子100人につき男子123.9人と男子の割合が高かった。年齢構成は5歳ごとに比較すると、一部の例外を除くけば年齢階級の登るにしたがい人口が漸減し、ほぼピラミッド型の年齢構成であった。

第2章 満洲国の高等教育と体育政策

建国大学は国務総理大臣直属の「破格な大学」、「ユニークな大学」であったといわれるが、一章で述べた先行研究の中には、このことを満洲国の大学教育のなかで位置づけた研究は見られない。本章では、建国大学創設の経緯を記す前提として、満洲国における教育政策と高等教育政策及び制度について見ておきたい。満洲国の教育資料については、近年、従来『満洲国史』や『満洲建国十年史』などの関係箇所を頼っていた^{注157} 研究環境が一段と改善された。それは満洲国国務院が1934年から建国大学創設の1938年にかけて刊行した『満洲帝国文教年鑑』（第1次～第4次）、1934年から1937年にかけて刊行された『満鉄教育たより』（創刊号＝第39・終刊号）、そして1993年には全23巻に及ぶ『「満洲・満洲国」教育資料集成』^{注158} が復刻刊行されたからである。同『集成』には同『年鑑』の方式をほぼ踏襲した『民政年鑑』がすべて（第1次～第4次）収載されたため、1940年度までの統計資料を調べやすい環境が生じたからである。またこれらの資料を駆使して叙述された竹中憲一著『「満洲」における教育の基礎的研究』全6巻も2000年に出版された。本章ではこれらの資料などを活用する。

1. 満洲国における教育政策

満洲国の教育は、学制の改編によって、1) 暫定学制期、2) 新学制期、3) 新学制後期の三つの時期に区分される。^{注159}

(1) 暫定学制期

この学制期は、建国（1932年3月）から1937年5月公布、翌1938年1月施行の時期である。学制確立のために議論は建国後まもなく始められたが、反満抗日闘争が各地に勃発しており、国政全体としては治安の確立に多くのエネルギーを要し、新学制の確立には至らなかった。そこで、建国前に満洲国版図すなわち中国東北一帯を支配していた張学良政権下で進められていた学校体系と施設を利用して行われたが、張政権下で進められていた学校の近代化は中華民国の学制と国民党指導に基づく教育であった。すなわち1922（民国11）年の壬戌学制およびこれを一部改訂した1928年の戊申学制に基づく教育体制で、その内容は以下のようであった。^{注160}

< 壬戌学制における学校と修業年限の概要 >

- ・ 小学校：初級4年、高級2年
- ・ 中学校：初級3年、高級3年

^{注157} これ以外の通史で戦前における作品として著名なのが島田道弥の『満洲教育史』（1935、文教社）である。しかし槻木瑞生氏によると同書は引用図書として示されている『関東州教育史』（1932、黒崎氏篇・謄写版）の内容がほとんどであるという。「満洲国」教育史研究会編（1993）「満洲・満洲国」教育資料集成、第15巻、エムティ出版：東京、p.4.

^{注158} 同上書、全23巻。

^{注159} 以下の分類は野村章氏「解説」に拠った。同上書、第2巻、pp.3-4.

^{注160} 鈴木健一（1981）満洲国における教育政策の展開、中島敏先生古希記念論集 下巻、中島敏先生古希記念事業会、p.804-805。以後本書を参考するに当たっては原則として事実認識に関わる部分を採用した。

- ・各地方は中等程度の補習学校あるいは補習科を設けられる
- ・職業学校の起源及び程度は各地方の実状に応じて定める
- ・師範学校：修業年限6年
- ・大学校：修業年限4年乃至6年。医科大学校法科大学校は修業年限少なくとも5年
- ・師範大学校：修業年限4年

多賀秋五郎によるとその特色は、1. 清末以来の日本型・ドイツ型による中央集権的な脚絆から脱却して、アメリカ型による地方分権的方向へと転換し、教育権を大幅に省区・県・特別市にゆだねることとしていること、2. 教育の機会均等の原則にもとづいて、男女差別の撤廃・中等教育の開放・師範教育の充実・職業教育の重視・特殊教育の推進・民衆教育の普及など、近代化への方向を明確にしていること、3. 自己活動の原理・個性尊重の原理・自由主義の原理などを選科制をはじめ課程標準や教育方法に反映させようとしていること、などにあった。^{注161} 既存のこうした教育制度を考えると、満洲国政府としてはこうした教育思想を排除し改編することが課題となる。開国の年すなわち1932（大同元年）年3月25日、國務總理鄭孝胥は國務院訓令をもって「爾今学校教課には四書孝経を使用講述し、以て礼教を尊崇せしめ、凡そ党議に関する教科書の如きはこれを全廃す」という指示を各省あてに発して、従来上海製のものが多かった教科書の中から、排日的な字句を抹消させる措置を講じた。文教行政の始まりである。^{注162} 同年7月には教科書編審委員会官制、大同2年4月には教員の3ヶ月間の再教育を企図した教員講習所官制を発して、教育に大きな作用を及ぼす教科書と教員の刷新の面で応急対応を行っている。同年7月5日告示の「國務院各部官制」（教令第50号）に示された文教部^{注163}の管掌事項は、教育、宗教、礼俗、国民思想であり、教育（学校教育、学校衛生、学芸、教科書の編纂及び審査に関する事項）を学務司が、他の三つを礼教司が各担当するというもので、法組織上かなり整ったものといわれるが、^{注164} 民族の別、地域の差によって教育の程度に格差が甚だしく、辺境の地における教育の実態は全く不明のままであったため、^{注165} この暫定学制期の学制は未確立であった。

(2) 新学制期

新学制の検討は建国の年6ヶ月から開始しているが、満鉄などで教育に携わっていたいわゆる現地派の関係者と日本政府から出向した行政テクノクラートとの間で大きな意見の食い違いがあり、最終的に日本政府の構想を基本とする学制を確定するまでには大小五百余回の会議を重ねたといわれる。^{注166}

^{注161} 同上, p.805.

^{注162} 満洲国史編纂刊行会 (1970) 満洲国史 総論, 満蒙同胞援護会, p.582.

^{注163} 満洲国の部、司は日本の省、局に相当する。したがって文教部は日本の文部省に相当。なお、文教行政ははじめ民生部文教司で扱われたが、1932年7月に文教部として独立した。1937年7月に行政機構の改革に伴い民生部が新設されるとその他の教育関係部門とともに民生部に統合されるが、1943年4月には再び文教部となった。

^{注164} 前掲書, 鈴木健一 (1981) 満洲国における教育政策の展開, pp.806-808.

^{注165} 前掲書, 満洲国史 総論, p.583.

^{注166} 前掲, 野村章「解説」, 「満洲・満洲国」教育資料集成, 第2巻, p.3.

1937年5月2日、建国以来の懸案であった新学制が始まった。すなわち学事通則と国民学校令ほか9種の学校令、次いで同10月には国民学校規程ほか8種の学校規程が公布せられ、翌1938年1月1日より学校令および学校規程が施行された。また同年11月には日本の治外法権撤廃並びに満鉄付属地行政権委譲に伴い、日本内地人及び旧満鉄付属地朝鮮人教育を除く教育機関はすべて満洲国に委譲された。^{注167} それは以下のような内容を持つものであった。

< 新学制「学校令」における学校と修業年限の概要 > ^{注168}

- ・初等教育：国民学校、4年、国民優級学校、2年
- ・中等教育：男女別国民高等学校、4年
- ・高等教育：大学、3年乃至4年
- ・以上と並行して、中等教育の師道学校（国民高等学校3年修了後2年）と女子国民高等学校師道科（国民高等学校卒業後1年）と職業学校2年乃至3年があり、高等教育に師道高等学校（国民高等学校卒業後3年、のちの師道大学）があった。
- ・初等教育については上記のほか、従来から民間にあった寺子屋式の私塾を国民学校3年程度までの国民義塾として認め、そのうちの設備の比較的整っているものを公立として国民学舎と称した。^{注169}

・暫定学制期の中等教育は初級中学校は県単位に高級中学校はそれらの地域的中心に配置され、いずれも文理科系統が大部分を占めた。設置主体は省立、県旗立、私立の別があったが1934年に一律に省立に移管され人件費を国庫で負担するに至り面目を一新した。新学制では設置と廃止に関し国が統制することになり全国的に広範囲にわたる改廃が行われた。

その教育方針は、建国精神の顕揚、特にその内容が的確に説示されている回鑒訓民詔書をもって徳育の根本としたこと、知育としては実生活に即した知識技能の修得を第一義としたこと、体育の奨励をによって体力の増強、生産力増強を図ったことの三つがあげられる。^{注170}

『満洲国史』総論の筆者は目的実現に留意された12点を挙げている。主なものは、1.国民精神の高揚実現を図る、2.労作教育を通じ、勤労の精神を涵養する、3.予備教育的なものを廃し、各段階における完成教育とする、4.実業教育を重視する、5.体育と衛生の両方を増進し、明朗なる国民をつくる、7.中等程度以上の学校は、社会の需給を考慮して統制を加え、学問遊民の輩出を防ぐ、などである。建国大学の教育への影響という観点で見ると、1.2.5.は建大教育に取り込まれた。3.の予備教育の廃止は、建大だけが前期3年間の予備教育を設けられており逆にその特異性を示している。

また『満洲国史』各論の筆者は主な特色として次の4点挙げている。^{注171} 1.実業科目を中等教育のすべてに強力に取り入れたこと。それは「文字を学問とし労働を低劣下等なりとする

^{注167} 前掲書、満洲国史 各論, pp.1084-1085.

^{注168} 同上資料よりまとめた。 p.1085.

^{注169} 以上は新学制の記述であるが、学校教育の変遷の記述には、「初級小学校単級のものは、主として公立は国民学舎、私立は国民義塾に改編し、設置主体は市県旗に移管されたが、師範学校付属小学校は廃止となった」とあり、様々なケースのあったこと、執筆者により認識の違いがある可能性などを窺わせる。同上, p.1086.

^{注170} 前掲書、満洲国史 総論, p.584.

^{注171} 前掲書、満洲国史 各論, p.1085.

中国古来の陋習を根本から是正する大胆な教育方針であった」。2.教育の国家管理。満洲国では教育を国家本来の責務なりと考え、初等教育では最終的には義務教育制、全国民入学を目標とし、中等教育以上にあつては実社会の需給関係を見合つて教育量を決定することとした。3.学制要項では「教師の素質改善と実力向上とに力を用い、設備その他の物的要素を第二義とす」とされたように、教師の養成訓練とその地位の向上に力を注いだ。4.「一徳一心の関係から」日本語を満語とともに国語とした。以上4点であるが、2.の中等教育に関しては『満洲国史』各論の中等教育に関する別項の解説^{注172}で補わねばならない。「国民高等学校の学科目は、普通科のほかに多くの実業科を課し、前半においては毎週授業時数の四分の一であるが、後半は約二分の一を課し、かつ全学を通じて農繁期には全日実習を課することを本則とした。その内容は、農、工、商、水産、商船の五科で、各校はその一を選ぶこととした」。なお、旧制度で初級、高級あわせて6年の修業年限は2年短縮されている。

以上4点の内、1.は建国大学において日本人学生が中国人学生に不満を覚えた点で、両者の対立の要素となって顕在化する。2.の中等教育関連で実業、実習を重視する姿勢は、建国大学の農事訓練と同一線上の思想といえよう。3.は建国大学の校舎、設備の相対的な貧弱さを考える際の背景的思想であった。なお、4.を評価して野村章は、「この学制では日中両語の複国語制、日本天皇制に従属する帝制を最高原理とする教育体制など、のちに構想される『大東亜教育』の原点のひとつともいふべき特徴をもつものであった」^{注173}と記している。

(3) 新学制後期

新学制後期は、1943年4月に民生部から教育司を文教部として再び分離独立させた前後から1945年8月の満洲国崩壊までをいう。1941年12月に大東亜戦争が開戦され、続いて翌1942年に建国十周年を迎えた満洲国は、国民精神を統一して日満一体の強化、国内体制の整備等、戦時即応の諸政策を強力に実施することとした。文教部の新設は、「惟神の道をもって国本とし、これに政教の基をおく新教育方針にのっとり、次代国民を育成せんがため」^{注174}に行われたという。1943年10月には文教審議会（会長国務総理大臣）官制を制定公布し、翌1944年10月、「我国教育の本義に関する事項」と「決戦下における文教新興の具体的方策に関する事項」の二点につき答申を行った。前者については満洲国の教育が「惟神の道にのつとることをもって大本となすこと」を明示した。このことは1940年7月の国本奠定詔書の渙発により明らかにされてきたことではあったが、この本義を学校教育で具体化するのには困難で、これまで教科書の作成が考えられながらも実現にいたっていなかった。^{注175} 建国大学はこうした課題を解決することが期待されていたのである。

2. 満洲国における高等教育

政府は建国と同時に旧政権時代の高等教育機関の大半を閉鎖し、翌1933年の私立学校規程

^{注172} 同上, p.1088.

^{注173} 前掲, 野村章「解説」, 「満洲・満洲国」教育資料集成, 第2巻, pp.3-4.

^{注174} 前掲書, 満洲国史 各論, p.1097.

^{注175} 遂に日本の敗戦、満洲国の崩壊まで実現しなかった。

の公布とともに、奉天医科専門学校、哈爾濱医学専門学校、聖ウラジミール専門学校の設立を許可した。国立として第一に高等教育施設は、1936年4月に奉天に創設した高等農業学校が最初である。翌1937年4月には哈爾濱俄僑学院が認可され、同年5月には私立哈爾濱高等工業学校を改組して国立とし、吉林国立医院付属医学校を改組して新京医学校とした。また12月には私立奉天薬剤師養成所を認可した。

1938年1月、新学制の施行に伴う大学令に基づき、前記の専門学校はそれぞれ国立大学に改編された。1939年には国立新京法政大学が開校し、その後も創設が続いた結果、新学制に基づく大学は12校（建国大学及び師道大学を除く）、大学に準ずる特別教育施設は5校となった。一方私立大学についても、哈爾濱医学専門学校は哈爾濱医科大学に改編した。ロシア人高等教育については1938年に聖ウラジミール専門学校を廃止し、俄僑学院に新たに工業部を増設して満洲国北満学院と改称し、大学に類する特別教育施設に改組した。

大学の入学資格は国民高等学校卒業またはこれと同程度とし、修業年限は3 4年、国家に須要なる學術の理論及び實際を修得させ、中堅国民の指導者を養成することを眼目とした。全寮制度を建前とし、これによって心身の鍛練と民族協和の實踐を体得させることとした。^{注176}

「また高等教育は、国家に必要な人材を養成する建前から、国立大学の授業料は師道学校と同様、これを免除した」。^{注177}

では、満洲国の中等教育以上の学校にはどのようなものがあつたのか。1939年頃の概要は、民生部が作成の康德6年度「中等程度以上各種教育施設設置表」^{注178}から知ることが出来る。同表から本部（民生部）直轄校である高等教育機関と私立大学の概要を示すと表1-2の通りである。^{注179}

（参照 表2-1：高等教育機関と私立大学の概要＜1939年度＞）

なお、この他中等教育及び私立学校などの教育施設は以下のようであつた。

<省、特別市所管>

(1) 師道学校 15校 (2) 国民高等学校 94校 (3) 女子国民高等学校 26校 (4) (男子) 職業学校 42校 (5) (女子) 職業学校 24校

<市・県旗所管（職業学校及之二類スル特別教育施設） 18校>

<私立学校及特別教育施設>

(1) 私立大学並二之二類スル特別教育施設及大学特修科二類スル特別教育施設 上記の7校
(2) 私立国民高等学校 19校 (3) 私立女子国民高等学校 9校 (4) 私立男子職業学校 5校

^{注176} 本項の以上の記述は右に拠つた。前掲書，満洲国史 各論，pp.1089-1090.

^{注177} 前掲書，満洲国史 各論，p.1085.

^{注178} 前掲書，「満洲・満洲国」教育資料集成，第8巻，pp.597--641.

^{注179} この年度段階では未だ満洲帝国内には入っていないが、満洲にはこの他に南満洲鉄道株式会社（1906年設立）、略称「満鉄」が設立した満洲医科大学（1911年に南満医学堂として開設し1922年に昇格）と旅順工科大学（旅順工科学堂）があつた。学生の大部分は日本人であつた。なお、満鉄が1917年に設立した唯一の中国人普通中等教育機関である南満中学堂は、当初は南満医学堂の予科として構想されていた。1938年には組織変更がなされ国民高等学校南満中学堂となり、普通教育から商業教育に学校の性格を変えて満洲国の学校体系の中に位置づけられた。建国大学にも多くの生徒が入学した。

(5) 私立女子職業学校 4校 (6) 私立特別教育施設 19校

『満洲国史』各論(p.1090.)に1942年4月末現在の「高等教育一覧表」が掲載されている。これを見るとその後6つの国立大学、1つの私立大学、4つの教育施設が設置されたことがわかるが、いずれにしても新京法政大学を除くと実業教育にかかわる大学がすべてであった。新学制におけるこの方向は中等教育と連動しており、大学令によって設置された諸大学の満洲国で期待された任務を理解することが出来よう。建国大学がわざわざ建国大学令という特別法によって設置されたということから、これらの大学から制度的に切り離された特殊な役割を与えられていたことが理解されるが、上に見てきたように他方で満洲国の高等教育の方向性との連続性も見られたのである。

3. 満洲国と体育

(1) 学校体育

笹島恒輔は中国体育史・スポーツ史の研究を行ない、1961年までに『中国体育史』(1960)、^{注180}『近代中国体育スポーツ史』(1966)、^{注181}『中国の体育・スポーツ史』(1987)^{注182}などの先駆的な業績を出している。しかしいずれの書も教科書的あるいは概論的な内容で、巻末に参考文献リストはあるものの、記述に対する参考資料の対応関係が明らかになるような引用文献番号が付されていない。出版事情からくるものであろうが実証性に欠けた点は残念である。満洲国に関する記述は1966年書にあるが、記述量は少ない。1987年書では満洲国時代の区分がなくなっている。ここでは学制による時期の区分に従って、1966年書を整理しておく。

暫定学制期の体育は、^{注183}、「社会教育十大綱領」にある「各学校、満洲帝国体育協会を通じて体育向上を図ると共に、衛生思想を涵養し、各種体育施設を充実する」とあることから、この線に沿って行われたが、「学校の施設も十分に復旧しておらず、適格教員が不足していたので学校体育も十分には行われなかった」と推測している。

新学制期の学校体育は、「学校教育要綱」(13項)の5項に、「体育に関しては、其の精神的意義をも了得せしむると共に、衛生方面と相俟って国民健康の保護増進に努める」とあり、これに沿って行われたと思われる。新学制の公布は1937年、実施は1938年であったが、各教科の課程標準は公布されないうちに満洲国は滅びた。しかし、日本との特殊関係から日本の教科課程の影響を大きく受けており、日本の授業時数に非常に似ていたという。なお、体育教員の養成機関としては師道大学(吉林省延吉)に体育科が設けられていた。^{注184}

^{注180} 笹島恒輔(1960)中国体育史, 逍遥書院.

^{注181} 笹島恒輔(1966)近代中国体育スポーツ史.

^{注182} 笹島恒輔(1987)中国の体育・スポーツ史, 大修館書店.

^{注183} 笹島恒輔氏は、満洲国の学校体育について旧学制期と新学制期に分けているが、いうまでもなく前者は上述の暫定学制期、後者は新学制期と新学制後期をまとめた分類である。前掲書, 笹島恒輔(1966)近代中国体育スポーツ史, pp.188-189.

^{注184} 同上, pp.189-190.

(2) 社会体育

満洲国建国前、満洲の体育的活動は関東州庁及び満鉄の手によって育成され、関東州内及び満鉄付属地を中心に行われた。

「学校体育においては、満鉄の岡部平太、齋藤兼吉が先進国の体育界を視察し、デンマークのニールスブックを満洲に招聘したことが機縁となり、満鉄では満洲の気候にマッチした独自の学校体育要目を制定、小・中等学校を通じ、全学校に体育館を完備し、全校庭にスケート場を整備し、専任学校医を地区ごとに常置」した。よって「日本内地に比べはるかに優位を示した」という。また、「社会体育面においては、満洲体育協会が中心となり、高野茂義範士、鯨岡喬7段を中心とする武道の普及」が行われ、「大連満倶、大連実業等の野球界、彗星のマークをもつ陸上競技団、終始日本をリードしたスピードスケート、アイスホッケーなど」が活躍した。また関東州30周年記念行事として日仏対抗競技大会が開催された。

注185

満洲国の体育活動は建国とともに始まる。その象徴は、1932年4月の国際連盟派遣のリットン調査団の視察日程に合わせて建国記念運動会が計画され、その主催者として体育を所管する文教司（社会教育科）内に体育運動関係統制機関として満洲国体育協会が生まれ、全満30余カ所で挙行されたことに見ることが出来る。調査団の使命は満洲国の正統性を調査すること等^{注186}にあり、関東軍と満洲国政府としてはこの運動会を通して満洲国統合のスローガン「民族協和」の姿を見せつけ、正統性をアピールすることを追求したものである。調査団の結論は満洲国の存在を否定するものであったが、この運動会自体は年々隆盛に赴き、1941年の第十回大会には開催地370余カ所、参加人員200万人を突破するに至った^{注187}という。

政府が1932年8月に体育振興方策を決定した。主な内容には各省、各市県旗に体育股（係）を置き、体育協会を組織すること、体育の普及により質実剛健の気風を養成すること、運動競技を一部の学生等に偏せず進んで一般国民に親しませ特に次代国民の母たるべき女子の健康を増進するなどが含まれていた。これに対応して講じられた施策が、各地方の体育施設、学校体育状況の実態調査、1932年9月に実施された満洲国体育大会、新京南嶺の国立総合運動場の建設、補助金を交付して全満の市県旗単位に公立体育場の建設を奨励し、1941年までに85カ所を新設したこと、1935年7月の国民体操の制定（翌年以降建国体操日も制定）、1935年9月の体育週間を設定などであった。^{注188} 建国大学で行われた建国体操や武道週間との関係は時間的前後関係だけで云々できないが、実施の背景にこれらの施策が先行していたことは確認しておかなくてはならない。

1937年7月、行政機構の改革に続いて、同年12月に満鉄付属地行政権の移譲により、従来

^{注185} 前掲書、満洲国史 各論、p.1185.

^{注186} 調査のポイントは、日本の軍事行動は日本の主張のように自衛のためであったのかと、満洲国は住民の自発的意志によるものであったのかどうかの2点に絞られていたという。ハインリッヒ・シュネー著・金森誠也訳（1988）「満洲国」見聞記-リットン調査団同行記、新人物往来記、はじめに（頁数未記載）。

^{注187} 前掲書、満洲国史 各論、p.1186.

^{注188} 同上。

系統を異にした日本側の関係者も満洲国側に参加し満洲国の体育は一体となって向上発展を期される態勢ができた。しかし日中戦争の勃発は、各種産業部門における生産力増強を要請することとなった。国民の体位向上や健康増進の問題も、国防上とそのための生産能率の向上に強く方向づけられて体育の指導が行われるようになった。たとえば、1938年1月14日、暫行学校体育教授要目改正、1941年、国民体力証検定制度及び産業体操の制定、体力検査の実施などである。^{注189}

日中戦争の拡大と戦争の長期化は、体育の重点を「国民錬成におき、団体訓練や武技の錬磨が盛んに奨励された」。たとえば、1940年に国兵法が実施されると学校に新たに教練が加えられたり、^{注190} 満洲体育連盟に対して関東軍から銃剣術の錬成について指示がなされた。後者について『満洲国史』各論の本稿執筆者は、「これに対し連盟は理事会で協議の結果、『銃剣術はスポーツにあらず』との理由でこれを拒否した。当時日・独・米各国でもスポーツを軍事に利用する傾向にあった際、連盟が、スポーツの中立性を守って、政治、軍事両面からのゆがみを防止したことは特筆すべきことであった」^{注191}と自賛している。上述のようにスポーツ全体が国防という政治と軍事の反面のために利用されていたことを考えると、強調した内容をもって政治・軍事の両面から自立性を保ったとするのは錯誤といえよう。

体育に関する政府の補助機関としては、大満洲帝国体育連盟（満洲国体育協会の後身）、満洲帝国武道会、満洲体育保健協会の3機関が設立された。（財）満洲体育保健協会は政府、満鉄の共同出資で1938年4月に設立されたもので、新京以下8都市に総合体育館の建設が目指された。帝国武道会を後述するとして、国内外の体育活動に取り組んだ大満洲帝国体育連盟の前身を見ておきたい。^{注192}

満洲国体育協会は1932年4月の建国記念第1回運動会開催を機会に誕生し、全国に8支部を設けて、国内の運動競技団体の統制にあたった。また、毎年建国記念運動会のほか、政府で企画した満洲国国民体育大会の運営に当たった。1934年6月に満洲国帝制実施慶祝大運動会が挙行されたのを契機に、7月、同協会は大満洲帝国体育連盟と改称された。1937年12月、同連盟は大日本体育協会との間に運動競技者を統制する協定を結んでいる。1939年、同連盟は国際陸上競技連盟へ加盟申請すると、副会長ブランデーの斡旋によって同年末に仮加盟が認められた。

協会と連盟が関わった国際的活動について暦年順で整理すると以下の通りである。

- ・1932年5月：関東軍の慫慂もあって第十回オリンピック・ロサンゼルス大会に参加する運動を行ったが、IOCの全面的承認を得られなかった
- ・1933年7月：全日本女子オリンピック大会の招請を受けて女子陸上及び排球選手40余名を日本に派遣。海外派遣の最初であった
- ・1934年6月：秩父宮殿下奉迎大運動会開催（於新京）

^{注189} 同上書, pp.1186-1187.

^{注190} 国兵法は兵役のみならず国民勤労の公役を含む国民総服役制度として1940年4月に公布された。同上書, p.260.

^{注191} 同上,

^{注192} 同上, pp.1187-1189.

- ・1933-1934年：1934年実施の第十回極東選手権競技会^{注193}に参加すべく運動を開始したが失敗（これにより極東選手権競技会は解消され、東洋体育協会が発足）
- ・1939年2-3月：日滿華交歓競技大会（於新京、奉天）
- ・1940年6月：東亜競技大会（於東京、大阪）。満洲、日本、中華民国、フィリピン、ハワイ等参加。満洲国は十種目総勢215人の選手団を派遣
- ・同年 10月：第十回明治神宮国民体育大会に参加
- ・1943年8月：第2回東亜競技大会（於新京、奉天）。新京では競技種目13。翌1944年2月、奉天でスケート、通化ではスキー実施。満洲国における国際競技大会はこれが最後となった

4．満洲帝国武道会

満洲帝国武道会の歴史は、若干の曖昧な箇所を含みながらも、「満洲帝国武道沿革」にその概要が記されている。それによると、「本会八大同元年満洲帝国建国ト共ニ設立セラレタル満洲国柔道会、満洲国剣道部ヲ以テ本会発足ノ母体トナス」^{注194}とあるように、愛好者の同好会が武道会の前身であった。二年後の1934（康徳元）年3月、帝制実施を記念した御大典記念全満武道大会が開催され、「天覧ヲ奉迎シタル機会ヲ以テ本会ノ機構ヲ拡充整備ト国内唯一ノ武道指導団体タル実ヲ備ヘ其ノ名称ヲ帝国武道会ト改名」されたという。この史料によると、改名というのであるから「満洲国柔道会、満洲国剣道部」を統合した武道団体が既に創られていたのかもしれないが、あるいは「満洲国柔道会、満洲国剣道部」を合わせ指すのかもしれない。

「満洲帝国武道会規程」第一章総則によると、

- ・第三條 本会は武道の修行者を以て組織す
- ・第四條 本会は柔道、剣道、弓道、銃剣道、角力及各種武道の六部を置く
- ・第五條 本会は武道修行者の精進を表示する為称号、段位及級位を設く
- ・第六條 本会の事務所は民生部内に置く

とある。対象を六つの武道としたのは、その歴史、伝統、普及、必要性、将来性などから選ばれたものと思われる。すなわち、古来からの弓道、剣道に近代に重視されるようになった柔道、遊びの要素の強い相撲を武道化した精神性を付与した角力、戦争の時代の要請であった銃剣道、そして伝統面、普及面あるいはそのいずれかの面では未だ十分でないが台頭しつつある唐手や合気武道など新興武道を各種武道として位置づけたものであった。事務所が民生部内に置かれたのは、武道会が官製の組織としてなにかの政治性を帯びて組織されたことを意味している。第七條には、「本会は武道の指導統制を行ひその健実なる普及発達を図るを以て目的とす」とあり、「指導統制」と「健実なる普及発達」が目的であること

^{注193} 極東選手権競技会は、1910年にE.S.ブラウンが提唱。大会は1913年より第8回までは2年おきに、第9回は3年目、第10回は4年目に開催された。満洲国の参加問題からこじれて中止となった。前掲書、笹島恒輔（1960）中国体育史，pp.145-146。

^{注194} 満洲帝国武道会要綱，p.4. なお「大同元年満洲帝国建国」は「大同元年満洲国建国」の誤りである。

がわかるが、「健実なる」なる武道が何であるかは不明である。武道に対する観念は指導者によって異なるものがあることから玉虫色の文言になったことがわかる。ともかくそうした武道が満洲全国に行き渡ってもそれらを「統制」することが本会の目的の特色であった。武道会のそうした政治性は、会の構成メンバーが次のように設定されていたことに表れている。第三章役員によると、名誉会長1名、名誉顧問若干名、会長1名、副会長1名、顧問若干名、参与若干名、理事長1名、理事若干名、常務理事若干名、主事1名であるが、名誉会長に國務總理大臣、名誉顧問に大日本武徳会長、大日本皇武会長、大日本弓道連盟会長、講道館及全日本学生剣道連盟会長、会長に民生部大臣、副会長に民生部次長が当てられることが記されている。また全国に武道会の組織網が作られ、第六章によると、各省に省本部（新京特別市本部を含む）が、主要地には支部が置かれた。

しかしここには沢山の日本人が居住した満鉄付属地が入っていない。『満洲国史』各論の執筆者は、その行政権移譲が行われた1937年12月以降、「満鉄付属地内の武道関係者も参加したので、武道会は名実とともに全満武道の統一組織として強化されるに至った」と評価している。^{注195}

1938年9月19日の全満都市対抗角力大会を契機に従来の相撲連盟は解消され、新たに満洲角力会が結成された。同年11月には満洲帝国武道会に合流し、その角力部として新発足した。満洲の角力会には興行相撲はなく、武道の一つ「角力」として奨励された。また蒙古系民族には従前から伝わる独特の蒙古相撲が奨励されたという。^{注196}

武道会の建大支部ができたのは1940年3月13日（水）のことである。一期生長野直臣塾生日誌に次のようにある。^{注197}

- ・（2月29日・木）「富木先生から武道会創立の趣旨案を提出さる。」
- ・（3月13日・水）「寒稽古納会武道大会。建国大学武道会発会式」

1940年11月23日、前述のように新京牡丹公園に中央武道場たる神武殿が建設されるが、武道会の建設したものであった。同年8月11日の日満交歓武道大会はここで行われ斯道奨励のため皇帝が臨場している。

^{注195} 前掲書、満洲国史 各論、p.1188.

^{注196} 同上、p.1188. なお本書には「相撲は日系だけでなく、建国大学その他の学校では、柔剣道とともに正課の一つとして各民族の学生生徒にまで普及された」というが、建国大学以下の実態は明らかではない。建大においても後述のように5月などに一時的に実施されたのが実態であった。

^{注197} 前掲書、建国大学年表、p.206、p.207.

第3章 建国大学の教育--思想と制度

1. 建国大学創設の構想と現実

本章では、建国大学創立の発案者であったといわれる関東軍参謀であった石原莞爾の「アジア大学」創設の構想と、実際に設立された建大との関係をできるだけ明確に捉え、建大の性格とそこで行なわれた教育の特質との関わり、および、石原と武道教育との関係を明らかにする。具体的には、日本の満蒙認識と石原莞爾の立場、石原の新大学構想、建大創立の過程、副総長・作田荘一の運営した建国大学の実際、及び建国大学の特徴（平等と自由）について考察する。^{注198} それは同時に、作田荘一を中心とする建大の実態を明らかにすることとなり、後になされる武道教育についての包括的詳細な考察のより関連性の深い背景を明らかにすることになる。

(1) 日本の満蒙認識と石原莞爾

「満蒙」とは戦前の日本で満洲と呼ばれた中国東北地方と東部内モンゴル地方とを合わせた地域を指し、今日では歴史的呼称となっている。この広大な地域に関東軍参謀の板垣征四郎や石原莞爾らの主導で満洲国が建設され建大が創られたのであるが、当然石原はアジア大学を満洲国に対する彼の理想との関連で考えていた。鈴木隆史によれば、^{注199} 日本は日露戦争後に満蒙の勢力範囲化をめざす「国策の基本」を確立したとされるが、このような状況と石原が満蒙に対してどのような認識を持っていたかを知ることは、建大の基本的な性格を理解する上で欠くことのできない課題といえる。

満洲事変の首謀者といわれる石原莞爾(1889-1949)は、「天才的頭脳」(横山臣平)の持ち主として、特に同事変以後、名声が高かった。しかし東条英機らとの対立から、支那事変(日中戦争)以後その優れた軍人としての能力を発揮することなく、太平洋戦争前の1941年3月に待命、予備役編入となったこと等から、しばしば彼は「悲劇の将軍」といわれる。石原についての伝記類によって彼の人柄を見ておきたい。^{注200}

山形県鶴岡市に生まれた石原は、幼少の頃は、「気位が高い、”荒らけわし”(わんぱく者)であり、小学校時代から陸軍幼年学校(地方、中央)、陸軍士官学校(21期)、陸軍大学校時代を通して優秀な成績であった。幼年学校から同期生の横山臣平の『秘録石原莞爾』によれば、「すばらしい頭脳は天才的で、学識は抜群、その上研究心が旺盛で、軍事学

^{注198} 本章は以下の拙稿を加筆修正したものである。志々田文明(1993)建国大学の教育と石原莞爾, 早稲田大学人間科学研究: 6(1): 109-123.

^{注199} 鈴木隆史(1979)『満洲国』論, 体系・日本現代史2-15年戦争と東アジア, 日本評論社, p.145.

^{注200} 石原莞爾の伝記は多い。本稿執筆にあたっては主に藤本治毅(1964)石原莞爾, 時事通信社., 横山臣平(1971)秘録石原莞爾, 芙蓉書房., 青江舜二郎(1973)石原莞爾, 読売新聞社., 三品隆以(1984)我觀石原莞爾, 三品隆以著作刊行会(植田弘が編集)., 佐治芳彦(1989)石原莞爾(上下巻), 日本文芸社., 及び近年刊行された石原批判の書、佐竹信(2000)黄砂の楽土-石原莞爾と日本人が見た夢, 朝日新聞社. を参考にした。他にも山口重次(1952)悲劇の将軍石原莞爾, 世界社., 今岡豊(1981)石原莞爾の悲劇, 芙蓉書房など多数の伝記がある。

は勿論のこと、歴史、政治、外交、哲学などにも精通していた」^{注201} とい
う。しかし反面、言行は無遠慮で、「相手の気を悪くするようなことを、誰の前でもズケズ
ケ平気で口外するなど傍若無人の振る舞いは、相手の感情を害し、その憎悪感を刺激させる
ものが少なくなかった」^{注202}。道徳的な面については「不正行為、なかんずく私利私欲のため
職権を利用したり、派閥的な結党などに対しては極めてきびしく、かつ反抗的であ」^{注203} り、
「その生活信条は一生を通じて簡素の二字に徹し、清貧に甘んじ、酒も煙草も口にせず」、
「国民の税金は一文たりとも私用を許さないとして、公金により客をもてなすことを最も嫌
い、官費の宴会にも出席しなかった」^{注204} という。1919（30歳）には、在家仏教で日蓮主義
の指導者として活躍していた田中智学の主宰する国柱会の会員となり、その信仰は終生に及
んでいる。

満洲国建国の直接的契機となった満洲事変は、関東軍参謀の石原らを中心とした関東軍が
周到に準備した満蒙領有計画に基づいて開始された。石原の満蒙に対する認識を見るために
は日露戦争にまで遡らなくてはならない。ポ - ツマス講和条約と日清条約・付属協定によっ
て旅順・大連地区（関東州）租借地と長春・旅順間鉄道をはじめ南満洲における利権を獲得
した日本は、翌年、国策会社として南満洲鉄道株式会社を設立し、南満洲の植民地経営を開
始した。陸軍は当初から満洲の独占を要求し排他的な軍政を推進し、国際協調に腐心する政
府と対立することもあったが、1908年に第二次桂内閣が決定した対外政策方針において、満
洲を日本の「一種特別の地域」とする陸軍の主張が国策として認められ、これ以後このよう
な「満蒙特殊地域論」は日本の大陸政策における一貫した主張として定着した。他方、満蒙
を中国から分離し日本の支配下におくという「満蒙分離論」の主張も1912年頃から顕在化
し、第一次大戦の勃発を契機に一層強められていった。しかし第一次大戦終了後、日本の満
蒙政策は、中国における日本の侵略に反対する民族運動の高揚と西欧列強が日本の満蒙にお
ける特殊利益の要求に重圧を加えはじめたことによって困難を迎えた。ワシントン会議
（1921-1922）で成立した九ヶ国条約では、中国の領土的及び行政的保全の尊重と門戸開
放・機会均等の原則を定め、日本の満蒙地方を特殊地域とする主張は否認された。1924年
には幣原喜重郎が加藤高明の護憲三派内閣の外相に就任し、国際協調主義のいわゆる幣原外交
を展開したが、1926年に蒋介石の組織した国民革命軍が北伐（北方軍閥討伐を目指す統一戦
争）を開始し、その勢力が華北から東北地方に波及しはじめると、幣原外交に対する国内の
非難が高まり、対中国強硬論が優勢になった。そうした状況の中、1927年に田中義一政友会
内閣は、外務省、在外公館、陸海軍、大蔵省等の中国問題担当官を集めて「東方会議」を召
集し、閉会の際に「対支政策綱領」を発表した。そこにも満蒙分離の意図が示されていた
が、関東軍司令部ではこの東方会議直前には、「関東軍が熱河特別区域を含む東三省に一長
官を置いて自治を宣布させる」というそれ以上に強硬な満蒙分離論が「対満蒙政策二関スル
意見」として策定されていた。そうした中で1928年6月の張作霖爆殺事件が起こされたが、

^{注201} 前掲書、横山臣平(1971)秘録石原莞爾、芙蓉書房、p.61.

^{注202} 同上、p.63.

^{注203} 同上.

^{注204} 同上、p.64.

これは後継者の張学良を国民政府側に追いやることとなり、中国の排日運動も激化していった。

1928年10月、関東軍に参謀として赴任した石原莞爾中佐は、翌年、「北満現地戦術」を研究するための参謀旅行を計画、7月に実施された。そこで彼は参加した高級参謀板垣征四郎大佐らに篋底に秘めていた世界統合のための最終戦争構想（「戦争史大観」^{注205}）と、内外の政情に対するその適用と考えられる満蒙領有計画（「国運転回ノ根本国策タル満蒙問題解決案」と「関東軍満蒙領有計画」）を示し、その周到さに一同を驚倒させたといわれる。満蒙以外の中国領土については、中国を七つの地域に分割して各地域に総督を置くという清朝の支那統治の方式に似た考えも示していた。この時点での石原は、満蒙の領有をもって満蒙問題解決の最適選択と考えており、それは1931年9月18日の満洲事変にまで及んだ。「関東軍満蒙領有計画」^{注206}において石原は、満蒙領有後の満蒙統治の方針として、「最モ簡明ナル軍政ヲ布キ確實ニ治安ヲ維持スル以外努メテ干涉ヲ避ケ日鮮支三民族ノ自由競争ニヨル発達ヲ期ス」と異民族に対し寛大な考えを見せているが、続いて「其結果日本人ハ大規模ノ企業及知能ヲ用フル事業ニ鮮人ハ水田ノ開拓ニ支那人ハ小商業労働ニ各々其能力ヲ發揮シ共存共栄ノ実ヲ挙クヘシ」と記し、^{注207} 鈴木隆史が指摘するように、「日本の統治下に中国人・朝鮮人を植民地労働力として位置づけた植民地支配の構想にほかならな」^{注208} いことを露呈していた。

石原ら関東軍参謀部はこうした考えをもって満洲事変を起こしたのであるが、事変発生五日後の22日にはその満蒙領有案を放棄し、独立国家案に転向した。1931年度の参謀本部の「情勢判断」のなかでは、満蒙問題解決策として、a. 国民政府宗主権の親日政権樹立案、b. 独立国家建設案、c. 満蒙占領案、の三段階の方針が示されており、いずれを採るかは未定であった。しかし、参謀本部の大部分はaの主張者であったものの、陸軍大臣と参謀総長がそれにすら反対で、事変をたんなる偶発事件として処理することを主張していた。^{注209} そのため石原らは、「万コクノ涙ヲ吞テ満蒙独立国家案ニ後退シ最後ノ陣地トナシタルモノナルモ好機再ヒ来リテ遂ニ満蒙領土論ノ実現スル日アルヘキヲ期スルモノナリ」と彼が註記する「満蒙

^{注205} 角田順編(1967)石原莞爾資料・国防論策, 原書房, pp.35-39. この「大観」において石原は、戦争指導要領、会戦指揮方法の変化、戦闘方法の進歩を歴史的に考察し、次に起こる戦争は日米を中心とする人類最後の大戦争になるとし、その時期を、日本が東洋文明の中心たる位置、米国が西洋文明の中心たる位置をそれぞれ占め、飛行機が無着陸にて世界を一周しえることの三条件が達成される時とした。

^{注206} 同上, pp.42-45.

^{注207} 中国人の能力に対する石原のこのような懐疑的見方は、満洲事変が勃発する4ヵ月前の手記「満蒙問題私見」（1931年5月。「吾人ノ直感スル所ニヨレバ支那人ガ果タシテ近代国家ヲ造リ得ルヤ頗ル疑問ニシテ寧ロ我国ノ治安維持ノ下ニ漢民族ノ自然的発展ヲ期スルヲ彼等ノ為メ幸福ナルヲ確信スルモノナリ」とある）や、満洲国建国後の「満蒙〔経略〕ニ関スル私見」（1932年8月。「漢民族ハ優秀ナル民族ナリト雖自ラ近代国家ヲ造ル能ハサル欠陥アルモノト断セサルヲ得ス」とある）においても基本的には変わらなかつた。

^{注208} 前掲書, 鈴木隆史(1979)『満洲国』論, p.154. なお、日本の満蒙認識、関東軍の動向については鈴木論文及び島田利彦(1965)関東軍, 中公新書. を主に参考にした。

^{注209} 同上, 島田利彦(1965)関東軍, p.112.

問題解決策案」(22日)^{注210}を策定し、中央部に提示したのである。つまり石原らは妥協によってbに後退したのである。このような彼の考え方は、「新満蒙ノ建設ハ最高支配ヲ支那人ニ委シテハ遂ニ不可能ト称スベク出来上ツタモノ八閩モナク在来同様ノ弊害ニ悩マサルルニ至ルコトガ明デアル」と中国人への能力に不信感を抱いていた12月2日記の「満蒙問題ノ行方」^{注211}の頃までは維持されていたようである。

しかし、その後一ヵ月程で石原の新国家独立論の中身は大きく変わる。1932年1月11日、彼は朝日新聞社主催の座談会^{注212}で次のように発言している。「私個人としては(満洲)が独立国家となる以上、都督制とか何とかは、やるべきでないと思う。それは今までの日本は、暴戾なる支那軍閥のために付属地内に閉塞されていたのであるが、今度は日支両国が新しい満洲を造るのだから、日本人・支那人の区別はあるべきでない。従って付属地関東州も全部返納してしまって、関東長官も失業状態ですな。そして本当に一緒になってやるのでなければならぬ。日本の機関は最小限度に縮小し、できる新国家そのものに日本人も入り支那人も区別なく入って行くがよろしいと思う」。

1942年に石原自ら語った回想「満洲建国前夜の心境」^{注213}によると、彼の満蒙占領論からの転向の公開の席での最初の表明はこの座談会においてであった。転向の「第一の理由は、中国人の政治能力に対する従来への懐疑が再び中国人にも政治の能力ありとする見方への変わり方であった」、「更に満洲事変の最中に於ける満洲人の有力者である人々の日本軍に対する積極的な協力と軍閥打倒の激しい気持、そしてその気持からでた献身的な努力更に政治的な才幹の発揮を眼のあたり見て一層違って来たのである」という。もちろん軍人石原にとって満洲国は、あくまでも彼の世界最終戦争論のいう東西両文明の代表国たる日米両国間の決勝戦において、日本が勝ち残るための第一歩としての満蒙経略上必要な独立国なのであった。しかし、「満洲人の衷心からの要望である新国家の建設によって、先ず、満洲の地に日本人、中国人の提携の見本、民族協和に依る本当の王道楽土の建設の可能性を信じ」ての転向であった。こうした石原の考えは、本庄司令官以下関東軍の考えとして施政に実現されよう

^{注210} 前掲書、角田順編(1967)石原莞爾資料・国防論策、p.85.

^{注211} 同上、pp.88-89.

^{注212} 前掲書、佐治芳彦(1989)石原莞爾(下巻)、p.55.

^{注213} 前掲書、角田順編(1967)石原莞爾資料・国防論策、pp.90-91.

と努められ、1932年3月1日、満洲国は建国した。^{注214} 当時の彼の理想は、7月25日の「為磯谷大佐」にある満洲国統治の在り方の記述に窺える。^{注215} つまり、「目下二於テ八主権者八軍司令官」であるが、その後継者を養成しなくてはならない。「其後継者八専制君主タル溥儀」ではなく、「自由主義ニヨル民衆ノ代表立法議会」でもなく、「統制主義ニヨル民衆ノ代表機関タルノ政治的団体タル」べく設立された「満洲国協和会」である。そして協和会が順調に発展し三千万大衆の指示を得たならば、軍司令官は主権をこれに譲り、協和会が立案企画した最高政策を政府が実行するという構想であった。

石原のアジア大学構想はこの協和会との関係で構想されたものであった。しかし、石原の満洲国構想は、本庄関東軍司令官と石原を含む参謀部の主要参謀が交替により日本に帰され、関東軍首脳部がその陣容を改めた1932年8月以後は、大きく転換をすることになる。それは島田俊彦が「ことに昭和9（1934）年末の在満機構改革ののちは、いよいよ建国理想から遠ざかり『五族協和』『王道楽土』というスロ - ガンに寄せた満人の期待は、にべもなくふみにじられたのである」^{注216} と記すとおりであった。

(2) 石原莞爾の「アジア大学」構想

石原のアジア大学構想については、1966年10月の座談会^{注217}における満洲国総務庁人事科長だった木田清の次の発言によって知られる。

「いま三品さんがおっしゃったとおり、建大の話は突然でできたのではないのです。建国後いろいろあった石原さんの話という中に『アジア大学説』というのがありました」。その案は「まことに宏大なもので、何も満洲と限ったものでなく、アジアのすべての国、民族、朝鮮でも蒙古でも、ソ連でも、インドも加えて各民族の指導者たるべき青年を一堂に集めて切磋琢磨しようということだった」。

^{注214} こうした石原らの構想は満洲において一定の支持を得た。建国運動に参画した民間団体・満洲青年連盟の中心的人物山口重次は『満洲建国戦史』（山口重次(1986)満洲建国戦史, 大湊書房）で、建国当時の問題状況を次のように記している。「建国の初期においては関東軍の真意が一般に了解せられるに至らず、等しく権益主義侵略と誤解されておりましたが、逐次、各般の建設作業が進むに伴って、関東軍の革命援護の真意が民衆に了解されるに至りましたから、大勢は新国家建設の国民的希望となり、世論となって国内には旧勢力の残党、国民党の執拗なる反対運動があったにもかかわらず、五カ月の短時日のうちに満洲国の建設となったのであります。関東軍の満洲に日華提携の理想郷を現出するという新対満政策は、満洲在住の諸民族からは絶賛を以て迎えられましたが、権益主義を固持する日本政府および軍部からは異端者を以て目され、遂に関東軍幕僚が不覇を計るものとさえ疑惑の眼を以て見られ、前述した如き日本政府および軍部との衝突状態になったのであります」。「関東軍の事変処理が安全に着々と成功を収めてまいり、日本政府の態度も軟化してまいりました」。しかし、「活動する官吏や社員の頭脳は権益主義の旧套から一寸も脱し得ず、日本権益の拡大、日本人の優越確保をすべての基調にいたしますので、関東軍の方針と背馳し、内部に問題を惹起しました。こうした内部の問題は逐次、各機関、あるいは官僚層によって日本政府に報告されますので、新国家建設運動が進捗すればするほど、混乱を来してまいりました。関東軍の権益排除、独立援護の正義の理想は、権益主義に固まった俗吏の目にはあまりに不可解なものであったと見え、（中略）『関東軍の幕僚はマルクスボ - イだ』などの非難中傷が報告されました」（pp.247-248.）。

^{注215} 前掲書、角田順編(1967)石原莞爾資料・国防論策, pp.100-102.

^{注216} 島田利彦(1965)関東軍, p.117.

^{注217} 建国大学同窓会編(1967)建大史資料(第2号), p.4.

では、この案はどのようにして起こったのか。アジア大学の構想について、『建国大学年表』^{注218}には1937年2月初の項に、「独創的な新大学（当時アジア大学）創設の議、関東軍参謀長板垣征四郎のもとで起こる」（p.2）とゴシックで記してあり、公式にはこれに始まるというニュアンスが窺える。しかし当時建大創設に事務局の一員として関わった三品隆以は、『我觀石原莞爾』^{注219}において、「建国大学の発想は、建国についての基本的構想の中で特に協和会の理念とともに將軍の脳裏にひらめき、それが熟したものとみられる」といい、次の点を証左としている。「筆者（三品）が、東京で創立準備のお世話をしている頃、本庄將軍を中野の自宅に訪ねて、建大企画の経緯を報告かたがた教えを請うたところ、『それは、実に大事なことだ。石原君が、建国当時考えたことで、建国原理と、その道統という問題解決の鍵なのだ。君たち、関係者は、ぜひ石原君の意見をきく必要がある』と、言われたことを記憶している」。これによればアジア大学の発案は1931から1932年にあったとされるが、管見内では石原の資料の中にはこれに言及したものはみられない。

一方、1966年7月の座談会^{注220}によれば、創立の契機として大同学院の教務科長をしていた根本龍太郎が関東軍参謀の辻政信から聞いたとされる次の話も伝えられている。それは満洲事変後に本庄関東軍司令官が天皇に上奏した際、「普通ならば『ご苦労であった』という最初のお言葉があるはずのところ、『満洲国の人間は本当に喜んでおるかね』といわれた」。本庄は非常に大きな責任を感じ、板垣参謀長（1936年3月-1937年2月在職）がその意図を受けて動いている、ということで、根本は辻に「建国大学をつくる構想をもっているから、君もぜひ仲間入りをせい」と言われた、というのである。

さらに次のような話もある。満洲事変後（12月15日）関東軍統治部長として行政担当の責任者に任じられ、建国当初には日系官吏の最高位であった国務院総務長官をしていた駒井徳三の談^{注221}である。それによれば、彼自身が「建国と同時に大同学院というものを作り」院長を兼ね、建大についても満洲国の指導者階級となる人物を養成する教育案を軍司令官や参謀長他に意見具申したところ、賛意を表せられ、その立案を頼まれて、自分が「建国大学と云うものを立案した」という。駒井が、石原ら関東軍幕僚から信任が厚かったことを考えると、石原らの賛意を得て駒井の言う経緯で「建大」案を立案したという推理も成り立つ。そこで石原、板垣との間に新大学について色々な考えが議論され、それが石原の場合はアジア大学構想となり、「民族協和」を中核とする具体的構想となったとも考えられる。本庄が石原に聞けと言った発言からわかるように、本庄の感じた「責任」の取り方は石原や駒井によって煮詰められたのかもしれないが、駒井の立案について言及した資料は見られないのでこれ以上は触れない。

さて、三品は前述の1966年10月の座談会において、建大創設の推進者であった板垣参謀長にふれて具体化に至る動きを語っている。

「この石原さんの思想・構想と氣息相通じ、形影の如く、一心一体の同憂同志が現地関東

^{注218} 湯治万蔵編(1981)建国大学年表, 建国大学同窓会, 19

^{注219} 前掲書, 三品隆以刊行会編(1984)我觀石原莞爾, pp.124-125.

^{注220} 前掲書, 建国大学同窓会編(1966)建大史資料(創刊号), p.7.

^{注221} 対談「満洲建国の教育を語る」, 日本教育(4):38, 1942.

軍の板垣参謀長でした。板垣さんは二・二六の後から建大開学直前まで参謀長をしておられ、当時私は陸軍省にいたのですが、板垣さんは辻（政信）をつれて、または一人で上京されると必ず石原さんを訪ねて満洲国について相談されていた」。二人は「同志的間柄」にあり、「したがって建大の創設についても、いつ、どんな形で行なわれたかは別として、お二人の間では完全に一致していたものと思われる」。「これが現地では辻、中央における片倉満洲班長の線で実行された。これは、板垣 - 石原 - につながる一連の同志的人間関係でありました。このところは、建大創設の歴史的原点として、大変重要な問題だと考えます」。

注222

建国後まもなく考えたといわれる石原の新大学構想は、それが辻によって満洲国要人に説明されるときには早くも変容をしたと思われる。前記の木田清は語っている。

「そのうち11年（1936）だったと思うが東京から帰ってきた辻さんが『アジア大学を作ろう』ということで私たち（他に総務庁次長、人事処長）が集められた」。「そのとき『これは石原さんの案か』と聞いたところ『そうだ』といわれた記憶があります。ところがそれはヒントは石原さんに出たものに違いないが、内容はかなりかわったものになってしまった。それは石原さんが後に参謀副長としてお出になって、本当の構想を聞いたことがあるが、そのときに出来上がっていた建国大学設立要綱とは大分違っていただけからいえると思う。それで私たちは後で辻さんに『石原さんのお墨付きを船の中で読み違えてきたんだ』とひやかしたことがあるが、辻さんはヒントを石原さんから得たが、中身は自分で案を作って持ち帰ったと思われるわけです」。^{注223}

次に具体的な設立過程を見てみたい。

(3) 建国大学の創立過程

『建大史資料』第1、第2号によると、石原に始まったアジア大学構想が具体的に形となるのは、前述のように1936年秋から年末にかけてのある日、石原の意を受けた辻政信大尉（関東軍参謀付第三課）が東京から戻り、満洲国総務庁の幹部3人に「アジア大学を作ろう」と話したことから始まる。辻は同年暮れから立案に着手した。翌1937年2月初め、板垣参謀長が創設を発議するのに続いて、東上した辻は17日にアジア大学構想を陸軍省（軍務局満洲班長片倉衷、参謀三品隆以）、参謀本部（参謀多田督知、参謀岡田芳政）関係者に素案を示した。これを受けて片倉衷の指示で東京に創立事務所（幹事は松平紹光、三品隆以、多田督知、岡田芳政ら）がつくられた。辻の行動は素早く、同じく17日に東大教授平泉澄博士を訪問し、大学創設の相談を依頼した。平泉は創立委員として笈克彦、作田荘一、西晋一郎の三博士を推薦、まもなくこの四人が創立委員に委嘱され、彼らを中心に構想が練られていくことになる。平泉はこの時の推薦理由について次のように記している。^{注224}

「建大をつくる以上、日本の学風とは別個のものでなければならない。従来の日本の大学は、あまりに欧米の学問のなまかじりに過ぎている。それから離れて、アジアはアジア、と

注222 建国大学同窓会編(1967)建大史資料(第2号), p.3.

注223 同上, pp.3-4.

注224 前掲書, 建国大学同窓会編(1966)建大史資料(創刊号), pp.5-6.

くに日本独自の思想、学問というものが建てられて、世界の学問、文化に寄与するものとして新しいものが出てこなければならない。その意味で、仏教哲理を研究し、神ながらの道を研究しておられる筧克彦先生。経済学の面で「道」を考えておられる作田莊一先生。倫理学の上で西洋倫理とは違う東洋倫理を求め深遠な道を説かれる西晋一郎先生。この三人を中心に新しい学風を考えたらよいと思ったわけです。」

二月末頃の段階での創立準備関係者には、東条、片倉、辻、満洲国総務庁長官星野直樹以下高級官僚、四博士に加えて、参謀本部第一部長（作戦部長）の石原も入っていた。しかし同じくアジアを視野においているとはいっても、日本思想に傾斜した上述の思想をもつ四博士と、後で見ることになる石原のそれとの違いは決定的であった。

『満洲国史』（総論）によると、現地満洲でも辻の帰任を待って関東軍参謀長東条英機を委員長とする15名の現地側創立委員会を設置した。^{注225} 3月1日には、板垣に代わって東条英機が関東軍参謀長として、また、片倉衷も関東軍政策班長（建大問題を担当）として満洲に赴任していた。新京には、朝陽路の蒙古会館に事務所（幹事、辻権作、野村遵心、根本龍太郎、岩井隆三郎ら）が設けられたようである。

この頃より実際には、東条、片倉、辻のラインと四博士とによって建大創設準備が進むことになる。石原は1935年8月から1937年8月まで参謀本部の要職にあって、国防計画の研究、計画等、軍の枢要な仕事に携わっていた。満洲事変以来独自の戦争史観を持って絶えず脚光を浴びた石原ではあったが、軍閥に属さず、直言癖のある彼には敵対者も多かった。東条と石原とはその人柄、対中国観など多くの点で対立しており、関係者周知の不仲であった。そういう意味でも建大の石原色は薄められる必然性があったといえる。

片倉の日記によれば、「亜細亜大学」という構想は、3月26日には「建国大学」構想に変わっているという。^{注226} 『満洲国史』（総論）によると、4月20日に第一回の創立委員会もたれ準備が具体化していく。^{注227} 委員会では石原の意見はとられず、「アジア大学の名の下にアジア全体の学生を集めて指導者を養成することは、むしろ日本側でなすべきであり、まず満洲建国に役立つ人材の養成が第一^{注228} であるとして、名称は建国大学に内定した」という。

4月から5月にかけての石原構想と四博士の考え方との違いについて、辻に平泉を最初に紹介した筒井清彦は次のように語り、建大が石原構想から離れたところで構想されたことを強調している。^{注229}

「『アジア大学』から『建国大学』への質的転化が創立委員四博士の最初の討議から起こった。石原構想から創立委員四博士構想への大きな転回、転化である。それは建大設立の構想については政府関係も軍関係も一切注文をつけず、四博士に一任すると片倉衷班長が明

^{注225} 前掲書、満洲国史 総論, p.593.

^{注226} 前掲書、建大史資料(創刊号), p.4.

^{注227} 前掲書、満洲国史 総論, p.593. この記載は『建国大学年表』には見えない。

^{注228} 木田清は1966年10月の座談会で、アジア大学については色々な議論があったが、「やはりだんだん事務的になってきて満洲国の官吏養成機関のようになってきたのだが、趣旨としては必ずしも官吏と限ったわけではなく、広く各方面に役立つ人材ということではあったのです」と語っている。

^{注229} 筒井清彦が湯治万蔵編『建国大学年表』の訂正のために編者に寄せた補記による。前掲書、建国大学年表, pp.19-20.

言して、東京事務所の四委員会は発足した。従って、『アジア大学』石原構想は一応説明があったろうが、筧博士の『筧神道』や平泉博士の『皇国史観』とは相容れない石原『王道』論や『法華経史観』であったから、審議の議題には一度も上らなかった。

憲法学、経済学、倫理学、歴史学のこの四大家は各々独自の見解、個性ある主張も強く、平泉博士の談話のとおり激烈な論議に終始した。従って、『創設要綱』は四博士の議論の結実であって、『アジア大学』とはつながらない『建国大学』設置要綱となったのである。」

さて、東条英機は6月上旬辻とともに上京し、「建大創設要綱案」を示した。この案は四博士らによって微修正され、6月18日、東京委員会決定案となった。ところがこの要綱が石原構想離れしているところから、副総長となる作田荘一は、この懸隔を埋めるためか7月初旬に石原と麻布桜田町の事務所で会談を行なった。その詳細は不明であるが、「歴史的会見の結末如何と息をひそめて待機していた」という三品によれば、^{注230} 会見後に作田は、「石原さんは、軍人としては珍しい思想と信念を持った人ですね」と一言洩らし、「両者所信を堅持して一步も譲らず」であったという。

こうした曲折を経て、7月15日から三日間、新京の軍人会館大講堂において創設委員会（東条委員長）が行なわれた。東京側は四委員、満洲側は張景恵國務総理以下各大臣ほかが出席し、創設要綱、建国大学令案が議決された。16日には作田が副総長（総長は國務総理大臣）に内定する。後に作田は、この会で決定した大学の方針を、「満洲国の政治及び經理に当たる人材を作るのであって、必ずしも官吏になるとは限らない。経済方面の中央銀行とか、国民教化の目的の下に協和会に入る人もあろうし、満洲国の基礎を固めて世界の中に立って行ける様に国事に従事する指導的地位に立つものを養成するのである」^{注231} と記している。それはまさに、「北支の空に支那事変の砲火がとどろいていた」（三品）ときであった。

この前後、参謀本部作戦部長の要職にあった石原は支那事変不拡大に努力するが、遂に拡大積極派に敗れ、9月27日、作戦部長を免ぜられ、関東軍参謀長東条の下の参謀副長に転出させられた。木田（満洲国総務庁人事科長）によると、満洲にきた石原は、早速人事処長源田松三を訪問し、建大の学生募集の中止の可能性を質問したという。^{注232} 彼の不満のほどを知ることができよう。だがそれは容れられず、翌1938年5月、建国大学は開学した。しかし石原は建大への不満から、開学3ヶ月後に建大の抜本的な改革を意味する「協和大学」構想を提起し、なおも執着をみせたのである。次に石原構想の内容を見たい。

(4) 石原構想

石原の新大学構想の内実については、次の三点から知ることができる。

A: 1937年当時、石原から話を聞いて創設に動いた軍側の幹事・三品の話。

B: 1938年8月に石原が植田関東軍司令官に提出した意見書「関東軍司令官ノ満洲国内面指

^{注230} 三品隆以「建大資料メモ」（建国大学同窓会編「建大史」編纂委員会(1967)建大史資料(第2号), p.14. なお、上記註の木田「補記」によると、「四博士の中国観は相当に開きがあ」った。作田、西の「両博士は石原構想に理解をもっておられたようだが」、「平泉博士は石原構想を本末転倒の発想とみられ、両者相容れないように見受けられた」という。（前掲書, 建国大学年表, p.19.）

^{注231} 前掲書, 建国大学年表, p.96.

^{注232} 前掲書, 建大史資料(第2号), p.7.

導撤回二就テ」^{注233}における記述。

C: 石原自身が1942年10月初版の『国防政治論』で記した「満洲国の政治組織」についての記述。^{注234}

B、Cを比較検討すると、CはBを記した当時の考えを詳述したものと見えるので、ここでは両者を一つのものとして扱う。従って以下では、Aを<1) 1937年3月構想>とし、B・Cを<2) 1938年6月構想>として、二つに分けて整理してみる。

1) 1937年3月構想

この年3月26日、協和会東京事務所幹事団の一行（事務所長の松平紹光、軍派遣の東大聴講生をしていた多田督知と岡田芳政、及び三品隆以）は、石原の建国大学の話をしたいとの意向をうけて事務所で石原の構想を聞くことになった。この時の石原の話の骨子は、『建大史資料』第2号所収の座談会発言（ ）と彼の「建大史資料メモ」（ ）及び植田弘編集の『我觀石原莞爾』所載の三品の記述（ ）によって知られる。石原は において、辻政信から聞いた1938年に建大を設立するという構想には個人的意見としては時期尚早だとし、設立には少なくとも5年の準備期間が必要だとした。そして創設される大学は協和会が直接その経営と指導に当るべきだが、現在の協和会にはその準備も力もない。そこで将来は理想として協和会自ら経営指導に当たることを述べた。以下の構想はそうした考えの上で大学の在り方を示したものである。 と 及び 所収の発言内容の表現及び順序に三者三様の若干の違いがあるので、内容を整理し、文末括弧内に相当する内容のある出典を上記の記号で記すことにする。

a: 「民族協和」に基づく新しい学問の創出と旧来の大学の弊風の排除

満洲国を中心としたアジアの諸国で必要なものは、民族協和の理想に基づく文化、経済、政治、哲学だ。これを満洲でつくってほしい。だから既成の日本の大学教授及びその教育と研究の方法は完全に排除する。旧来の日本の大学にこびりついている学閥意識、官学的権威主義、大学至上主義等一切の偏見と弊風を打破する。（ ， ， ）

b: 実践的経験と研究の融合した新しい教育と研究の方法の創出

現地で身を粉にして働いている人が多くいる。彼らが一日の長として、学生と共に学び、研究し、実践を重ね、理論と実践を統一して体系化し、建国の指導原理を創りだしていくのだ。主眼は全人間的教養と訓練。実践的経験を第一の基礎とし出発点とする。研究と実践とを融合統一しそれを一元的に理論づける。（ ， ）

c: 指導者の創造

こうして幾年かの後に自ずから指導者が生まれてくるであろう。指導者は大学自ら創りだすのだ。各民族が手をつないでそれぞれの分野で三年学んだら、現地の実社会に入って共に苦勞をし汗を流し血を流して、体得したものを政治、経済、文化、哲学の面で持ち帰って討論を重ねて理論に仕上げ、学生の指導にあたるのだ。（ ， ， ）

^{注233} 前掲書, 石原莞爾資料・国防論策, pp.239-243.

^{注234} 石原莞爾(1942)国防政治論, 聖紀書房, pp.132-150.

d：研究素材にタブ - 無し

大学においては、マルクシズム、帝国主義、共にこれを克服しなければならない。このため、広く世界の天才的学者、アジアの先覚的、革命的指導者、反満抗日の指導者、民族革命家等を招聘して、その批判と創意を活用し、研究に資することが必要だ。例示、トロツキー、胡適、周作人、ガンジー、チャンドラ・ボ - ス等。(, ,)

e：民族平等と共学共塾

大学創学の根本目的は民族協和の実現にある。各民族の協和内容、方法、生活その他の処遇等一切の条件に於いては、完全なる平等を。()

共学共塾、共同勤労、共同研究、終生誓っての同学同志。「一緒に飯を食い、勉強をし、喧嘩をする。日本語でも朝鮮語でも蒙古語でも各民族語で喧嘩をし、その中でやっていかなきゃ絶対にダメだ」。(, ,)

f：学生は満洲とアジアから広く募集

学生は満洲国内在住民族を主とするの外、日本、支那、印度、その他アジア諸国よりの留学を受容する。(, ,)

三品によれば、この構想を聞いた四人は「何か素晴らしい光を身体一杯に吸い込んだような喜びに、夢心地で、麻布の大使館構内の事務所に帰り、深更まで語り合った」^{注235} という。

2) 1938年6月構想^{注236}

建大開学三ヵ月後に提出された上記B「内面指導撤回二就テ」に見られる石原の「協和大学」構想は、満洲国を裏で操縦していた関東軍の在り方の変更（内面指導撤回）を提言し、そのための対応策を関東軍司令官に献策するなかで言及されたものであり、簡潔にして要領を得たものである。一方、上記C「満洲国の政治組織」では当時の考え方をより体系的に解説している。その要点を整理し石原の構想をまとめてみる。但しCではBの協和大学に当たる部分を建国大学と記述しているので、以下ではその部分は協和大学に読み替えた。

g：協和大学案（建大改組案）

石原がB「関東軍司令官ノ満洲国内面指導ノ撤回二就テ」の「国策決定機構ノ整備」の中でいう協和大学とは、「現存の大同学院は之を建国大学に合併して事務官養成機関となし、別に新たなる意義を以て大同学院なる名称を用ふる事最も適当と思惟するも、今は、混淆を恐れて協和大学の名称に依る」（原文カタカナ）とあるように新しい大学構想であった。C「満洲国の政治組織」によれば、同時にその構想は現実の建大の改組を要求するものであり、より正確には、彼の当面の目的であった満洲国の現状を改善するための方法として提起されたものであった。つまり、その協和大学は協和会に属すものとして下位に位置付けら

^{注235} 前掲書、三品隆以刊行会編(1984)我觀石原莞爾, p.129.

^{注236} 前掲書、石原莞爾資料・国防論策, pp.234-243. によると、「関東軍司令官ノ満洲国内面指導ノ撤回二就テ」の植田司令官への提出は8月とされているが、6月には同案の原型ができていたことがわかる。よって、「1938年6月構想」とした。

れ、国策を企画する大学ということである。^{注237}

h：東洋らしい政治大学

東洋においては政治の中心は文教にある。「論語一卷懐に入れて天下の政治を完全にやれるのが、東洋の政治」^{注238}である。広義の意味の教育が政治の中心である。この意味において協和大学は政治大学である。「この協和大学が、広く満洲国の政治的経済的指導者の錬成を行なう。即ち各方面の幹部級の人物を絶えず召集して訓練する。のみならず進んで大学自ら社会に進出し社会教育にあたる。このような、「徹底した東洋らしい統制主義時代の政治大学を作って貰いたいといふのが、私共の念願であった」。^{注239}「今の建国大学は遺憾ながら日本の総合大学と同じような模型であり」、「結局日本の総合大学に類似し而もそれより程度の低いものになって」^{注240} いるのではないか。

i：中心学問：王道教、王道戦争学

協和大学の中心の学問は二つである。まず、「満洲国建国の精神を明らかにする王道教」^{注241}。王道教に基づいて最終戦争準備期間及び最終戦争における満洲国の担任すべき東亜国防の研究をする学問である王道戦争学がある。それに基づいて王道政治学、王道社会学、王道経済学をおく。以上が主要科目である。以上の教授は協和会を中心とした同志的学者が担当。それができれば協和大学の基礎が確立する、次にその廻りに補助学をおく。ほぼ以上が、満洲国指導原理研究部というべきものとしての協和大学の概貌である。「今の建国大学」は「丁度、文理科大学に於ける付属中学のやうにこの研究部に付属すべきもの」^{注242}である。

Aは既に担当者として創設に動いていた三品ら後輩たちへの彼の要望であり、そこではBにみられるような国策に関わる抜本的な問題は触れられていない。他方、B、Cは上述のように当時の石原の関東軍の在り方と満洲国経営についての提言を論述したものであり、その「政治大学」の提言は抜本的、独創的かつ体系的であり、一切の妥協は排されている。このような政治大学の性格の諸相がAであったのであろう。そこに考えられている学問には、彼の考える現実の要請から遊離した「真理の追求」といったような遊びはない。Bの王道戦争学に端的に表れているように、それは彼の世界最終戦争論からくる見通しに基づく構想であった。つまり、来るべき最終戦争で日本が西洋文明の代表国たる米国に勝つためには満洲国の独立によって満蒙問題を解決せざるをえない、という満洲事变後の9月22日以降の構想を実現するた

^{注237} 具体的には石原は次のように考えた。政治の中心として皇帝の下に満洲帝国協和会があり、その会長の下に協和大学が属し、ここで国策を企画する。また協和会会長の下に中央事務局長が属し、その局長は企画局をもつ。この企画局で協和会の会策を企画する。一方皇帝には国務総理が属し、その下に総務庁があつて「政策」を企画する。この三者から出される「三つが渾然一体となって満洲国の政治が運用される」(前掲書, 国防政治論, p.134.)。協和会の指導者は恐らく協和会会長であり国務総理がやるべきであり、その人は本庄大将が適任であるというのである。

^{注238} 前掲書, 石原莞爾(1942)国防政治論, p.143.

^{注239} 同上, p.150.

^{注240} 同上, p.145.

^{注241} 同上, p.146.

^{注242} 同上, p.149.

めに必要なもの、という役割をその「政治大学」に期待したのである。

では、彼が日本の模型であるとして否定した、実際の建大はどのような大学だったのだろうか。

(5) 副総長・作田荘一と建国大学の実際

上でみたように、石原にとって建大創設要綱（1937年8月5日に政府公報に搭載）における建大は旧来の大学に類するものであった。要綱の中にも、「建国精神ノ神髓ヲ体得」することを目指した点、「民族共塾」、「勤労的実習」など彼の主張を反映した部分を見ることもできるが大いに不満だった。しかし建大は未だ開学しておらず、この段階で石原は要綱以上のことを知らない。では実際の建大はどのように展開したのだろうか。そのことを見るためには思想的側面、制度的側面（カリキュラムなど）、関係者とりわけ教員と学生の側面などから総合的にアプローチする必要がある。なかでも第一に取り上げなくてはならない人物は、建大の運営の事実上の最高責任者として思想的・制度的側面に指導力を発揮した副総長・作田荘一である。作田は、戦後の著作集『道の言葉』巻の六^{注243} 収載の「建国大学の四年」^{注244} において、建国大学の特色を次の五点にまとめている。

- 1) 六年間の五民族共塾生活
- 2) 満洲国を対象とした学科配当
- 3) 訓練場の教育
- 4) 教学の目標：「真理の探求」から「道徳の教養」へ
- 5) 「満洲国学」の大成のための研究院

以下ではまず、指導者・作田の考えていたこれらの内容を、「大学運営の方針」として作田の戦前の著作^{注245}をも参考にして整理することにする。

1) 目的

・「満洲国の高級公務員-必しも政府の官吏とは限らず、公共の勤務に当る者-を養成する機関として創設」。^{注246} 「それは高等教育と公務員錬成とを合体せしめ、現役国務担当者の後を継いでこれと交替する準備を為す国家機関である」。^{注247}

・「満洲建国（実は再建国）に当たり、新しい時代の出発点となるべく、先ず以て、諸民族の協和を基底となし、その上に建国精神を体持する新人を育成することを以て眼目とし

^{注243} 作田荘一(1963)道の言葉, 巻の六, 道の言葉刊行会: 京都. 本書は全六巻の第六巻。ここに建国大学での出来事を記した「建国大学の四年」が収載されている。

^{注244} 同上, pp.214-239.

^{注245} 作田荘一の戦前の著作として参考にしたのは作田荘一述(1941)修身道徳, 建国大学研究院., 及び、作田荘一(1943)満洲建国の本義, 建国大学研究院期報, 建国大学研究院, No.4. である。『道の言葉』と合わせてこれら3書は前掲書, 湯治万蔵編(1981)建国大学年表. でふんだんに引用されている。なお上記『修身道徳』は近年編集され右記のように標題も変えて再刊されている。作田荘一述山田昌治編(1990)分かれ身の構築-新編版「修身道徳」, 自費出版。

^{注246} 同上, 作田荘一(1963)道の言葉, 道の言葉刊行会, p.215.

^{注247} 前掲書, 作田荘一(1943)満洲建国の本義. 同上, 湯治万蔵編(1981)建国大学年表, p.94.

た」。^{注248}

2) 大学の基盤

第2章で既述したように満洲国の大学は文教部がこれを管轄していたが、^{注248}の理由から「國務院の直轄となり、且つ大学総長は職制の上にて國務總理大臣の兼任となって居た」。大学の創立、運営についても「國務院の中央行政官庁である総務庁がこれに当たり、また裏面では関東軍の支持に負うところが大きであった」。こうした大学では関東軍からの干渉を免れないと予想されるが、「私の在職中には、教育指針は勿論、施設や人事についても、一度たりとも干渉を受けて困ったことはなかった」。「寧ろその反対に」総務庁の総務長官、主計処長、人事処長ら「政府の人々には皆非常な好意を以て大学の要請にこたえて貰った」。また「特に大学創立に関係された石原莞爾氏、片倉衷氏、辻政信氏、三品隆以氏等には強い熱愛を込めた陰ながらの尽力を蒙った」。大学総長の「總理大臣張景惠氏」は「稀に見る長者の風格を持った政治化であり」、「儀式に臨席する外は挙げて副総長に一任して居た」。^{注249}

以上、作田在任中の建国大学には、政治的・経済的、そして軍事的にも盤石の基盤があったことが窺われる。

3) 教学の基本方針

「開学勅書」「建学要綱」の重視：開学の日には「特に満洲国皇帝から開学勅書を賜わり、建学の指針を明示された。この勅書では、建学の使命として満洲国が日本国と一徳一心の関係に立ち、在住諸民族の協和に力め、王道国家を昭示せる「天の道」を尊重し、東西の識に通じて現代教学に一生面を開くべき満洲国学を興こし、以って実済の国土を養成することにあることを高調せるものであった」。^{注250}「私はこの[勅書の]趣意に随いつつ、また創立委員及びこれを助けた幹事諸氏の協議にて決定された『建学要綱』を重んじ、さらに大学同人の識見をも加えて新しい大学の営務に当たった」。^{注251}近世ヨーロッパにおいて国立学校から宗教を引離したのは、外来のキリスト教に対して固有の「人の道」（ヒューマニズム）を打出すところの「ルネッサンス」の行き方であった。それが日本の大学においては、外形に囚われて内容を見落とし、かくて若き明治天皇の聖諭となったのである。かかる日本の建学の経緯に鑑み、建国大学は当初に建学の勅書を頂き、以って新大学の教学指針を樹立したのである」。^{注252}

作田は『修身道德』において建国精神を「体得」することを教育方針としている。^{注253}建国精神とは上記の「開学勅書」と「建学要綱」を意味したのだが、彼の建国精神に対する理解を見ておきたい。彼はそれを彼の歴史観と国家観を総合した思想から捉えていた。すなわち彼はヨーロッパ語の国が land と「権力によって人を支配する」state に分けてとらえた上

^{注248} 前掲書，作田莊一(1963)道の言葉，道の言葉刊行会，p.215.

^{注249} 同上，pp.215-216.

^{注250} 同上，p.216.

^{注251} 同上，p.217.

^{注252} 同上，pp.216-217.

^{注253} 前掲書，作田莊一述(1941)修身道德，p.22.，p.33.

で、西洋思想では「権力が支配するとき国家と呼ぶ」のに対して「東洋思想では国も国家も数々同一の意味で使われて来た」とし、「権力の支配から道義の指導に移れば国としては益々発展したことになる」^{注254}とした。また作田は、「最近では（中略）議会が段々力を失って来た。ドイツ・イタリー・ソビエト連邦に於いては、議会の存在の影が薄くなって参りました。斯くして出て来たものが、現代国家であります。時代は現代国家に移りつつあります」と、当時の日本も含めた全体主義国家勃興の状況を「現代」としてそれ以前の「近代」と対応させ、現代を近代からの発展としてとらえる発展的歴史観を示し、そのことによってその主張を正統化させていた。彼が述べた「現代国家」の特徴は、彼によれば、「国家が社会を圧へて行く所」と「自主の個人人格を認めないで国を全体として見る」「全体国家」であった。満洲国にはこの全体国家を目指すことが要請され、国のスローガンであった「民族協和」は「その為に」強調されている、^{注255}とされた。

「満洲国の建国精神となっている国家観」について作田は、直接、「建国宣言と回鑾訓民詔書の二つに現れて」^{注256}いるとする。建国宣言については「順天安民といふことが主調となって居ります。之は日本の唯神経国といふ事と並ぶものであります。支那では天が初より高い所に居り、日本では神が最上である」と、建国宣言に見られる中国側の思想は日本思想との関係で述べるに止めている。一方、回鑾訓民詔書については「皇帝陛下は、日本天皇陛下と精神一如となられ、日満両国は一徳一心の間柄である旨をご訓示になって居られます」と、「日本国体が満洲国の国体観に入」ったこと、「従って王道は皇道に合体する」ことを説いた。^{注257}この独特の国家観は、日本側から見た場合には満洲国への主体性を鮮明にしたものであるが、中国側から見た場合には自らの主体性が心配される内容であったものと思われる。

・「満洲国学」形成のための教育と学問：「日本の大学では、理科系統にあつては西洋の大学を真似ても過らなかつたが、文化系統となれば、西洋模倣は東方の学問を拒否する結果となつて、甚だしい欠陥を生じた。生活環境を深慮しない模倣学問は、抽象的・観念的なものとなつて、学問の化けものを出す弊害を生ずるに顧み、建国大学には始めからはっきりと満洲国学の旗を掲げ掲げ、これを骨髄として諸学科を配当した」。^{注258}

・創意・実施の教育：以下に見るように「類例の稀な教養課程を定めて発足した」ため「思うようには運ばなかつた」。^{注259}そこで「建学の精神の本に心を一つにし」「銘々が拳つて創意を出して実施を試みる」ように促した。そうしたことから「力めて規則類を作らぬようにした」。^{注260}

^{注254} 同上, p.25.

^{注255} 同上, p.25.

^{注256} 同上, p.30.

^{注257} 同上, p.31. そこから作田は、「王道に於いて事実上免れなかつた易姓革命」が否定されるし、日本と同様に満洲国にける「国体」の不変を説いた。

^{注258} 前掲書, 作田荘一(1963)道の言葉, 道の言葉刊行会, p.219.

^{注259} 同上, p.222.

^{注260} 同上, p.223.

4) 教育の目標

. 道徳の教養 = 気智情意と人格：「従来の大学における教学目標の多くは真理の探究であったが、建国大学は広義における道徳の教養を目標とした」。心の作用を「気智情意の四つとなし」、「人心の起こるところは勢気であり、これに智識と感情とを結びつけて到達するところは意志であり、意志から現れる道の実践こそ、人格を高め世界を開いて行くと見て居た」。^{注261} それで教育の目標は、「先ず『気』を養わしめることであり、次いで『智』を研ぎ、『情』を浄め、終に『意』を鍛えるにある」。「『気』に発して『意』に到るところに『人格』が出来上がり、その人格は広義における『道徳』によって成立する」。^{注262}

. 「天の道」と「神の道」：上記の道徳本位の教学に合致していたのが、満洲の人々にとって縁故の深い『天の道』であった。一方「神の道」とは、「正直にして勤勉なる実践に生き働き、その実践は神の示命に拠って開花の業を営むことを人生宗旨とする」ことで、これら二つに由る教学目標は、「そのまま『開学勅書』に高調されて」^{注263} いた。

5) 大学機構

. 塾：「大学の教学機構としては、学生塾と教室と訓練場との外に研究機関としての研究院が設けられ」た。「先ず此の大学の特色とも言うべきものは、五族協和を内容とする塾生活に重きを置いたことである」。「学生はすべて塾を拠点として六年の大学生活を営む」。「この塾教育は、満洲建国に基く建学の一大要諦としての諸民族協和の実を挙げるものであり、全学の職員が各方面から支持し援助する仕組となって居た。塾は学生にとっては家庭でもあり、中学校を卒えた年頃にて満洲、日本、朝鮮、台湾、蒙古の各地から来た青年達にとっては、修養の場であると同時に日常安住の家庭でもなければならなかった。学生はみな塾を生活の拠点として、そこから教室と訓練場に出かける。塾に住む一々の学生の技能や一身上の事柄は、各塾頭の知るところであり、学生の身上に関する事については、塾頭の言が最も重きをなすわけである」。^{注264}

「満洲国では已に『大陸科学院』が出来て居て、この国土に適切なる理科系統の研究を総合的に行なっている。そこで建国大学では、『研究院』なるものを設けて文化系統の諸学科を総合的に研究し、これらを『満洲国学』として大成しようとする案を立てた。そこでの研究員の多くは建大の教職員とするが、その外に実地調査や政策立案やの方面に必要な頭脳として政府や公社及び公益会社の人々にも参加を依頼することとした」。^{注265}

. 研究院：「前期三カ年は精神講話を中心として文科系統の専門科に進む予科」とした。「後期三年の大学本科に当たるものは、政治学部・経済学部・文教学部の三学部となし、各専門の学科と共に三学部に通じて高等教養となるべき基礎学科を置き、これを三カ年に配当した」。^{注266}

^{注261} 同上, 227.

^{注262} 同上, pp.227-228.

^{注263} 同上, p.228.

^{注264} 同上, pp.217-218.

^{注265} 同上, p.230.

^{注266} 同上, p.218.

6) カリキュラムの基本方針

. 学科教育：政治学部は、「従来の法学部を改めて政治学科目を多く収め、日本の法学部構成と著しく変わったものとなした」。日本の大学が、ヨーロッパの大学が法律系統を特に尊重するのを真似て法律万能の教え方をなし、「政治学は片隅の方に一科目だけに型づけられて居る有様は感心出来ない」。東洋では、「西洋の法律観念に該当するものは寧ろ道德観念であろう。それは西洋の権勢国家観に対する東洋の道德国家観を強く意識せしめること[に]もなる」。経済学部は、「満洲国民経済学を主眼とした」。文教学部は、「新しい試みであり、今日の日本の文学部と教育学部とを合わせたようなものであり、且つ文教諸機関の長となるべき者に必要なる学科目を配したものであった」。^{注267} 三学部共通の高等教養としての基礎学科には、「『神の道』や『天の道』やを始めとする各種の宗旨道や、哲学一般・史学・文学・武学・国家学・実務学科等を収めた」。^{注268}

. 訓練場の教育：「武道訓練」について。「護身武道には剣道・柔道・弓道の外に、特に植芝盛平氏の創始した合気道を加え、同氏を始め日本にて第一流の各種武道師範の出張教授を受け、各師範の高弟を教授又は助教授に迎えた」。相撲も「専門家の天龍関取を聘して」随意の一科目とした。「予科と本科を通じて武道修練をつづけ、これまでの大学では思いもつかないような訓練を試みた」。^{注269} 「軍事訓練」が重視されたのは日本と同様であったが、その「長として、度々の実戦に勇名を馳せた陸軍少将を据え、且つ実力ある将校数名が加わって真剣な訓練が行われて居た」。「農事作業場」の訓練は、「青年の心身を鍛練する為めに必要である外に、満洲国の発展が農業振興を基礎とすることも考慮に入れて、土と親しむ教養を施すことにあった」。「藤田農学士を迎えて、他の大学では見られない好成績を収めた」。「精神訓練」のみは、科目だけ置いて実修練が出来ないで終わった。^{注270}

. 建国精神に基づく学問と修練の合致：これを「学則について云うと学科と訓練」を「同等の位置」におき、「一つ」にする。「知行合一で此二つが一致する人を養成するのであるから、大学で学科と訓練を一にする様にする」。^{注271}

. 展望：「大学を出でては満洲国を道義国家として固めて行く」。「この満洲国が道義国家として発展する。而してその周囲の国がこれに学ぶとき、それが『道義世界の建設』になる」。^{注272}

(6) 建国大学の特徴（平等と自由）

続いて「教学の特色」として各民族学生が共通に評価した各民族の「平等」と読書の「自由」の側面について、学生側の眼から見たものを中心に取り上げてみる。それらは当時の日本では失われていたものである。両者は関連性が強いが一応分けて見ていく。

^{注267} 同上, p.219.

^{注268} 同上, pp.218-219.

^{注269} 同上, pp.220-221.

^{注270} 同上, p.221.

^{注271} 前掲書, 作田荘一述(1941)修身道德, 同上, p.20.

^{注272} 同上, p.21.

1) 五族平等

様々な資料や筆者の側聞したところによると、学内において教師らの各学生に対する扱い、また優越的立場にあった日本人学生の他民族学生に対する対応も平等であったといえる。例えば、「鮮系」^{注273}の学生であった五期生・金相圭の記述をみよう。「入学してからは、嬉しい驚きもあった。鮮系とよばれて、日系と並称されたこと。同胞の先輩、同輩と自由に母国語がしゃべれたこと。(中略)時には怒りをこめて自分の心情を吐露できる日本人学友たちの存在は、なんとも新鮮だった」。^{注274}当時朝鮮においては日本による朝鮮民族否定の「皇民化」教育が行われ、日本人との上下関係、朝鮮語の使用禁止が行われていた。^{注275}「驚き」のほどが理解されよう。

建大における「平等」を示す象徴的出来事としてしばしば語られるのが、法によって民族別・人数別に配給のあった食糧を一括し、各民族学生が朝昼晩と同じものを食べるようにした慣行を作ったことであった。このことについて、中国人の劉第謙(六期)は食事内容を具体的に、「朝食は例によってとうもろこしの粥、昼間は米の飯、夕食は米に高粱の混じった『白高』と呼ばれるものか、あるいは米に小豆が混じった『紅飯』と呼ばれるもので」あったと例示している。^{注276}また、鮮系三期生・方熙は、戦後の建国大学各民族学生の聯歡会が成功している「重要な理由」として、「特に食事の中身が完全に同じものであったこと」^{注277}をあげている。

実際、食事の問題は平等を確保することが難しかった。それは食料が配給制であり、日本人は米を主食としているから米、中国人は粟、高粱という具合に、民族別の学生数によって各配給され、中国人が米を食べると法に抵触するシステムがあったからである。食事の平等の意義について桑原亮人(四期)は、「日清、日露の役以来、満洲の地に住みついた日本人の対『支那』人差別はひどかった。しかも両国の祖国は戦火を交えて久しい敵対国であった。満系の同学は屈折した感情を抱いたまま大学で共同生活に入ったと思われる。それだけに差別のない塾生活に彼らは大学と同窓の誠意、熱意は感じとった筈である。その典型的な

^{注273} 満系、蒙系などと同じく当時使用した歴史的呼称として本稿ではそのまま使用した。ただ、四期生・太仁善氏によると、「鮮人」という言葉は、「朝鮮人の日本人に対する蔑称「倭奴」(ウェーム)にも匹敵する、下品で不快な言葉」であったという。建国大学同窓会編(1991)歡喜嶺 遙か(上巻), p.154.

^{注274} 建国大学同窓会編(1991)歡喜嶺 遙か(上巻), p.106.

^{注275} 四期生・太仁善氏は、「小学校に入るや、『国語』としての日本語の勉強が始まりました。(中略)中学にはいると、学校教育の用語は完全に日本語となりました。授業時間は日本語、その他の時間は朝鮮語という二言語併用体制が崩れたのは『日支事変勃発』の翌年のことだったと覚えています」と記している。前掲書, 建国大学同窓会編(1991)歡喜嶺 遙か(上巻), pp.151-152.

^{注276} 劉第謙氏はこの平等が偽物であると記している。「建大では、確かににせの協和を最大限度まで拡大し、石原莞爾の言葉で言えば、『一律平等は鉄則であった』」、しかし「それがにせものだと言うのは、『協和』は餌であって、買収が目的だからである。誰もが知ってのとおり、父母が圧迫されているのに、自分に善意を示すとすれば、それは狐の宴会だ」と(前掲書, 高畠穰次訳、劉第謙(1985)私の知っている偽建国大学.)。ここでは「平等」の解釈には立ち入らないが、現象としては平等であったといえよう。

^{注277} 同上, p.187.

例が満系配給の高梁と日鮮系配給の米を公平に分かち合ったことである。このことは日系側が感ずる以上に大きな意味をもっていた。(中略) 建国大学生だけはほかの日本人とは違うという意識を強く持ってくれたのである。このことは戦後数十年ぶりに再会した同窓がみな述懐しているところで」あると評価している。^{注278}

こうした慣行を担ったのが炊事委員たちであった。初代炊事委員で一期の岩淵克郎は記す。

「入学当初の学生食堂の食事は、まだ物資も豊富だったせいも、日満料理チャンポンのメニューの珍しさも手伝って、田舎育ちの粗食に馴れた私にとっては、かなり満足のいくものであった。ただ(中略)これではまだまだ日本の食生活に偏っており、現地農民の生活水準に比べると贅沢に過ぎはしないか。私たちは現地食をとりいれ粗食に耐えるべきではないか、と危惧されるものがあった。(中略)[平均的な単価から割り出した単調なものばかりではなく]時には・・胃の腑が驚くようなご馳走を出してもよくないか。こんなことを考えていた矢先、たしか昭和14年の暮近く、学生食堂の経営主任の職員某氏の不正事件が発覚した。(中略)種々検討した結果、熟生活の意義は、一つの釜の飯を共に食うというところに基本があるのだから、その食事を塾生自らの手で作るようにしたらさらにその意義が深まろう。塾生が食堂の経営に参加することにより、食堂の経理が公正になり、冗費の節約にもつながり、充実した食生活を楽しめよう。(中略)われわれの工夫、実習が、五族協和の新国家にふさわしい国民食の創造に役立つかも知れない。炊事という労務を熟生活の中に組み入れることは、禅寺における典座の修行を自らに課すると同様、訓練にも役立つ。よいことづくめである。」^{注279}

こうして岩淵らは、1940年1月から満洲人と同じものを食べるよう内容を落した。1941年頃から配給制になり、委員は旨い食事のため購入可能の小豆を買いたため高梁と一緒に食べるなど工夫した、という。^{注280}

こうした慣行も多少の変化を見ることがあった。五期生の小野田宗之の日記(抄記)1944年3月10日(金)の項に、「夕食時、日系、満系の食事区分について、突然、鮮系のK君より『建国大学の伝統は断たれた』との訴えがあって、ひと波瀾を起こす。言われてみれば彼の訴えに反対などあろう筈はない。徴兵検査を受ける学生に対する特別なはからいであり、もとより民族協和の伝統を破る意図など日系学生には断じてない。訴える場所と時を除けば、彼の考えには全面的に賛成だ。」^{注281}とあるのがそれである。また、新制三期生・井上国男の1944年3月22日付け日記に、「戦局日々に急迫し、日系学生は次々に軍隊に入り始め、体力をつけるためか、満系の申し入れがあったのか、とにかく白米は日系学生のみを支給されだし、一部満系学生から不満の声があがりだしたという」^{注282}と記している。「不満」が示すように、意思伝達が十分でない場合には伝わらないにもかかわらず、戦場にたつ仲間への配慮から

^{注278} 同上, p.117.

^{注279} 岩淵克郎, 炊事委員事始, 前掲書, 歡喜嶺 遙か(上巻), 建国大学同窓会, pp.344-347.

^{注280} 岩淵克郎(1993年8月2日聞き取り調査)

^{注281} 前掲書, 建国大学同窓会編(1991)歡喜嶺 遙か(上巻), p.247.

^{注282} 同上, p.243.

「差別」を試みたこの精神には、質へ配慮したより深いレベルの「平等」の思想の存在を見てとることも出来よう。

教師が各民族の学生と分け隔てなく接したということも、当然のこととはいえ、当時の満洲国における一般日本人の横暴ぶりや差別意識からすれば、教員の人間的質の高さを物語るもので見事なものであった。

2) 読書の自由・学問の自由

一期生・三村文男は、建学当時の建大の様子を次のように記している。

「大学本部の建物の中をうろついて、書棚の多い部屋に入ってしまったことがある。珍しそうに見回していると、うしろから声が出て、『学生はそこへ入ってはいかん。発禁の本のあるところだからな』と注意された。このとき一冊の本の背に『百姓一揆史料』という文字のあったことを覚えている。「こういう外面的な不自由とうらはらに、建大には大きな自由の面があった。中でも藤田先生、北原先生の言動は奔放をきわめ、若い感受性にはそれがストレートに受け入れられたのであった。むろん学生同士の議論は自由であった」。^{注283}

また、三期生の方熙は「言論と読書（思想）の自由があった」、^{注284} 同じく三期の徳長春氏は「塾生活にては自分の読みたい本が何でも読まれ」^{注285} と記している。さらに六期生瓜生敏雄氏は、「建国大学の図書館には共産主義の本はいくらでもあり、自由に読めた」と記しており、^{注286} 概ねこういう雰囲気の大学が建国大学であったとって大過ないであろう。当時の日本と満洲国のおかれていた社会状況から、こうした本をあからさまに読むことに躊躇するものがあるのが自然であったが、実際に発禁本も読むことはできたのである。それは作田の、共産主義を克服する為には共産主義を研究しなくてはならないという政治的立場と同時に学者としての思想から来るものであった。学内の図書館には日本内地において当時読むことの困難であったマルクス主義系統の本まで配架されており、学生は比較的自由に読むことができたのである。

こうした自由な雰囲気は、建大が存在した時期全般にわたって機能した。新制三期生・宮崎徹は、「建国大学での講義は決して強制されたものではなかったこと」を強調し、「自分で勉強し思索するという点では内地の学生たちと全く同じであったと思う」と評価している。また、鮮系の三期生方熙は、建大時代のこととして「何でもしゃべれたこと、すなわち言論と読書（思想）の自由があったこと」^{注287} を記している。また、六期生の時代でさえも、「建国大学の図書館には共産主義の本はいくらでもあり、自由に読めた。事実私も唯物論や唯物史観を読んだ」（瓜生敏雄）というほどである。^{注288}

しかしながら、中国人学生目から見た場合、建大の中にも不平等が入り込んでいた。それは信教、信条の自由に対する制約というべきものである。漢民族三期生Aは、建大で朝夕

^{注283} 同上, pp.210-211.

^{注284} 同上, p.187.

^{注285} 同上, p.177.

^{注286} 同上, p.76.

^{注287} 同上, p.187.

^{注288} 同上, p.76.

行なわれた皇居遥拝等は天皇に尊敬を抱かない彼らにとって「同等でも対等でもない現実で」という。^{注289}

また、中国人の場合は精神的自由にも大きな制約があった。一期生楊えつと二期生銭端本の証言^{注290}を見てみよう。

- ・ 志々田：辛かったこと。差別的な扱いを受けたことについては如何ですか。
- ・ 楊：総じて云えば、建大だけが平等な所だ。特に前期においては。勿論、個別的に反対のこともあったが。

先生と学生との間の間隔は、建大だけは特別で、日本人と全然区別がない。師弟関係だけは民族を超越している。協和とかそういうものを超越している。同窓間でも平等な協和を実現した所だと思う。だから今でも、何十年たっても親しい。

- ・ 志々田：後期になるとどのように違いましたか。
- ・ 楊：副総長が代わったでしょう。気分も違う。学生に対する管理方法も違う。軍事管理に似た方法で管理した。
- ・ 志々田：今までマルクスの本が公然と読めたのに。読めなくなったようなことがあったのでしょうか。
- ・ 楊：あります。前期の時は、河上肇の本も、ただ表紙を隠して平然と読めた。後期になると読まない。読めない。仲間が塾頭の所へ行って報告しているんじゃないかな、という警戒感が出てくる。後期に入って建大の創立精神が変わってきました。
- ・ 銭：外部的な力が、日本政府そのものが、日本人に民族協和を（不聴）する。[学生同士の]殴り合いができなくなる。昔は[作田の時代]疑うということがないんですもの。嫌だったら嫌で、「バカヤロー」「バカヤロー」でお互いに喧嘩する。
- ・ 志々田：建大に入る前の社会の差別は相当凄いものがあったのですか。
- ・ 銭：そりゃそうですよ。
- ・ 志々田：小さい頃からですか。
- ・ 銭：そりゃそうですよ。

1945年入学の八期生高済美によると、「これ等の本を読む時は、表紙を紙で包み、内容とは別の表題を書いていた」というが、当然のことというよりも、この時代になおこうした本が読めた建大を驚くべきであろう。^{注291} 建大のこのような自由な環境は、開学から一年刻みで中国人の学生の民族意識は高揚していく。1942年始めの中国人学生の検挙によって作田は退任を余儀なくされることになり、後任に退役陸軍中將が着任すると、学内の雰囲気は大きく変化した。作田の評価とこの時の印象について、新制三期生・山内錬也の学生日記は次のように記す。^{注292}

^{注289} 漢民族三期生A書簡(1993年7月2日)

^{注290} 楊えつ聞き取り調査(1992年9月22日, 通訳銭端本, 於北京新大都飯店)

^{注291} 同上, p.119.

^{注292} 同上, p.314.

・「作田副総長、学生検挙事件により引責辞職される。これで建大は終わりであろう。私が作田先生の本を余り読まないの忠告非難してくれた友人があった。その友人曰く『建大生は作田学で充分である。』とはいうものの、私たちが自由に学問出来たのは、やはり作田副総長のお蔭であろう。建大精神はこれで終わると思う。」(1942年6月6日)

・「予備役陸軍中将、副総長に任命される。関心なし。」(同年6月16日)

読書の自由の伝統に象徴される自由な雰囲気は、大学の中に中国系学生の反満・抗日のためといえる愛国教育を培養した。一期生の頃から存在した読書会^{注293}がそれである。満洲国瓦解の年・1945年2月に入学した張鯉門(八期生)の戦後の回想^{注294}には、アスキーの大衆哲学、河上肇の経済学大綱、銭亦石の「中国は如何にして半植民地になったか」、魯迅、茅盾、巴金等人の作品など各種思想書が密かに回され、建大在学中に読破したとある。読書の自由は学問の自由・精神の自由へと進み、反満抗日運動に走らせた。そして自由を与えた人々の思想と矛盾・対立することになったのである。

(7) 結論 -- 教育及び武道教育への影響

1) 影響その1

ここでは、石原構想と建大教育の実際及び平等と自由の特徴とを比較し、その異同を考えてみる。

石原構想 1)a の「民族協和の理想に基づく新しい学問の創出」は、建大では「すべての学科を通じて満洲国を第一対象とするように仕組んだ」^{注295}ことや、「文化系統の諸科学を総合的に研究し、これらを『満洲国学』として大成」^{注296}しようとした研究院をつくることによって企図されたとみることができる。旧来の大学の弊風の排除の点は、学閥や権威主義を形成するには建大があまりにも短命であったため弊風を生じずに終わったといえる。建大の事実上の最高責任者が京都大学教授の作田であったことからわかるように、既成の日本の大学教官もかなり建大に入っている。これは大学の体裁をなすためには当然のことであつたろうが、かなり個性的な教官も集められたようで、作田は「教員の側にも日本にて長く教員勤めして型が固まって居るような人が少かったことも、新しい教育に臨んでは却って良い効果を奏したのかも知れない」^{注297}と述懐している。また特に、三品や辻の他にも政府側に根本龍太郎などの石原思想の理解者、信奉者が建学に関わっていたこともあり、前述の農学士・藤田松二や、中山優(東洋政治史)、武道顧問の柔道家・福島清三郎など石原シンパが教官あるいは顧問として着任したため、石原イズムの浸透に益すること大であったと思われる。

石原構想 1)b の「実践的経験と研究の融合した新しい創造的な教育・研究方法の創出」という問題も研究院の求めるところであった。特に実践的経験主義の点は、建大前期3年間にお

^{注293} 志々田文明(1994)孫群(孫宝珍)氏 建国大学時代を語る、「満洲国」教育史研究, 東海教育研究所, pp.110-115.

^{注294} 前掲書, 建国大学同窓会編(1991)歡喜嶺 遙か(上巻), p.169.

^{注295} 前掲書, 作田莊一(1963)道の言葉, 道の言葉刊行会, pp.219-220.

^{注296} 同上, p.230.

^{注297} 同上, p.226.

ける訓練教育の重視（午前中は座学、午後は訓練教育に当てられた）によって生かされた。学生と共に学び研究し実践を重ねて建国の指導原理を創りだしていくという方法については、石原の推薦で採用されたといわれる藤田松二（農事訓練担当）によって、学生への感化の形で推進されたといえるかも知れない。坂東勇太郎（一期生）によると、藤田の指導は、「気の遠くなるような長い長い高粱畑の畝に除草の鋤刀を動かしている学生の先頭に立って、苦力笠をかぶり広い大きな背を見せ黙々として働く」という率先垂範の典型で、「大地の愛、自然の力を、汗を流し働くことによってつかみとれとでも言われるように、言葉ではなく身体で、しかも自らそれを示し全体で教えるのが藤田流の教育」^{注298}であったからである。

なお、建大には期末試験などを実施しない傾向が見られたが、これも新しい教育方法を模索するところから取られたものの一つと理解される。例えば戦後の回想に、「建学の精神の基本方針に基づき、学期末試験等が一切ない、という破天荒の制度」（五期生・松村正一）、^{注299}「学科試験もなく、夜の自習時間には自分の好きな本を読んで勉強した」（新制三期生・宮崎徹）、^{注300}「建大には、入学後、試験がなかった。中学のような中間・期末テストなど一切なく、前期のうち、某教授へのレポート一回きりで修了した」（四期生・井間煌一）、^{注301}「建大においては漢語も含めて他の学科も殆ど試験がなかった」（四期生・有田定一）、^{注302}などの記述が見られ、また当時の日記にも、「学科においては漢語、英語の考査があった」（1943年3月29日、五期生・山下光一）とある。いずれも1941年以降に入学した者の記述である。ただ、一方で試験実施のことを記した記事もあり、^{注303}どの教師に出会うかによって有無が異なったというのが現実であった。教師の裁量に任されていたというのが実態といえよう。^{注304}

石原構想1)cの「指導者の創造」については、石原構想の大学による指導者の創造が問題であるのだからその意味での新しい指導者は出現しなかったといえる。三年制の大学構想も、実際の制度の上では予科教育と合わせての六年制となって実現しなかった。

石原構想1)dのマルクシズムの克服（「研究素材にタブーなし」）については、見てきたように読書の自由を当時としては破格に保証することによって実現された。また、アジアの先覚的指導者の招聘は、根本龍太郎（総務庁事務官）が石原から「シナ側の学者を選考するために北京にゆけという内命を」受けて、実際に中国から反日運動に関わっていた優秀な学者を招く交渉にあたった。その時根本は、「民族協和を単なる理念の問題ではなく」「実践の

^{注298} 建国大学同窓会「建大史」編纂委員会(1967)建大史資料(第4号)：8-9.

^{注299} 前掲書、建国大学同窓会編(1991)歡喜嶺 遙か(上巻), p.195.

^{注300} 同上, p.308.

^{注301} 同上, p.53.

^{注302} 同上, p.237.

^{注303} 「三時限目地理、宮川先生の試験、地理的現代生活は何か、という問題」（新制三期生・塚田恒徳塾生日誌、1941年5月5日・月）、同上、287。「心理学試験」（四期生・鈴木博塾生日誌、1943年10月17日）、同上、267。「今日は六時間試験」（五期生・小野田宗之日記、1944年6月5日）「国家概論試験」（同左、6月8日）、同上、pp.248-249.

^{注304} 湯治万蔵(1994)建国大学における試験問題。本稿は原稿用紙8枚。湯治氏より恵贈された。脱稿年月日の記載はなし。湯治氏は、藤井歓一、山下光一氏の日記を引用している。

哲学として建てるのだ。その意味で、真の民族運動の経験者をも研究員として迎えたい」と話し、後で軍関係者の間で物議を醸したが、北京の中国大学教授の鮑明今^{注305}と蘇益信の招聘が実現した。一方、朝鮮では「万歳事件」に関係した朝鮮独立運動指導者・崔南善の招聘に成功した。彼については朝鮮軍司令官の抗議を石原が退けさせたといわれる。石原の推薦で作田が招聘した中山優も石原の頭の中では「アジアの先覚的指導者」としてカウントされていたのであろう。

石原構想1)eの「民族平等や共学共塾」について三品隆以は、「この点はそのとおりになりました」、「そして、この一点が、何ものにも替え難い、建国大学の最大特長である」^{注306}と語っている。また、有吉正雄（四期生）が「建国大学内の生活条件は徹底して五族平等であった。着るものも、喰うものも、寝るところも、講義も訓練も、厳しい規律も、無差別平等に課せられた。物質的に富めるも貧しさもなく、学業成績の上下も全く告知されなかった。その点各人はなんのこだわりもなく、自分の関心と資質に応じてのびのびとやれた。これはまことに恵まれたことであった」^{注307}と記すように、同時に学生が誇ったところであった。

ただ、塾生活には次のような問題点もあった。桑原亮人（四期生）は述懐する。「食事の前に、『たなつもの 百の木草も 天照らす 日の大神の 恵み得てこそ』と称えさせられたが、異民族の心情を慮らない押しつけであった」。^{注308}また中国人の高清美（八期生）も、「中国人が中国農民の生産した食糧をたべるのに、日本の神にその恩恵を感謝しなければならないだろうか？確かに『おかしい・・・』」^{注309}と拙劣な方針を指摘している。日本の宗教的作法の強制は確かに「平等」に行われたのであるが、指導民族・日本人を認めない他民族においては強制に他ならなかった。

石原構想1)fの学生募集については、インドやアジア諸国では実現しなかったが、少なくとも建大初期については満洲国内と日本及び日本統治下の朝鮮、台湾で学生が募集されている。なお、1937年8月に初めて行われた「建国大学学生募集公告」^{注310}によると、建大の入学志願者は、日本の中学校（師範学校、中学校、甲種実業学校、及び関東州満洲国内日本人中学校を含む）四年修了見込者及び卒業生、国家が認定した同等以上の学力者、また、満洲の高級中学校^{注311} 或いは同等程度の学校の卒業見込者及び卒業生、国家が認定した同等以上の学

^{注305} 中山優によると、鮑明今は第2回のアメリカにおける支那留学生の会長で秀才。その後馮玉祥の顧問。なお中山は自らを含めてこの4人を「政策教授」と呼び、「この政策教授について言えば、私たちは、全く邪心がなかったね。崔南善に対しても、鮑明今に対しても。言うことは言いながら、それでやっぱり親しかったな。心から。」との関与もあったようである。建国大学同窓会「建大史」編纂委員会(1971)建大史資料(第5号)：32-33.中山の履歴及び石原との関係については、栗田尚弥(1993)東亜同文書院, 新人物往来社. に評伝がある。

^{注306} 前掲書, 建国大学同窓会「建大史」編纂委員会(1967)建大史資料(第2号)：6.

^{注307} 前掲書, 建国大学同窓会編(1991)歡喜嶺 遙か(上巻), p.239.

^{注308} 同上, p.117.

^{注309} 同上, p.118.

^{注310} 満洲帝国政府公報, No.1016. (1937.8.17) なお、本公報は上段に同文の中国訳が掲載されている。

^{注311} 学制の変更により、翌年の「建国大学学生募集公告」では「満洲国民高等学校」に変わっている。前掲書, 建国大学同窓会「建大史」編纂委員会(1967)建大史資料(第2号)：32.

力者が対象であった。受験に当たっては、各校校長など作成した人物考査書を受けて、道各府県及樺太庁、朝鮮総督府、台湾総督府、関東局、駐満日本帝国大使館、満洲国各省及特別市、駐日満洲帝国大使館、協和会中央本部の推薦が必要であった。

石原構想2)gの「協和大学案」は、満洲国協和会の改組とリンクしており、当然入れられなかった。

石原構想2)hの「東洋らしい政治大学」という点は、「論語一巻懐に入れて天下の政治を行なうこと、また広義の意味の教育が政治の中心となることの建大における有無という点からいえばなかったといえよう。^{注312}

石原構想2)i「中心学問：王道学、王道戦争学」について。彼の最終戦争論に基づく学問名称の点は採り入れられないものの、それらに対応した学科は構想された。作田作成の1937年6月19日段階の大学後期課程の学科案（作田案）^{注313}では、王道学に相当すると思われる「大道学（或イ八大本学建国哲学）」はじめ、王道戦争学の「政道（戦争学ヲモ含ム）」、王道政治学の政治学、王道社会学の民族学、王道経済学の経済学などが構想されており、石原の考えが異なった形で反映しているといえる。しかし実際には大道学という学科はなく、王道という名称を冠した学科もできなかったようである。^{注314} 1939年12月の「後期学科目編成」^{注315}には、基礎学科（共通学科）には五つの範疇に石原の構想した案に近い学科が配当されている。建国精神、民族学、社会学、民族協和論、武学（武道及武術論、戦史、軍略論、戦略及戦術論）などがそれだが、内容的には教官独自のものであったことは言うまでもなく想像されるだろう。

こうして見てみると、創設要綱ができる前の石原の構想は、建大においてその多くがなんらかの形で実現したともいえる。しかし当然非石原的な面もあった。その一つは「神の道」に基づく徳育の重視であろう。筒井清彦によると、^{注316}「四博士は『神の道』『天の道』に立つ道徳本位の教学による大学という発想で一致していたが、石原構想に『天の道』はあるが『神の道』は認められない、寧ろ否定されている。ここに四人委員会の初めからの『アジア大学』石原構想離れが見られたようである」という。作田によれば、二つの道とは、「満洲の人々にとっては縁故の深い『天の道』」と、「正直にして勤勉なる実践に生き働き、その実践は神の示命に拠って開花の業を営むことを人生宗旨とする『神の道』」であり、この二つに拠るところの「教学目標はそのまま『開学勅書』に高調されて居り、我々はこれを指針として新時代の教学に当たった」^{注317}という。「天の道」を教える教官が非常に少ない^{注318}の

^{注312} この評価について筆者は、右記の先行研究において、「政治大学」のもつ「政治性」の有無を検討した所から誤った判断をしたため、訂正した。前掲書、志々田文明(1993)建国大学の教育と石原莞爾、p.120.

^{注313} 前掲書、湯治万蔵編(1981)建国大学年表、p.34.

^{注314} 開学当初の学科配当は不明。重要な資料を悉く掲載した『建国大学年表』にも不掲載。

^{注315} 基礎学科・政治学科・経済学科・文教学科の学科目が掲載されている。前掲書、湯治万蔵編(1981)建国大学年表、pp.194-200.

^{注316} 筒井清彦が『建国大学年表』編者の湯治万蔵に宛てた補記か。前掲書、湯治万蔵編(1981)建国大学年表、p.19.

^{注317} 前掲書、作田莊一(1963)道の言葉、巻の六、p.228.

^{注318} 「天の道」の教授について作田が期待した教官はわずかに岩間徳也のみであったようである。同上.

に対して、こうした思想を受けた教官が多く活躍することによって、現実には「神の道」の側面が強調されることとなり、建大における作田的な性格を形成したと見ることができる。そのような性格は建大の外でも強化された。軍の要請で天照大神を建国の神として祀った建国神廟の創建（1940年7月15日）によって、満洲国人口の圧倒的多数を占めた非日本民族の指導的な立場の者の心のさらなる離反^{注319}を招く決定的な要因となった。当然ながら建大の聡明な非日本民族学生心を閉じて事態の推移をうかがい、日本の敗色とともに愛国的心情を燃え上がらせていくのである。

結局建大は、石原的個性を残しながらも、作田によって育てられた大学であった。石原の批判を受けての作田 - 石原会談が不調に終わり、東条の下で、石原とは大きな意見の相違があったといわれる四博士によって創設要綱が審議決定され、関東軍が四博士の主体性を尊重し介入しなかったことが決定的であった。^{注320}

石原的個性は、石原の満洲国建国思想の影響を受けていた片倉衷、辻政信、三品隆以下実行力のある参謀らが、軍側幹事として創設準備にあたったことで反映を見たのは上で確認した通りである。また、作田の公正さも石原色を残した一因であった。中山優をわざわざ建大に招聘した事実からも理解されるように、石原思想の賛成者ではないが理解者であった作田が、その公正さから、石原の希望を反映しようとしたからである。ただ、参謀本部の要職にあっても満洲におらず、またその後は半ば左遷のように関東軍参謀長の東条の下におかれた彼には、全てを仕切って建大を改組するパワーはすでになかった。

戦後に、建大生出身ジャーナリスト・楓元夫（三期生）は建大を次のように評している。

「私たちが否定しても否定しても、消えないわが青春時代にシミのように身についている建大は、当時の"上から"意図してつくられた建大ではなく、私たちが"実践した"建大であり、それを受けとめた各人の心の中にあるのです」。^{注321}「建大の真髄は」「紙の上に書かれた創立の精神にもなければ、先生方の教育内容にもないし、学生だけにもない。いろいろな要素がぶち込まれ、諸民族の俊秀を一つのルツボに入れてカキまわされているうちに、いつのまにかつくり上げられた全体としての"特異な大学"にある」。「現実の建大は、創立者や教授たちが考えもしなかった"鬼子"建大であったという認識をもつ必要がある」。^{注322}

執筆当時の著者が建大創設のプロセスについてどれだけの正確な認識があったかは不明であるが、特定の思想が支配しない建大の混沌性を、学生の側の目で捉えた的確性があるといえよう。楓が、「世にも不思議な大学」あるいは「世紀のまぼろし大学」^{注323}と形容した不思議さは、作田の高潔さと信念、そして石原臭さとが、巧みにブレンドされていた点にあった

^{注319} 何処の国においてもそうであるが、多くの民衆は体制順応であり、建国神廟に祀られた神が何であろうと黙って従うほかに道はなかった。心の離反を招いた人々は離反の度合いが少なかったいわば親日家の、民衆の中では圧倒的少数の知識人の中でも、さらに少ない限られた人々であったといえよう。

^{注320} 三品隆以下、三品、松平、石中、筒井、村井、岡田、多田といった軍人を含む東京事務所の幹事たちは、「当時日本の代表的な大先生方の純正理論を」「平ぐものようになって、承っていたものでした」という。前掲書、建国大学同窓会「建大史」編纂委員会(1967)建大史資料(第2号):6.

^{注321} 楓元夫(1967)続「世紀のまぼろし大学」, 同上, pp.27-28.

^{注322} 同上, p.28.

^{注323} 同上, p.30.

からである。

2) 影響その2 -- 武道教育への石原の影響

建大では武道教育は訓練教育を構成する三つの要素の一つとして重視されていた。これについて石原の考えを知る資料はない。ましてや、「民族協和への確信、漢民族に対する信頼、之が満洲建国への大きな基礎となって居る」、「民族協和は日本人の力を押しつけるものではない」（1942年）と満蒙領有論から満洲国独立論への転向の動機を述べている石原をみると、彼の新大学構想に、日本の独特な心身教育手段として日本の中学校等で行なわれていた武道について言及が見られなくても当然といえよう。ただ、伝記などによると彼は銃剣術教育には熱心であった。それらの記述を拾って考えたい。

藤本治毅の『石原莞爾』によれば、仙台陸軍地方幼年学校時代、剣道において「道場の彼は気迫の権化、その気合いは同期生の誰にも負けなかった」^{注324} という。また、見習い士官時代（20歳）の「銃剣術の教官振りは見事で」、「常に相手を圧倒」し、「練達の下士官でも勝てるものではなかった」^{注325} という。また、石原の幼年学校時代からの同級生・横山臣平の『秘録石原莞爾』によると、韓国守備服務時代（21歳）の石原について、器械体操や柔道、陸上競技などは苦手であったが、「暇をみては、中隊の訓練とくに銃剣術などに出場して、彼の好きな隊務に親しんでいた」。^{注326} 若松連隊に帰還後（23歳）は「久しぶりで会うと、まず話題は軍隊教育に関する事項で、中でも銃剣術教育になると、一段と熱が入り、必勝の気合いが充ち、威圧されるようであった」^{注327} と記している。さらに藤本本には、歩兵第四連隊長時代（44-45歳）、「銃剣術、射撃、演習など兵業教育に心魂を傾けた」^{注328} とある。また、この時代銃剣術の試合を見学した彼は、審判が「相突き」を採ったのを、後日「真剣勝負では必ずどちらかが参っているわけだから、勝敗のないはずがない。実戦場裡に通ずる審判となればどうしても先をとるか、氣勢をとるか、打撃力をとるか、とにかくとらねばならぬ」^{注329} と講評したという。

これらの記述は、建大創設時代の石原が、軍隊教育における武術的教育の重視を、兵隊にとって必要な気迫の養成と、実戦性重視の観点から考えていたことを推測させる。そしてそのための訓練を重んじたと思われる。そのような軍人教育者としての彼の考えが、1937年3月構想「b：実践的経験と研究の融合した新しい教育と研究の方法の創出」に見たような実践的経験の重視の新教育観となり、それが、後述されるように、作田らをとおして建大の訓練教育、その一つとしての武道教育の重視にも間接的な影響を与えたといえることができる。

2 . 建国大学の目的・組織・実際

^{注324} 前掲書、藤本治毅(1964)石原莞爾, p.22.

^{注325} 同上, p.47.

^{注326} 前掲書、横山臣平(1971)秘録石原莞爾, p.88.

^{注327} 同上, p.91.

^{注328} 前掲書、藤本治毅(1964)石原莞爾, p.136.

^{注329} 同上, p.126.

(1) 建国大学の目的と建国精神

建国大学創設の目的は、1937年8月5日公布の満洲国皇帝勅令第234号「建国大学令」第一条及び「建国大学創設要綱」にみられる同文の以下の文章に見ることができる。

「建国大学ハ建国精神ノ神髓ヲ体得シ学問ノ蘊奥ヲ究メ身ヲ以テ之ヲ実践シ道義世界建設ノ先覚的指導者タル人材ヲ養成スルヲ目的トス」。^{注330}

これを日本の大学令（1919年公布）と比較してみると、大学令第一条には、「大学ハ国家ニ枢要ナル学術ノ理論及応用ヲ教授シ並其蘊奥ヲ攻究スルヲ以テ目的トシ、兼ネテ人格ノ陶冶及国家思想ノ涵養ニ留意スヘキモノトス」^{注331}とあり、国家のための学問を研究することを第一にされた。また、大学令は学術の研究を本旨とすることと人格の養成に力を注ぐべきことが重視されたわけだが、学術と人格の具体的な内容には言及していない。^{注332}

その点建国大学令は、あるべき人間像を「建国精神ノ神髓ヲ体得シ」、「身ヲ以テ之ヲ実践シ」、「道義世界建設ノ先覚的指導者タル」人間として明確化し、あるべき世界像を大胆に儒教的倫理を意味するであろう「道義世界」として特徴づけた点など、勅令あるいは要綱作成者の価値観が強く押し出た大学であった。

建大生が獲得すべき目的に指定された「建国精神」とは何か。これについて分析した宮沢恵理子は、建大の創設案も1935年から1936年にかけて関東軍によって準備された新国家建設計画案の一部として案出されたといい、「そのため建国大学において『神髓を体得』するとされた『建国精神』は、この時期における『建国精神』であることに注意しなくてはならない」とした。^{注333}つまり建国精神とは実際に建国した際の精神ではなく、数年経って計画的に案出されたものというのである。^{注334}1937年に作成された建国大学創設要綱等に盛られた「建国精神」の思想がその作成のその数年前の時代的背景から影響を受けるのは妥当性があり、その意味で当時の論客・小山貞知（満洲評論社社長）の『満洲評論』への6回連載論考「満洲帝国協和会とは何ぞや」に着目して、当時の「建国精神」思想を「建国精神」イデオロギーとして取り上げることは一つの方法としては許されよう。小山の連載から直接ポイントを取り出せば次の点に集約される。

・「満洲国にありては皇道を基調とする日満一徳一心の王道政治である。即ち満洲国の主権者は日本天皇と精神一体の如くにして、日本天皇の大御心を心とすることにより、その尊

^{注330} 建国大学創設要綱は建国大学令と共に、満洲帝国政府公報(1937.8.5), No.1006.、建国大学要覧(康德8年度), 建国大学刊行, 1941, p.6.および前掲書, 建国大学年表, pp.51-54.に収載されている。

^{注331} 岩神正矣編(1895)類聚学令全書付録, p.320.

^{注332} 国立教育研究所編(1974)日本近代教育百年史(第五巻, 学校教育三), pp.429-431. なおこの比較の発想は、齋藤利彦(1990)「満洲国」建国大学の創設と展開-「総力戦」下における高等教育の「革新」, 学習院大学東洋文化研究所・調査研究報告(30): 113, 1990.に教えられた。

^{注333} 前掲書, 宮沢恵理子, 建国大学と民族協和, p.12.

^{注334} そして宮沢氏は「この『建国精神』を体現するとされていた国民動員組織団体が、満洲帝国協和会であり、『建国精神』の内容は協和会の残した文書によって知ることができる」とする。しかしその文書の具体的分析はなく、満洲評論社社長の小山貞知の1936年の連載論考「満洲帝国協和会とはなんぞや」の建国精神の内容が「満洲国政府の見解とほぼ同一である」との判断から、小山の諸論考の分析に入っている。しかし宮沢氏が上記判断の根拠として挙げているのは彼の実績から「当時の彼の論調は関東軍や満洲国政府の方針に反対するものではない」とする点だけであり、この希望的観測を「同一」の根拠とするのは問題であろう。

厳性と安定性を保持するものにして、今日これを一般に王道政治と称するも、まったく満洲国独自の政治である。」^{注335}

・「要するに、一桑深く掘り下げてみた満洲建国精神とは日滿一徳一心・民族協和・王道楽土・道義世界の実現を理想とする日本天皇の大御心に外ならないのである。」^{注336}

・「満洲国はその建国の本義に基づき、日本と皇道によって固く結合した所謂皇道連邦内に於ける一独立国家であって、道義による世界政策遂行の第一歩をなすものである。」^{注337}

以上を一部キーワードの意味を敷衍してまとめれば、「目指される世界は諸民族が協和した王道政治が貫かれた楽土であり、そこには道義が貫かれている。その王道とは皇道でありそこには易姓革命思想はない。日滿発展の将来構想は皇道連邦の実現である」ということになろう。宮沢がまとめようとした「建国精神」イデオロギーである。^{注338} このような内容であれば「日本の支配と日本文化を他民族に強制するものとなった」のは当然であろう。宮沢はこの分析（「協和会と建国精神」）を「1937年以後の満洲国建設計画は、このような皇道主義的思想に強く影響されており、しかもそのような傾向は次第に強まっていった」と終えている。小山の思想が関東軍や満洲国政府にどの程度影響力を持ったかはわからないが、1934年当時の満洲国において言論の自由が日本内地以上に圧殺されていた状況から推して、^{注339} 小山の思想が、権力者の容認すべきものであったことは、その内容からも理解されよう。

しかしこうした理解は、そのような世界の実現にあるべき姿を真剣に求めた人物からは随分と離れたものであった。作田荘一は建国大学の特殊な性格・位置づけについて次のように記している。

「建国大学は大学の名を帯ぶるも近世の国立大学とは存立の趣旨を異にし、それは高等教育と公務員練成とを合体せしめ、現役国務担当者の後を継いでこれと交代する準備を為す国家機関である。故にそれが国家機構に於ける位置は、一般文教の施設と存立の理由を異にし、（中略）施政府と並び立つものである。それ故にこの大学の開学に当たっては異例にも大学創立の趣旨を明示し給へる勅書を拝受し、大学総長には協和会会長と同様に国務総理大臣の兼任を見たのである。」^{注340}

ここには具体的な目的として、学生を満洲国の高級官僚に育成することまでが述べられて

^{注335} 小山貞知(1936)満洲帝国協和会とは何ぞや(3), 満洲評論 11(23) : 11.

^{注336} 小山貞知(1936)満洲帝国協和会とは何ぞや(4), 満洲評論 11(24) : 11.

^{注337} 小山貞知(1936)満洲帝国協和会とは何ぞや(5), 満洲評論 11(25) : 14. なお小山は次号で皇道連邦を王道主義国家連合と読み替え両者を同体異名とした。皇道を「直に他民族に移植することは幾多困難なる本質を持つ」からである。日本思想を異民族に移植する際の困難性が窺えて興味深い。同, 満洲評論 12(1) : 38.

^{注338} 宮沢が「建国精神」イデオロギーと名づけたものの結論部は必ずしも明確ではないのだが、以下の部分がそれに当たろうか。「協和会の『建国精神』イデオロギーでは、『民族協和』は（中略）世界の民族が日本文化を中核として融合することを意味しており、融合の完成された状態が道義世界の実現であった。このような『建国精神』イデオロギーの伝播は必然的に『皇道宣布』となり、日本の支配と日本文化を他民族に強制するものとなった。」前掲書, 宮沢恵理子, 建国大学と民族協和, p.18.

^{注339} 1934年10月の内務省警保局「在満機構改革問題二関スル記事取締関係書類」(IPS-Doc, IMT 491, マイクロフィルム)を分析した右記論文の一を参照。河原宏(1980)アジア主義の制度化-対満事務局, 興亜院, 大東亜省の設置, 社会科学討究 25(2) : 55-83.

^{注340} 前掲書, 作田荘一(1944)満洲建国の原理及び本義, 満洲富山房, p.200.

いるが、合わせて協和会など準国家的組織の指導者養成が目指されていた。^{注341} 建国大学令第2条に「建国大学八國務總理大臣ノ管理ニ屬ス」とあるように、発令と同時に総長には國務總理大臣・張景恵が就任し、制度上でも他大学のように文教部に所管されずに國務院に直轄する特別の格の高さをもつ大学として誕生した。

(2) 大学の組織と実際

建国大学の組織は「建国大学創設要綱」^{注342}によって計画され、概ね実行された。本項では、創設要綱の示された下記の小見出し3以下の内容について、その後の動向も踏まえて建国大学の組織の概要を記述したい。

1. 目的, 2. 創設の要旨, 3. 組織, 4. 修業年限, 5. 管轄, 6. 教科内容, 7. 学生の採用数及学費, 8. 教育の特色, 9. 創設の順序.

1) 組織

大学教育を前期・後期に分け、大学院、研究院で構成される。事実上前期は日本の大学における予科、後期は本科に相当した。1941年から開始される後期は、実際には共通学科としての基礎学科と専門学科に大別され、専門学科は政治、経済、文教の三学科となった。

<大学院>

大学院は「後期卒業生又ハ其ノ他適任者ヲ入学セシメ」^{注343}て行なう教育機関とされた。

<研究院>

研究院は、「学校主要職員ヲ以テ組織シ其ノ共同研究ニヨリ建国原理ヲ把握シ之ヲ生成発展セシメ且職員ノ精神的団結ヲ強化シ其ノ内容ヲ充實セシメ以テ学生教育指導ノ淵源ヲシム」^{注344}とされた。

建国大学創設要綱「教育ノ特色」の項に、「教授団八同志トシテ有機的ニ団結シ建国精神ニ基ク共同研究ヲ実行ス」とあるが、^{注345}より詳細には、1938年9月1日公布の建国大学研究院令に規定された。それによると目的は、「建国原理ヲ明シ国家ニ必要ナル学問ノ蘊奥ヲ究メ以テ国民思想ノ涵養教学ノ根本精神ノ確立国家政策ノ根本原理ノ樹立ニ寄与シ併セテ東方教化ノ興隆ヲ図ル所トス」とされ、そこには五つの研究部（基礎・文教・法政・経済・総合）がおかれた。^{注346}しかしその後一年余りは活動がなされていない。これは作田の個人的な事情で京都大学を離れられず、建大の業務に集中できなかったためである。1939年1月、作田が副総長との兼任で研究院長となると1月30日付で研究院総務課事務分担が暫行的に定めら

^{注341} 協和会との特別な関係は、建国大学創設要綱の「管轄」の項に「國務總理大臣ニ於テ管理シ各方面特に協和会之ニ協カス」とあることからわかる。前掲書, 建国大学年表, p.53.

^{注342} この要綱は、建国大学刊(1941.7) 建国大学要覧, pp.4-8.に、満洲帝国政府公報(1937.8.5), No.1006に収載のものの抄が収載されている。

^{注343} 前掲書, 建国大学年表, p.53.

^{注344} 同上.

^{注345} 同上.

^{注346} 前掲書, 建国大学年表, p.119.

れ、6月16日には主要な研究者28名の研究院勤務並びに嘱託が命じられた。^{注347}

以後、作田のリーダーシップで研究班が作られ、精力的な共同研究活動が開始された。作田が研究の目的としたことは新しい学問としての「満洲国学」の大成であった。それは、作田によれば「文化系統の諸科学を総合的に研究し、これらを」「大成」^{注348}したものであり、「すべての学科を通じて満洲国を第一対象とするように仕組んだ」^{注349}のものであった。しかしそれには困難が伴った。「少なからず困惑したのは日本から迎えた教員諸氏であったろう」^{注350}と作田自身が語っているが、作田が作ろうと模索した満洲国学という新しい学問が、それを「作りながら教える」ものであったため、集まった研究者の間でさえも躊躇するものがあったことにも現れている。^{注351} 研究院企画室常務の研究部員であった宮川善造（地理学）によれば、「新しい学問、つまり（中略）日本の学会とは縁を切るようなものですからこれを始めることには仲々決心がいるわけです。それを説得して作田先生が先頭に立って、ご自分も論文を書かれるし、各研究グループ（研究班）を作り、いまの共同研究の先頭を切ったわけです」^{注352}という。また、作田の評価でも、「然るに教授・助教授諸氏は善くこの大学の使命に共鳴して、それぞれの専門学科について先ず研究院において満洲国を対象とする研究に力め、専門学科を盛った後期課程を開くまでには、一通りの講義ができるようになって居た」^{注353}という。

1939年6月末の「建国大学研究院要報」に収載されている「研究実施の概要」を見ると、13ほどの研究班が作られ、各班の研究主題、研究項目、研究班員、研究状況、業績が掲載されている。^{注354} こうした研究活動は全体報告会を開催して結合するように仕組みられた。2月7日の第一回全体研究報告会を皮切りに月二回の報告会が実施され、「研究部員タル教官ノ外、総テノ教官ノ出席ヲ求メ午後七時ヨリ九時半ニ至ル迄」報告者の講演と討論が行われた。^{注355} しかし、「ようやく先生方の半数近くがその機運に乗ったところで作田先生もやめられる、また情勢も学問をしていられないというわけで建大も変わってしまったわけです」^{注356}と語るように、開学前年1937年の日中戦争の泥沼化、1941年日米戦争の開始と時局の悪化、1942年の作田の副総長辞任の中で、活動は自然に衰退していったと思われる。

^{注347} 建国大学研究院要報に、「康德六年一月、作田博士は建国大学副総長として当研究院長を兼任せらるるに及び直ちに全体評議会を開催、当研究院の運営方針に付き、意見を交換したる後、一月三十日付を以て研究院総務課事務分担を暫行的に定められたり」とある前掲書、建国大学年表、pp.16-161.

^{注348} 前掲書、作田荘一、道の言葉 巻の六、p.230.

^{注349} 同上、pp.219-220.

^{注350} 同上、p.220.

^{注351} 宮川善造は語る。「満洲国学と称していたが、その新しい学問を作りながら教えるということに大体乗れそうな人を集めたんですけども、仲々乗りきれない人もいます」。前掲書、建大史資料第2号、p.9.

^{注352} 同上。

^{注353} 前掲書、作田荘一、道の言葉 巻の六、p.220.

^{注354} 前掲書、建国大学年表、pp.162-170.

^{注355} 前掲書、建国大学年表、pp.170-171. これについて宮川は「政策の基礎になるもの、たとえば満洲人の日常生活、風俗習慣、農業といようなものもそれぞれの班をつくりましたし、政治の基礎となる、また学問としてはかなり客観的研究になるものもやったし、また政策的なものへもだんだんやってひっぱっていきこうということで」あったと語っている（前掲書、建大史資料第2号、p.9.）。

^{注356} 前掲書、建大史資料第2号、p.9.

2) 修業年限

前期三年、後期三年の計六年の教育が計画された。前期は予科教育、後期は専門教育である。しかし実際は1938年入学の一期生も1941年末の日米戦争（大東亜戦争）の勃発による事態の急迫の余波を受けて、1943年6月に9カ月ほど早く短縮卒業した。また、この年10月の学徒動員によってそれ以降の学年も順次短縮して卒業することになる。^{注357} なお、1941年から学制変更によって、日系（日・鮮旧制中学）学生は1938～40までは中学四年修了者も受験できたが、この年度から五年卒業者のみが入学可能となった。そこで従来の制度で入学した学生との整合性を保つため、日系学生は前期二年に入学することになる。この学年の学生は当時四期生と呼ばれた、それ以下の学年もそれぞれ五期生、六期生とし最後の学年は九期生であった。しかし1941年度に前期二年に入学した日系学生は、年齢的には三期生と同学年であることから、戦後になって建大同窓会に於いてこの期を四期から新制三期と名称変更させ、以下の学年を四期以下とするよう決定を見たのである。

1941年の学制変更は日本人のみに適用され、満系学生は従来通り一年に入学した。そのため、新制三期以後に前期二年に入学する日系学生は、一年前に既に入学し塾での共同生活を送っている満系学生と二年から顔を合わせるようになった。このことは互いに知らない純真な異民族の者同士が突然であって「民族協和」の課題に取り組むよう仕組んだ建大当初のねらいに大きな影響を与えたと言われる。

大学院は「年限ヲ設ケズ」^{注358}とされたが、一期生の卒業する1943年6月は同年10月のいわゆる学徒出陣によって学生が戦場に送られる緊迫した時期の目前であり、大学院に進学する学生はいなかった。

3) 管轄

国務総理大臣が管理し、「各方面特ニ協和会之ニ協カス」とされた。

4) 教科内容

教科内容と訓育については以下のように計画された。前期については、「前期八高等普通教育ヲ主トシ特ニ建国精神ノ理論、勤労的実習、軍事訓練ニ力ヲ須ヒ且日語又ハ満語ヲ必修課目トス訓育ニ付キテハ全員塾ニ収容シ（民族共塾）厳格明朗ナル規律生活ト自治訓練トヲ体得セシメ身心ノ鍛錬ト人格ノ陶冶ニ資ス」^{注359}とされた。民族共塾、規律生活、体得、身心ノ鍛錬などのキーワードから、身体を通しての教育が想像されるが、後述のように実態もまさにその通りであった。

次に後期について。「後期八国家ノテイ幹トシテ必要ナル法政、経済、倫理、哲学、歴史等ヲ教科要目トシ更ニ勤労的実習、軍事訓練ヲ行フ 訓育ニ付テハ前期ニ準ズ」^{注360}

^{注357} 前掲書, 建国大学年表, p.53.

^{注358} 前掲書, 建国大学年表, p.53.

^{注359} 同上.

^{注360} 同上.

最後に大学院。「大学院ニ於テハ各自、専門事項ニツキ深刻ナル研究ヲ行フ」。

5) 学生の採用数及び学費

これについては、「康徳五年ニ於テハ建国大学前期第一期学生概ネ百五十名ヲ採用ス/必要ナル学資ハ一切国家ニ於テ負担ス」^{注361}とされた。この原則は、最後まで貫かれた。

6) 教育の特色

これは三つが挙げられている。まず、「本大学ハ教育ハ知行合一ヲ主旨トシ実践的人材ヲ養成スルヲ眼目トス」。第二に、「教授団ハ同志トシテ有機的ニ団結シ建国精神に基ク共同研究ヲ実行ス」。第三に、「教授ト学生トハ全人的ニ一体トナリ知育ト徳育トヲ絶縁セシムルコトナク人格ノ力ニヨリテ人格ヲ薫化ス、カクテ本大学ハ理論ト実践トヲ統一シテ以テ道義世界ヲ建設スルノ先覚的指導者ヲ養成ス」^{注362}ることを掲げた。^{注362}このうち第一と第三に対応した教育が、民族共塾の生活体験と、武道、農事、軍事などの訓練教育の二つであった。

7) 創設の順序

この項に、緊急を要する事項として、「教授候補者の編成団結訓練」があげられている。ここには、「東京事務所ヲ中心トシ、少壮有為ノ人材ヲ広く求メテ之ヲ精神的ニ結合シ成ルベク速ニ現地ノ実状ヲ認識セシメ且基礎的研究並ニ訓練ヲ開始ス」^{注363}とある。しかしここには人事の選任方法はなく、教育の成否を決める重要問題は日本同様、建国大学内定者の師弟関係と縁故が中心であったといえよう。実際、教員人事は事実上の最高責任者となる副総長に京都大学教授（経済学）の作田が内定すると彼を中心に進められた。作田によれば、関東軍や満洲国総理府から強く採用を求められたことは一度もなく、経済学関係人事以外は他の創立委員等関係者や招聘予定の教授の推薦によって決まっていた。^{注364}その間の事情を、宮川善造は語っている。

「私は元来専門が地理学ですから作田先生とは縁がなかったんですが、作田先生は地理学会ではこれだと思う方、（中略）日本の地理学を作った小川琢治先生に誰か推考してほしいとお話があって、小川先生から私のところにその話がきたわけです。」^{注365}「国語の佐藤喜代治先生も山田孝雄先生を通じておいでになったわけで、集まった先生方はいずれもそれぞれ一流の先生方を通じて集まられただけに、どの先生も抜群で優秀な方ばかりでした。」^{注366}

図書館の開設については、「成ルベク速ニ大学ノ校内ニ国立図書館ヲ建設シ内容ノ充実ヲ

^{注361} 同上。

^{注362} 同上。

^{注363} 同上, pp.53-54.

^{注364} 前掲書, 建大史資料 第4号, p.6.

^{注365} 前掲書, 建大史資料 第2号, p.8. なお宮川はこの話の時に送ってきたのが半紙一枚の「創設要綱」で、「短い前文があって、そのあとにただ学科目が並べてあるだけです。これ一枚で日本の学校をやめて満洲へいくというのは」と、戸惑いを語っている。

^{注366} 同上, p.9.

図ル」^{注367}とある。独立した図書館の開設には至らなかったが、開学に際して大量の図書が購入された。関係者は戦後の対談で語る。^{注368}

根本龍太郎（総務庁事務官）「研究院の本を買うのが大変だったんですよ。星野さん[元総務長官]、ご承知ではないでしょうか、主計処長と話して『これで買って来い』と、ツカミ金で、向井君が買いにいったんです。」「『満洲に参考になるものは、なんでも買ってこい』ということだった。」

坂東（一期生）「ずいぶん荒っぽいものだったんですね。どういうお金ですか。」

星野「建国大学の研究費だよ。満洲国は議会がないから総務長官が「ヨシ」といえば、いくらでも出せたのだよ。」

根本「それだけ建国大学の研究院を重視していたんだね。」

星野「その代わり、みんなの住居とか校舎というものは非常に質素で簡単なものだった。」

神田古書店街に旋風が起こったといわれる書籍購入は、議会のない国家の特殊性と指導者・星野らの研究重視の姿勢が反映したものであった。

(3) 建国大学の環境

建国大学の創立の議が具体化すると、1937年5月2日（日）歡喜嶺において地鎮祭が挙行された。総務庁人事科長木田清は語る。

「敷地をどこにするかということ、これで私と根本君、辻さんとが話し合った。最低百万坪は必要だろうとなった。滑空訓練もやらねばならぬし、作業的な訓練も必要だからというわけだが、満洲のことだし百万坪といっても驚くには当たらなかった。そこで地図を広げてあちこち物色したところ南嶺付近がよかろうとなった。（中略）こうして敷地は決まったんだが百万坪といって鉛筆で地図に書いた土地は実測の結果は六十五万坪しかなかったのです。」^{注369}

上記対談で星野が語った「非常に質素で簡単な」校舎等は下図のように配置されていた。（参照 図3-1：建国大学敷地・校舎俯瞰図）

建大は正門を入ると、左手に職員数名が常駐し来訪者の受付などを行う建物があり、右手には住宅の建物が二軒ほどあった。その奥に教室棟と研究棟が一对建っており、その間を突っ切ると左右にこれも対をなすように二重花卉状に塾舎が展開している。

塾舎が広がっているデザインは、根本によると、農学者・加藤完治の日輪兵舎の構想が入っていたといわれる^{注370}が、詳細な説明はない。より具体的な木田の話を見たい。

「塾の建物を建てるとなったとき、ここには建築の専門家も来ているのだが、辻さんが

^{注367} 前掲書，建国大学年表，p.54.

^{注368} 前掲書，建大史資料 創刊号，p.12.

^{注369} 前掲書，建大史資料 第二号，p.4. なお、同資料の木田によると、当時建国廟の構想がありその予定地があり、その隣は満洲映画協会（満映）の敷地として軍司令官の決裁まですんでいた。辻は軍司令官に談判し満映を移転させ、建大の敷地が決定したという。

^{注370} 前掲書，建大史資料 創刊号，p.13.

『八紘一宇でなけりゃいかん』といい出した。『八紘一宇とはなんだ』ときくと、管理棟を中心に八方に塾を配置して八本の足でそれぞれつなぐのだ、という。これに対しては『それは観念的すぎる。第一暖房が非能率的だし、金がかかってしょうがない。満洲の冬はとくに日光を大事にしなきゃならないのに八紘一宇では日の当たらないところできてしまう』という反対評がでた。辻さんはガンとしてきかないので、結局、あのとおり二本くらい作ってみたが、やはりあとは普通の建物になってしまった。」^{注371}

八紘一宇とは「世界を一つの家とすること」を意味する。日本書紀の「兼六合以開都、掩八紘而為宇」に基づく標語で、日本の海外進出を正当化するために用いられた。辻政信は自らのイメージで前期の塾舎の配置を構想したのである。

(参照 図3-2：前期塾舎の配置と塾舎の構造)

塾舎は、図3-2に見られるように同形のものが六棟あった。個々の塾舎は蒲鉾型風で、通路を挟んで左右向かい合わせで学生の寝室が位置する構造は、陸軍に見られた兵舎のようであった。^{注372}

前期の間は各学年ともこの六つの塾に入った。一期生の場合、一人の塾頭が二つの塾を担当し、各塾頭に1名程度の助手(補佐官)を置いて学生への指導がなされた。2塾と5塾の塾頭であった江原節之助は、戦後(1950年)に書いた「民族の苦悶」で塾舎の様子を描いている。

「塾[舎]はいると直ぐ裏まで突き抜ける廊下になってみて、その右側に教室位の広さの自習室があり、左側は自習室と同じ大きさの寝室である。寝室は中央が通路で、その通路をはさんで左右に向かい会って日本の畳を敷きつめた床が学生の寝床にあてられてある。壁に整頓棚がとりつけてあるのは士官学校の通りである。便所と塾頭室は自習室側に、洗面所と物置とが寝室側に作られてある。便所は水洗式で満洲の田舎から出て来た学生を驚かした」。

^{注373} 暖房はハイカラなスチーム暖房であった。食堂、事務室、教室等は別に建てられていた。また1942年には大武道場・養正堂が建てられている。

(4) 入試・学生

1) 入試

1937年8月10日(火)、「建国大学学生募集公告」^{注374}が建国大学総長張景恵名で公表された。以下それによると、採用人員は「各民族ヲ通ジテ総数百五十名」、入学時期は「康德五

^{注371} 前掲書, 建大史資料 第二巻, pp.4-5.

^{注372} 「蒲鉾型というのは、屋根をトタン板で円く仕上げた倉庫風のものでした。当時、処々満洲の部隊等で見かけました。建大の塾は屋根瓦もあり、独特の建築でしたから「蒲鉾型」とは申せないと思います。又設備も当時としては上等なものだったと思います。30人程の収容宿舎として十分だったと思います。」一期生齋藤精一氏書簡(2003.1.13)

^{注373} 江原節之助, 民族の苦悶-創設期の塾生活をめぐって, 岡崎精郎(1989)「民族の苦悶-創設期の建国大学をめぐって(2)」解説, 東洋文化学科年報(5): 140

^{注374} 前掲書, 満洲帝国政府公報(1937.8.17), No.1016. なお『建国大学年表』p.56にある「満洲国建国大学生徒募集公告」の生徒は学生の誤記と思われる。

年/昭和十三年五月二日」であった。志願資格は、「本大学前期学生ヲ志願シ得ル者ハ、左記資格の一ニ該当シ、志操堅確、成績優秀、身体特ニ強健ニシテ、将来大陸経営ニ献身セントスル満十八歳以下ノ者トス。但シ特ニ優秀ナル者ニ付キテハ、日本内地人、朝鮮人、台湾人ハ満二十歳マデ、満露人は満二十一歳、蒙人ハ満二十三歳マデ支障ナシ」とされた。左記資格とは次のようであった。

1. 日本内地人、朝鮮人、台湾人ニ関シテハ昭和十三年三月末日迄ニ日本、内地、朝鮮、台湾ノ中等学校（師範学校、甲種実業学校、高等普通学校、関東州、満洲国ノ日本人中等学校ヲ含ム）ノ四年修了見込ノ者、卒業見込者、及卒業者、並ニ右ト同等以上ノ実力アリト国家ニ於テ認定シタル者。

2. 満、蒙、露人ニ関シテハ康德五年三月末日迄ニ満洲ノ高級中学校又ハ同等程度ノ学校ノ卒業見込者、及卒業者、或ハ日本ノ中等学校四年修了見込者、卒業見込者、及卒業者、並ニ省長或ハ特別市長ニ於テ之ト同等以上ノ実力アリト認定シタル者。

3. 協和会ノ特別推薦ニ依ル者。

志願者には志願票、身体検査証、人物考査書及び学業成績表（若しくは学力検定証）が要求されていた。人物考査証は学校長や協和会中央本部長作成のそれを要求された。これらの書類は、志願者の地域区別に各推薦機関（各道府県及樺太、朝鮮総督府、台湾総督府、関東局、駐満日本帝国大使館、満洲国各省及特別市、駐日満洲帝国大使館、協和会中央本部）に提出するよう指示されていた。

志願資格の要件の結果、日、鮮、台からなる日系の学生は16歳程度の青年が入学したのに対して、満、蒙、露人など満系の学生はそれより2歳程度年長の学生が入学することになった。

選抜入試は二段階に分かれ、第一次試験は「身体検査及筆記試験」で、筆記試験は二つの系統別に行われた。

・日本内地人、朝鮮人、台湾人：国語、漢文、作文、地理（日本地理、外国地理、但シ地理通論ヲ除ク）、歴史（日本史、東洋史、西洋史、但シ上級用国史ヲ除ク）、数学（代数、幾何、但シ対数、立体幾何、三角ヲ除ク）、外国語（満、英、仏、露、独ノ内、一ヲ選択セシム）

・満、蒙、露人：地理（本国地理、世界地理但シ地理通論ヲ除ク）、歴史（国史、日本史、西洋史）、数学（代数、幾何、但シ対数、立体幾何、三角ヲ除ク）、日本語、本人ノ常用語（満、蒙、露語ノ内、一ヲ選択セシム）、作文（常用語）

この結果、日本人で中国語のできる学生が非常に少なく入学したのに対して、満系の学生はすべて日本語にある程度通じた学生が入学することになり、「民族協和」の実践には問題が生じることになる。

第二次試験は第一次試験合格者に対して行われた。これは二つで構成された。

- ・「人物考査ハ口頭試問、其他ノ方法ニ依リ之ヲ行フ」
- ・「第二次身体検査」

一期生に対する口頭試問は、試験官の相当な意気込みで行われた。満洲国人事科長の木田

清は「身体が丈夫で、意思が強く頭脳もいわゆる秀才型ではなくとも優秀な者、実行力に富みたくましい指導力のある者ということで試験をしたが、こういうそろった立派なものもたくさんいました」という。問題は、「頭の方はさほどでないが」という受験者で、試験官の間で喧々囂々であったという。^{注375} 結果、一期生は多彩な人材が入学した。二期生は、審査の「方針が変わったのではないが」（木田）前の結果の反省に立ってやると、学業重点となったという。^{注376}

第一次試験は1937年12月に日系、満系に分けて各大都市^{注377}で、第二次試験は翌年2月に新京又は東京で実施された。第一次試験の旅費は本人の自弁であったが第二次試験のそれは実費が支給された。合格者は満洲帝国公報と日本帝国官報にそれぞれ発表し、推薦機関及び本人にも同時にそれぞれ通知された。

2) 学生

一期生の合格者141名は、民族別に合格ラインを設定した模様で、各塾の民族構成は次のようであった。

（参照 表3-1：一期生(前期)の民族構成）

総数のほぼ半分は日本人、残りの更に半分が漢人（1塾の満洲族1名を含む）であり、全体の75%は二つの民族で占めた。日本人の中には既に日本に併合されていた台湾系の漢民族と朝鮮人とが含まれていてもよかつたのであろうが、朝鮮10名が2名ずつ五つの塾に配分されていることからわかるようにあくまで別民族と考えられていたようである。白系ロシアや蒙古が各塾に1名ずつ配分されずに3名、2名と分けられたのは彼らに対する教育的配慮であろう。

塾頭・江原節之助によると、「露人や漢人は経歴も小学校六年の後、初級中学校三年、高級中学校三年を卒って来た者が大部分な上に、小学校入学の年齢が八歳以上である為に二十二三歳の者が多く、日本人学生よりも大人びて見えた」^{注378}という。実際、年長で優秀な中国人の能力は相当なものであったようである。二期生藤森孝一は前期3年の時の日誌に次のように記している。「夜、闇さんと語る。中学時代に寄宿舎の炊事をやった経験を語る。人生の機微、人間の通情に関する洞察最も深し。吾等拙き者の及ぶべからざる域なり。深き尊敬の念を感じず」（1941年1月23日）。一例ではあるが、中国人学生の実力が窺えよう。

(5) 塾の教育

副総長作田は、「この大学の特色とも言うべきものは、五族協和を内容とする塾生活に置

^{注375} 前掲書, 建大史資料 第二巻, p.10.

^{注376} 同上.

^{注377} 日系は、札幌、仙台、東京、大阪、熊本、京城、大連、新京で、満系は、大連、奉天、新京、承德、安東、錦州、ハルビン、遼源、東京で行われた。前掲書, 建国大学年表, p.59.

^{注378} 前掲, 江原節之助, 民族の苦悶-創設期の塾生活をめぐって, 岡崎精郎(1989)「民族の苦悶-創設期の建国大学をめぐって(2)」解説, 東洋文化学科年報(5): 143.

いたこと」と記している^{注379}が、こうした教育の器にはじめから入れられた学生は有無を言う間もなく学内で「民族協和」することを鍛えられることになる。

塾内の学生構成は、一つの塾に各民族が固まらないよう工夫がされていた^{注380}が、言葉の壁は大きかった。塾頭の江原は、学生を寝室に集め真情を吐露した話をした後の感想を、「その意味が解ったのか解らぬのか、特に漢人は無表情で、『解ったか』と聞けば一斉に『解った』と答へるが、自分は何だか頼りないやうな淋しい気持ちであった」^{注381}という。江原によると、「塾内では何語で話をしても自由であるが、日本語を正語とすることにきめられてみた。案じた通り露人は最も日本語が下手である」。^{注382}また、「漢人の中にも日本語の覚束ない者が多く、中には多少の聞き取りは出来ても、話すことになると露人程度の者も居る。従って日本留学をした者や日本系の学校を卒業した者は屢々通訳として選ばれた」^{注383}というように、日本語での意志の疎通は完全ではなかった。しかし、圧倒的多数の人間が中国人である満洲国において「民族協和」を行なう上での真の問題は、ほとんどの日本人教員が中国語を使えず、学生もまたその学習に必ずしも積極的でなかったことにある。建国大学においてもなお、やむを得ないこととはいえ、その空気・雰囲気的基础は、日本中心の発想からなる民族協和だったのである。

開学当初の塾教師にはかなり個性と信念のある人物が集められた(表3-2参照)。1・4塾の石中広次は東京帝大工学部卒、若くして禅を嗜み、水戸高校剣道部長として著名な剣道家である。2・5塾の江原節之助は陸軍士官学校(病氣)中退の経歴をもつ。辻政信によって建大に懲憑されたの気骨の人格者であった。一期生村上和夫によると、^{注384}江原は日本語の修得度が低かった白露系学生に対して一年間くらい日本語を教えていたという。3・6塾の藤田松二は、京都帝大農学部出身、石原莞爾の推薦で着任した筋金入りの農業実践家であると同時に、日本中心主義から遠い民族協和観を有していた。

3人の塾頭のうち石中は開学前から建大開学に関わった要路の人物として、藤田は農訓^{注385}の指導者・責任者としてそれぞれ多忙であった。江原は比較して「自分は学生に直接接する機会が多かった」^{注386}という。それでも、「二人で一塾50名の学生を見てゆくことは無理だといふので、助手を置くことになった」。^{注387}「塾頭は揃って三十六七歳、助手はそれより十年は若かった」ことからくる気安さもあったのだろう。「一体に助手は学生に好かれた。塾頭

^{注379} 前掲書, 作田莊一, 道の言葉 巻の六, p.217.

^{注380} 「五人の露人を六つの塾に分散して了っては余りに可哀さうなので、石中の一つの塾に三人、自分の一つの塾に二人と、兎に角差し当たり話し相手があるやうにしてやった」。前掲, 江原節之助, 民族の苦悶-創設期の塾生活をめぐって, 岡崎精郎(1989)「民族の苦悶-創設期の建国大学をめぐって(2)」解説, 東洋文化学科年報(5): 140.

^{注381} 同上, p.149.

^{注382} 同上, p.140.

^{注383} 同上.

^{注384} 村上和夫聞き取り調査(2003年3月6日, 電話)

^{注385} 正式には作業訓練だが、農事訓練あるいは農業訓練ともいわれ省略して農訓と言われた。

^{注386} 前掲, 江原節之助, 民族の苦悶-創設期の塾生活をめぐって, 岡崎精郎(1990)「民族の苦悶-創設期の建国大学をめぐって(2)」解説, 東洋文化学科年報(5): 145.

^{注387} 同上.

は三人共堅苦しくて寄りつきにくいと評された」^{注388}と江原はいう。

(参照 表3-2：一期生担当塾頭及び助手の履歴)

開学2年目の5月から8月末にかけて、大学の方針を巡っての塾頭間の対立・騒動があった。筒井清彦命名のいわゆる「建大ノモンハン事件」である。一期生に対する聞き取り調査によると、塾の方針を巡って、3人の塾頭が石中対江原・藤田の陣営に分かれて対立した。それはより大きくは、本流とも言える副総長作田の方针对石原莞爾系の思想との対立であったといわれる。石中には田川博明、筒井清彦らがつき、江原・藤田には根本龍太郎がついた。8月終わり頃に江原が狼煙を上げ、秋になると3人の塾頭は全て退任し、江原、藤田は混乱の責任をとって11月辞職した(両者とも後年復職)。

二期生以後の塾頭は教員の兼任による一塾一塾頭制になる。二年目になると塾頭会議が頻繁に開かれた。塾頭は殆ど学科の教官の兼務である。作田はこの塾を何とか育てたいと苦慮したが、江原はそれを根本的に間違っていると認識した。江原はいう。

「塾は塾頭あつての塾である。卓越した教育者が出た時に、自然に塾が生まれて来るのであって、自分自身が塾頭にならぬ限り、塾舎を造ってから塾頭や一いと探しまわるやうなことでは問題にならぬ。ましてや嫌がる教官を拝み倒して無理やり塾頭室に引きずる込んだのでは寧ろ惨酷だ。」^{注389}

これは江原の見方であり、やや誇張があろうか。教員の資質と頑張りの違いもあろうから一般化することはできないが、一期生作田良夫によれば、二、三期ぐらいまでが塾教員が個性を発揮しながら教育に当たった時期で、四期(1941年入学)以降になると塾頭も大学の教務の一環としての塾頭になっていったような気がするという。

塾頭騒動以後、一期生の塾は再編成されることになる。塾頭が全員退任することになったのは、一種の喧嘩両成敗であろうか。気骨のある塾頭達であるだけに、自ら責任をとったといえよう。塾頭の退任に伴って六つの塾は四つに再編された。1・4塾塾頭には石中に代わって武道訓練(合気武道)の富木謙治が任じられた。村上和夫によれば4塾の場合は塾舎もそのままであったため再編の実感がなかったという。藤田の担当した3・6塾は分散・解消された。

さて、建大の前期学生の為に立てられた独特の塾舎は、12棟12塾分しか造られなかったもので、一期生が3年生になると新入生・三期生を迎えるために他所へ移らねばならなかった。1940年8月31日には一期生の場合は食堂北方に建てられた棟(通称長屋塾)に全員が入所した。ここには一室に十人以上が入れられ、一部の室では他の塾の学生と一緒に生活するようになったため、塾の個性は大きな変化を受けた。

さらに後期に入ると前期の塾は解散された。専門課程である後期は政治、経済、文教の三学科に分かれての学習が本分であることから、塾頭に相当する教官は学年に1、2名が置かれたようである。齋藤精一の記憶ではそれは富木謙治であった。1942年1月15日の塾勤務教官

^{注388} 同上, p.155.

^{注389} 江原節之助, 民族の苦悶-創設期の塾生活をめぐって, 岡崎精郎(1991)「民族の苦悶-創設期の建国大学をめぐって(3)」解説, 東洋文化学科年報(6): 86.

発令リストを見ると、後期二年（一期生）の塾勤務教官は富木謙治と青本敏彦の2名で、以下後期1年2名、前期3年4名、同2年2名、同1年2名が担当した。前期生は前期塾舎に入るので、これとは別に塾頭が任命されたものと思われる。

さて、1941年2月1日、初の後期が開始、「此処に前期を終了したる第一期生122名、並に新しく後期入学したる満系3名（吉林師道高等学校）日系1名（哈爾濱学院）の4名を加へ歴史的堂々の第一歩を踏出す事となった」。^{注390}しかし校舎の方は建築が遅れ、後期塾舎が完成し移転するのは、後期二年開始（1942年1月26日）の約一ヶ月後、2月22日であった。この塾舎は長方形の二階建ての大きな建物で、現存している。一期生齋藤精一によると、一室には各民族混合で7、8人の学生が割り当てられた。^{注391}

このような環境の中で、「五族」といわれた他民族建大生たちの「民族協和」の実践がなされていく。民族協和--既に何度も登場し自明のように使用されるこの言葉は一体何を意味するのであろうか。武道教育を考える前に、この問題を解明しなければならない。

^{注390} 建国大学研究院月報(6), 1941.2.25, p.2.

^{注391} 筆者の1999年の訪問では学生の居室、後期二年塾頭（塾勤務教官）富木謙治の居室を建学することができた。

第4章 「民族協和」と建国大学

建国大学副総長作田莊一は、建国大学の教学の方針を「開学勅書」と「建学要綱」の重視におき、そこに籠められた思想を「建国精神」とし、その「体得」を建大の学生に求めた。作田が建大生一期生全員に対してなした講義「修身道德」の講義録には彼の国家観と満洲国のスローガンであった「民族協和」との関係について次のように記している。

「時代は現代国家に移りつつあります。現代国家の特徴は国家が社会を圧へて行く所にあります。国民を一体となし、自主の個人人格を認めないで国を全体として見るのであります。即ち現代は全体国家を打ち立てて行こうとするのであります。新たに建てられた我が満洲国は初めから全体を成す現代国家として国を固めて行くことに努力し、その為に民族協和が強調されて居ります」^{注392}

ここでは民族協和は現代国家を固成していくための手段であるが、作田の考えをもう少し見てみよう。彼は言う。

「満洲国が是から立つて行くには多くの民族が殆ど民族たることは忘れて、民族という言葉を使う必要のない様にして、皆が仲良く親和して行くと言うことでなければ満洲国は進歩しません。併し、只仲良くして居りさへすればそれで良いかと言ふとそれならば大した仕事ではないのであります。寧ろそれならば仲良くする様な努力をしなくても、（中略）[民族別に] 区別をして其所だけで皆がやっておいて、後は国際関係でも作ってやって行けば割合に楽であります。併しそれでは満洲国の発展と言ふことは考へられない。それならば民族協和と言ふことは手段であるかと言ふと決して手段ではない、即ち各民族が一緒になってやる仕事でありますから、その地均をやる、其の地盤の工事をやるのでありますから、地盤も建物も渾然として一つの大きな国を成すのであって、一方が手段、一方が目的と言ふものでは決してないのであります。」^{注393}

ここから作田は人生や個人の目的論へと話を進めて行くが、この民族協和に関するまとまった講話は、作田が必ずしも手段ではないものとして重視する姿勢とは裏腹に、民族協和の方法と目的との関係に対する説明は十分でなく、この段階ではこの問題をさほど深く考察していないことがわかる。例えば誰でも我考えたであろう有田定一（四期生）の批判、「文武両道の研鑽、それならば柔道、剣道、合気道以外に中国、蒙古、あるいは韓国等の武技を武訓の科目にとり入れていたであろうか。発想がまさに日本人の大学であって五族協和を標榜する満洲国の大学ではない。」^{注394} に応えていないからである。作田はその後の授業でこの問題に触れ、前言を次のように修正する。

「満洲国は民族協和を目的とすると言ったら意味はないのである。それは国も生活目的ではなく、国の生活の出発線である。民族協和と言ふのは、満洲の国を成す人々が、整列をする意味である。（中略）民族協和と言ふことは極めて大事であるが、目的ではない。（中

^{注392} 前掲書，作田莊一，修身道德，p.25.

^{注393} 同上，pp.149-150.

^{注394} 有田定一(1991)語学を疎外した自惚，前掲書，歡喜嶺 遙か(上巻)，p.238.

略)我々は整列し、一致して為すべき大きな仕事は別にあるのである。」^{注395}

作田は「人生の目的は生存、幸福、安楽の三段階を経て造化に到達する」とし、造化を「創造と開化」の意味をもつものとした。前者は、「新たに尚ほ良きものを造り出すこと」、後者は「創造物を摂取することによって、我が心が一段と開けて高位のものに化すること」である。民族協和はその目的を行なうに際しての「出発線」、つまり前提とされた。

しかし実際の建国大学で、武道を修行した学生も含めて、最大の難問だったのはこの出発線に立つことであった。見てきたように建大では一つの塾に各民族が一定の割合で入れられており、塾生活を中心とした大学におけるこの民族間の交流がなされるように仕組みされていた。しかし、彼らとりわけ日本人学生は、作田の考える目的以前の問題、即ち、如何に中国系の学生と「民族協和」していったらよいのか、で悩んだのである。

「民族協和」という言葉は、「満洲国」誕生後その国家の保護下における国民教化のための組織として生まれた協和会の創立宣言及び綱領にうたわれた。それはいわば満洲国の公認スローガン(標語)として掲げられ、建国を正当化する理念として長く満洲の日本人の間に影響を与えた。その特質は何であろうか。かつて岡部牧夫は日本ファシズム研究の一環として満洲青年連盟と満洲協和党を分析した論文の末章で残された問題として「『民族協和主義』のスローガンとしての機能」をあげ、「もとよりこの主張は主義の名にふさわしい思想的実質に乏しく、おそらく学問的検討に耐え得るものではないが、そのイデオロギー的機能は軽視できない」と記した。^{注396} 満洲国建国に至る日本を中心とした東アジアの一連の動きを見た場合、その本質的性格とするところは新国家を正当化し満洲を支配するためのイデオロギー機能にあったとする認識に基づく課題意識からくるものであろう。本章では、「民族協和」の概念についてその発生から遡って歴史的に検討する。^{注397}

1. 「民族協和」とは何か

(1) 五族共和と五族協和

民族協和という標語は、満洲国において、同じ意味の「五族協和」という表現でしばしば用いられた。この五族協和は孫文が用いた「五族共和」を換骨奪胎して用いられた言葉と思われる。1912年1月1日、臨時革命政府の大総統に就任した孫文は共和制の中華民国の建国を宣言した。まもなく大清帝国が滅亡し、秦漢以来二千年あまり続いた君主専制支配に代わって中国に共和制が確立された。革命成功後、孫文は直ちに漢、満、蒙、回(ウイグル)、蔵(チベット)の五族共和を唱えて諸民族の協力と中華民国への統一を唱えた。孫文の民族主義は当初の「滅満興漢」から漢族を中心としつつも主要構成民族を包含した「五族共和」の

^{注395} 同上, pp.182-183.

^{注396} 岡部牧夫(1974)植民地ファシズム運動の成立と展開-満洲青年連盟と満洲協和党, 歴史学研究 406 : 15.

^{注397} 本章は右記の論文を加筆訂正したものである。志々田文明(1993)「民族協和」と建国大学の教育, 社会科学討究 39(2) : 355-386. なお、この論文は、1993年8月9・10日に中国大連市で開催された中国東北教育史国際学術討論会(日本側呼称「第3回日中『満洲国』教育研究フォーラム」)における筆者の報告の準備論文を加筆修正して縮小したものである。

共和思想への発展を示した。^{注398} 五族共和は国旗にも象徴された。この年に制定された中華民国国旗は五色旗であったが、赤、黄、青、白、黒の色はそれぞれ満、漢、蒙、回、蔵に相当し、五族共和を象徴するものであった。この国旗は1928年に国民革命軍総司令に復職した蒋介石が6月13日に五色旗を青天白日滿地紅旗に替えられるまで用いられた。^{注399} 孫文は三民主義（民族主義、民権主義、民生主義）を唱えたが、民権主義は「君権」の否定に立った「共和国」を志向するものであった。1928年九月に孫文が、「往昔圧政ヲ受ケテキタ地方ノ同胞モ、同様国家ノ主体トナリ、共和国ノ主人公トナルコトヲ得タ」^{注400} と語ったように、中国に成立した共和政体では各民族は平等に則った協力によって運営されるものであった。五族共和とはそうした政体を意味したものと思われる。辛亥革命はそれが共和政体への移行であったため、日本においては天皇制の国体に関心をよせる人々によって、共和なる言葉が国体への悪影響を与える可能性をもつものとして忌避されるのは当然であろう。^{注401}

一方、民族協和の「協和」という言葉は、『書経』や『漢書』『後漢書』などの中国の古典にみられ、「あいやわらく、あわせやわらげる」の意味である。^{注402} この言葉には共和にみられる政治性がなかったために、満洲では満洲青年連盟で協和が主張される以前の1926年に現われた。この年創立の満鉄社員会の機関誌の題名に「協和」が使用されたことがそれである。このことについて民族協和の発祥を詮索した西内雅は、「当時の社員会や満洲での社会、文化の活動から見ると、この協和は少なくとも社会、文化の日滿の協和である」、そうであるなら「民族協和の語がなくても、民族協和を意識していたと言へる」、「こういう意味のことは、日露戦争後、日本人が満洲へ進出した頃から、少なくとも日本人の意識の中にあつた」と推測している。^{注403} それが日露戦争後であったかはともかくとして、在満日本人が多民族との協和の必要が感じられたとき、「協和」という言葉こそが、民族間の協力の意味を内に含みつつも「共和」のように日本人に反国体を連想しない言葉として、1926年頃からでてきたのではないか。それが次第に在満日本人の共感を得ていったものと思われる。

(2) 「民族協和」の形成過程

満洲国建国を主導し実行に移していった関東軍に、符丁を合わせて行動し、建国に大きな力を発揮した在野の団体に満洲青年連盟がある。『満洲青年連盟史』によると、1928年11月に結成された満洲青年連盟は、当初から満蒙を「日華共存ノ地域」と主張し、「富源ヲ拓キ以テ彼此相益シ、両民族無窮ノ繁栄ト東洋平和ヲ確保スルコソ我国家ノ一大使命」（満洲青年連盟宣言）としていた。結成時の目的は「大陸における大和民族の発展」であり、「四隣関係民族の協和を基調とした」精神は、「支那国内の真面目な人士によりて受け容れられて

^{注398} 平野健一郎(1988)中国における統一国家の形成と少数民族-満洲族を例として、アジアにおける国民統合, 東大出版会, pp.51-55. 及び、池田誠ほか(1988)図説中国近現代史, 法律文化社, pp.62-72.

^{注399} 内藤堯(1931)各国国旗の由来と国祭日, 同文館, pp.80-82.

^{注400} 孫文(1928)五族共和ノ真義, 孫文全集中巻(1967), 原書房, p.212.

^{注401} 国体への心配の世論の様子については、後藤孝夫(1987)辛亥革命から満洲事変へ-大阪朝日新聞と近代中国, みすず書房, p.30, p.51. からも理解される。

^{注402} 諸橋轍次編(1989)大漢和辞典 巻二, 大修館書店, p.561.

^{注403} 西内雅(1988)満洲事変-民族協和の実現, 大湊書房, pp.101-102.

居た」という。^{注404} 民族協和なる言葉はこの青年連盟において主張されてくる。その過程を平野健一郎論文「満洲事変前における在満日本人の動向」^{注405} によって押さえておこう。

1929年時に青年連盟のなかで用いられる「日華和合」「日華青年協和」「満蒙自治制」といった言葉や構想は、究極にして当面の目的であった満洲の特殊権益確保を実現するための手段として提案された。つまりこうした言葉や構想は「在満日本人の生活に根底のところまで規定されながら提出されたもの」であり、青年連盟にとって「それらは総て満蒙における日本の民族的発展に集約される」。1930年になると、張学良政権の満洲における排日反日政策が組織的になり、一方、「世界恐慌が日本の満蒙経営の大宗満鉄を襲った」。こうした中、多くの日本人が満洲を去って本国へ引き揚げていき、残されたものの焦燥感は募った。青年連盟は満洲の政治的経済的危機を在満日本人（自己）の生存権確保に対する危機として考えた。彼らは民族発展を云為する余裕をすら失っていた。1931年に入るとその怨みは一層強まり、満洲事変三ヵ月前の同年6月に大連で連盟主催の「難局打開時局問題大会」が行なわれ、そこで五本の決議が可決された。満洲国建国のスローガンとして継承される民族協和なる言葉が登場するのはその第五項（「満蒙ニ於ケル現住諸民族ノ協和ヲ期ス」）においてである。

この大会を皮切りに、青年連盟は各地で演説会を開催していく。彼らは「自己の生存権確保を日本の生命線維持と等置し、同一化する心情論理を構成し」、青年連盟と大連新聞社は7月にその論理によって第一回母国遊説隊を送り出した。しかし、日本政府や内地日本人の満蒙への冷淡な態度に憤りは激化し、在満日本人の母国からの独立が叫ばれ始めた。この時期の在満日本人は、吹き荒んでいた中国ナショナリズムを一般民衆の排日反日としてではなく、張学良政権の「半封建的デスポティズムの非合法的エゴイズム」として捕らえた。つまりそのエゴイズムは、満洲在住諸民族、殊に蒙古民族及び韓民族への圧政にほかならない。張政権によって生活権を蹂躪されている事実においては在満日本人も同じだ。しかも日本からの独立も場合によっては辞さないという考え方で、「在満日本人は中国ナショナリズムが打倒しようとする日本帝国主義と自己とを主観的に分離し、と同時に、満洲在住他民族の民衆との間に部分的な同一化を行なった」のである。このような追いつめられた在満日本人の民族協和は、「多民族に呼びかけるスローガン」である前に、「内部分裂を示しつつあった日本と在満日本人社会に向かって」「我々はこの方法によって生存をはかる以外にないと宣言するスローガンであった」のである。

テリー・イーグルトンは『イデオロギーとは何か』（1991）で、近年見受けられるイデオロギーの17の定義リスト^{注406}を示している。平野によって整理された青年連盟にとっての民族協和のイデオロギー的性格はこの内の、「(f) 主体に立場をさしだすもの」、「(k) 意識的社会行

^{注404} 満洲青年連盟史刊行委員会編(1933)満洲青年連盟史, 復刻版(1968), 原書房, p.402.

^{注405} 平野健一郎(1970)満洲事変前における在満日本人の動向-満洲国性格形成の一要因, 国際政治(43): 60-68.

^{注406} テリー・イーグルトン, 大橋洋一訳(1999)イデオロギーとは何か, 平凡社ライブラリー, p.21. 原著は右記. Terry Eagleton, IDEOLOGY: An Introduction, (Verso, 1991). なお本書は、イデオロギー研究の必要性の認識を踏まえて、この概念の使用者の使用例を歴史的に丹念に解説・整理した秀逸な書である。

為者が、自分の世界を意味づけるときの媒体」、「(o) 個人が個人と社会構造との関係を生きたときに必要な媒体」ということができる。

(3) 金井章次と「民族協和」

以上の歴史的経緯を踏まえた結論を後の平野論文「中国における統一国家の形成と少数民族」に見ると、民族協和は満洲事変などを正当化するために特定の人物が提唱したという類のものでなく、「無名の日本人達が自分達の苦境を打開するために、徐々に形成したもので」、「満洲における日本人と中国人との『協和』から、それ以外の民族集団をも含んだ『協和』の提唱へと展開していった」ものであったという。^{注407}

しかし、「特定の人物が提唱したという類のものでなく」という記述に関しては平野論文と異なる文言がある。1930年7月から青年連盟理事長代理（翌年10月第二代理事長）として実際の運動に関与した金井章次の「満洲事変記」によれば、前述した1931年の五本スローガンは自ら起案したという。その第五項決議は実は「満洲に現存する諸民族の協和による独立国の建設を期す」であり、その二年前の「昭和四年から青年連盟のスローガンの末項は」そうであったという。^{注408} また末項がカットされた訳は、「この条項は、中国に対して不穏当だとして、関東庁の当事者から『独立国』云々の文字を削除するようとの勧告があったので、『協和を期す』と、この項を結んでしまった」からという。さらに、「青年連盟の独立国案の特色は、一般連盟員には公表していなかった」が、「昭和六年、事変が起きると間もなく、青年連盟第四回大会を撫順で開いた時、改めて『満洲における独立国』の決議をやった」というのである。^{注409} ここで金井は民族協和を独立国を建設するための手段としてとらえ、そうした考えが彼中心の発案であったことを示唆している。当事者のこうした記述には無視できない説得力もある。しかし『満洲青年連盟史』によると、1929（昭和4）年6月の満洲青年連盟第一回議会において営口支部から提出された議案「満蒙自治制の確立案」の審議において、当時連盟顧問であった金井は、「満蒙に自治制を敷くは母国に対し甚だ遺憾とする点を多々生ずるものにして」、「慎重に討議せられんことを切望す」と述べ、^{注410} 自治制案に消極的な発言をし反対派の役割をしている。この自治制案は彼のいう独立国構想と比べて中国に対してより控えめな主張であることから考えると、1929年段階から独立国を考えていたとする金井の記述にはやや信憑性が欠ける面もある。ところが金井の主張は具体的である。

^{注407} 前掲書、平野健一郎、中国における統一国家の形成と少数民族-満洲族を例として、アジアにおける国民統合、p.71. なお、緒方貞子氏は在満日本人の民族協和思想は青年連盟発足前の1928年5月の第1回満洲青年会議において提出された満蒙自治制の中に原理としてあったと見ている。平野氏の「満洲事変前における在満日本人の動向」に緒方論文の引用はあるが、この点には触れていない。（緒方貞子（1966）満洲事変と政策の形成過程、原書房、pp.72-75.）

^{注408} 昭和4(1929)年という時期については問題が残る。『満洲青年連盟史』を見る限り「日華青年協和連盟」という言葉以外に民族協和なる言葉は先に述べた1931年6月の第5項スローガンまでこれを見ることはできない。実際、満蒙の自治制についても1929年11月の青年連盟の議会では「極めて文化程度の低き支那の現状において吾々が之と伍して自治制を建てることは不可能である」（復刻版、p.157.）といった認識の議員らの存在によって決議がなされない現状であり、民族協和の理念はあるいは金井個人の心中にのみ早くから潜伏していたのかもしれない。

^{注409} 金井章次・山口重次(1986)満洲建国戦史-満洲青年連盟かく戦えり、大湊書房、p.4.

^{注410} 前掲書、満洲青年連盟史、復刻版、p.103.

彼は、「昭和四年から青年連盟が唱道した『民族協和』は」、「第一次世界大戦の終末期に唱え出されたウイルソン大統領の『民族自決』に対決する意味で主張されたものである」^{注411}という。つまり満蒙において「諸民族の協和」によって独立国の建設を行なうというのは、金井の米大統領に対する対抗意識から、1929年から青年連盟で唱道されたものというのである。^{注412}言うまでもなく民族自決は第一次大戦後の1919年のパリ講和会議で第一次大戦終決のための14カ条を提示した内容の一つで、国際秩序の原則として認められた権利である。「民族自決の原則の適用したのは東欧地域に限られていたが、植民地独立運動が民族自決を正当化の論理に用いたため、本来は欧米の国民国家の概念であったこの権利も、世界的な広がりをもつこととなった」^{注413}といわれる。特にロシア革命後のソ連が民族自決政策を具体化したことやアジア・アフリカ諸国の民族運動の高まりは、1919年に日本の山東利権を承認していた民国政府の態度を不満として北京に起こった「五四運動」に象徴されるアジアの反帝反封建運動を高揚させることになる。こうした世界の状況を考えると金井の言は案外真実を伝えているかも知れない。また、金井は民族協和の意味について、「満洲青年連盟は創立の昭和三年には、『満洲におけるわが大和民族の発展を期す』であったが、これは現実に現地人との実力闘争となったので、間もなく『民族の協和を期す』に変更したのだ」と記している。

(4) 満洲国と「民族協和」

1928年12月、蒋介石の国民政府の参加に入ることを決定した張学良は東三省に易幟を断行し、両者の関係を緊密化して排日運動を推進したため燎原の火のごとき勢いで広がった。^{注414}将来満洲における自己の存在を否定されるのではないかと危機感をつのらせた在満日本人は、自らの生存のために「満蒙在住の目覚めたる、更に圧迫と搾取にあへく諸民族と相提携し」て「共和の楽園を満蒙の天地に招来する」^{注415}ことを願っていた。そうした不安と希望を一気に解決したのが満洲事変であった。緒方貞子によると、事変を推進した関東軍首脳部（特に板垣征四郎、石原莞爾）の策案には民意の尊重や民族の平等の原則の重要性が主張され、新国家の統治形態を一時的とはいえ民主政体とする「破格」さを持っていた。^{注416}しかし、関東軍首脳部の「破格」大胆な新国家建設案は多くの矛盾を含んでいたため関東軍幕僚間においても軍の方針が不明との批判を生じ、日本人の利益を優先する方向で意志の統一が図られ、結局、「日本人はいかなる他の民族よりも大きな保護を与えること」^{注417}となった。彼らは青年連盟が掲げた民族協和を採用するが、それは民族協和が中国ナショナリズムに対

^{注411} 前掲書、金井章次、山口重次著、満洲建国戦史-満洲青年連盟かく戦えり、p.7. なお「民族自決」とはウイルソン米大統領が1918年1月の議会演説で、第二次大戦後に植民地独立のための政策の指導原理となった。

^{注412} 一方青年連盟の主力会員・山口重次は民族協和の語義は「『民族闘争』に対する反語で」、「諸民族の対立抗争を止めて、民族が共同して平和を建設維持するという意味で、東洋に古来慣用された政治的用語（万邦協和）」と記している。同上、p.143.

^{注413} 世界大百科事典(27)、平凡社、1988、p.585.

^{注414} 前掲書、満洲国史 総論、pp.65-66.

^{注415} 前掲書、満洲青年連盟史、復刻版、p.464.

^{注416} 前掲書、緒方貞子、満洲事変と政策の形成過程、p.214.

^{注417} 同上、p.217.

する最も効果的な武器と考えられたからであった。また平野健一郎によると事変後の関東軍には民族協和は必要不可欠なものではなかったが、「日本政府と国際政局に対する事後粉飾の手段」と「軍事行動後の占領行政と建国工作の面で」利用価値があり、「この理念は、満洲国正統化イデオロギーの地位をあたえられ」、それがこの理念の機能であったと言う。^{注418} ここでの民族協和は、イーグルトンの定義リストにいう、「(c) 支配的政治秩序を正当化するのに貢献する観念」、「(i) 社会的に必要なイリュージョン」に該当しよう。^{注419}

関東軍幕僚会議を受けて、1932年2月、各省主席との間で新国家・満洲国建設に関する交渉が行なわれた。『満洲国史』総論によると、国家形態を巡っては君主制、共和制の間で激論が交わされたが、結局折衷案の宣統帝溥儀を国家元首（執政）とし、「民本」政治を標榜する民主共和制の国家となった。^{注420}

こうして3月1日、東北行政委員会委員長・張景恵は満洲国政府の名で建国宣言を発表した。建国宣言には「凡ソ新国家領土内ニ在リテ居住スル者は皆種族ノ岐視尊卑ノ別ナシ。原有ノ漢族、満族、蒙族及日本、朝鮮ノ各族ヲ除クノ外、即チ其他ノ国人ニシテ長久ニ居留ヲ願フ者モ亦平等ノ待遇ヲ享クルコトヲ得」^{注421} と、国籍の如何を問わず各民族平等の原則が打ち出された。国旗は縦四横六の黄地で左方に全面積の四分の一を区切り、上から紅、藍、白、黒の四色を染め抜く旗で「新五色旗」と呼ばれた。配色の意味は「元来支那人は黄色を好むので、地色を黄色にして満洲の広大なる沃土とその慶福を表徴せしめた。左上陽の赤色は熱情、赤誠、青色は青春、澆刺、白色は博愛平和、純真公平、黒色は克己、堅忍不拔を表現し、全五色は五族協和の国是を現した」^{注422} という。この新五色旗には、満洲国建国の指導者たちが新しい国の経営のために、孫文と同じく各民族の共和（協和）を必要としていたことが窺える。五族協和は民族の数を示すことによって民族協和をより具体的に表現したものと見えるから両者は同じ意味といえる。しかし、後者（民族協和）の言葉そのものは建国宣言等には現われていない。民族協和が「満洲国」のいわば公的文書に現われるのは、1932年7月25日に行われた満洲国協和会発会式における創立宣言の三箇所、及び同綱領の一箇所に於いてである。

・「満洲国協和会創立宣言 / 「[滿蒙が]今日に至るまで文化猶未だ興らず、富源未だ啓けざるものは即ち過去に於て各民族協和を欠きたるが為なり。」「・・・この時に於て若し諸民族にして建国精神に基づいて王道主義に則り、協和に努力し、共同発展せば・・・」「本会の目的は、建国精神を遵守し、王道を主義とし、民族の協和を念とし、以て我が国家の基礎を強固ならしめ、王道政治の宣化を図らむとするにあり」

・「綱領 / 本会は政治上の運動をなさざるも運用の目標及び綱領左の如し。 / 一 宗旨 王道の実践を目的とし軍閥専制の余毒をさん除す。 / 二 経済政策 農政を振興し産業の改革に

^{注418} 前掲書、平野健一郎、満洲事変前における在満日本人の動向-満洲国性格形成の一要因、国際政治(43) : 69. 及び、中国における統一国家の形成と少数民族-満洲族を例として、アジアにおける国民統合、東大出版会、p.73.

^{注419} 前掲書、テリー・イーグルトン、大橋洋一訳(1999)イデオロギーとは何か、p.21.

^{注420} 前掲書、満洲国史 総論、pp.205-206.

^{注421} 同上、p.221.

^{注422} 同上、p.206.

勉むることにより国民生存の保障を期す。 / 三 国民思想 礼教を重んじ天命を楽しむ、民族の協和と国際の敦睦とを図る。」^{注423}

この協和会の前身となったのが満洲協和党であった。この党は青年連盟の幹部山口重次や小沢開作らが参謀石原莞爾の支持をえて、青年連盟に代わって新国家建設の一翼たらんとして「建国精神の確立とその普及」^{注424}のために組織した党であった。しかし結局関東軍はこの党を改組して国家的組織のものとする方向で動き、協和党は満洲国協和会と改称され、山口重次等の意に反して名誉総裁に執政溥儀、名誉会長に関東軍司令官本庄繁、会長に国務総理鄭孝胥などの大物を並べた官製の組織として発会した。綱領前文に「本会は政治上の運動をなさざるも」とあるように、協和会は政権獲得を目的とする政党としての性格を否定されていた。しかしその一方「協和会が三千万大衆の支持を獲得し得るに至れば、これをもって国家の根本政策決定機関となすべし」（1932年8月発表「協和会創立の理念」）^{注425}とあり、政治目的達成の志向ある団体としての性格づけもなされており、協和会は当初より石原莞爾らの意向も汲んだ折衷的な性格を持っていた。そこには協和党を担って活動してきた山口ら青年連盟幹部やそれを支持した石原参謀らの考え方とそれに組まない考え方とが関東軍及び満洲国政府の内部で対立していたことが窺われる。そうした矛盾を孕みつつ折衷的に生まれた文書が協和会創立宣言及び綱領などであった。以後満洲国において「民族協和」が公的なスローガンとして掲げられることになるのである。これらは石原や山口からみれば妥協の産物で不満も多かった訳だが、そこにはなお彼らの意図が反映されていたとみるべきであろう。

(5) 協和会の改組と「民族協和」

しかしながら青年連盟以来の活動家で協和会の創建に大きな役割を果たした山口重次らの認識では、1932年7月25日の協和会発足の「十日を出ない八月初旬に」は、「『民族協和』主義に対する死刑が宣告されました」^{注426}という。8月6日の陸軍の異動で関東軍司令官以下板垣、石原など主な参謀が殆ど交替されたことによる。新しく赴任した小磯参謀長の方針変更により協和会は関東軍から政府総務庁の管轄化におかれ、「満洲国協和会は政党たらしむべからず。政党の萌芽たらしむべからず。教化団体として存続するか否かは総務長官の任意たるべし」^{注427}と命令された。その後関東軍の方針変更によって民間団体を協和会一本で統制することとなるが、協和会内部では、「協和会を同志的組織とするか、あるいは広く国民組織とするかの根本問題が、たびたび議論の的となり、この結果頻々として会務機構の改組や人事刷新が繰り返された」。^{注428} 政府・日系官吏と協和会（事務局次長山口ら）との対立抗争が目立ってくると山口らを支持する者たちで対策が練られ、1934年の帝制実施後の9月、政府と協和会との二位一体制度に改組されることになり、総務庁次長の阪谷希一が現職のまま事

^{注423} 創立宣言、綱領ともに、右記に収載。前掲書、満洲国史 総論, pp.264-265.

^{注424} 小澤征爾編(1972)父を語る, 中央公論事業出版,p.235.

^{注425} 前掲書, 満洲国史 総論, p.563.

^{注426} 前掲書, 金井章次・山口重次, 満洲建国戦史-満洲青年連盟かく戦えり, p.251.

^{注427} 前掲書, 小澤征爾編, 父を語る, pp.213-214.

^{注428} 前掲書, 満洲国史 総論, p.563.

務局次長を兼務し、山口等民間出身者5名が退陣した。^{注429} 1934年12月関東軍司令官が交代し板垣征四郎が参謀副長となると関東軍の協和会に対する関心は再び重要性を帯びた。1935年5月には中央本部に臨時調査委員会を設置し、会の組織及び工作の根本方針について調査研究を進め、機構の大改革、人事の刷新強化を行った。1936年7月の協和会第2回改組は、日本の治外法権撤廃にともない満洲国民としての在満日本人の地位と使命を認識するために協和会の下に在満日本人を組織化することを狙ったものであった。

こうした協和会の拡大方針に対して協和会東京支局の石原莞爾らは「陣容拡大に伴う内部分裂化あるいはその運営の官僚化を懸念し」、^{注430} 協和会本来の主旨にもとると反対した。関東軍の辻政信大尉起案の「満洲帝国協和会の根本精神」は石原等によってかなりの修正がなされ、1936年9月18日の関東軍司令官植田謙吉声明となった。そこには「民族協和シ正シキ民意ヲ反映セル官民一途ノ独創的王道政治ヲ実現ス」と目的が記され、協和会は「国家機構」であることが公認され、「唯一ノ思想的、教化的、政治的実践組織体ナリ」とされた。政府と協和会との関係については、「従属機関ニ非ス、対立機関ニ非ス、政府ノ精神的母体ナリ」と位置付けられた。石原の影響も見られるが、一方で、「王道政治ノ実現」のために「全国民ノ動員」の完成を期待されており、協和会の拡大方針は堅持されることとなった。

^{注431}

協和会の政治的機能を歴史的詳細に分析した平野健一郎の「満洲国協和会の政治的展開」によると、協和会の基本的任務は一貫して政治的安定の創出にあった。^{注432} 協和会は漸次その党派的・同志的性格を薄められ、会自体を渾然たる国民的組織とみせかけて国民の動員を行なうようになる。そのことによって満洲国の外面的統一を誇示し、正当性主張の根拠とすることができ、表面的な政治的安定が創出されたという。そのための手段が民族協和であった。協和会の変わらぬ理念であった民族協和もまた一貫して満洲国の政治的安定に貢献したといえる。こうした平野の本質的な把握は認めざるを得ないとしても、他方で緒方が記すように満洲事変当時の「関東軍の満洲人民大衆に対する態度は、主として日本人民（青年連盟らに在満日本人-引用者註）の大衆（中国人-引用者）に対する態度の反映であり、それなりの誠実味のあるものであった」という記述にも一端の真実を認めざるを得ない。もちろんその後日本の戦略基地及び補給源として使用する要求が強くなるにつれ「満洲人民の利益に対する考慮は大きく後退し」、「日本帝国主義は何ら自制のない赤裸々な権力の追求と化して行った」^{注433} わけであるが、こうした事実にもかかわらず民族協和はその後も満洲国建国の「正義」を証すものとして社会に機能していったと思われる。連盟理事長だった金井章次も協和会思想について「その後、石原参謀の強い支持と、板垣参謀の援助で、満洲国内の上下に深く侵潤して行ったのである」^{注434} というが、建国初期の理想の影響は後でみるように1938

^{注429} 前掲書、小澤征爾編、父を語る、pp.344-345. 及び、同上、p.564.

^{注430} 前掲書、満洲国史 総論、p.566.

^{注431} 同上、pp.566-568.

^{注432} 平野健一郎(1972)満洲国協和会の政治的展開、日本政治学会編(1972)「近衛新体制」の研究、p.235, 275, 277.

^{注433} 前掲書、緒方貞子、満洲事変と政策の形成過程、pp.307-308.

^{注434} 前掲書、金井章次・山口重次、満洲建国戦史-満洲青年連盟かく戦えり、pp.129-130.

年開学の建国大学の学生の心中に真剣な課題として生きることになる。

(6) 「民族協和」の概念

満洲における民族協和という言葉の変遷についての以上の概観をふまえて、ここでは民族協和の概念を規定しておきたい。民族協和は孫文の五族共和に対抗して用いられた五族協和と同意語で使用されてきた言葉と思われる。元来共和政体とは「何種類かの代表者群（議会）が国政を掌握する、民主制、又は半民主的な貴族制の政体」^{注435}と辞典的に定義されるように民主主義的な要素を含む。原田綱によれば共和主義の政治体制の構造的基礎は、「政治的平等を実現する各個人が主体であるところの人民主権に存する」。^{注436}共和とはそのような内容・方法を言うのであり、見てきたように協和はそれ（共和）を別の言葉に置き換え自己中心に意味づけたものと思われる。従って本質的に民族協和は民主的な要素がはじめから刻印されていた概念と考えるべきであろう。このことは既に引用した青年連盟の1931年7月のパンフレットの「民族協和に精進し日本文化を背景とする共和の樂園を満蒙の天地に招来する」という文言のなかに見て取れるし、また、戦後に山口重次も民族協和は「欧米の『共和』とほぼ同様の内容をもつものと信じます」^{注437}と記していることから理解されよう。一方、万邦協和なる言葉はそれが人口に膾炙していたかどうかは別にしても、満洲国の民族協和に並ぶもう一つの理念であった王道と同様に中国の古語であった。五族協和＝民族協和は、この中国の伝統「協和」をもって西洋の伝統「共和」に置き換え、満洲に住む圧倒的多数の漢民族に受け入れ易くし、満洲国建国後は新国家建設を正当化するためのものであった。また同時に、1919年以後国際連盟によって提唱された民族自決の影響を受けた中国ナショナリズムの対抗装置として期待された。こうした歴史的性格と先の民主的性格とを合わせて考えると、「民族協和とは、満洲事変前に満洲で使われるようになった概念で、共和政体への指向性をもった民族間の協力を意味する言葉であり、『満洲国』建国後その正当化のイデオロギー機能を発揮した思想」と辞典的に定義することが許されよう。

2. 建国大学における「民族協和」

(1) 根本的矛盾

「民族協和」は具体的には満洲青年連盟ら在満日本人が満洲で生き残るための方途として掲げたスローガンであった。それは「王道楽土」と並んで石原莞爾ら関東軍参謀によって新国家建設の標語として認知され、以後石原はその変わらぬ熱心な提唱者となった。またその標語は後から満洲に入った少数民族としての日本人が満洲で生きていくための正当化の論理として必要不可欠のものであった。副総長作田も各民族が生きる「出発線」としての民族協和の必要性を認めていたが、1944年にはその独特の歴史観・国家観から中華民国の民族自決

^{注435} 新潮現代国語辞典, 1985, 新潮社, p.326.

^{注436} 世界大百科事典(7), 平凡社, 初版, 1981, p.562.

^{注437} 前掲書, 金井章次・山口重次, 満洲建国戦史-満洲青年連盟かく戦えり, p.143.

を批判し、それとの関係で民族協和の必然性と役割について次のように言及している。^{注438}

「近世に於いて（中略）ヨーロッパにありては異縁族^{注439}は相和すること難しとの前提の下に、而かもそれ等の間の衝突を避くるには一縁族一国家を立つる外なしとの結論に達した。（中略）第一次世界大戦の終わる時には謂ゆる民族自決主義が唱へられ、縁族を標準とした幾多の小国家が創立された。（中略）真に縁族の独立要望に出でたるものと雖も、民族自決主義は失敗に終り、再び国家整理の時代に入った。（中略）現代の世界生活の中にあつては、人口数千万の一縁族国家と雖も国家の経営を全うしようとするれば、一国の力を以てしては足りりとせず、数国の共同組織を結ぶ必要がある。それが先づ現れたものが後述の日満不可分関係である。民族自決は小縁族にあつては立国不能を意味する。満洲建国に当たって在住縁族の協和を基礎としたることは、これなくしては建国不能であつたからである。」

「民族自決より民族協和へと進出したるは、満洲建国の一大光彩を放てる特徴であつた。（中略）縁族協和は満洲建国の一大基礎であり建国原理に属するが、更に縁族協和の美果を結ぶことが建国本義の一内容として特に強調せられるのである。」

作田はこれを建大の教育に結びつけた。「協和会が政治面において民族協和を計ることに同調して、建国大学では教学面において民族協和を取上げ具現するに努めた。教授としては羅振玉及び袁金鎧の二大儒家を名誉教授に推し、朝鮮からは崔南善氏を教授に招いた。北京においても有力なる教授を求めたが、折柄反満抗日の風強く、（中略）僅に飽明珍氏及び蘇益信氏を聘し得たに止まった」。^{注440} 加えて仕組まれたのが、塾教育と訓練教育の両面から異民族学生との「民族協和」を実践することであつた。

しかし、建国大学での学生間の「民族協和」は、学生の中に凄まじい葛藤を伴わせるものであつた。その根本は満洲国において日本人が他民族に対して圧倒的に強い立場にある現実にあつた。学生が建大の外に一歩出たときにたちまち出会う日本人の傲慢な姿は、日本人学生を憤慨させ、中国人学生等を怒りに震え上がらせた。しかし学生たちがそのギャップに悩んだ矛盾も、軍人指導者の内心にあつては常識であつた。

関東軍参謀長東条英機。建国大学創設時の創設委員会委員長委員長であつた彼は、作田によれば彼も建大に関する作田の当初の方針に嘴を入れなかつたといわれる。東条は満洲国や民族協和に対してどのように考えていたのであろうか。東条の満洲国に対する基本認識は、1938年春に関東軍の経済顧問として着任した岡野鑑記（翌年に建大教授）の次の言葉に窺える。

「日本政府と、出先官僚としての満洲国政府と、日本独占資本家とが、三位一体の主体となつて、植民地経営をしていたことは事実であつた。（中略）遠大な理想を描いていた石原將軍にとっては、右のような方式と意識とによる満洲経営のあり方に対して強く反対したの

^{注438} 前掲書、作田莊一(1944)満洲建国の原理及び本義、pp.42-49.

^{注439} 作田によれば縁族とは「血脈縁、住地縁、氣質縁、言語縁、分聚縁、祭祀縁、文化縁、利益縁、道義縁、経歴縁、運命縁等に以て結ばれたる人々の大団円を指し」、文化を創造する。また国家とは「縁族が統治によって全体を組織し、全体者の生活として経営を為すものが即ち国家である」。同上書、p.42.

^{注440} 前掲書、作田莊一、道の言葉 巻の六、p.244.

は当然であった。(中略)問題は、政治行政の実体を動かしていた官僚と、これを指導・推進していた一部の軍人の考え方とやり方との中に、植民地支配的なものが含まれていたことは事実であった。私は経済顧問として、しばしば東条参謀長に意見を具申したが、彼は『君は満洲国の独立とか、民族協和とか、本気で考えているのかね』と、笑いながらいったのを記憶している。」^{注441}

東条にとって「本気」で考えるべきものは日本のことであり、満洲国も民族協和も本気で考えるべきものではなかったことが理解される。東条がいた当時の関東軍はむしろこのような考えが支配しており、満洲事変以後に石原が残した民族協和・王道楽土をスローガンとして掲げた独立国建設の考え方は彼らの意図する満洲国正統化のためのイデオロギーとして機能していたといえる。民族協和を追求した最高学府・建国大学の開学はそうした満洲国の植民地化が進む矛盾した現実の中でであった。

七期生水口春喜はそれを「根本的矛盾」として巧みな比喻で記している。

「日本の中国東北地方への侵略とその産物である傀儡国家・満洲国の容認を前提とするかぎり、建国大学の純粋なロマン的民族協和は到底、成り立ちえない根本矛盾をもっていた。それは、人の家に押し入った強盗が凶器をもって家人を脅しつけ、さあ、仲良くやろうではないか、と民族協和論を説いているようなとき、それに応ずるかどうかに迫られている図に似ていた。」^{注442}

現在の中国政府の中国の東北部実効支配を是認する立場また中国共産党の立場から、当時の日本の帝国主義的進出を評価すれば当然の認識であった。このような認識のもとでは、民族協和は戯言であり自己正当化の欺瞞であった。しかし当時の日本人の認識は第1章1-3及び第3章1各章で見たように全く異なっていたのであった。では、建大においてはどうかであったのか。

(2) 議論と対立

一期生齋藤精一の回想文を見よう。^{注443}

「民族協和は、きわめて困難な課題であった。一期生の場合、入学から卒業までの五年間塾生活において、また大学内外での行動に際して、異民族の学生と何のへだてもなく、思想、信条をこえた友情と親睦の限りを尽くした。しかし、いったん民族問題の根幹について議論するや、深刻かつ激烈な対立は容易に解けなかった。それぞれの民族が背負った過去と、学外で見聞する差別の横行や、強制、虐待の現実を如何に改善、改革するかについては、正義感に泣き、切齒扼腕するも、学生の身分としては、力及ばざるところが多かった。」

「民族協和は、長い忍耐の積み上げによるものと、思い知って、なお失望することなく、将来を期して努力を続けた。しかし戦局の激化とともに、日系学生のほとんどが軍務に動員され、ほどなく終戦、閉学となり再び学窓に戻ることが出来ず、青春の夢は終わった。心残

^{注441} 岡野鑑記(1977)『ある経済学者の一生-自伝と随想』, 白桃書房, pp.113-114.

^{注442} 水口春喜(1991), 『建大の民族協和理念を考える』, 前掲書, 歡喜嶺 遥か(上巻), p.200.

^{注443} 齋藤精一(1991)『悲しく、懐かし歴史を想う』, 前掲書, 歡喜嶺 遥か(上巻), p.122.

りであった。」

この一文には、建大における言論の自由が貫徹されていた事実、民族問題に関する激しい対立が少しも友情を壊さなかった事実が描かれている。一期生の李水清（台湾）もまた、「一、二期生までは全学共に非常に真剣に創学の精神を探究しました」と、^{注444} 同様のことを記しているが、これらの現実には建大生一期生、二期生ほか少なくとも開学2、3年の建大に在学した人々に共通した認識であった。

一期生中国人学生の中で、民族協和への取り組みが崩れるのは、勿論政治・軍事情勢の変化という主要因があったが、大学が行った1940年11月18日から12月7日迄の日本への修学旅行が契機となった。日本紀元2600年慶祝のために実施されたこの旅行は日系学生主体の第1班と満系学生主体の第2班にわけて約120名の学生が参加して行われ、下関から大阪、山田、奈良、京都を経て東京を訪問し、日本の国防、産業、経済の発展に接しさせ、また日本の帝国の歴史と伝統、国力を認識させること等が目的であった。^{注445} しかしながら中国系学生は、東京における四日間の日程で行われた日本学生との交流の際に、参加した中国の留学生グループからの反満抗日運動の勧誘を受け、建大在学中から少しずつ目覚めてきていた中国への愛国心＝反満抗日の火を燃え上がらせていくのである。それは、一緒に民族協和に取り組んできたに日本人学生から見ると裏切りとも見える行為であった。

しかし彼らはそうはとらなかつた。注意しなくてはならないのは、彼らの愛国心と日系学生との友情が並立して生きていたという事実である。開学当時の塾頭江原節之助は、塾での座談会における様子を次のように記している。

「自習時間をつぶして行ふ座談会は塾の極めて重要な行事である。（中略）民族の異なる学生間の討論は往々夜を徹して続けられ、大勢塾頭室に押しかけて来て、塾頭は夜の眠りを奪はれることもあった。」^{注446}

「塾の座談会は度々行われた。塾頭の提案で開くこともあれば、学生の発意で催されることもあった。最初に出た他民族の不満のぶちまけは、町で見る日本人が偉そうにしているといふことであった。（中略）汽車に乗るのも、満人は犬か猫のように追いまくられてやっと乗る。同じ料金を払っても日本人は丁寧な待遇される。平等な取り扱いがあってほしい等々々……。一人一人が具体的なことを訴える。之に対して日本人学生は、事実は率直に認めてお詫びし、自分達が社会に出た時には、そんな無茶なことは満洲から払拭しなければならぬと誓った。」^{注447}

ある日の座談会では日本の開拓問題が中心になった。「漢人は、日本開拓民に追はれる漢農の悲惨な運命を訴へ、朝鮮人は、嘗々辛苦してやっと水田を拓くと、すぐに日本人に取り上げられて、今度は水利に悪い所に移住しなければならぬとこぼした。かくて座談会の問題は倫理問題から次第に政治問題に発展していった。此の傾向はどの塾でも同様であった。」

^{注444} 李水清氏書簡（1993.9.17日付）

^{注445} 前掲書，建国大学年表，pp.268-269.

^{注446} 前掲，江原節之助，民族の苦悶-創設期の塾生活をめぐって，岡崎精郎（1990）「民族の苦悶-創設期の建国大学をめぐって（2）」解説，東洋文化学科年報（5）：147.

^{注447} 前掲，江原節之助，民族の苦悶-創設期の塾生活をめぐって，岡崎精郎（1991）「民族の苦悶-創設期の建国大学をめぐって（3）」解説，東洋文化学科年報（6）：74.

異民族学生の発言は、「現在関東軍のだんびらの下、どんな集会に於いても聞くことのできぬ悲痛な叫びである。日本人学生はただ聞き役に立つばかりで、それでは今どうしようかという力のない以上、苦しい立場に置かれる事が多かった。」^{注448}

「時には日本人学生から痛烈な攻撃をかけることもあった。(中略)朝の掃除は殆ど日本人と朝鮮人でしなければならなかった。農業の実習は朝鮮人以外の他民族は嫌いな者が多かった。中には時間がくると、何処かに姿を消す者も居た。頭を使う者は人を使い、体を使う者は人に使われるとの古い観念は此処でも見ることができた。日本人はこれを猛烈に攻撃した。」^{注449}

「朝鮮人学生は〔植民地朝鮮の〕総督政治の攻撃に終始した。其の同化政策--其の中特に教育問題は論議の中心であった。漢人のなかには、皇帝は日本人官吏の皇帝であって、真に国民の皇帝ではないときめつける者も出てきた。露人学生は一人超然としていた。蒙古人はめったに口をきかなかった。偶々発言しても人の耳にさはらぬ事が多かった。」^{注450}

日本人学生の中からは、「あまり放任して置いたらどんなことを言い出すかもわからぬ。一度塾頭から言論を慎むやうに注意してほしいとの注文もあった」が、江原は、「言論は完全に自由にしておいた」という。^{注451}以上から、建大初期において各民族の学生が学内において全く対等の立場で、激しく真摯に議論した姿がはっきりと理解されよう。

江原は、二年目になると、「塾では学生は前ほどしゃべらなかつた。いくらしゃべって見たところでどうにもならぬといふ諦めが強くなって行つた。静かになって教官達は学生が落ち着いてきたと言つて喜んでしたが、自分はこれは民族協和の意気込みの後退であると嘆いた。」^{注452}という。こうした雰囲気は二年目から生じたわけだが、言論の自由と、民族間の対等の議論という風潮は、建大の塾生活の基調として失われることはなかつた。ただそのことは、同じ状況が続いたということではない。

(3) 同床異夢

四期生が入学する1942年頃の時期には、建大の雰囲気は様変わりしていた。四期生森崎湊(柔道部)はこの年前期二年に入学、同塾の桑原亮人、朴三鐘らと共に柔道部の午後の稽古に参加し、熱心に養正堂に通つた学生である。^{注453}当時の学制によって満系は既に一年前に入学しており、同学年でありながら先輩として振舞う彼らと感情的摩擦をおこしている。森崎日記^{注454}を見てみよう。

・1942年6月22日

「今日の作業で忠霊廟を拝むとき、(中略)ただ頭だけさげている。こんなことは今日だ

^{注448} 同上, p.75.

^{注449} 同上, p.76.

^{注450} 同上, p.81.

^{注451} 同上.

^{注452} 同上, p.85.

^{注453} 桑原亮人聞き取り調査(2003年4月10日)

^{注454} 泉三太郎編, 森崎湊(1971)遺書, 図書出版社. 本書はロシア文学者の泉三太郎が森崎の残した塾生日記や日記を編集したものと思われる。本項ではこの書の日付を記し、頁数の註記は省略した。

けの話ではない。宮城を拝むときも、帝宮を拝むときも、彼らは何を考えているのか。」

「彼らには『満洲国』のことなど頭にない。」

「日系と満系は表面にこそ出さぬが、内部では完全に二分し、対立している。日系の方が協和への熱意が強く、満系はうわべはそうでなくとも、頑固に団結している」

「一期二期の人たちなど、創立当時の苦勞をつぶさにとともにし、たがいに肚もわり、真情をひれきしあい、その間、かなりの相互理解があったはずであるのに、やはり二十余人もの抗日学生たちが出た。民族の問題というものは実にむずかしいものである。いくらおれたちが誠意を通じさせようときばってみてもしれたものかもしれない。」

・1942年6月26日

「彼らが『民族協和』というとき、彼らはただ『日系も満系も仲良くしてゆかないと塾が楽しくない。せっかくの楽しい青春を楽しむことができない』ということではかないような気がする。」

・1942年7月4日

「民族協和は、やはりどうあってもせねばならぬことだ。これをやらねば、時代に致命傷を与えることになる」

森崎は教官、先輩、異民族学生から多くを学び日々成長する。特に親友のひとり朝鮮人の朴三鐘から民族的悩みを聞かされ、驚く。そうして9月の次の日記にはついに反満抗日の志士への尊敬の気持ちや漢民族への同情が吐露される。

・1942年9月2日

「重慶により、延安によって苦闘坑戦せる支那人たちも、思えば敬服にたると認めざるをえない。彼らからいわしむれば、崇高熱烈な志士、闘士であろう。」「満洲の漢民族と支那本土の漢民族とをきり離して考えることはできない。満洲国民もまた中国人であり、しかも祖国愛に強い連中であればあるほど、満洲国人であるよりも『中国人』なのである。」

「中国の人々に大らかな信頼を抱いてもらうためには、日本自身がまず正しくあらねばならぬ。(中略)中国人の自覚と矜持の熱烈な者ほど、実はわれわれの同志たるべきものなのではないか。中国の同胞たちが日本軍の力の前にたたかれているのを彼らが見るとき、いかばかりの苦痛を感ずるであろうか。(中略)今まで日本がどんなことを中国に対しおこなってきたかを彼らはよく知っている。」

森崎は、この煩悶の解決も道を東亜連盟思想に求める。

・1942年11月15日

「世界平和のなるとならざるとは東亜連盟の成否にある。東亜連盟を導く精神こそ協和精神ではないか。直截にいえば、日米戦争-即ち東洋対西洋の戦争-のために東亜連盟を結束するのが協和会の任務である。こんな[萬田勝宅での伊東六十次郎]の話聞いてはじめて、眼がひらけたような気がした。」

・1943年4月12日

「今日の学科で、『我々の世代のうちに、日満合邦という事実がくるかもしれぬ』といった教官があった。しかしここにある民族の姿、満系の姿を見るとき、自分は『不可だ、日満

合邦不可だ！』と思った。」「日満合邦。そのときこそ満洲の地は中国の失地となり、在満民族の苦悩は一段と重くなるであろう。いかに日華両国の親善となったとしても、民族の血の力と、満洲国に対する国土愛、郷土愛の力と、いずれが強靱であろうか。漢民族の性格を見れば、明らかなことである。同一な漢民族文化を保守する支那社会の共通性を思えば、さらに明らかである。日満合邦によりいよいよ善政をしけば、民は安居楽業してますますよくなり、幸福になるではないか、というのは、手前のことだけ考えて相手の心情を察せぬ理屈である。民族の血はそんななまやさしい理屈を承知するものではない。」

森崎の誠実さは欺瞞的なものの存在を許さず、彼の建大批判は次第に昂じていく。

・1942年9月2日

「学校当局は（中略）この苦しい満系を救うに、ただ日系とごたくたに塾にたたきこんでおくだけである。自分たちがすべきことを、塾生活の日系学生に漫然とゆだねているにすぎない。われわれのなんと無力なことか。」

こうして森崎は翌年にはやる気を失い、ある教官の言行不一致への不信感、塾頭への嫌悪など私的な問題も加わり、退学する。彼の学内での民族協和の断念されたのである。

森崎の満系同期生・轟長林。彼ら満系は森崎の一年前に入学し、民族の結束を固めていた。一年の二学期には彼もまた萬田塾轟長林は戦後の回想文の中で、作田が建大の特色は五族協和の塾生活にあったとの言葉を引いたあとに、

「一体、諸民族が『協和』したのだろうか。（中略）塾生活の日課は、日本神道プラス、ファッション精神を中心として案出され、各民族の学生を強制的に固定したパターンに詰め込んで、凝固させることをねらったものだった。（中略）中国同学の絶対多数はこれを、強制的に日本神道をおしつけ、強引に民族同化をおし進めるやり方であると思い、胸には抑圧感と屈辱感が充ちて、反抗だけを考え、かつその機会をうかがうようになって行った。」^{注455}

と民族協和を否定している。^{注456} 日系と寝食を共にするようになる際には、「中国学生を監視する任務」^{注457} を割り振っているのではないかと互いに注意しあったとして、日系との関係を次のように総括している。

「要するに、一般的にいうと、日本同学との付き合いは順調に進んでいた。ただ、いかに親しい間柄であっても、思想的政治的には、お互いの間に乗り越えられない溝が横たわっていた。まるで默契ができたように、どちらもそうした問題については全く口にしないで行った。」^{注458} 「本来から言えば、お互いは純真な青年であって、長い間、寝食を共にしていれば、心が解け合いやすいのだが、実際のところは、日本侵略政策が邪魔をして、お互いに疑念を深めるばかりで、本当の情誼が生まれる筈もなかった。当時の「建大」の中日同学間の間柄は、的確に表すとすれば、『同床異夢』という一語よりほかはないと思う。」

(4) まとめ -- 建国大学の民族協和

^{注455} 前掲、轟長林(1997)幻の学園建国大学, p.43.

^{注456} 同上, p.48.

^{注457} 同上, p.70.

^{注458} 同上, p.71.

ギリシャ神話の怪物キメラは、頭が獅子、胴が羊、尾が流である。満洲国の肖像をこの怪物キメラになぞらえて描くことを企図して評判の高い『キメラ-満洲国の肖像』の著者・山室信一は次のように結論づけている。

「おそらく、真の民族協和とは、異質の民族や文化が、混在しながら衝突や摩擦をひき起こし、そのぶつかり合いが発するスパークを活力源として新たな社会編成や文化を形成していくことによってもたらされるはずのものであろう。そうであるとするならば、それは、心に長城を築き、自らを他民族に文明と規律を与える者という高みに置いた日本人、多様性を無秩序と捉える日本人によって達成されるはずもなかったのである。

いや、日本人に限らない。侵略という事態のもとでは、いかに崇高で卓越した民族であれ、民族協和を実現することなどできはしない。」^{注459}

山室のこの結論は、建大の結末、民族協和の挫折という結果からの判断としては妥当性があるだろう。また、その妥当性の担保するもう一つの資料として四期生の記述は有益であろう。しかし、上に明らかにした事実、即ち一期生が体験した世界の前には空論たることを免れていない。

第4章で見たように、民族協和とは、「共和政体への指向性をもった民族間の協力を意味する言葉であり、満洲国建国後その正当化のイデオロギー機能を発揮した思想」である。民族協和は政治的イデオロギーであり、「支配的政治秩序を正当化するのに貢献する」（イーグルトン）という機能をもったことは間違いない。建大における民族協和も、満洲国の民族差別の現実によってその虚偽性を顕在化させていたという点で矛盾に充ちたものではあったが、満洲で生きることを考えて建大に入学した誠実な主に日本の学生たちにとって取り組むべき現実的要請としての「理念」であり続けた。一方他民族は反発したが、指導民族である日本人を強力なリーダーシップで満洲国を造り上げていくことに対する非協力を示しながらも、その議論の中に入っていった。全ての民族が入って議論する環境を用意し、それが激高して行われ続けたことによって、少なくとも建大初期の学生たちは、他者の異なった意見を聞き、それを媒介に自己の意見を深め、立場を換えて考える習性を得たのではないだろうか。民族が全く対等に言い合える場を用意したことが、建大の一期生同窓生らに時代を超えて今なお続く情誼を育んだと思われる。

日米開戦の年・1941年入学の新制三期生（朝鮮人学生）もまた、「キメラ中央部の山羊が象徴すると思われる五族協和、道義世界精神は、今なお建国大学同窓会会員の心の中に生き残っていると思います。」^{注460}と記しているが、短い時期といえとしても、民族協和実践の事実を黒く塗りつぶすことはできないだろう。建大生の各民族は、個人的情誼関係の場合は別として、確かに相互に語らなくなる。協和は失敗したかのようなのである。しかし建大初期の実践に象徴される自由で徹底した議論の伝統は、民族協和の下地を造ったとはいえないだろうか。作田のいう、「多くの民族が殆ど民族たることは忘れて、民族という言葉を使う必要のない様にして、皆が仲良く親和して行く」ということは、「自由で徹底した議論」が行わ

^{注459} 山室信一(1993)キメラ-満洲国の肖像, 中公新書, p.284.

^{注460} 姜英勲, 建国大学同窓会会報, 第62号, p.3. なお、姜英勲氏は韓国元首相。

れる環境、つまり制度、理念、運動（実践）がないところにはできないだろう。建大において制度としてこのような環境が用意されたとは考えられないが、民族協和に内在する「共和」の理念と、優れた指導者によって保証された各民族の自由と平等の精神が、多くの矛盾を抱えながらも学生の心底にあって底流として生きていた。それが建大であったと理解される。

第5章 建国大学に於ける武道教育

本章では、建国大学に於ける武道教育の実態を個別的かつ包括的に解明することをねらいとする。実態つまり事実とは何か。これへのアプローチを、誰によって、どのような意図で、どのように、武道教育が行われ、その結果学生、教師、建大の何が変わったか、ということの考察を通して行う。その際に特に留意したい点は、「民族協和」イデオロギーとの関係である。満洲国のスローガンであり、在満日本人が生きるために必要な理念であり、また、建国大学がその実践を教育の基礎に織り込んだ「民族協和」。それとの関係がないところで建大の武道教育が行われたわけではない。学生、教職員が真摯に取り組み、悩み、白け、批判した「民族協和」の理念。それに対して日本文化としての武道はどのように関わったのか、という事柄を考えていく基盤として本章では事実こだわらる。この作業を通して最終的に武道という日本文化の教育力を考えることになる。

本章の論述の手順と留意点について。建大の武道教育には授業として行われるものと課外活動とがあった。この二つは分けて考えられるが、多くの場合指導者は同じであり学生にとっては両者は有機的な繋がりがあった。そこで本章では一応分けて考えながらもその関係を重視して捉える。次に、考察に当たって建国大学の時代を三つに区分した。^{注461} わずか7年余りの存在機関であった大学ではあるが、その僅かな時に流れの中に、日本、満洲、中国そして米国、ソ連を中心に渦巻く東アジアの変転がオーバーラップし、歴史が形成されてきたと確認できるからである。その歴史の襞を詳細に見ていくと、開学1938年5月から1940年4月までの第一期、1940年4月の三期生入学から1941年12.30事件までの第二期、それ以後建大閉学までの第三期にわけるのが妥当であろう。第一期は建大教官や一期生、二期生ら建大生にとって未だ希望に満ちた時代であった。第二期（動揺期）は建大の将来に対して疑問・動揺が増幅してきた時期である。その一つの頂点が建大最初の反満抗日学生の検挙事件、いわゆる12.30事件^{注462}であり、建大が崩壊へと向かう第三期（崩壊期）の始まりであった。

1. 武道教育の制度と実際

(1) 講義科目と訓練教育

建国大学における教育の独自性の基盤となったものが塾に於ける生活であったとすれば、これに匹敵する第二の特色は訓練教育にあるといえる。これは、「建国大学創設要綱」の「八. 教育ノ特色」において、「本大学ノ教育ハ知行合一ヲ主旨トシ実践的人材ヲ養成スルヲ

^{注461} この区分は、一期生・李水清氏の考察に従った。志々田文明編(2000)聞き取り記録「満洲国」建国大学一期生・李水清氏に何う、未刊行。

^{注462} この事件の詳細は、一期生齋藤精一氏の次の回想に詳しい。齋藤精一(1991)悲しく、懐かしい歴史を想う、前掲書、歡喜嶺遙か 上巻, pp.120-123.

眼目トス」^{注463}と記されたのを受けて、身体で感得される教育を重視したということである。具体的には軍事訓練（略して軍訓）、作業訓練（又は農事訓練、略して農訓）、武道訓練（略して武訓）が置かれた。加えて精神訓練も予定されたが未設置に終わった。^{注464}

前期三年間のあいだ、午前中の講義科目に対して、訓練科目は昼食後の時間が充てられた。三つの訓練科目のうち軍訓については、日本内地においては1925年の陸軍現役将校学校配属令公布・実施によって学校教練として各種の学校で実施されていたほか、大学予科でも随意科として実施するようになっており、^{注465} 建大創設の翌1939年には教練が必修になったのでそれほど目新しいものではなかった。しかし、作田が、「軍事訓練の主任教官松平紹光少佐は稀に見る立派な教育家でもあって、厳格な訓練と懇ろな配慮とを兼ね行って、学生らから大きな信望を受けて居た」、^{注466} また、「満人系の学生の中には、あれだけの猛訓練を受けても自分の心身が克く堪え得ることを確めて快心に堪えぬと告白したのも居た」^{注467} と記すように、優れた教官を得て、質の点で優れたものがあつた。多くの学生が回顧しているが、中国人と日本人の二例を紹介しておこう。

・三期生・徳長春

「各種の武道・軍事・農事訓練等に積極的に参加した。濟世救国の有力者となるにはただ理論だけあっては何にもならぬ、堅強なる意志力と実践的体力と魄力が必要であると思ひ、これを培うには各種の訓練が欠くべからざるものとした。（中略）そのため訓練場においてはどれにも強い相手にもこわがることなしにどの同窓にも劣らないほど鍛えられ、体もだんだん強くなってめったに病気に罹らないほどになった。」^{注468}

・四期生・井馬煌

「建大における軍事訓練は、教官（大佐）、助教二人による本格的な訓練である。命課を承け、現地に赴いても治安なお不安の満蒙各地では何時、如何なる攻撃をしかけられるやも知れぬことを常に想起し、実技のみならず下級将校程度の戦闘指揮の執れることを目標に訓練が積まれたので、学徒動員に入隊しても何一つ戸惑うところはなかつた。因みに、予備士官学校卒業時のいわゆる恩賜の腕時計組は、すべて建大生だったのも蓋し当然であつたろう。」^{注469}

^{注463} 全文は以下の通り。「本大学ノ教育ハ知行合一ヲ主旨トシ実践的人材ヲ養成スルヲ眼目トス、教授団八同志トシテ有機的ニ團結シ建国精神ニ基ク共同研究ヲ実行ス、教授ト学生トハ全人的ニ一体トナリ知育ト徳育トヲ絶縁セシムルコトナク人格ノ力ニヨリテ人格ヲ薰化ス、カクテ本学ハ理論ト実践トヲ統一シ信念ヲ手腕ニ運用シテ以テ道義世界ヲ建設スルノ先覺的指導者ヲ養成ス」。前掲、満洲帝国政府公報(1937.8.5), No.1006.ほかに所収。

^{注464} 前掲書, 作田莊一, 道の言葉 巻の六, p.221.

^{注465} 陸軍現役将校学校配属令実施の前の文部省と陸軍省との打ち合わせでは、現役将校を配属する学校は、師範学校、中等学校のうち1年志願の資格がある官公私立高等学校・大学予科および専門学校の全部に、対象学校によって一部留保の上実施された。久保義三ほか編著(2001)現代教育史事典, p.357.

^{注466} 前掲書, 道の言葉(巻の六), p.225.

^{注467} 前掲書, 作田莊一, 道の言葉 巻の六, p.225.

^{注468} 同上, p.178. なお、同氏は筆者に、「色々な訓練科目はその後の自分に非常に役に立った。今日70歳になっても健康でいられるのはこれのお陰だ」と語っている。

^{注469} 井馬煌一, わが青春の凝集, 前掲書, 歡喜嶺 遙か(上巻), pp.55.

作田が、「日本の大学には見られないような訓練科目」^{注470}と評した作業訓練では、土と親しむ教養を身につけさせるため、62万坪^{注471}の大学敷地のなかに農作業場が設けられた。日本の大学と比較した場合、作業訓練は大きな特色といってよかった。この訓練では石原の推薦で入ったといわれる藤田松二によって徹底的な「行」の教育が行なわれ、主として日本人学生に多大の影響を与えた。^{注472}一期生・坂東勇太郎によると、建大の「農場は、満洲国崩壊-閉学にいたるまで藤田松二という一人格によって学生練成の道場としての機能を果たし得た」という。また、「五族の青年を打って一つにし、民族協和の理想が画にかいた餅ではないことを示すために、理屈ではなしに、同じ苦しみを苦しみ、同じよろこびをよろこび合うことの出来る共通の地盤が必要であった」時に、「言葉ではなく身体で、しかも自らそれを示し全体で教え」たのが藤田であった。^{注473}坂東は藤田について、「会うことの出来た他民族の友らは、皆、先生の大きさを知っていた」^{注474}と評している。

しかし作業訓練即ち農訓は漢系学生には快く受け入れられる授業ではない面もあった。1942年入学の新生（四期生）森崎湊は、日記で、「農事訓練のときなどに、人前で恥ずかし気もなくごろごろ寝そべっている。前を向いたり、横を向いたり、何か勝手なことばかりやっている」、「苦力や労働者のするようなことをわれわれが修業と考えていることを、彼らにいかにか説いてもわからないのではなかろうか」と憤っている。^{注475}この傾向はどの期の学生にも見られたようで、インテリの卵である中国人学生にとって農訓の意義は理解されない面があった。^{注476}一期生の塾頭であった江原節之助は、「或る時農場に出ている人数が余り少いので、あちらこちら捜して見たら、大勢教室で自習していた。頭を使う者は人を使い、体を使う者は人に使われるとの古い観念は此処でも見ることが出来た」と、指導者は労役に携わらないとする中国社会の慣習の違いに原因を求めている。^{注477}

武道訓練は、剣道、柔道、合気武道が前期三年間は必修正課であり、随意科目として相撲なども行なわれた。その外に騎道訓練（馬術）、グライダー（滑空）訓練も置かれていた。その詳細は後述する。

(2) 学科配当と訓練教育

さて、これらの訓練科目が建大教育全体の中でどういう位置を占めていたかをみるために、前期三年における訓練各科目の配当時数を見ておこう。1940年5月制定の「建国大学学

^{注470} 前掲書、道の言葉(巻の六)、p.221.

^{注471} 江原節之助の記述に拠った。前掲、歡喜嶺遙か(上巻)、p.4

^{注472} 藤田について一期生の坂東勇太郎氏は、「何のために、百姓の真似をしなければならぬのか。何故、これほどまでに身体を苦しめねばならぬのか。(中略)先生はその解答を与えなかった。『自得せよ』とすら言われなかった」と記す(坂東勇太郎、藤田松二先生、前掲書、建大史資料 第四号：8-11.)。藤田の徹底した指導ぶりが窺える。

^{注473} 坂東勇太郎、藤田松二先生、前掲書、建大史資料第四号、p.99.

^{注474} 同上、p.101.

^{注475} 前掲書、森崎湊、遺書、pp.56-57.

^{注476} 例えば二期生谷口勉氏の1939年8月の日記には「農訓の時のだらしなさ、いくら制度が変更されても駄目だ。特に満系の者の話し合う態度、そういう奴はどんどん落第させたらと思う」(前掲書、建大史資料 第四号：20)とある。

^{注477} 前掲書、岡崎精郎編(1991)民族の苦悶-創設期の建国大学をめぐって(三)：76.

則」では第26条に「前期二於ケル訓練及学科八左ノ如シ」として、開学3年目における授業の配当表を掲げている。その後に掲げられた表が「旧学則第一条抜粋」であり、これらによって開学2年目までとその後の授業実施の概要をすることができる。^{注478} はじめに開学当初の様子を「旧学則第一条抜粋」の表に加筆した表4-1で検討してみる。

(参照 表4-1：前期生の授業科目配当時間数及び割合(1940年以前と以後))

まず、表4-1によって開学した1938年から2年間の計画をみよう。3年間を通しての全授業科目における全訓練科目の割合は30.1%であり、訓練教育という建大の特徴は科目配当によってしっかりと裏づけられていたことがわかる。1940年以後の計画においてもこの傾向は基本的に維持されているが、新たに計画された精神訓練を除くと軍事・農事・武道の3訓練共に時間数が減少している。特に農事・軍事の割合が多いのは、これらが訓練教育が学生への過重な負担となって体調を崩す者が目立ちはじめた事への対処と思われる。^{注479}

講義科目においては1940年以後には自然科学・数学が一気に2倍となり、他方で人文科学^{注480}が五分の一に激減している。これらは、建大が文系の大学であり、事実上指導者養成を使命としていたことから、後期課程に進学する以前に基礎的教養として自然科学に親しませておく必要性を感じたためであろう。

表4-2から表4-5は、一期生と二期生の塾生日誌から授業関連の項目を抜き出して、一週間の授業の様子を明らかにしようとしたものである。いずれの日誌も入学当初や新学期はじめなどには具体的な記述がなされているのであるが、しばらくすると一般にこのような自明のことが書かれることは激減する。それでも四つの表に大きな差があるのは個人の性格の違い、あるいは関心の違いであろう。

(参照 表4-2：1938年前期1年生授業実施概要(長野直臣塾生日誌より))

(参照 表4-3：1939年前期1年生授業実施概要(藤森孝一塾生日誌より))

(参照 表4-4：1939年前期1年生授業実施概要(西村十郎『楽久我記』より))

(参照 表4-5：1939年前期1年生授業実施概要(藤井歆一塾生日誌より))

一期生長野の表(1938年時)には見えなかった自然科学が、翌1939年の西村ら二期生3名の表に曜日が異なって見えているのが興味を引く。自然科学の時数が増加するのは1940年以降のはずであるからである。しかしこれは西村等の関心とみるべきであろう。自然科学には大陸科学院から教官が出向して講義を行った。

語学は第二外国語を除く全てが増加した。日文、漢文は日本人が指導民族であることから日本的素養を満系の学生たちになお一層教育する必要性を感じたためであろうか。特に第一学

^{注478} 建国大学学則(康徳7年5月10日院令)は第1章通則、第2章前期学則、第3章後期学則からなる全36条で構成された。前掲書、湯治万蔵編、建国大学年表、pp.221-228。

^{注479} 大学側のこのような配慮は当初から行われていた。例えば西村日誌(『楽久我記』)に、「今日から午睡時間が設けられ、昼食後一時間眠る」(1939.5.23)とある。また、開学初年の長野日誌(1938.10.5)には「午前中は休養。三時間位寝た」とある。

^{注480} 人文科学とは旧学則第一条抜粋にある哲学概論、国家概論、政治概論、経済概論、文教概論、国防概論、現代思潮などと思われる。前掲書、建国大学年表、pp.224-225。

年を見ると、講義科目を90時間も勝っており、全科目時間に対する割合を算出すると35.1%である。新入生の受けた衝撃の大きさが想像される。

訓練科目の配当時間を見ると、3年間一貫して軍事訓練が第1位で時代の強い要請が感じられる。第2位は作業訓練である。土と親しむ教育が第3位の日本武道の教育以上に重視されていたところに満洲の特殊性と石原的発想の形跡を見ることができる。

1938-1939年の武道教育の配当時数は270時間で、全配当時間に対する割合は7.4%である。これを講義科目と比較すると、配当時間のより多い科目は、第一語学（日語、漢語、^{注481}480時/13.1%）、第二語学（蒙語、露語、英語、仏語、独語、340時/9.3%）、歴史（290時/7.9%）のみである。学生にとっては一定の存在感を示していたと思われる。

では、学生は毎日あるいは毎週どのようなリズムで行動をしていたのであろうか。

(3) 毎日の生活

表4-6はそのことを記した日程表である。これは一期生、二期生への取材や関係資料を中心に作成したものであるが、竹山増太郎の塾日課表など建大史中期の資料をも参考にしながら作成した。以下では、建大最後の八期生の資料『建国大学九期生』^{注482}、新たに行った聞き取り調査^{注483}によって再現しておきたい。

（参照 表4-6：塾生活の日程表）

日程は年度やその時々 of 行事など各種の事情による細かい変化もあったようだが、冬季に30分ほど後ろにずらされた以外はほぼ同一であり、概ね表4-6に従った生活が行われた。冬季がいつかについては、1941年段階の記録と思われるが、竹山増太郎の塾日課表にみられる。それによると4月1日から11月30日までと、12月1日から3月31日までで区切られた。因みに、前者では6時起床、12時05分昼食、午後5時30分夕食、同9時半点呼、寢室・自習室消灯10時とある。後者では、6時半起床、午後1時05分昼食、同6時夕食、同9時半点呼、寢室・自習室消灯10時と、消灯時間は統一されていた。しかし後述するようにこれらは、夜の点呼消灯時間などは開学以来の経験に基づいて後ろに伸びたものと思われる。

起床は午前6時。開学当初は松本七郎助教授（満洲国軍上校）^{注484}のサイレンによる合図で起きたが、学園には相応しくないということで太鼓に代わった。はじめは満洲式の太鼓、そ

^{注481} 江原節之助によると「建大では満語といふ言葉は使わなかった。漢族の言語だから漢語ときめられた」という。前掲書、江原節之助、民族の苦悶-創設期の塾生活をめぐって、岡崎精郎(1989)「民族の苦悶-創設期の建国大学をめぐって(2)」解説、東洋文化学科年報(5)：151。

^{注482} 建大存在当時現在同窓会で使用する呼称、八期生は九期生と呼ばれた。現在の新制三期生が当時の四期生であり以下五期から九期までであった。

^{注483} 一期生齋藤精一、村上和夫、越智道雄(2003.1.31実施)、二期生藤森孝一の各氏に対して電話によって実施した。実施時期は2003年1月で、左記に実施日が記していない方に対する聞き取りは各3回以上に及んだ。また八期生近藤重治氏「孫へ、お祖父ちゃんの青春の一こま」(建国大学九期生、建国大学九期生刊行世話人会、1995)の詳細な記述について聞き取り、七期生田山実氏への聞き取りを行った(2003.2.11)。質問に当たってはその段階で理解していることを提示し誤りと補足意見を求める方法で行った。

^{注484} 松本七郎は、越智道雄氏によると、陸軍幼年学校から陸軍士官学校卒。真面目な人柄であった。上校とは日本陸軍の大佐相当。

の後石中塾頭が水戸から取り寄せたという三尺余りの太鼓によって行われ、江原塾頭が叩いた。^{注485} 一期生越智道雄によると5月頃には太鼓で起床したという。なお太鼓は2塾と5塾の間の渡り廊下に吊り下げられていた。この太鼓は八期生の時代には興亜太鼓と呼ばれていた。

すぐに着替えて室内外の掃除、洗面と続く。起床後30分には前庭（国旗掲揚台前）に出て点呼である。祝祭日と月曜日には国旗^{注486}の掲揚式が行われた。終わると集合し、日本国天皇への東方遙拝、続いて満洲国皇帝への宮廷府遙拝がこの順序で行われた。これが終わると週番塾頭の指導で、後に建国体操とよばれることになる体操か或いは駆け足（今日のランニング）が行われた。建国体操は一名、天突き体操とか、地球廻しとか言われ、船漕ぎのような動作が行われた。陸軍士官学校などで行われた体操と同種のものといわれる。体操を行わない日には建国広場あたりまで駆け足が行われた。初めの1、2年は駆け足がしばしば行われた模様である。

体操、駆け足、いずれかの運動が終わると、塾に入って寝室で正座・黙想を約十分間、それが終わると自習室に移動して勅書奉読である。週番学生の音頭で、全員で奉読するわけだが、満系の学生が当番の際は中国語で読み上げられた。齋藤精一によれば、週番学生「勅書」というと、全員で朗読したという。終了とともに自習時間が始まる。食事までのわずかな時間ではあるが自由な活動ができた。

後年（1940年2月）の話であるが、越智は農事班の仲間と共に、起床と同時に農場の豚小屋の掃除に行き、朝食の時間に戻ってくる生活を行った。こうした学生の自主性に対しては学校側も容認したようである。台湾系の李水清の場合は、道場へ行って、富木謙治教官の指導による合気武道の朝稽古に参加したという。稽古時間は小一時間、50分程度であったというから、これも点呼前後から抜け出して稽古に行ったとも思われる。齋藤によれば、「西山文二郎は起床後に禊ぎをやっていた」という。

齋藤はこれらの話を総括して、初めの頃は規則通りやったであろうが、学生は段々と自由に活動するようになった。「一期生の場合は自由だった。」という。在学中はいつも最高学年として後輩学生から一目置かれ、二期生入学以後の時代からは教員から指導学生として塾頭の助手的な役割を演じさせられた一期生は別格であったともいえるが、ここで大切なことは、こうしたことを制度を弾力的に運用した柔軟性が少なくとも作田辞任前まではあったということであろう。

以上のような流れが後にどのように変わったかを知る恰好の資料が近藤重治と山本俊三の以下の文章である。

・「午前六時、興亜の太鼓のドンドンという音から一日が始まります。起床と共に寝具を箱のように筋目を立てて整え、各部屋の掃除を終えて、一同勉強室で建国大学二賜リタル勅語「方今世界ノ形勢」を奉唱した後、塾毎に隊伍を組んで校庭を駆け足で一周し、前期生一

^{注485} 村上和夫によると、二期生の塾舎ができると7塾と10塾の間の渡り廊下に置かれた。

^{注486} 江原節之助によれば、国旗は当初満洲国国旗用の竿が1本用意されたが、法規によって日本の国旗も掲げなくてはならないということから、ここに二つの国旗を掲げた。他国を尊敬するの意味で日章旗を上にして掲げたところ非難があり、竿をもう一本立てて解決したという。前掲書、歡喜嶺遙か(上巻)、pp.8-9.

同整列して、各塾毎に点呼を受けました。朝礼は国旗掲揚、日の丸は君が代、満洲国旗のときは、”大御威光” おおみいいつと満洲国家を斉唱した後、宮城遙拝と宮廷遙拝がありました。(中略)^{注487} /その後、時々訓示があり、体操や合気道の組手、最後に朝礼は終わりました。」(近藤重治)

・「四月からの日課/六時起床、掃除。六時半点呼(於点呼場)、建国大学開学に賜りたる詔書奉読。自習。八時朝食。九時授業開始。一三時昼食。」(山本俊三)

近藤の記述では、表4-6と比べて朝の流れに多少の変化が見られる。山本の記述は、表4-6に近い感じだが、八時朝食だとすれば一時間近くの自習時間が与えられていたことになり、午後の授業は二時からとなる。このことについて近藤重治、田山実両氏からからの聞き取りでは、起床から朝食まで二時間は長すぎるという発言の印象であった。

7時、朝食。食事前に「いただきます」と斉唱するのであるが、1938年夏の東満旅行(松本上校が責任者)以後に新たな慣習が作られたと思われる。天照大神を賛歌する和歌^{注488}の朗誦がなされうようになったのである。^{注489}越智によれば、提案者は松本七郎上校であった。東満旅行の際に彼の提案で食事前にこの賛歌朗誦がなされ、帰塾後から実践されその後伝統化していったという。しかし越智同様に東満旅行の詳細を記憶している齋藤は、この点ははっきりしないという。

授業開始は8時からと思われる。午前中4時限の講義による授業が教室で行われた模様で、1時限の授業時間は授業間に10分間の休憩があったと思われることから50分程度であったと推定される。午前の授業が終わると一旦塾に帰り、昼食後に授業に行った。

昼食は12時であろう。午後1時から訓練科目の時間である。越智によると、訓練の授業は通常午後1時から2時間行われ、3時には終了した。ただし実際は3時を過ぎてもなお行われる場合があった。特に常習的であったのは藤田の指導する農訓である。農繁期には夕食に食い込むこともあったという。また軍訓も演習などの場合は遅れることがあった。その点、武訓は時間通りに終わったものと思われる。しかし、江原が「夕方は四時か五時に帰るのが普通である」^{注490}と記すように、後かたづけや、疲労のため、また開放感からの談笑等で、塾へ帰るのはこの頃になったのであろう。各種武道などの課外活動は起床時と同様にこの時間にも行われた。

^{注487} 中略箇所には今日的反省と当時の率直な思いを記している。「これには漢系、朝鮮系の学生には非常に抵抗があった。日本有線には940年の「国本奠定詔書」の満洲国建国と隆盛は全て天照大神の庇護と天皇陛下の保護によると言う認識に基づくものであったが、祖先崇拝を第一とする漢族の習慣を踏みにじり、その上他国の神を強制する愚拳とも言うべきで、彼らの考えを当然として、一緒に抵抗すべきであったろうが、当時としてはその様な気分は全く持ち合わさなかった。」前掲書、建国大学九期生、p.76.

^{注488} 内容は、「たなつもの 百の木草も 天照らす 日の大神の 恵みえてこそ」であった。

^{注489} 後年何人もの学生が、この朗誦が異民族学生に与えるものを憂慮していたことを記している。例えば、「中国民族に日本の大神をあがめよと強制するような理不尽なことが、どこで王道楽土と結びつくのか。私は中国人の心情を思い、日本人の思い上がりの甚だしさとその無神経さに、いきどおりさを感じた。」(四期生岩崎宏、無言の抗議、前掲書、歡喜嶺遙か(上巻)、p.70.)、「中国人が中国農民の生産した食糧を食べるのに、日本の神にその恩恵を感謝しなければならないのだろうか?」(八期生高済美「一瞬間の回想」同左、p.118.)

^{注490} 前掲書、歡喜嶺遙か(上巻)、p.9.

夕食は5時半乃至6時であった。夕食後は自由時間で、食堂の1階にある風呂に入ったり食堂二階の娯楽室で過ごしたり、心休まる時間であった。江原によると夕食後に2時間の自習時間があった。

午後9時には点呼であった。江原によれば、続いて正座・黙想が10分間あり、故郷の父母への遙拝が行われたという。点呼は塾頭あるいは週番塾頭によって行われたようである。

消灯は9時半で、後に10時に改められたと推測される。消灯後に塾友と話したい学生等は塾舎内の物入れ室に入り込んで、その灯りのもとで話し続けることもあった。^{注491} 疲れて就寝したい者への配慮であろう。越智によると少なくとも自習室の消灯時間は10時ではなかったかという。あるいは、原則が9時半で、自習したい者はその後10時まで勉強することが許されたのかもしれないが、定かではない。^{注492}

この点八期生山本俊三の1945年4月1日からの記述は以下のようにすっきりしている。

「一八時夕食。一九時から二一時自習。二一時点呼。二時半寢室消灯。二二半自習室消灯。」

寢室と自習室の消灯時間のずれを認めるもので、こうした改善が何時の時点かに行われたものと思われる。いずれにしろ、建国大学という大学は規則を作ってもその運用に当たってはかなり柔軟性があったといえよう。

2. 武道教育の思想

(1) 「武道訓練」設置の意図-- 副総長・作田荘一の考え方

授業科目としての武道訓練は、前期3年の間は正課必修として剣道、柔道、合気武道の三種目が置かれ、午後の訓練科目の時間帯に実施された。三武道のいずれかが各週1回位の割合であったといわれるが、毎週定期的な実施される授業としての合気武道は一年遅れて1939年から始まったようである。ただ、臨時の集中授業として位置づけられていたと思われる開学初年度1938年の「武道週間」には、柔道、剣道に並んで合気武道の武道顧問も招聘されて実施されており、正しくは初年度から授業があったといえよう。

後期になるとさすがに学問の方に力が入れられ、武道訓練は選択必修になった。1940年5月制定の「建国大学学則」によると、後期の武道訓練の教材には上記3武道に加えて弓道が入り、これらのうちから一つを選択することになった。^{注493} 結局卒業までの5、6年間いずれかの武道と接して離れることがないように工夫されていた。なお、その他前期に見えなかったものとしては、「操作業訓練」（自動車操作、グライダー操作、練習機操作、機械ノ修理組立作業）が導入された。

建大において武道教育は何を期待されていたのか。この問いに対して、副総長・作田荘一は戦後に次のように記している。

^{注491} 齋藤清一氏、二期生藤森孝一氏談（2003.1月）による。

^{注492} ただし実際は若干の融通が利いたようである。齋藤精一は後期に入って二度目の指導学生の際、就寝時間後に自分一人自習室で勉強していた。卒業論文作成のためである。寺田塾頭が回ってきたが、彼は叱られるどころか激励されたという。この場合は、塾頭に代わって後輩達の世話を焼く指導学生が自分の勉強時間を失い、寝る間を用いて学習するのであるから、当然の対応ともいえようが。

^{注493} 前掲、建国大学要覧(康徳8年度), p.27.

「一般に日本武道は喧嘩の技ではなく、英気を養う精神修養を趣旨とする。心の活動は気におこり、智と情とを結んで意に到り行に出るが、その気を充実せしめるには武道の修練を欠くことは出来ない。その点において建国大学は、予科と本科とを通じて武道修練をつづけ、これまでの大学では思いもつかないような訓練を試みた。」^{注494}

作田は求める青年像として「英気」をもった像を考え、その手段として、武道が不可欠であると考えた。そこで武道に期待されたものは、技より精神、満洲国の指導者として模範たるような英気の養成であった。

ところで作田は「思いもつかないような」目玉として二つの事をあげている。合気武道が正課としておかれたことと、「随意の一訓練科目」として元関取天龍（和久田三郎）を聘して角力を行ったことの二つである。作田は記す。

「護身武道には剣道・柔道・弓道の外に、特に植芝盛平氏の創始した合気武道を加え、同氏を始め日本にて第一流の各種武道師範の出張教授を受け、各師範の高弟を教授又は助教教授に迎えた。その外聊が奇抜と見られたのは相撲部であり、これには専門家の天龍関取を聘して、随意の一訓練科目としたが、その教え方が甚だ立派であり、各民族の青年学生が悦んでこの訓練に加わった。この角力訓練が腰を据える鍛錬として他の武道訓練に共通する基礎となったことは、予想以上の成功であった。」^{注495}

ここには明確な形で示されていないが、三名の武道顧問が置かれ、剣道には島谷八十八、柔道には福島清三郎、合気武道には植芝盛平が委嘱された。これは建国大学令に第四條に「建国大学に顧問、名誉教授及講師を置クコトヲ得」^{注496}と記されたことに基づく委嘱であり、武道顧問はいずれも日本内地に居住する著名な武道家であり、年に一二度実施された建大の武道週間の際に来遊し、指導を行った。その程度の滞在・指導で建大の武道教育に与えた影響を云々することは難しいように思われるが、各武道教育の項で後に詳述されるように、自らの息のかかった教師を送り込むことによってそれぞれの形で大きな影響を与えたのである。

作田の武道教育に対する評価がどの程度適切であったかは、以後の詳細な検討を待たねばならない。ここでは次に、富木謙治の武道訓練に関する思想を見ておきたい。それは彼が、合気武道の担当者であったが、前期一期生の塾頭、一期生後期における塾頭として活躍する一方、武道の講義科目を武道教員のなかで唯一担当し、武道の研究グループの班長として、また訓務科長として大きな活躍をしたからである。

(2) 武道訓練の思想

武道訓練は、開学初年度から実施されていくが、武道訓練に関する客観的な理論づけがあったわけではない。恐らくは開学の準備段階から塾頭予定者あるいは武道訓練担当者として業務に携わった石中広次らの考えで行としての武訓が推進されたものと思われる。1939年2月1日に着任した合気武道担当者の富木謙治は、その石中広次と塾頭を交代し、武訓全般に

^{注494} 前掲書、作田莊一、道の言葉(巻の六)、pp.220-221.

^{注495} 同上、p.220.

^{注496} 前掲、建国大学要覧(康徳8年度)、p.10.

わたって次第に指導力を発揮していった。それは彼が論理的思考力の持ち主であっただけでなく、文筆能力に優れていたことが大きかったものと思われる。建大の武訓に関する理念と方針を描いた最初の文書「武道訓練について」^{注497}は彼によって執筆され、1941年の研究院月報に掲載された。

(参照 資料4-1：富木謙治「武道訓練について」)

1941年度は一期生が後期に入った年であり、富木は一期生の総塾頭に就任している。以下にこの論考の骨子を検討しておこう。

まず、彼は、武道訓練の目的から説き起こす。武訓の重点として、「武道の根本義の把握」「気魄の涵養」、「武術の体得」の三つをあげ、は「皇道の具体的現はれ」であり、「武道は国体に発し国体を守り国体の精華を発揚せしめる道である」とする。は武術の修得錬磨をもって「修行」によって行なう。はまたの獲得に通じるとされる。続いて建大における武道の根本義が語られ、それは全学の教育の目標でもある「建国精神の把握」であるとされる。

第二に、「武術の錬磨体得並にそれを通じて気魄の涵養につき本学の訓練方法を」述べている。まず、「剣道の地稽古や柔道の乱取の修行方法」が起こる歴史的経緯が簡単に述べられ、当時批判を受けていた「競技化」の問題に入る。指摘される点は「武道の指導精神の方面に」「非難される余地」がある点と、「教育上の要求から種々の制限が加へられたこと」があげられる。後者は「その制限が多ければ多いだけ形式的に競技に近づかうとする危険がある」と特に批判される。

この課題解決のために富木は、「武術の本質に即した修行錬磨」を解説する。それは「武術は時間的に場所的に無制限なる敵に備へる技術である」特性から、「先の位」、心の構え、身の備え、起居の間における身の嗜みから、礼儀作へと発展したとされる。また「最も危険な技術である点から」、「真剣な態度」や「所作」、「死に処する態度」、覚悟まで発展し、「特に日本武道の真髄ともいべき没我的攻撃精神の悟道にまで進んだ」ところに「武道の気魄の源泉」を見るとされる。

こうして「今日あまり行われていない形による訓練」に言及される。この方法で「真剣勝負に処する術理を体得することによって気魄胆力の涵養に資する点が頗る大であることを信ずるものであるが」、教育方法上、「今日のような団体訓練にとしての武道教育に於ては仲々その成果を収め難い」とされる。また形の方法は師範の直接指導監督下にないと「訓練が形式化し」「邪道に陥りやすい」とされた。

以上を踏まえて「本学の武道訓練」を、「以上の二方法を合理的に連関せしめ、その長短相補ふことによって理想的武道訓練の実を挙げることができる」と次の点を強調した。

「第一に試合による訓練を」「実戦の場として取り扱ひ」重視する。しかし「競技化の弊に墮」さぬよう「武道の根本義と本質に立脚して指導訓練されなければならぬ」とされた。第二に、「形による訓練をも試合による訓練と併立せしめることによってその訓練の生かを挙

^{注497} 建国大学研究院月報(8), 1941年4月25日, p.3

げなければならぬ」とされた。それは形の長所が、「その術理を通して直接に古武士の伝統的武道精神と触れ、且つその生活態度にまで味到しえる」からで、これによって「競技化の弊に陥ること」を反省是正するべきとして、形の修行方法を強調したのであった。

最後に富木はまとめる。「以上の訓練方針に基づいて本学に於いては従来の剣道柔道の他に合気武道や騎道弓道をも正科としてこれを課し、剣道の中には銃剣術、試斬り又は古き剣法をも課すことにしている。別にまた角道をも本来の姿にかへして武道の一として見做し準正科として採用している」と。^{注498}

開学以来三年間の様々な武道による武訓の実態を踏まえて考えるとき、以上の論が非常に調和的であることが理解される。競技を行う剣道や柔道などの問題点に警鐘を鳴らして、「真剣さ」「形」を強調するばかりでなく、軍刀術などその種の要素を取り込んで教育してきたことがきちんと位置づけられているのである。そればかりではなく、競技システムを持たない合気武道の位置づけも同時に正当化されることになる。こうした富木の論は、恐らくは、自ら柔道の競技の世界で苦勞してきた体験と合気武道の形の世界での別種の苦しい修行体験から来た結論、両種の武道をやるべきであり、形を研究すべきであるという信念からきたものであろう。日本武道の二つの方法を明確に意識し、そのことによって武道の多様性を認めてそれぞれに意義を置く。富木はこうして武道の様々なあり方・関係を整序したのである。なお、1943年、富木は再び研究院月報に「『形』と理法」^{注499}を掲載して、その理論を展開している。これについては後章（合気武道の教育）で検討することにする。

以下の各武道教育の実態を解明していこう。

^{注498} カギ括弧引用は全て富木謙治「武道訓練について」。建国大学研究院月報(8), 1941.4.25, p.3.

^{注499} 建国大学研究院月報 (30), 1943.6.25, p.7.

第2部 武道教育の実際

建国大学の武道教育を解明するためには、次の二つの側面を捉える必要がある。第一は授業の側面、第二は部活動の側面である。建大の場合、前期課程の三年間は剣道、柔道、合気武道が訓練課目・武道訓練の必修科目であった。後期課程になるとこれに弓道が加えられ、学生はこれら四科目の内一科目を選択必修することが求められた。後期課程は専門課程であり学業が優先されたため、訓練課目が全体に削減されたためである。これら以外の武道も形態は様々であったが授業として行われた。騎道、銃剣道、角力がそれである。これら七つの武道は、それぞれ影響力のある指導者がいたことから学生の心を動かし課外活動が組織された。

教育は教育者（教師）の被教育者（学生）に対する愛情によって支えられ、教育内容と方法の適切性によって成否が決まる。武道教育の成否を考える場合、それが武道という身体活動を内容とするため、一般に、教育内容をはっきりと明示しえる高い技能が教師にまず要求され、その上で指導方法の適切性が求められる。したがって建大の武道教育を考える場合も、教師がどのような修業過程を経て技法を獲得し、技能を高め、思想を形成してきたかを解明することは、その武道教育をよりよく理解し、成否を考える上で重要である。そこで以下の各章では、教師の履歴と武歴をできるだけ解明するように努めた。

また、教育の成否は、教育意図をもって働きかけられた被教育者がどのような変化したかを、一定の価値基準で測定することによって最終的に計られる。学生の変化を明らかにすることは困難だが、幸いに検討できた塾生日誌や戦後の回想録から読みとれる影響を検討してこれに代えたい。教育の成否は軽々に計られるものではない。それは価値基準に何を持ってくるかで異なるわけであるから、戦前において素晴らしいと評価された日本精神を育てる教育が、戦後の民主主義の価値基準から見ると相反する評価を受けることになる。以下の建大の武道教育に対してなされる筆者の執筆姿勢は、戦後に後知恵的に形成されたそのような二項対立の一方の軸を以て他方を断罪することを極力避けようとしている。本稿では、その時代において求めたものを、その必然性と同時にその時代における問題点^{注500}を併せ考察しようとした。その上で、グローバリゼーションの時代における武道という日本の運動文化の教育力を考察したいのである。

1) 武道場について

一期生が入学した1938年5月当時の建大の多くの校舎が、一部未完成であったことは知られていない。60年以上の歳月が、人々の建大での生活の記憶を美しい一枚の図像にしあげてしまうからであろうか。人々の記憶にたよる聞き取り調査研究の事実誤認の危険性がここにある。複数の人に当たるだけでなく、同じ人にも何回も当たることが肝要である。何回も当たるうちに記憶が蘇り、修正されるからである。齋藤精一によると始めて校門をくぐった時見えたのは、正面奥の食堂、左側の教室棟と一期生の六つの塾舎、左手前の守衛所であ

^{注500} もちろんその場合の問題点の形成は筆者の価値観から来るものであり、その点で筆者が生きる現代の思想の影響から自由ではない。そのことの自覚を明示しておく。

り、教室棟と対になって後に右側に建てられた研究・教室棟^{注501}や二期生のための六つの塾舎は未だ建築中であった。

左側教室棟の一階には、事務室、教員室、教室二室程度の広さをもつ武道場（柔道・剣道場）が設置されていた。二階は一学年全員が収容される大教室があった。作田荘一が一学年単位で精神訓話の授業をし、また、1938年7月7日に石原莞爾が一期生を前に日本の政策を歯に衣を着せることなく批判する講演をした場所である。そして教室及び第二外国語（英・独・仏・露等）のための小教室、事務所等が設置されていた。武道場の広さは、柔道はともかく、竹刀をもって遠くから打ち込み稽古を行う剣道には狭いものであり、後述のようにそれは学生の剣風にまで影響を与えたという。

右側の研究・教室棟や塾舎は1939年の暮れ頃に完成した。この棟の記憶は学生には乏しく、一階に図書館、武道場等、二階に研究院関係の諸室、教官室等などが設置されたようである。

2) 養正堂

大武道場・養正堂が開場するのは、一期生が後期に入る1941年の6月28日、武道週間打ち上げの日である。資材難のため1939年8月の地鎮祭から約二年の歳月が経過していた。養正堂は、作田荘一によれば、「他の建築に比べて立派すぎるほどの練武場」であり、「大学本館が出来るまでの種々の儀式を行う場」^{注502}であった。1943年6月の第一回卒業式の際には、満洲国皇帝溥儀を迎えて厳粛に取り行われた。式典などのために、正面には演壇が造られていた。そこに向かって右上には「養正」（張景恵國務総理筆）、左上には「振武」（本庄繁関東軍司令官筆）の揮毫が掲額されていた。

開場式の際に場内に掲げられたというその堂訓には以下のようにある。

「養正堂堂訓 / 天地ノ正気ヲ養ヒ天地ノ武徳ヲ振フ 百行ノ本一貫ノ訓 誠ハ養気ノ根ナリ 勇ハ振徳ノ原ナリ 百行ヲ立ツルニ誠ヲ以テシ 之ヲ貫クニ勇ヲ以テス 知行ヲ一ニシテ其学ヲ実ニシ 綱常ヲ身ニシテ其志ヲ明カニスル 門ヤ斯ニ由リ道ヤ斯ニ在リ 諸子之ヲ勗[つと]メヨ」

この文言がだれによって執筆されたかは不明である。なお、岩井隆三郎によると、^{注503} 養正堂は、「石中先生の発想による」もので「これは東大の七徳堂というのに向こうをはったわけではないが、正を養うのが第一だということにつけられた名です」という。その広さは、1階は各250畳^{注504}ほどの柔・剣道場があり、そこでの試合や稽古が観覧出来るようになっていた。二階はないが上から見学可能な渡り廊下のようなものが内側周囲に造られていた。^{注505}

^{注501} 研究・教室棟などの名称で呼ばれたわけではないが、本稿では混乱を避けるため機能上から区別して使用する。

^{注502} 前掲書、湯治万蔵編、建国大学年表、p.82.

^{注503} 前掲、建大史資料(2): 12.

^{注504} この広さについては未だ明確ではない。250畳の数字は湯治万蔵氏が校内造園計画図が1cmが百坪であったことから推算してご教示下された。湯治万蔵書簡(1993年11月8日)

^{注505} 筆者は1990年の第一回訪中の際に、現在長春大学となっている旧建大の建て物を見て歩いたが、養正堂は火災によって全く別のものと建て替えられたとのことで、見学することは出来なかった。

開場式では、古式巻藁前射礼（加川満喜）、柔道古式の形（福島清三郎・中島三郎）、大日本剣道形（浅子治郎・庄司源吉）、合気武道（植芝盛平・富木謙治）、居合・試切（後藤周助）、柔道極の形（門野與巧・八木正弘）、満洲武技の演武があった。^{注506} 島谷八十八の姿は見えないが二顧問を中心に主な建大指導者の豪華演武会であった。

^{注506} 建国大学研究院月報 (No.11), 1941.7.25., p.5.

第6章 剣道の教育--練武・堂々

建大の剣道教育を明らかにするために、本章では、(1)、(2)、及び(4)で専門の教員を含む様々な指導者の履歴・武歴と思想の解明を、(3)で学生の受けとめ方、(4)で剣道部の教育を検討した。授業について項を立てなかったのは主に資料上の制約によるものであるが、主に(1)から(4)の過程でその重要な一端は扱われることになる。

1. 武道顧問・島谷八十八^{注507}

建大の剣道教育に大きな特色を与えた重要な人物は、剣道担当の武道顧問に委嘱された剣道範士^{注508}・島谷八十八である。ここでは初めに、島谷の略歴、武道歴、技法の特徴および剣道思想から島谷の剣風ともいべき特徴を、資料と調査によって明らかにする。次いで、それ以外の多彩な指導者を見て、建大の剣道教育に与えた影響を考察してみたい。

筆者は2000年10月8、9日に、島谷がその人生の大部分を送った奈良に関係者を訪ね、千葉十一氏（奈良県警察学校）から道畑秋作氏（剣聖島谷八峰会幹事長、当時88歳）の紹介を受け、お話を伺うことができた。文献資料としては、この時の聞き取り調査でその存在が判明した道畑氏編になる『大道--剣聖島谷八十八先生』（以下『大道』と略記）^{注509}等を資料として用いた。なお『大道』は、学術的な体裁こそとっていないが、村田寛三の遺稿「剣聖島谷先生を想う」^{注510}ほか島谷について書かれた沢山の雑誌記事等の資料を丹念に集め、道畑氏自身の体験と文献調査や聞き取りを総合して島谷の人柄と剣道思想、指導法などを記した労作である。

(1) 堂々たる態度と人柄

道畑は、『大道』の中に村田寛三遺稿「剣聖島谷先生を想う」^{注511}を収載しているが、この中には島谷の修行歴が比較的詳細に描かれている。『大道』には道畑の手で島谷の年譜が簡潔に記されている。しかし本書全体を精読すると、より詳しい年譜を作成することが島谷全体の理解を早める上で得策と考え、以下の年譜（表6-1：島谷八十八年譜）では、『大道』に収載されているが割愛された記事と筆者の知る建国大学関係事項等を用いてより詳細なものを作成した。

（参照 表6-1：島谷八十八年譜）

^{注507} 本章は、日本武道学会第35回大会（2002.9.6. 於東京農工大学工学部）における筆者の口頭発表の際の資料論文「『満洲国』建国大学と剣道教育--武道顧問・島谷八十八を中心に--」を発展的に加筆訂正したものである。

^{注508} 剣道家の称号である範士、教士は、1902年の大日本武徳会による武術家優遇例によって制度化された。島谷は1926年に範士号を授与された。中村民雄(1994)剣道事典-技術と文化の歴史、島津書房、pp.129-131.

^{注509} 道畑秋作編(1996)大道--剣聖島谷八十八先生、剣聖島谷八峰会.

^{注510} 同上、pp.86-122.

^{注511} 同上、pp.86-122.

表6-1にあるように、島谷は1880(明治13年)に十歳で健児社に入門し、前田龍五郎に真影流を習う一方、そこで併習されていた示現流^{注512}を修行する。前者が技とすると後者は旺盛な気力を中心とした。西南戦争において、示現流の使い手であった父・村上斉之丞は西瓜売りに化けて英国艦に切り込もうとした猛者で、薩英戦争(1863)で戦死した。また長兄は西南戦争で戦死し、自らも母に手を引かれて戦場を逃げ回ったという。

村田遺稿によると、「示現流は防御を念頭におかず、攻撃のみの剣法、広い野原に棒くいを何本も突き立て、これに陣笠をかぶせ、素面、素小手で、大きな掛け声をかけながら息のつづく限りなぎ倒してゆく、一騎当千の意にかなうもの、初心者の稽古にも適当なものである」。^{注513} 島谷は余生の剣道修行に示現流を奨励したいということから、門弟の庄司[源吉]に奈良武徳殿の前庭にこれの打ち込み台を作らせた。「先ず先生の心気力の充実の猛打の示範」があったという。^{注514}

道畑は、島谷の高弟・吉村一郎範士の話として、示現流を形にしたといわれる「薩摩拵え」^{注515}について島谷はよく話をしたという。また同氏は、「島谷先生が庄司先生に伝授されているのは薬師丸の野太刀示現流であった」と記し、^{注516} 島谷が両流全体について精通していたことを示唆している。

島谷の専門家としての剣道修行の第一歩(30歳頃)は、「なんとしても郡山(大和)柳沢藩の指南役佐瀬政春先生の『浅山一伝流』のきびしい試練を受けたことに始まる」という。^{注517} 1903(明治36)年に奈良県警察本部剣術教師となった佐瀬(57歳)は、引き立て稽古がうまく指導は妙を得ていた一方で、専門家には非常に厳しかった。彼は「突きの名人」で、「自室の天井から一文銭を紐で釣るし前後左右に振り動かし、片手突き連続突きの稽古をよくやって」いた。その稽古信条には「突きのない稽古は価値を半減する」とある。彼からの影響を村田遺稿は、「絶妙の突き業を島谷先生は天性の資質と相俟って努力精進、この突き業の妙技を体感、体得」したとまとめている。^{注518}

^{注512} 示現流(示顕流)には東郷備前守重位の示顕流と東郷の高弟薬師丸刑部右衛門兼陳の野太刀示顕流とがある。野太刀示顕流は、技も何もなく、渾身の気迫を振り絞ってただ一撃で敵を斃すという流儀で、明治維新から西南戦争に活躍した篠原國幹、桐野利秋、逸見十郎太、西郷従道、そして東郷平八郎などもこの流儀であった。(同上, pp.137-140.)

^{注513} 同上, p.87. また矢迫隆義氏(1938年奈良県立郡山中学校卒業)は、4年生になった時の寒稽古最終日に、島谷がかかり稽古の代わりに以下のように示現流を教えたという。「道場の外へ出ると、そこは剣道場の北隣り、交友会館の横で、一本の立木があり、その木の横1.5米ぐらいの所に×型に杭を交叉させて打ち込み、立木の枝と杭との間に長さ1.5米ぐらいの横木を渡してあった。そして先生から木刀ぐらいの生木の丸太を渡され、渡し木に向かい、「エイ」「エイ」と気合いもろとも20~30回打ち込み続けるのである。当時何も解らない私たちは言われるままに、素足、素手で寒いから一生懸命打ち込み続けたが、先生も稽古着に白いはかまのまま木刀を握り、白ひげ面でしかもするどい眼光でじっと凝視しておられた姿が今でも思い出されるのである。」(同上, pp.188-189.)

^{注514} 同上, pp.87-88.

^{注515} 薩摩拵えの刀とは、「太身の剛刀に柄も長くて太い。防ぐ発想がないから鐔が小さい。注目すべきは、鐔に二つの小さな孔がある。鞘止めの孔、乃至、鐔止めの孔というが、刀を抜くことが出来ないように、針金や紐を通して、栗形に結び付けた。平時の抜刀を戒めたのである。」(同上, p.139.)

^{注516} 同上, p.140.

^{注517} 同上, p.88.

^{注518} 同上, pp.99-91.

1905(明治38年)に島谷は、33歳という年齢で、わざわざ武術教員養成所(第一期生)に入所した。その動機は今では知る由もないが、恩師佐瀬が1903年の第8回武徳祭(京都本部武徳殿)での特別試合に於いて本部師範・三橋鑑一郎(63歳)と対戦しその試合ぶりに感銘を受けたとあることから推して、恩師の勧めがあったのかもしれない。

島谷が入所した武術教員養成所の教授陣は、主任の内藤高治、門奈正、三橋鑑一郎、正木勝、矢田貝弥三郎、湊部邦治らであった。「大日本武徳会本部の稽古は切り返しとかかり稽古が主であった。武術教員養成所が開校して以来、この指導法に変わりはないが、ここでは一年生は切り返しと体当たりのみ、二年生になってからかかり稽古が許された。これは内藤高治の指導方針である」。^{注519} 佐々木季邦(範士)は、「少しは試合向きの稽古を希望したのですが」、「ことに内藤先生には一考もして貰えませんでした。ひたむきな基礎訓練によって、人間形成へと指導して下さいました思いは、今日の競技中心主義的な剣道の弊害が叫ばれる折柄、先生には先見の明がおりで」感謝にたえないとしている。^{注520} また、斎村五郎は、内藤高治に「高潔な人格と豪壮な剣風」を見、彼の言葉、「凡そ武道家と黄金、武道家と人爵とは縁の遠いものだ」、「利口な剣術家が多い。大馬鹿の武道家は希有だ」、「大馬鹿が出て欲しい」を紹介している^{注521}が、ここには内藤の剣道修行における人間性陶冶への強い志向が窺える。島谷は1917(大正6年)より再び五カ年間に亘って武徳会本部の内藤の下で修行している。こうした内藤の志向に連動した実技における「切り返しと体当たり」即ち基本重視の指導は島谷にしっかりと咀嚼され、そのまま島谷の建国大学生に見せた態度となった。建大剣道部で一期生長野直臣塾生日誌には次のようにある。

「特に島谷先生の切り返しは一呼吸の中に指[マ]体脚の一致を以て切返すのであるから、疲れるといふより、目が真っ黒になって来、又、頭に響いて頭痛がした。」(1938年11月1日・火・晴)

示現流の修行から来るものであろうか。島谷の強靱さは、同じく長野によって「神技」と形容されている。

「島谷先生の体当たりにしろ、石中先生でもへとへとになる。練習とは恐いものだ。ある域まで達すると神技としか見えない。」(1938年11月2日・水・晴)

では、島谷の試合における強さはどうであったのか。

1923(大正12)年5月、武徳祭演武大会(於京都武徳殿)における試合では、当時、上段で無敵といわれた高野茂義に対して、島谷は大上段で対し、二度にわたり追い詰めて上段を取らせなかった。この試合を実見した玉利嘉章範士は語る。

「島谷先生の撃った面が二回、これが見事に命中した。『イヤッ、メーンサーー』ずしんと腹にしみるような掛け声なんです。中断後、「両者再び相上段か。島谷先生が竹刀を頭上に構えようとするところ、茂義先生の竹刀が小手にのびました。このときの島谷先生がまたよかったですよ。『うむ』とうめいて『参りました』と。」^{注522}

^{注519} 同上, p.38.

^{注520} 同上, p.39.

^{注521} 同上, p.40.

^{注522} 同上, p.52.

この試合は自ら認めた敗戦であったが、そこに至る過程において島谷の総合的評価を高からしめた一戦と思われる。また、勝敗に頓着しない思想に対する言行一致の率直な人柄が窺えよう。

1929(昭和4)年の御大礼記念武道天覧試合(5月4・5両日)の事例も、島谷の剣道を物語る。この試合に島谷は、宮内省の推挙で指定選士並びに審判員として出場した。渡辺栄教士との一戦は、勝敗を度外視した武道精神のある試合を聞かせて欲しいという問いに対して、この時代の権威であった中山博道、高野佐三郎両範士が一致して上げた試合であった。ことに中山博道は次のように評している。

渡辺教士は「一種の名人で、技の長けた人」。一方島谷範士は、「向うは如何なる技があるとも、自分は精神をもって勝つというので臨まれ」、「細かい技はあるいは渡辺教士の方があったかも知れないが、島谷範士の方が堂々として相手を圧伏せられて」、審判の三人の投票の結果、「態度で」島谷の勝ちとした。そして「非常に立派な試合」と激賞している。

注523

気魄と試合態度の充実、これもまた、建大生に求められた剣道であった。

なお、恩師内藤高治は、この時の高段者の試合が宮内省のリードで決まったことを試合主義への予兆として批判し、「島谷、後を頼むぞ」と語ったといわれる。内藤の言の詳細は不明だが、長野塾生日誌に見える次の記述は、恩師から島谷に受け継がれた思想が、建大生に伝えられたことを示している。

「武道週間終り午後二時より武道大会を行ふ。気候も随分低下し、意気益々鼓舞し、角力の如き、珍しく元気のあるものであった。最後に島谷、福島両先生の講話があったが、即革新家の先生の見たいには本校の柔剣道は将来大いに有望である。しかしてその曙は満洲より内地へと、その光明をもたらすべきである事をのべ、試合の形式化されたのを嘆かれ、先に青少年に賜りたる勅語の中の「文を修め武を選び」といふ一語に向って邁進すべき事を強調された。病後にもかかわらず、毎朝稽古に来て(?)注意を与へて下さった事を感謝し、又、この度の先生の来校が自分に如何に意義あったかを考へる時、大いに精進すべき点が多々あるを覚ゆ。」(1939年9月30日・土)

「夜島谷先生の旅館帝都ホテルに行き、久しぶり島谷先生の偉容に接す。この度の学生生徒に賜りたる勅語の中に、文を選び武を練りとか仰せられているが、日本の剣道界も之に相当する場面に廃れているから建国大学の剣道は之を打開して真の姿を維持して行く事が必要なる旨、会うとすぐ話された。丁度憲兵隊に行かれる所で忙しく、十五分くらいでお暇した。自分はああ御勅語をまだ読んでいない事を悔んでやまない。」(1939年9月23日・土・雨)

「会うとすぐ話された」という所に、日本の剣道界の試合中心主義の現状に対する不満が、建大の剣道への期待となって島谷を満洲へまで動かしていることが理解される。

(2) 剣道技法の特徴

注523 同上, pp.80-81.

以上の考察でも想像されるように、島谷の剣道技法といっても、それは島谷の前にいた先人達の工夫の集積の上に立つものであり、特に基本が異なっているというものではなからう。島谷は剣道書を残していないので、彼の教えはその衣鉢を継ぐ剣聖島谷八峰会の技法に対する所見を『大道』の八峯小道訓の項目から見たい。そこで道畑は以下の内容で解説しているが、^{注524} 本当の理解はこれらを実技で検証することが必要であろう。

< 八峯小道訓の主項目 >

掌中（手の裡、手の内） 1.柄の握り方 2.手の裡 3.絞りと締めを混同を戒む

構え 1.合掌の構え 2.剣先で中墨を制す 3.足は拇指 4.上虚下実の自然体

刀法 1.太刀筋 2.太刀の冴え 3.自然の力--引力 4.手首の働き

5.相手の遅きところを、我が速きところで処理

6.剣先は打突後も相手の中心線はずさず、相手の打ち突きの始末

実技稽古に関して

基本的実技稽古 1.運足 2.気合発声練習 3.徒手素振り 4.素振り

5.前進切り返し 6.打込み体当たり 7.懸り稽古

8.引き揚げ、当てっこ、差し面厳禁 9.目付け

主な業 1.面業, 歩み足, 懸かりの先 2.面業, 後の先 3.コテ面業 4.胴業 6.突き業

小道に関する付記

以下では『大道』に紹介されている島谷の試合ぶりの回想から、試合ぶりについて若干の特徴を整理しておこう。玉利嘉章範士によると、「島谷先生は、元来、まず中段で攻め、機を見て大上段に振りかぶるや独特の歩み足から進み寄って、脳天から肛門まで一気に切り下げようかという」スタイルの剣道をしたというが、この彼の剣風に、歩み足、大上段、攻撃精神（その支えが胆力と気迫）、上からの大きな打ち、の四つの特徴を見いだせよう。

歩み足---「送り足は板の間の道場剣道、野外では歩み足しかできない。道場でも相手が退けば、歩み足でどこまでも攻められる。（島谷の言葉）」（芳村一郎範士）^{注525}

「私が武専学生の時、助教から、トンと踏み切って面を打てと指導されたが、私は島谷先生から、こうやるように習ってきたといって『歩み足』で押し通してきた」（山崎清）^{注526}

「先生の足さばきは床上を滑るかのように、なめらかに、自由自在、まことに軽妙な足さばきであった。」「足さばきというよりも、腰さばき、安定した腰（重心）の移動につれて膝の関節を恰もクッション装置でもあるかのように柔軟に、重心の上下動の少ない水平運動よろしく、加うるに腰の回転が主で骨盤の横軸を平らにして、左と右に半回転の連続、床面に対して垂直の体勢を崩すことなく、リズムカルな体捌き」（村田寛三）^{注527}

大上段---「相手が得意の突きで攻めてきても、先生は持ち前の旺盛な気迫で圧倒、防衛

^{注524} 同上,p.205-228.

^{注525} 同上, p.151.

^{注526} 同上, p.186.

^{注527} 同上, pp.100-101.

態勢を見せず、左甲手打ちで攻めてきても、上段の構えをスッと上にでもあげて大上段、動揺の態度をあらわさず、相手のしかけ技を意に介せず、泰然自若、機を見て大上段からの真っ向唐竹割[マ]の一撃」、「この阿吽のせつなの真実表現はまことに筆舌につくしがたい。」(村田寛三)^{注528}

攻撃精神(胆力と気迫)---「よく先生が、相手の打ちを受けとめるとか、避けるとか受け身ばかりで防ぐ技を使うようでは上段をとる資格は無いとまで言われていた。ここにも少年期に培われた示現流の攻撃あって防御なしの精神が現れていたとおもう。」(村田寛三)

^{注529}

上からの大きな打ち---「剣先が大きく上から落ちてくる島谷刀法の引き切りの手の裡である(後略)」(中西克行)^{注530}

これに加えて、島谷が重視したのが突き技であった。

突き技---「『突きのない剣道は、塩のないゆで卵』と、島谷先生は機会ある毎に言われた。」(芳村一郎範士)^{注531}

「ある観戦記に『島谷は、島谷独特のいつもの足運びで前に進んだ』とある。私は質問すると山崎先生は、『海辺の波打ち際に、さざ波が打ち寄せるように』すり足の歩み足で進退する。剣道形に、ドンと足音立てて踏み込む技はない。」(中村克行)^{注532}

(3) 剣道思想

島谷は1934年、奈良県巡査教習所において教習生に対して講演をしている。島谷が直接語ったまとまった思想を表す論考として貴重である。^{注533} 幸い、『大道』にはその内容が掲載されている^{注534}ので、そこに盛られた思想を以下に整理してみよう。

1. 島谷は剣道の意義を「心身の鍛練を図り、国家社会にご奉公するため」とする。その上でまず、「武に関する大道」に関する次の主張が出される。

2. 島谷の「心身の錬磨」とは、正しい心、強い心、清い心の三つを養うことである。は古来の道義と「国家に尽くした事績」によって決められ、は勇氣に基づく破邪顕正の心、は日本古代の清明心であろうか。この三つの心の「発露したる行為が、崇高な日本精神の精華すなわち知仁勇の三徳の現れ」であるという。正義の下に、「義勇公に奉ずる」つまり国家の為にという「大勇」をもって行動することは、「科学的精神の顕れであって、武に関する大道」であると述べる。科学的である理由は示されていないが、「科学的精神

^{注528} 同上p.45.

^{注529} 同上, pp.45-46.

^{注530} 同上, p.196.

^{注531} 同上, p.151.

^{注532} 同上, p.196.

^{注533} 外に島谷の剣道思想を表すものとしては、1929年の天覧武道試合における「剣道指定選士としての感想」及び「審判員の感想」がある。昭和天覧試合, 大日本雄弁会講談社, 1930, pp.559-561., pp.494-497.

^{注534} 同上, pp.30-33.

神の顕れ」というところに、当時、科学というものが大衆を説得する上で有効であったことがわかる。

3. 「剣道に関する小道」について。島谷は、「竹刀を運用する上においても、理学的でなければならぬ」とし、「力点と引力と自己の力の三要素の一致によって、自由自在に敏速に力を運用し得て、一騎当千の活動をなす」としているが、こうした考えは、剣道修行の過程で学者の科学的解説を学び、彼なりに咀嚼していたからと思われる。それが上記2.の発言の背景でもあろう。長野直臣塾生日誌も次のように評価している。

「剣体脚の一致を力学的に説明する所などさすがは先生だと思はせる。とても他では聞けないものだ。」(1939年9月30日・土・曇)

4. これも3.同様に技術論であり、技「を大別すると、避ける、萎(な)やす、払うの三法則を出ない」と断じ、それを実行するのに必要なものは「胆力」であるとした。その胆力は「正義に基づく胆力」として国家正義(それが武に関する大道)に方向づけられ、その結果技の存在意義も与えられている。

5. 以下は技術形成を通して目標とされる精神的境地についてである。まず「精神と心」を区別し、心は「朝夕変化極まりなき心」で、精神はその高次なもの即ち「確固不拔の不動心」と理解していたと思われる。後者が剣道で発達させるべき目標とされる。

6. 次も同様である。まず、剣道実践において重要な先(先、後の先、先々の先)が「機先を制するの意」と定義づけられるが、島谷の言の特徴は「心の先」でこれは状況次第で変化する「無窮」なもの、即ち「闊達自在の心」とされた。島谷はこのような心に達すると「絶妙の剣」「活人剣」「神武不殺」の剣、「向かうところ敵なくいづれもみなその威徳に服せざるものがない」ような剣となるという。この境地で達せられる「明鏡相對して映像なしという哲理」は、同じ境地の者が戦う場合の心身の高雅さあるいは一種の芸術性を表現するものであろう。この段階になると、島谷が恩師内藤から授かった言葉「不可勝不可敗」(勝つべからず敗るべからず)が可能となると彼は考えた。

以上をさらに分析して要約すれば以下のように理解されよう。

- ・目的：剣道の意義を「心身の鍛練を図り、国家社会にご奉公するため」とする。
- ・目標：正しい心、強い心、清い心。この三つの心を養う。
- ・行為論：三つの心の発露した行為は、「日本精神の精華すなわち知仁勇の三徳の現れ」。
- ・技術論：1.竹刀の運用は「理学的」に。
 - 2.技を大別すると、「避ける、萎(な)やす、払う」に集約。
 - 3.その実行は「正義に基づく胆力」。
 - 4.技術形成を通じた目標：「確固不拔の不動心」「闊達自在の心」「不可勝不可敗」

本論の最後に島谷は、「現今剣道界の弊風たる試合上における引き揚げ」という現実的な具体的問題にわざわざ言及し、これを矯正しないと「ついには日本の精華たる武道精神を滅

却せしむるに至らんことを憂う」としている。「引き揚げ」^{注535}は審判・相手・観衆に勝ちを誇示する示威行動といえる。勝負に執着するその心根が引き起こすこの問題は竹刀打ち込み稽古が盛んになる近世の文化・文政期から起こっていたといわれ、以後長く批判されてきた。^{注536}しかし明治近代になって野球に代表される学生スポーツが盛んになると、青春の一時期にスポーツの勝負に執着して打ち込むことは有益であるとする考え方がスポーツ界にはあり、それは主に学生剣道界をも覆っていた。こうした事は島谷には許せなかったのである。こうした事に言及せざるを得ないところに、上記6で挙げられた理想の到達への道の険しさが窺える。

(4) まとめ--堂々たる剣道

島谷は天覧武道大会における府県選士に対する「審判員の感想」を記している。審判員の留意点として挙げた8項目の中には次の二点が見える。

・「審判員として特に注意すべきは現今武道界の通弊たる引き上げを制する事（中略）に心掛けたり。」

・「試合者の姿勢態度整はざる刺撃は根本精神に乱れある証跡なり、斯かる場合の刺撃は之を採らずして不十分なりと宣告する事に心掛けたり。」^{注537}

また、全体を通しての感想には、「今回推挙せられたる各選士は種々の欲望を抛ち、最も勇敢に最も真剣に奮闘して武士精神の発揮に力むるものと期待したるに、案外勝敗を争ふ為めの試合と認むるもの多く」^{注538}とあるように、指定選士に於てさえも見える勝利主義による剣道を徹底して批判する姿勢を示している。島谷が求めたのは武道家としての「姿勢態度」であり、そこに武道家の「根本精神」があるという信念だった。故に彼は、少年剣道に深い関心を持ち、勝負に拘る傾向が浸透することを憂い、「正しい試合に終始したとか、立派な試合ぶりであったとか、心に残る（印象の深い）試合ぶりであったとか、に対して何らかの形で賞賛、表彰をすることがきわめて望ましい」^{注539}としたのである。長野直臣が接した際に島谷から受けた言葉にはそうした彼の信念が吐露されたものであった。

島谷は平素から和服で通した。その姿態は、「達磨」あるいは「短軀肥大」と形容されたりするが、道畑は専門家としての立場から、彼の剣道の姿態をより詳細・適切に次のように語る。「『石の地蔵さんのように、肩が丸く、力が脱落して、全体がズシリと鎮まり、まるで打ちとこなし』の感で、街を歩む姿も同様であった。これがいうところの上虚下実の自然体の構えかと感じました」。^{注540}

島谷の剣道を、二期生井坂直史は筆者に、「真っ当で、正当的な剣道」であり、「小手先

^{注535} 1927年の大日本武徳会試合審判規程によると、「本条に於て引き揚げと称するは有効なる激突の有無に拘わらず備えを崩し氣勢を弛め試合を中断する動作を謂う。残心を以て直に後の備を為すものは包含せず」とされた。前掲書、中村民雄(1994)剣道事典-技術と文化の歴史, p.88.

^{注536} 同上, pp.84-91.

^{注537} 前掲, 昭和天覧試合, 大日本雄弁会講談社, 1930, p.496.

^{注538} 同上, p.497.

^{注539} 同上, p.105.

^{注540} 前掲, 道畑 (1994), p.215.

の技をやると叱られた」と語っている。ここでは中山博道の言葉を採用して一言で「堂々たる」剣道と形容しておきたい。

2. 教員人事

建国大学の武道教育では三つの必修武道に武道顧問がおかれた。武道顧問は、建国大学令第四条に掲げられた職員リスト（総長、副総長、教授、理事官、助教授、事務官、助手、属官）の中には見えないが、末尾の文章で「建国大学二顧問、名誉教授及講師ヲ置クコトヲ得」とあり法令に基づく職制であった。建大での顧問は教育者として厚く遇された。1941年（康徳8年）5月1日現在の「建国大学要覧」職員録には^{注541}、「総長、副総長、理事官、事務官」、次いで「庶務科長、教務科長、訓務科長、塾務科長、図書科長、医官」、その後には教官のリストが掲載されている。その序列は、「名誉教授、武道顧問、配属武官、教授、助教授、講師、嘱託、兼務講師、助手、助教、属官、技士、委任官試補」の順であり、配属武官の上に置かれている点に高い位置づけが理解される。したがって島谷顧問の下に剣道教師が位置づけられる関係にあったといえよう。

しかし武道顧問の建国大学の武道教育への影響については、三つの武道により違いがあったと思われる。彼ら武道顧問は満洲に住んでいたのではないことが決定的な制約であったろう。彼らは年に2回程度行われる武道週間の際に、招かれて内地から建大に出かけてきて学生の指導にあたる外は直接学生を指導する機会に恵まれなかったと思われる。ただ、教員の採用に際して影響力を行使することがあったと思われ、現場教員との関係の深浅によってその影響力が異なると想像される。柔道や合気武道の場合には、武道顧問と建大で教育に当たった教官との関係は強い絆で結ばれており、武道顧問と教員との間で夏休み冬休みなどを利用した交流があった。

副総長作田は、教員人事について、戦後に建国大学同窓会の質問に答えて次のように記している。^{注542}

「教授陣の編成には種々の行き方を採った。経済学科に当たる教授・助教授については概ね私自身に[マ]迎えたものが多かったが、その他は創立委員並びにそれぞれの専門家である先輩に推薦して貰い、概ねその通りに当人の承諾を得たものである。関東軍及び満洲国総理府からの公的推挙は殆ど無かったように思う。ましてや強く採用を求められたことは一度もなかった。この点は軍及び総理府が意識的に考慮した事と察せられる。」

「満洲系及び朝鮮系の鴻儒と認められた人々には名誉教授として参加して貰った。されど塾・学科・訓練の勤務に当たる教職員は日本人系に止め、中国語の外には他の民族出身に及ばなかった。それは有力なる推薦がなかったのみでなく、建大の教育方針が従来のもものと異なる新たな計画の実行であるところから、新教学の組織に参加して貰えないと思料したからである。中国人学者を広く迎えることは望ましかったが、恰も日中両国間の国交が円滑でなく、北京において人を求めた際にも、主として関東軍関係の手にて行われたようであっ

^{注541} 建国大学要覧(康徳8年度版,1941.7.25).

^{注542} 建国大学同窓会「建大史」編纂委員会編(1967.11) 建大史資料4:6-7. なお記した作田の三つの回答は、同窓会の質問事項メモに誠実に対応したものの。

た。」

「教授陣の充実についての人選の基準は、主として大学創立委員会において討議された結論を実行するに当たって協力する人々を迎えるにあったが、それは容易に成功するものではなかったが、しかし漸次に充実されていった。」

ここには武道に直接言及した部分はないが、下線部について考えると、武道教員は創立委員や東京および新京（現長春）にあった創設事務所の軍関係者の縁故が強く出されたものと想像される。

島谷の場合は、『大道』収載の以下の新聞記事（新聞名年月不詳）^{注543}によって知られる。

<老剣士、古希を前に招かれて旧満洲へ--骨を埋める覚悟で武道顧問快諾-->

「日中親善を目指し八十の老体を顧みず『中国へ与ふる書』を携え本月初め単身海を渡った「満洲花大人」退役陸軍中佐花田忠之助郎の異父弟、^{注544}いま関西剣道界の至宝といわれる大日本武徳会剣道範士九段、奈良市東城戸町居住、奈良県武道教師島谷八十八翁（六十九歳）を満洲国から武道顧問としての招請を快諾、武道をもって友人若人たちに日本精神を植え付け、東洋平和の確立を期そうとの抱負に燃えて来る六月一日建国大学開校式までに渡満することになった。

親交ある満洲建国大学教授辻権作少将を通じ同大学武道教授として招請をうけた際、『武士は二君に仕えず』との立て前から辞退したが、再び三顧の礼を以て切なる交渉と兄花大人翁の壮なる中国行きに意をひるがえし顧問として年に春秋二回渡中を承諾した。

『今の武道はあまりにも競技本位にとらわれていますまいか、武は競技ではない、体力とハラノ養成である。この信念を以て友邦の子弟達を訓育したい。そして培われたこの武道精神をもって日中子弟に東洋平和の確立を期す、この希望に燃えて招きを快諾した。』

以上から、建大教授辻権作少将が島谷を剣道担当の教授として招請したが、島谷が辞退したため、高齢であることも考えて武道顧問としてこれを迎えたということ、自らの信じる「大道」としての剣道を日中の子弟に教えることに意義を感じていたこと、の二点が推認される。島谷は建大開学初年度の秋の武道週間の指導に渡満しているが、新聞名、日時に関する情報がないため着任時期は特定できなかった。

3. 剣道教育に対する学生の反応

前述したように、剣道の普通の授業の実態を解明する資料は乏しい。筆者が見ることのできた塾生日誌の記事は授業の有無を記すものが殆どで、剣道に限らず武道の授業が詳しく書かれたものは見あたらない。ところが武道週間という大学を挙げての行事の記事はよく見る

^{注543} 前掲書、道畑 (1994)大道, pp.94-95. なお、最後の引用文の(『)に対応する(』)は文中に脱落。

^{注544} 島谷の次兄花田忠之助、通称花大人（ホアターレン）は、「日露戦争に出征。総司令官大山巖大将と謀り、数千の馬賊を率いて、露軍の東背側に活動して、大軍を牽制し、奉天会戦の大勝利に貢献した」ので有名。前掲書、道畑 (1994)大道, p.25. しかし花田との関係を示す資料は見出すことができなかった。

ことができ、武道顧問の指導は学生にかなりの影響を与えたことが理解される。したがってここでは島谷の教育に対する学生の反応を塾生日誌から拾って考えてみよう。

一期生村上和夫が筆者の質問に対して寄せた随想「建国大学剣道部について」によると、島谷は、「体躯的に決して大きい方ではなく、ぶつかり稽古でも和らい感じがしたが、その剣は神がかり的な鋭さがあった。」といい、先に見た長野直臣（1979年没）の記した「神技」を裏づけている。長野塾生日誌は記す。

・（1938年11月5日・土）「本日本大学の道場開き 武道大会あり。島谷、庄司[源吉]両先生の剣道の型は実に一分の隙なく、立派なもので、こんなのは始めてだった。」

その凄さは、形（かた）の演武においても印象づけられていることがわかる。次に二期生藤森孝一塾生日誌を見てみたい。

・（1939年9月29日・金・晴）「剣道は島谷先生。腹を錬れと。それには発声を正しくする事が肝要である。之は軍訓の場合も同様である。」

・（1941年6月22日・日・快晴）「日曜ではあるが、島谷先生、植芝先生、福島先生、三顧問先生お見えになり、武道週間の第一日を始む。」「島谷先生、謙信の壁書、運は天に在り、鎧は胸にあり、手柄は足にあり、（足は肚である）」

発声や足さばきといった基本を通しての「腹を練る」指導と理解される。

・（1940年4月17日・水・晴）「剣道、島谷顧問見えられて稽古をつけて下さる。あの年齢にも拘らず極めて元気だ。俺達がポンポンと斬込んで行くときは軽く受流しておいて少し疲れて後へ下って息をついてから今度こそ飛び込んで仕止めようとする時、間髪を入れず正面に剣が飛んで来る。見て居るとまるで馬鹿のやうだ。この正面をどうすることも出来ぬ。見事に極まって了解。この呼吸であらう。ここが達人の境地か。然し余程気剣体一致ができて居らぬと間髪を入れざるあの素晴らしい技は出ない。特に俺達の足が云ふことを聞かぬ。それから呼吸の入れ方が滅茶苦茶だ。然し今日一寸気合いの力といふものが僅かではあるが分ったやうな気がした。」

・（1940年9月28日・土・秋晴・寒）「当番を仰せつかる。因縁だといふ気持、天意だといふ気持なかなか出来ぬ。/島谷先生/攻撃又攻撃、先先の先にこそ道は開かる。」

・（1940年9月29日・日・秋晴）「午前九時より剣道の査定、島谷先生より見て戴く。互いに同じやうに打ち込み、斬合ひ、斬られ、疲れる。ここをもう一步突き破って出でねばならない。修業するのは自分だ。」

・（1941年6月24日・火・快晴）「島谷先生/眼は目標を注視せよ、さうして顔はその方向に正面せよ。口を結べ、口にしまりが無いのは心の弛んでいる証拠である。/武道に防ぐとい

ふことはない。どんな小さなことでも、それを突き抜けることが出来さえすれば、道に通ずる。唯普通の人間は途中で廃してしまふのだ。武士がどんな些細の一時にも常にその背後に死といふことを考へて行ったのは実に驚くべきことだと思ふ。表現に到らぬとはそんな漠然なることではない。塾の壁を見渡しても白い壁のみ。机の上には塵まみれの本が雑然と積んである。風が吹いても硝子の戸を閉めることさへしない。之で平気でいられる我々だ。腰を落ち着ける、仮の住居さえもなおざりにしておけないのが人間の情ではないかと思ふ。」

間髪を入れぬ攻撃、呼吸、気合い、先々の先、目標の注視、武道に防御なし、等のキーワードが適格に記されていることに、島谷の教えが具体的で丁寧な説明に及ぶ特徴を持っていたことと、その教えに対する藤森の素直な受容と敬仰が窺えるだけではなく、「自分」の問題として主体的に受けとめている様子が分かる。また、先に見た島谷の至高の境地「不可勝不可敗」（勝つべからず敗るべからず）も次のように書き留められた。「島谷先生『一步を退かず一步を出でず』」（1941年6月28日・土・快晴）。

同じく二期生の藤井歆一は眼疾、神経衰弱などに悩んだ学生だが、その読書量は抜群で塾生日誌に見える教官の講義や書物などに対する批評は鋭く切れる。その藤井の武道・剣道に関する記事は少ないが、興味深い記事が三点ある。

・（1939年9月25日・月）「武道週間感想。/満目の草枯れて、ひょうひょうたる風も身にしむ昨今、二顧問を迎えて、二十五日から三十日まで一週間は武道週間と銘打たれた。

軍訓も武道の中に入ると言われるが、両顧問が来学され、特別の指導のあった剣道・柔道について感想を述べる。

待望の島谷、福島顧問の風貌に接した時から、何か異常のものを感じた。常人の為し得ざる所を成就した人には風格-精神の発現-といったものがにじんで居るのであらう。

建大の訓練の中、農訓軍訓は共にその為す所自らを修得するを第一義とする。即ち百姓、軍人になることと教へられたが、剣の道、柔の道は如何であらうか。自分は嘗て疑惑の念を抱いた。

然し、武道週間中にそれは分明となった。それを修める所以は精神の修養、特に日本精神の体得になくはならぬ。武道週間最終の日、武道大会開催の初めにあたって辻少将が「勝負に捕らはれず堂々たる態度を以て云々」と言われた言は、屢耳にする所であるが、これは如上の考へであることを示すものである。又両顧問が共に言及された、武道現在の墮落は、精神を忘れてそれを玩弄視するに到ったからとは、又それである。」

・（1940年10月21日・月）「午後訓練。剣道見学。打ち込みを相対してやらせて点を取りたり。剣道にまで点数を取る。之開学当時の点数は先生の参考のためのみ[に]て異なる所甚し。新田先生が前に言われたばかりの所、墮落なり。これにては農業も点をとるであらうと思ひしに、藤田先生の所へも点を取るからつけてくれって行って云ったさうな。」

・（1943年9月7日・火）「武道週間終了。武道大会。武道により外敵に対する烈々たる意気

を養わねばならぬ。」

点を取らせる剣道の授業を誰がどのような意図で行ったかはわからないが、藤井の批判の視点に、農訓や武訓といった「行」の教育の意義は為すこと自体にある、という各指導者から学んだ理解があったことは間違いない。教員の側から見れば、好い加減な指導者は、学生から鋭い批判の眼差しに曝されたことが理解される。

藤井の豊かな洞察力を示すのは、武道に対する第一義即ち本質的で最上の勝ちは何かと疑念を立てていたことにある。農訓や軍訓ではその訓練を通して立派な農民或いは軍人になること自体に、満洲国を支える指導者の持つべき資質としての価値が認められていた。しかし武道の稽古あるいは試合自体に何の意味があるのか。藤井はそれを日本精神の体得と得心したのである。武道の意義は稽古や試合それ自体にはなく、そこから離れて存在するその精神の体得を目指すという修業態度を重要視したと理解されよう。剣道や柔道は平素一対一で行われるその格闘形態からして技を競うという意味の競技である。打たれないで打つ、投げられないで投げることを競うものなのである。そのような本質的とも言える性格があるにもかかわらず、「勝負に捕らわれない堂々たる」態度を求められるのは矛盾であろう。そんな曖昧な態度では容易に勝てないからである。しかし日本精神を体得した日本人を目指すのであれば矛盾は解消し、剣道は理論的には重要な存在意義が与えられることになるのである。藤井の得心の根拠だったと思われる。

以上、島谷を中心に建大の剣道を見てきた。しかし、島谷が実際に指導を行ったのは年に多くて2回、武道週間の指導のために来学した際のみであり、平素は他の教員によって訓練が行われた。そこで以下では彼らとその教育について見ることにする。

4．多様な剣道指導者^{注545}

一期生村上和夫によると、開学当初は剣道担当の指導者は塾頭を務めた石中廣次であった。^{注546} 授業には、剣道好きの教官・事務官等が随時参加し、部活動も同様であったという。また、一期生深尾芳秀の戦後の随想「建大での剣道を偲ぶ」によると、仮道場時代(1941.6以前)に稽古に参加した人として、石中、「岩井隆三郎事務官(後の剣道助教)」の外、「後に田川[博明]先生や吉川武徳、小野壽人両塾頭等、当時の日本学生剣道界に名声を残した方々も参加」^{注547} したという。ここでは上に見た島谷を除く彼ら指導者のプロフィールを見て置きたい。

・石中廣次

ここでは資料によって表3-2を補筆して記す。1902年7月熊本県牛深市二浦町に石中福太郎

^{注545} 本項以下の建国大学剣道に関する記述は以下を中心に補足しながら行った。志々田文明(1992)建国大学における武道・課外活動 - 「満洲国」建国大学における武道教育, 早稲田大学人間科学研究 5(1): 105-121.

^{注546} このことは筆者にとって従来曖昧な理解であった。石中は1・4塾の塾頭であり、一期生の多くの方々もそういう認識で捉えておられ、武訓担当教官と認識していなかったことにあると思われる。そこでこのことを村上和夫氏に確認(2003年2月17日)した。

^{注547} 前掲書, 歡喜嶺 遙か(上巻), p.390.

三男として誕生した。県立天草中学校を経て、1924年第五高等学校理科甲類（数学専攻）卒業。この時剣道部の中堅として活躍し、1926年には京都の全国大会での優勝に尽力した。また他方で禅僧沢木興道に師事した。同年東京帝大工学部船舶工学科に入学、剣道部在籍、1928年に卒業した。1929年4月に水戸高校図学講師となり、10月より1937年10月まで水戸高校教授を務め、乞われて剣道部長として指導に当たった。また自宅の一部を禅堂に改築し学生の指導に当たった。建国大学開学前は東京創立事務所長として活躍し、1937年11月1日の段階で建大助教授を拝命した。^{注548} 開学の1938年3月に建大副指導(1・4塾)塾頭及び数学担当者となった。1939年の塾頭騒動後の秋、塾頭を富木謙治と交代した。1940年7月12日任建大教授。1940年7月24日辞官照准[依願免官]。^{注549} しかしその翌年(1941)年2月25日、建大教授に復職している。^{注550} 1944年10月に協和会中央本部審査役並びに中央錬成所長として転任し敗戦を迎えた。^{注551}

村上和夫によると建大当時石中は剣道教士^{注552}であったという。

石中の人柄については、茨城大学の同僚真野克巳の弔辞にある「無欲天衣無縫の人」が相応しいであろう。^{注553} また、水戸高校剣道部の同僚本間七郎は、風貌に接すると恐ろしい非凡なものを感じるがといった後に、「厳肅なるべき時は断じて厳肅に、和かな雰囲気を要する場合は打って変わって和かに、剣で言えば臨機応変、活殺自在という所」と評している。^{注554} その率直さ・謙虚さについては石中の塾頭としての自己紹介を記した一期生李水清の文章に詳しい。^{注555} 剣道指導の厳しさの一面を二期生西村十郎は、「午後の武道は剣道の初歩を習い、終了後も五～六名が残って稽古を受けたが、私は石中先生の直接指導を受け、そのきびしさに、へとへとになって帰塾する。」(1939年4月18日・晴)と伝えている。^{注556}

・辻権作

1931年8月1日、徳島にて歩兵第43連隊長。^{注557} 1933年陸軍少将に昇進し予備役に編入。建大創設の際に新京事務所の責任者として「満洲帝国指導者養成方策要綱案」の策定・起案、建大創設にかかわった。教授への任命は1937年10月5日で建大教官の中では最も早かった。前述のように武道顧問島谷八十八の招聘に尽力している。

剣道については近藤多一郎が次の評を寄せている。

「実力の程は知りませんが、学生には飛び込み面許りを奨励され、その他の技は“無くも

^{注548} 満洲国政府公報 (No.1083), 1937.11.9.

^{注549} 研究院月報 (No.2), 1940.9.25. しかし一期生李水清書簡(1990年5月11日)によると、石中は「昭和14年の春か初夏頃に一度東京に帰られたが後、昭和14年秋にまた建大に戻られた」とある。

^{注550} 前掲書, 建国大学年表, p.284.

^{注551} 石中広次先生略譜, 前掲書, 石中廣次先生追悼文並遺文集・貴方こそ天性の教育者.

^{注552} 1934年の武道家表彰例により現在に続く範士、教士、錬士の三段階制が確立した。教士は錬士の称号を有し、「五段以上たる事」とされた。石中の教士はそれに基づくものと推察される。前掲書, 中村民雄(1994)剣道事典-技術と文化の歴史, p.131.

^{注553} 同上, p.4.

^{注554} 同上, pp.17-18.

^{注555} 李水清, 良師、益友を憶う, 前掲書, 歡喜嶺 遙か(下巻), p.207.

^{注556} この内容からも、石中が剣道の授業と共に部活動の指導者であったことが確認される。前掲書, 西村十郎(1991)楽久我記, p.39.

^{注557} 福川秀樹編, 日本陸海軍人名辞典, 芙蓉書房出版, p.314, 1999.

がな”でした。引揚げをしたり、引揚げ小手中でも打とうものなら『建大生のすることではない』と大きな雷が落ちました。」^{注558}

島谷と一致する剣道観をもって指導していたことが理解されよう。

なお、回顧随想を執筆した二期生山川育英は、「弁ずれば滔々聴衆を魅了する雄弁家、斗酒なを辞さぬ酒豪のヒゲ將軍、五段教士の剣の達人、ユーモラスで時には稚氣汪溢、数多く逸話をもつ」「人気者」^{注559}、また「短軀ながら二十四貫の巨軀」^{注560}と評している。

・岩井隆三郎

仙台出身。1937年3月から建大の新京創立事務所に勤務した。^{注561} 満洲国政府公報によると1939年6月1日建大助手就任。^{注562} 1941年7月までに建大助教となる。^{注563} なお、上述の深尾の文章には事務官から剣道助教になった記述があったが、満洲国政府公報を見る限り、建大助手就任時に記される前職の表示がないことから事務官であったかどうかは不明である。あるいは助手から剣道助教になったことも考えられる。戦後に仙台地裁勤務。村上和夫によると当時は剣道錬士か。

・田川博明

熊本県の「五校時代に剣道高専大会の優勝旗を武夫原にもたらした有名な剣士」で、田川を錬成したのが先輩の石中廣次であった^{注564} という。京都帝大卒。熱河省民政庁属官。関東軍嘱託。創立時に活躍した筒井清彦らに呼ばれ、根本龍太郎とともに、「建大創立の機関部を構成した」。^{注565} 建大事務官への薦任は1937年10月2日。^{注566} 同年11月29日付けで助教授兼事務官となった。^{注567} 村上和夫によると熊本の五高卒で剣道部で鳴らし、建大当時は剣道錬士であったという。1939年協和会中央本部企画局主任。戦後は田川電気研究所。^{注568} 父は田川精三郎（元軍医少将、医学博士）。^{注569}

・小野壽人

東京帝大卒。文学士。日本史。平泉澄の門下生。神宮皇学館大学に転任し、応召されスマトラで戦死。^{注570} 村上によると小野は長身で、綺麗な剣道をしたという。

授業あるいは部活動に参加した剣道家は外にもいた。一期生深尾芳秀は記す。

「前述の学生剣道界出身の名剣士の他に、陸軍戸山学校出身の山口大尉、後藤周助先生の『軍刀術』、また熊本出身の浅子師範等、『建大』なるが故に、内地の大学高専の剣道部では経験できない多様な剣道を学んでいる。特に、現在の年齢に達して当時を偲ぶ時、奈良の

^{注558} 近藤多一郎書簡（1991年1月24日）

^{注559} 山川育英，人を愛し酒を愛づ-葉隠武士の辻権作先生，前掲書，歡喜嶺 遙か(下巻)，p.185.

^{注560} 同上，p.186.

^{注561} 前掲，建大史資料(2)：8.

^{注562} 満洲国政府公報 (No.1449)，1939.2.8.

^{注563} 前掲，建国大学要覧(康徳8年度版，1941.7.25)，pp.53-54の助教のリストにはその名前が見える。

^{注564} 筒井清彦，草創のころ，前掲書，建大史資料，第2号，p.18.

^{注565} 同上.

^{注566} 満洲国政府公報 (No.1056)，1938.10.7.

^{注567} 満洲国政府公報 (No.1396)，1938.12.1.

^{注568} 前掲書，宮沢恵理子，建国大学と民族協和，p.304.

^{注569} 佐藤辰雄，一職員の遺したい言葉，前掲書，歡喜嶺 遙か(下巻)，p.110.

^{注570} 前掲書，宮沢恵理子，建国大学と民族協和，p.297.

島谷八十八先生や辻権作閣下に、直接道場で、その警咳に接したことは、作田副総長の教えと共に、一期生の剣道部員の誇りと思っている。」^{注571}

・山口大尉

北直幸によれば^{注572} 山口は軍事訓練も指導した。彼について、村上和夫は、「この方の軍刀術は大したものであった。真剣でスパッと斬った。正式な教官ではなかったと思うが、山口を慕って学んだ学生がいた。」という。資料もなく履歴は不明である。なお、後藤周助については、正式な剣道助教（後に助教授）であったことから、浅子の後に記すことにする。

さて、このような側面を、柔道部の学生であった二期生近藤多一郎は、筆者への書簡で、「柔道が武専出身の先生方で固まっていたのと対照に、剣道の先生方は色とりどりの出身で、教務の合間に、道場で剣をとられる先生方も相当数」^{注573} あったとして、見事に裏づけている。なお、近藤書簡には、氏名をあげて寸評を加えているほか、既出の稽古者の外に、軍事教官の松平紹光大尉、寺田剛（教官）の名をあげている。

・松平紹光大尉（1939年に少佐）

陸軍士官学校卒。開学前の1937年11月1日に建大助教授。^{注574} 創立東京事務所の所長^{注575} として開学に尽力した。建国大学要覧によると、^{注576} 1939年6月15日現在、助教授、軍事訓練担当、陸軍歩兵大尉（応召中・休職）とある。教授任命は1940年7月12日^{注577} である。二期生湯治万蔵によると、^{注578} 「辻権作少将の下に配属将校がいた。松平紹光大尉は2.26事件で軽い処罰を受けた。建大に来てノモンハン内乱（藤田塾頭と松平大尉が中心になった）の作田副総長追放運動の渦中に入って退官した。松平は退役軍人ではなかったと思う。昭和14年7月に少佐に進級したからだ。建大の正課に合気武道が入ったのは松平の力ではないか。これは破格のことだ」と語っている。

建大では軍事訓練を担当。その指導ぶりは副総長作田の高い評価を得たのみならず学生から尊敬を受けた。

藤森孝一塾生日誌に、

・（1939年8月11日・金・晴）「剣道は松平教官が指導された。石中先生と又異なった所がある。成程軍人の武道といふものは徹底的だ。之が軍人の軍人たる所以である。生半可の事をしない。」とある。

・（1940年7月16日・日・晴）「新道路と旧道路との接続を完成す。・・・松平隊長が朝帰られる。」

・（1940年7月21日・金・晴）「四時起床。丘の上に登り、黒河にて最後の皇居遥拝及宮廷遥拝を慎んで行ふ。・・・ソ連領のシベリヤも澄んで気持ちのよい眺めだ。・・・丘を下

^{注571} 深尾芳秀、建大での剣道を偲ぶ、前掲書、歡喜嶺遙か(上巻), p.391.

^{注572} 北直幸聞き取り調査（2003.3.11.電話）

^{注573} 近藤多一郎書簡（1991年1月28日付）

^{注574} 満洲国政府公報 (No.1088), 1937.11.15

^{注575} 前掲、筒井清彦、草創のころ、前掲書、建大史資料、第2号, p.17.

^{注576} 建国大学要覧(康德六年度版, 1939.//)

^{注577} 建国大学研究院月報 (No.2), p.5.

^{注578} 湯治万蔵聞き取り調査（1997年8月9日,於熊本）

りると松平隊長が居られる。聞けばわざわざ遠路を我々を引率する為に帰って来られたのださうだ。この責任感だ。軍人の偉大なのはこの任務に対する責任感だ。」

また、二期生藤井歓一の塾生日誌には松平の教育愛ある適切な指導ぶりが窺える。^{注579}

・（1939年4月21日・金）「教練の時先づさつさつと体を打って来た雨は雷鳴一度発するや沛然たる驟雨となった。しかし教練は依然雨中に続行される。眼鏡に打ち来たって曇り、顔を流れ襟首を伝って背中に流れ込み前列の服を見て全くびしゃ(マ)濡れになった頃、松平少佐は『教練止め、第一校舎に入れ』と命ぜられた。（中略）此处に建大らしさがあると思った。」

満洲国政府公報に松平が1939年年4月1日休職とある。^{注580} また建国大学要覧（康德6年度版,1939.6.15発行）^{注581}には助教授、軍事訓練担当、陸軍歩兵大尉（応召中）（休職）とある。1940年7月12日建大教授。^{注582} この月に陸軍少佐に昇進か。^{注583} 1940年9月15日発行の「建国大学研究院月報」第1号に、^{注584} 武教班班員は「班長富木謙治, 班員, 松平紹光, 富木謙治, 万田勝, 原浄一, 長坂炳範, 尾本研二, 吉川武徳」、第2号に、^{注585} 後期授業研究班は、基礎, 政治, 経済, 文教, 訓練。訓練班員は「辻、吉原、角田、原、富木、藤田、松平」とある。同年9月中旬に建大辞任。^{注586} 藤森孝一塾生日誌に、（9月24日・火・晴）「松平先生学校を去り、新京を立たる」。戦後に農園経営か。^{注587}

・寺田剛

東京帝大卒、文学士、東洋史。平泉澄の「朱光会」所属。東京帝大文学部神道学副手。平泉の推薦で建大に赴任。森克己の知己。1938年建大嘱託、翌年助教授、二期生の塾頭。寺田は学生に対して自らの信じる以外の思想に寛大でなく、プロレタリア文学作品をそれとは知らずに読んでいた塾生に「こういう本を読んではいけない」と叱ったという。^{注588} 戦後、ソ連軍捕虜となりシベリア抑留を経験、1956年帰国。アジア大学教授。^{注589} 村上は寺田を、剣道は上手でなかった、学生が風邪をひくと喉にヨードチンキを塗ってくださり学生は世話になった。溶け込もうと努力されていたのかも知れない、と評している。

藤井歓一塾生日誌（1940年5月14日・火）には、寺田の思想性を次のように記している。「今日、寺田塾頭の所へ行って、天皇の御本質といふ如きものを聞いた。そして驚いたことに先生は、それは宇宙一切の根元であり、真理であり、一切の科学はそれに帰せねばならないといふ事を信仰（そふ言はれた。）して居られるのだ。/平泉一派は日本人としてののみ
^{注579} その他、「陸軍戸山学校の豪剣でした。下士官が4、5人ビール瓶を片手に襲撃したところ、枕を並べて部屋の中に延びていたという伝説」も伝えられている。近藤多一郎書簡（1991年1月24日）

^{注580} 満洲国政府公報 (No.1493), 1939.4.8.

^{注581} この版について筆者は未見。鈴木昭治郎氏の教示によった。

^{注582} 前掲書, 建国大学年表, p.247.

^{注583} 藤森孝一塾生日誌(1939年7月10日)に「松平教官殿が今度大命により少佐に任命されし由発表せらる。一同大いに喜ぶ」とある。

^{注584} 建国大学研究院月報 (No.1), 1940.9.15., p.10.

^{注585} 建国大学研究院月報 (No.2), 1940.9.25., p.4.

^{注586} 前掲書, 建国大学年表, p.259.

^{注587} 前掲書, 宮沢恵理子, 建国大学と民族協和, p.303.を補筆した。

^{注588} 師震富, 断想, 前掲書, 歡喜嶺 遙か(下巻), p.116.

^{注589} 前掲書, 宮沢恵理子, 建国大学と民族協和, p.297.

天皇を皇祖として仰ぎ得るといふのであらうと思っていたのであるが、それは満洲人初め凡ゆるものに合しえるのだ。」

建大初期の剣道は、こうした多様な指導者が入れ替わり立ち替わり集まったことによって、他の大学では体験できない多様なものを学習することができたのである。さらに加えて、開学数年後に着任する3名の指導者を見ておきたい。

・浅子治郎

熊本県出身。1941年3月まで熊本中学教員、同武術部副部長。^{注590} 1941年3月6日建大囑託。^{注591} 同年3月20日建大に赴任した。このことを伝えた研究院月報には、「浅子範士就任尚当日剣道範士浅子治郎氏は本学剣道育成の熱意に燃え着京、直ちに開催中の納会に臨まれた」^{注592} とあるが、これは教士の誤りであろう。村上随想によれば、浅子が着任すると、石中塾頭と共に稽古をつけたという。建大では後に専任講師となった。戦後に、「奈良市警察署剣道教師」であったといわれる。^{注593}

浅子の武歴には華麗な一つの履歴がある。1940年4月7日に皇紀2600年を記念して行われた「檀原神宮奉納試合」^{注594}（全国大会）において、専門の部で個人優勝したことである。庄子宗光によると、^{注595} 正式な大会名は檀原神宮奉納全国剣道大会で、皇紀二千六百年を寿ぐためこの年4月6日から8日までの三日間開催された。全国の剣道教士中の俊英32名を選抜して行ったもので、規模の全国的な点、「参加選手が当代一流の剣豪を網羅した点」において「剣道史上見逃すことの出来ない立派な内容」をもったという。試合方法は32名を4名宛て8組みに分け総当たり試合し、勝者8名をさらに二組に分けて総当たり試合させ、二組の勝者が決勝戦を行うという念の入ったもので、「真に技もあり、気力もあり、体力もあるという、総合的に実力のある剣士でなければ優勝することが難しい試合の仕組み」であったという。決勝戦は越川秀之介（大阪）対浅子（熊本）となった。試合評から簡単に浅子の剣風を見ておこう。

「前者[浅子]は五尺七寸豊かな偉丈な体躯をもって強引に戦う強豪であり、後者は五尺二寸の短躯を縦横に駆使して、俊敏そのもののような試合巧者として定評があり、その対照はすこぶる興味深いものがあつた。立ち上がるや越川教士左上段にとって攻勢に進むを、浅子教士はじっと構えて出鼻を狙い、越川が打ちださんとする瞬間、大きく面を打ってまず一本。ついで越川少々焦り気味となって出るところを、浅子は強引に胴を打って勝つた。」^{注596}

熊本中学教員時代の浅子について、戦後のOB 会誌はわずかに、「浅子治郎（大正3年-昭和

^{注590} 武術部とは剣道科、柔道科、遊泳科。関連の熊本における浅子についての記述は、熊本中学の後身である熊本高等学校に調査に伺った際に実見した著書のコピーによるが、出典の部分を紛失したため書名は不明。

^{注591} 建国大学研究院月報 (No.8), 1941.4.25., p.8.

^{注592} 同上, p.5.

^{注593} この記事は、宮沢恵理子, 建国大学と民族協和, p.298.

^{注594} 八十年史編纂委員会(1986)熊中熊高八十年史, 熊本県立熊本高等学校, p.1178.

^{注595} 庄子宗光(1976)改訂新版剣道百年, pp.179-185.

^{注596} 同上, pp.184-185.

18年、剣道)は剣道の虫。(中略)朝早く出勤して、道場で毎日素振りをしていた姿が教え子たちの印象に残る」と記しているが、^{注597} こうした精進の賜の優勝であったと思われる。この姿勢は建大に赴任しても変わらない。主な回顧談を挙げておこう。

・二期生岩井利夫：「浅子先生は朝早くから、何というのか丸太に柄のついてような稽古用の木刀を蹲踞の姿勢のままで、道場の中を飛回っておられた」^{注598}

・剣道部四期生江口宏：「先生の精進の姿勢は私の人生の一つの拠り所ともなっている。先生に稽古をつけていただいた日々を時々思い出しているが、私のような未熟なものとの稽古でも、常に自らの工夫、自らの稽古を怠られない方であった」^{注599}

・剣道部松村正一：「私は少年時代からの馴染みもあって、武道は迷わずに剣道を選んだ。かつて檀原神宮の大会で優勝されたとき浅子先生の真摯な姿勢と、『身を捨ててこそ浮かぶ瀬もあれ』と説く剣道の極意についてのお言葉は、今も忘れない。」^{注600}

と、戦後に評している。

浅子の剣風について、村上随想は、「先生の剣道は豪放そのもので、こせこせした試合剣道を問題にせられなかった。[浅子の着任によって]学生も豪快な剣を身につけはじめた」というが、その求道の姿勢は学生を感化した。^{注601}

また、深尾は「練武」する姿を記している。

「浅子先生がああの年齢で、あの実力をお持ちの上に毎年の京都での大会に備えて『極め技』をしぼって、学生との稽古の時も、また独りでの『練武』の時も繰り返し練習をされていたが、勝負に臨む平素の努力を身をもって教えられたものと思っている。」^{注602}

・吉川武徳

佐賀県唐津中から國土館専門学校卒、大同学院卒。熱河省長官房事務官、大同学院教官を経て1940年に着任。塾頭と武道訓練担当。1942年10月23日(金)に送別塾委員及剣道部の会。^{注603} この年終わりに熱河省承德県に副県長で転出したが1944年には戻る。二期生岩井利夫は「吉川先生は剣道も強かったが温厚な感じ」^{注604} と、また、松本博一は「吉川先生はまことにさわやかなお人柄で、民族の別なくみんなから慕われていたように思う」^{注605} と寸評してい

^{注597} 江原人脈、西日本新聞社開発局出版部、1972、pp.288-289。なお昭和18年は16年の誤り。進学校である熊中での剣道は、浅子ら「武人」が存分に天分を生かす場所は熊中にはなかった、といえるだろう。その意味では文武は熊中では両立しなかった」という。

^{注598} 岩井利夫、某年某月某日<歡喜嶺レクイエム>、歡喜嶺 遙か(下巻)、p.25.

^{注599} 江口宏、剣道に熱中したが、前掲書、歡喜嶺 遙か(下巻)、p.40.

^{注600} 松村正一、自己形成のデッサン、前掲書、歡喜嶺 遙か(上巻)、p.194.

^{注601} なお浅子の実際の指導内容を伝えるものとして、藤森孝一日誌(1941年10月28日・火・晴)に次の記事がある。「浅子先生がこの前[10月25日]の武道大会に会長より気迫がたらぬとの批評を次の如く解明された。即ち之は技がある程度進み唯無茶苦茶の血気の勇より、いろいろ考えつつやうになつたため、発声の方が稍十分でなかつた為であらう。将来は更に之を越えて次の真の無我の境まで進みたい。武道修業に於てはこの四病は誰も通るべき所である。更に之を克服して進みたい。と云はれた。」

^{注602} 深尾芳秀、建大での剣道を偲ぶ、前掲書、歡喜嶺 遙か(上巻)、p.391.

^{注603} 藤井一塾生日誌(1942年10月23日)

^{注604} 前掲書、歡喜嶺 遙か(下巻)、p.26.

^{注605} 前掲書、歡喜嶺 遙か(下巻)、p.176.

る。

なお、浅子の奈良市警察署剣道教師が事実とすると、明らかに島谷の推薦であったと推定されるが、吉川はその経歴からすると剣道もできる塾頭に相応しい人物として他者が推薦したのであろう。

・後藤周助

陸軍戸山学校出身。1939年9月頃着任。剣道錬士。剣道助教。1943年段階で助教授に昇格した。^{注606} 長野直臣塾生日誌（1939年9月9日）に「剣道に後藤助手を迎へ、之又久しぶり自分からぶつ行って行く。真の地稽古が出来た。中々几帳面にやる人らしい。すべて陸士みたいにきちきちやれば出来る事と思ふ。規律は日本人には適したものだ」とある。一方、村上和夫によると、西山文二郎が打ち込んでいった際、「突き」によってもんどり打って倒されていた。突きを常用された、という。

5．剣道部

村上和夫によると、一期生の主将格は深尾芳秀であった。次いで長野直臣、米田正敏、松崎（現村上）和夫がいたが、二期生の俊英が入ると自分にはじめにはじき出されたと謙遜している。ここでは深尾芳秀の既出の随想「建大での剣道を偲ぶ」及び筆者宛の書簡、^{注607} また、同じく一期の村上（旧姓松崎）和夫より頂いた随想「建国大学剣道部について」^{注608} と聞き取り調査などを参考に剣道部の概要をまとめてみたい。

(1) 部のはじまり

深尾は上記の随想の第一節を「建大の剣道はまず石中先生を中心にはじまっている」と題し、「石中塾頭を中心とした前期の仮道場での稽古は、内地での部活動の延長のような、楽しい時間帯であった」と記している。このことは村上随想によっても確認され、「剣道部が早くから練習を始めたのは、なんとといっても石中廣次塾頭がおられたから」と記している。もう一人の功労者が「事務官」岩井隆三郎^{注609}であった。深尾は、「大学創立早々の時期に学生の防具を十分調べ、また自らも勤務時間外、場合には夜間道場で電灯をつけて、学生と共に稽古をされた当時の岩井事務官（後の剣道助教）のお世話に感謝しなければならない」とその功労を称えている。村上は、岩井の存在、日系学生に剣道の有段者が十余名もいたこと、道場があり、防具が全て大学で用意されていたなど、全ての条件が整っていたため忽ち正課後に剣道を行うことになり、「やっている中に数名の者が剣道部を形成した」と記す。

^{注606} 鈴木昭治郎氏によると、建国大学要覧（1943年度版）には、「錬士、助教授（武道訓練担当）」となっているという。

^{注607} 深尾芳秀書簡（1990年12月9日付）。建大の武道教育全般について記された。

^{注608} 前掲、村上和夫随想「建国大学剣道部について」（1991年3月25日）

^{注609} 建国大学要覧（康徳8年度版、1941.7.25）の職員リスト（p.54）では事務官田中泰広のみで岩井隆三郎は助教の職位にある。大別すれば事務職の一部と思われる理事官から教職に移動する場合は助教授以上に任命されており、事務官が助教になることはないのではないか。岩井は建大の開設当初創設事務員として作業に関わり、当初より学生に接していたため、初期の学生は事務官と認識したと思われる。右の随想は岩井の教育者としての人柄をわずかに彷彿とさせる。岩崎博（1994）岩井隆三郎先生と六枚の写真、四期生会誌・楊柳 26：23-25。

また、だからといって創部の儀式めいたものはなかったという。なお、稽古時間帯についての筆者の補足取材に対して村上は、初めは授業後であったが、農訓が遅くまで実施されることが多く、次第に（前期3年頃には）朝に行われるようになったという。^{注610}

(2) 建大剣道の特性

見てきたように、剣道の授業の内容に関わる感想が書かれたものは、学生の日誌を見ても、武道週間における島谷に対する感想が全てであり、平素の授業が記されることはなかった。そこでここでは主に剣道部の剣道の特性をいくつかの要素を挙げることから総括しておきたい。

1) 実戦性

1941年6月28日、武道週間最後の日に武道場・養正堂が開場した。卒業式などの全学行事にも使用された建大で最も立派な大道場であった。ということは、これまでの3年間は武道の専用道場はなく、稽古は、柔道部ほか各武道部と同様、教室を一時流用した仮道場で行われた。当然に道場は狭く、このことは学生の剣道に影響を与えた。深尾は一期生の剣道全体に与えた影響として次のように記している。

「我々は教室を一時流用した仮道場の時代が長い。内地での稽古と異なり、十分『間合い』をとって跳躍力を養うには、道場が狭かった。自然と『気合』と『力』に重点が移ったものである。休暇に内地に帰り、母校での稽古でも『剣が変わった』と批判されたが、当時はかえって、これに慢心していたきらいがある。『養正堂』が出来て、浅子先生の指導を受けようになっても、なかなか抜け切れず、先生との稽古でも、たまに『一本』がとれた時も道場の隅で、間合いがつかまってから勝機を得た記憶がある。かつての得意技がなかなか試合では出ない間に建大を離れた気がしている。」^{注611}

加えて、建大で学生は、竹刀打ち込み稽古による剣道以外の剣道を学ぶことができた。深尾は説明する。

「当時の学生剣道は、『京都武専』や『東京高師』出身の先生方から学んだ武徳会の正統派剣道が主流であった。建大剣道も稽古で勝負を競うものであるが、一方、勝負のみを目指す『学生剣道』に飽き足らない気風もあった。その中で山口大尉や後藤教官との稽古が学生に与えた影響は大きい。特に山口教官の『試し切り』には、深い感銘を受けた。」^{注612}

この山口の経歴は全く明かではないので、その教えの背景にあるものはわからない。ただ、山口の影響の大きさを示す表現として、剣道部の一期生長野直臣は、二年生の時の塾生日誌に次のように記している。

・（1938年5月6日・金・晴）「武道の時間に実施された軍刀竹刀の持ち方及実演を見て、したくてたまらなかった。道場はあれではせま過ぎる。もっと広大なものがほしい。」

・（1938年8月5日・金・晴後曇）「今日は建国大学開学一周年記念式を挙行了した。式後、

^{注610} 村上和夫氏補充取材（2003.2.17）。

^{注611} 前掲書，歡喜嶺遙か(上巻)，p.391。

^{注612} 同上。

武道相撲大会を開いたが来賓の少ないのは、いささか興味を減じた様だった。山口先生のためし斬りにはびっくりした。あの藁を切るといふ所に、剣道の『真にせまった気掛』が表れるのであって、とても我々にはあの境地は分からない。試練の賜だと思ふ。山口先生は普段は笑ってばかりいて、少しも力が入らない様であるが、一度刀を持って構えた目には、人を斬るといふ物凄い行相(マ)が浮かび出ていて一分の隙もない所か、こちらでおじてしまふ。之が即ち心眼となったのであって、後の物でも横でも何処でも見えるのである。そして危機を突破して始めて浮かぶ瀬もあれで我に有利に展開して来る。剣道ばかりでなく之があらゆる方面に利用する所に、剣道を学ぶ目的があるのではないか。」

その山口は二年目の秋には姿を見せなくなった。長野は記す。

・(1939年10月28日土・晴)「午後の剣道の指導自習^{注613}があったが、両教官の剣道を見て、単に殴り合ひに過ぎず、とても見ていられなかった。建大が始まった時、山口教官が居られた頃は、もっと実践的な建大型とも云えるものであったのだ。自分は今までそれを目標にやって来たが、今日の教官の動作を見て、一抹の不安、寂寞が起こらざるを得なかった。一そ(マ)の事やめてしまおうかとも考えた。二年には山口先生のあの姿が影じていても、一年には分からない。しかして教官があんなじゃ益々前途が暗い気がする。部を構成するにも何だか気力を失った様だ。石中先生また去れり。^{注614}しかし此処所に立ち上がるも我々の務であるとも考えた。が、何が何だか分からない。今までののは一時の光明だった様な気持だ。」

深尾は、建大のこのような剣道を「実戦的剣道」と形容して、次のように記している。

「大学卒業後、お互いに軍務に就き各地で建大の「有段者」は、その部隊で剣道を教え、また営内試合で名声を得、厳しい兵役の中でも余裕をもって、軍務に耐えた者が多い。建大時代の剣道修練の賜ものであり、特に『実戦的剣道』が自ら身に着いたのも、建国大学の環境が、それを養ったものと思っている。」^{注615}

ところで村上随想によると、「これは部活動としてではなかったが宮様やその他の見学者があると藁人形を造り真刀で試し切りを行った。日本人だけが行なうのではなく、白系露人のセヴェリエーコフ等もやったと思う。」^{注616}と記す。建大の幹部教員らは、このような実戦性を外部の賓客に対する売りとして意識していたと思われる。

2) 練武性

さて、真剣で行なう実戦では刀を「引き切る」操作が基本になるのに対して、竹刀で行な

^{注613} 学科や訓練科目について教官や先輩の指導を自主的に受けることを指導自習といった。これを熱心に継続する者が同好会、部、班などの意識と自覚を形成していったと思われる。詳細は合気武道の章を参照。

^{注614} 1939年夏以降の塾頭騒動以降、石中、山口ら指導者が現れなくなり、学生の動揺があったことがわかる。石中は塾頭騒動後一期生の塾頭を止めるが建大を去った形跡はないが、道場を遠のいたとすればこの時期謹慎していたと想像される。

^{注615} 前掲書、歓喜嶺遙か(上巻), p.391.

^{注616} 前掲、村上和夫随想「建国大学剣道部について」(1991年3月25日)

う剣道では「打つ、当てる」操作が基本となり、両者の戦い方はかなり趣を異にする。建大時代の深尾は、自ら「慢心」と評価したようにこのような剣道を支持していた。それはスポーツ的な勝ち負けに拘る剣道への疑念であり、批判であった。建大の剣道は、そのような剣道に対して、「練武」そのものであったと、深尾は記す。

「島谷先生は示現流の達人で後新陰流の正統を歩まれた方であり、辻少将もまた剣道を実に楽しまれた方である。共に老齢にも拘わらず若人特に異民族の学生に正しい剣道を手ほどきしながら、道場に立っておられた温容が目につかんでくる。日々の稽古、『練武』そのものが、剣道による建大の訓育の目的であったのではないか。」^{注617}

こうした精神をしっかりと体得していたのが四期主将といえる江口弘であった。同期遠藤丈夫によれば、^{注618}「稽古のときに体当たりをしたら、足払いで跳ね飛ばされ」、「浅子先生に可愛がられ、その強烈な馬力で浅子先生と稽古をして」いた猛者であった。岩崎宏は、^{注619}「江口君の剣は、勝敗を超越した悟りの剣だったように思う。彼にとって、剣道は勝敗をきめる技ではなく、人間修業のための、文字どおり「道」であった。彼は中学時代の勝ち負けの話はしなかったが、稽古の話はよくした。/『激しい稽古をしたら血の小便が出るんだよ。僕は何べんも赤い小便を出したなあ』/そう語る江口君の顔を見つめて、なまけ者の私は、すっかり尊敬してしまった。」と江口を評している。

3) 「自主性」許容の剣道

知性の高い建大の学生には、学問と訓練そして民族協和という日常的課題があり、学生たちには多くのやるべき事があった。二つの証言^{注620}を見てみよう。

・「剣道部活動は全く自発性に基づいており、自らの選択において、やりたい者が進んでやるのであり、サボったとしても、先輩からどうこうされるものではなかったし、勿論、出席簿などはなかった」（五期生小野田宗之）

・「学内の行事が多く、皆が一緒にやることは難しかった。皆が自発的にやらないと活動にならなかった。今の部活よりは、自主性を重んじられたが、部としてのまとまりはよい方ではなかった」（四期生江口弘）

何事もその事柄に投下する時間が少ない者が、多く投下した者に敗れるのは自然であり仕方ないところであろう。チームの団結と個人の自主性の名における個々人の稽古不足の許容は、チームの勝利を目指す上では成り立たないことであった。勝負に頓着しない、それが建大の剣道であった。

最後に、剣道愛好学生を支えた指導者について触れておきたい。深尾は記す。

「歡喜嶺での冬は、積雪は少ないが大地は凍りついている。養正堂は広大な道場に立てられただけに、暖房の効果は、極めて悪かった。道場の床板が凍っていたこともある。浅子先

^{注617} 前掲書、歡喜嶺遙か(上巻), p.391.

^{注618} 遠藤丈夫、江口弘君との思い出、四期生会誌・楊柳34:36, 2002.

^{注619} 岩崎宏、正に「道」の人、四期生会誌・楊柳34:36, 2002.

^{注620} 以下の小野田、江口証言については日時等のメモを残さなかった。右の論文執筆段階で確認しそのまま使用している。前掲、志々田文明(1992) 建国大学における武道・課外活動、人間科学研究5(1)

生や[柔道の]万田先生が、広い道場の師範室で炭火で暖を採りながら、学生の来場を待っておられた姿が目につく。学生もその姿に道場に参集せざるを得なかったものである」^{注621}

こうした体験は深尾だけではない。四期主将格の江口弘（1942年入学、1943年12月1日学徒動員で入営）もまた、

「忘れられない思い出として、何かの都合で稽古の時間に遅れて道場へ行っても必ず先生一人で防具をつけて待っていて下さり、私は休むことができなくなった」^{注622}

と記している。一般に、クラブ活動は熱心な指導者と複数の意識の高い参加者によってのみ存在が維持され、発展する。すでに浅子以外の存在を見てきたように、部の活動は愛情ある熱心で個性的な指導者によって活動が支えられていたといえる。

(3) 対外試合

剣道部の対外試合における優勝の記録に接することは史資料を見る限り珍しいがいくつかの事例を見出すことができる。

建国大学研究院月報(No.30)^{注623}に、「[1943年]5月30日忠霊塔春季大祭奉納武道大会には柔剣道共に優勝し5月23日の5大学試合(建大, 工大, 法大, 医大, 獣医大)にも優勝した」とあり、前者は対戦相手が不明であるが、剣道優勝を告げている。その一週間前の大会は、新京特別市内五大学対抗戦であろう。文字どおり読めばこれにも優勝していることになるのであるが、管見では他に資料も、証言もない。

四期生江口弘は上記大会での優勝については記憶にないようで、「剣道部はあまり強くなく、唯一の優勝は、43年9月の一般人も入った五段以下大会で、舟木、広田、竹村ら諸先輩と一緒に出場し勝ったことである」^{注624}と記している。

翌1944年3月には、官庁第六分会剣道競技会での優勝があった。研究院月報(No.37)の彙報欄に次のようにある。^{注625}

「剣道競技会に優勝/昭和19年度第一次官庁第六分会剣道競技会は、3月4日午前9時より大同学院校庭にて挙行されたが、建大分会出場選士の健闘めざましく力戦の末優勝し、栄ある表彰状を与えられたり。」

もう一つの優勝は、翌1944年秋である。六期生池田義金は記す。

「大学の剣道大会が新京の武徳殿^{注626}で開催され、六期の広田進さん、同期の岩河邦明君等と出場し運よく優勝した。その帰路、長慶街のわが家に寄り、祝杯をあげ、両親にも喜んで貰った。私の剣道もあの試合が公式戦最後になってしまった。」^{注627}

恐らくは、剣道部最後の対外試合であったのであろう。以上を見ると、あまり強くないといっても大会規模を考えなければ5回の優勝があることになり、柔道ほどではないとして

^{注621} 前掲書, 歡喜嶺遙か(上巻), p.392.

^{注622} 前掲書, 歡喜嶺遙か(下巻), p.40.

^{注623} 建国大学研究院月報 (No.30), 1943.2.25. p.8.

^{注624} 前掲, 志々田文明(1992) 建国大学における武道・課外活動, 人間科学研究 5(1):113.

^{注625} 建国大学研究院月報(No.37), 1944年2月25日, p.11.

^{注626} 神武殿の誤りか。

^{注627} 池田義金, 満洲の思い出, 曙きざす(建国大学七期生文集), 1981, p.10

も試合における一定の強さはあったというべきであろう。勝負は相手との相対的な関係であり、試合巧者が沢山入部し、出場すれば試合に勝つこともあるということを示すものといえよう。

(4) 部員

最後に、関係学生の名前を記して本節を閉じる。深尾随想及び村上随想があげたもの、建大各期会誌、及び聞き取り取材によった。

< 一期生 >

・深尾書簡；木下博達、米田正敏、西山文二郎、長野直臣、北直幸、村上和夫、杉田憲治。
・村上随想（有段者）；深尾芳秀、長野直臣、松崎和夫、坂東勇太郎、米田正敏、今井正徳、北直幸、泉水巖、岩淵克郎、花村美哉、西山文二郎、木下博達等十余名。

一期生の主将格は深尾であった。本稿では深尾、村上等一期生の資料を多く使用したがそこには深尾自身の記述はない。柔道部で剣道の稽古もしたこともある二期生の近藤多一郎は、「姿勢も模範的な紳士、君子の剣でした。勝敗よりも剣の正道を歩む風格がありました」と評している。^{注628}

< 二期生 >

・村上随想；舟木旦、稲垣謙次、^{注629} 篠塚昌治、井坂直史、石黒正二、^{注630} 瀬尾博一ら各中学を代表する者も多かったという。

< 三期生 >

・村上随想；坂本（改姓し久間^{注631}）弘、楓元夫、今井宏明、佐々木寿太郎、佐野幸一郎、竹村八郎等。

< 新制三期生 >

・村上随想；澤秋利、^{注632} 相川公二、小林金三、中塚静夫。

< 四期生 >

・村上随想；「抜群に強い」江口弘。（右は追加取材）岩崎宏、山本吉太郎、遠藤文夫。
・歡喜嶺 遙か(下巻)；池田純一。^{注633}

「剣道部四期の主将」江口弘とは、剣道部道友・岩崎宏の言である。「やたらめちゃく

^{注628} 近藤多一郎書簡（1991年1月24日）

^{注629} 久間弘氏によると（2003年4月4日）舟木、稲垣氏が中心であったという。

^{注630} 同期の岩井利夫氏は記す。「九塾の石黒君、剣のさばきも鮮やかであったが、何といっても人柄がすばらしかった。」前掲書、歡喜嶺 遙か(下巻), p.27.

^{注631} 久間弘氏は戦後も剣道を愛好し、浅子直伝の剣道の継承を語っている。「私は定年退職後、当時の剣道に励み、七段となり後進の指導にあたっています。浅子先生直伝を相続しているのは私だけでしょうか。あのころ島谷八十八範士の風格に接し、浅子先生にみちびかれたことがまさに如来大悲の御徳かと味わわれます。あのころ浅子先生は七段でした。私も七段になってはじめて浅子流の相続者という自覚にいたりしました。」会誌（三期会誌）第36号-キムチ, 1990, p.82.

^{注632} 湯治万蔵氏より、澤秋利氏の一文「剣道を又始めた。下手の横好きと云うなかれ。かつては建大の道場で名うての猛者」（澤秋利, 近況, 四期生会誌・楊柳, p.9, 1959.）の資料コピーを恵贈された。楊柳に号数がないため桑原亮人氏に確認(2003.3.11電話)したが、この時期楊柳はでていないという。

^{注633} 池田純一、究極は思いやりの心, 前掲書, 歡喜嶺 遙か(下巻), p.16.

ちやに打ち込んで行くと、彼は、背は私より低く、ずんぐりしていたが、しかし堂々たる体格で、がっちり受け止めて、隙だらけの私の面や小手や胴を、正確に打ち返してくれたものだ。/決して器用な剣ではなかったが、俳句で言えば芭蕉のような、鍛えにきたえ磨きに磨いた、いぶし銀のような、重みと圧力を相手に与えずにはいなかった」と、岩崎は記している。^{注634}

岩崎宏。奉天一中で剣道を学び有段者の実力を備えたが、これで剣道をやめようと段を取らなかった。建大入学後剣道大会に出ることになった彼は、「いざ試合となると、変な気分になって、わざと負けるなどというしゃれたこと」ができずに遂に優勝。剣道部に入部させられたという。^{注635}

山本吉太郎について、同期生田中穰二は、「山本吉つつあんとと言えば剣道と連想するくらい、剣道に身をいれていた」^{注636}といい、剣道部の遠藤文夫は次のように記している。「ともに剣道部に在籍していたため、在学中は親しく交遊した。君は静岡県出身で、その大柄な身体と明るい人格どおり、伸び伸びとした面を中心とする大技の剣を使った。私も、中学時代二段を貰っていたが、私よりは一日の長があったようだ」。^{注637}

岩崎宏は戦後に、「四期生の剣道部員は必ずしも弱くはなかったのだが、勝負運にめぐまれず、大会では良い成績をあげることができなかった」^{注638}と全体を評している。

<五期生>

- ・村上随想；「俊敏無比の」広田進、小野田宗之、来海勤。
- ・小野田宗之談：広田進、来海勤、太田哲郎、松村正一、山野栄。

五期主将格の広田については、松村正一らの随想がある。

「同期では、故広田進君の裂帛の気合いと、俊敏華麗な剣尖の鋭さが、いまでも臉に残っている。天賦の才に恵まれていた彼は、非常な稽古熱心で、技を磨くに人一倍の修練を日々怠らなかった。入塾の時、永年愛用した面と籠手を、郷里広島から持参していたのには、さうがと思った。あの面と籠手に、剣道を愛し、没入しきっていた彼の心情がこもっていたのにちがいあるまい。」^{注639}

また、山野栄は、「広田の剣道は美しかった。面打ちが巧く、攻めがわからなかった」と、太田哲郎は、「広田は徹底的に面、面と攻めた」と、それぞれ技の特徴を記している。

^{注640}

<六期生>

- ・村上随想；岩河邦明、池田義金、横山章。

なお、部員かどうかは不明だが、剣道の強豪と思われる者に、酒井寛二郎(福島商業卒。剣

^{注634} 岩崎宏、正に「道」の人、四期生会誌・楊柳 34 : 35, 2002

^{注635} 岩崎宏、剣聖・浅子治郎先生と不肖の弟子、四期生会誌・楊柳 29 : 29, 1997.

^{注636} 田中穰二、山本吉つつあん、四期生会誌・楊柳 33 : 55, 2001.

^{注637} 遠藤文夫、山本吉太郎君を悼む、四期生会誌・楊柳 33 : 55, 2001

^{注638} 岩崎博(1994)岩井隆三郎先生と六枚の写真、四期生会誌・楊柳 26 : 23-25.

^{注639} 前掲、松村正一、自己形成のデッサン、前掲書、歡喜嶺 遙か(上巻), p.194.

^{注640} 山野、太田両氏から夕食時に伺った。歡喜嶺訪中団随同行聞き取り調査(1992年9月19日)

道三段)、^{注641} 早間瑞之 (新京中。本籍広島)^{注642} がいる。酒井について小山公一郎は、「東北人らしい重厚さ、芯の強さを冷静な雰囲気包んだ正義漢。倫理感が強く、私もよくおこられたことだった。風格ある人間像が忘れられない。」^{注643} という。

<七期生>

・不明

<八期生>

・嘉村三郎、中岡郁光。

これらの部員リストには、日本の敗戦前年・1944年以降の入学である六期生以下の氏名が少ない。六期生及び七期生の部員を調べるために六期生3名全員に電話聞き取り取材を行ったのであるが、岩河邦明によると六期生については3名のみで、七期生については不明であった。岩河によれば、入学した1944年当時は訓練教育はグライダーに駆り出された、剣道も4、5月頃の寒稽古には参加した、10月2日に入隊するがそれまでの間に部活動として対外試合をすることはなかったと思う、という。^{注644}

当時[1944年以降]の練習については池田義金の思い出に次のようにある。

「ある寒稽古の朝、浅子先生の指導のもとに、野外で練習中、鏝迫り合いから退き面を打って後退した私を、尾高副総長がみつけて攻撃精神にもとると激しく注意を受けた。私にとってはこれが唯一の副総長からのご教示であった訳であり、全く不愉快至極の思い出として残っている。」^{注645}

真っ向からいくという剣道部の精神は様々な形で生き続けたとはいえよう。

1945年2月、七期生の日系学生は前期二年に、八期生の日系学生は前期一年にそれぞれ入学した。七期生奥野敏幸は、建大最後の寒稽古の模様を次のように伝えている。

「三月上旬より、早速に剣道と柔道の寒稽古が始まった。満洲の三月はまだ酷寒の最中である。暖かな布団の温もりから抜け出すのは非常に辛かった。その布団をはねのけて、冷たい汗臭い稽古着を着、用具をつけて神武殿[養正堂の誤りか]練習に出る時は、体の芯まで凍る様に寒さが身に沁みた。私は剣道をやっていた。神武殿[養正堂]の中を丁度半分に仕切り、剣道は板張りの上で、柔道は、その上に柔道用畳を敷き、皆熱心に練習に汗を流した。各自が塾に帰る時は、あの寒さが快い涼風に変わり大変気持ちよかった。最終日には、その成果を試す為、勝ち抜き試合が行われた。七人勝抜き、五人勝抜きの者には、特別休暇が与えられた。私は幸い七人勝抜きを達成し5日間の休暇を得た。」^{注646}

その実力からして最後の剣道部員となるべき人物であろう。また、八期の嘉村三郎の「私と建国大学」によると、「午前中は授業で午後は軍事訓練か農事訓練、或いはそれぞれ選んだ班の(私はグライダー班に属した)訓練という日課で、アカデミックな学問中心の大学生

^{注641} 小山公一郎、亡き同期の友を偲ぶ、前掲書、歡喜嶺 遙か(下巻)、p.84.

^{注642} 同上、p.87.

^{注643} 曙さざす(七期生文集)、1981、非売品、p.29.

^{注644} 岩河邦明聞き取り調査(2003年2月23日、電話)

^{注645} 前掲書、曙さざす(七期生文集)、1981、非売品、p.10. なお七期生とは建大当時の期の呼称である。

^{注646} 奥野敏幸、想い出の短編、八旗(No.9)、1987、pp.16-17.

活と云う感じからは程遠く、青年訓練所とか思想研修所と云ったもののよう感じられた。
(中略) / 朝の食前の剣道は壮快であった」^{注647}と、当時の学生生活と共に、剣道部の活動は朝食前に行われていたことを伝えている。

(5) 剣道と民族性

見てきたように、部員リストからは殆ど異民族の姿を見ることはできない。このことについて、村上は次のように記している。

「中学[京城第一高等普通学校]から剣道をやった韓国人の崔熙範(消息不明)は初段の腕前でなかったかと思うが部活動に入らなかった。柔道に相当の他民族が入ったのに剣道に来なかったのは精神面が強調され、スポーツ性が理解せられなかったのではないかと思われる。現在柔道はオリンピックの重要種目となり、各国が参加しているが、フェンシングが入っていても剣道が入れないのは剣道の独自性が受け入れ難いであろう。」^{注648}

また村上は、「どうして日本人以外が剣道柔道をやらなかったかという、やはりもっと事始めからやるという考えがなかったんでしょうな。そういう点では理論的なことを教えなかったのですね。」^{注649}と、全くの初心者である異民族学生に対して丁寧な初歩の指導が欠ける面があった点を指摘している。

深尾もまた、「異民族の同窓は勿論、日系の学生でもあの防具を着けての撃ち合いに、その意義を理解できなかった方も多いと思う」^{注650}と記し、参加しづらい剣道独自の事情に触れている。

さらに二期生井坂直史は、「中国人が柔・剣道を[課外で]やらなかったのは無理もない。二十歳前にやっていないと無理ではないか。受け皿というか、日本では小さいときからチャンバラをやり、武士道の教えがある。彼らにはそれがない。」^{注651}といい、三期生楓元夫は、「剣道は中国、蒙古人には人気がなかった。」^{注652}という。

以上をまとめれば、異民族学生が剣道を避けたのは、「精神面の強調」を嫌ったこと、その意義が理解できなかったこと、配慮の不足、そして「受け皿」的素養がなかったことになる。加えて思うに、次の要素もあろう。

- ・日本人が得意であり日本人の風下に立たざるを得ない面白くない運動であること。
- ・殺伐とした運動であること。
- ・日本の慣習や精神性が色濃い民族武術であること。

^{注647} 建国大学九期生, 建国大学九期生刊行世話人会, 1995, p.42.

^{注648} 村上随想は、以上に続けて次のように記して稿を閉じている。「蛇足になるが防具をつけたスポーツは意外に世人に持てないことである。水泳、バレー、サッカー等々裸身に近い筋肉[二字不明]の躍動が見る人をして共感を与えるが、剣道にはそれがない。もし大衆的なグループ活動を考えるならば米式フットボールのような防具はつけていても躍動的な方法があることを考慮すれば新生スポーツとして国際性が生まれてくるのではないかと考えられる。」

^{注649} 歓喜嶺訪中団随同行聞き取り調査(1992年9月20日)

^{注650} 前掲書, 歓喜嶺 遙か(上巻), p.390.

^{注651} 井坂直史聞き取り調査(1991年1月頃, 電話)

^{注652} 楓元夫聞き取り調査(1991年10月21日, 電話)

筆者は、1991年の第一回訪中聞き取り調査で、中国人三期生魏連元が、「武道に関しては漢民族の学生はあんまり関心を持たなかったんです」^{注653}と控えめに語った言葉に印象づけられた。三期生が生活した1940年以後の時代には、もはや民族協和と満洲国の将来に期待を抱く時代は去り、特に中国人学生が日本の武道を喜んでやる空気はなかったと思われるが、魏連元の素朴な言葉には上に述べた様々な要素が凝縮されていたように思う。

このような異民族学生を日系学生はどのように見ていたのか。一期生剣道部・長野直臣は次のように記している。

「満洲人は、即漢族では階級の差が金によってはげしく、労働は賤しいものの一つと考えているので、^{注654}金さえたまると遊びたがる。之を思ふに武道などさんざんいじめられるものはきれいなものの一つと思はれる。(中略)殊に運動精神[マ]の鈍感なのが多い事は教へる方でもいやになる事が屢ある。だからしていざやるとなると剣道よりも柔道をする様になる。もう少し体を動かす事を練習すべきと思ふ。大陸的にのんきなのだ。」(1939年11月10日)

こうした長野に象徴される日本人学生の心中の思いと批判に、一期生の中国系学生は、積極的に応えた。一期生単希平は記す。

「初めは剣道の基本動作は不器用でしたが、頑張ってやって一年、二年たつうちに段々楽になりました。(中略)忘れられないのはあの夏稽古と寒稽古!特に寒稽古は朝の太鼓の音に起こされて、外はまだ寒くて、零下30度(下略)」。「懐かしい我が青年時期の大学生活、忘れられない苦しみと後の楽しさ。(中略)剣道は私の一生の生活と思想に対して影響を与えた点が少なくないと思います。」^{注655}

二期生が入学する1939年頃までは、日系、満系など各民族が相互に切磋琢磨した時期であったといわれる。日本人が圧倒的優位に立つ状況の中において、外部の情報を十分に持たなかった満系学生たちは、読書と情報の獲得という二つの契機から自らの民族意識を高めながらも、単希平のように積極的に武道に取り組み民族としての自己強化を図っていたといえよう。後章に見るように、四期生の入学する1941年頃になると、政治思想に目覚めた少なからざる満系学生は建大での武道教育を、批判すべき日本思想への端緒と警戒し、親しむ姿勢を失っていったものと思われる。

^{注653} 志々田文明編(1991)1990第一回聞き取り調査記録---長春・旧「建国大学」への旅(1991.7.5作成), 未刊行。

^{注654} 長野の中国人に対するこのような認識は他の日本人学生も同様であった。二期生藤森孝一は、「中国人は農訓を嫌った。素封家の息子が多かった。日本の中学に入れる経済力がなければ建大には入れなかったからだ。彼らには知行合一の教育がわからない。中農以上の中国農民は実農は小作人にやらせればよく、実際に耕さなかったからだ。それを建大では無理遣りやらせたので抵抗があったようだ」と語っている。志々田文明(1993) 歡喜嶺訪中団に随行して, 早稲田大学体育学研究紀要 25: 62。

^{注655} 前掲書, 歡喜嶺 遙か(上巻), pp.375-376。

第7章 柔道の教育 -- 闘志・自主・自律

本章においては、柔道指導者の履歴・武歴と思想、学生の受けとめ方、柔道部の教育の実態を1から3までで考察し、4では特に指導者の思想性を、5では現代的提言を行った。

1. 武道顧問・福島清三郎とその思想

建大の柔道を担当した武道顧問は福島清三郎である。

(1) 履歴と人柄

1) 武術専門学校と福島清三郎

朝鮮人建国大学生・金泳祿（二期生）は記す。

「学問は帝大なみに、武道は武徳会や講道館なみに、軍事訓練は士官学校、農訓は農民なみにといわれて、目をばちくりしたり、気を良くしたりしたものです。『なみ』だらけでとびぬけて秀れた面はないのかと思ったり、四兎を追って一兎も得ずに終わるのではないかと思ったりもしたものです。結局は一兎にも徹し得ずまいになりましたが、少しずつでもあれこれかじって見た結果がバランスのとれた考え方をするようにしてくれました。」

注656

ここでいう「武徳会」とは正確には大日本武徳会の経営する武道専門学校、講道館とはいうまでもなく柔道の総本山の名称、士官学校は将官になる為にはこの学校を出る必要がある陸軍士官学校のことである。建大の武道は最高の質を目指すことを宣言したこの言葉は、後述のように一期生中垣芳治の発言内容であった。しかしそれは学生間或いは教員間に語り継がれて、建大生に誇りもたせ、他方で稚気愛すべき虚栄心をくすぐったと思われる。建大には三人の武道顧問が置かれていたが、剣道の島谷八十八、柔道の福島清三郎はいずれも、大日本武徳会武道専門学校（略称「武専」）の前身・武術教員養成所の卒業生であった。また、特に柔道では武専出身の教官が多く採用された。従って建大の柔道を考えるとき、武専の歴史を押さえておく必要がある。

武術教員養成所は1905（明治38）年10月1日に開校した。同所は国民的な武道団体として設立された大日本武徳会の教育機関として生れた。大日本武徳会は1895（明治28）年に、京都岡崎に平安神宮が建立された際、京都府収税長・鳥海弘毅が、「大極殿に武徳殿があったのを想起し、平安遷都千百年記念大祭並びに大演武会を催し、天皇の御霊をお慰めするとともに、武道を再興、日本精神の鼓吹」^{注657}をはかるうとし、時の京都府知事渡辺千秋、平安神宮宮司壬生基修らと協議の結果、大日本武徳会を組織することを決したことに始まる。同年4月の発起人総代総会で設立が決定され、役員には小松宮彰仁親王が総裁に、京都府知事渡辺千秋が会長に選ばれた。1897年改正の同会規則によると、武徳会は「武道ヲ奨励シ武徳ヲ涵養スル」ことを目的に生れた団体で、「一、平安神宮境内ニ武徳殿ヲ造営スル事。二、毎年武徳祭ヲ挙行スル事。三、武徳祭ニハ武道ヲ講演シ以テ武徳ヲ永遠ニ伝フル事。四、各種ノ

^{注656} 前掲書、歡喜嶺 遙か(上巻), pp.102-103.

^{注657} 武道専門学校剣道同窓会編(1984)大日本武徳会武道専門学校史, p.46.

演武場ヲ設立シ武道ヲ講習セシムル事」等を遂行することが会の主たる事業とされた。^{注658} このうちの第四の事業が武術教員養成所となって結実するのである。

武術教員養成所は武術（事実上剣術と柔術）の教員を養成するために設立され、修業年限は1乃至3年とされ、生徒定員は40名以内であった。修業年限は剣術は4級の下、柔術は2段になれば卒業するの慣例を含んでの表現であって、生徒によって在学年の長短はあったという。生徒は全て寄宿寮に入り、入所資格は武徳会会員又はその家族、年齢は18歳以上、剣術は30歳以下、柔術は25歳未満とされ、「剣術八五級、柔術八甲級、学科八中学第三学年ト同等以上ノ素養アル者」^{注659}の条件が付されていた。学科は国語、漢文、地理、歴史、数学、英語等で一日2時間、術科は午前午後各2時間が課された。術科の教員は武徳会本部の教員であった。柔術は、磯貝一、永岡秀一、佐藤法賢、伊藤誠三、田畑昇太郎、剣術は三橋鑑一郎、内藤高治らであった。

同所は約6年間開設されたが、1911（明治44）年9月に武徳学校が開設されたのにもとない廃止されたのである。この間の卒業人員は58名であった。

養成所開設一年後の1906年10月の剣術の卒業生はたった3名であるが、^{注660}その一人が「奈良武徳会より選抜されて入所」^{注661}した警察官の島谷八十八である。柔道の福島は1911年8月の最終卒業生であった。福島は卒業翌日より大日本武徳会本部の講習生となる。

武徳学校は1910（明治43）年11月の私立学校令により京都府知事の認可を得て設立された。この学校の構想は早くから練られ、1906年には「武道精神ヲ基礎トスル国民教育ヲ施シ及ヒ文武兼備ノ武道師範家ヲ養成ス」ることを目的とした、^{注662}師範部と中学部を設立する計画がたてられた。結局、計画は縮小され、師範部のみの学校として1911年9月18日に開校となった。しかし師範部は入学資格が中学校卒業者を基準としているので、教育課程は専門学校程度となる。そのため改めて専門学校令により文部大臣の認可を受けなければならず、開校間もなくして文部大臣に校名を武術専門学校と改めた申請書を提出した。

武術専門学校の認可は翌1912（明治45）年1月であった。同校規則によると、同校は「武徳涵養ノ目的ヲ以テ武術教員タルニ必須ナル高等教育ヲ施ス所」^{注663}と規定され、修業年限各3年の本科と国語漢文兼修科が置かれた。定員は120名であった。1914（大正3）年の規則改正では、さらに「優秀ナル技術ト学識トヲ養成スル」目的で本科の上に2年間の研究科が設置された。また1917年4月の規則改正で国語漢文兼修科が廃止され、本科修業年限も3年から4年に延長された。1918年9月には卒業者に国語漢文の中等教員無試験検定の資格をえるため課程表が改正され、1926年には同無試験検定請求の資格が認められた。

1919（大正8）年8月、武術専門学校は校名を武道専門学校と改称した。『大日本武徳会沿革史』は、その理由を「術ヲ以テシテ八形而下ノ技術ニ偏シ最モ尊重スベキ指導ノ真髓タル

^{注658} 同上, p.48.

^{注659} 同上, p.69. なお、武術教員養成所ははじめは武術教員養成部とされたが後に改められたという。同上pp.68-69.参照。

^{注660} 同上, p.71.

^{注661} 皇太子殿下御誕生奉祝昭和天覧試合, 大日本雄弁会講談社, 1934, p.739.

^{注662} 設立に当たって木下広次らがまとめた要綱。前掲書, 大日本武徳会武道専門学校史, p.76.

^{注663} 同上, p.90.

其ノ精神ヲ逸スルノ恐アリトシテ剣道柔道弓道其ノ総合ノ場合ニハ武道ト改称スルコトニ決シタリ」^{注664}と述べている。この改称は後に学校及び社会において武術が武道に改めて呼称される嚆矢となった。この時の武専の教育課程表のなかでは、術科、学科を武科、文科とし、術を道としたほか内容の変更はなかった。福島はこの年9月1日付けで武徳会本部講習生の立場から武道専門学校助教授に任命された。

『大日本武徳会武道専門学校史』の同窓会名簿には歴代卒業生の名が付されているが、1期生が「大正3年」となっていることから推して、^{注665}同書では武道専門学校は武徳学校を起源として数えたものと思われる。以下の記述で武道専門学校あるいは武専という場合も同書に準じることとする。

(参照 表7-1：福島清三郎年譜)

2) 履歴と人柄

福島清三郎が建国大学の武道顧問に委嘱されたのは1938(昭和13)年10月1日のことである。^{注666}数ある柔道指導者のなかで何故福島が建大の武道顧問になりえたのであろうか。このことを明らかにするためには、まず福島の履歴が解明されねばならない。表7-1は、福島の履歴を、京都府立総合資料館所蔵の『大正12年私立学校及図書館』にある1923(大正12)年6月1日付けの「履歴書」^{注667}に基づき、子息の清氏所蔵の証書類資料等(表中*箇所)によって補足して作成したものである。

1929(昭和4)年、明治維新以来空前の規模で天覧試合が行なわれた。御大礼記念武道大会がそれである。福島はこの大会に審判員兼指定選士として出場する名誉を受けた。この大会の様子は『昭和天覧試合』にその詳細がまとめられているが、その中にある審判員の美談逸話の紹介に福島のことが載っている。^{注668}

それによると、福島は幼児の時から武道に興味を持っていたが、生来虚弱な身体のため、宿年の希望であった軍人志願に破れ、健康の必要を痛感し、敢然武道によって身体を鍛練しようとしたという。尚武の気風の盛んな熊本には柔術の師範が三家あったが、彼は17歳^{注669}でその一つ扱心流師範の江口弥三の門に入り、高弟木村平太郎について指導を受け、19歳で目録の巻の伝授を受けたという。この頃武徳会熊本支部で演武大会が催され、京都本部より田畑昇太郎(講道館柔道)が来た際、第五高等学校柔道師範と試合し大勝したのが機縁となって上京し修行する決意をした。

表7-1の履歴には、福島が18歳で熊本錦城学館を4年で止め「家事都合ニ依リ」退学したと

^{注664} 同上, p.106.

^{注665} 同上, p.439, p.446.

^{注666} 福島清氏蔵の証書には、「福島清三郎ノ委嘱建国大学ノ武道顧問ノ康徳五年十月一日」とだけ記され、建国大学の印が押印されている。

^{注667} 京都府立総合資料館蔵『大正12年私立学校及図書館』(分類番号:大12・22・4)。この資料は中村民雄氏(福島大学)から提供を受けた。

^{注668} 昭和天覧試合, 大日本雄弁会講談社, 1930, pp.802-804.

^{注669} 同上, 昭和天覧試合には18歳となっているが、満年齢17歳に訂正。本文以下の文章も満年齢に訂正した。

ある。その理由は不明であるが、19歳で1909（明治42）年3月に扱心流の目録を受けたとすると、錦城学館退学後1年間は同流柔術を修行していたと思われる。

1910（明治43）年7月に大日本武徳会の武術教員養成所に入学した福島は、「体力と言い技量と言い、総ての点で劣ってゐるのに我ながら一驚を喫し」、「死を賭して」上達を誓った彼は、禁酒禁煙を断行し、「人知れぬ工夫と研究を続け」、「卒業の時には氏の右に出づる者なき」までになったという。

武術教員養成所を卒業した福島は武徳会の柔道主任教授であった恩師磯貝一の私塾に入り、足掛け5年間懇切な指導を受け、大成していったという。磯貝は1891（明治24）年講道館柔道入門、その2年後の1893年には、関西への普及のため、創始者・嘉納治五郎が第三高等中学校（在京都）に柔道師範として赴任させた俊秀であり、異例の早さで昇段し、1937（昭和12）年には十段に列せられた人物である。^{注670} 1899（明治32）年頃武徳会の教授、武術教員養成所開設とともに柔道主任教授となり、関西以西を代表する柔道師範であった。福島の子息・福島清によれば、^{注671} 磯貝と福島の親交は終生に及んだ。

福島は1913（大正2）年、23歳で三段の時に京都の平安中学校（旧制）の教員になった。その後長く奉職し、1937（昭和12年）3月頃までその職にあった。平安中は浄土真宗本願寺（西本願寺）系の学校で、武道が盛んな学校であった。柔・剣道を学んだ卒業生の多くは武専に進学したという。

福島は武術専門学校が武道専門学校に改称した1919（大正8）年8月の翌月から同校助教授、翌年5月には教授となっている。退職年月日は明確ではないが、福島清並びに同級生の大館勲夫によれば、^{注672} 平安中学の退職と同じ1937年頃であった。武専では先輩の稲葉太郎教授と不仲であったようだが、^{注673} 教育熱心な福島の力はかなり大きかったようで、同校退職の経緯は、ある管理職から私も止めるので一緒に止めて欲しい旨話があったことによる、とのエピソードが伝えられている。^{注674} しかし福島清によれば、両校を止めた後も竜谷大学、立命館大学、海軍機関学校の教授をし、門人を代わりに派遣していた。また、1938年10月には満洲国に鳴り物入りで創立された建国大学の武道顧問に就任していることからみて、依然として関西柔道界で重きをなしていたことが窺われる。

^{注670} 工藤雷介（1972）秘録日本柔道，東京スポーツ新聞社，pp.63-67. また小説であるが右書に京都行き
の経緯が詳しい。長谷川泰一（1958）柔道一代・磯貝一伝，日本時報社出版部，p.74.

^{注671} 福島清聞き取り調査（1993年9月13日。於京都自宅）。自宅前にあった道場（義方会）は今はない。
本稿で度々資料として引用する福島清氏の証言で特に注記しない場合は、この時の取材とその後電
話で行なった確認取材メモによる。

^{注672} 大館勲夫聞き取り調査（1993年9月29日，電話）。

^{注673} 福島から信頼を得ていた曹寧柱氏によると、稲葉も自分を可愛がってくれ、稲葉、福島の両者から
それぞれ相手の批判を聞かされ困ったという。曹寧柱聞き取り調査（1993年7月1日，於銀座レストラ
ン）。

^{注674} 前掲，福島清聞き取り調査（1993年9月13日）によれば、福島は入学試験に当たって大きな影響力
を行使できたようで、色々な苦情があった。そのため、ある管理職も困って、私もやめるから一緒に止
めてくれと説得され、やめることになったという。しかし前掲書，大日本武徳会武道専門学校史，p.122
を見ると、この時期武専校長の森寿の異動はない。ただ福島と同じ1919年に主事に着任した永田幸太
郎が1938年12月に職を辞している。

3) 柔道歴と技能特性

武道の世界で重きをなすためには当然それなりの実績を要求される。福島は柔道歴を飾るハイライトはやはり昭和天覧試合への指定選士としての出場であろう。ただ当時福島は40歳であった。若い頃の試合記録としては約十年前の大日本武徳会台湾支部の第7回武徳祭並びに演武大会（1919年10月29, 30日挙行）の記録がある。総裁久邇宮殿下・同妃殿下御台臨の柔道御前試合において、教士五段の福島清三郎(29歳)は四段1人と三段4人の5人掛けを行い全勝している。^{注675}

「武徳会の本部から来れる斯道の勇将福島五段に対しての五人掛け、何れも元気旺盛なる流石の本島の各有段者死力を尽しつつ同五段を倒そうと焦る、樺山、春川、小林各三段は元来が剛の者である、次で藤崎三段の如き又決して諸士に劣らぬ、併し、福島五段の為め惜しくも遣られた、近藤四段は得意の巻込みを数回に亘りて試みたけれども唯業ありとのみで遺憾にも同五段に仕止められた。」^{注676}

さて、天覧試合・指定選士の人選は、その銚衡委員会によって、「当代日本に於いて、実力人格共に優秀な、而かも優勝試合に堪へ得る体力を具へた者ということをおお体の条件として」行なわれた。山下義韶、磯貝一ら講道館の代表的実力者6人の柔道銚衡委員が各数名の候補者を推薦し、3票以上獲得の者が32名の候補者^{注677}となったが、数えで40歳の教士六段・福島は晴れてその中に選ばれた。全指定選士32名の中では、天野品市46歳、末次哲朗43歳、馬場壽吉42歳に次ぐ4番目の高年齢者であった。

試合は各4名が8部に分かれてそれぞれ総当たり戦（リ・グ戦）で始まった。次いで各部の優勝者がト・ナメント戦で戦うのである。福島は第五部に出場、山口孫作五段と対戦した。

『昭和天覧試合』の筆者は、福島の初戦勝利の模様を次のように伝えている。

「その温厚なる人となりは、その技にもあらはれ、どこまでも無理なき立合ひ振り。山口は三十五歳、宮内省並に警視庁の師範として、これまた柔らかなる稽古、体軀に於て、福島稍や優れたるも、山口には、この二ヶ月間、必死の稽古に鍛上げたる心身の力、日頃に倍する澆刺の意気は最初より、福島を圧倒せんとしたが、沈着なる福島、これを右によけ左にさけて巧妙の防戦、しばし機をはからって一進一退、互いの戦機の熟するを待つものの如くだったが、山口つひに、かくて果つべきにあらずと思ひけん、意を決しての巴投げ--これぞ、敵を寝技に誘はん作戦（中略）/それと見た福島六段、その儀ならば我また応ぜんとばかり、ジリジリ抑へ付けんとすれば、山口この抑え込みを逃れんとして遽かに焦った。/この機！ 福島は、背後より山口の襟をとらへ、咄嗟に締める送り襟、更に引倒して締めつければ福島の締め手充分にして勝ち。（十一分三十秒）」

次の相手、岡野幹雄五段（京城警察講習所師範、32歳）との試合では釣込足で敗退。第三試合では倉田太一六段（広島高師教諭）を抑へ込みに破った。総当たり戦は福島に敗れた山口が岡野を敗ったことから福島、岡野、山口が2勝1敗で鼎立した。福島対山口の再戦は16分

^{注675} 何人掛けのイベントは、戦前には一流の柔道家がよく似たものであるが、福島の全勝はこの時代の五段の実力の高さを示すものといえる。

^{注676} 有効乃活動, 第7巻第2号(1920年2月号), p.62.

^{注677} 前掲書, 昭和天覧試合, pp.66-67.

に及び審判は中止を命じた。裁定の結果は山口を優勢と見て福島は一敗。第二試合の岡野対福島戦は、「沈着の福島に対し岡野如何にしてもこれを破らんとして足技又腰技、極めて興味ある攻撃を連続したが、老練の福島軽く捌いて動じない、併し又逆襲を試むの意気も示さずまたしても勝敗決せずして十分余に及んだが、岡野思ひ切って払腰を打てば、つひに見事なる極まりを見せて」、福島は敗退した。^{注678}

福島はこの試合の感想を記している。

「私が試合前準備修練としてとった方法は、精神的には常に心から邪念を滅却して齋戒沐浴し、摂生に充分注意して睡眠は充分にとり、身体保養に努めると同時に、酒煙草を禁じた事であります。/技術方面の練習としては元気な持続的な方法を取りました。/而して愈々試合に臨むや、武道家として私の得た名誉に感激すると共に、その責任の重大なるを思ひ、勝負を眼中に置かず自己の実力のあらん限り闘ったつもりであります。/私の敗因に就ては右膝関節を痛めて居る其の上に、丁度坐骨神経痛を病んで平素思う様に強き練習の出来なかった為に、試合に際して此処と思ふ機会に、心に体が伴はなかったことに存すると思ひます。/尚試合方法はあの際として最も適当と思ふのでありますが、柔道としては年齢別を採られては如何かと思ひます。/審判法はまことに当を得たものと敬服しております。/兎に角今回の天覧武道試合は一般国民に対する武道の発展普及を促したのみならず、武道家の向上に希有の刺激を与えたことに於て私共の感激措く能はぬものがあります。/之を機会に私は自ら驚馬に鞭って大いに修養精進すると共に、人格を向上せしめ、技を磨き胆を練って、重ねて榮譽に添はんことを期するものであります。」^{注679}

福島は高年齢と身体の故障の弱点をかかえながら良く戦ったというべきであろう。しかしこの二点が同時に第五部予選を抜けなかった敗因でもあった。他の高齢者2名の試合後の感想に、「試合方法は、乱取試合を以て勝敗を決するのであるから、その性質上から観て、年齢に大差ある組み合わせは妥当でないと思ひます。(中略)成るべく試合参加者の年齢等を斟酌して部門を分ち、これを更に抽選により組み合わせること穩当」(末次哲朗)、^{注680}「私の敗因は・・年齢既に不惑を越え体力昔日の比に非らざること」(馬場壽吉)^{注681}とあるように、^{注682}加齢による衰えを切実に感じたのであろう。

福島の身体の故障が「逆襲」の意気を示せなかったのであるかもしれないが、「勝負を眼中に置かず」の文言を額面通りに理解すると、剣道の島谷に観た精神と共通するものを持っていたともいえよう。それは直接身体を接して勝敗を競う柔道の場合、より難しい精神の境地であると思われる。福島はあるいは柔の理に徹した綺麗な柔道に心がけたのかもしれない。^{注683}ここに彼の「温厚な」人柄と柔道観などが見える。平安中学で指導を受けた大館は、指導者としての福島について、「福島先生の人柄は温厚だった。叱ったりしたことはなかつ

^{注678} 第五部の試合の様子は、前掲書、昭和天覧試合、pp.271-275.

^{注679} 同上書、pp.599-600. 下線は引用者。

^{注680} 前掲書、昭和天覧試合、p.617.

^{注681} 同上、p.566.

^{注682} 天野品市は一回戦で負傷し棄権したせい、この面の感想はない。同上、pp.609-601.

^{注683} なお、福島清氏によると、得意技は左右の跳腰であったというが、膝を痛める前の時代のこともかもしれない。前掲、福島清聞き取り調査(1993年9月13日)。

た。先生は教えるのがとても上手だった。寝業で抑えられると、軽くふわっと乗っているのに全然ひっくり返らなかった。先生はあの頃は立ち技をやられなかった。膝を痛めていたようだ」と評しているが、^{注684} この姿は後述するように建大の学生にも見せたそれであった。

4) 家庭人としての福島

家庭での福島はどうであったか。子供に対しては一貫して厳父であり、ほとんど絶対的権力を行使したようである。福島清によると、清は進学校の第一錦林小学校へ入学し、そこからは府立一中へ入学可能であったが、父の命令で平安中学へ進学させられた。高校は六高を受験させられたが失敗、慶応の経済に入ったが、これも父の意に添わず三ヵ月で止めて京都へ帰り、同志社へ入ることになったという。また、1938（昭和13）年には、父の命令で茨城県友部で、加藤完治が開設した内原訓練所（正式には満蒙開拓青年義勇隊訓練所）で15日間の訓練を受けた。ここではかの昭和天覧試合指定選士部門の準優勝者・牛島辰熊の弟子の広岡が柔道を教えていたという。いつも子供を書生と同じように甘やかすことなく扱い、そばに近寄りたがたい厳しい一面がある反面、子供に手を上げることはなかった。謹厳ではあるが温厚な姿がここにも見える。

(2) 石原莞爾と福島清三郎

1) 義方会

武専を去って以後の福島の活躍の表舞台は、自宅に隣接して建てられた義方会道場に移る。義方会とは、この道場を中心に、武道をとおして青年の訓育に当たった集団ということができよう。福島清によると、義方会道場は彼が平安中学校5年の時、つまり、1936（昭和11）年10月に出来た。建大二期生近藤多一郎書簡によると、義方会は「京都百万遍を北へ上り叡山電鉄に沿った所」^{注685} にあった。義方会という会名は近所で親交のあった国文学者の嘉納直方（京大）が命名したが、その出典は聞かずに終わった。^{注686} 清氏は福島が道場に飾る「要綱」を作っていた、という。この要綱は六項目からなり、道場正面神棚の上に飾られていた。概要は、「忠孝ヲ以テ本トス」、「天ニ順ヒ身ヲ修メ」、「礼ヨリ始リ礼ニ終ル」、「質実剛健」、「報本ノ心ヲ養フベキモノナリ」などであるが、第三項目には「武道八正義ヲ以テ源トナス義八勇ニヨリテ行ハレ勇八義ヲ以テ長ズルモノナレバ平素義勇ノ精神ヲ涵養スベキモノナリ」とあり、^{注687} 義方会の名称が義勇の強調と関係していることが理解される。なお、この道場を建設したのは、武専の教え子たちの力に与るところが大きかったといわ

^{注684} 前掲、大館勲夫聞き取り取材（1993年年9月29日、電話）。

^{注685} 近藤多一郎書簡「志々田先生に対する回答」（1990年12月）。なお、この書簡は筆者の問い合わせ（1989年11月28日付）に対する回答。

^{注686} 義方とは「人として正しい道のある所の意で、正しい道徳をいう。「左伝」（隠公三年）。大漢語林(1992)大修館書店, p.1133. 左伝の「愛子教之以義方、弗納於邪」が出典か。左は鈴木昭治郎氏に教示を受け確認した。

^{注687} なお、この要綱は、福島清氏が写真を拡大して筆記したものである。

れ、^{注688} 門下生からの信頼の大きさを窺わせる。

道場は約80畳敷きで、^{注689} 他に書生の部屋が三室と食堂があった。民間の道場としては堂々たるものといえよう。食堂には料理人を雇っていた。道場の一部では骨接ぎ（接骨院）も行なわれた。道場では、住み込みの書生等を中心に柔道の稽古が行なわれた。親交の深かった軍人今田新太郎は、義方会道場が「近所の豆腐屋、八百屋などの子供」にも開かれているのを見、^{注690} 武道精神の前には貧富貴賤を設けない福島の運営方針を誉めている。

義方会では、柔道ばかりではなく剛柔流空手家・山口剛玄、^{注691} その弟子で義方会協和塾の塾頭・曹寧柱らを中心に空手の指導も行なわれた。柔道のみ凝り固まらない福島のおおらかさが窺える。岩上長興によれば、義方会道場に空手を加えることになる発端は、満洲国の大同学院に進学予定の河野が福島に山口を紹介したところ、山口が都城出身の九州人であることから話があって、「君たちの練習も義方会でやったらどうか」ということになったのが契機で、1937年秋口から稽古が行なわれたという。^{注692} 1938年の暮れに山口が秋田鉦業専門学校（現秋田大学）の技術訓練所に空手の指導者として行ったため、曹寧柱氏に後の指導を任かせた。福島清によれば、以後、義方会では山口の指導していた立命館と同志社の学生が主に練習するようになったという。

なお、1939年初冬に建大生の前で空手の実演があった。一期生長野直臣塾生日誌（1939年11月27日・月・晴）は記す。

「山口氏来校され、唐手の講演あり。自分は前に沖縄師範の生徒が唐手を教へに来て、実演を示して呉れたのを覚えているが、実に微妙な所に働きかけるものだ、と思ふ。武道にも之だけの種類があるのであるから、一つ位、真の腕を磨きたく思った。」

『月刊空手道』の山口剛玄追悼特集記事によると、山口は1939年に「京都師団長だった石原莞爾將軍の依頼により、満洲に渡る」^{注693} とある。石原、福島との縁での訪問であろう。

ところで、何故福島はこのような道場を開設するに至ったのであろうか。福島清によれば、生前、福島は、「武道の教員は、文・理科系の人たちに引け目を感じているが、そんなことはない。柔道の教師にもこれだけの道場を創ることが出来るんだと彼らに希望を与えるためにこの道場を建てたんだ」という主旨のことを語っていたというが、その根本的な原因は、彼の教育者としての情熱にあると思われる。福島は1914（大正3）年に結婚をしているが、妻のきたは息子の清に、結婚をした時既に母屋の二階には書生がいて、二人だけの生活をしたことはなかったと語っていたという。

事実福島は、すぐれた学生がいると自宅に預かって親しく文武の指導をした。そうして武専に、武専を離れて後は拓大等に送り込んだのである。書生の一人であった平野時男は淡路

^{注688} 武専26期（1940年3月卒）の伊東（旧姓中島）三郎氏は、「義方会には皆で寄付を出した」と語っている。伊藤三郎聞き取り取材（1993年11月3日、電話）。

^{注689} 山口剛玄追悼座談会における岩上長興談話記事、全日本空手道剛柔会開祖・故山口剛玄先生、1989年9月26日、p.26。なお、本書は日本空手道剛柔会会葬パンフレット。

^{注690} 志士牛島辰熊伝刊行会編(1975)志士牛島辰熊伝、2版、p.106。

^{注691} 山口剛玄については、月刊空手道、福昌堂、No.8、1989。に特集記事がある。

^{注692} 前掲、岩上長興談話記事、p.26。

^{注693} 月刊空手道、1989年8月号、Vol.144、p.51。

島の出身である。福島清によると、福島の教え子の教員浦野大介（武専21期）からその柔道才能と家庭の事情を聞いた福島は、3年次から平安中学へ転校させ、自宅に引き取って彼の世話をした。後に大成し、1941、1942年に明治神宮国民錬成大会の大学高等専門学校の部で優勝した猛者である。平野には進学の時武専からも誘いがあったが、福島はこれからの武道家は広く学ばなければ駄目だと拓大に進学させ、同県人の柔道家牛島辰熊宅に寄宿させたという。こうした教育愛が実を結ぶような形でできたものが、教え子等の寄付によって建てられたといわれる義方会道場であった。

福島の郷土の後輩思いには強いものがあった。それを伝えるいくつかの逸話がある。熊本県出身の大館勲夫は、ハワイのハイスクールを卒業後、1934年9月に日本の平安中学（旧制）に留学し、3年に編入した。すると福島はわざわざ旅館に大館母子を訪ね、「野球をやるのならアメリカでやったらいい、日本でやるなら柔道をやりなさい」と説得したという。この説得によって大館氏は柔道を始め、武専に進み活躍することになる。^{注694} 建大の柔道指導者たちについては後述するが、専任柔道教官として最初に赴任した萬田勝も熊本県出身であった。

福島は民族的な差別意識のない人物であった。朝鮮人の曹寧柱の証言を聞こう。曹は義方会の剛柔流空手師範であるが、義方会道場に隣接して建てられた義方会協和塾の塾頭を福島から委嘱された人物である。満洲への雄飛を希望した曹は、それなら石原莞爾の知遇をえて満洲にコネのある福島のもとでと考へ、1938年頃から義方会の福島の下に出入りした。

「義方会は柔道の猛者らの集まりで、大家の牛島辰熊をはじめ天覧試合とか神宮試合の勝者が綺羅星のように並んでいた。とくに、『武道は礼に始まり礼に終る』の精神に徹し、力だけでなく人格形成に主眼がおかれた。あくまでも実力が主体で、民族差別など毛頭ない福島会長の公平無私な人格には、師父の情が湧いてきた」^{注695}

曹寧柱は1941年以降石原に心服したという。石原の指導で1939年に結成された国家主義団体・東亜連盟には「京都で、一番先に研究し一番後に入会した」^{注696} と記しているが、そこへ至るには悩み葛藤で眠られぬ日も多かったという。福島はそんな曹を子供のように可愛がった。そのため「お前が一番勉強しているのに何故東亜連盟には入らないか！」と何度か叱られたという。^{注697} ここには福島が自ら訓育したものに対しては民族の別なく信念に従いその影響力を行使している姿が見えるが、こうした行動の背景には、民族協和を主張する石原の影

^{注694} 前掲、大館勲夫電話取材（1993年年9月29日実施）。

^{注695} 曹寧柱、石原莞爾の人と思想、石原莞爾生誕百年祭実行委員会編、永久平和への道、原書房、p.199。同書によると、曹寧柱は韓国の南東の地主農家の生れで、青年時代、独立運動、マルクス思想に傾倒した。満洲事変直後に日本に留学し、赤色後援会に入って活躍したが、日中戦争（支那事変）勃発の頃となると、日本で左翼運動をやれる状況はなくなり、「満洲でも行こう。それには満洲にコネのある福島清三郎の義方会がよい」と考へ、義方会に「師範として入った」という。1938年冬に、曹寧柱は福島の紹介で知人らと舞鶴要塞の石原莞爾司令官を訪ねた。以後、曹は次第に石原に私淑し、1941年3月に石原が第16師団長を追われ予備役に編入されるに及び、私淑の域を出て、「心から信ずる石原にかわった」という。こうして曹は東亜連盟に正式入会し、東亜連盟運動の一環としての昭和維新運動に身を捧げる決心をした。

^{注696} 同上、p.229。

^{注697} 前掲、曹寧柱聞き取り調査（1993年7月1日。於銀座レストラン）。

響があったものと思われる。

2) 石原莞爾への心服

福島が建国大学の武道顧問に委嘱された最大の原因は、石原莞爾との親交にあったと思われる。また、石原の弟分のような存在であった今田新太郎中佐が石原との関係から武道顧問選定に影響力を行使できる立場にいたことから考えて、^{注698} 今田の推薦によるものが大きかったと思われる。ただ、福島がいつ、どのような形で石原と接し、その知遇を得るようになったかについては現在までの調査では明確ではない。しかし福島の本県の後輩柔道家・牛島辰熊が1936（昭和11）年に知人の紹介で今田と知り合い1938年春に今田の紹介で石原の知遇を得たこと、^{注699} から推せば1936年以前には知り合っていたものと思われる。

石原が福島に与えた影響は大きかったと思われる。福島清によれば、福島は1935（昭和10）年頃には日本拓務省の嘱託となって、地方の講演に出掛けるようになったが、石原や東亜連盟などに関心を持つようになってから、本などを読むことも多くなり、話も巧くなったように思うと述懐している。

曹寧柱は、「福島先生は石原將軍に私淑していたから、東亜連盟の学生を義方会に入れたんです。あれは柔道の道場だけど精神的には東亜連盟の訓練道場みたいなもの」^{注700} だと語っている。東亜連盟とは、^{注701} 近く到来すると想定される西欧のチャンピオン米国との世界最終戦争に備え、「東亜諸国民ノ全能力ヲ総合運用シテ」（東亜連盟協会の宣言、1940）必勝を期すとする思想を核とする、石原を盟主とする国家主義団体であった。義方会では石原を囲んでの座談会も行なわれた。

福島の石原の人格と思想への共鳴・心服は、石原が満洲を追われるように日本に戻り、舞鶴要塞司令官（1938年12月）そして京都第16師団長（1939年8月）として福島の近くに居住するようになって、一層拍車がかかったようである。福島清によると、8月30日に石原が京都師団長として赴任してくると、福島は何度も石原を訪ねたという。石原が予備役にまわされ、太平洋戦争の始まった1941年暮れ以降、石原が東亜連盟活動に没頭するようになると、福島の東亜連盟活動も本格化し、関西から西の行事には必ず出席したという。建大柔道教師

^{注698} 建大三期生・奥村繁信氏によると、建大の第三の正課必修の武道であった合気武道を採用する際に、今田新太郎は空手の採用を主張したという。これは恐らく山口剛玄の剛柔流空手の採用であろう。今田と同じく建大創立に関係していた松平紹光大尉は、合気武道の顧問となる植芝盛平の弟子であったことから合気武道の採用に苦労したという（奥村繁信「私の合気道修行」(1)、合気道新聞、1987年12月10日。及び同氏への聞き取り調査(1990年7月13日ほか)。今田が石原の意を体して人事に力を持っていたことが窺われる。

^{注699} 前掲書、志士牛島辰熊伝、p.104.

^{注700} 山口剛玄追討座談会における岩上長興談話記事、全日本空手道剛柔会開祖・故山口剛玄先生、1989年9月26日、p.26. なお、本書は日本空手道剛柔会会葬パンフレット。

^{注701} 第13章3(2)3)及び(3)を参照。

大野哲次は、^{注702} 東亜連盟事務所開設の時期を1941年3～4月としている。また、曹寧柱によると、福島は義方会道場を東亜連盟の関西支部として活用し、道場前にはその東亜連盟の看板までぶら下げた。この頃になると石原と東亜連盟に対する官憲や右翼の弾圧も激しくなり、福島は曹に石原の護衛を命じている。義方会道場傍を通る線路向かいの家の二階には特高警察の監視がつき、福島が出掛けるときは必ず駅の憲兵に行き先を調べられたという。福島が身体を張って石原と行動を共にしようとしていた様子が理解される。

また、福島清によると、福島は1938（昭和13）年3月に、「満洲国」留学生のために道場裏手に義方会協和塾なる東亜各民族学生の寮をつくり、その管理を行っていた。建物は二階建て一階に五室、食堂、二階に四室あった。曹寧柱を塾頭に、主に満洲国の留学生（中国人）、ハワイ人、日本人が十名ほど寄宿していたという。曹によると、塾の家主は別であった。塾の生活は質素なもので、福島は各大学などで得る収入をその運営に注ぎ込んでいたようだという。

(3) 武道の思想と建大生

前述のように、石原莞爾への心服は福島を読書人に成長させ、話術を巧みにさせた。そのことは建大の学生の反応にも見ることができるが、ここではまず、筆者が入手した唯一の福島の著作「東亜連盟と武道」^{注703} から彼の武道思想を確認し、それを建大生がどのように受けとめたのかを見ておきたい。福島は記す。

「武道は武術を通して道を行ひ日本肇国の天業を翼賛する道である。 /日本肇国の天業は八紘一宇の世界を顕現する事で、この天業の完成によりて万民各々その処を得て人類永遠の幸福、即ち大平和王道楽土の世界が建設せらるることである。」^{注704}

平易に言えば、武道は、「八紘一宇」の世界を実現することを助けることを目指して、武術の修業をすることということになろう。こうした考えは当時の武道家が武道家としてその存在意義を主張するためには必須・共通の論理であった。

次いで、武道は手段を選ばずに勝つことをもとめるのではなく、技術を通じて道を行うことが説かれる。

第三の論点は、欧米の武術、その背後にあるものの考え方の批判である。それは能率第一主義を批判し、これでは「寒稽古や暑中稽古等の気持が解る筈がない」という。武道は「眼前の利害生死を超越して人間を作ると云ふ事が主眼」となるというのである。この批判の対象は欧米の精神そのものではなく、日本武道に見られる傾向として福島が感じるものであった。

^{注702} 大野は次のように記している。「小生の中学柔道部の四年先輩で淵上辰雄氏（故人）が昭和16年頃京都に現れ、東亜連盟事務所を福島道場内に置くことになった事を知りました（当時石原將軍は京都（第16師団）の師団長をやめられて立命館大学の教授をされていたので東亜連盟の仕事をする為に来た事を知りました）。その後淵上先輩とは武専卒業まで度々会って東亜連盟の話聞いた事を思い出します。」大野哲次書簡（1993年10月15日）

^{注703} 福島清三郎（1941）東亜連盟と武道、東亜連盟 3（8）：76-79.

^{注704} 同上、p.77.

福島の本張は全く日本的ではあるが、ユニークな点はここからである。

「日本武道の本義が国民に徹底して居るか否かは、我々が指導者であると自認して指導している台湾朝鮮を見てもよく判る。我等が天意と違ってやって居る事を彼等は心から鴻恩に浴して居ると思つて居るか、又満洲建国以来彼ら三千万の満人が道義日本の援助に感謝して居るかどうか。感激していないとすれば、その罪は誰にあるのかをお互いに反省し、一日も早く建国の理想たる王道楽土、民族協和の国を建設しなければならぬのではないか。」^{注705}

福島は「国家権力を以て征服するが如き愚なる轍を踏んではならぬ」とし、代わりに「総てに実力を以て然も謙讓なる心を以て相手に接すれば、相手は必ず心からその人格を尊重して敬慕してくるものである。ここに始めて八紘一宇の天業が完成する」としている。その主張は、権力的な力の行き方に対する反省につきるが、その心底には相手を気づかう意識を見ることが出来る。あくまでも日本の民族的指導性の自認を維持しながらも、他者、他国への思いやりを示すことによって日本だけではなく東亜諸国の人々の共感を得ようとした東亜連盟の思想との接合が、福島の武道論に一定の力を与えていたといえよう。

史・資料を見、また聞き取り調査の限りでは、福島は建大で東亜連盟思想の注入を図ることとはなかったと思われる。福島の指導に最も丁寧にして詳細な反応を記した二期生藤森孝一塾生日誌（1939年9月25・月・晴）を見てみよう。

「柔道は福島顧問が指導して下さる。稽古の前に当たり注意を与えられた。武道は八紘一宇実現の手段であり、之を除いては八紘一宇の実現は期し得られない。武道は日本に於て独特に発達したものであり、世界に誇るべきものであるが、之は実に生命のやり取り、自分が殺されるか相手をやっつけるか、といふ間に於て練磨されて来たものである。決して一本投げたからもう勝つたのだといふ事はない。投げられ投げられしても最後に締めて之をやっつける。本当に参つた、もう闘ふ力がなくなつたといふ所まで修行して初めて武道精神が体得される。更にたとへば締められた場合も、もう何とも逃げられない、参つたといふ場合にも此処で止めずに更にぐいぐいと締めて締め殺して了う。所が実際に参つたと云つても放されない、このままでは死んで了ふんだと考えると、不思議に今迄もう到底逃れられぬと覺悟していたのに非常な力が出て、この締めより抜ける事が出来るものである。ここに武道の工夫がある。武道の真面目がある。ここまでやらねばならぬ。と。」

話の骨子は、日本武道の独自性は極限まで追求される「闘志」ということになる。命がけ、ということを除けば今日の指導と比較しても特別な教示というわけではない。藤森は続けて記す。

「福島師範は訥々として説かれるが、その意魄はピリピリと胸にこたへる。ああ本当に武道によって鍛えた人だなあとしみじみ思はれた。実に真の武道精神、倒れて後已まずといふ底力はこの死生の間に入り出して始めて得られるものと思ふ。自分は身体が弱々しく腕力も乏しい。どんな正義もどんな道義も力がなければ無力である。「まつろはぬ」ものを討ち平

^{注705} 同上, p.79.

らげる腕力がなくては叶はぬ事だ。然しこの身体でも大に鍛へて行ったら正義に盾つく奴位ぶった斬る程の力はつくと思っている。一方身体を頑丈にすると共に、大に武道の練磨をせねばならぬと思ふ。」

国家のため天皇のために生き・死ぬことを当然の理として受けとめていた藤森にとって、福島「訥々」とした話と内容は素直に敬意を以て受けとめられたことが理解される。

ただ、日本人学生のこうした受けとめ方は他民族学生にとっては容易でなかったと思われる。彼らの当時の気持ちを記す資料は皆無に近いが、幸い中国人八期生林承棟に次のような回想部分がある。

「私は一般の学友より背の高い方で1.79米、柔道に入った。柔道着を着けて日系学友と組むと、あっさり投げとばされた。負けまいと何度も頑張ったがやはり負ける。不思議で堪らない。後で判ったことであるが日系の学友は中学時代からすでに稽古を積んでおり、少なくとも皆二、三級ぐらいの腕前と聞く。」^{注706}

柔道の体験が乏しい異民族学生にとって、上手になるまでの間は、柔道は不思議な武術であり、ただ驚きのものであったと思われる。柔道の思想、福島の思想とは他の武道思想と同じく、あくまでも、身体運動としての柔道に指導者によって付加的に添えられるものであり、それによって柔道教育が豊かになるものということは確認しておかなくてはならないだろう。

2. 柔道部と教育

(1) 建大柔道の指導者たち

福島が建国大学の武道顧問としてはじめに推薦したのが、柔道教官・萬田勝であった。萬田の履歴を『第三版 満洲紳士録』（1940年発行）に基づいて見ておきたい。^{注707}

・萬田勝

現職、建国大学助教授。出生、1908（明治41）年。本籍、熊本県玉名郡弥富村。学歴、1931年大日本武徳会武道専門学校卒。経歴、長野県立飯山中学校教授嘱託、宮内省皇宮警察部柔道助手、神奈川県警察練習所柔道教官、横浜専門学校柔道部教師、神奈川県立武道館教師、同県警察部教師等を経て康德6年2月現官職に就く。住所、新京南嶺其大学。

熊本県出身の萬田は、1931（昭和6）年3月卒の武専第17期生であった。満洲国政府公報によると萬田の建大助教授正式辞令は1939年2月4日である^{注708}が、妻の萬田八重子は、当時萬田は横浜の警察練習所で柔道を教えていたが、建大への赴任を突然自分に告げ、1939年正月に単身渡満した、また、福島へ親炙していたようだ、^{注709}と筆者に語って、これを裏づけている。

萬田が実際に建大に姿を見せるのは1939年の1月頃であろう。建大で実際上の指導の責任を負っていた萬田と福島の関係はどうであったのか。このことについては筆者の問い合わせ

^{注706} 林承棟、塾生活の思い出、前掲書、歡喜嶺 遙か(上巻), p.329.

^{注707} 西暦を挿入し言葉を補ったほかの事実情報は原文通り。日本人物情報大系,皓星社, 1999, p.161.

^{注708} 満洲国政府公報 (No.1449), 1939.2.4.

^{注709} 萬田八重子聞き取り調査 (1993年11月2日)

に回答された一期生尾崎照夫書簡を見してみる。

「私は初段で入部、昭和十五年から一年毎に昇段し、卒業時四段で、マネージャーをし、萬田勝先生に隨身し、昭和十四年二年目の冬休み、京都の福島清三郎先生の道場に練習に参りました。萬田先生は福島先生に「親炙され、「この時も合流され、ご一緒に武専の朝稽古に参加し、福島道場（近くに徳富蘇峰先生勉学の地の碑あり）に寝泊まりしていました。萬田先生は漢籍に造詣が深く、お二人とも謹直で温和ながら国士的な風格があったように拝察しておりました。萬田先生を福島先生は、高弟として扱っていたように思います。」^{注710}

一読、師弟関係が良好であったことがわかる。萬田の指導風景や発言内容については、藤森孝一塾生日誌（1939年11月21日）が次のように伝える。

「柔道は塾頭先生も来られて、力いっぱいやる。正しい心で正々堂々とやって何処までも勝つ。之が最も肝要だと萬田先生も云はれる。これから時勢について述べる所あり、感慨深し。」

剣道部同様「正々堂々」を求めつつも、「何処までも勝つ」ことを目指している様子が窺える。また加えて、稽古後に「時勢」の話があったことが福島等の東亜連盟思想との関係で注目される。

また同じく藤森孝一塾生日誌（1940年3月12日・火）に、「剣道の予選に勝ったので集会所での柔道の試合を応援に行った。やっぱり気が弛んで来て、ぼやぼやと迂闊に眺めていた。萬田先生の注意ではととした。試合は生命を取るか取られるかの必死必殺のものである。見学しているものもこの気持ちで見なければならぬ。あの技はどうして失敗したか、或は、あの隙にやられたのだなとか、ずっと考えていなければならぬ。と、云はれた。実に申し訳なかった。見世物でも見ているやうな気でいたのだ。緊る時にはぎゅっと緊らねばならない。」とあり、学生に、命がけの真剣な稽古が求められていたことがわかる。

萬田の風貌と人柄については、近藤多一郎が、「萬田先生は熊襲の子孫、全身が北海道の毛ガニ。（中略）豪放明快、一点の曇る所のない書生ッポ風。建大助教授の肩書は何処にもなかった」^{注711}と面白く記している。また、二期生岩井利夫は柔道部ではないが、「とも角、正立方体が歩いて来られるといった感じで、胸板の厚さは大変なものだった。（中略）柔道部の連中はどうであったか知らないが、僕らには大きな声ひとつ立てられず、物やさしい先生であった。」^{注712}という。また同じく二期生で柔道の指導自習に出席していた西村十郎は、1940年8月にワイル氏病という病気に苦しんでいた際、「幸いにも柔道の万田先生が毎日足を運んで関節訓練を施して下さった結果（但しこの訓練は涙のこぼれるほどの痛さであった）腕の方は旧に復するに至った」^{注713}と、萬田の献身的な看病に感謝している。強面ぶりを示すものとして、四期生井馬煌一は、「規律を乱したため、生を享けて以来、親からも叩かれたことのない天下の建大生が柔道六段の塾頭助教授の鉄拳を喰った。（中略）この経験が大いに生かされ、その後学徒動員で入隊し、最精最強を誇った鬼の関東軍の中で、いかなる

^{注710} 尾崎照夫書簡（1990年12月1日）

^{注711} 近藤多一郎、柔道部の群像、前掲書、歡喜嶺 遙か(上巻), p.363.

^{注712} 岩井利夫、某年某月某日-歡喜嶺レクイエム、前掲書、歡喜嶺 遙か(下巻), p.24.

^{注713} 西村十郎、日記中心の建大私記、前掲書、歡喜嶺 遙か(上巻), pp.292-293.

シゴキにもリンチにも耐えて微動だもしなかった。」^{注714}と記している。また四期生桑原亮人は、「塾頭であった先生からみんなで並んでビンタを受けたこともあったが、私達のような悪は本気で殴られた」と懐古している。優しく、そして必要に応じて時に鉄拳も辞さない、これが萬田の指導であった。四期柔道部主将格として身近に接した山田俊一は、「そのお人柄にしても外見の大柄とは反対に、大変心優しく、善意な人と思っている」^{注715}と評している。

家庭人としての萬田は、妻八重子から見ると、「建大の職務に専念（指導自習も含む）されたため、家庭人としての生活は少なく、その上口数の少ない方で、建大のことも殆ど話さなかった」^{注716}という。

最後に萬田と東亜連盟について触れておかななくてはならない。萬田は柔道部あるいは同郷のこれはと思う者には、それとなく関係する文献資料を与えて感化を図ったようである。山田俊一は萬田の思想的影響力行使の様子を推測して記す。

「この二～三ヶ月の森崎[湊]の心情は、彼自身が日誌で誌している通りであるが、その中で彼が萬田先生に対し、あの様に急進的になって行ったのは私には矢張り意外であった。萬田先生はむしろ森崎を大変評価されて居た筈であり、彼の東亜連盟に対する知識もその一部は先生に負うところ大であった筈である。」^{注717}

さて、萬田は建大の柔道の主任教官の立場にあり、福島指導下ではあろうが、その後の人事に大きな影響力を持ったと思われる。柔道教育を担った他の指導者の履歴を見てみよう。

・門野與巧（礼吾）

武専22期生、1936年3月卒。門野は、大分県宇佐中学校出身。伊東三郎談によると途中で新京工業大学に教授で栄転した。三期生阿蘇谷博によると、^{注718}「鼻下に美髭を蓄えた偉丈夫だった印象があ」という。

・八木正弘

武専25期生、1939年3月卒。八木は、熊本県済済鬘中学校出身。1981年死去。八木は「切れのよい跳腰」が冴えたという。^{注719}後輩・大野哲次の回想を聞こう。

「武専の三年先輩で温厚な方で、福島道場（義方会？）で起居されていたように思います。武専の課業が終わると夜は道場で練習傍ら指導されていたように聞いています。小生が建大に就職した当初八木先生も独身でしたので居候していました。当時は富木先生から合気道の手ほどきを受けられていた事を思い出します。」

・中島（改姓し伊東）三郎

^{注714} 井馬煌一、わが青春の凝集、前掲書、歡喜嶺 遙か(上巻)、p.54.

^{注715} 山田俊一聞き取り調査(1993年11月3日、電話)

^{注716} 西村十郎書簡(1993年6月24日)在中の西村氏が萬田夫人から送られた書面の概要を示した文章。西村氏は筆者の求めに応じてレポート用紙6枚にわたって建大に関する詳細な情報を提供下された。

^{注717} 山田俊一、畏友森崎に密かな誇り、四期生会誌・楊柳 号外(森崎湊特集号):9, 1986.

^{注718} 阿蘇谷博葉書(1991年10月21日)

^{注719} 藤原敬司書簡(2003年4月16日)

武専26期生、1940年3月卒。中島は、京都市立第一商業学校出身。近藤多一郎によると、^{注720} 中島は門野が退職することになったため1941年6月、和歌山高商の柔道教師を経て建大に赴任、「寝技を得意とされ武専出身では珍しい方」という。大野哲次によると、^{注721} 1945年8月に応召されるまで、前期の七期生3塾の塾頭を^{注722} 務めた。

なお、「戦後は大阪府警の柔道師範をされていました。大阪府警は武専出身者で固めていました」という。^{注723}

・大野哲次

武専28期生、1941年12月卒。福岡県嘉穂中学校出身。1942年1月建大赴任。1942年3月武専卒業のところを学徒動員令で繰り上げとなった。大野は、「翌年2月1日が入隊と決まっていた為、就職のことは念頭になく、何れ何処かの中学に決まるものと思っていましたが、急に建大就職が決まり、卒業式が終わるとそのまま新京に飛んでいきました。建大就職の件は八木先輩から話があったように記憶しています。どうして建大就職が決まったのか理由はわかりません」^{注724} と記す。

以上を見ると、全て武専出身者で固められていること、九州人がほとんどであることがわかる。近藤多一郎は建大指導者の様子を、「養正堂の師範室は門野、八木、大野と九州先生の[萬田の下への] 集合で熊本弁普及出張所になった。京男の中島先生までが『バッテン、ホナコツ』と相槌を打つ。」^{注725} と面白おかしく伝えている。

この他に、建大には当時最強と目された柔道家の来訪があった。中垣芳治は記す。

「熊本出身の萬田先生のご縁で、毎年牛島辰熊八段[マ] が、拓大の木村正彦五段をつれて来学され、私は必ず最初に木村五段に胸を貸して頂いた。建大には当時萬田七段、門野五段、中島三郎五段、大野五段と居られた。先生らと毎日、二十何段とけいこした、自分で喜んでいて。/中島三郎五段は、木村五段がねわざではどうしても勝てない人であったとききました。」^{注726}

牛島は熊本県出身、福島清三郎が敗退した1929年の天覧武道試合の指定選士の部に26歳で出場、決勝で恩師栗原民雄と戦い、勝ちを譲って準優勝に輝き、その後も柔道界に覇を唱えた強豪であった。その弟子木村は戦前戦後の時代に「木村の前に木村なく木村の後に木村なし」と言われた柔道家であった。藤森孝一塾生日誌（1939年11月20日）には、「四時半より有志の者は牛島七段に稽古をつけて貰ふ。牛島先生の稽古は中々猛烈だ」とあり、『建国大学年表』にもこの記事しか見あたらないが、毎年とあることから、少なくとも数年に亘って建大あるいは建大柔道部の学生たちの前に現れたのであろう。

(2) 柔道部創部の頃

^{注720} 前掲、近藤多一郎書簡「志々田先生に対する回答」（1990年12月）

^{注721} 大野哲次書簡（1993年10月15日）

^{注722} 歡喜嶺 遙か(下巻), p.263.

^{注723} 前掲、近藤多一郎書簡「志々田先生に対する回答」（1990年12月）

^{注724} 前掲、大野哲次書簡（1993年10月15日）

^{注725} 前掲、近藤多一郎、柔道部の群像、前掲書、歡喜嶺 遙か(上巻), pp.363-364.

^{注726} 中垣芳治書簡（1991年6月1日）

このことについては、柔道部の一期生中垣芳治氏が筆者の質問に対して寄せた長文の書簡^{注727}に、次のように記されている。

「一期生入学の頃は、専門の柔道場がなく、教室を剣道場として使い、柔道をする時は、一々畳を敷き、終わると畳を立てかけて、教室か剣道場の様になおして帰るという有様でした。高橋[武雄]も尾崎[照夫]も最初は余り熱心でなく、私が一々全部の塾を廻って、夜の自習時間に『今から稽古をする』とって、呼びかけたものでした。何しろ専任の教官もまだ来ていなかったので、藤田塾頭の助手の北原勝雄四段（七高、京大）が相手になって下さる位でした。私も初段で、尾崎初段とよく乱取はしましたが、外に寝技の強い小林軍治二段（信州、上田中学）、広瀬信喜初段（熊本中学）、近藤秋太郎初段[（恵那中学）]、住野光蔵初段[（志布志中学）]、金三守初段（伊丹中学）らがいました。越智道世初段（私と神戸一中柔道部で同期でした）も。」

未だ萬田が着任しない状態を再現して見事である。一箇所修正を要するのは広瀬信喜が三段で寝技が得意だったことである。^{注728}北原の履歴については既に表3-2に記したが、農訓担当兼3、6塾の塾頭であった藤田の助手として着任した。6塾の作田良夫がその着任時の姿を、「北原先生の逞しい姿が、兄貴の様な親しみと迫力をもって現れた」^{注729}と記すように、北原は柔道好きの学生たちの世話も見たのであろう。中垣は萬田着任後の様子も記す。

「十四年一月かに萬田勝七段が横浜から赴任され、毎日のように、夜、けいこしました。何しろ午前中の授業で、中国語、独逸語をやり、私は更に西洋史をさぼってロシア語を三年間続け、午後は農業訓練、軍事訓練、剣道、角力、銃剣術などをやり乍らの毎晩の柔道で、三月頃にはすっかり体をこわし、腕の上げ下げもできない位になり、体も六キロ程やせ江原塾頭宅で二ヶ月位休養させて頂きました。」^{注730}

剣道部と異なり夜の稽古であった。それにしても中垣はなぜこのように頑張ったのであろうか。秀才であった彼は、塾頭や同塾生の前で、自ら次のように宣言し、理想の建大生たらんと自己を追い込んだからであった。

「当時『建国大学如何にあるべきか』について教員もはっきり指標を示し得ないで、よく朝礼でも小生に指名されたので、私は、『建大は内地の大学では養成することの出来ない人材を育てようとしているのだ。学問は帝大以上、又柔道剣道は武専以上、少なくとも三段以上、軍事訓練は陸大以上、語学は外語大以上。そして五族の他民族との生活を六年間やることは、世界歴史上の壮大な実験だから、成功すればよし、若し失敗しても世界に対して意義があるのだ』という意味の事をいいました。

二期生が入って来た時に『共に道義世界を創ろう』と一期生を代表して挨拶したので、出来なくても努力しようと思いました。（中略）結局、都会育ち（神戸一中卒）のくせに自ら

^{注727} 同上。

^{注728} 安田文夫書簡(1994年2月24日)。なお、安田文夫氏は塾で隣にいてその話を聞いたという。

^{注729} 作田良夫、六塾亡友録、建国大学第一期生会(1989)歓喜嶺(建国大学第一期生文集)、非売品、p.41。

^{注730} 前掲、中垣芳治書簡（1991年6月1日）

実践し範を示すべしといふ気持ちで頑張ったが為に心身疲労し、徳島（母のさと）へ行って養生しました。^{注731}」

「学問は帝大以上、武道は武専以上」。中垣のこれらの言葉と精神は、一期生の心意気を示したものであることを越えて、建大の教育が目指す標語のようなものとして後輩たちに受け継がれていった。教官ではなく、学生が「民族協和」問題を、学問を、そして武道などの訓練を自らの問題として引き受け、建大を創っていた実態の一端を見ることができるであろう。

(3) 各期の柔道部員

二期生近藤多一郎は、筆者宛書簡^{注732}の中で、柔道部が「自由主義的」であったと記している。仮にそのような部を考えると、部員を特定することには無理な面もある。途中で止めたもの等の扱いが決められないからである。そこで、ここでは概ね大学時代を通して課外で活躍した一期生中垣芳治、二期生近藤多一郎と水野潔、三期生平田久雄、新三期生藤原敬司、四期生桑原亮人、五期生植弘親民の記憶を総合して記してみたい。

< 一期生 >

一期生の所謂主将格は高橋武雄であった。これは関係者の一致した評価といえる。高橋は山形県出身の大柄な体躯の豪傑で、酒田中学（現酒田東高校）で柔道を学んだ。同級生・五十嵐弘によると^{注733}次のようであった。

「一年生の時には柔道の師範はいなく、農業の村上ヨウイチ(百歳を越えて健在)が指導した。2年生頃に高等師範学校出身の林降男五段が着任し、熱心に指導を開始し、昼休みにも稽古をするほどであった。稽古環境もよかった。校内には大地主の本間家が寄付した明道館という立派な武道場があった。優れた教育環境の中で上達した生徒らは強くなっていった。柔道部のある学校は酒田市内では酒田中学だけで、近隣では鶴岡市の鶴岡中学、鶴岡工業、藤島市の庄内農学校であった。酒田中学はこれらの学校を越えて県内でも無敵、秋田高専や弘前高校に試合を申し込んでも勝つほどとなった。自分等の学年が四年生であった1936年に東北大会（於仙台）において遂に優勝の栄光を勝ち取った。その時の正選手は五年生、オオタケ・ヤスオ、高橋ゼンノスケ(190cm, 戦死)、四年生、五十嵐弘、佐藤ユウジ(高師進学, 戦後病没)、高橋武雄の五人であった。この時の写真は今も所持している。翌1937年には全国大会（明治神宮大会, 於慶応義塾大）に出場豊島師範と覇を競って準優勝となった。

酒田中学は進学校であり、柔道部も文武両道を目指していた。高橋は180cm程度。跳腰、払腰が得意。さっぱりしたいい男で、古武士的風格があった。兄のキチャは東京農大に進学した。」

一期生北直幸は、高橋が柔道四段で一番強かったと語り、^{注734}近藤多一郎は、高橋は卒業時

^{注731} 近藤多一郎書簡（1991年1月24日）に「留年した」とある。

^{注732} 前掲、近藤多一郎書簡「志々田先生に対する回答」（1989年12月）

^{注733} 五十嵐弘聞き取り調査（2003年3月6日、電話）

^{注734} 歓喜嶺訪中団随行聞き取り調査（1992年9月16日）

に五段であったと記している。^{注735} またその人柄は「西郷隆盛と広瀬中佐をつき交ぜたよう」^{注736} であったという。水野によれば跳腰が得意であった。中垣書簡で見たように入学当初は必ずしも柔道の練習に熱心ではなかったようだが、その実力と豪放磊落な人柄から間もなく部の中心になったのであろう。二期生藤井歓一塾生日誌は、「高橋さんの柔道は胸のすく如く素晴らしきもの也」^{注737} と賛嘆している。

高橋は柔道一筋の男として考えられているが、彼もまた満洲国の将来と理想に悩める青年であった。2塾の学生であった高橋は、陸士出身で石原莞爾の思想に近い塾頭江原の影響を受け、1939年の塾頭騒動で江原が退職することになった際には、「先生の行く所はどこでも行くと言って泣いた」^{注738} といわれる。高橋が2年生の時に着任した柔道教官萬田は、既述のように石原莞爾に心酔した福島の人でその思想は石原の影響下にあったと思われる。一期生尾崎照夫及び三期生上村畔梧によれば、^{注739} 高橋は石原莞爾と同じ山形県の出身であることもあり彼に私淑しており、万田も高橋を可愛がったという。中学以来柔道一筋できた高橋には、江原や萬田らの影響、そして彼が関心を寄せた東亜連盟の思想は、建大で俊英に伍していくためには力強い拠りではなかったろうか。^{注740} 高橋は柔道部の後輩・五期生主将の植弘親民をして、「高橋主将の『日本民族は満洲国の指導民族と自惚れているが、むしろ責任民族たるの自覚を持って欲しい』といわれた言葉は、今でも忘れることができない」^{注741} と記させているが、この頃の高橋は彼が没後に残したノート類^{注742} を見ると中国の歴史、北一輝の思想、吉田松陰の思想、東亜連盟思想などを黙々と学習しており、植弘を驚かすに足る研鑽をしていたことが窺える。

尾崎照夫。尾崎は筆者宛書簡（回答文）で、「初段で入部、昭和15年から一年毎に一段昇段し、卒業時4段で、マネージャーをし」^{注743} たといわれる。近藤多一郎によると、一本背負いが得意で、「左半身に組んだ変形で、やり難い相手でした」^{注744} という。

中垣芳治。中垣は先の書簡で後期以後の活躍について次のように記している。「後期に入ってから余り無理をしないようにと用心し乍ら柔道をやり、新京での昇段試合で試験の二段二人を投げ建大の高世俊〔二期生、改姓し蔡公頌〕と引分けて三段を貰いました。高君も嵐田万寿夫〔二期生〕君も一緒に三段になりました」という。

^{注735} 近藤多一郎書簡（1991年1月24日）

^{注736} 同上。

^{注737} 藤井歓一塾生日誌（1939年5月27日）

^{注738} 藤井歓一塾生日誌（1942年8月2日）

^{注739} 尾崎照夫聞き取り調査（1993年10月31日、電話）、及び上村畔梧聞き取り調査（1993年11月3日、電話）

^{注740} 建大創設に尽力した筒井清彦は一期生岩淵克郎に、入学試験銓衡に関する内幕を、「お前と高橋は最後までもめたな。何分二人とも学科試験の成績が悪い。しかし推薦者の評価には魅力的なことが書いてある。学力よりも人物本位、何より気骨のある奴を求めていた我々は、なんとかして一次試験に合格させて、二次の人物考査でよく見たいものだと思った」と語ったという。岩淵克郎、雪は降る 降り来るは恵みのパンなり、建国大学第一期生会(1989)歓喜嶺(建国大学第一期生文集)、非売品、pp.4-5.

^{注741} 植弘親民書簡（1991年2月1日）

^{注742} 高橋武志聞き取り調査（2003年3月1日。於高橋武志宅）

^{注743} 尾崎照夫書簡（1990年12月1日）

^{注744} 前掲、近藤多一郎書簡（1991年1月24日）

清田（改姓し高木）友一。作田良夫の「六塾亡友録」によると、清田は北九州八女中学出身。「小柄だが敏捷で生一本。思いこんだら梃子でも動かなかった。議論より実行。実行となったらとことん手を抜かない男である。（中略）彼は柔道にも打ちこんだ。神武殿の対外試合に、高橋、水野、上村、藤原、尾崎、清田と出場。彼は小兵ながら攻撃的な、精悍な技を見せてくれたのを覚えている。勿論優勝の栄冠をかち取ったのであった。思えば現実の矛盾の中に生き、悩んだ彼にとり、柔道は一つのはけ口であったのではないか。」^{注745} という。

近藤多一郎によると、外に広瀬信喜（三段）、柿田一俊、金三守も前期の三年間はよくでていたといい、広瀬信喜について、作田良夫は「粘っこい柔らかい柔道で、強さを感じないが、その中に一本取られているという風であった」という。植弘談によると劉興潭（改姓し劉之謙）も活動していたという。また、始めの一年間は小倉久弥も参加したという。

<二期生>

水野潔（主将格。福島中。入学時三段）、近藤多一郎（府立市岡中。入学時二段卒業時三段）、嵐田満寿夫、水島利喜男、中国系では高世俊が主要メンバーだった。準常連組は、尾野定司、伊中卓郎、朝鮮系の呉寛用、金泳祿、洪鉄熹、洪椿植、蒙古系ではジャルガラ、トガルジャブ（いずれも有段者になったと思われる）、ゴルロタイ、露系（ロシア人）ではペトロフがいた。^{注746}

日本人学生から見た蒙系、露系の学生の体力・腕力の強さについては、「一般的に、温容そのものの蒙系学生が、柔道で抑え込みに入っても、直ぐ引っくり返す馬力の物凄さにも恐れ入ったし、丸太棒のような腕を突張って、技をかけさせなかった露系学生の力の強さは、鋼鉄のように感じられた」といわれる。^{注747}

<三期生>

三期の主将格は上村畔梧といわれる。身長は180cmを超え、体重90kg以上、入学時に三段であった。四期生桑原亮人によると、^{注748} 平田久雄も卒業まで続けて三段を取得している。他には松村邦雄、益崎信重、大谷富一、益村春蔵、相沢博、白系露人では長身のモナステルネイも仲間であった。桑原は、中国人は記憶にないが、蒙古系ではダシニマが強かったという。近藤によると他には、常連組で相沢博、崔日竜、準常連組で「力の強い」エリデンビリカ（蒙系。ウルトンビリカともいう）がいたという。七期の片桐松薫によると、^{注749} 1945年の稽古にはモナステルネイ、張天福が養正堂に姿を見せていたといい、

平田久雄の回想を聞いてみよう。

「柔道部員でもあった私は食堂の真向こうの武道場、養正堂にここ[炊事委員のための和室]から通った。抜群の体格と膂力に恵まれた同じ部員の上村君と違って非力だった私は並以上の稽古によるテクニクに頼らざるを得ず、おかげでクタクタになって煉瓦道を這うようにして引揚げたものである。」^{注750}

^{注745} 前掲書、歡喜嶺(建国大学第一期生文集), pp.42-43.

^{注746} 前掲、近藤多一郎書簡(1991年1月24日)

^{注747} 吉田泰三氏(五期生), 心の宝石箱, 前掲書, 歡喜嶺 遙か(下巻), pp.201 - 202.

^{注748} 桑原亮人聞き取り調査(19

^{注749} 片桐松薫書簡(1993年8月14日)

^{注750} 平田久雄, 珠玉の思い出, 前掲書, 歡喜嶺 遙か(下巻), p.153.

<新制三期> 主将格は藤原敬司（秋田中学。卒業時四段）。藤原は秋田中学柔道部で3年生から選手であった。同校柔道部はその時全国大会の準決勝で新潟中学と当たって敗退。5年の時は決勝で豊島師範と当たって敗退し準優勝だったという。^{注751} 福谷宏郎談によると、この期は藤原、福谷宏郎、高橋格司の三人が中心で卒業時まで活動した。外には、阿部康男（角力部にも顔を出す）、関機植（朝鮮系）^{注752} が時々参加したという。

藤原は入学・入部と同時に正選手の座を得、先鋒で出場、新江市、南満、全満の全ての学生大会に一本勝ちしたという。^{注753} 彼の加入によって柔道部は最強の布陣となり、よく言われた「全満に覇を唱える」黄金時代を現出することとなった。

「私が入学した昭和16年6月から学徒出陣の昭和18年12月迄は、常に私が先鋒として勝ち、次鋒の上村さんが豪快に、中堅の水野さんが円熟した技で、副将の近藤さん（又は尾崎さん）が重厚に支え、最後は大將の高橋さんが貫禄でしめくくるというパターンで学生の大会は全て優勝した筈です。」^{注754}

<四期生>

主将格は「鋼のように強かった」（鈴木博談^{注755}）といわれる山田俊一。鈴木博談によると、鈴木博、桑原亮人、鶴身静雄、長谷部新一郎、高橋淳夫、朴三鐘（神戸二中）らがメンバーだった。大野哲次は加えて、^{注756} 森崎湊、国広勝義、田之頭博之を挙げている。

<五期生>

主将格は植弘親民。大野哲次によると、^{注757} 「植弘君は大分県中津中学の主将で三段、西日本大会やその他の大会で活躍勇名を馳せていました」という。清水徹も入学当時三段で共に強豪であった。植弘によると、^{注758} 清水徹、阿部正の名が挙げられている。外には田中浩一郎（当時二段）、阿部正、浅田甲子郎、石井玄がいた。田中浩一郎は記している。

「中学時代は柔道部に属していたので、当然のことように入部した。当時二段の力はあったが、同期には植弘、清水両人の三段がおり、先輩には五段の人もあり、全満一の部だとかきかされて驚いたが、高い目標を与えられたようで嬉しかった。/寒稽古のころであったかと思うが、朝、放課後、夕食後と、一日三回も練習したものだ。身体の大きな他民族を投げ飛ばす快感で悦に入ったこともあるが、間もなく心身の疲労で痩せてきたなどで尻すぼみになった。」^{注759}

<六期生>

^{注751} 前掲、歓喜嶺訪中団随行聞き取り調査（1992年9月21日）

^{注752} 機植の機字は当て字。正しい字は扁が未の横棒を一本増やした特殊な字であるため使用したワープロ辞書に掲載されていないことによる。

^{注753} 前掲、藤原敬司書簡（2003年4月16日）添付資料。

^{注754} 前掲、藤原敬司書簡（2003年4月16日）

^{注755} 鈴木博氏への聞き取りは取材日の記録を止めないままメモが残され拙稿に引用された。前掲、志々田文明(1992)建国大学における武道・課外活動 5 (1) : 110.

^{注756} 大野哲次書簡 (1993年10月15日)

^{注757} 同上.

^{注758} 前掲、植弘親民書簡（1991年2月1日）

^{注759} 田中浩一郎、わが父校、前掲書、歓喜嶺 遙か(下巻), p.129.

島田成男（県立福島中学）、^{注760} 木村貴男（奈良県畝傍中）が強豪であった。^{注761} 大野哲次によると、^{注762} 他に平本勇助、唐梨子清がいたように思うがはっきりしないという。

島田成男書簡によると、^{注763} 島田は建大入学時に三段、身長165センチ、体重71キロであったという。また中学ではクラスの級長、柔道部の主将と、文武兼備の学生であった。

七期の片桐松薫によれば、^{注764} 「島田成男氏が断然強く歯が立たなかった」という。木村については同期生成田亜季夫は、「九塾では木村の印象が鮮やかだ。おれも柔道をやったが、何て強いやつがいるもんだと、びっくりした。まるで歯がたたなかった。」^{注765} と記している。

<七期生>

片桐松薫、^{注766} 勝村禎夫（三段）、山本福雄、古島昭。

片桐松薫書簡によると、片桐は、小学校で相撲部主将。県立和歌山商業で柔道部。三年生の時に二段。四年生の時に和歌山経済専門学校創立二十周年記念中等学校柔道大会で団体戦優勝、個人戦第三位。1945年2月、建大前期二年に入学し、三塾の中島（現姓伊東）三郎（柔道）塾に入った。他に何名か有段者がいたという。^{注767} なお、古島昭は兵庫県立豊岡中学出身。

<八期生> この期は塩月玄巳が確認される。^{注768}

(4) 部風

一期生尾崎照夫は次のように記している。

「部員は自由に練習に参加し、出席を取るようなこともなく、出欠は自由で、続けて出席参加しているものが、部員ということになっていたようです。終わると、皆で雑巾がけをしたり、先生と一緒に風呂に入り、家族的雰囲気をもっていました。」^{注769}

同様の指摘は、近藤多一郎、上村畔梧、^{注770} 鈴木博からもあった。鈴木博によれば、「柔道部にはいわゆる主将のような序列はなかったが、対外試合の時などには大将などが決められた。部では全学を通じて一番強い人が指導をした。部員でなくても参加者は拒まなかった」

^{注760} 島田成男氏は脳裏に残ることとして、「大学対抗柔道試合で、惜しくも二位となり、優勝旗を返還して終わったこと等である」と記している。島田成男、歡喜嶺の友、前掲書、歡喜嶺 遙か(下巻), p.118.

^{注761} 前掲、小山公一郎、亡き同期の友を偲ぶ、前掲書、歡喜嶺 遙か(下巻), p.86.

^{注762} 前掲、大野哲次書簡(1993年10月15日)

^{注763} 島田成男書簡(1993年9月29日)

^{注764} 片桐松薫書簡(1993年8月14日)

^{注765} 曙きざす(六期生文集), 1986, 非売品, p.76.

^{注766} 大野哲次氏の志々田宛葉書(1992年5月13日)に「七期に片桐松薫君(当時三段和歌山市出)が居て終戦間際新京防衛の配置につくまで道場で柔道をやっていた事を思い出します」とある。

^{注767} 片桐松薫書簡(1993年8月14日)

^{注768} 「日本人は柔道や剣道に打ち込んでいた。私は講道館の柔道初段だったので、養正堂の道場で連日柔道の練習に励んでいた。」塩月玄巳、わが人生の道すがら、前掲書、歡喜嶺 遙か(下巻), p.353.

^{注769} 前掲、尾崎照夫書簡(1990年12月1日付)

^{注770} 前掲、上村畔梧聞き取り調査(1993年11月3日、電話)

注771 という。

二期生近藤多一郎の回答文には次のようにある。

「大方の傾向として有段者は中学で五年間柔道部員生活を送って来ているので、自然と柔道部に籍を置くのですが、途中で他の部へ行ったり、勉学の念黙し難く柔道部から足が遠のく者も珍しい事ではありませんでした。物に譬えれば彗星の如き存在でしょうか。(中略)柔道部という彗星の本体は確かにありました。そうかと言って、尾の方は部員ではないとは言えません。立派に彗星の一部です。当人が部員であったという限り立派な部員です。勿論、規約会員の類は無かったし、出席簿も無かったように記憶しています。二期生卒業アルバムを見ても、部員であったと思う学友が顔を見せていませんし、これが部員だったかなあと首を傾げたくなる学友が、柔道衣を着てすました顔をして写っています。」^{注772}

さらに、三期生上村畔梧は聞き取り調査において、^{注773}「建大には柔道部といったものはなかった。従ってキャプテンといったものはいなかった。武道は必修であったので、好きな者が集まって課外でやったのである」という趣旨のことを述べられたが、これは、所謂拘束性の強い大学柔道部とは異質な柔道部であったという主旨であると思われる。

ところが一方、四期の桑原亮人は、「毎日稽古に来ていた訳ではない」と緩やかな結合のニュアンスを出しつつも「自分としては柔道部員の意識はあった」と述懐している。^{注774}

また、植弘親民の書簡には次のようにある。

「私共五期が入学した当時、柔道部は厳然として存在しており、少なくとも私は、同期で中学時代三段の允許を受けた清水徹君と共に確かに入部申込みをした覚えがございます。/[志々田]先生も御高承のことと存じますが、柔道から合気道に転換された富木先生を筆頭に、萬田、八木、中島、大野の各先生が部長、監督、コーチの形で親しく御指導して下さいましたし、一期の高橋五段が主将として部員を統率して居られ、対外試合にも、高橋主将のほか水野、近藤(共に二期)、上村(三期)、藤原(新三期)の四選手が正選手として出場され、当時の満洲国内で殆ど敵なしの強豪チームであり、私共後輩は之れを大変誇りにしておりました。」

さらに植弘は「養正堂の思い出」の中で、柔道部を次のように記している。

「当時[1943年]の柔道部は、正に黄金時代ともいうべく、高橋主将(一期)、近藤、水野(二期)、上村(三期)、藤原(新三期)の正選手を中心に、尾崎、劉興潭(一期)、嵐田、伊中、高世俊、水島(二期)、平田、モナステルネイ(三期)、高橋(新三期)、桑原、鈴木、長谷部、朴三鐘、山田(四期)の諸先輩が健在で、指導教官も萬田先生はじめ、門野、八木、中島(現伊東)、大野の各先生が武専仕込みの猛練習を毎日積んでいた。」^{注775}

植弘はまた、筆者に対しても次の見解を示して、その厳しい側面を強調している。

^{注771} 鈴木博聞き取り調査(2003年6月16日、電話)。この調査は以前に行ったものであるが年月日の記録を散逸したため再度鈴木氏に確認した。

^{注772} 前掲、近藤多一郎書簡「志々田先生に対する回答」(1990年12月)

^{注773} 前掲、志々田文明(1992)建国大学における武道・課外活動5(1):111.1992年頃、筆者は上村畔梧聞き取り調査(電話)を実施し、内容は左の論文に引用したが年月日の記録をし忘れたため年月日不詳。

^{注774} 同上論文。桑原亮人聞き取り調査の年月日についても同上。

^{注775} 植弘親民、養正堂の思い出、前掲書、歡喜嶺 遙か(上巻)、p.349.

「課外として毎日部の練習が行われた。その概要は、私が旧制中学校時代に鍛えられた部の練習（お陰で五年生で三段の允許を受けた）や、昭和十九年十月に第二次学徒出陣し、復員後転学した京都大学の相撲部（中略）の練習等と大差ないと考えるが如何なものであろうか。」^{注776}

このような主張の食い違いは、植弘の柔道部に対する真摯さ、コミットメントの深さによるものといえよう。OB、先輩らの後輩への叱咤激励の強さもその思いをかきたてたのかも知れない。植弘は、「オール新京大学大会では優勝することができなかった。すでに南嶺の部隊に入隊中の近藤先輩が応援にこられ、試合のあと、神武殿裏で厳しく注意を受けたことが思い出される」^{注777}と記し、同じく五期の田中浩一郎も、「五月ごろの新京市内の神武殿での大会では、足がふらついていて、私たち下級組は市内の中学組に負け、振武殿の地下室で水野さん（？）ほかの先輩から気合いを入れられた。今ではこれも懐しい思い出である」^{注778}と記しているからである。

柔道に打ち込んだ学生も、絶えず柔道だけでよいのかという悩みの中にいた。四期生鈴木博は当時の建大日記に記す。

「鈴木は結局今日からまた柔道の稽古に集中している。柔道に専念してみればまた書物に没頭しないでよいのか・・・との呵責が襲うこと必定であるにしても・・・、当面鈴木は柔道部の部員に所属し部員として果たすべき行があるのではないか。考えても青春の情熱を柔道行に捧げようとする根拠は、この義務感あたりに求めざるを得ない。我ながらプアーな青春だとは思いますが、与えられた課題に情熱を捧げる以外に生き方はないではないか・・・。」（1943年8月19日・水）^{注779}

悩みは教員もまた同じであり、武道を行う意義、その正当性を主張することに迫られていた。四期生主将格の山田俊一は記す。

「練習は好きな者同士でやっているからかなり厳しかった。しかし、鉄拳制裁を受けたことはない。練習に出れないために圧迫感を感じることもなかった。萬田先生以下の先生も、柔道部の在り方を武専などと比較してとやかく指示するといったことはなかった。その理由は、建大は確かに農訓等と並んで武道を重視した。しかし武道の技術そのものを養成するよりも、指導者としての精神的なことを準備するという教育だった。萬田先生は協和会にも理解を示していたと思う。皆が建国に参加しているという感じの中で、萬田先生もそうした武道の位置付けをしていたのではないか。」^{注780}

萬田は部員に東亜連盟思想を鼓吹するようなことはなかった。それは大学においても、東亜連盟を敵視する政治状況からも、また教師としてもタブーであったからであろう。教師そして学生みんなが悩みながら、柔道における当面の課題（試合や稽古）に打ち込んでいったと思われる。

^{注776} 前掲、植弘親民書簡（1991年2月1日）

^{注777} 前掲、植弘親民、養正堂の思い出、前掲書、歡喜嶺 遙か(上巻), p.350. なお、同趣旨の思い出は同上植弘書簡にも記されている。

^{注778} 前掲、田中浩一郎、わが父校、前掲書、歡喜嶺 遙か(下巻), p.129.

^{注779} 建国大学四期生会誌(2000), 32: 52.

^{注780} 山田俊一聞き取り調査（1993年11月3日、電話）

近藤 多一郎が当時の若い教員から「面白おかしく、なつかしさを交えて」聞かされたという武専の伝統とは、「稽古が激しくなると血の小便が出る、階段は四つ這いで昇る程疲労困憊する、一時間も二時間も板間に正座させられて先輩の説教を聞く、鉄拳制裁がある。しかしその間に渾然一体となった親密感が湧然として湧いてくる。それがまた下級生に伝統として残っていく」というものであったという。しかし近藤は続けて、「どうも建大は、無意識のうちにそれとは正反対の伝統を創成しつつあったようです」と記す。そして建大は武専とはかなり異なった面を持っていたとしている。^{注781} このことは、武専が武道の教員を養成する専門学校であったのに対して、建大が満洲国の高級官吏や民間の指導者の養成を狙いとしたことからくるものであろう。

建大の部活動を近藤はまた次のように評している。

「学生も課外の運動部生活を正課の延長として受け取っていました。誰もが正課でいろんなことを体認していますから後は各人の好みに応じて追加体認をしていた事になります。自然、違った運動部の間では排他性はありませんし、一夫多妻性が極くスムーズに実現されていたように思います。私のように柔道部一本槍で通して来た者でも、稽古を早く済ませて柔道衣の上に防具をつけ、隣の剣道場で二、三本稽古をつけて貰ったり、非常勤の和久田先生が来校された時には土俵に駆り出されて、渾身の力で押せども突けども、俵の上の先生の踵がピクとも動かぬのに感嘆していました。何に発心したのか一ヶ月柔道部の稽古に参加し、翌月からは夜間開かれていた講孟筭記のゼミに席を連ねたり、合気部(マ)に出席したりする具合です。今でいうフレックスタイム(?)出勤制度でしたし、先生方もそれを当然視され、苦情もありませんでした。建大に対して第三者が懐くであろうイメージと正反対に、自由主義的であり、学生の個性伸長が尊重された面もありました。」^{注782}

しかし六期生島田成男の時代は全く別の様相が見えている。彼は、^{注783}「同期生の中にも昭和19年秋頃から次々と入隊者が出」、それ以後「大学に出たり入ったりの状態」だったといい、「従って『柔道部』としてのまとまった活動は記憶にありません。私等が入隊する時も、特に壮行会もなく、個々に新京神社に集合した」というのである。続けて、閉学の年、1945年の柔道部と建大の様子を、2月入学の七期生片桐松薫書簡^{注784}で見よう。

「建大では学問と同時に農事、武道、軍事の訓練を重んじたので、学業の課外活動として柔道部に入部したという意識はなかった。事実、柔道部として主将やマネージャーと云う訳の学生は居なかったと思う。日課として定められた講義、農作業、軍事教練が終われば、自然に養正堂に足を運んで稽古した。何かの事情で稽古に行けなくとも、サボったと云う後ろめたさの覚えはない。建大生は自分の行動に責任をもつものと教えられた、それを自覚していたと思う。道場には富木謙治先生、八木正弘先生、中島三郎先生がおられ、後に日本での療養から戻られた大野哲次先生が稽古をつけられた。」

ここに萬田の姿が見えないが、萬田は片桐が入学する前に既に応召されていた。

^{注781} 前掲、近藤多一郎書簡「志々田先生に対する回答」(1990年12月)

^{注782} 同上。

^{注783} 前掲、島田成男書簡(1993年9月29日)

^{注784} 前掲、片桐松薫書簡(1993年8月14日)

5月2日、開学記念日に張景恵総長の下で模範試合が行われた。片桐は強豪勝村に勝つことが出来たという。しかしこの月に入ると大正15年生まれの日系学生は次々と入隊していき、「やがて八木先生も、中島先生も応召し、三塾塾頭は大野先生となった。そんな状況下で柔道の練習はどうなっていたのか、何時練習を休止したのか、全く記憶に止めていない」と記している。

片桐は、自らの時代の建大柔道部を次のように回顧する。^{注785}

「何しろ、私達が入学当時の日系学生の上級生は一部の五期生（早生れ）と六期生のみで、それもほとんど5月に入り入隊したから私達が建大柔道部の本来の在り方を継承したかどうか判りません。」

「私が知っている日系以外の部員は三期生の張点福、モナステルヌイ両先輩だけです。少なくとも私と同期の七期生の満系学生と一緒に柔道をした者は一人もいなかったように思います。/従って異民族の部員が満洲国の実態や中国の将来について、どのような考えを持っていたかは知りません。また彼らはおくびにも出ませんでした。」

また、同じく七期生古島昭は記している。^{注786}

「異民族の学友あるいは先輩との練習もよく行いましたが、相手はその都度替わっていて特定していませんでした。これは課外の練習が義務づけされたものでなかったことや、門戸が広く開放されていて多くの学生が随意に参加可能であったためではなかったかと思われました。そんなことで異民族の学友と深く人間的に関わって話し合ったこともなく、彼らの悩みや思想傾向また柔道に関心を持つに到った理由など知り得ませんでした。」

最後に教員大野哲次の言を紹介すると、^{注787}「考えようによっては合宿生活ですから本人の自主性にまかせていたように思います」という。

以上と前項の部員メンバーを合わせて総括すれば、

a. 建大柔道部は建大の使命をよく理解した萬田ら柔道指導者によって「来る者は拒まず、去る者は追わず」式の自由主義的雰囲気の中で、しっかりした稽古がなされた。

b. たまたま優秀な実績ある学生が集まり優れた結果を見たことによって、五期生植弘らをして強い誇りを持たせ、勝利追求への結束力の強さを部員の矜持として持つ強力な運動部となったことがいえよう。

c. 柔道部は、強く、厳しく、自由で思いやりがあり、悩みつつも結束の固い部であり、一言に集約すれば「自主・自律」の部といえる。片桐の書簡からそうした性格は最後まで貫かれたと判断される。

それに学生らの稽古への真剣な取り組みと福島が説き萬田が実践した「闘志」の強調とを加味すれば「自主・自律・闘志」が柔道部の特徴を表すキーワードといえよう。

d. 剣道と比較した場合、日本人以外メンバーの民族的多様性が比較的顕著といえる。露系、蒙古系など日本人に比して体格体力がある者にとっては、比較的参加しやすいスポーツ

^{注785} 片桐松薫書簡（1993年9月25日）

^{注786} 古島昭書簡（1993年9月26日）

^{注787} 前掲、大野哲次書簡（1993年10月15日）

と感じられたことなどが考えられるが、残念ながらその原因を述べるだけの聞き取り調査をすることはできなかった。

(5) 試合

下記のリストは、『建国大学年表』に記載された試合記録に関する柔道関係記事を参考に、塾生日誌に当たってより詳細に引用したものである。

・1939年9月24日：

「全満の武道大会が大同公園[牡丹公園の誤りか]の武道場で開かる。之のお手伝いをする為に各塾より四名出る。」（出典：藤森孝一塾生日誌）

・1940年9月20日（金）：

「午後、武道試合見学。水野出場。五段を投げ飛ばし惜しくも奉天代表に敗る。試合上手の相手なりと。」（出典：藤森孝一塾生日誌）

・1940年11月23日：

「神武殿落成式に全員参加」（出典：藤森孝一塾生日誌）「神武殿（牡丹公園）道場開きに全学生参列」（『建国大学年表』p.271. 出典記載なし）

・1941年2月9日：

「三段以下の全満柔道団体試合が神武殿にて行はる。建大も出る。見学に行かうと思ひながら、ずるずると昼になり何もせず午後を終わり一日を過ごす。電話で聞けば優勝戦で医大に敗れたとの事。選手らの述懐を聞けば試合馴れせぬ為らしい。」^{注788}（出典：藤森孝一塾生日誌）

二期の近藤多一郎は、1941年2月9日の大会は、満鉄、鞍山製鉄所を含んだ大会と推定している。^{注789}

・1941年4月13日：

「柔道優勝。水島負傷し、相当痛むらしく塾へ来て寝ることとする。」（出典：二期生週番日誌）

「神武殿にて柔道試合大会において建大組優勝」（『建国大学年表』p.293. 出典記載なし）

近藤多一郎は、4月13日の大会は訪日記念大会と推定し、^{注790}新三期の藤原敬司談では、この大会は新京の学生大会、この大会では文句なしに優勝したという。なお、塚田恒徳は、「二時半神武殿に柔道の試合を見にゆく。建大義勇軍優勝。試合を見ていると腕がむずむずしてくる。」と記している。^{注791}

・1941年5月18日：

^{注788} 『建国大学年表』p.283の記載には段位限定の試合だったことが記載されていない。

^{注789} 前掲、近藤多一郎書簡（1991年1月24日）

^{注790} 同上。

^{注791} 塚田恒徳、建大生としてどう生きたか、前掲書、歡喜嶺 遙か(上巻)、p.286. なお、建大からは義軍と勇軍の二組が出場しこの二組が決勝戦で対戦したという。

「神武殿における武道試合にて本学柔道部優勝」（『建国大学年表』p.299. 出典記載なし）

「新京武道大会。剣道は二回戦に東辺道に破れたれども柔道は義軍勇軍とも決勝戦に残る。午後五時神武殿を出づ。雨ふる。」（出典：藤森孝一塾生日誌）

『建国大学年表』編者湯治万蔵は、藤森日誌の「義軍勇軍とも決勝戦に残る」という記述から建大柔道部優勝と判断したと思われる。近藤多一郎は、5月18日は全満大学大会と推定している。^{注792}

・1942年5月25日：

「訪日宣詔記念新京武道大会/柔道（優勝）剣道（敗れる）」（『建国大学年表』p.351. 出典：小林金三手帳）

・1942年6月7日(日)：

「午前九時より神武殿において、全満大学武道大会が開催され、柔道部の先輩が出場するので応援に行く。建大柔道部は評判どおり無敵に強い。上村、藤原先輩は全勝だった！内股の成功率が最も高い事を発見した。」（鈴木博建大日記^{注793}）

「無敵に強い」という言葉から優勝と思われるが、他に資料がなく断定できない。

・1943年3月10日（水）：

第三回全満南北対抗武道大会参加。^{注794}「顔と指先が感覚がなくなるくらい寒い。8時50分より神武殿にて柔道見学。建大選士は断然優れていてうれしかった。」（山下光一日記^{注795}）

・1943年4月4日：

第1回武道祭参加、在新京の学校会社関係対抗試合では柔道が優勝^{注796}

・1943年5月2日：

「午後、神武殿で全満武道大会。柔道優勝。銃剣道準優勝」（『建国大学年表』p.406. 出典記載なし） 「午後からは、神武殿で全満柔道大会が開催された。建大はここでも優勝し全満一の折り紙がついた。先輩の家でスキヤキに腹を満たし柔道部員一同『我勝てり』の歡喜に酔った。」（鈴木博建大日記）

近藤多一郎は、この大会を全満大学大会と推定する^{注797}が、上記鈴木博建大日記から判断して、満洲選手権の規模の大会であろう。植弘親民はこの大会の二ヶ月前の同年3月に入学、早速柔道部に入った。当時の柔道部の強豪ぶりを、「当初は、初段の先輩にもいい加減にあしらわれ、『それでも三段か』と冷やかされていたが、数か月後には概ね対等になった」と記している。彼はまた、「早朝、午後と休む暇もないほど、毎日毎日、練習に明け暮れ」^{注798}したという。1943年は建大に1年から6年までが揃った年であり、正に、植弘がいうところの

^{注792} 前掲、近藤多一郎書簡（1991年1月24日）

^{注793} 鈴木博建大日記。建国大学四期生会誌(1996), 28: 40. 本日記は1942年と1943年の前期課程時代のものを摘録して左の会誌に四回にわたって連載された。

^{注794} 建国大学研究院月報(No.30), 1943年6月25日

^{注795} 山下光一, 康徳当用日記, 前掲書, 歡喜嶺 遙か(上巻), p.317.

^{注796} 建国大学研究院月報(No.30), 1943年6月25日

^{注797} 前掲、近藤多一郎書簡（1991年1月24日）

^{注798} 前掲、植弘親民, 養正堂の思い出, 前掲書, 歡喜嶺 遙か(上巻), p.349.

「柔道部黄金時代」であったと思われる。

- ・1943年5月23日：5大学試合(建大, 工大, 法大, 医大, 獣医大)に[柔剣道共に?]優勝^{注799}
- ・1943年5月30日：忠霊塔春季大祭奉納武道大会には柔剣道共に優勝^{注800}

さて、その黄金の純度について多少付言しておこう。二期生柔道部の椿武は、「柔道部については天下に名をとどろかしており、当たる所敵なし、殆ど出場5人が全勝で対外試合を行っていました。当時満洲では満洲医大、内地では拓大が強かったのですが、私の記憶では常に勝っていたと思っています。高橋さんを初め、全員一本勝ちで、現在の柔道部国際試合の見苦しい判定勝負は全くなくそれは見事なものでした」と記し、^{注801} 新三期の藤原敬司は、「高橋、水野、近藤、尾崎、上村の先輩と自分が出場した団体戦では負けた記憶はない」^{注802}と謙虚な口調で語っている。

しかし、隔離された「平和」な世界であった建大も、この頃になると変化が実感として感じられるようになっていた。柔道部員鈴木博の日記を見よう。

「軍事訓練、本日より日系学生と満系学生は別々に訓練を受ける事になった。教官からの理由についての説明は何もなかった。」(鈴木博建大日記。1943年1月26日・火)

「最近の授業は、全く様変わりして来ている！最高学府に必須なる学術科目よりはるかに割り当て時間が多くなって来ている武訓、軍訓に反感的なものを感じる日頃の心の露呈であろうか、ともかく理屈なしに行きたくなく床を出なかった。」(鈴木博建大日記。1943年2月24日・水)

「最近強く感じる事は、我々の生活規律が益々厳しくなって来ている事(例えば従来ない事だった校内において学生間で軍隊式敬礼を交わしあえという如き達しが出される事)や(下略)。この一年間に諸般の状況が不気味に地滑りして居るように感じられてならない。」(鈴木博建大日記。1943年4月7日・水)

事実、時代は急速に変化していた。1943年秋になると学徒徴集猶予の廃止、臨時徴兵検査が行われ、12月1日には4期生以上が入営(一部残留)していく。

植弘はその後の様子を、「四期生以上の主力も殆んど学徒出陣することとなり、残された柔道部の責任はわれわれ五期生が担うことになったが、基本的な力量不足に加え、医大や工大等の理科系学生は、依然として徴兵延期されており、オ-ル新京大学大会では優勝することができなかった」^{注803}と記している。

しかし、その後の「オ-ル新京大会では苦戦の末に優勝した」といい、この間の事情を書簡で、「三期のモナステルヌイ(白系露人)、四期の朴三鐘両先輩達の大奮闘により何とか建大柔道部の名声を僅か乍ら保った」^{注804}と謙遜して記している。植弘自身は1944年8月入営

^{注799} 建国大学研究院月報(No.30), 1943年6月25日

^{注800} 同上

^{注801} 椿武書簡(1991年2月1日)

^{注802} 聞き取り調査年月日不詳。この記録は右の論文に引用。前掲, 志々田文明(1992)建国大学における武道・課外活動 5(1): 120.

^{注803} 同上論文, p.350.

^{注804} 同上.

しており、これらの大会は同年春頃かと思われる。

3. 柔道部と東亜連盟思想

近藤多一郎は記す。

「私も八木先生に連れられて、この道場に泊まり込んで、彼らは共に教官らに連れられて、福島顧問の義方会道場に泊りこんで稽古をしたり、武専の寒稽古に参加させて貰ったことがあります。ある朝、近所の食堂に行く途中、萬田先生も京都に来ておられてバツリと顔を合わせてしまいました。底冷えする京都で素足に木綿緋の筒袖姿、「衣衾二至り袖腕二至ル」いま時珍しい書生姿に驚いたことでした。義方会の性格については私はよく承知していませんが、(中略)単なる町道場ではなく、何か政治的な結社の性格もあったのではないかと推察しています。」^{注805}

この一文には柔道部の学生が、建大の柔道指導者を介して福島、義方会へ、またそこを介して東亜連盟、石原莞爾につながっていたことを示唆する。以下、この点を考察してみたい。

建大に東亜連盟研究会ができたのは、岩井利夫によると、^{注806} 1940年暮れから1941年にかけてである。朝鮮人の友人金游祿ほか同塾の友人を誘って東亜連盟の指導者伊知地則彦の指導を受け作られたという。この研究会と萬田ら柔道教員の指導者とがどのように結ばれていたかは具体的には分からないが、柔道部学生の四期生森崎湊の日記を読むと、1942年11月15日に萬田の自宅で、東亜連盟の伊東六十次郎を囲んで「満洲建国、協和会、大東亜戦争の本義に関するお話をうけたまわる」^{注807} とあることから、萬田が東亜連盟の活動に関与していたことは間違いないであろう。

なぜ柔道家・萬田の家でなのか。筆者の問いに対して、近藤多一郎は、「萬田先生は系統としては東亜連盟であったように思う」と語り、山田俊一は、「萬田先生が東亜連盟の影響を受けていたことは間違いない」と語るように、萬田が福島の影響を受けて東亜連盟の支持者であったことは間違いないだろう。森崎の親友であった山田はまた、「一、二回は萬田先生の家で伊東六十次郎か中山優先生の話をついた記憶がある」と語っている。夫人の萬田八重子によると、萬田は建大の夏冬の休みになると必ず、京都へ稽古に行くと言って出掛けたという。また、大野哲次は、「八木先生は福島先生の門下生ですから当然その影響下にあったと判断します。伊藤[中島]先生についてはよくわかりませんが十分御承知だったと思います。小生は勿論承知していました」と記しており、さらに、二期生湯治万蔵は、1942年頃、萬田から「関東軍司令官二上ル白書」といわれていたものを見せられ、柔道部というわけでもないのに、「わたくしが熊本県出身の故」であろうが、「いづれも軍事極秘に属するもので、なぜにこのような文書が流されるのか深い疑問を抱いていた」と当時の驚きを記してお

^{注805} 前掲、近藤多一郎氏書簡「志々田先生に対する回答」(1990年12月)

^{注806} 岩井利夫(年代不詳)石原將軍の思いで、東京湖陵樽中会「湖陵」No.20, p.18. 筆者はこの資料を岩井氏より恵贈された。

^{注807} 前掲書、森崎湊(1971)遺書, p.73. 森崎湊については第13章において民族協和に煩悶する姿を詳述した。

り、^{注808} 萬田がかなり深く石原等の活動に関わっていたことを窺わせる。しかし萬田の大学の行動はかなり抑制的であったと思われる。

この点について、近藤多一郎によれば、萬田は「自身がそれを学問的にリードしていくような方ではなかった。議論を好む人ではない。従ってそうした思想を表面に出して柔道部員と議論をするようなことはなかった」、また「福島先生もそうだった」という。^{注809} 柔道教師中島三郎は、「福島先生や萬田先生から直接東亜連盟の話聞いたことはない。建大へ赴任したら皆がそうした思想的なことを語っていたが、私としては柔道を教えているという気持ちだった」^{注810} と語っている。湯治万蔵は、先輩の柔道部一期生主将格高橋武雄から「萬田先生からお前と二人来いと呼ばれてゐる。行かう」と誘われて萬田の自宅に行くと、そこに中山優（石原莞爾が推薦したといわれる教授）がいて話を聞いた。しかし中山からも萬田からも東亜連盟運動について説かれたり勧めを受けたことはない^{注811} という。さらに、柔道指導者八木は七期生片桐松薫の塾頭であったが、片桐は^{注812} 戦後四十年のつき合いも含めて八木から東亜連盟の話聞いたことはないという。福島の場合も同じで、藤森孝一塾生日誌（1940年9月23日）の武道週間における福島の指導の感想に、「柔道福島顧問、順々として柔道を説かる。義と力。精神と体力。正義を主張せんとせば、力を備えよ」とあるが、福島の指導は個人の精神を鼓舞する内容に止めたのであろう。以上から、福島も萬田も、建大生に伊東六十次郎や中山優などの話を聞かせることによって彼らが思索する機会を与えることに止まり、それ以上積極的に学生に働き掛けることはしなかったと判断されよう。

最後に武道家たちが石原思想から受けた影響の今日的意味に触れ本稿を終えたい。武道家・福島と石原との出会いや直接的な関係は残念ながら本稿で明らかに出来なかったが、福島が石原に私淑し、身の危険をも顧みずに東亜連盟の活動に参画してその有力な支持者に変質したことは見えた。彼は石原のどこにそれ程までの感銘を受けたのであろうか。

思うにそれは、武道が人を教育する手段にすぎず、当時の大義である国家への奉仕という目的のために何処までも自ら教育した人間をとおしての間接的な関わりしか持てなかった。上の福島の言葉にあるように、武道を通していえることは、死生に直面したぎりぎりの所で精神力を発揮できるように心身を鍛えよということから出ることはないのである。これに対して、石原の思想は東アジアから世界の動向を見据えて将来を予言し、将来に準備するために国家と人の向かうべき方向を具体的に教えることにあった。^{注813} こうした広い視野にたった考えは日本人のみならず多くの中国人に共感をえて、東条英機らが真剣にその弾圧を行なわ

^{注808} 藤井歓一の建大時代の著「我が信念と東亜連盟論」に関する湯治万蔵氏の解説(1991年12月12日)

^{注809} 前掲、志々田文明(1994)武道家福島清三郎と石原莞爾, p.137.

^{注810} 中島三郎聞き取り調査(1993年11月3日, 電話)

^{注811} 湯治万蔵書簡(1993年11月14日書簡添付の参考文)

^{注812} 片桐松薫書簡(1993年9月25日)

^{注813} 戦前戦中に広く読まれた石原の著作としては、「昭和維新論」(1938)、「世界最終戦論」(1940)などがある。彼に傾倒する者が多かったことはその夥しい数の伝記類や論説のによっても知られる。例えば佐治芳彦(1989)石原莞爾 - 蘇る戦略家の肖像, 下巻, 日本文芸社.の参考文献(p.313以下)参照。

ざるを得ない力^{注814}を持っていたのであり、武道家にとっては目から鱗の落ちる驚きであったことは想像に難くない。

牛島辰熊の場合もそうであった。実力において当時一世を風靡した柔道家の牛島は、30歳前後にひとつの懐疑に陥り、「俺は何の為に柔道に精進するのか?」、「体力が衰えてきた場合、人に何を教えることが出来るだろうか?」、「どうしたら、国のため、人のための働きになることが出来るか?」という疑問が去来し日夜悩んだ。そんな時彼は石原莞爾の片腕であった今田新太郎と知合う。今田は牛島を実弟の如く愛し、牛島を石原、中江丑吉、加藤完治ら当代一流の人物に引き合わせ、^{注815}更に牛島塾には漢学の先生を送って塾生と共に武道の根本を修得させた。また牛島は石原から「武の極致は徳」の悟りを得て、以後彼を導師として師事した。こうした記述は^{注816}『志士牛島辰熊伝』の著者が牛島に取材してのものと思われるが、一流の武道家もただ武道を修業することだけでは「武道の根本」を修得できないという当然の理を示している。

タテ社会の中に生きることを本旨とする武道家にとって、上長の者の言うことは、疑う事無く黙って従うことが要求される。換言すれば批判精神の排除が要求されるのである。これは技法修得の階梯が、守破離の段階から構成され、長い「守」の段階を経ることが上達の必須の道でありかつ早道であるという教え^{注817}と相関して、多くの修業者に上長への忍従を要求する伝統となる。そうした世界に育った一流武道家の福島や牛島は、時の権力者・東条英機らに抗して退かぬ批判精神の固まりのような石原思想に心酔し、積極的に東亜連盟運動に参画していった。こうした生きた事例は、もしこれからの学校及び社会において武道教育を重視していこうとすると、批判精神、それも反逆をも辞さない精神性を養うような方法を武道教育そのものの中に植え付ける工夫の必要性をも示唆する。それは例えば、指導の場における被指導者の積極的な意見の開陳を保障するヨコの間人関係を、有効な点を多々含むタテの間人関係に組み込む方法を検討することなどである。

勿論そうした植え付けは、伝統的な武道の慣行や優れた点の破壊につながることもなり、難しい問題をはらむ。しかし、武道教育が神棚などと強く結び付けられてややもすると偏狭な日本中心主義的な人間の養成になり、その点から武道が忌避されることにもなりかねない^{注818}ことを考えると、こうした研究がこれからの武道教育には必要であろう。戦後50年

^{注814} 武田邦太郎氏は、太平洋戦争末期すでに全国の東亜連盟地方組織は68を数え、日本に約20万、満洲、中国にいたっては数百万の同志に達していたと記している。武田邦太郎、信仰者石原莞爾と東亜連盟運動、仲条立一他編(1989)石原莞爾のすべて、新人物往来社、p.77.

^{注815} 「当代一流の人物に引き合わせ」というやり方は建大が特に重視したもので、建大には沢山の知識人が来学している。『建国大学年表』1939年11月20日(月)に、「加藤完治・牛島辰熊両氏来学」、同年11月27日(月)山口[剛玄]氏来校とあるが、福島或いは萬田の推薦によるものであろう。

^{注816} 志士牛島辰熊伝刊行会編(1975)志士牛島辰熊伝、2版、pp.103-116.

^{注817} 「守破離」の思想に代表されるこうした教育法が、優れた効果をあげうる点で優れた側面をもつものであることを筆者は否定しない。しかしそれは優れた教師や忍耐力をもつ生徒が前提になった一種のエリート教育の側面をもっており、多くの者を一定期間に効果的に教育しなくてはならない近現代の学校教育の方法としては問題をもつことはいうまでもない。尚、武道稽古における守破離思想については藤原綾三著(1993)守破離の思想、ベ・スポ・ルマガジン社、参照。

^{注818} 戦前に代表される武道教育に対する最も厳しい批判論考のひとつに、城丸章夫(1980)人間形成と「武道」を考える、体育科教育 11: 22-24. がある。

近くの変転を経て、今日の日本は再び戦前のように異民族国家および社会との経済・文化交流が盛んな時代を迎えている。伝統文化が大切な遺産であることは言うまでもないが、自文化中心主義に凝り固まることなく、その時代と共に進む発展はより大切であろう。

第8章 合気武道の教育 -- 非合理主義から合理主義へ

建国大学に於ける必修の訓練科目の一科に、剣道、柔道と並んで合気武道^{注819}が導入されている。歴史と伝統を重んずる当時の日本の武道界の状況を考えるなら、この導入は破格なことというより全く考えられないことであった。それは当時の合気武道が、剣道や柔道と異なり試合（競技）のシステムを持たない武道であり、また、同時代の人間である植芝盛平が創始した日本社会で重んじられてきた歴史と伝統に欠けた武道であったからである。正に、満洲国でなければ考えられないことであった。

では何故この武道が建国大学に導入されたのか。誰がどのように教え、どのような結果をもたらし、それがどういう意味を持ったのか。本章ではそれらの課題を考察する。

1. 武道顧問・植芝盛平とその技法

(1) 植芝盛平と合気武道^{注820}

1) 合気武道の確立

建国大学で行われた合気武道とは、植芝盛平（1883-1969）を創始者として戦後に急速に普及した合気道の旧名である。合気武道は、体術（徒手の技）を基本として武器を使用した技、対武器の技を総合した日本武道である。植芝は武田惣角（1860-1943）について大東流柔術を修業した。合気道の技法は当身技、関節技に特徴があるが、加えて相手の攻撃を瞬時に無効にしたり崩したりする精妙な技術も内包している。これらの技術は殺傷力をもつが、基本的には相手を抑えたり制御するところに狙いがある。合気道は離れた位置からの攻撃に対応した自らも攻撃する格闘形態をとる性格上、その動きには目付け、間合い、刀法の理合いが、一言でいえば剣道の基本的要素が包含・吸収されている。では彼はどのようにしてこの武道を創始したのか、そのプロセスを見てみよう。

植芝はその一生に大東流柔術の外に幾つかの武術を学んだが、合気道技法の主たる内容は彼が1915年から1919年にかけて北海道で武田から学んだ大東流柔術であるといえる。武田は身長150cm位の小柄な体格で、強烈に風変わりな個性を持ち、そして剣術、体術、そしてその他種々の武術に驚異的な技能と実力をもった人物であったといわれる。

一方、植芝はあるきっかけから神道系統の新興宗教・大本教の出口王仁三郎（1871-1948）に師事し、その教えに帰依して精神の安心を得る。1919年には大本教の聖地である京

^{注819} 当時の建国大学に於ける公式名称は合気武道であるが、一期生百々和氏、中川敬一郎氏によると、学生は平素は合気を用い、公式には合気道と認識していたという。百々和聞き取り調査（2003年4月1日）及び中川敬一郎聞き取り調査（1989年3月17日、於青山学院大学）

^{注820} この項目の記述については、右の拙稿を要約して記述した。Aikido (合気道), Encyclopedia of World Sport, 1 ed., Santa Barbara, ABC-CLIO, pp.17-22, 1996. なお、このことに関する学術論文としては、拙稿、「海軍大将竹下勇・武術日記」と大正15年前後の植芝盛平, 武道学研究 25(2) : 1-12, 1992.がある。他に、拙稿, 合気道, 日本史小百科・武道, 東京堂出版, pp.194-195, 1994, 拙稿, 合気道, 最新スポ - ツ大事典, 大修館書店, pp.1-3, 1987, 拙稿, 合気道, 平凡社大百科事典(1), 平凡社, p.12, 1985, 拙稿, 植芝盛平, 平凡社大百科事典(2), 平凡社, p.167, 1985, 拙稿, 合気道, 日本史小百科・武道, 東京堂出版, pp.194-195, 1994. を参照。

都近郊の綾部に転居し、信仰生活の傍ら大本教の信者に大東流柔術を教授した。1922年、武田惣角は綾部を訪問し半年に亘って同流を教授、綾部を去るに当たって植芝に大東流合気柔術の教授代理の資格を授与した。^{注821} これ以後、武田惣角は流名の使用を大東流柔術から大東流合気柔術に変えており、植芝もまた師に従って、1935年頃までこの名称でその武術を指導した。

当時大本教は新興宗教として全国に大きく普及しつつあり、上級の海軍軍人に大本の聖地でなされる植芝の武術に関心をもつものもいた。軍人関係の情報は、やがて現役を退いた東京在住の海軍大将竹下勇（1869-1949）の知るところとなった。1925年、植芝と会った竹下大將はその傑出した大東流合気柔術の技能を認め、以後その死に至るまで修行を続けた。植芝は竹下の絶大な後援と出口の許しを得て、綾部を離れて武道家として立つ決意をし上京した。一方竹下は、植芝のために軍、政財界、皇族関係者などを紹介し、植芝が師武田惣角つまり大東流合気柔術から独立する基盤としての後援会を創った。独立の過程で、植芝は武術の名称を1928年に相生流合気武術とし、以後、皇武道、合気武道と改称していく。植芝は師から経済的に独立するために、彼の武術に新しい流名を必要としたのである。こうして1942年に、日本の各種武道の統括団体であった大日本武徳会の会議を経て合気道と改称された。しかし当時満洲の建大では依然として合気武道であった。

植芝には、武田同様、強烈な人間的個性と、優れた個性的技能があった。それは武田の死後である戦後になって益々開花し、優秀な後継者たちを得て、遂に今日の有名な日本武道として合気道の地位を築くに至るのである。

（参照 表8-1：植芝盛平年譜）

2) 合気概念

合気武道という名辞が他の武道と識別されるのは、「合気」という概念にある。ここではこの言葉について歴史的に考察する。合気という言葉は、日本の江戸時代の武術伝書、例えば1764年の起倒流柔術書「灯火問答」に見ることができる。そこでは「あいき（相気）」を、技の攻防の際に相手と気筋があって、戦うのに困難な状態になる意味で用いている。

「合気」という用語の使用は、1800年代の多くの武術伝書にも見いだすことができるが、これらの意味も「灯火問答」と同義である。こうした意味内容を転換させたのは1892年の「武道秘訣合気之術」であり、ここで合気の意味は武道の奥義であり「敵より一步先んずる」こととしている。「先んずる」前提として「敵人読心の術」と「掛声の気合」が説明されているが、具体的内容については記していない。

大東流柔術において合気の意味をどのように定義付けていたかは現在ではあまり明確ではない。それは同流中興の祖武田惣角が、日本武術の秘密主義の伝統に従ってその内容を書物として残さなかったことによる。しかしながら、高弟の一人佐川子之吉は「合気をかける」

^{注821} 武田は植芝以外にも多くの者に教授代理を与えており、植芝は武田が免許を与えた大東流指導者の一人に過ぎない。武田に卓越した弟子達はそれぞれ大東流の名前を冠する流派を創っている。前掲、Aikido (合気道), Encyclopedia of World Sport, 1 ed., Santa Barbara, ABC-CLIO, pp.17-22, 1996.

としばしば1913年のノ - トに記しており、大東流柔術において合気という言葉や技法が大東流合気柔術改称以前から指導されていたことが知られる。合気という言葉のこうした不明確性が、大東流合気柔術教授代理・植芝の合気の解釈に曖昧さを生んだ。

しかし植芝流が大きくなるにつれて、植芝の門下生や後継者たちはその曖昧さを補うように合気道における合気という言葉に次のような解釈を行なった。つまり「合気」が気を合わせる文字の構成のために生まれた天地の気に合わせる道という解釈や、体験的悟境から生まれた自然の動きや動きのリズムに合わせるという「天人合一」の解釈などである。

3) 合気武道の技法

具体的に合気武道の技法を解説することはそう簡単なことではない。その理由の一つは、植芝の技法の指導法は時代によりかなり違いがあると思われるからである。たとえば竹下大将が1925年に植芝から習っていた時には、竹下は後日その教を纏めて清書しており、植芝は大東流の技法を一つ一つ秩序だてて教えていることが窺われる。^{注822} しかしその指導の方法は「体で覚える」という旧来の体験主義であり、指導に際し詳しい説明はなかったという。

現在の合気道の基本練習として共通する内容は以下のように整理される。

- ・ 座り技（坐った状態で手首を握るなどの攻撃をされた場合の技法）、
- ・ 半坐半立ち技（一方が坐っている時に、立った状態の者から攻撃された場合の技法）、
- ・ 立ち技（両者共に立った状態で、一方が他方に対して攻撃した場合の技法）

がほぼこの順序で行われ、さらに、

- ・ 対武器（短刀、木刀、杖など）の技法、
- ・ 武器対武器の技法へと延長されること。

第二は、攻撃の方法が多様であること。例えば徒手の場合、柔道のように襟袖をつかむだけでなく、手首、体全体をつかむこと、片手でつかむ、両手でつかむ、後ろからつかむなど、また多人数の者から攻撃された場合など、実に多様な攻撃場面での対抗技が考えられているのである。

第三は、当て身技、関節技、関節技を用いた投げ技、極め技に特色がある。当て身技は空手のように拳で突くというより、掌底や腕を手刀として用いて一点一方向の力で倒すことに特色がある。関節技は柔道のように肘技だけでなく手首技を用いる。極め技は手首を握った際に相手に激痛を走らせ制圧する技法である。こうした技法を支えるのが、

第四、巧みな身体の運用であり、植芝など一流の指導者は柔道でいう自然体の巧みな運用によって驚くべき技法を示したといえる。^{注823}

上記の内容をもつ合気武道はまさしく総合武道というに相応しい武道であった。それは形（相手との一種の約束によってなされる稽古）の反復によって修業され、あらゆる場合に対応できることが暗に目指されたのである。したがって、剣道や柔道のように、審判規程に従って競技を行うことはなかった。多様性のある技のなかから何かを抜いて競技に仕立てる

^{注822} 前掲、拙稿、「海軍大将竹下勇・武術日記」と大正15年前後の植芝盛平、p.6.

^{注823} 合気道の技法解説とその広がりについては右書参照。志々田文明・成山哲郎(1985)合気道教室、大修館書店。

等といった発想は起こり得ぬほど、多彩な技法内容をもっていたからであろう。

(2) 「神技」への驚き -- 建大生の印象

植芝盛平は、1938年11月の武道週間において、島谷八十八（剣道）、福島清三郎（柔道）の両武道顧問とともに、建大武道場において初めての指導を行った。

植芝は戦後に合気道「開祖」として宣伝され、その没後、国際・国内的普及と共に合気道界で半ば神格化されている人物である。では、建大生たちは実際に植芝の武道をどのように見たのか。いくつかの資料で見よう。

・一期生剣道部員・長野直臣塾生日誌（1938年11月2日）

「植芝先生の武道は、何だか魔法使いの様に思われる。教師の人が態と倒れるのかと思っていたが、自分が腕を握られたら、外の人がしてもどうもないのに、足の先までいたくて動けない。」「練習とは恐ろしいものだ。ある域まで達すると神技としか見えない。」

長野の目には、島谷八十八の「堂々たる」剣道、福島清三郎の「闘志」の柔道に対して、植芝の合気武道は実に奇妙なもの映ったことがわかる。加えて植芝の風貌があった。

・二期生柔道部員・近藤多一郎は1939年の植芝との出会いを回顧する。

「植芝先生にお会いして、ノッケから驚かされたことは、炯々とした二つのマナコの光です。豹か虎のようで人類のマナコではありません。二センチのマナコからどうしてサーチライトのような光が出るのでしょうか。」^{注824}

オーラに包まれたような植芝のもつカリスマ性は、この頃から衆目の一致するものとなっていったようである。では、技法の印象はどう受け取られたのか。

・一期生田中昇書簡。^{注825}

「植芝先生については富木先生から承ってはおりましたが、最初に学生の前で演武されたとき（前期一年だったと思いますが）先日故人となられた元大関[関脇]天龍氏（和久田三郎先生）が坐っておられた頭を植芝先生の右の人差し指の抑えに耐えきれず、へなへたと畳に崩れてしまったのを見たとき、余りの不可解さにお二人でサクラをされているかと思ったことがありました。その直後、植芝先生に右手を握られ、その異常な強さを体験して、そうではなくて、これこそが神人合気のかたとさとりました」。

因みにその天龍が、学生にとってどのように偉大な存在であったかは、角力の教育の章で見ることにする。

・一期生北直幸。^{注826}

「植芝先生が初めて来たとき、高橋[武雄]が柔道部の主将だった。柔道四段で一番強いんだ。植芝先生が、『ねばれ（寝ろ）』。指で押さえて^{注827}立ち上がれという。高橋はバタバタするが何度やっても起き上がれない。高橋が起きそうになると、方向を変えて押さえるとい

^{注824} 前掲、近藤多一郎書簡「志々田先生に対する回答」（1990年12月）

^{注825} 田中昇書簡（1989年9月15日）

^{注826} 歡喜嶺訪中団随行聞き取り調査（1992年9月16日）

^{注827} このことを筆者が北直幸氏に確認すると俯せにして親指か中指で軽く押さえていたという。北直幸聞き取り調査（2003.3.11.電話）

う風で、高橋は蛙のようにバタバタやっている。あれで合気武道というのは凄いと思いましたね。合気の授業の初めの時だった。初め植芝先生が来て、後で富木先生を連れてきた。」

うつ伏せにしての抑えであろう。柔道は仰向けに押さえて「一本」を目指す競技であるから、高橋にとっては初体験であったことであろう。見るものやる者すべてにとって驚きの出来事であった。

・四期生柔道部員・鈴木博建大日記^{注828}を見よう。

「午前中授業、情けないほど眠い。午後一時半より、内地から来られた合気道創始者植芝盛平先生の武道を見学する。殆ど力を用いず柔にして、剛者を手玉に取るさまは神業の如く見える。あたかも鞭を使うものが僅かの手先の力で鞭の先の大物をもんどり打って跳(マ)じき飛ばすようなさまだ。この技の極意は単に武芸に留まらないのではないかと思った。」

(1942年8月5日・水・晴)

植芝の人格と技法のもつカリスマ的な「何か」が学生たちに強い印象を与えたことが理解されよう。人間は余りにも現実離れした現象に接したとき、しばしば適切な理解が不能に陥る。「魔法使い」という表現にそのことが現れていよう。しかし北直幸の発言にあるように、体験を媒介することによって「適切な理解が不能」であった現象を、現実のものとして理解するのである。非常に卓越した武道家の技能の体験者たちは往々にして彼を神格化するが、体験を持たない者にとっての彼は、どこか胡散臭い目で見られることになる。実際、戦前に植芝の武道が有名になってくると、柔道界はそれに微妙に反応し、一部では強く反撥していた。

1929年、既に剣道、柔道の章で何度も紹介したように天覧武道大会が行われた。試合後の主要評議員・審判員との間で行われた「回顧座談会」に興味深い記事がある。^{注829}

「本田[親民]：(前略)講道館の柔道に就いて一論を私は持って居ります。簡単に言えば植芝といふ人が非常に危険なる逆の取り方をやって居るのです。(中略)今日の講道館柔道というものは今等々力閣下が言われたように、塹壕戦とか何かというようなことになった場合には役立たない。(中略)して見ると植芝の教えるようなものを講道館でも採用したらどうであろうか、少なくとも幹事長あれを見ておくがよい、大いに参考になるぞ、斯ういうことを言うた人がある。」

講道館幹事長の重鎮である本田(海軍少将)の問題提起に、講道館中枢部の動揺の跡を見ることができよう。こうした動揺は事情を知らないその下のレベルに下りていった時に、大きな反撥を生むことになる。

建大の合気武道担当教官富木謙治は、資料と聞き取り調査から判断する限りにおいて、他の武道教官と普通の人間関係を保っていたようである。奥村繁信によると、^{注830} 福島は合気武道の導入に反対し、萬田も嫌ったという。一期生柔道部の中垣芳治は、^{注831} 「柔道の乱取りの最中に、萬田先生からよく『合気を使ってもよい』と云われたが、柔道ではあまりに体が接

^{注828} 鈴木博建大日記. 建国大学四期生会誌(1996), 28: 40.

^{注829} 前掲書, 昭和天覧試合, p.722.

^{注830} 奥村繁信聞き取り調査(1990年7月13日, 於善隣会館)

^{注831} 中垣芳治書簡(1991年6月1日)

近しているのではなかなかきかなかったと記憶しています」と記しているが、ここにも合気武道に対する微妙な反撥の含意を見てとることができよう。^{注832} 創始者嘉納治五郎の教えに従って分類すれば、柔術の範疇に属する柔道と合気武道はいわば剣道よりも血の濃い親戚関係といえるが、合気武道からも学ぼうとする嘉納の懐の深さ^{注833} に反して、合気武道の台頭に対する柔道界の動揺・反発は激しかったのである。

一期生藤井謙二の回想には、次のようにある。^{注834}

「植芝先生が見えられた時の演武大会では、泉水君と私が型をやりました。植芝先生が小指で背中をおさえると相手が動けなくなったり、母指と食指二本で、柔道衣の襟をつまんで相手を投げた時、先生の二本の指に柔道着の襟が残ったのを見て、ある者は驚き、ある者はインチキ武道だと言うような時代でした。」

富木は実際、柔道界のこの反撥を如何にして押さえ、インチキの誤解を如何にして解くかについて、建大での研究を通して腐心し続けることになるのである。

2. 教官・富木謙治と合気武道教育

合気武道は、建大の訓練教育において剣道、柔道と並ぶ必修科目であった。しかし開学初年度には専任の教官は配置されていなかった。合気武道の専任教官として、また後に訓練教育全般の統括責任者・訓務科長として建大の武道教育を担う富木謙治が正式に着任するのは1939年2月1日^{注835} のことである。ただ、一期生李水清氏の記憶によれば、富木の指導による合気武道の稽古はそれより前、開学初年度から開始されたという。富木は既に大同学院や関東憲兵隊教習隊で合気武道を指導しており、大いにありうることといえよう。ここでは合気武道部を中心にその教育の実態を解明していくが、その前に合気武道採用の経緯を見ておかなばならない。

(1) 合気武道採用の経緯

建大開設当時、首都・東京において政財界要人の間で知られてきていたとはいえ、日本国内において殆ど普及していなかった一武道・合気武道が必修の教材として指定されたことは、正に満洲国に於いてであったからこそ出来たことであり、異例なことと言わなくてはならない。この新興武道の採用に当たっては、作田荘一ら創立委員による植芝盛平の合気武道の見学があって採用が決定したといわれる。ではなぜそのような見学が行われたのであろうか。それは、建大創設委員会東京事務所の初代事務所長・松平紹光の尽力によるといわれる。松平は合気武道を修業しており、その価値を認めていたことからのものと思われるが、

^{注832} 柔道部一期生尾崎照夫書簡（1990年12月1日）によれば、「富木先生は私によく『合気の技を柔道に生かしてくれないか』と漏らしておられました」という。思うにその心は、柔道に合気の技を使えということではなく、合気の理合を柔道に生かせということであったと想像されるが、こうしたことがいつしか萬田の耳に入り、中垣に「使ってみなさい」という事になったのであろう。

^{注833} 嘉納治五郎は1935年10月に植芝道場を訪問してその演武を見学し、その後門弟二名を技法修得のために派遣している。植芝吉祥丸(1977)合気道開祖植芝盛平伝、講談社、pp.203-205。

^{注834} 藤井謙二葉書書簡（1998年9月8日）

^{注835} この時富木は助教授として着任した。満洲国政府公報（No.1449）、1939.2.4。

これには対抗馬があった。それは石原莞爾の腹心であったといわれる今田新太郎中佐の推す空手であったという。そうだとすれば、建大にも来訪して空手の実演を行った前述の山口剛玄あたりが候補者であったのかもしれない。ともかく創立委員の見学は植芝の合気武道の採用となり、植芝盛平は晴れて建大の武道顧問となったのである。

三期生合気道部員・奥村繁信の証言を見てみよう。^{注836}

「建国大学の正課として、合気武術が入ることについては、柔道界（特に福島清三郎先生一派）から猛烈な反対があり、その採用については、合気先輩、松平紹光少佐は、かなり苦労をした、結局その肝いりで、建大の創立委員であった作田莊一博士、筧克彦博士、平泉澄博士の合気武術見学という事になり、若松町の旧道場において植芝盛平先生の演武を見学することになり、先生の理論に耳を傾け、その技のすごさを眼のあたりを見た。三博士は植芝先生の人物・技にふれて一も二もなく採用を決定されたのである。」

柔道界の合気武道への反感が福島に反対の行動をさせたものと思われる。当時の植芝の後援者には竹下勇海軍大将を筆頭に有力者が多く、その強力な運動もあっておかしくないと思われるが、満洲国のことになれば石原莞爾の力は絶大であり、松平の苦労のほどが理解される。

現場を指導する教官は植芝の推薦によって富木謙治が任命された。当時富木は、1936年春に渡満し、当時満洲国の官吏養成学校である大同学院の嘱託として合気武道を指導し、また関東憲兵隊教習隊嘱託として合気武道を指導していた。後者の方は、1935年に渡満した際に時の関東軍憲兵隊司令官・東条英機に合気武道を紹介したことが機縁となったものであった。武専で固められた建大の柔道教官及び指導者たち、また、武専及び各学校の指導者が多かった剣道指導者に対して、植芝道場という町道場で行われていた合気武道には、満洲国の最高学府の教官として他武道に匹敵する人物は乏しかった。富木の選択は必然的な印象を受けるが、奥村繁信によると、「建国大学の合気武術の師範には、当初白田林二郎先生が着任されることになっていたが、白田先生が支那事変に応召されたので、富木謙治先生が関東軍の憲兵隊の師範から兼務で、建国大学の師範になられた」という。^{注837}

(2) 植芝盛平と富木謙治

1) 富木謙治^{注838}

富木は1900（明治33）年3月、秋田県角館に生まれ、1979年に死去した。角館小学校から県立横手中学校に進学、早稲田大学第二高等学院を経て同大学第一政治経済学部を卒業した。幼少の頃より柔道に接し、小学校から稽古を始め、中学時代から早大時代まで柔道部で鳴らし、学生時代に四段を取得した。また大学在学中に大東流合気柔術から独立しつつあった植芝盛平に師事して熱心に修業を開始し、終生に及んだ。大学卒業後は東北電力を経て角館中学校で3年間教鞭をとった。この間の1929年にはかの天覧武道大会府県選士の部に宮城

^{注836} 合気道新聞，財団法人合気会，No.324，No.325.

^{注837} 同上.

^{注838} 富木謙治の履歴については右記の年譜参照。志々田文明，富木謙治年譜，富木謙治(1991)武道論，大修館書店，pp.284-285.

県代表として名誉の出場をし活躍している。その後植芝の技法を本格的に学ぶため上京し、植芝道場のすぐそばに居を構えて2年間集中的な修業をした。

1935年、富木は渡満して関東憲兵隊司令官であった東条英機^{注839}に合気武道を紹介する機会を得たことが機縁となって、翌1936年、関東軍憲兵教習隊、大同学院、新京警察署などに合気武道を指導することになった。1939（昭和14）年2月、建国大学助教授として迎えられる。植芝の推薦によるものといわれる。1940年2月11日紀元節、植芝は段位制による段位を始め、富木は第一号の合気武道八段を許された。^{注840} また翌1941年4月には柔道六段を許されている。1945年の敗戦後、ソ連軍によってシベリアのバルハシ湖畔に抑留され、3年半の抑留生活を経て1949年に帰国した。その後早稲田大学に奉職し、体育実技・講義を講ずる傍ら、柔道部師範として柔道部を指導する一方、1958年に合気道部を創設し同部長として合気道の競技化に取り組み合気道競技を創案した。この過程で恩師植芝並びにその団体と対立関係となる。植芝の形すなわち約束形式による独特の合気道は戦後急速に世界的に普及したが、他方、形と競技の併習を説く富木のシステムも1989年より国際大会を開いて発展しつつある。次に富木と植芝との関係と思想の違いを見ておきたい。

2) 植芝盛平の驚異

植芝と富木との関係について部員の三期生奥村繁信は語っている。^{注841}

「植芝先生と富木先生とは性格の差があったなあ。何となくしっくりいっていない感じだった。大学教授になったらね、それなりに扱い方があるけどね。『富木！』といって学生の前で呼び捨てにする。いくら弟子でも、あれではいかんと思ったなあ。社会的地位を得たならもう少しねえ・・・」

このような植芝に対して富木はどう対応したのか。一期生部員の西山龍雄は、筆者の質問に対する書簡で、^{注842}

「温厚な先生でした。自分が目立つということを全くされない先生でした。いつも、植芝先生に従い、その心を体に動く。その姿は立派でした。」

と記して、強圧的に振る舞う植芝についての奥村の話と見事に対応した師弟関係を示している。随順する富木の姿を「立派」とする評価は、富木の内面を知るが故のものであろう。その内面を見る前に、富木がその居室に、嘉納治五郎の写真と並べてその写真を飾っていたという植芝盛平の価値を見てみよう。

富木はなぜ一貫して植芝に従ってきたのか。その最大の理由は先に見たような植芝の卓越した技法にあると思われる。当時の合気道部の中核を担った一期生百々和は、その体験を戦後の随想で次のように記している。

「植芝先生についての伝説的逸話が多い。昔の講談のように面白いその話の数々を、始め

^{注839} 東条英機は、1935年9月21日関東憲兵隊司令官兼関東局警務部長、1937年3月1日関東軍参謀長、1938年5月30日陸軍次官、その後も要職を経て、1941年10月18日内閣総理大臣になった。戸山操、陸海軍将官人事総覧(陸軍篇)、芙蓉書房、p.216、1981。

^{注840} 筆者は富木生前に、紀元節の日に同門の湯川勉氏と共に授与されたことを聞いた。敗戦後のシベリア抑留によって全ては失われたのである。

^{注841} 歓喜嶺訪中団随行聞き取り調査（1992年9月16日）

^{注842} 西山龍雄書簡（1989年10月9日）

は教祖的存在にはつきものの伝説としてきき流してきた私も、学生時代約一カ月東京の植芝道場で、内弟子と同様の生活をしたときに体験した先生の強さによって、その逸話は生き生きとした真実性をもちはじめ、伝説としてきき流せないものになっていた。また植芝先生が武道修練の結果到達した境地としてよく話された悟りの境地にしても、戦場の体験を媒介することによって、いまでは架空のこととして否定してしまうことのできない真実性のあることを認めざるをえないようになっている。」^{注843}

百々は植芝について四つの個人的体験をある講演で話しているが、その内の三つを挙げてみよう。

「一 建大創設期、角力の教師として天龍という大関[関脇]、本名は和久田さんという方が来られていました。土俵で実際にぶつかってみますとその強さがわかるのですが、私などは天龍さんの一押しで、土俵の上の蛙のようにペチャンコになります。その天龍さんが植芝先生に手首をつかまれるとヘナヘナになっていました。

二 東京の本部道場で修行していた時、朝稽古には外部から多くの人が集まり、その間を先生がヒョイヒョイと指導して廻られるのですが、先生が技をかけられた時の強烈なこと、体全体で受け身をしないと骨が折れそうでした。ただ先生は外から来た者には、特に強く技をかけられたということを後で聞きましたが、それでも仲間同士の稽古では考えられないほど強烈でした。(中略)

四 先生は午後、外部にあるいろいろな道場に出かけられました。私もある日、先生の道着をもってお供したことがあります。当時は東京といえども、それほど自動車も多くなかったので、適当なところで道路を渡っていました。トンビを着た小さな先生は、自動車が来るとすーっと前へ渡ってしまう。私は自動車が来るとハタと止まる。先生はすーすーと渡られるのに、私はチョコチョコ止まるので遅れる。向こう側で先生がニコニコして待っておられる。(中略)今思うとこれは合気道で相手の剣を前に出ですーっとかわすあの気合いを地でいかれたのではないかと思います。」^{注844}

一は手首に対する極め技をかけたものと思われ、二は投げ技であろう。技は相手や相手との関係など相対的条件によってその威力に変動が認められるが、実力あるものであれば、タイミング良くかければ同様の印象を与えることも考えられよう。しかし植芝はそのパイオニアであり、沢山の者が驚異的と感じて植芝の廻りに集まったということである。富木もまたその一人であったと思われる。なお、植芝と富木の技の違いを、百々和は、「植芝先生は年に一回位いらっしゃいました。技の説明はありませんでした。技は実に鋭く、投げられると畳にめりこむような感じがするほどでした。一方、富木先生の技は、まるやかで円熟している、大きな感じのする技でした。」^{注845}と評している。四は比較的地味な話であるが容易に伝えぬことであり、これこそ植芝の真骨頂を發揮しているといえるかもしれない。

^{注843} 百々和(1989)合気道と私 そして建大, 建国大学第一期生会, 歓喜嶺(建国大学第一期生文集), 非売品, p.198.

^{注844} 百々和(2001)合気道と私, 『道芝』別冊-最後の講演二つ-, pp.6-7.

^{注845} 百々和聞き取り調査(1980年8月24日, 於百々氏宅, 成山哲郎氏同席).

3) 合理主義の新道

さて、富木は臣従の礼をとって植芝にかしずいたが、彼の内面は、心静かに植芝の技法の理解とその分析、体系化に向かっていった。再び西山書簡を見よう。

「植芝先生の閃きを、学問としての体系にまとめ、解釈して行くことを念頭にされていたのではないかと、今でもそう思っています。それは、日本の古い武の道を、昭和の新しい形で『合気道』として創成された植芝先生に、従来の『柔道』をこえる『道』の心を見出されたものでしょう。『パッと斬ってしまう』を口ぐせにしておられた植芝先生の閃きを、何が、どうして、そうなるのか、と丹念に説明し、基本練習に結びつけて指導されていた富木先生のお姿が、目にうつっております」^{注846}

西山は、植芝と富木の間を「ひらめき」から「学問の道」へと簡潔に表現しているが、この同じ認識を、二人の別の建大生もそれぞれの表現で次のように語っている。

一期生百々和。

「植芝先生の合気道と富木先生の合気道は、その考え方において、修練の方法において対照的であった。植芝先生の道は『読書百遍意おのずから通ず』式の勘と体得と悟りによる修練の方法であり、戦国時代の武術の修練をおもわせるものがあった。それに比べて、富木先生の方法は、体の理法、力のリズムの理解と会得による合気道の理論化、体系化の追求であり、それは柔術を柔道にまとめあげていった講道館方式に似ている。そして体および力の理法は、武道のみならず、京舞、歌舞伎あるいは書画においても共通のものがあることを常に強調されていた。植芝先生のは非合理主義の大道であり、富木先生のは合理主義の新道であった。永く烈しい修練により体得された植芝先生の合気道を、理論化し、体系化し現代の思考様式に適合するように改編していったのが富木先生だとも思う。私たちはこの富木先生の合理主義の道を歩いてきた。（後略）」^{注847}

二期生西村十郎。

「当時の唐手、合気はともに技が主であり、植芝先生は『勘と体得と悟りによる修練』を求められ、人間業とは思えぬ技に、到底稽古はできないと思いました。そして富木先生の力とリズムによる合理的な指導に接して、やっと人並みの稽古ができるようになりましたが、後に大東流合気柔術から出発した植芝先生教祖の合気術が、柔道から転じられた富木先生なればこそ、術の理論化、体系化により、これを道に昇華されたのだと思いました。」^{注848}

西村の「術」から「道」への発展、即ち「術の理論化、体系化」は、術の分析による客観的な理論化を意味する。それは、非合理的な「ひらめき」の術を誰でも学べる教育のための平易な「道」へ昇華することであり、それはまた、百々のいう「非合理主義」から「合理主義」へと進める道であった。富木の合理主義の精神こそが建大の合気武道教育の特徴であったといえよう。

^{注846} 西山龍雄書簡（1989年10月9日）

^{注847} 前掲書、歡喜嶺(建国大学第一期生文集), pp.196-197.

^{注848} 西村十郎書簡（1993年6月24日）

(3) その他の指導者・愛好者

合気武道を指導できる者は教官の富木謙治の外の的場某、大庭英雄がいた。松平紹光は合気武道の嗜みがあったはずであるが、稽古に現れたという証言はない。彼ら指導者等について見ておこう。

・的場

李水清書簡によると、「前期一、二、三年の間は、的場先生という方が居られて、大へん親切によく教へてくれ」^{注849} たという。百々和によると、^{注850} 「富木先生が着任される前後、植芝盛平先生の相手役として本部道場からつれて来られた方で、李君のように初期段階で非常に熱心だった人には特に印象深かったのでしょうか。我々も知らぬわけではないのですが、建大所属の人でなかったので印象が薄いわけです」という。

・大庭英雄^{注851}

秋田県角館中学校卒。角館中の柔道助教。1941年7月までに建大助教として着任。^{注852} 1943年5月1日、建国大学講師に依嘱。^{注853} 富木が角館中学校教員時代の教え子である。大庭は建大及び牡丹公園の神武殿で合気武道の稽古・指導のほか、神武殿で指導をしていた古賀恒吉範士について剣道を稽古、二刀流の工夫をする一方、長刀、居合道の稽古を行った。二期生橘満雄は、^{注854} 「大庭さんは実直で真面目、温和で無口な青年といった感じでした。体が固くて、かけられた技が非常に痛かったのを覚えています」と記している。戦後は秋田県警で柔道師範をしていたが、富木に乞われ早稲田大学はじめ東京の諸大学で合気道を指導した。また富木没後は富木が創設した日本合気道協会及び昭道館道場の第2代会長及び館長をそれぞれ務めた。

その他、富木の下に集まった建大教官の愛好者は多い。^{注855} その主な者を見ておこう。

・松平紹光（第6章剣道の教育の章参照）

・根本龍太郎

創設準備段階から深くかかわり、1939年の秋には転勤したが、春の間稽古したという。

・和久田三郎

元関脇天龍、角力の兼務講師である。彼は、1939年に神武殿で植芝盛平と出会ってその技法に感服した。すぐさま後休暇をとって東京の皇武館道場で植芝について70余日の合気武道修行を行った。さらに帰国後毎朝神武殿で富木の稽古会に参加し指導を2年余に渡って受け

^{注849} 李水清書簡（1991年4月22日）

^{注850} 百々和葉書（1993年頃か。消印不明）。この葉書は1992年の拙稿「建国大学における武道・課外活動」に関する疑問に対するの百々氏の回答。

^{注851} 大庭英雄については右書を参照。志々田文明(1991)大庭英雄師範略伝, 日本合気道協会。

^{注852} 前掲, 建国大学要覧(康德8年度版, 1941.7.25), p.53の助教のリストにはその名前が見える。

^{注853} 建国大学研究院月報 (No.30), 1943.6.25., p.5 に、「依嘱 建国大学講師 大庭英雄」とある。

^{注854} 橘満雄書簡（1991年10月17日）

^{注855} これについて百々和氏は、「建大の先生は合気をみんなちょっとはやりました」という。百々和聞き取り調査（2003年4月1日）

続けている。(和久田については第12章角力の教育の章を参照)

・尾高亀蔵

1942年6月16日に副総長作田莊一の後任として着任した尾高は、閉学までの3年余にわたって合気武道を熱心に稽古した。四期生・鈴木博の日記は、1943年1月30日(日)朝五時半過ぎ、柔道の稽古に神武殿に[柔道の]行き、終了式に参列した時の模様を、「尾高副総長が合気道で寒稽古精勤賞を受けられる。思いがけぬことだった。」^{注856}と記している。尾高の回顧録(恩愛録)によると、^{注857}彼は剣道を終始修めたが「中等程度で優秀にはいたらなかった」、銃剣道は「陸士でも優秀組」で、馬術は「陸士、陸大時代共に中以下」であり、ボートは「下手」で、テニスは「さしてもものにならなかった」という。総じて運動が得意なタイプではない。しかし合気道武道は違った。本人と四女の加来春野の追憶で修行の様子をみってみる。

「私は元来剣道を重視していたので柔道はやらなかった。が、建国大学副総長時代、柔道の流れを汲む合気道を始めた。その先生は、富木謙治といい、人格の高い、非常に技量に優れた方であった。満三年半毎日猛練習をやり、二段の免許証を得、間もなく三段の免許を受ける許りになっていた時終戦となった。これには大きな自信を与えられた。」^{注858}

「父は、建大副総長になって間もなく合気道の稽古を始めたようです。私が新京に行った頃は、確か黒帯になっていたと思います。父はいつも朝早く起きて、六時前には家を出て神武殿に行って稽古するのです。神武殿は官舎から約4キロメートル北の牡丹公園に建てられていました。(中略)さぞ大変だったでしょうが、特別のことがない限り稽古を休まれたことはありませんでした。本当に熱心でした。神武殿での稽古は、建大教授の富木謙治先生と大庭先生のご指導を、その他の一般の方々と一緒に受けていたようでした。私も父に連れられて、二、三回行ったことがありますが、稽古を終わって、7時頃神武殿の食堂でいただく暖かいおかゆが、とてもおいしかった思い出があります。また父は、家でよく合気道を教えてくれました。」^{注859}

家族の子どもの目から見た尾高は、「情けに厚く非常に涙もろい面があると同時に冷静な判断が出来る理性的な面が強」^{注860}く、「血の気の多い」^{注861}人物であったという。同書全体と建大関係資料から筆者が受ける印象は、対社会的には勤勉、実直、激しい気性の人物で

^{注856} 鈴木博, 建大日記から, 前掲書, 歡喜嶺 遙か(上巻), p.265. また、令嬢加来はるの書簡(1995年8月16日)にも、「建大におります間殆ど毎日神武殿に、朝五時起きで参りまして合気道の稽古をして頂いて居りました」とある。上の鈴木博日記の日時は1月31日(日)の誤りか(同年1月30日は土曜日)。

^{注857} 太田庄次編(1982) 尾高亀蔵の遺稿と追憶, 非売品, 発行人・尾高信夫, pp.31-32. 本書は太田氏と家族が協力し、父への厚い思いとその矜持を記した執念の書といえる。戦後の尾高の随想や家族の者の思い出その他が収蔵されている。

^{注858} 同上, p.32.

^{注859} 同上, p.198.

^{注860} 同上, p.221.

^{注861} 長女太田露子さんの言。同上, p.92.

あったように思われる。^{注862} 一般的印象では典型的な軍人タイプといえるかもしれない。そうであるが故に、将来におけるよりよい国家の実現に希望を抱いていた気骨ある教官、学生、とりわけその希望を抱き得なかった異民族学生からは厳しい目で迎えられた。恐らくは尾高もそうした雰囲気は察知していたであろう。彼の価値観に従って懸命に生き、彼の回顧によれば、妻「須恵子の渡満以来、私共は日満大学生2、3名ずつを庚午に官舎に招き寝食を共にしつつ家庭的訓育を行う」^{注863} ような教育的努力^{注864} をしたのである。

三期生合気武道部の奥村繁信は1945年の敗戦前夜、見習士官として勤労奉仕隊の輸送業務を担当する合間に、「朝は神武殿に行って合気道の稽古をし、午前中は建大の講義を拝聴し、午後は県公署に連絡するという日が何日か続いた。当時、尾高副総長は、毎日神武殿の合気道の朝稽古に出て、富木先生の指導を受けておられ、すでに二段をとられ、三段をめざして熱心に稽古されていた」^{注865} と、継続して合気武道を稽古していたことを裏づけている。建大の授業前の早い時間に、大学以外の幅広い層を対象に富木を中心とした稽古会が行われていたものと思われる。

そのような尾高の生き方に、物静かで「気性の穏やかな」富木謙治の人格と合気武道はどのように影響したであろうかはわからないが、年長者も修業可能な形武道の合気道と富木の「人格」と「技量」に引きつけられたものと思われる。

・森下辰雄（フランス語）

同じく奥村は、「森下先生も、終戦まで熱心に神武殿にて、尾高先生たちと朝稽古を続けておられた」という。^{注866}

外に、実技はやらなかったが熱心な理解者であり後援者であった教官として宮川善造（地理）がいた。^{注867}

(4) 指導内容

富木の合気武道はどのように教えられたのであろうか。授業と部との稽古内容の違いを特定することは難しいようである。はじめに一期生中川敬一郎等の記憶^{注868} から全体的な指導の流れをしてみる。

毎回の稽古の手順は、最初に、受け身と、相構えに組つかせてからの手刀の鍛錬（崩しの稽古）を十分に行った。これらは準備運動がわりであった。その後は下記の内容を行ない、徐々に積み上げていった。学生には一枚の折り畳まれたパンフレットを配布し、学生はそれ

^{注862} 九期生山本利男氏の随想には、尾高が学生に会うときは、「いつもニコニコして好々爺然としていた」ことを記す一方、激高しやすい性格であったことを記している。山本利男(1995)副総長の歩哨, 建国大学九期生, 学伸社, p.168.

^{注863} 前掲書, 太田庄次編(1982) 尾高亀蔵の遺稿と追憶, p.186.

^{注864} 尾高は、皇学の集中講義を受講するなど学ぶ努力も示した。前掲書, 西村十郎, 楽久我記, p.296.

^{注865} 奥村繁信, 尾高先生の霊前に焼香して, 会誌 (三期生), No.30, p.43, 1983.

^{注866} 同上.

^{注867} 百々氏は「教官の中で植芝先生、合気道に心酔された方、故宮川善造先生が居られ」と記す。百々和書簡 (1991年2月16日)。なお宮川善造教授は戦後東北大学合気道部の育成に努力したという。

^{注868} 中川敬一郎聞き取り調査 (1989年3月17日, 於青山学院大学)。以下の関係記述はその際の録音テープから記述した。なお、中川氏は戦後に東京大学経済学部教授から青山学院大学教授。

を見ながら、「今日はこれをやったんだな、この次はこれだな」と練習した。そこには基本的な形を図解したものが書かれており、非常に分かりやすかった、という。

A. 基本練習

- ・受け身
- ・相構えに組みつけてからの崩し [手刀の鍛練、あるいはいわゆる呼吸力の鍛練]

B. 技の稽古

a. 正面打ちに対する技

- ・「押し倒し」 [(財)合気会では、戦後にこの技を一教と呼んでいる基本の技]
- ・「小手返し」
- ・「小手捻り」 [三教]
- ・「逆手取り小手捻り」 [二教]
- ・「四方投げ」

b. 正面突きに対する技

- ・「小手返し」などほぼ正面打ちに対する技と同種のわざ。

c. 胸襟を取られた場合の技、「逆手取り小手捻り」など。

d. 後ろから組みつかれた場合の技

e. 抱えられた場合に転体の遠心力で投げる技など。

なお、稽古は全体に立って行く、次いで場合によって坐って行われたという。

f. 対武器（太刀や棒・銃剣など）の技

g. 形の連結練習

h. 乱取り

以上のうちBのeまでは、中川が前期1年から3年（1940）の秋までに^{注869}学んだ内容である。稽古の形式はひたすら形の反復練習で乱取りのようなことは初期の段階では全くやらなかったという。f、g、hは、1943年6月12日の卒業まで最も熱心に^{注870}合気武道の稽古に打ち込んだ百々和の指摘である。^{注871}

では、富木の指導はどのように行われたのであろうか。その指導は形に徹して実力を養成していこうとするものであった。中川によれば、富木は合気道を理論化し、体系化した人だが、実際の稽古の時はあまり理屈はいわず、ひたすら基本を繰り返し練習させる方法で教え

^{注869} 中川氏は、1940年の秋に発熱し肋膜炎のため長期入院、翌1941年3月から1942年の4月まで休学し、日本で静養した。以後合気は活動していないという。

^{注870} 百々和氏は、「合気道を修練するものは、毎朝食事前の一時間、それに週一回の正課、特に熱心なものは放課後、集まって練習しました。私は特に熱心なグループで、正課、毎朝と放課後、約六年練習を続け、卒業の時に四段をもらいました」と回顧している。前掲書、百々和 (2001) 合気道と私, p.4.

^{注871} 筆者の草稿についての訂正依頼に対する百々和氏の加筆訂正文。百々和書簡（1991年2月16日）に同封。

たという。これは部での熟達者に対する指導の回想であろう。^{注872}

二期生合気武道部の橘満雄は、正課授業の様子を中心に、場所、礼式、雰囲気に至るまで、簡潔に次のように回顧している。^{注873}

「正課では立位、座位の徒手、対短刀、太刀、棒、銃剣の打撃、突き、関節技などの形を中心に習いました、教授法は[助教の]大庭さんが来られるまでは、柔道高段者の水野潔[二期生]らを相手にまず模範を示し、相手の気をいかに利用するかを丁寧に教示された後、学生相互で練習をするという形式をとっておりました。/養正堂が建設されるまでは、教室棟の一階大教室、後に八紘塾の中央にある食堂の二階の集会所に畳を敷き道場代わりに使用していました。養正堂では稽古の前後には日系、満系をとわず一同演壇の方に向かい正座して神式による拝礼をします(正面に神棚があったかどうかは記憶にありません)。満系の学生は柔道、剣道と違って、日系学生も初めて始める武道であり、彼我同時スタートということもあってか、柔・剣道よりも興味を示していたようで、各民族混合で和気藹々のうちに稽古が続きました。/課外の稽古は形はもちろんですが、乱取りを中心に励み、力を競いました。」

また橘は、^{注874}軍訓の時間に銃剣術の訓練を受けたが銃剣術にはあまり興味が無く、「木銃に相当する長い棒対徒手、木刀対長い棒の練習」に励んだという。課外活動のメンバーは正課経験者であるから、指導に際して当然に基礎的内容が省略されることになったようである。

なお、対銃剣の練習については銃剣道部山下光一の次のような思い出がある。^{注875}

「合気武道は富木先生という立派な方がいらした。印象深かった。合気道は回数は多くなかったが授業でやったと思う。手刀で構えているところに[銃剣で]突いていくと、富木先生さっと懐に入られた」という。

さて、中川によると、彼が習った1940年ごろまでは技の名称もなく、前述のように富木は手順だけを書いた折畳みの紙を配布したという。学生の自習の便を図ったものであろう。また、相手の力を利用すること、無理がない自然なのがよいことが強調され、話が武道や芸ごとに及ぶと滔々と話したという。なお、服装は無段者も含めて全員が柔道衣に剣道袴であったという。

では、こうした指導を通して学生たちは何を学んだのか。このことについては、学習者の主体性、意欲によって当然大きな違いを見せる。剣道、柔道の教育を含めてこれまでの考察の際に依拠した『歡喜嶺 遙か』などの文集を見ていると感じられるのであるが、建大の教育が学生たちに与えた精神的な影響は、訓練科目よりも講義科目担当者からのものの方が一般

^{注872} 授業での富木の指導について、「合気武道の授業は理論ばかりでした。実技やっても、私が好きでなかったから、いい加減やっていたかもしれませんがけれども(笑)、理論ばかり耳に残りましたな。」という証言があるからである。志々田文明編(1994)建国大学一期生弓削力氏との対談, 早稲田大学体育学研究紀要 26 : 114.

^{注873} 橘満雄書簡(1991年10月17日)

^{注874} 橘満雄書簡(2000年7月27日). 拙稿銃剣道関連論文を読んでの書簡。

^{注875} 山下光一聞き取り調査(2003年3月17日, 電話)

に大きいということである。^{注876} 農作業に徹することを教えた藤田の場合でさえも、彼の農本主義的であり石原莞爾的現状批判の思想と大胆で率直な説諭の言葉がなかったならば、果たして馬小屋事件^{注877} を起こした学生たちに象徴される学生たちに影響を与え得たかどうかは疑わしいと言えまいか。思想を背景とした言語を一切媒介としない行は、それが何であれ人間に影響の点で乏しいと思われる。富木の場合は、合気の稽古に絶えず言葉が伴い、それによって学生に与えた影響は大きかった。一部には人生の教訓をくみ取っている者もいる。先に百々和随想にその一端を見たので、次に一期生合気武道部・李水清^{注878} の場合を見よう。

「先生から多くの教訓を得ました。例えば、

- 一、学び道には、守、破、離の段階があり、この順序を堅く守らなければならないこと。
- 二、後の先の呼吸。

など生涯忘れ[得]ない教えで、武道としての教えだけでなく生活全般に一貫されて居ます。」

上記一は大きく飛躍して自己を確立するには基本を大切にしなければならぬという教えである。それは正に合気武道の近代化を行うに際して、富木自身がとった態度でもあった。以下に見るように富木はその免許を得るまで「守」に徹して植芝に従ったからである。

二は相手の攻撃に対する反撃の理である。それは相手の攻撃を待つのではなく、先をとって攻撃する心身の準備の大切さの教えと解釈されようか。李水清もまた、戦中・戦後の困難な人生のなかで、この教えの重さを感じたものと理解される。

また、李水清は約3年後の書簡で、^{注879} 「合気道について何を体得したか反省し」た結果として、「(1)入身、(2)轉身、(3)後の先、の三つが私の得たものと思っています」と記している。入身とは、相手の懐に捨て身で飛び込む術理、換言すれば、「虎穴に入らずんば虎児を得ず」、轉身とは、相手に応じた体捌き、柔道で言うところの柔の理、後の先は、逆転の方法であろう。術理を人生の智慧として理解を深めたのは李水清個人の資質によるものであるが、合気武道の指導者の見識と理論とが相俟ってなったことでもある。次に富木の武道理論そのものを見ることにする。

(5) 合気武道の理論化

植芝が昭和の初年に海軍大将竹下勇らに教えた時には、大東流の技の名称である一ヶ条、二ヶ条を用いていたが、^{注880} 大東流から独立してより大きな勢力となっていた昭和十年代の植芝は、少なくとも大東流との関連でそれらの名称を使用しないようになったようである。

百々和聞き取り調査(1980年8月24日、於百々宅、成山哲郎氏同席)によると、建大での合気

^{注876} この総括は、『歡喜嶺 遙か』上下巻等の味読、武道関係の沢山の方々の教示に依る。

^{注877} 一期生七名が勝手に塾での生活を止め馬小屋に籠って生活した事件。彼らは藤田塾頭から、例えば、六十余万坪の建大を作ったために、土地を追われて泣いている人々の存在を知らされていた。歡喜嶺 遙か(上巻), pp.382-387. の坂東勇太郎「農場への道-藤田先生・馬小屋事件」参照。

^{注878} 李水清書簡(1988年5月14日)

^{注879} 李水清書簡(1991年6月28日)

^{注880} 前掲、「海軍大将竹下勇・武術日記」と大正15年前後の植芝盛平、武道学研究 25(2): 1-12, 1992.

武道の授業及び課外の稽古で、富木は技の名前を、押し倒し、引き倒しと称し、一カ条、二カ条、一教、二教という言葉を使っていないという。押し倒し、引き倒しは富木の命名と思われるが、もし植芝が一教、二教と技に名称を付与していた場合には、植芝に絶対服従していた当時の富木は必ずそれを使用せざるを得なかったと思われるから、この時代、植芝は技法名を少なくとも明確には用いていないと判断される。1936年春に満洲に渡り、関東憲兵隊教習隊教官等各所の指導をしていた富木は、1937年7月の段階で、「合気武術教程」を「憲兵教習隊兵教育用」として編纂していた。^{注881} 1938年12月発行の改訂版の付図「内容一覧表」は技法体系を整理したものであるが、例えば、「斬撃ヨリ抑へ二入ル」「正面（相半身）」等の記述であり、未だ明確な技法名はみられない。富木は建大その他での教育・研究を生かして技法に名称を付与し、それを短剣術、軍刀術、銃剣術へと関連づけて^{注882} 合気武道の特色を理論化させていったものと思われる。

一カ条、あるいは一教といった名称はいわば同門の中だけに通用する隠語であり、そこには許しを与えた者以外には教えないぞ、という含意がある。それにたいして広く大衆に伝え、それを大衆の共有財産にしようとする開かれた考え方が競技武道を中心的な内容として内に含む柔道、剣道にはあった。これら近代化された武道では、技の名称はそれを用いることによって技が理解しやすいということが第一に考えられている。柔道にみられるように、背負って投げるから「背負い投げ」という表記法である。富木が合気道を近代化し柔道、剣道のような近代武道にしようとする限り、上にあるような客観的な名称を工夫するのはいわば当然の成り行きであった。

百々は次のように述べている。^{注883}

「満洲時代というのは先生がご自分ですべてについて考えておられた時代でしたね。先生はいつも柔道と合気道との関係を理論的に説明されました。技の説明は力学的で自然体の理、崩しの理、柔の理などの技の原理についてはよく話をされました。柔道の嘉納先生の影響は話の端々に窺われました。構想としては合気道の競技化のお考えをもっておられたようでした。/富木先生は独立してやっていたましたが、植芝先生との関係はうまくいっていたと思います。先生は植芝先生の強さと独創性を尊敬しているようでしたし、植芝先生は、理論家としての富木先生とその人柄を尊敬しているようでした。」

「先生は建大時代に、押し倒し、引き倒し、小手捻り、小手回し、正面当て、相構え当てなどの名称を用いて指導していました。練習は必ず手刀による打ち込みや当て身から入りました。逆構え当ては記憶にありません。先生は合気の技を『離隔者間の技』といていたと思います。」

富木はかつて筆者に、“自分は植芝先生に免許を頂いてから色々工夫をした”と語ったことがある。免許とは1940年紀元節の八段昇段のことを意味する。中川は、富木が嘉納治五郎

^{注881} 筆者は右の合気武術教程改訂版を参照することができた。富木謙治(1938)改訂合気武術教程, 名刺二倍大サイズ全84頁に付図あり。

^{注882} 同上, 付図。

^{注883} 百々と聞き取り調査(1980年8月24日, 於百々宅, 成山哲郎氏同席)

の柔術を近代化した功績を語り、自分はそれに倣ってこの合気柔術を近代化すると、きっぱりと語る富木の姿をはっきりと記憶しているという。百々もまた、「富木先生は合気道および武道一般の体系化、理論化、普及化（その一つが合気道の競技化ですが）に努力する信念、傾向を強く持って居られ、いろいろと工夫されておられました」^{注884}と、富木が当時既に構想としては競技化についての抱負を抱いていた事を記している。加えて1945年時の富木の研究を証拠づける七期生柔道部片桐松薫の次の証言もある。

「一度、富木先生と、ボクシングのようなグローブを着装した八木[正弘]先生の実技を見学したことがあります。軽々と身をかかわす富木先生に打ちかかる八木先生が汗だくだったことを良く憶えています。」^{注885}

1940年2月の八段允許後、富木の心には合気道を競技化、近代化する問題が意識されるようになり、具体的展開を工夫していたと判断されよう。^{注886}

(6) 人柄

中川敬一郎は彦根中学出身、自由な校風の中に育った。建大に入学後、思い悩む学生となる。大学は、五族協和を唱えていたが、夏休みなどを終えて他民族の仲間が帰ってくると、色々知恵をつけてくるせいか、日本民族の過去のことを糾弾されたり、大学の背後にある関東軍の存在に疑問を投げかけられたりした。一方、午後の全ての時間を費やして行われる各種の訓練教育によって小柄な身体は過労状態にあった。これからの人生を考えて建大で生活することの意義を思い悩む毎日を送り、一時自閉症のような状態になったこともあった。^{注887}柔道剣道の有段者が多い建大の中でこれらの武道を行えば子供のように扱われるのは明かであり、前期中合気を課外でやった背景にはこれによって自立の自信を得ていたものと思われる。中川は、「富木先生がいなかったら止めていたかもしれません。」と語る中川の富木に対するイメージは、「温かくて、柔らかい大きな手、というのが私の感じですね。怖いと思ったことは一度もありません」という。^{注888}

また西山龍雄も、「一度も、怒られたことはありません。いつもニコニコしておられた。深刻な、理論的なお話もなかった。」と記している。^{注889}また、二期生部員橋満雄は、^{注890}富木は「体格がごついのに非常に柔和な方で、常に笑みをたたえ」ていたと、穏やかな人柄を偲んでいる。さらに三期の楓元夫はその書簡^{注891}の中で富木を、「一見、冷たそうに見えて、

^{注884} 前掲書、百々和(2001)合気道と私、p.8.

^{注885} 片桐松薫書簡(1993年9月25日)

^{注886} 奥村繁信氏によると植芝はこうした考え方を理解しなかったと次のように記している。「『日本武道を駄目にした人は嘉納治五郎先生である。』(中略)武術ともスポーツともつかない柔道という中途半端なものが出来た。将来柔道は日本の武道を駄目にする。富木にはそれが分からない。非常に残念だとしみじみ私に語りました。そしていっさいの試合事は人の心をますます利己的にし、何かにつけ、この世を濁すばかりである。われも楽し、ひとも楽しいという鍛錬でなければならぬと小生にさとされました。」奥村繁信書簡(1991年2月14日)

^{注887} 前掲、中川敬一郎聞き取り調査(1989年3月17日、於青山学院大学)

^{注888} 同上.

^{注889} 前掲、西山龍雄書簡(1989年10月9日)

^{注890} 前掲、橋満雄書簡(1991年10月17日)

^{注891} 楓元夫書簡「富木謙治先生のことども」(1989年9月15日)

案外気配りの人だったなあと思う」と記しているが、端正な顔立ちで寡黙な富木は近寄りがない印象を与える面もあった。実際はかなり異なり、1940年の秋に発熱し、入院した中川に、病院の食事はまずいだろうといつては、夫人の手料理を持って差し入れに来てくれたという。^{注892} また、別の事例^{注893} もある。1945年5月六期生瓜生敏雄に入営通知がきた。出征の前日、一緒に入営する学生と共に塾頭の富木の自宅に招かれる。

「先生は戦中で物資不足の時節であるのに、食い気一方、食べさせたらどの位食べるかわからない私達を自宅に招いてご馳走してくれた。私達が盛んな食欲を發揮して、見る間に料理を平らげるのに先生の奥さんは、にこやかに見ておられた。/人生二十五年、これは当時の青年の合言葉であった。先生も出征して行く私達の何人かは死んで帰ることを知っていられるから、励ましても慰めてもすべて空しいものであることを知っていられたのであろう。(中略)/最後に先生は立ち上がり、私達のために舞をまわられた。十七年昔のかすかな記憶の中に、先生の舞姿だけが今なお鮮明に眼に浮かぶ。古武士の風格を持っていられる先生は、白扇をひるがえして舞われた。(中略)先生の饞の舞に、私達は涙を浮かべながら見入った。先生は何曲も何曲も舞われた。」

(7) 芸能論と武道

富木という人間の温かさに触れた一文であったが、ここに彼の芸才が見える。次に富木の芸能面での素養に対する学生たちの印象を見ておこう。一期生中川は述べている。^{注894}

「先生は踊りが好きでした。塾のコンパの時などには、佐渡おけさの踊りかたを教えて下され、今でも役にたっています。」「武道の足はこびは芝居の足はこびと同じなんだといわれるんで、一年の夏休みに帰郷したときには、母にせがんで大阪に芝居をみに連れて行って貰いました。」

また、一期生田中昇は記す。「歌舞伎や踊りの腰の据わり、足の運びなど、よく武道の基本に絡めて教えていただいたこと、また、荒事、和事の面の”隈どり”など、極めて素人ながら、一味ちがった芸才をもっておられ、一芸に秀でたものは--と云うような感を覚えたこともありました。」^{注895}

戦後の教え子で富木の踊りの素養について知る者は多くないのではないか。知られているのは富木の書画の方である。これは青年時代に伯父の日本画家平福百穂から学び、嗜みとして稽古を続けていたからと思われる。田中昇は記す。「画才にも大そう秀でておられました。特に画かれた竹の墨絵など、構えることもなくスラスラと、淡々とした筆運びが、如何にも先生そのものの日常を写しとったような感じがしたものです。」^{注896}

また、一期生尾崎照夫(柔道部)は、^{注897}「先生は日本画家平福百穂の甥で、早大の学生時代手ほどきを受けたそうで、旧日、当直室で直接その筆法を手ほどきして貰い、今でもス

^{注892} 前掲、中川敬一郎聞き取り調査(1989年3月17日、於青山学院大学)

^{注893} 瓜生敏雄(1962)にぎりめし、暁鐘(福岡県警察機関誌), pp.2-5.

^{注894} 前掲、中川敬一郎聞き取り調査(1989年3月17日、於青山学院大学)

^{注895} 田中昇書簡(1989年9月15日)

^{注896} 同上.

^{注897} 尾崎照夫氏書簡(1990年12月1日).

ケッチは木炭か、細筆の毛筆ペンを使い、集まって見にくるご婦人や小学生を驚かし（中略）喜ばれている」という。

富木の嗜みは新三期柔道部の藤原敬司にも影響を与えた。「心酔しますね。富木さんには。そしてあの相当いい絵を描かれるとね、武蔵の宮本武蔵、塚原ト伝とかはこういう人かという印象を与えますものね。」^{注898}

学生の言葉の背景には富木の芸事の実技能力のみならず、研究の裏づけもあった。その一端を知ることができるのが、1943年の研究院月報に掲載された富木の「『形』と理法」である。^{注899}ここで富木は、武道の形は、技の背後にあってこれを生かし働かす根本の理法を仮定し、その形相としての表現が形とする。理法は技に即し、形相に即してのみ悟ることができるとして、形の修行の重要性を説いて、禅法修行の守破離に言及し、最後に支那の画論「六法」（気韻生動、骨法用筆、應物象形、伝移模写、随類賦彩、経営位置）に及ぶ。気韻生動は画の生命であり、他の五法は如何にしてこの正動を画面に躍動させるかの手段、そしてそれらの五法もまた骨法用筆の一法に帰納されるとして、骨法の詳細論を展開し、「骨法を悟るものにして、始めて自己の構想を縦横自在に紙面に表現し得るのである。恰も、武道の理法を悟るものにして、始めて機に臨み、変に応じて無礙自在のはたらきを得るやうなものであります」と結んでいる。

3. 合気武道部

(1) 創部の頃

一期生李水清の二通の書簡から見てみよう。

「建大は全員塾に起居し、朝は五時半に起床、六時に朝礼、その後七時二十分頃まで自習時間で、私はこの時間に道場に出て殆ど毎日富木先生に手をとられて稽古して参りました。」^{注900}

「同好会という名義ではなかったが、有志の集り、武道の稽古、読書、講義、語学、等の会合は入学の年（昭和13年）の夏頃から始まりました。^{注901}富木先生の御指導による合気道の稽古は夏休み前かその直後か、よく憶えていませんが、当時学生課におられた根本龍太郎先生もよく来られて一緒に稽古された記憶があり、根本先生は十三年[マ] ^{注902}の秋には転勤されたから、[部が始まったのは]その以前でしょう。又、富木先生の他に的場先生という方がおられてよく指導して下さいました。的場先生も非常に立派な方です。」^{注903}

起床時間が既にこれまでの考察でほぼ特定した時間よりも30分早いのに気づく。全体に新

^{注898} 歡喜嶺訪中団随行聞き取り調査(1992年9月21日)

^{注899} 富木謙治, 「形」と理法, 建国大学研究院月報 (No.30), 1943.6.25., p.7.

^{注900} 李水清書簡 (1988年5月14日)

^{注901} 李水清氏は、筆者が送った富木謙治評伝の草稿に朱筆を入れて、1989年9月20日付けの李水清書簡に同封して返送されたが、そこでは「第一学年の夏休みの後、九月頃からつくられた」とある。

^{注902} 鈴木昭治郎氏によると、建国大学要覧(康德6年度版, 1939.6.15)には助教授(農学)として掲載されている。

^{注903} 李水清書簡 (1989年9月20日)

しい大学建大への思い入れが入っていた開学当初においては、そのような時期があったのであろう。一期生の第二学期は8月1日（月）から開始されているので、朝稽古による課外活動の開始の時期は8月以降の第二学期の早い時期と思われる。

早朝、太鼓の音で起床すると、外の広場に集合し体操をする。続いて塾内の掃除、塾舎での正座黙想。その後朝食までの自習時間に毎朝、富木謙治の指導を受けたという。部でも同好会という名義でもなかったが、こうした有志の集まりが入学の年1938年の夏頃から始まったのであり、それは富木が正式に建大助教授に任命（1939年2月4日）される以前のことであった。富木にひかれて参加するものが多かったという。

百々和によると、^{注904}朝の稽古に参加した者は二、三十人、その他特に熱心な者は、午後の訓練科目が終わった後に集合し、稽古を行ったという。その数は百々和、近藤秋太郎ら約5名であった。

(2) 部員・部風・民族性

建大における課外活動の呼び方を、二期生西村十郎は「指導自習」として次のように認識している。

「夜の自習訓練では、学術訓練、武道訓練に各自が自主参加して、教官や先輩の指導を受けこれを指導自習と云いました。/全満柔道大会でも常に優勝したので、柔道部が存在するように誤解もされたが、事実は萬田先生と助手（中島先生？）それに一期の高橋武雄氏、二期の水野潔氏等が自主指導されたのであり、私が参加するといつも高橋氏が指導され、何度も何度も投げられへとへとになったが、或る時『得意技は？』と聞かれ『内掛けです』と答えると『やってみよ』と云われ、実行すると巨漢の全満覇者が仰向けに倒れてくれて、『名も技も相撲のようだな』といわれたが、これを萬田先生が笑顔で見ておられて、しめくりに先生に数回足払いで投げてくださいました」^{注905}

柔道の場合の様子と雰囲気から見事に再現したものであるが、建大の武道部は、ここから始まった学生が熱心にある期間継続した場合に、自らあるいは周囲の者によってあるいは部、あるいは同好会、班と認識していったものと思われる。本研究においてはそのような側面を強く持っていたことを踏まえて、柔道の章などで見たように強く部の意識を持つものもあることから、部の言葉を使用した。合気武道の場合は、富木のまわりに集まった正しい意味での同好会であり、特に出欠をとることもなく、主将等の役職が決められることもなかった。百々和によれば、訓練科目の中で「自分に適合する武道があれば、適時（朝食前の自由時間と午後講義が終わってからの自由時間）同好会的に練習したのであって、戦後の大学のように」なものではなかった。^{注906} 従って部員を云々することの難しさを次のように語る。

「部組織をとっていないため、特別に練習した人が、長いので六年、短いので一年とまちまちで、誰を部員ということは出来ませんし、誰が何年やっていたともいえません。比較的永くやっていた人、また演武に出た人が主将格であったと思います。相撲でいえば安君がお

^{注904} 百々和聞き取り調査（2003年4月1日）

^{注905} 西村十郎書簡（1993年6月24日）

^{注906} 百々和書簡（1991年2月16日）

れが部長だったのだといっているように、外の間人はあまりそれを知らず、強かった星野が主将だと思っている様です。」^{注907}

しかし、既述のように熱心なメンバーは朝稽古、午後稽古の二回を行っていた。

「朝食前は富木先生も出てこられ、全員で『型』を主として練習しました。放課後はその中で特に熱心な連中が、より高度な『型』の練習、その後には『乱取り』をやっていたと思います。中川、中垣等は病気で休学したので、最後までやったのは故近藤[秋太郎]氏と私、その他少数の者でした。講義の時間が違うので、下級生と一緒に練習することも少なく、上下の関係は余りありません。」^{注908}

関係者の証言を参考に、午前午後いずれかの稽古に参加していたと思われるメンバーを以下に記しておきたい。

<一期生>

- ・日本：百々和、近藤秋太郎、西山龍雄、中川敬一郎
- ・朝鮮：韓義旭
- ・台湾：李水清、黄山水
- ・中国：楊慶樹^{注909}（在天津）
- ・ロシア：セレデキン

<二期生>

- ・日本：永島清、伊藤義郎、橘満雄、増岡康紘
- ・台湾：游海清、頼英書、蔡傑川（宋傑）

<三期生>

- ・日本：奥村繁信、柳沢繁邦（故人）
- ・朝鮮系の愈英濬（在米国）
- ・台湾：呂芳魁、游禎徳
- ・中国：万興治

<新制三期生>

- ・台湾：紀慶昇^{注910}

<四期生> ~ <八期生> 不明

なお、筆者は『写真集建国大学』p.86^{注911}に収載された富木を中心にした「合気武道部」の写真を、三名の関係者に依頼して人物の特定を試みたが不明のメンバーが多かった。この写

^{注907} 同上。

^{注908} 同上。

^{注909} 鈴木昭治郎氏によると、建国大学要覧（康徳6年度版,1939.6.15）の学生名簿では「樹」の字の木偏がさんずいであるという。

^{注910} 新制三期以降の人物については、現在までのところわからなかった。この事について五期生までは知っている可能性のある伊藤義郎氏（43年12月学徒出陣）は、「先輩は怒られ、教育されるので、覚えているのだが、後輩については、覚えていない」と筆者に語られた。その後五十年という歳月の長さを感じさせる言葉であった。

^{注911} 建国大学同窓会編、写真集建国大学、1986。

真は二期生の稽古の前後に撮ったものと思われる。^{注912}

一見して感じられるのは民族的多様性である。特に台湾系の学生が多かった。その原因はどこについて百々和書簡は、^{注913} 一期生李水清を中心に「郷党的にまとまっていたので、彼が富木先生を慕って合気道を始めたのが、台湾系の人々が多く始めた結果になったと思」うと記し、台湾出身者に対する李水清の強いリーダーシップを認めている。

ではその他の民族も多かった理由は何か。二期の橘満雄書簡は、^{注914} 「満系の学生は柔道、剣道と違って、日系学生も初めて始める武道であり、彼我同時スタートということもあってか、柔・剣道よりも興味を示していたようで、各民族混合で相対し和気藹々のうちに稽古が続」いたと記してその理由を解説している。以下、憶測してみると次の理由が考えられる。

まず、橘説の裏返しになるが、柔・剣道は日系学生の多くが経験者であり、初心者は剣道部または柔道部にクラブに入っても、投げられ、打たれることが目に見えているが、合気武道の場合、日系も日系以外の学生も同時スタートであり、対等に出来ることは大きな魅力であったに違いない。第二は比較的体力に自信のない者には取り組み易かったことが挙げられよう。中川敬一郎が「小さい者がみな合気道をやったのです」^{注915} と語るように、合気武道は当初は形の練習に終始し、それを重視したからである。第三には上述したような富木の教育者としての見識、武道家としての実力、^{注916} 既に見た温かな人柄があげられるが、富木の場合、中国人学生から信任を得るさらに決定的な出来事があった。

それは、1941年12月から始まる満系学生に対する逮捕に際してとった彼の行動への評価であった。

富木は反満抗日の思想犯で捕まった一期生柴純然が獄死すると、自ら満系の学生を伴い憲兵隊の獄舎を訪ねて遺体の引き取りに行った。当時思想犯に対する扱いは厳しく、先に満系学生が差し入れにいった際には獄吏に怒鳴られ、泣く泣く追い返されており、富木がどのように行動するかは満系学生にとって富木という武道家の人格を評価する試金石であったと思われる。

- ・ 志々田：柴さんの遺体をもらい下げて来るときに、富木先生が遺体に手を合わせていたというお手紙を頂戴しましたが・・・
- ・ 劉之謙（旧姓劉興潭）：そうです。とても感動させられましたよ。
- ・ 志々田：どうしてですか。誰だってやるでしょう。

^{注912} 筆者の問い合わせに対する三期生奥村繁信氏の判断によると右のとおり。前列左から永島清、増岡康糺、頼英書、師連第、富木謙治、谷口勉、永田幸男、游海清、後列左から橘満雄、中川敬一郎（留年の為）、アボロマソフ、銭端本、呉宝新、伊藤義郎、孫從善、呉昌禄、水野潔、蔡傑川。

^{注913} 前掲、百々和書簡（1991年2月16日）

^{注914} 前掲、橘満雄書簡（1991年10月17日）

^{注915} 前掲、中川敬一郎聞き取り調査（1989年3月17日、於青山学院大学）

^{注916} 中川敬一郎によると、一期生はみな富木が合気武道の実力者であるのみならず、1929年の天覧試合の柔道府県選士であったことを知っていたという。

- ・劉之謙：いや、やらない。お辞儀だけです。
- ・齋藤精一：だって犯罪者ですからね。あんまりね・・・
- ・志々田：富木先生とはよくお話しされましたか。
- ・劉之謙：仲良いですよ。〔後期塾舎の〕隣の部屋だからね。富木先生は合気武道の先生でね。とても温厚な親しみのある先生で、みな先生と話したいという気持ちで一杯です。

富木先生は優しい先生で、その時ね、先生は自ら出てね、その時の中国の満系の学生にとって、あの先生は偉い先生で。本当に狭いことを考えなくてね。学生と先生の本当の情というのがね、通じる心になっていましたね。あの時は満系の学生はみんな感服しました。先生の行動にね。

・齋藤精一：日本人の先生はね、みんな立派な人なんだけれどもね。やっぱり態度とかね。ものの言い方でね、日本人にはわかってても満系の人にはわかりにくいというかね。非常にひどく感じる人があったわけですよ。性格上ね。ところが富木先生は我々には勿論いいし、満系の人たちにも非常にわかりやすいし、優しいしね。

・劉之謙：尊敬していますよ。その時の学生は富木先生といったらね、言うことをみんな聞きますよ。そのくらいの人気を持っているんです。富木先生はあんまり物事を言わない先生でね。

勿論毀誉褒貶は古今東西世の常であり、富木にも色々な評価や好悪があったことは間違いないだろうが、指導者の人柄もまた、日本人以外の民族学生や既成の武道を得意としない学生にとって入り易い雰囲気形成していたと思われる。

最後に付け加えておかねばならないことは、一方でこの部は、数は少ないが百々和や近藤秋太郎のようにその六年間を徹底して合気武道に打ち込ませ、卒業時に四段を許された学生を生んでいる。ここでもまた学生に様々な態度での取り組みを許容する、剣道部、柔道部に通底する建大らしい多様性と自主・自律性の存在を見ることができる。

(3) 活動

合気武道は、試合（競技）がないため、学生にとっての晴れ舞台は学内外での武道大会などでの演武会や日本の皇族などが見学に来た時の演武会であった。中川によれば、^{注917} 1940年6月12日（水）に高松宮が来校した際には、西山と組んで上手な西山が受け、自分が取りをさせてもらって演武をしたという。こうした賓客に対して演武することは彼ら部員にとっては試合に代わって平素の稽古精進を示す最高の場であったと思われる。

1942年8月8日、満洲の武道界で最大のイベント「建国十周年慶祝日満交歓武道大会」（於神武殿）が行われた。この大会には満洲国皇帝、関東軍、政府などの最高幹部が悉く臨席して行われたもので、建大全学生が見学した。建大の合気武道部はこの大会にも演武の機会を与えられ、橋満雄によると、^{注918} 近藤秋太郎-百々和組、西山龍雄-（不明）組ほか8名が晴れの演武を行ったという。

^{注917} 中川敬一郎聞き取り調査（1989年3月17日，於青山学院大学）

^{注918} 橋満雄書簡（1991年10月17日），及び橋満雄，建国大学と私，前掲書，歡喜嶺 遙か（上巻），p.166.

植芝盛平顧問、富木謙治教授、大庭英雄助教

一期生：近藤秋太郎、百々和、西山龍雄

二期生：伊藤義郎、増岡康紘、橘満雄

三期生：奥村繁信

四期生：井馬煌一

不明一名

なお、この時の植芝の演武は長く語り継がれるほど見事であつたようで、橘も「このとき顧問の植芝盛平先生の神技を見た」と記している。この時の植芝の受けは富木の高弟で建大の合気武道助教であつた大庭英雄が行つた。大庭はこの時、いつもの柔らかな攻撃ではなく、真剣な攻撃（受けるための攻撃）をして植芝にかかつていった所、植芝は全身毛が逆立ったかのように怒気を含んで技を施した。植芝は勝手の違う大庭の攻撃に我慢できず、控え室まで戻る前に、大声で大庭に叱正を与えられたという。しかし演武後の評判は素晴らしかったのである。^{注919}

もう一つ植芝、富木、元関脇天龍・和久田三郎が演武したと伝えられる1940年11月23日の演武会がある。三期生楓元夫の証言を聞こう。^{注920}

「私たち（建国大学三期生）が入学した年の初夏、首都新京（現長春市）の中心部に諸武道の演武、対抗試合を行うための殿堂（振武殿[神武殿]）が完成し、こけら落としとして各武道のデモンストレーションと全満（全満洲）大学対抗武道大会が行われた。そのエキジビションの華が実は合気道の演武であり、小人と思えるような植芝範主[マ]が、巨体の『天龍』（元大関[関脇]）を投げ飛ばし、富木先生との華麗な『型』を見せ、満堂の観衆をうならせた」という。

4．おわりに

楓元夫は、^{注921}「この合気道部は、恐らく大学における『部』としては草分けであり、日本のみでなく『世界の合気』のために撒いた一粒であつたと言えよう」と記している。実際、富木が育て教育したこの部から、戦後の合気道界に一人の指導者を生んでいる。三期生奥村繁信である。奥村は植芝とその後継者らの「非合理主義の大道」を選び、戦後の植芝の合気道界（財団法人合気会のグループ）に多大の貢献をした。ただ、それは富木が建大を足場に研究を重ねた「合理主義の新道」の道ではなかつた。

日本の敗戦、満洲国の崩壊、建大の閉学、富木のシベリア抑留という歴史の荒波も、戦後の日本の復興、植芝の合気道本部道場の復興、富木の帰国（1948年暮れ）によって新たな可能性を見せた。しかし、戦後の植芝合気道の発展の流れのなかで、富木はその研究の成果を生かす場を失っていった。師を取り巻く人々、つまり若い富木の後輩達との対立が深まり、富木は恩師植芝の前から静かに退場することになる。植芝の合気道界は令息吉祥丸の奮闘で世界的に発展して今日を迎えた。一方、富木の合理主義の新道は、1958年春に早稲田大学に

^{注919} 志々田文明(1991) 大庭英雄師範略伝, 日本合気道協会, pp.22-24.

^{注920} 前掲, 楓元夫書簡「富木謙治先生のことども」(1989年9月15日)

^{注921} 同上

合気道部が創設される際の条件であった「合気道の競技化」という課題を与えられることによって具体的歩みを開始し、^{注922} 独自に合気道競技を生みだし、合気会、財団法人養神館、財団法人気の研究会など‘非競技’の合気道会派と併走していくことになる。^{注923} スポーツ団体が1つの組織に統合されていることから、これを流派对立と見て武道界の古い体質とする評価がある。果たしてそうであろうか。武道には、とりわけ合気の世界には競技に収斂することのできない形の修行によって達成されと思われる驚くべき質の技の世界^{注924} があり、非合理主義と合理主義の併走は、合気道界の多様性と考えるべきであろう。

^{注922} 富木謙治 (1978) 合気道の過去・現在・将来 -- 創部二十周年を祝して, 早稲田大学合気道部二十周年記念誌. 富木の武道に対する戦後の考え方は、前掲書, 『武道論』(大修館書店, 1991)収載の諸論文参照。

^{注923} 合気道界各会派については右稿参照。Shishida, Fumiaki, Aikido, Encyclopedia of World Sport, 1 ed., Santa Barbara, ABC-CLIO, pp.17-22, 1996.

^{注924} 植芝盛平の弟弟子に当たる大東流合気柔術指導者佐川幸義の技術性は植芝とその氏武田惣角を超える水準に達したといわれる。右稿でその関係を論じた。志々田文明(1997)合気道基本概念の検討と「武」の多様性, (財)水野スポーツ振興会助成金研究成果報告書, 日本スポーツ史における「武」の問題, pp.37-54, 1997

第9章 弓道の教育 --身心合一・正射必中

弓道教育はその伝統性からみた場合、剣道と並び称される日本武道であるが、建国大学の武道教育の中では四番目の地位に置かれた。明治以降の近代教育の要請であった強固な身体や気魄、敢闘精神を養う教材としては柔・剣道に数歩を譲らざるを得ないからであろう。建大では、1941年に第一期生が後期に入った際に、後期学生に対する訓練科目の授業の一つとして置かれた。本章では、その教育実態の解明を狙いとする。^{注925}

1. 選択科目としての弓道

1940年5月10日、建国大学学則全36条（国務院令第20号）^{注926}が制定された。その第3章・後期学則の第2節・訓練及び学科課程によると、訓練課程は前期の課程である精神訓練、軍事訓練、武道訓練、農事訓練に加えて操作業訓練（自動車、ライダー等の操作）が課され、上記武道訓練科目のなかに弓道が加えられ、学生は後期が開始される1941年2月から選択必修としていずれか一を履修することになった。

しかし一期生弓削晃書簡には、「前期三年では選択科目となり弓もその[柔道、剣道、合気武道の]中に入れられ」^{注927}とあり、弓道の授業は一期生が前年3年なるの1940年第二学期に前倒しして選択科目として行われた可能性がある。ただ、前期学則の変更についての資料がなく、結論は留保しなくてはならない。

1941年2月1日（土）、一期生約120名が後期に進級した。一期生安田文夫書簡によれば、^{注928}「私達一期生のうち弓道を武道訓練の正課として選んだのは10数名位ではなかったか。日系は堀川弘、弓削力、^{注929}安田文夫の3名、鮮系も李用けい^{注930}（日本名平山峰秀）1名だけで、後は満系の諸君だったと思うが、顔廷超、王作民、劉箴の3名のほかは名前を覚えていない」という。同じく一期生弓削晃も、^{注931}後期授業の弓道選択者は10名足らず、日系がほとん

^{注925} 弓道教育の実態については、論文「建国大学における武道・課外活動 - 『満洲国』建国大学における武道教育(2)（早稲田大学人間科学研究 5(1)：105-121, 1992）で他の武道教育と共に明らかにしたが、なお調査不十分なものであった。直後に出版された『歡喜嶺 遙か』上・下巻(建国大学同窓会, 1991)には250名を超過する旧学生・関係者からの追憶の文章が掲載されているが、弓道に関する記述は殆どなかった。そこでこうした空白を聞き取り調査で埋めて、論文「建国大学における弓道教育」（武道文化の研究, 第一書房, pp.329-350, 1995）を著した。本章はこれらを修正・発展させて執筆したものである。

^{注926} 前掲, 建国大学要覧(康徳8年度版, 1941.7.25), pp.28-29.

^{注927} 弓削晃書簡(2003年4月8日)

^{注928} 安田文夫書簡(1994年2月24日)。この書簡はB判レポート用紙9枚に及ぶ詳細なもので項目別に筆者の質問に応えられたもの。その後補足の聞き取りを行なって記述に生かしているが、本文の鉤括弧内のもはこの書簡からの引用である。

^{注929} 弓削晃氏は一時期「力」の字を使用しているためこのように記したと思われる。現在は晃を使用されている。

^{注930} 「けい」の字は「日」の下に「火」を置く構成の字で「ケイ」と読む。使用した日本語辞書に登載されていないため「けい」とした。

^{注931} 志々田文明(1994) 建国大学一期生弓削力氏との対談, 早稲田大学体育学研究紀要 26: 112. なお弓削氏に対する聞き取り調査は1992年10月9日に実施。

どで、少数の他民族がいた、という。さらに、王作民書簡によれば、^{注932} さらに満系に胡鐘銑、朱鳳翔が加えられた。

授業は週1回程度で、学生に対しても各人専用の弓道衣、袴、弓、矢、矢筒、ゆがけ等が貸与された。

弓道選択の動機については、弓削晃、安田文夫の次の証言がある。

・「弓を始めてから人間相手の闘争ということに対してはあまり。だから柔道、剣道、銃剣術、合気武道も全部ニグレクト。弓で始めて自分の個性にあった武というものを見付けだしたということでしょうね。ということは、弓は人を相手にしないでしょ。的というか物を相手にした。」(弓削晃)^{注933}

・「有段者の多い柔道、剣道、合気武道では、彼らの稽古台になるだけであり、どうせやるならまだやったことのない弓道、特に弓道は体格とか、腕力とかに関係なくできる武道であり、躊躇なく弓道を選んだ。弓で始めて自分の個性にあった武道を(武道というものを)見付けることが出来たと弓削君が知っているが、^{注934} 自分の思いも全く同じであり、今もその気持ちに変わりません。」(安田文夫)^{注935}

また、1941年に入学し1943年に後期に入って弓道授業を選択した新制三期山口弘の場合は、^{注936} 静岡中学の三年生から病気で一年以上に亘って柔・剣道を禁止されたため、「弓道を選択する以外になかったのが実際」で、「消去法による結果」だったという。

三例ではあるが、格闘技を好めないこと、新奇さを感じたこと、体格差に影響されない平等的な性格などが選択の動機であったことが窺われる。

はじめ弓道の授業は、安田によると、^{注937} 教室棟の武道場のなかに巻藁を持ち込んで行なわれた。

1941年6月28日に大武道場・養正堂が開場された後はそこで行なわれたが、弓道場は設置されていなかったため、廊下で巻藁に対して射法の基本(足踏み、胴造り、弓構え、打ち起こし、引き取り、会、離れ、残身・残心の一連の動作)がみっちり指導された。また、二期生椿武は、^{注938} 「週二回程でしたが養正堂(武道館)で畳を前方の壁に立て、それに的を置いて練習した次第であとは捲[マ]藁で練習したことを覚えております」という。それ以外の稽古としては、畳を壁に掛けてのものと屋外のもののが伝えられている。

山口弘は、^{注939} 「後期二年(1944年)の時、食堂で畳を壁に立て掛けて矢を射る稽古をした

^{注932} 王作民書簡(1994年3月1日)

^{注933} 前掲、志々田文明(1994) 建国大学一期生弓削力氏との対談, p.112.

^{注934} 筆者は1992年10月9日に一期生弓削力氏と対談した。その際の弓削氏の発言内容をまとめたものを安田氏に送付して質問したため、ここではそこの弓削氏の発言を指している。同上拙稿を参照。

^{注935} 前掲、安田文夫書簡(1994年2月24日)

^{注936} 山口弘書簡(1994年4月18日付)。この書簡は便箋12枚に及ぶもの。それによると山口氏は部員ではなかったというが、後期の弓道選択者として真剣に取り組んだ様子がうかがえる。

^{注937} 安田文夫聞き取り調査(1994年3月15日、電話)

^{注938} 椿武書簡(1991年2月1日)

^{注939} 前掲、山口弘書簡(1994年4月18日)

ことは覚えている。畳を立てかけると、小指の頭ほどもある大きな南京虫がたくさんいたからだ」と記している。

同じく新三期の松本明の記憶では、^{注940} 畳を壁に立ててやったことはなく、広い建大の敷地内にある無数の小さい丘を利用しそこに的をおいて稽古したことはあるという。また椿武は、^{注941} 「ただ時に屋外で大的を設置して遠矢をしたことがあったと記憶しています」という。これらが何れもなされていたとすれば、加川が多様な指導を工夫・実践していたことが窺える。^{注942}

2. 指導者・加川満喜と指導法 -- 身心合一・正射必中

まず三名の学生の加川評を見てみよう。一期生安田文夫は、加川から受けた指導法の特徴として次の点を指摘している。^{注943}

「最初に教えられたことは、弓の矢を的にあてる技術を習得することが弓道の目的・練習ではない、まず、正式な射法を学ぶこと、正式な射法とは身心を合一して矢を射る法であり、この射法で矢を発射すれば矢は自ずと的に向かって進み的に当たることになる、このため巻藁に向かったの練習を疎かにしてはならない等である（射法を学ぶとは体得すると云った方がよいかもしれない）。」

三期生の後期選択者島田重弘は、「加川先生は、物事を真っ直ぐ見ておられる方だった。私が狙いにこだわり、無理にやろうとした場合など、自然になるようになる、真っ直ぐにし、姿勢をそちらに向ければ、狙わなくとも良い、と教えられた。時間が空いて稽古場に行っても、ただ黙って見ておられ、何もおっしゃられなかった」と、加川の寡黙な指導ぶりを語っている。

新制三期山口弘の場合。^{注944}

「先生のご指導は、姿勢を正し、腹に力を入れて下半身をどっしり安定させて、身体全体の力を左手の先と右肘とに凝縮させながら正しい型どおりに弓を引けば、結果として矢は自ずからの的に当たるはずで、ただ力に任せて、矢を的に当てようとしてはいけない、というも

^{注940} 松本明聞き取り調査（1994年4月10日、電話）

^{注941} 前掲、椿武書簡（1991年2月1日）

^{注942} 九段範士石岡久夫氏は弓道の指導法について次のように記している。「古来『巻藁三年』という語があるように、まず巻藁前で十分射法の基本に習熟してから、的前で正規の距離（約28メートル）を指導練習させるのが常道法であるが、初心者は射法動作に馴れないから、近距離（約2メートル余）の巻藁（直径45センチ）でも外すおそれがある。外れた矢は意外な方向にそれたり、巻藁のうしろが固い板壁の場合は、はね返ったりして危険である」。「初心者の団体指導を主体とする正課の場合は、この常道法をとらず変則法を行なうのが最も効果的と考えられる」。変則法とは、「弓矢操作や八節動作が理解できたら、巻藁前射法を指導しないで、すぐ近距離（約10メートル）の的前射法を行なわせる方法である。手元を離れた矢は、少々方向が狂ったとしても必ず『あずち』にささり、はね返る心配がないからである」。クラブ指導の場合は、個人指導が望ましく、「常道法による巻藁前指導を行なって」から、「正規の距離の的前指導に移る」と。石岡氏のいう指導方法が戦前にどの程度一般化していたかは明らかでないが、加川は弓道場がないという悪条件のなかで指導に工夫していたと思われる。（石岡久夫（1982）大学正課弓道、現代弓道講座 五巻, pp.235-236）

^{注943} 前掲、安田文夫書簡（1994年2月24日）

^{注944} 前掲、山口弘書簡（1994年4月18日）

のでした。正しい型の修得を繰り返しご指導いただいたことだけは鮮明に覚えております。腕力に頼って弓を引くことや的に当てようと意識することの非なる所以を常々戒められました。」

以上を要約すれば、加川は、弓を射る姿勢（射法＝型または形）・態度（当てようとしな
い、いわば無心の心か）を見て、結果は後から来るものとして特にこれを求めない指導を行
なっていたことが理解される。「正式な射法」、換言すれば「正射」は「身心合一」を意味
し、「正射」ならば、必ず当たる、換言すれば「必中」ということになるうか。安田は、足
踏み、胴造り、身構え、打ち起こし、引き取り、会、離れ、残身（残心）の射法を実技で教
えられたというが、これらの動作は「射法八節」といわれる弓矢操作の技法であり、正射の
内実であった。戦後の高名な弓道家・弓道史家でもある石岡久夫が、^{注945}「正射必中が弓道の
目的である」というように、加川の指導理論は弓道界では一般的な優れた内容であったと思
われる。

ところでこうした直接的に結果を求めない指導態度は、勝敗に執着しがちな近代スポーツ
のそれとは異なる価値意識である。勝敗に至るプロセスまでもショウ化して大衆の興味をか
きたてようとする今日の社会では、勝敗への関心は益々増大しており、このような価値意識
は理解されぬ嫌いもあるところであろう。しかし言うまでもなく武道の世界では決して特別
なことではなく、例えば剣道あるいは柔道に於いても、型・形を重視し清明な心を求める命
題は指導者によって絶えずその在り方を戒められてきた事柄なのであり、こうした教訓は何
も弓道指導者だけが強調したものではない。高いレベルの剣道、柔道等にはこのような教え
が「無構」、「無刀」、あるいは多少性格を異にするが「上段の柔道」の教えとして残され
ているからである。^{注946}

しかしながらこうした事柄は建前としては理解されても、経験が浅いであろう大多数の指
導者や被指導者にとっては、その多くが実際の体験を踏まえた知恵として確信されるには
至っていないのではないだろうか。実際、例え競技であるにせよ、剣道や柔道は自らを否定
する相手と直接対峙し、相対的な関係の中で戦う関係上、一般的には「勝つ」ことを明確に
意識し、そのための手段としての技を工夫鍛練することが、目的である「勝つ」結果に結び
つく場合が多いと思われる。それは例えば、戦前の柔道界の覇者といえる牛島辰熊が、「試

^{注945} 石岡久夫 (1987) 弓道, 前掲書, 最新スポーツ大事典, p.217.

^{注946} 宮本武蔵は五方の構えの大切さを強調する一方で、構えると思う心にとらわれない臨機応変の「か
まえはなき心」の大切さも強調する（渡辺一郎校注 (1991) 五輪書, 岩波文庫）。同書の水之巻参照。
また、山岡鉄舟・剣禅話, 徳間書店, 1978. によると鉄舟は自己の剣法を無刀流と命名し、無刀（心外
に刀なき）は無心と同じであるとした（「無刀流と称する説」）。しかしそこへの道は厳しい稽古と禅
の修業の賜であったことは言うまでもない（「剣法と禅理」）。また、柔道においては、創始者嘉納治
五郎は、競技柔道を下段の柔道とし、その理合を社会生活にまで応用した上段の柔道を目指して修業す
ることを説いて、競技の勝敗に拘泥しそこに留まることの愚を「修行の一方に偏せぬようにして貰いた
い」と諭している（嘉納治五郎, 柔道に上中下三段の別あることを論ず, 嘉納治五郎著作集, 第5巻, 五
月書房, pp.205-210）。なお、源了圓氏は、世阿弥の能楽理論や剣法論における「型の問題を通じて
あらわにされたこのような認識（身体の運動を通じて技を磨くことによって心のありようを深めつつ、
その深まりゆく心のありようを捉えるという一種の行為的認識—筆者）は、伝統文化が生きていた時代
の日本人にはきわめて一般的な自己認識のエッセンスともいうべきものではなからうか」と記してい
る。武道界では常識的なものといえる（源了圓 (1989) 型, 創文社, p.281ほか）

合に立ちたる場合は武道本来の勝負を第一とせねばならぬ。勝負を度外視したる試合は、自他共に無益であり、冒瀆である」^{注947}と記していることから理解される。牛島は勝つために妥協のない工夫鍛練によって全日本選手権大会で二度優勝したのである。また、戦後の柔道界に長く覇を唱えた山下泰裕は、勝負哲学として「自分の力を出し切ることをあげ、世界で勝つためには「死に物狂い」になることの必要を強調している。^{注948} 中途半端な稽古で得た観念的な「無心」よりも、勝つための執念の強い方が勝つことが多いのは、武道競技の世界も他の多くのスポーツの世界と同様といえよう。

ある建大柔道部員は筆者に、弓道部を評して存在価値の乏しい、口惜しい感じの部であったと感想を語ったが、猛烈な稽古と心身の痛苦に耐えて全満で勝ちをほしいままにした柔道部学生から弓道部を見た場合、上に述べた意味で、このように感じられたのは当然といえる。また、筆者は弓道選択の学生からも同様な声を耳にしているが、武道への真摯な取り組みなしにこうした印象を持つのもよく見られるところである。

もちろん弓道に対するこうした認識は誤解と言わなくてはならないだろう。近代スポーツにない武道の特性が、建大の武道各部においてどのように教育されていたのかという問題を考えるとき、一部重複引用するが一期生弓削晃の次の証言は、武道の「道」を教えたのはむしろ加川であったことを知らせる点で重要である。^{注949}

「弓を始めてから人間相手の闘争ということに対してはあまり。だから柔道、剣道、銃剣術、合気武道も全部グレクト。弓で始めて自分の個性にあった武というものを見付けだしたということでしょうね。(中略)武というものに対する反感をずっと持っていたということから、弓道で初めて武の一端を覗いたような気がすると思った。だからこの道を進もうと。」

「[加川先生の指導は]いわゆる『みち』というものを言葉の端々に教えて頂けるという感じでした。一緒に飯を食べたりしている間にね。そういうのが皆に、つまりアンチ武道派の連中に好かれたのじゃないですか。」

「みち」の指導は、勝敗へのこだわりを徹底的に厳しい反省を求める。加川は以下のように山口弘に対してそれを行っている。

「[19]43年に学徒動員があり、後期一年になっていた新三期の我々の中からも、大半の者が召集を受け、早生まれの者十名だけが大学に残っていた44年のことである。新京神社の射場に昇段審査を受けに行った私は、ご指導を頂いた型どおりに弓を引いたつもりだが、初段の認定を得られなかった。一本目の時、矢が的の右下へ行ったので、二本目を射る前に、右足か左足を少し動かしたのだった。矢を的に当てようとの気持ち働いた故だろう。先生ご指導の精神に反し、もっとも大切な『心』に欠ける行動であった。私以外の受験者は、矢が的に当たらぬ者も含め、全員が合格したので、この不名誉は今だに脳裏を離れず、今だに痛恨の極みと後悔している。ただ、その失敗があったればこそ、先生のご指導を貴重なものと

^{注947} 前掲書、志士牛島辰熊伝、p.250.

^{注948} 山下泰裕 (1986) 黒帯にかけた青春、東海大学出版会、p.140, p.243.

^{注949} 前掲、志々田文明 (1994) 建国大学一期生弓削力氏との対談、p.112.

して今日も心に銘記しているのかもしれない、人間修養の要諦なり、と。」^{注950}

加川が不合格にした意図は、山口の理解どおり、当てようとした心を諫めることにあったと考えるのが妥当であろう。加えて型の崩れの問題もあったのかもしれない。弓道という道を求めて型を追求し、結果を一義としない心を、あるいは、そうした武道の特性を加川は正面から学生に求めた。しかしそれは弓道体験のない学生に理解しがたい世界であったことは想像に難くないであろう。勝った負けたに拘泥する学生の姿に対しては、加川の方がむしろ武道としての「口惜しい感じ」を抱いていたとも思われるのである。

3 . 加川満喜 -- その履歴・技能・人柄

加川満喜は1896年3月18日に福岡市地大字原小字飯倉に生まれ、^{注951} 安田文夫によると^{注952} 1975年4月28日病没した。東京の高輪中学校から五年間の軍隊生活を経て、半年間陸軍戸山学校に学んだ。松本明によれば、建大時代の加川は短髪で普通の体格、温和で穏やかな人柄であったという^{注953} が、戸山学校生活の影響もうかがわれる。多恵夫人によれば、^{注954} 27歳で国立福岡高等学校（後の九州大学教養部）に教練の助手として奉職し、1928年に同校助教授となった。当時すでに弓道を嗜み、各所で指導にあたった。1936年に「第二次改正学校体操教授要目」によって、男女中学校において正課としての弓道が認められた^{注955} ときには喜んでいたという。1937年5月弓道教士号。^{注956} 1938年に同校校長の推薦で建大に助手として赴任し、1942年頃に助教授になったのではないかという。満洲国政府公報によると建大着任は1938年7月20日で身分は「建大助手」であった。^{注957} なお、八期生中久郎は、「戦後旧新京市の最南端の旧官舎で」「多恵夫人、お子様たちと一年位過ごし帰国も御一緒」という。

『建国大学年表』に加川の名前が見られるのは、1940年9月2日が初見であり、創立開学記念式典挙行の日の書道展覧会の出品紹介のなかに「印刻加川」とある。加川の趣味であろうか。『建国大学要覧』(康徳8年度版,1941)によると、加川は同年5月1日以降に武道訓練の助手の資格にあることがわかる。^{注958} 『建国大学研究院月報』(No.32)には、1943年8月に出張する加川を「助教授」と記しており、多恵夫人の談と総合すれば1942から1943年頃に助教授に昇進したものと思われる。

^{注950} 前掲, 山口弘書簡 (1994年4月18日付)

^{注951} 大日本武徳会範士教士錬士名鑑, 大日本武徳会本部雑誌部, 京都, 1941年4月29日発行, p.325. この資料は中村民雄氏から提供を受けた。

^{注952} 前掲, 安田文夫書簡 (1994年2月24日)

^{注953} 松本明聞き取り調査 (1994年3月26日。於福岡。対面)

^{注954} 加川多恵聞き取り調査 (電話。年月日不詳)。前掲, 志々田文明 (1991) 「満洲国」建国大学における武道教育, p.17. に内容を掲載。

^{注955} 日本史小百科・武道, 東京堂出版, 1994, p.205.

^{注956} 前掲, 大日本武徳会範士教士錬士名鑑, p.325.

^{注957} 満洲国政府公報 (No.1361), 1938.10.20. なお建国大学要覧(康徳6年度版,1939.6.15)に加川は塾務科助手とあるが、西川伍作朔氏によると、初教務課の事務官として着任し、助手の仕事も兼務するようになった、大学側は助手と事務官とを兼務させることで俸給面で配慮したのではないかと、西川伍作朔氏聞き取り調査 (1994年4月23日, 電話)

^{注958} 前掲書、建国大学要覧(康徳8年度版,1941.7.25), p.51. なお西川伍作朔氏によれば本書は同氏が作成。

上述のように、加川は1937年に教士の称号を得ているが、当時範士は全国で30名、教士は160名しかいなかった。段位についての記載はないが、山口弘の回想によると1944年当時の加川の段位は七段教士と記憶しているという。^{注959} 安田は、1942年春に受けた昇段審査会で加川は主任審査員であったようだと言っているが、加川は「満洲国」弓道界において大きな存在であったと思われる。戦前弓道界の盛事といわれる1942年8月の満洲国建国十周年慶祝日満交歓武道大会（於新京・神武殿）において、日本弓道界の要人・実力者をずらりと配した日本側に対して、「満洲国」側が大接戦を演ずるが、その参加者中の最高実力者である「達士」5名のひとりが加川であったことからそのことが理解されよう。対戦結果は「息詰まる熱戦の後百中対九十八中の二本差で日本側が辛勝した」という。^{注960}

加川の技量の一端を知るものとして、山口弘は、その弓の強弓について語っている。「先生の引かれる強弓は、初心者の我々が引く弓の三倍程はあろうかと思える厚さのあるもので、我々の腕力だけでは10センチも引けぬものでしたが、先生は軽々と引かれました。先生が弓を引かれるのを拝見します時、常に感じ入っていたことは、心・技・体の一致（こういう言い方を先生がなさっていたかどうかは覚えておりませんが、先生のご指導を振り返って見ますと、先生が我々に会得させようと思っておられたのは正にこの一点に尽きる、と言えるように思っております）がどれ程偉大な業を可能とさせるものか、充実した精神力によって高められた肉体的力が如何なる難事まで達成可能とさせてくれるものか、という二点でした。」

運動部の雰囲気や指導者の影響によって醸成されるのは当然であり、弓道部の場合は加川の影響を受けることになる。山口と同じく新三期の松本明（佐賀中出身）は、休日に加川の自宅にしばしば遊びに行き、昼食をご馳走になるなど加川と親しく接することができた学生である。松本によると、^{注961} 入学の年の養正堂開場後に弓道部ができる噂を聞いて、堂内廊下に設置された巻藁の前で稽古をしていると、それを見ていた加川が側にきて出身や段位のことを聞いた。松本は初段を授与されていたが、それは中学で主務をやっていたためや建大合格の祝いでお情けによるもので、実力は級の程度であった。しかし、つい「初段です」と応えてしまう。だが、加川はその未熟を見抜けたはずでありながら、最後まで君にはその実力はないなどと言うことはなかったという。松本は、加川は「表面的には大変温和な穏やかな顔に微笑を湛えた方であるが、本当は武人として強い方であった」と評している。

^{注959} 弓道の段位・称号については実際は変遷があり複雑である。大日本武徳会は従来の規定を充実させた1934年の「武道家表彰例」において範士、教士、錬士の称号と、初段から十段までの階級を定めたが、1942年の「大日本武徳会称号審査要綱」において、称号を範士、達士、錬士に改定し、同年の「大日本武徳会階級審査規定」で階級を五等から一等までとした。一等は五段相当とみなされ、錬士は「一等ノ等位ヲ有スル者」（同要綱）が授与条件の基本であった。階級審査を支部で受ける場合には支部役員、範士、達士を以て組織するが、支部審査または四等以下の審査では当分の内「極メテ少数ノ錬士」を加えることが許されていた（同規定）。従って1942年の段階では加川は達士であった（中村民雄編著（1985）史料近代剣道史、第五編「称号・段級制度」の解説および各規定類参照、pp.319-367。及び、村上久、称号・段級審査基準と受験心得、現代弓道講座、第五巻、pp.308-309）。なお、『建国大学年表』には、加川は1944年3月17日から21日まで、「大日本武道大会弓道錬士以下審査員として大連関東州武道大会に出張」とあるがこれは錬士の審査か指導に行ったものであろう。

^{注960} 村上久、現代弓道の発達、現代弓道講座、第一巻、雄山閣出版、1970、p.215。

^{注961} 前掲、松本明聞き取り調査（1994年3月26日。於福岡。対面）

また、安田文夫は、^{注962} 加川から指導を受けた二年余の間、「しごかれた」「激しい叱責を受けた」「いやなことを言われた」等の覚えはまったくなく、加川は「武道者としては自分にきっと厳しい方だったと思いますが、吾々からはもの静かな温厚な先生であったという印象しか残っていません」という。また、「どちらかといえば建大の武道になじめなかった（熱心でなかった）私や弓削君が弓道の練習に打ち込むようになったのは、先生の人柄に引かれたためとも言ってもよいのではないのでしょうか」と感謝の念を吐露している。

松本明の体験談等から見られるように加川は弓道の普及に熱心であった。しかし彼の「温和」「温厚」「物静か」な人柄は、他者と肉体的にぶつかりあうことなく競う運動特性と相俟って、他方で、二期の椿武等が弓道部は「存在価値のない（口惜しい感じ）」「目立たない」クラブであったと記す^{注963} ような印象となって一般の学生たちに反映した。それは弓削晃が、「その頃弓道というのは武道ではなくて、昔、遊びにいて狙い撃ちにする遊戯のようなものであるか、あるいは女学生がやるとか、要するに男のやる武道ではないという風潮がままあったですね。まあ、逆に言えば、昔の武道において飛び道具に類する武術。だから建大時代の武道の中ではどちらかといえば末席です」^{注964} というような偏見と序列が支配していたからである。

4．弓道部の創成と学生の弓道教育観

上述のように、1941年2月の後期開始時、学内には弓道場はなく養正堂にも弓道場が設置されていなかったため、特に熱心であった堀川弘、^{注965} 弓削力、安田文夫、平山峰秀（現李用*）、顔廷超の五名は放課後に自主的に満洲中央銀行の倶楽部（略称中銀倶楽部）の弓道場に通り稽古をした。安田文夫は、^{注966} こうして「何回か通っているうちに弓道部が創成されたといえるのではないかと記している。また、この時期の弓道部は、「校内校外の行事（演武を披露する、校内試合を行なう、対外試合に出る等）に参加することはなかった（有段者が一人も居らず、参加できる筈もなかった）。ただ9月15日の新京神社秋季例祭（建大生は自由参拝）の奉納武道大会に参加したように記憶している」といい、1941年の弓道部は、「存在価値のない部（存在していなかった部）と言われても仕方ない」と謙遜、評している。

だが、この段階で一期生が課外活動をしていた事実がある以上、熱心な5人を中心にそうしたレクリエイショナルなクラブが誕生したといえることができよう。また、学内での授業以外の活動である中銀倶楽部への出稽古はまさに課外活動であり、これへの参加の程度が部員と非部員（授業受講生）とを分ける一応の基準と考えられよう。因みに建大から中銀倶楽部までの距離は5キロ弱、往復10キロ弱であるが、安田らにはそれも苦にならなかったという。中

^{注962} 前掲、安田文夫書簡（1994年2月24日）

^{注963} 椿武書簡（1991年2月1日）

^{注964} 前掲、志々田文明（1994）建国大学一期生弓削力氏との対談，p.112.

^{注965} 安田文夫書簡（1994年2月24日）によると、後期一年のとき、行事の打ち合せで各部の代表者が集められた際には堀川が出席していたという。

^{注966} 前掲、安田文夫書簡（1994年2月24日）

銀倶楽部に通うことを勧めたのは加川であり、指導に対する加川の熱意の程も窺われる。^{注967}
弓道部には比較的熱心な一期生が存在し、下級生の一部にも熱心な者が活動していたが、他の学年との合同稽古や合同の行事が少なかったために部内に家族的親交が生まれなかった。

^{注968} しかし、ここに弓道部或いは弓道教育存在を示すひとつの行事があった。それは1943年に一期生に対する送別会が後輩学生の参加のもとに加川の自宅で開かれたことである。^{注969}

「卒業式の直前の六月始めか五月の終わりに後輩部員が加川先生宅に集まり、私たち五名のために送別会を開いてくれたことを考えますと、今も当時の部員の気持ちを有難く思っています。送別会には加川先生のほか奥さん子供さん達も加わり賑やかな、なごやかな会となりました。その時私は加川先生の子供さん（娘さんではなかったか）を背負い子守唄らしき歌をうたったことを憶えています。誠に申し訳ない話ですが当夜何名の部員が集まったのか、また後輩諸君の名前も憶えていません。」

加川の愛情が生んだものである。

弓道部員を特定することは難しい。それは縦の関係・付き合いが必ずしも親密でなかったからである。二期のTは一期生の存在について記憶がないという程であるが、実際は安田が1942年当時の一期生の活動について、「四月七日四期生が入学してきたが、そのうち弓道三段の者がいると加川先生から知らされ、堀川君と二人で岡部勝一君を訪ねて弓道部の練習に参加してくれるよう話し合いを行なった。その後の練習振りをみて矢張り弓道三段^{注970}は違うなあとと思った」と記すように、一期生は多くの活動を行っていた。

しかしその安田も、1943年は「卒業（六月一二日）を控えての行事、講義等が相次ぎ、校内稽古、対外試合等積極的な部活動はほとんど出来なくなった」こと、また、1942年来「岡部君のほか二期生、三期生、新三期生のうち何名かが弓道部に入ってきた合同稽古をしたことがこと」があるが、「建大は各学年とも行事が多く、合同稽古もそんなに多くは出来なかった」と記し、「このため部員の結束は他の部に比べて強い方ではなかった」ことを認めている。^{注971} こうした側面は、弓道部が活動を開始した時期が、日米開戦、学者副総長から軍人副総長への交代、学内での民族協和の困難性の増大など、社会情勢の急速の変貌が進行する時期と重なることによってさらに拍車がかげられたといえよう。

1942年に後期課程に入った二期生以下の部員については、寺島利鏡、椿武、岩村春海、船勢太直、石黒宏治らが弓道選択者であり、この内、弓道部員といえる熱心な取り組みをした

^{注967} 安田文夫氏によると、加川自身もここで稽古をしており、一緒に練習した中銀の男女行員の加川に対する丁寧な態度からして、この弓道部の師範或いは顧問をしていたのではないかと推測している（前掲、安田文夫書簡（1994年2月24日））。

^{注968} この点は合気武道部にも見られるが、建大の課外活動が塾生活の合間に自主的に行う「指導自習」（既述の二期生西村十郎の言葉）の性格を持っていたことからして当然のことと思われる。

^{注969} 前掲、安田文夫書簡（1994年2月24日）

^{注970} 岡部勝一氏によればはっきりしないが二段であったと思うという。岡部勝一聞き取り調査（1994年4月11日、電話）。一方、安田文夫氏は加川から三段と聞いたことは鮮明に記憶しているという。

^{注971} 前掲、安田文夫書簡（1994年2月24日）

のは寺島であったようである。^{注972}

三期の選択者に島田重弘がいる。彼によると、^{注973}「自分は後期は課外で弓をやった。あまり熱心な学生ではなかった。同期では日系は記憶になく、満系が多かった。一期生に何人かいた。上級生では同じドイツ語をとっていた山本達男さんを覚えている」という。

三期と同様1943年に弓道を選択した新三期に松本明、山口弘がいた。

残念ながら その他のメンバーは判然としない。『写真集建国大学』^{注974}には二期の学生と思われる写真一葉が弓道部として収載されている。二期生椿武は筆者の人名特定の依頼に対して、「このコピーでは判然とできません。アボルマソフやコルニロフも写っている筈ですが不明です。コルニロフは非常に熱心な方で常に積極的でありました（塾生活の同室でした）。それで船勢兄と小生だけは間違いのないと思い記入しました。他の学生は不明です」と回答した。^{注975}これに対して期の違う安田や山口は、彼らの名前を覚えていない。安田の記憶では、課外活動としてはロシア人の記憶がないことから推して、これは二期の弓道授業選択者の写真と思われる。

弓道部に対する学生の印象は、健在の後期選択者の間でもかなり隔たりがあり多様である。安田や松本の印象に対して、二期の椿は、その後の書簡^{注976}で、「貴官の資料によれば、小生が弓道部で積極的な部活動をしていたような印象を受けますが、先般申し上げたとおり、弓道部とは名ばかりで、道場もなく、私としてはリクレーシ ョンのような存在であり、何も記憶に残っていません」と述懐している。また、二期生岩村は、「弓道部の場合は全くの同好会で、柔道部などとは比較にならない。精神修養としてやった。43年12月までは活動していたが、43年12月の学徒動員以後に学生の多くが入営したから、自然消滅したのではないか」と語っている。^{注977}一方、新三期の山口は授業 だけの修業者であったが、「加川先生にお会いしたことが、今日の私の中に、また私の人生観の中に、いろんな形で影を落としている」、「建大時代の弓道修業は文字通り私の人生遍歴の過程で欠くことのできぬ追憶の一齣として今日に生きて」いるとまで記している。これに対して、1942年入学の四期生岡部は、既に有段者ということで加川や一期生から課外活動の期待の星であったわけだが、本人の気持ちは違った。水戸一中で五年間弓道をし、「満洲国」の建大に渡った自分には弓道は内地でやっていたことの蒸返しであり、熱の入るものではなかったというのである。^{注978}

弓道は運動量が少なく、剣道等の対人武道と異なり、練習そのもののなかに人間的接触が

^{注972} 岩村春海聞き取り調査（1994年4月12日、電話）及び前掲、松本明聞き取り調査（1994年3月26日。於福岡。対面）。なお、寺島利鏡夫人の博子氏によると、同氏は大野市長になるが、市長時代も弓道を続け弓道教士となったという。寺島博子聞き取り調査（1994年6月29日、電話）。なお、一期の齋藤精一氏によれば、「同氏は大人の風格があり学生時代も目立った存在」であったという。齋藤精一書簡（1994年6月6日）。

^{注973} 島田重弘聞き取り調査（1999年2月21日）

^{注974} 前掲書、写真集建国大学、p.86.

^{注975} 前掲、椿武書簡（1991年2月1日）

^{注976} 椿武書簡（1994年4月1日）

^{注977} 岩村春海聞き取り調査（1991年、電話）。前掲、志々田文明、建国大学における武道・課外活動、p.116.

^{注978} 岡部勝一聞き取り調査（1994年4月11日、電話）

ないだけにその種の面白みに欠けることは否めないかもしれない。それだけに剣道、柔道等の受講者は弓道との出会いを失い、その技心の深みを知らずに終わり、また、弓道受講者も多くはそれを知ることなく終わったのではないか。激しい運動が不得手或いは嫌いな多くの弓道受講者には、弓道はいわば単なる救いの科目としての意味しかなかったかもしれない。

^{注979} それは厳しい剣道、柔道から逃避する面を持つものでもあったが、弓削、安田、山口らのように、弓道との出会いが柔道、剣道では容易に体験の難しい武道の特色である技心一如の核心への体験を持たせ、人生に有意義な年輪を刻むことになったことは確認しなくてはならないだろう。他の全ての教育活動がそうであるように、学生個人の取り組み態度の違いや教師からの感化の違いが、その効果に大きな懸隔を来し、各自のその後の人生に当該活動が占める位置を大きく変えているといえる。

しかし当時の多くの学生にとっては弓道が大きな意味をもつはずはない。日中戦争は終決せず、太平洋戦争も長期化の様相を帯び、1943年12月1日には学徒出陣によって日系学生の大半がキャンパスを去った。そうした死に直面した学生に対してどのような教育が可能であろうか。加川の学生に対して積極的に接触する姿の印象が、いまひとつ明確な像を結ばない理由はこの辺りにあるのであろう。

5. 校外及び校内活動

全員が初心者であり、当初演武を披露したり校内、校外の試合に参加することはできなかった一期生も、1942年になると対外的な活動も始まり、「少しは部らしい活動をするようになった」^{注980} という。対外的活動としては神事における演武、また対外試合の参加、校内活動としては巻藁稽古、中銀倶楽部への出稽古を除くと、皇族が建大を訪問した際の演武があった。これは当時あって晴舞台であった。

安田文夫は、1941年「九月一五日の新京神社秋季例祭（建大生は自由参拝）」^{注981} の奉納武道大会に参加したように記憶しているが、確かめようがない」と記している。松本明は、1942年頃から春秋の例祭の武道大会に5人1組、補欠2、3人でチームをつくって出場したという。

「僕は加川先生に初段だなんて言ってしまったから、初めての頃の試合に出てしまったのです。そのうち一期生二期生の方々がどんどん強い弓を引かれるようになって補欠ぐらいでよくなりましたけれど」。^{注982}

春秋の例祭に奉納武道大会が毎回行なわれていたとすれば、1941年秋か1942年春の団体初参加以降毎回出場していたと考えるのが自然であろう。

^{注979} 一期生坂東勇太郎氏は、柔道の授業では強い者に濡れ雑巾のように投げられるので、剣道では体当たりを食わしたものだ、授業の厳しさを語っている。坂東勇太郎聞き取り調査（1994年5月4日、電話）。なお、小山公一郎氏（六期）は、故人となった旧友を回顧し、「彼[岩崎彬]のことを私たちは、カゲで『哲学者』と呼んでいた。それは多分に畏敬のひびきがこもっていたように思う。長身白皙の岩崎くんのもつ知的雰囲気には圧倒されていたのかもしれない。それだけに柔道で投げられて、慄然たる顔をする彼が、気の毒になったことが再三であった」（前掲、『歡喜嶺 遙か』下巻, p.89）と旧友を記している。行間に柔道の授業における学生間の厳しい関係が窺われる。

^{注980} 前掲、安田文夫書簡(1994年2月24日)

^{注981} 引用文中ここまでの内容は、前掲書、建国大学年表, p.315.

^{注982} 松本明聞き取り調査（1994年3月26日、於福岡、対面）

一期生ら初心者の者に自信をつけさせたのは、1942年春頃（3、4月）実施の昇段試験合格であったと思われる。一期生メンバー5名は昇段審査を受けるべく、武道場・神武殿に向かった。安田によると試験の首席審査員は加川であり、全員が無事に初段の免状を授与された。

安田の記憶では、その年5月15日には新京神社春季例祭奉納武道大会が行なわれ、部員が参加した。その10日後の5月25日、神武殿において訪日宣詔記念新京武道大会が行なわれた。

『建国大学年表』p.351に「柔道（優勝）剣道（敗れる）」とあるが、安田は、同期の弓削が後期に入ってすぐに全満の弓道大会で準優勝をしたと記憶している大会^{注983}は、あるいはこの大会かと推測している。

安田の記憶ではこの大会で新人の岡部三段（四期）が大將として活躍したようであるというが、岡部は弓道関係の記憶をかなり忘れられているので^{注984}、定かではない。なお、安田は^{注985}この他に一、二回の対外試合を行い、その内一回は大学対抗試合だった記憶があるという。

校外試合活動の実例を示すものとして、二期の尾野定司（当時は尾野氏三郎^{注986}）の試合の賞状がある。^{注987}尾野は、奉天中学時代に全満の大会で個人優勝した実績を持ち、建大入学後柔道部に所属したが、右足の古傷を悪化させたため、1942年に後期に入ると一年間休学を余儀なくされた。1943年復学後、後期選択の武道授業は弓道を取り、12月1日の学徒出陣までの一時期、弓道部に籍をおく等のことがあったという。尾野の活躍は、この年9月11日に建国忠霊廟で行われた弓道大会無段の部で優勝したことである。『建国大学年表』p.440を見るとこの日に「建国忠霊廟合祀祭」とあるが、尾野によれば他の武道大会も行なわれたようであり、総合的な武道大会であったと思われる。その賞状には次の記載がある。

賞状 / 弓道優勝 尾野氏三郎
右者建国忠霊廟奉納武道大会二
於テ成績優秀ナリ依テ
茲ニ之ヲ賞ス
康德十年九月十一日
満洲帝国武道会新京特別市本部
本部長大迫幸男

この二年前の1941年9月17日の『建国大学年表』p.316には、「建国忠霊廟第一回合祀祭に

^{注983} 弓削晃氏は後期になるとすぐに試合に参加した。「ただ行って、加川先生のそういう雰囲気味わえればいい、ということで参加したんです。でも優勝戦までいってみなびっくりしてね。柔道部の連中なんかもみんな近くの会場で一緒にやっていますから、みんな応援に来たんです。応援に来たら負けちゃってね。」と述懐している（前掲、拙稿、建国大学一期生弓削力氏との対談）。弓削氏は白帯で参加準優勝と語ったが、週1、2回程度の稽古数か月に弓が真っすぐ飛ぶことは難しいであろうから、1941年ではなく1年後の1942年のこの時期とも考えられよう。

^{注984} 岡部勝一聞き取り調査(1994年4月11日,電話)

^{注985} 安田文夫書簡(1994年4月4日)

^{注986} 当時の尾野氏の名前は「氏」の下に「一」を置く構成の字である。筆者の日本語辞書にないことから本研究では仮に「氏」の字を使用した。

^{注987} 尾野定司書簡(1991年2月4日)及び尾野定司聞き取り調査(1994年4月11日,電話)。筆者は賞状のコピーを恵送された。

参列。午前十時皇帝御親拝」とある。これに部員が演武したかどうかは不明であるが、翌年の合祀祭（9月12日）が行なわれた際に奉納武道大会が行なわれたとすれば、1943年同様に弓道部のメンバーが参加したことは考えられるが、断定はできない。なお、『建国大学年表』では1944年は合祀祭の記録がなく参加は不明である。以上を踏まえて弓道部が参加した可能性のある諸行事を一覧すれば次のようになる。

- ・ 1941年5月15日・木：新京神社春季例祭（この段階では学生の参加は不可能と思われる）
- ・ 同年9月15日・月：新京神社秋季例祭（安田文夫は参加の記憶がある）
- ・ 同年9月17日・水：建国忠霊廟第一回合祀祭（奉納武道大会実施は不明）
- ・ 1942年5月15日・金：新京神社春季例祭奉納武道大会（安田ほか5名で参加）^{注988}
- ・ 同年5月25日・月：訪日宣詔記念新京武道大会（四期の岡部勝一が大將で出場か。準優勝か）
- ・ 同年6月19日・金：閑院宮春仁王殿下台臨演武会（安田ほか5名で参加）^{注989}
- ・ 同年8月4日・火：三笠宮殿下台臨演武会（安田ほか5名で参加）^{注990}
- ・ 同年8月8日・土：建国十周年慶祝日満交歓武道大会(於神武殿)。全学生見学^{注991}
- ・ 同年9月12日・土：建国忠霊廟合祀祭、休日。（奉納武道大会実施は不明）
- ・ 同年9月15日から19日まで建国十周年記念行事（『建国大学年表』に新京神社秋季例祭実施の記載はない）
- ・ 1943年5月15日・金：新京神社春季例祭
- ・ 同年9月11日・土：建国忠霊廟奉納武道大会（尾野氏三郎無段の部で優勝。賞状授与者は満洲帝国武道会新京特別市本部本部長大迫幸男。^{注992}同時に柔剣道の大会も実施か）
- ・ 同年9月15日・水：新京神社秋季例祭
- ・ 1944年5月30日・火：新京忠霊塔春季例祭
- ・ 1944年5月31日・水：建国忠霊廟大祭
- ・ 同年9月19日・火：建国忠霊廟秋祭

次に皇族の前で行なう台覧演武について見たい。当時の日本人学生にとって試合以上の晴舞台がこの演武であったと思われる。日本の皇族、満洲国皇帝等で建大を訪問したのは以下のものであった。

- ・ 1938年5月21日・土：秩父宮
- ・ 1939年5月8日・月：李王垠（韓国）

^{注988} 前掲, 安田文夫書簡(1994年2月24日)

^{注989} 同上. なお、建国大学年表, p.362には、「武道場に於ける弓道、剣道、合気武道、柔道の演武等を御覧あらせられ」とある。

^{注990} 同上.

^{注991} 前掲書, 歡喜嶺 遥か(上巻), p.166によると、この時合気武道部が八名出場しており、弓道部の出場も考えられる。

^{注992} 尾野定司氏所蔵の賞状による。

- ・1940年6月12日・水：高松宮
- ・1942年6月19日・金：閑院宮春仁
- ・同年8月4日・火：三笠宮^{注993}
- ・1983年6月11日・金：満洲国皇帝陛下^{注994}

安田は、1942年「六月一九日閑院宮春仁王殿下、八月四日三笠宮殿下が御台臨の際演武を披露申し上げたことは今もって忘れられぬ思い出」と記している。二期の椿武は、「竹田宮[マ]と高松宮の来学のと看だつたと思ひますが、小生、コルニロフ氏等五族を組み合わせて弓を引いたことが部としての晴れの場所でした」^{注995} というが、1940年6月高松宮来学時には弓道部はないので、1942年6月閑院宮、同年8月三笠宮来学時であつたと思われる。

課外活動に参加していた部員は一期生以外に確認されておらず、五族組合せの演武は、二期生の授業受講者を織り交ぜて準備した、皇族を喜ばせるための大学側の演出の面もある。こうした演出は「満洲国」のスローガンであつた「民族協和」を対外的にアピールするために役人がとつてゐるものであつたからである。^{注996} ただ筆者の今までの調査から、建大初期の学生の間には「民族協和」実現の強い意志が存在しており、右の演武においてもそうした理想実現の喜びが伴つたであろうことは指摘しておきたい。

6. まとめ

建大では日本武道など日本的な教材によつて日本人と異民族とを育てようとした。日本人がもつ文化的教養をもつて満洲国民の教養とすべきと考えたのであろう。見てきたように、弓道教育は優秀な指導者加川満喜を擁して見事にその一翼を果たそうとしていたといえる。しかし建大があまりにも早くその幕を閉じたために、十分な成果を出し得なかつたのである。しかし成果がでなくてよかつたのではないだろうか。

本稿作成に当たつて、筆者は、中国、韓国の数名の関係者に対して、弓道教育関係の概要を記した拙文を同封し、それを参考に記憶を呼び戻して当時を回想していただく質問依頼書を返信用封書及び切手同封で送付した。しかし回答は2名のみ、いずれも拙文を追認する短いコメントであつた。多くの日本人弓道受講者がそうであるように、余り印象に残らない既に

^{注993} 建国大学年表, p.351によると、高松宮は上に記した1942年5月31日の建国忠霊廟春季大祭時に建国十周年慶祝のために新京に滞在しており、奉迎体育大会が開催されているが、安田氏はこの時宮は来校されなかつた、校外で演武した記憶はないと記している。

^{注994} 建国大学年表, p.415には、「陛下には御歩を武道御覧場に進ませられ、合気武道、柔道、剣道、銃剣道等各民族学生の演武を長時間いとも御熱心にこれを御覧遊ばされた」とある。

^{注995} 前掲、椿武書簡(1991年2月1日)

^{注996} 例へば満洲国の法制処参事官兼協和会宣伝科長武藤富男は、1937年11月の会議で治外法権撤廃に対する感謝の使節団を日本に派遣する際、日本人、満洲族、漢民族、蒙古族、朝鮮人が人選されようとした時、建大の実態を例示して白系露人を加えることを主張したとしている。当時建大は開学してゐないので、これは建大の構想がそうであつたことを例示したものであろうが、その主張の有無にかかわらず、前提的にこうした配慮がなされていることが窺われる。武藤富男(1988)私と満洲国, 文芸春秋, 第一刷, pp182-183. なお関連した開学前の動静は以下の通り。1937.8.8建国大学令, 9.30一期生・満・蒙・露系志願手続き締切, 10.20日・鮮・台系志願手続き締切, 12.1 4満・蒙・露系第一次入学試験, 12.26 29日・鮮・台系第一次入学試験。

忘れさったことなのであろうが、同時に文化大革命等の時代に建大生であった理由で苦難に曝された苦い体験から、この時代のことには発言が慎重にならざるを得ないものと思われる。また今日振り返って当時の東アジアの時代状況を考えると、「中国侵略」・「日韓併合」の歴史の延長線上にある満洲国・建国大学の教育を、例えそれが何であれ肯定的に語ることには躊躇があるのが当然であろう。実際、彼らには、例えば武道にかわって中国武術を選択することは不可能であったのであり、自由主義的な校風の趣があった建大にあってなお民族的価値観を表に出すことを根源的に否定されていたのである。こうしたことを考えると、建大の異民族学生にとって、弓道教育そして武道教育が持ったであろう暗黙の抑圧性の側面に思いを致さざるをえない。

実際、東アジアに生まれた建国大学に進出した武道文化・教育についての異民族の本当の声は、弓道教育にかかわる調査では聞くことができなかった。しかし弓道部の校外活動に見られたように、神社等に結びついた活動が異民族に与えた違和感は、たとえ本人が語らずとも容易に推測されよう。文化はどんなに優れたものであろうと、その受容を強要されるときには反発を以て拒否される。満洲国当時、日本はアジアの国々に対し軍事力を背景に文化的に侵略していったことは事実といえる。侵略を行なうには相手国が軍事的に劣弱である等の条件が必要である。中国・満洲を文化的に劣弱と認識し、近代化の遅れた彼らを助けるとか、日本の進んだ文化を光被するなどの思い上がった正当化がなされ、自らの「善意」を拠り所に異民族に対する侵略性を認めない論理が生まれた。歴史の最先端としての現在においては、世界史が至る所侵略の歴史であったことをもって、現在に直接つながる過去の過ちを免罪させることは、少なくとも被害認識をもつ民族には困難であることを、認識しなくてはならないであろう。

今日、欧米人で武道を愛好する人々は大変多い。彼らは自ら選んでそれに関わっており、そこに武道の優秀性の一端を見いだすこともできる。だが、国際化時代を迎えたいま、世界中で民族の紛争、文化の摩擦が問題化している状況を考えると、武道文化は一体世界の教育問題にどのような価値を持ち得、人類に貢献をなしうるのだろうか。武道文化・教育の研究が、その将来の在り方・生かすべき価値について、異民族の立場を十分視野に入れた複眼的にして思想的にも深い研究がなされるとき、過去の清算と新しい価値の創出ができると思うのである。^{注997}

^{注997} 近年、異文化間教育の研究が進んでいる。江淵一公氏の『異文化間教育学序説』（九州大学出版会、1994）序論によると、異文化間教育学会（1981年創立）には比較教育学、教育人類学、言語学、国際関係論などさまざまな専門分野の会員が集まって異文化接触に関わる諸問題の研究を蓄積しつつある。武道教育の在り方の問題も今後はこうした成果にも学ぶ必要があるだろう。

第10章 銃剣道の教育 -- 将校の銃剣術

1 . はじめに -- 銃剣道の二面性について

本章では建国大学において訓練科目・軍事訓練の一つとして指導された銃剣道の教育の特徴を解明することを目指す。はじめに、軍事的色彩の強い銃剣道を武道を対象とした本研究の主題の一つとして扱った意図の説明も兼ねて、その文化的特性を以下に述べ、本研究の意義を明らかにしておきたい。

兵制が定まって間もない日本陸軍に銃剣術が導入されたのは、1874（明治7）年頃と思われる。秋山三十三の「菊池槍から銃剣まで」によると、^{注998} この年5月に、陸軍戸山学校はフランスから軍曹デュークローを招聘し、仏式剣術・フェンシングを教え、教官や助教に指導させた。それに伴って行われたのが銃剣術である。当初は戸山学校の助教たちが研究するに止まり、名称も銃槍と称した。1884年にド・ピラレーらが剣術教官として招聘され、戸山学校で教えるようになると、それまでの日本式剣術は廃止され、1886年からは剣術科を設けて仏式剣術の学生教育が開始された。1889年に出来た「剣術教範」は正剣術、軍刀術、銃剣術に分かれているが、殆どフランスの教範の直訳であった。その銃剣術は、「銃口にバネで伸縮するタンポ附の鉄棒を挿入した銃剣、又は木銃の先に鉄製の剣のようなものを附けたもので、漸く相手の身体に触れる程度の刺突を行った」^{注999} という。彼らが帰国後の1890年以降、戸山学校長大久保春野は、古来の剣術、槍術を原則とした日本式の軍刀術、銃剣術の研究に着手し、1894年の新しい「剣術教範」において面目を一新した。銃剣術はフランス伝来のものであるが、長柄に短剣をつけて用いるという方法は、未だ鉄砲が伝来する以前、1359年に菊池武政が用いた所謂「菊池槍」として登場しているという。菊池槍の短刀形は当時の日本の銃剣と同じであり、「日本の銃剣術が槍の延長として、国民性に根ざした古い歴史を持ち、又永い間の実戦の経歴によって、築きあげられてきたものであることがわかる」^{注1000} と、秋山は当時の銃剣術と古来の槍術との関係を誇っている。

しかし残念ながら両者の歴史的な関係についての実証的な考察はなく、管見ではこれを裏づける資料を知らない。ただ1894年の「剣術教範」を見ると、刺突動作に於てはこれまで前足だけを踏み出すに止まっていたのを、両足を順次進ませる^{注1001} とか、刺突も身体に触れる程度であったのを、充分確実でなければならないとしたなどの改正が見られる。フェンシング的動きから、日本武道に広く見られる足を継ぐ「継ぎ足」による体の移動への改変が窺えよう。敗戦までの間に、「剣術教範」の銃剣術はその後3回に亘って改訂がなされるが、銃剣術技法の基本構造は変わらなかったものと思われる。そればかりか、大津峰治によれば、今日の銃剣道の「基本、応用動作の大部分は、槍の操法上の考え方とまったく軌を同じくするもの」とし、また、日本古来の槍術は、「現代銃剣道の技術のなかにその秘術が継承され

^{注998} 秋山三十三 (1938) 菊池槍から銃剣まで--日本の銃剣術はどうして育ったか, 新武道, 1(5), pp.84-91.

^{注999} 同上, p.87.

^{注1000} 同上, p.89.

^{注1001} 1890年制定の「剣術教範」には、「前進八構備ノ俛左足ヲ進メテ直チニ右足ヲ定距離ニ送ル」（20頁）とある。

ている」と評している。^{注1002}今日の技の優秀性や合理性は、半面、古来の槍術のそれを語っているものであり、古き優れた文化を内包した戦後の銃剣道の存在価値を示すものといえよう。そしてそのことは、理念的にも、戦後の民主化によって近代的な日本のスポーツ即ち現代武道としての銃剣道に改編されたことによって理論的にも補強されているといえる。^{注1003}

ただ、ここで慎重に考えておくべき問題は、銃剣道が建国大学においても武道訓練の一科ではなく、あくまでも軍事訓練の一科として設置されていたという事実である。^{注1004}以下にそれに関する考えを明らかにしておきたい。

実際、大学の行政組織は、塾務科が塾生活を、教務科が講義科目と語学を、訓務科が武道訓練と作業訓練を、軍教科が軍事訓練をというふうに分担されており、武道訓練と軍事訓練はそれぞれ教育上の位置づけが異なっていた。

軍教科が設置されたのは1941（昭和16）年12月27日であり、1942年2月の「建国大学研究院月報」によると、^{注1005}次のような記事が見える。

「従来学生の訓練については軍事訓練武道訓練農事訓練を、一元的に訓務科に於いて統括し来たるも、学生の累年増加と教育内容の性質等に鑑み、新たに一科をもうけて訓務科を分け、軍教科長には科長事務を配属将校に委嘱することとなった。」

続いて配属将校小松茂久万の科長事務委嘱が記されている。小松はこの地位に少なくとも1944年11月19日まで就いていた。^{注1006}この事実は、軍教科が建大開学当初は存在せず、日中戦争の泥沼化から日米開戦へと戦局が推移したことの関連で、恐らくは関東軍の指示で設置されたものと推測される。軍教科はその後軍教部に改組されたと思われるが、建大第六期生・劉第謙著「我所了解的偽滿建国大学」を見ると、^{注1007}銃剣道を所管する軍教部は、1945年からの行政機構改革の後に訓務科が塾務部に合併されてからも依然として五部中の一の地位を占めている。^{注1008}

^{注1002} 天津峰治(1987)日本の銃剣術, 最新スポーツ大事典, 大修館書店, p.415.

^{注1003} その点については、体協加盟決定への苦勞を記した右の文献参照。(社)全日本銃剣道連盟, 全日本銃剣道連盟四十年史, pp.29-44, 1997.

^{注1004} 筆者はこの点について中国人建大三期生A氏の書翰(1999年11月30日)より厳しい指摘を受けた。

^{注1005} 建国大学研究院月報(No.16), 1942年2月25日.

^{注1006} 前掲書, 建国大学年表, p.509. なお同年表p.525に、小松大佐は1945年5月22日出征とある。

^{注1007} 前掲, 高島穰次氏によると劉第謙, 我所了解的偽滿建国大学(高島穰次訳「私の知っている偽建国大学」), pp.16-17.

^{注1008} 筆者は拙論「『満洲国』建国大学に於ける銃剣道教育」(1999)執筆時、軍教部や訓務課など行政組織の変遷との関連について深い認識を持たずに論を進めており、執筆当時は気づかなかったことであるが、こうした制度上の実態を考えると、日本の古の伝統的な武徳の涵養等を目的とする教科である武道訓練と、現代の戦争の必要に備える軍事訓練(銃剣道を含む)とは、指導方法の点でもまた教育内容の点でも異質であるとする考えに一度は到達すべきであったろう。拙論における筆者の立場を改めて反省すると、筆者は当時銃剣術が「典型的な日本の銃剣道教育」であり「軍事的色彩の強い」ものとして行われたことを拙論(p.17)に記しているとはいえ、基本的には銃剣道を武道として捉える前提に立って、歴史の中における一変容としての銃剣道の独自性を具体的に見ようとしていたと思う。しかし上にまとめた制度的な側面から考えれば、むしろその認識は本末転倒していたといえるかもしれない。前掲, 志々田文明, 論文「『満洲国』建国大学に於ける銃剣道教育」補遺, p.85.

この事実との関係で銃剣道のもつ武道性について以下に考察する。

近代における日本武道のあり方を支配したのは、大日本武徳会（1895年設立）の掲げた、日本の古の伝統的な武徳の涵養等を目的とすることであった。武徳とは勝ち負けに拘らず正々堂々と振る舞う倫理的態度をいうが、^{注1009} これは勝負に拘泥することに浅ましさを、武道家の弁えるべきと考えられた品格ともいえよう。この武徳の涵養は、天皇を戴く国家の存亡の機において身を賭して国家に奉公するという最上位の目的の手段として位置づけられた。「正々堂々」は、勝負における「いさぎよさ」、さらには「捨て身」として展開されていくと考えられるが、捨て身の精神はまた戦技の精神でもあった。

建大の武道は京都の武専（武道専門学校）の水準を目指すといわれ、事実、剣道、柔道の教官に武専の関係者が多数就任したように、剣道の稽古では面打ち、切り返し、体当たりばかりで、小手を打つなどの攻撃は厳しく窘められたという。合気武道の教官は武専とは関係ないが、聞き取り調査によると、^{注1010} 相手（武器を持つ相手を含めて）に対して徒手で相手の攻撃圏に入身し、死中に活を求める稽古を重視したという。こうした態度が戦場という精神の極限状態のなかで、自らを鼓舞するという形で機能し、勝利を収めるのに有用であったことは間違いないと思われる。

しかし半面、武道がもつ捨て身的な態度、換言すればいさぎよさは、戦技として徹底しない側面を持つように思う。それは、一種の美意識的な態度が国家間の戦争における戦技に要求されるであろう徹底した合理性を妨げることになるとと思われるからである。^{注1011} そこに武道が戦技と完全に一致しない原因の一つが窺われよう。

軍事訓練として行われる建国大学の銃剣道は制度的には戦技として位置づけられ、教える方も学ぶ方も戦技としてなされたかも知れない。では、その精神はどのように教育されるようになっていたのか。「剣術教範」（1934年版）で見ると、巻頭の総則には次のようにある（原文仮名書き。下線筆者）。

第一 剣術の目的は白兵の使用に習熟せしめ特に剛健なる気力及胆力を養成し以て白兵戦闘に於ける必勝の確信を得しむるに在り

第二 剣術は武徳を涵養し体力を練り土風を振起するに著大の効果あるものとする

第三 （省略）

第四 剣術は常に実戦に鑑み雄壮果敢機先を制し瞬時に敵を圧伏する如く実施するを要す故に之か教育に方りては精神の鍛錬に重きを置き使術は総て己を棄て一斬突（斬撃、刺突を謂う以下同じ）を以て直に敵の死命を制するを要す徒らに枝葉に趨るか如きは厳に之を戒め

^{注1009} 武徳については右書参照。大塚忠義（1995）剣道の歴史，窓社，pp.34-38.

^{注1010} 1999年5月19日から22日に実施した台湾在住の建大一期生李水清氏からの聞き取り調査による。

^{注1011} こうした態度は、根源的には、「弓矢の家に生まれたるものは名こそ惜しめ、命は惜しまぬぞ」（『太平記』）に表れた武士の名誉感に基づく、身命を捧げての献身の思想に求めることができよう。戦国期から江戸期にかけて生きた禅僧沢庵の「不動智神妙録」には、自由無碍の剣法の極意を得るためには生への執着を離れることの大切さを説いたものであり、献身の思想の深化と見ることが出来る。これを技術的に展開させれば、死を賭して白刃の下に進む「入身」の覚悟とその技術の修練の重要性に行き着くことになるのではないかと。こうした「いさぎよさ」は勝ちへの扉を開く半面、その失敗＝死によってもたらされるその人間が所属する集団への負の影響を顧みない点で「反合理性」を持つことになるのである。

さるへからす

以上でわかるように、目的に技の習熟を意味することがあるが、全体のトーンは「武徳の涵養」「精神の鍛錬」にあることは明確であろう。^{注1012} ここには武道教育と共通する精神が流れていることがわかる。また、「剣術教範」に見られる、基本動作から応用動作、試合教習、試合へと展開される具体的教育体系は、剣道や柔道教育のそれと同様の構造を持ち、学ぶ者教える者のいずれもが武道として認識するのは自然と思われる。以上のことから、戦技的側面を色濃く持ちながらも武道的側面との二面性を持ったものが、銃剣道であったと結論づけられよう。

さて本章の主課題は、戦前の満洲国・建国大学という場に於ける銃剣道の教育としての機能と教育的意義を見ようとするところにある。特に従来曖昧であった、1、銃剣道教育の性格、2、銃剣道教員、3、銃剣道教育の変遷、の三点の解明を通してその点に言及した。

本章で用いた主な史・資料としては、『建国大学年表』^{注1013}を縦糸にして、建大及び銃剣道関係資料、特に一私資料として、1939（昭和14）年から1943（昭和18）年まで在学した二期生藤森孝一の塾生日誌（1939-1942）2）、一期生の故長野直臣塾生日誌（1938-1939）、五期生の山下光一塾生日誌（表紙は協和当用日記）を用いた。加えて、下記の建国大学及び銃剣道関係者への取材を通して、その事実関係の把握に努めた。本章では、取材が複数回に及んだ取材協力者の談話については一々日時を注記しなかった。

<取材協力者名>

学生：一期生：百々和（1998年8月18日、電話）、齋藤精一（1997年8月1日、1998年8月19、22日（書翰）、24、29日、1999年2月22日、6月27日）、藤井謙二（1998年8月24日、1999年2月21日、1999年3月1日）、先川祐次（1998年8月25日書翰）、坂東勇太郎（1998年8月29日）、村上和夫（1998年8月29日）。二期生：藤森孝一（1997年8月4～6日、1998年8月31日、1999年2月18日）、湯治万蔵（1997年8月9日）。三期生：阿蘇谷博（1997年8月1日、1999年2月18日）、平田久雄（1998年8月29日）、鈴木学（1999年2月21日）、上村畔梧（1999年2月21日）、島田重弘（1999年2月21日）。四期生：桑原亮人（1998年9月23日、拙稿へのコメント）、米田敏明（1998年9月9日書翰）。五期生：富樫敬人（1993又は1994年の一日に令夫人、令嬢同伴で聞き取り調査。於大隈会館。1997年8月7日追加聞き取り調査。於福岡都ホテル。筆者は両者を総合して「談話メモ」を作成した）、光野輝夫（1997年8月13日）。山下光一（1998年9月24日、2003年3月17日）。六期生：瓜生敏雄（1998年9月23日書翰）。

教員：太田登（1998年8月28日）、桜井輝夫（1997年8月6日）。（敬称略）

2．建大の銃剣道教育の性格

銃剣道の授業は、建大の正規授業、三つの訓練科目の一つで、もっとも配当時間の多かつ

^{注1012} もちろん、そうはいつでも指導の現場においては教師は技によって強さを示さなくては学習者を納得させることができるはずもなく、総則後の詳細な教育内容によって「使術」の習熟が図られたことは、筆者がこれまで聞き取り等によって得た情報からも間違いのないと思われる。

^{注1013} 前掲書、湯治万蔵編（1981）建国大学年表、建国大学同窓会。

た軍事訓練の中で行われている。課外活動は教員の尽力でそこから派生してきたものといえる。ここでは、軍隊との比較に於いて、建大の銃剣道教育の性格を考察する。

(1) 軍事訓練の授業

建国大学の前期3年間^{注1014}の授業内容を配当時間で見てみると、表4-1に見られるように、訓練科目、学科、語学の三つの分野がほぼ同等に置かれていたことがわかる。三学年を平均すると訓練科目はほぼ30%で、講義科目と語学が残りを丁度二分している。軍事訓練は、創立当初から建大教育の特色をなした三大訓練科目（軍事、武道、作業^{注1015}）の一つであるが、軍事訓練は、1925年の陸軍現役将校学校配属令以後、学校教練（いわゆる教練）として内地の大学予科、高等学校、師範学校、中学校などで実施されたものと同質であったと思われる、その実施自体には特色はない。教練の教育内容は、歩兵操典を主体とし、学校種別に応じて指揮法、軍事講話、戦史などを加えて、軍事技術よりも徳育や国防思想に関心が向けられていた。^{注1016}

建大は、建学の目的であった「高級公務員--必ずしも政府の官吏とは限らず、公共の勤務に当る者の養成」^{注1017}（副総長作田荘一の回顧）というその本来の性格からも理解されるように、軍事訓練に於ける銃剣道の授業は、開学当初の2、3年は重視されなかった。それは、後述するように、開学当初の1、2年の軍事訓練で、学生の記憶に銃剣道授業が殆どなかったこと、また、『陸軍戸山学校略史』で銃剣道史を見ると、戸山学校教官ら（森永中佐、岡林准尉、本田曹長）を満洲に派遣したことを1940年8月の項で記しており、^{注1018}満洲への銃剣道の普及はそう早いものではなかったことから理解される。銃剣道が開学5年を過ぎた1942年頃から盛んになるのは、1942年6月のミッドウェー海戦の敗北後の日本の戦局の漸進的な悪化からくる、日本軍部のあらゆる物的・人的資源の戦力化の思想の満洲国への反映と見ることができよう。同『略史』の「陸軍における剣術の変遷」（1942年8月の項）には、「満洲国建国十周年奉祝日満交驩武道大会に職員若干名を派遣した」^{注1019}とある。

前出の表4-1の時間配当を見ると、軍事訓練の授業予定総時数に対する比率は、農作業訓練、武道訓練のそれを抜いて1位の12.6パーセントを占めているが、これは1937年7月の日中戦争（支那事変）後に関東軍主導で創設された建大であることから当然といえよう。副総長作田の時代の建大はその教育指針、施設、人事について関東軍の干渉を受けることはな

^{注1014} 建国大学は創設当初から前期3年、後期3年の2期制をとっていた。前期は予科教育、後期は専門教育である。しかし実際は1938年入学の一期生も1941年12月大東亜戦争の勃発による事態の急迫の余波を受けて、1943年6月に9カ月ほど早く短縮卒業した。また、この年10月の学徒動員によってそれ以降の学年も順次短縮して卒業することになる。（建国大学年表、p.53の「建国大学創設要綱」等参照）

^{注1015} 「作業」の中心は一期生以来農事であるが、「操作業」訓練の一つとしてグライダー操作（訓練）も早くから計画され1941年から始まった。前掲書、歡喜嶺 遙か(上巻)、p.399.

^{注1016} 木下秀明(1971) 学校教練, 日本近代教育史事典(初版), 日本近代教育史事典編集委員会, 平凡社, p. 568.

^{注1017} 前掲書, 建国大学年表, p.54.

^{注1018} 鷗沢尚信(発行者), 陸軍戸山学校略史, pp.84-85, 1969.

^{注1019} 同上.

かったという。^{注1020}しかし軍事訓練の比率を見ると、関東軍の影響は否定できないし、銃剣道教育の実施に当たってもなにがしかの判断が働いていたと考えるのが自然であろう。

教育の具体的な内容は次のようであった。一期生齋藤精一によると、教練は中学校の時に既に行っていたが、「建大でも色々なことをやった。『気をつけ。右へならえ』から銃の撃ち方、機関銃の撃ち方などは一通り習った。分列行進、匍匐訓練、そして行軍訓練、戦闘訓練など指揮官（大隊、中隊、小隊^{注1021}）としての訓練もやった」。また、「建大での生活は一種の軍隊的生活であった。少なくとも前期中は全員に三八式銃が与えられ、軍事訓練の時はそれをもって飛び出した。」という。

(2) 銃剣道の授業

銃剣道は日本の軍隊では銃槍術と呼ばれていたようである。^{注1022}陸軍戸山学校ではこれを大日本武徳会の独立種目とするために努力が払われ、1925（大正14）年によろやく独立種目・銃剣術として認められた。^{注1023}名称が銃剣道に変わるのは、1941年3月に大日本銃剣道振興会ができて以降のことである。^{注1024}しかし「満洲国」では、それよりも二ヶ月はやい1941年1月に満洲帝国武道会銃剣道部が設置されており、^{注1025}内地と満洲の関係者の連携によって名称の変更がなされたものと思われる。^{注1026}改称に当たっては、武徳の涵養、土風の振起、体力や気力の養成などを目的とする「道」として広く臣民に普及することが目指されていた。

^{注1027}

しかし軍人が指導する以上、建大でも当然、教える者、学ぶ者の意識の上で銃剣術になるのであろう。山下光一塾生日誌を見ると、大会名や部名の記載は銃剣道となっているが、その他の場合は銃剣術と書かれる場合も多い。名称はどちらでもよかったようである。

二期の藤森孝一によると、^{注1028}稽古は、38式歩兵銃の先に40センチ弱の短剣（片刃）を着剣した実物を模した、先端にタンポのついた「木銃」を用いてなされた。「稽古はゲートルを巻いて靴を履き、シャツの上から防具を着けて、面をかぶって行った。心臓や喉を突くことができるが、心臓を突くことを目的にやった」。防具として「面、小手、肩当て、臍当て

^{注1020} 前掲書、建国大学年表、pp.54-55.

^{注1021} 陸軍の部隊構成（編成単位）で、12～13名で構成される分隊が四個で一小隊約50名。中隊は約150名、大隊は500名であった。

^{注1022} 前掲、秋山三十三(1938) 菊池槍から銃剣まで--日本の銃剣術はどうして育ったか、p.89.

^{注1023} 鷓沢尚信(発行者)、陸軍戸山学校略史、1969、p.89.

^{注1024} 1941年3月、大日本銃剣道振興会が帝国在郷軍人会を母体として発足した（1941年3月20日施行「大日本銃剣道振興会趣意書同会則同処務規定段級附与規定」）。これが銃剣術が銃剣道に変わるはじめである。しかし大日本武徳会においては、翌1942年3月の武道総合団体への改組によって初めて銃剣道と呼称されることとなった。従って改組までの一年間、武徳会の出す称号には銃剣術が用いられていた。なお、大日本銃剣道振興会は改組された武徳会の下部組織となった。

^{注1025} 満洲帝国武道会要綱、満洲帝国武道会、1941、p.4

^{注1026} 満洲国は1934年3月1日をもって帝政に移行した。満洲帝国武道会は、1932年の建国と共に設立された満洲国剣道部と同柔道部の合併によって創立された。1940年11月に満洲角道会が、翌年1月には銃剣道部が設置された。これらの経緯については、満洲国史(各論)、p.1188 参照。

^{注1027} 前掲書、大津峰治(1987)日本の銃剣術、最新スポーツ大事典、大修館書店、p.416.

^{注1028} 藤森孝一聞き取り調査(1997年8月4日～6日、電話)

を着用した」(齋藤精一)。一期の先川によると、装具は剣道に似ているが、「面の顎のところを下げる垂れが剣道の面より大きく、これで喉の突きを防護した。「また胴は左上部に中に緩衝物が入った革製の隆起物がついて」おり、「ここを心臓としてねらい撃ち」したという。一期の藤井謙二によると防具は新品であったという。まさにこの時が銃剣術の始まりであったのであろう。

構えと稽古。38式銃ならば、「左半身で、左手で銃身の半ばを持ち、右手は銃把をもって斜めに構えることにな」^{注1029}る。木銃の「構えは左半身であった。相手に対して目標を小さくする必要があるので、左足を真っ直ぐ相手に向けて、右足は交差する形におき、前進、後退して動き、左右への変化はほとんど行わなかった。」^{注1030}

授業は始め、「『前、前』『あと、あと』『突け』といった型の動作」^{注1031}を反復練習した後、二手に分かれて向かい合っただの対人稽古が行われた。柔道という乱取稽古に相当するものである。先川や藤森は、建大の銃剣術は試合中心であったと語っているが、その中身はこうした練習であろう。また時には、「一人が真ん中に立って、その回りを取り巻いて、順番にかかって行く」^{注1032}稽古もなされたという。

藤井謙二や藤森孝一によると、前期中は各学年六つの塾中、前後二つの塾が一緒になって班をつくって行われた。藤井によると、一期の場合、1塾と4塾、2塾と5塾、3塾と6塾であった。小隊規模以下の軍事訓練では全塾一緒にする必要はない。銃剣道も各班で行われた。^{注1033}また藤森によると時には、「異種白兵戦の練習も行った。これは銃剣対短剣[竹刀]の試合で」、「短剣側は相手の懐に入れば有利なので、これも右半身に構えて、相手の刺突をかわして懐に入ることを心がけ」^{注1034}たという。

(3) 銃剣道教育の性格

こうした方法を、建大の時代に近い陸軍省検閲済の1934年4月14日発行の「剣術教範」^{注1035}の内容と比較してみたい。

本書の構成は、総則、基本教育、応用教育に大別されている。総則には、「剣術の目的は白兵の使用に習熟せしめ特に剛健なる気力及胆力を養成し以て白兵戦闘に於ける必勝の確信を得しむるに在り」^{注1036}とある。五期の富樫敬人が「銃剣術では気剣体一致が基本と教わった」^{注1037}と語るように、気力胆力を養う目的は武道訓練と同じであった。基本教育は、基本動作の章、応用動作の章で、それぞれ銃剣術、両手軍刀術、片手軍刀術、短剣術が教えられる。銃剣術の基本動作は、立銃(たてつつ)、立銃より構銃(かまえつつ)、構銃より立

^{注1029} 先川祐次書翰(1998年8月25日)

^{注1030} 前掲、藤森孝一聞き取り調査(1997年8月4日~6日,電話)

^{注1031} 先川祐次書翰(1998年8月25日)

^{注1032} 藤井謙二聞き取り調査(1998年8月24日)

^{注1033} 同上。

^{注1034} 前掲、藤森孝一聞き取り調査(1997年8月4日~6日,電話)

^{注1035} 陸軍省、剣術教範、1934。本書からの引用はひらがな書きに修正した。

^{注1036} 同上, p.1,

^{注1037} 前掲、富樫敬人聞き取り調査「談話メモ」

銃、前へ及後へ、直突、連続刺突が解説されている。^{注1038} 藤森、先川両氏の指摘がそのまま見える。また応用動作では「脱突、下突、体当刺突、打撃又は押圧して行う刺突」^{注1039} が簡単に解説されている。

次の章・試合教習では、銃剣術から短剣術までの四つの武術について三段階で前二章で獲得した技能を漸進的に試合へと高めていくように考えられている。第4章試合では以上の締め括りとして位置づけられ、「試合教習不十分なるに過早に試合を開始するときは技癖を生じ或は外傷を多発し剣術の進歩を阻碍し易きを以て特に留意するを要す」^{注1040} と優れた武道教育論を展開している。建大の銃剣道は「試合教習」といわれる稽古が中心になされていたことがわかる。

なお、応用教育では、異種白兵剣術、格闘訓練、夜間剣術が解説されている。異種白兵剣術では、幾つかの武器の組み合わせた場合が紹介されるが、「銃を以て他の白兵に対する」場合、「刀」に対する場合、「短剣」に対する場合があり、最後の対短剣は上述の藤森氏の体験と合致する。当然のこととはいえ、建大でも典型的な日本の銃剣道教育が行われており、その性格は軍事的色彩の強いものであった。

3. 銃剣道教員

軍事訓練は将校の指導で助教（下士官クラス）^{注1041} が補佐して実施された。1939年1月には建大創設にも関わった松平紹光大尉が着任した。長野直臣塾生日誌や藤森孝一塾生日誌を見ると、剣道の教育の章で見たように、松平の優れた指揮、責任感などが学生に与えた影響は大きい。松平は1940年7月建大教授に任ぜられたが9月に退任した。『建国大学年表』や教員、学生の記憶では、1940年3月、配属武官吉原大佐（陸軍騎兵大佐）が着任、吉原大佐は同年12月に離任し、その2カ月後1941年2月6日に陸軍省（関東軍）派遣の配属武官小松茂久万大佐が着任した。小松のその後の消息は建大に20回ほどの記載があり、建大における軍事教育の総括責任者であったと思われる。^{注1042} 六期生小山公一郎は小松の人柄を、「小松茂久万さんは、まことに軍人らしからぬ軍人であった。（中略）三人の御子息を戦争で失われ、故山に引退されていた小松さんの晩年は、さびしいものだったのではないか。枯淡の古武士としての小松大佐にとって『建国大学とは何であったか』。ぜひしみじみとおききしたかったテーマである」と記している。^{注1043}

^{注1038} 前掲、陸軍省、剣術教範、pp.14-20.

^{注1039} 同上、pp.46-49.

^{注1040} 同上、pp.60-61.

^{注1041} 齋藤精一氏によると、「教官」とは「将校」以上で「将校扱い」を含む。「助教」は下士官だった。教員は助教授までが将校扱いだった。

^{注1042} 前掲書、建国大学年表に見る小松茂久万の主な動静は右の通り。1941.12（新設の）軍教科長事務取扱を依頼せらる、1943.1.4研究院総力戦研究班班員、1943.4.6後期三年を引率し遼陽574部隊兵営宿泊、1943.6.12卒業式分列行進指揮、1944.6.9卒業生成績総合判定委員（軍教科長として）、1945.5.22出征、1945.7.1の記事では関東軍石頭予備士官学校長。上記については鈴木昭治郎氏より教示を得た。なお、会誌（三期生）-孟家屯、No.35、p.37にも石頭予備士官学校長時代の記述がある。

^{注1043} 曙きざす（建国大学六期生文集）1986、p.12.

なお、一期生越智通世によると、^{注1044} 銃剣術を直接指導してくれた「助教方、太田、桜井、坂田[進]、小田[長吉]の諸氏は、松平さんが特に選んで呼んでこられたと聞いていますが、いま思い出してもそれぞれに心技ともに立派な方でした」と回顧し、松平が以下述べる銃剣道教師を集めたことを示唆している。

助教として建大の銃剣道教育に貢献した桜井輝夫によると、^{注1045} 「満軍 [満洲国軍] の将校も配属されていた」という。満軍の将校[治安部派遣の配属武官]は日本の伍長、軍曹クラスが将校になっており指導力が劣っていたという風評があったが、^{注1046} 我妻庄三郎（満洲国陸軍歩兵上尉）のように優れた指導力を持った者もいた。

銃剣道はこうした軍事訓練の授業の中で、助教^{注1047} が担当して実施された。以下主な指導者の特徴について見てみる。

1) 太田登

聞き取り調査に対する太田登の回答は以下の通りであった。^{注1048}

・満洲当時は治安部、建国大学、交通部、総務庁などかけもちして教えていたので・・・[鮮明に覚えていない]。

・銃剣道を教えたのは一期生と二期生の両方。軍事訓練の授業中ではないか。

・大町中学を出た後、仙台の陸軍教導学校に1年2、3カ月いた。そこで1、2名の選抜者の一人として陸軍戸山学校に行き、6カ月間、体育や銃剣道の専門的基礎を習った。そこで尊敬する上官の勧めで、北京の新民学院大学で一年間学んだ。[その後建国大学か？]

・建国大学では滑空（グライダー）の指導者としての講習に、3カ月づつ2度内地に派遣された。

外務省発行、満洲国政府公報及び建大同窓会の外務省文部省責任登録者青本敏彦の証明書によると、^{注1049} 太田は1940年4月15日に建大助教、1945年3月1日に交通部技師兼務で建大助教授となった。

2) 桜井輝夫

聞き取り調査に対する桜井輝夫の回答の要点は^{注1050} は以下の通りであった。

・建大には創設時から終戦までいた。当時自分が最高段の5段錬士だった。

・軍から選抜されて陸軍戸山学校に長期学生として1年間派遣された。短期学生は半年間だ。

^{注1044} 越智通世書簡（1999年12月2日）

^{注1045} 桜井輝夫聞き取り調査（1997年8月6日）

^{注1046} 例えば、橘満雄書簡（2000年7月27日）

^{注1047} 宮澤恵理子氏の建国大学と民族協和（風間書房，1997）には教職員一覧があり、聞き取り調査等からよく調べられているが、助教以下については未調査である。実際の教育現場において、また特に訓練科目の場合は助教あるいは属官といった職掌の人々が大きな働きをしていた。

^{注1048} 太田氏は1909（明治42）年生まれで1999年現在で91歳であった（1999.10.31逝去）。筆者が聞き取り調査（電話）を実施した時点では、復員後生まれた令息夫婦と同居され、電話口に出られない状況ということのため、筆者がファックスで送付した質問文に、令息夫人から以下のお答えを頂戴した。

^{注1049} 本資料はご家族よりコピーを送付された。なおこの資料によると兼任建大助教授の出典は満洲国政府公報。

^{注1050} 前掲、桜井輝夫聞き取り調査（1997年8月6日）

・銃剣術は五段錬士、剣道は三段であったが、銃剣術は本務の片手間であった。
・建大の訓務科にいた後藤周助先生に呼び出されて、銃剣術を教えているうちに、建大以外の満洲の大学で教えたり、各地で講習したりするようになった。
・当時は「満洲国＝関東軍＝建大」であった。[軍事]教育の主管は関東軍であった。
1945年前期1年入学の満系（漢民族）八期生李維忠は、「僅か半年、その思い出」という随想で、^{注1051}

「毎週月曜日は、軍事訓練の時間。教官は笑いを忘れたような桜井先生、教官の顔は何時も曇っていて厳しい。訓練の初めは体操で、特に『腕立て』の命令は五十回。五十回に達しないものは、“女子師範学校に転向せよ！”と叱咤する」

と記す。謹厳な一面が窺われるが、六期の瓜生敏雄によれば、^{注1052}これは誤解によるもので、桜井助教の独特の言動は心の通っていた日系でないと理解が難しいのではないかと記している。では五期以降の日本人学生に特に大きな影響を与えたと思われる桜井の人柄を教え子らの回想で見てみよう。

・五期生富樫敬人：「先生は（中略）優しい方で、威張るところはなかった。165センチくらいの身長であった。」^{注1053}

・五期生光野輝夫：「下士官であったが、軍人よりも文官的な感じの方だった」^{注1054}

・五期生山下光一は「優れた綺麗な技だった。教え方は明瞭で、一人一人欠点を指摘して直してくれるので上手くなることができた」^{注1055}

・六期生高松正朋：「クラブ活動では銃剣術部に入り、桜井先生の指導を受けたのですが、絶対に『参った』と言わない不撓不屈の根性をたたきこまれ、これが戦争（戦闘）--三年半のシベリア抑留に耐えて生き抜いてくることができた原動力になったと思います。」^{注1056}

・七期生三浦賢志：「私は内地で銃剣道をやっていた関係で、建大でも、関東軍ナンバー・ワンの腕達者と評判の桜井軍曹（曹長であったかも知れない）が教官として指導されており、五期の光野先輩等と一緒に大いに鍛えられた。その関係もあって、武道実技では異種白兵戦要員に選ばれた。私が銃剣道、相手は剣道の同期の長野良一君（静岡出身）。審判は剣道の浅子先生という組合せ。」^{注1057}

以上は1942年以降に入学した学生たちの言であるが、二期生湯治万蔵も、^{注1058}「桜井助教のことはよく覚えている。小柄で、明るいい人だった。後に私も軍隊に入ったが、桜井助教は生粋の下士官であるのに、いわゆる下士官根性のないよい人柄の持ち主だった。」と評し、同期の藤森孝一は、「腕一本で叩き上げた感じの強い方で、『かかってこい！』といわれ、かかっていくとよくひっくり返されたものだった」と述べている。

^{注1051} 李維忠、僅か半年、その思い出、前掲書、歡喜嶺 遙か(上巻), p.327.

^{注1052} 瓜生敏雄書簡（1998年9月23日）

^{注1053} 富樫敬人は、銃剣道は桜井だけから習ったという。前掲、富樫敬人聞き取り調査「談話メモ」

^{注1054} 光野輝夫聞き取り調査（1997年8月13日、電話）

^{注1055} 山下光一聞き取り調査（1998年9月24日、電話）

^{注1056} 高松正朋書簡（1993年6月7日）

^{注1057} 三浦賢志、三期生の卒業式、八旗、第5号、p.52.

^{注1058} 湯治万蔵聞き取り調査（1997年8月9日）

ここには気骨、実力、人柄を兼備した実技指導者として優れた姿が浮かび上がっている。1941年以後、少なくともその翌1942年以後の銃剣道教育の充実はこのような指導者によって担われたのである。

3) 砂山 秀雄

藤森孝一は助教の砂山准尉^{注1059}を、「砂山准尉は、真面目な性格で、銃剣道の経験を積んだ方だった。教え方がうまかった」、「桜井助教は活きがよい方、砂山さんはどっしり構えていくタイプだった。砂山さんには射撃も教えていただいた。」、「手とり足とり丁寧に教えてくれた」と評している。

藤森孝一塾生日誌には、

・(1941年9月12日)「軍事訓練。不徹底なノラクラな考え方を恥づ。誠といふことは、人の道である。何とかして、どんなにしても、といふ気持ちこそ一貫の初である。砂山教官の言はれたことは一々胸に答[マ]える。」

・(1941年9月30日)「午后軍訓の学課で、勅諭謹誦について砂山教官より注意あり、学生根性を脱しきれと。毎朝奉読して居れば、何の苦勞もなく覚えるのに、わざわざ苦勞して一度に憶えやうとする、と。」

とある。多くの建大生によると、彼らにとって訓練科目の助教(下士官)の面々は、教官(士官)の面々と比べて、兄貴分としてずっと親しみがあったというが、こうした助教の真摯な教育態度が建大の教育を下支えしていたともいえよう。

4) その他の銃剣道指導者

一期の藤井謙二は、坂田[進]助教、小田[長吉]助教が、また、同期の齋藤精一は、山田[嘉男]助教が、それぞれ銃剣道の授業で太田助教の補佐をしたという。

また、藤井及び二期の橋満雄は、満洲国軍から満人の傳という上尉が満人学生を指導したという。^{注1060} 日系学生と満系学生の軍事訓練等の基礎訓練に開きがあったため、何事も「民族協和」のために一緒に行くことを原則とした建大において、日満別学の授業が行われたことを示している。

五期生富樫敬人は、^{注1061} 銃剣術は桜井助教に習ったが、成島甚之助少尉[助教授]は年齢も階級も上で、軍事訓練の指導をし、銃剣術にも時々出てきて指導したという。

また、光野輝夫は、成島は将校なので銃剣道はあまり上手でなかったという。^{注1062} 他に、専門家ではないが剣道の助教(1943年に助教授)であった後藤周助がいる。桜井助教が声をかけられたという後藤は、剣道では突きが得意で、銃剣道でも強みを発揮したことは剣道の教育の章で見たとおりである。

^{注1059} 前掲書、建国大学要覧(康徳8年度版,1941.7.25), p.53によると、砂山秀雄は1941年5月1日現在で助教。研究院月報(No.37)によると、砂山は1944年2月16日辞官。なお、准尉とは陸軍の準士官。特務曹長の改称。士官と下士官の中間の階級で、将校勤務准尉とただの准尉とに区分された。前者は将校待遇で将校集会所の食事をとることが出来たという。

^{注1060} 橋満雄書簡(2000年7月27日)

^{注1061} 前掲、富樫敬人聞き取り調査「談話メモ」

^{注1062} 光野輝夫聞き取り調査(1997年8月13日、電話)

3. 銃剣道教育の変遷

(1) 授業

二期生藤森孝一塾生日誌を見ると、銃剣道記事の初出は1941（昭和16）年6月17日（火）で「午后銃剣術」とだけある。その内容や感想は何も書かれていないが、6月頃には銃剣道の教育が行われていたことがわかる。その次の記述は10月11日（土）記事の「午前中銃剣術」で、最後が10月22日（水）の「午前三時半起床。夜間行軍の査閲。閲兵分列。銃剣術。戦闘。」の記事である。その他間接的に銃剣術に関係した記事としては次のものもある。

・7月10日（木）「射撃場の構築。（中略）我妻 [庄三郎] 教官^{注1063} より、指揮官の指示を適切ならしむること。器具は兵器と同じであること。之でご奉公するのだ。自分の部下と思って大事にし、苟も抛っておくやうなことがあってはならぬ。」

・8月12日（火）「銃器を受取る。」

・8月13日（水）「午前中総合演習。機関銃隊となる。」

筆者は、軍事訓練の中で銃剣術の教育が開始された時期を、1940年の後半から41年に入った頃と判断したい。理由は、一期の齋藤精一が早くとも前期3年の後半としていること、藤井謙二と先川祐次が前期の軍事訓練の中と記憶していること、三期の上村畔梧は前期1年の1940年から行われたと記憶していること、^{注1064}そして上述のように戸山学校から教官が派遣されており、そうした方向を促す可能性があるからである。上記の桜井の話に、「建大の訓務科にいた後藤周助先生に呼び出されて、銃剣術を教えているうちに、建大以外の満洲の大学で教えたり」云々とあるが、後藤が建大に着任するのは1939年の9月頃^{注1065}であり、桜井に専門外の銃剣術で影響を及ぼすまでに1年の歳月を見た場合、1940年の後半は不自然ではないと考えるからである。

『建国大学年表』を繰ると、銃剣術あるいは銃剣道の初出は1943（昭和18）年3月11日（木）のことで、随分遅いが、山下光一塾生日誌によって知られる。^{注1066}これ以後、表10-1：建国大学・銃剣道教育略年表に見えるように、同年表には時々銃剣道に関する記事が見える。1943年春以降にこの教育が本格的に行われたといえよう。

（参照 表10-1：建国大学・銃剣道教育略年表）

では、その狙いは何か。これは、戦闘に於ける実戦的能力の向上に尽きるであろう。三期の上村は、当時、南嶺近辺には反満抗日軍が出没するため、辻政信参謀が学生全員に38式銃

^{注1063} 建国大学要覧(康德8年度版,1941.7.25)収載の職員リストによると、「陸軍歩兵上尉」の我妻庄三郎は5月1日現在で小松茂久万と並ぶ配属武官の一人。我妻について一期の尹敬章は、おぼろげな記憶と断った上で、「銃剣術を始めて見たのは確か軍事訓練の時間で、教官我妻大尉に青眼に構えられて、相手となった学生は手も足も出なかった記憶があります」と記している。尹敬章書簡（2000年8月6日）

^{注1064} 但し、三期の島田重弘氏は、太平洋戦争翌年の前期3年から初めて防具をつけてやった記憶があるとしている。

^{注1065} 長野直臣塾生日誌（1939年9月9日）に「剣道に後藤助手を迎へ、之又久しぶり自分からぶつかつて行く」とある。

^{注1066} 建国大学年表, pp.392-393 に、「三月中は武道月間として武道訓練に重点が置かれた。三月十一日から十日間稽古。剣道、柔道、合気武道、銃剣道、滑空の各般にわたる猛訓練が行われた」とある。

を保持させたことから考えて、銃剣術は建大でも本来教えられるべきものではなかったか、という趣旨の認識を示している。

しかし実際は、開学後3年間は銃剣術は重視されなかった。^{注1067} 一期の先川祐次は次のように述べている。

「この背景には、もともと銃剣術は下士官や兵隊が白兵戦に必要な能力であり、指揮官は軍刀で戦うものとされていたからです。したがって、指揮官 [の育成] を想定している建大では『武道一般をできるだけ身につける』一環として副読本的に取り扱われたと思います」

1940～1941年頃に、銃剣道教育が強化されたのは日中戦争泥沼化のなかで、日米開戦が視野に入ってくる中での軍の対応であろう。その後、太平洋戦争（大東亜戦争1941年12月8日開戦）が起こり、1941年12月30日から始まる反満抗日建大学生の検挙によって副総長作田荘一が退役陸軍中将尾高亀蔵と交替する1942年6月頃から、決戦態勢の準備として白兵戦の戦闘に必要な銃剣道が建大に於いても益々重視されていったものと思われる。一期の百々和は、^{注1068}

「建大は、学者だった副総長作田荘一先生が退役中将の尾高亀蔵副総長になってから変わった。一期生が前期の時は銃剣術などほとんどやらなかった。しかし、軍隊へ行くと必ず銃剣道の朝稽古がある。尾高さんが着任後に、その必要をいったために銃剣道がやられるようになったのではないか。」と回顧しているが、尾高の指示かどうかはともかく、事態はそのように流れていったのである。

軍事訓練の授業配当時間については、表4-1で既に見たように武道訓練と比べても1.65～1.7倍の時間数が確保され、表4-2～表4-5で見るとわかるように前期においては平均して週2回の授業がおかれていた。軍事訓練に占める銃剣術の割合については、四期の桑原亮人はこれを20%以下、五期生富樫敬人は20～30%であったという。

(2) 課外活動の形成

部のはじまりを明らかにするのは銃剣道の場合もまた難しい。学年間のつながりを見つけていくことが困難であるからである。資料を見る限りでは、課外の活動が明確に見えてくるのはやはり学内外の情勢が緊迫化を増してくる日米戦争開始以後である。しかし、有志の練習の形跡は一期生の時から見えるので、聞き取り調査を中心に部の形成と特性について明らかにしたい。

なお、稽古場所は、1941年6月18日に養正堂が開場すると、「稽古は養正堂でやっていた。養正堂は広く、柔道、剣道などと一緒に、それぞれ一角を占めて稽古できた」という。

^{注1069}

< 一期生 >

^{注1067} 長野日誌には、軍事訓練の記述は見られるにも拘わらず銃剣術の記述は皆無であり、藤森日誌も上記のように乏しい。

^{注1068} 百々和聞き取り調査（1998年8月18日、電話）

^{注1069} 山下光一聞き取り調査（2003年3月17日）

一期生は銃剣術の課外活動の存在については、一期生越智通世が、「軍事訓練のごく一部であったとの印象」しかもっていないとし、^{注1070} 尹敬章が、「正式に授業を受けた記憶がありません」と記すように、^{注1071} 総じて曖昧である。

ただ、齋藤精一の記憶では、太田助教が指導していた滑空（グライダー）を学習する学生に対する同助教の呼びかけに応じて、齋藤ら有志が集まって稽古を始めたという。その時期が、太田助教が滑空（グライダー）の資格取得のために1942年1月から7月まで内地に派遣される^{注1072} 前であったことは、先川祐次の記憶からも確認され、間違いないだろう。

藤井謙二も齋藤と一緒に習った学生で、「太田登先生は銃剣道の達人で、先生からはじめて習った。天気の良い時に、グラウンドで習った。グラウンドは正門に立って左側の3階建ての建物の後ろにあり、教務科の前にあった。」と回顧している。この一期生の集まりは太田助教と学生との個人的な関係が強く、二年生へと受け継がれていく形は取らなかったようである。

<二期生>

二期生については、藤森孝一が部らしい形があったことを次のように語っている。

「自分は銃剣術部員ではなかった。二期では唐須晴男、清二彦、渡会信一、白石修、満系では傳昭などが部員だったようだ。それ以外にも強い者がいた。特に剣道をやっていたものは強かった。稲垣謙次とか舟木旦とか。」

二期生橋満雄は加えて柴田久蔵をあげている。

また、活動時期について藤森は、「二期は前期3年[1941年]か後期になってから活動したのではない。銃剣術の対外試合や大会もあったと思うが、建大の代表が出ていたかどうか、記憶がない。」としている。そのメンバーの多くが物故し、調査が困難なため、活動の実体、特に三期生へと繋がる縦の連繫を明らかにすることはできない。

<三期生>

三期生では、課外活動を記憶している者はいない。但し鈴木学及び島田重弘^{注1073}によると、広瀬久は抜群の強さで、対外試合でも優勝したと本人から聞いたという。また、齋藤利勝もやっていたという。

<新三期生>

不明である。

<四期生>

^{注1070} 越智通世書簡（1999年12月2日）

^{注1071} 尹敬章書簡（1999年12月2日）

^{注1072} 滑空訓練が建大教育の中で登場するのは、1940年5月10日制定の「建国大学学則」で後期の訓練課程に操作業訓練が置かれて以後である。この年11月にはグライダー場構築作業が開始され、翌1941年2月に一期生が後期に入ると実施がなされ、彼らは長春の飛行場などで訓練を受けた（建国大学年表、p.221, pp.267-268, pp.369-370. 齋藤精一氏談1999.6.27）。彼らを育てるために太田は内地に派遣され指導者資格を得た（歡喜嶺 遙か(上巻), p.360）。尚、日本の文部省は、1940年7月に体錬局を設置するとグライダーに関する体育官、体育官補、属技手を置いて積極指導に乗り出すことになるが、これは特に1937年の日中戦争以後、近代戦における空軍の占める位置の重要性を認識した軍及び政府が、国民に対する航空思想及び技能を養成する必要性を感ずるなかで、実現されたものと思われる。（岩松五良、学校滑空訓練について、文部時報 No.636, p.7, 1938.11. 及び、諏訪弥太郎、グライダーについて、体育と競技 19(4): 31, 1940.4.）

^{注1073} 鈴木学聞き取り調査(1999年2月21日)、島田重弘聞き取り調査(1999年2月21日)

桑原亮人によると、部活動者は見当たらないという。

<五期生>

この期は明確に課外活動としての銃剣道部を意識しているように思われる。富樫敬人は1943年に前期2年に入学したが、そのメンバーについて「入学当初は二期の唐須晴男さんが中心だった。五期では、光野輝夫（京城商業から建大へ）が[試合の際の]大将だった。他には宮南正、山下光一、和田達男、佐藤隆彦、自分がいた。光野の次には体格のよかった和田達男が強かった」^{注1074} という。

山下光一塾生日誌の1943年7月31日記事には、「銃剣術班は昨日で練習終わりとなり」とあり、「班」という集団の存在が確認される。この班について六期生（1944年前期2年入学）瓜生敏雄は次のように記している。^{注1075}

「当時は『部』とは云わず『班』と言っていたように記憶しています。班として活動していたのは、記憶に残っているところでは、農業班、滑空班、騎馬班、医務室勤務などで、これらは先輩、後輩へと云う伝統的な形をとっておりました。満系の参加者は少なかつたか、殆ど居なかつたように思います。もっとも医務室は寺田先生の門下生の集まりで文化部というところでしょうか。/柔道、剣道は毎日のように練習し、仲間意識も強かつたが、班と云っていたかどうか。班という閉鎖的な形をとらず、誰でも全員参加ということでしたか。」

非常に興味深いのは、剣道、柔道部が「班という閉鎖的な形をとらず、誰でも全員参加」として、むしろ班の方が閉鎖性が高いことを示唆している点である。ということは今日的な意味では、銃剣道「班」はより銃剣道「部」らしい存在であったことを意味しているといえよう。ただ、実際に銃剣道を課外活動として行った五期生山下光一の当時の塾生日誌を見ると、後述のように、上記の「班」以外の使用例として「銃剣道部」が見えており、当事者の意識は、より堅実な活動をする印象を与える言葉を好んだものと思われる

しかしその言葉の意味は、やはり今日の意識とは大きく異なるものであった。山下光一塾生日誌（1943年9月24日）はいう。

・「徴兵延期廃止が発表されるや、本日の自然科学の時間には俄然一同真剣に聴いていた。銃剣術も急に練習したくなつた。我々は教場と実戦と、否、生活即実戦となつた。苟も実戦になんら役立たぬものならこの際すべて捨て去らねばならぬ。然し此処に実戦とは広義の実戦である。広義の実戦のため歴史的伝統より発する信念と特殊技術（語学等をも含む）の習得が肝要である。」

課外活動とは「学校の正規の教科学習以外の活動」を意味するが、大学生の徴兵延期の廃止、即ち学徒出陣が行われるこの時代においては、日本人学生は正規の教科以上の重要性を感じざるを得なかつたものと思われる。

部員の構成について、五期の光野は、二期の唐須は覚えているが、「上級生とはほとんど接触がなかつた。先輩後輩の中でやった思い出はない。」と語っている。^{注1076} 銃剣道の課外活

^{注1074} 前掲、富樫敬人聞き取り調査「談話メモ」

^{注1075} 瓜生敏雄書簡（1998年9月23日）

^{注1076} 光野輝夫聞き取り調査（1997年8月13日）

動は合気武道部に見られたように、今日の大学における部のように全学年が一堂に会して行うものではなく、ほぼ学年別になされたものと思われる。富樫敬人は、「課外としての銃剣術は、入学当時から7~8人が、毎週2~3回以上は稽古をしていた。皆建大で初めて学んだ。活動は朝食後や夕方に行った」^{注1077}と語っている。

(3) 活動状況 (1943-1944)

これについて、1943年から1944年までの活動の様子を山下光一塾生日誌を中心にしてみよう。

・1943年3月11日・木

「春季武道大会/三月中は武道月間として武道訓練に重点が置かれた。三月十一日から十日間寒稽古。剣道、柔道、合気、銃剣道、滑空の各般にわたる猛訓練が行われた。/午前六時半~七時基本訓練。副総長、熱心に見入られる。」

・同年9月24日・晴

「徴兵延期廃止が発表されるや、本日の自然科学の時間には俄然一同真剣に聴いていた。銃剣術も急に練習したくなった。[前に引用のため以下省略]」

・1944年3月19日(寒稽古納会、武道大会)

「中学四年迄は試合に出たくない、恐ろしいという気がした。中学五年になると是非勝ちたい。負けるなら試合に出たくないと思うようになった。今度の場合は試合に出て思い切ってやりたいと思った。それには多少の自信も手伝っていた。試合は紅白勝負。僕は去年銃剣道部に入っていなかったが旧部員の中に数へられ副将の次に置かれた。これでは到底歯が立たぬと思っていると二年生に一人強いのが居て、それが三年を撫で突きにして一挙に僕の前まで来た。白組は僕を入れて三人となった。僕は三年の名誉にかけてもと思って猛烈に突き込んだ。二、三度のせりあいで脱突がきまり勝った。」

・同年4月6日

「新入生の銃剣術部と練習してみた。二年は僅か三名、三年は二名であった。二年は何れも一級、二級の者であったが、我々の前では問題にならなかった。中学校の段級なる者(マ)が如何に容易であるかがわかる。あの調子で建大生に級を与えたとしたら、誰でも三級以上である。第一中学校で有段者と云って大きなことを云っていた者も今日は兜を脱いだ。初段までは技よりも意気が物を云ふ。」

・同年4月9日

「振武殿[神武殿]にて昇段試験あり。自分は初段を受ける。四人一組になってリーグ戦を行ふ。三回やって二回は十分勝ち後の一回は優勢勝ちであったと思ふ。兎に角建大は強い。三年生の日系なら全部初段に合格すると思ふ。特に頑張りが効くのはやはり訓練のはげしさから来るのであらう。内部にいては分らぬが、外部の者と試合してみると、なるほど建大の体力は勝っていると感ずる。」

・同年4月12日

^{注1077} 前掲、富樫敬人聞き取り調査「談話メモ」

「銃剣術の練習せんとして意気込んで行ったところ突然医務室へ行くやうに云はれた。銃剣術は個人の問題であり、医務室は共同作業である。共同作業なるが故、最高学年の三年が居なかったら困る。あとから斯う考えた。」

・同年5月11日

「矛盾。どちらも望むところであり、どちらも捨てがたい。然し捨て難いと知りながらどちらかを捨てて専念したいと思う。医務室の勤務と銃剣道部との関係である。医務室も自分が居なくては困る。銃剣術も創立期の今として必要である。(中略)

又、建大で最も弱微なる銃剣術の隆盛にも参加したい。今この二つの問題を如何に解決すべきか、果たして矛盾たり得るかどうかということを考えている。」

建大には今日の運動部の選手に見られるように、スポーツ一筋で他のことは深く考えないという学生は殆ど見られない。ここには真剣に悩む様子が見える。

・同年5月18日

「午後一時より銃剣道大会があった。第二道場に於いては自分は兎に角全勝すべきように部員相互から予定されていた。自分もどうにかなるつもりで出場した。ところが部員同士の試合より遙かにやり難いのに驚いた。剣が不規則なればなるほどやりにくい。型にはまった剣術より全然型を知らぬ者の方が却って強い。八勝して優勝試合に出場する。八人残った者の中で抜き勝負。四人抜いて最高点となったので結局第二道場で優勝となる。己の全力を出して悔いのないように戦おうと思う時は勝つ。必勝の信念と云っても勝とう勝とうとあせる時は敗れる。」

・同年5月23日

「武道週間も本日を以て終らす。納会が開かる。自分は銃剣道前後期対抗紅白試合に出場。(中略)前期は悠々と優勝できると思って居たが、後期は案外強いのが居て危いところだった。自分は参将であったが僅かに一人にきり勝てず残念であった。どんなに低く見積もっても自分迄で喰いとめる筈であったが、桜井先生に云われた如『何だ前期は口程強くないな』になってしまった。前期で研究した型を見抜かれてしまったからだ。」

・同年5月30日

「忠霊塔に於て銃剣術試合。兵隊剣術の前には敗る。残念。」

1943年の記事は、学徒動員間近の緊迫感が突然山下青年を襲い、「銃剣術も急に練習しなくなった」と動揺する様子も見えるが、全体として冷静に対応しているようすがわかる。

1944年3月19日の記事からは、銃剣道で自信をつけた様子、また、筆者が施した下線部からわかるように銃剣道部という「部」の存在が意識されていること、三年生になる1944年からそこへ入部したことがわかる。三年生の時点で、1、2級を有した新入部員を問題なくあしらっている。

昇段審査の行われた4月9日の記事には、「兎に角建大は強い。三年生の日系なら全部初段に合格すると思ふ。特に頑張りが効くのはやはり訓練のはげしさから来るのであらう」と述べている。これは指導者の厳しい指導のお陰であったのだろう。山下光一はこの点について

筆者に、^{注1078}「下士官クラスの方々はどうなとも銃剣術が非常に強かったが、中でも桜井先生は技術が頗る優れておられた。自分は特に、やられたと思ったときに、後手から先手へと回る技術を、密かに一対一で学んだことがある。ご自身で会得したものと語られていた。我々の時代に銃剣術の黄金時代ともいえる銃剣術の隆盛をもたらしたのは先生のお陰であった」と語っている。山下が学んだ秘術とは、^{注1079}「防具の下から、銃剣を滑り込ませて、脇の下に直接突っこむ技」で、「予備士官学校の教官をやった際、一度それを使ったら、相手を怪我させてしまった。しかし、それによって軍隊で恐れられ軍隊生活を有利にはたらかせることができた」という。

1944年4月12日、5月11日の記事には、医務室と銃剣道との二つの活動との間で悩む建大生らしい姿が見える。

1944年5月18日の大会は、各学年40名の対抗試合で、山下の前期三年（五期生）が優勝した。^{注1080}校内大会の実施方法と同時に、山下が実力の面でもかなりの域に達し、また精神的態度の面でも実力者に成長している様子がわかる。しかし5月23日、特に5月30日の記事は、強さの点でまだまだ上には上がいることを反省した様子が見える。当時を回顧して山下は、

「兵隊剣術とやって負けた。彼らは心臓のところをカバーして、ハーッと銃剣を繰り出してきた。建大の銃剣道は、将校のそれであったから、堂々とやらなければならなかった。そういうことはしていけないと習っていた。そのため勝てないことがあった」

と語っている。建大剣道部の章で見た「堂々たる」武道の精神が、銃剣道にも貫かれていたことが窺える。^{注1081}

この後山下は学徒出陣によって内地に戻る。山下光一日記9月8日の項には、「新京特別市壮行会」とある。

この年1944年秋に、大学対抗の銃剣道大会が行われた。光野輝夫によると、^{注1082}「昭和19年秋の銃剣道大会には10校くらい参加した。決勝の相手は獣医大学だった。5人出場した中には、蒙古人の選手がいたはずだ。彼はべらぼうに強かった。私が大將で勝って優勝し、日本刀を授与された。この時の写真は富樫君が持っているはずだ」と語っている。富樫敬人は^{注1083}この大会で勝って、「もちろん桜井先生は喜んだ」というが、最強メンバーの6人（光野輝夫、宮南正、山下光一、和田達男、佐藤隆彦、富樫敬人）のうち、年齢が低く学徒出陣にからなかったメンバー^{注1084}を中心にした勝利と思われる。

(4) 昇段審査

一期生齋藤精一らの話を総合すると、共に神武殿での昇段審査に望んだ一期生は、何れも後期になって太田助教の下でグライダーを習っていた、一期生齋藤精一、先川祐次、藤井謙

^{注1078} 山下光一聞き取り調査（2003年3月17日、電話）

^{注1079} 山下光一聞き取り調査（1998年9月24日、電話）

^{注1080} 前掲書、建国大学年表、p.492.

^{注1081} 山下光一聞き取り調査（1998年9月24日、電話）

^{注1082} 光野輝夫聞き取り調査（1997年8月13日、電話）

^{注1083} 前掲、富樫敬人聞き取り調査「談話メモ」

^{注1084} 現在までの調査では、山下、宮南両氏は学徒出陣のためこの試合には出場していない。

二、佐藤謙太郎、花村美哉を含む何名かであった。審査以前に太田助教に熱心な指導を受け、勧められての受験であった。齋藤は同年4月25日に満洲帝国武道会長名の以下の証書とともに銃剣道初段を授与されている。^{注1085}

「第四八号/齋藤精一/銃剣道初段/右允許ス/康徳十年四月二十五日/満洲帝国武道会長武部六蔵」(約22×31センチ)。

百々和のみは桜井助教に声をかけられ、1942年の暮れに受験し、「型と試合をやった。試合は5人戦で、私は大将だったので相手の大将とやったが、曹長の服装で黒胴を着けていた。その前の型では下手だったが、その試合で勝ったので、特別に配慮されて合格したようだ。そのことを桜井さんに知らされた。」という。藤井謙二によると、型と試合ともに先川祐次と建大生同士で組んで受験したといい、合気武道部の有力部員だった百々和は特別に対戦相手が吟味されたのかもしれない。

審査会場については、桜井は、「銃剣道の段級試験は、始めの1、2回は神武殿で」やり、その後新京の各地でやるようになったという。山下光一塾生日誌には、1944年4月9日に「神武殿にて昇段試験あり」と記しているが、これが二回目かもしれない。桜井は、「有段者は課外活動としてさらにやった。上の学年が、先頭に立って下級生に呼びかけて行った」と語っている。

一般に日系学生にとって銃剣道は容易な種目であった。中学において既に柔道、剣道を学んだ体験を持っていたからである。これに対して初めて学ぶ満系は当然不利であり、桜井が語るように「日系学生が指導的立場に立った」。三期の島田重弘は銃剣道を好まず、後期の訓練科目は弓道を選択し、課外でも弓道場に通った学生の一人であるが、日系学生が数が少なかったのに対して、満系学生で弓を引く者が多かったという。銃剣道教育の裏面といえよう。

4. 教育機能とその教育的意義

戦後、陸軍戸山学校OBによって戸山剣友会が結成された。これを母体として1956年に結成されたのが全日本銃剣道連盟である。全国の自衛隊員を中心に普及が図られた銃剣道は1969年には、「現在の活動会員、約7万を擁し全都道府県等に46の連盟支部」^{注1086}を置くまでになり、1970年には日本体育協会にスポーツ団体として加盟した。戦後の銃剣道の精神について、連盟創設以来の指導者であった故郷沢尚信副会長は、銃剣道の基本性格とも云うべき指針を「スポーツ」と「修行道」に置き、「連盟規約第三条に示す銃剣道の信仰を図る目的を達成するためには、スポーツ銃剣道に重点を置くべきである」^{注1087}と述べている。

これに対して建大の銃剣道教育は、銃剣格闘の訓練を主とするものであり戦技に他ならなかった。その教育効果は、卒業後に各地に入営した際に発揮され、多くの建大生は一致して、軍隊では周囲から一目置かれて有り難かったという。しばしば引用する建大生同窓会の文集『歡喜嶺 遙か』には、上下2巻800余頁に260名の同窓が寄稿しているが、銃剣道の教

^{注1085} 齋藤精一氏蔵。

^{注1086} (社)全日本銃剣道連盟, 全日本銃剣道連盟四十年史, p.33, 1997.

^{注1087} 同上, pp.85-92, 1997.

育にある程度言及したものは少なく、先に紹介した李維忠、五期の和田達男と山下光一、三期の林田隆があるのみである。さまざまな随想からなるこの文集のなかで、多くの人々が触れるのは、満洲国のスローガンであった「民族協和」を実践させるべく作られた塾を基盤とした生活である。日本、朝鮮、台湾（民族的には漢民族）、漢（漢民族、満洲族、回族）、蒙古、白露、の諸民族学生を同じ塾舎に住ませ、起居を共にして学び、文字どおり自由に議論することのできたのが建大での生活であった。当時、漢民族にとって日本は戦争状態の敵であり、他方、台湾、朝鮮は日本の領土となり、民族を否定する同化教育が推進されつつあり、台湾系、朝鮮系の学生の心中は複雑であった。未熟である分狡猾さがなく、純粋な傾向をもつ日本人学生は、その矛盾を学校外での生活で知ったり、漢系や朝鮮系の学生に突きつけられ悩み苦しむものも多かった。

そんな建大生活の中で育んだ、ある意味で「豊かな」人間関係こそが、今日の彼らをして、建大での教育を今日なお否定し去り得ない重要な一因ではないだろうか。

五期生和田達男は、「銃剣道を共に行った同期の中で思い出すのは、光野輝夫君、山下光一君、富樫敬人君、宮南正君などである。特に光野君とはライバル意識まる出しでよく練習したが、試合となると、どうしても勝てなかった」と、銃剣道の訓練と友人たちとの交遊を回顧しているが、最後に「私にとって建大とはなんであったか、そしてその生活から得たものはなんであったか」と自問する。そして、「終局目標として、満洲、アジアの地に道義世界、王道楽土を建設する」ために、「全塾生制度」が機能していたことを示唆して次のように結論する。

「私が建大生活で得たものは、学問教育よりも人間形成の面であったと思う。（中略）青春をたぎらせて学んだころの魂が、環境の変化に対しても、総合的に判断し、対処できることに、また個人の利害をある程度度外視して、全体を考えて対人、対事できることに、さらには、異民族（外国人）に対して対等に話ができることに、大きく作用しているのである。」^{注1088}

これは、豊かな人間的触れあいを保証した塾生活という教育環境の効果がいかに大きかったかを示唆している。農事訓練、武道訓練などの訓練教育が、学生に強い影響を与えたのも、訓練の対象以上に、訓練を通して育まれる同輩間、師弟間などの人間関係にほかならないだろう。とくに銃剣道は心臓を突くという直接的実戦性を持ち、「民族協和」の理念には遠い印象を与える。にもかかわらず和田らがその体験を評価するのは、戦技であった銃剣道を、戦後にも維持され育まれた教師や学友たちとの友情から、好意的に捉えかえされた結果であろう。銃剣道を含めた身体運動を伴う訓練的科目は、結局それを取り巻く教育環境（社会環境、人間関係等）に大きく左右される。その点建大の銃剣道教育も、他の訓練科目同様に、授業においてもまた課外においても環境に恵まれたといえよう。

戦前戦後を通じていえることは、武道そして特に銃剣道は、一瞬にして死生を分ける実戦の技能を中核にした技能が、リファインされることによってスポーツ的運動に構成されているということである。故に、恐ろしい危険なものとの印象で語られる場合もある。しかし殺

^{注1088} 和田達男, 謹慎処分一週間, 前掲書, 歡喜嶺 遙か (上巻), pp.330-333.

傷性を防止し安全性の配慮の下で行われる今日の武道は、スポーツとして人格の修養の道具として意味ある身体運動文化である。戦前・戦中の建大における銃剣道が戦技であったにしろ、それに真剣に取り組んだ多くの建大生に一定の影響を与え得た背景には、豊かな人間関係を育んだ優れた教育環境と同時に、銃剣道教育の内容自体に内在する格闘技の構造が持つ「面白さ」があったからではないか。それらが相俟って学生たちに銃剣道課外活動の教育的意義を与えたものと思われる。

第11章 騎道の教 -- 民族協和する馬上禅

建国大学では、一期生の小倉久弥を中心とする一部熱心な学生らによって課外活動として騎道が熱心に行われた。教官らが学生らの自主性を重視したことがこうした活動の出来た理由の一つと思われる。一方、授業としては講義科目と並んで前期課程3年間の柱をなした訓練科目（軍事訓練、武道訓練、農事訓練）の一つとして実施されている。この時代の馬術は必ずしも武道として認識されていたわけではないが、後述するように騎道という言葉には軍事的側面以外に武道の精神性が色濃く反映されているとみることができ、武道としての騎道の研究は武道史研究史のなかで、従来それに特化された研究が行われなてこなかった対象といえよう。^{注1089} 本章においても騎道教育の実態を授業と課外活動の両面について明らかにし、その教育的意義について若干の考察を行う。

1. 騎道と馬術略史

日本における乗馬の習慣は4世紀末頃に中国大陸からもたらされ、古代の律令制下に交通・通信の手段として馭馬・伝馬の制が定められ、軍事的には騎兵隊が編成された。平安後期に台頭した東国武士は騎馬術に長け、その武力をもって鎌倉幕府の成立を実現する。彼ら武士を支えた武術は弓馬の道と呼ばれるように、馬術は弓術と並んで武術の中心技術であった。こうした実用面での発展の他方で、馬術は今日いうところの広義のスポーツとしても展開した。古代の宮廷では競馬や騎射は年中行事の一つであり、騎馬打毬は余興として行われた。鎌倉時代には流鏑馬、笠懸、犬追物、水馬術等の戦闘馬術が発達し、訓練、余興、神事などの目的で行われた。近世江戸時代に馬術は遊芸化するが、武士の嗜むべき四芸の一つには数えられた。

明治時代を迎え富国強兵のために兵制を欧米流に整備することとなったのに伴い、明治政府はフランス続いてドイツから指導者を招いて洋式馬術を学んだ。1888（明治21）年に陸軍乗馬学校が創立されると指導者をイタリア、フランス、ドイツに派遣して各国馬術を学習させ、これらを総合して日本人に合った馬術方式を生み出す努力がなされた。^{注1090} 他方、陸軍がその保管馬を民間人に解放したこともあって1891（明治24）年には民間人の乗馬会が誕生し、スポーツとしての乗馬が発展した。大正期に入るとさらに発展して大学にも馬術部や同好会がつくられ、1924（大正13）年には学生馬術の協会や連盟が組織されて大学の学生スポーツとして定着した。これは第一次大戦後に学校で軍事教練が行われ、陸軍の施設である騎兵・砲兵・砲工兵学校等を開放して学生の練習に供したことによる。^{注1091} 日本の近代馬術は軍事とスポーツの両面の性格が並行して発展してきたのである。

次に、馬を巡る日本及び満洲の状況について考えておきたい。

^{注1089} 日本武道学会に於いて騎道を対象とした歴史的研究は皆無である。

^{注1090} 1911（明治44）年には「純日本式馬術教範」が制定され、これは今日に至る教範のもととして日本馬術の大きな支柱になった。佐藤卯朔：馬術競技，最新スポーツ大事典，大修館書店，p.971，1987。

^{注1091} この段落の記述は主に同上の佐藤書及び、千葉幹夫，日本の馬術，現代体育・スポーツ大系，第17巻，講談社，pp.17-18，1984. によった。

馬術はいうまでもなく他の武道やスポーツと異なり、生きた馬を操ることによって成り立つ。今日のオリンピック競技としての馬術競技は、馬場馬術、大障害飛越、総合馬術の3種目である。それぞれそのねらいを異にするが、総じて勝敗よりも馬を巧みに御する技術性に価値が置かれているといえる。^{注1092}近代における馬術はスポーツ競技としての面以上に軍事上の必要から重視されるところであったが、その場合は特に戦闘に伴う軍務に役立つ馬をどう確保するかが大きな課題であった。したがって建国大学の騎道を考えるに当たってもまず、馬を巡る環境・状況、例えば国家の政策、社会の環境の中から見ていく必要がある。

1900（明治33）年、北清事変（義和団事変）に西欧列強と共に出兵した日本軍は、列国軍から「日本軍は、馬のような格好をした猛獣に乗っている」という酷評を受けたという。江戸時代の鎖国下にあつて馬匹情報が不足していた上に、古来の日本名馬の幻影を追い続けてきたために、改良は遅々として進まず、そのために、日清、日露の戦いにおいて、日本の劣悪な軍馬は戦場に幾多の困難をもたらした。日本の馬匹改良施策の検討が始められたのは日露戦争の最中で、コサック騎兵に辛酸をなめさせられた日本は、終戦後に大々的な馬匹改良に着手し、馬政局の設立と馬政計画の策定が行われた。こうして優秀な輸入洋種と和種との交配による雑種化が進められ、わが国の馬は欧米に近い体格と能力を備えた改良馬へと変貌していくことになる。^{注1093}

満洲国の建国当初の「馬政は軍用馬資源の関係から一般畜政とは分離して軍政部の所管とし、一般畜政においても蒙古人居住地帯の興安各省は蒙政部勸業科畜産股が担当し、その他の一般地域における畜政は実業部漁牧科畜産股の所管として発足した」。^{注1094}1937年の行政機構の改革に伴い畜産分野の関係機構は一元化して畜産局（産業部の外局）に統合された。「しかしながら、1940年国防上の要請から再び馬政部門を一般畜産より分離し、馬政局（産業部の外局）を設置し、産業部内の畜産関係機構は馬政局と畜産司（内局）とに二分されることとなった」。その後1945年春にこの二元機構は再び統合され興農部畜政司となった。^{注1095}

満洲国は建国当初より馬政に関して軍事、産業両面からの重要性を認め、1933年に馬改良計画綱要（資料1）を定め、その執行機関として同年5月に官制を公布して軍政部内に馬政局を設置し、同時に馬法（競馬法）を公布した。建国大学開学の5年前である。

本研究のキーワードである騎道という言葉は、武市によると1928（昭和3）年5月に教育を開始した日本騎道少年団において使用されている。この少年団は、童話作家の鈴木三重吉が、軍の後援を得て、騎馬による精神修養の道程である騎道を少年に課して日本固有の道徳精神を啓発する目的で設立したものとされる。^{注1096}「騎馬による精神修養の道程」とは「道

^{注1092} 千葉幹夫によると、馬場馬術競技は美しさや優雅さを求めての演技を審査する。大障害競技は障害物を過失を犯すことなく定められた時間内に飛び越すことが求められる。また、総合馬術競技は馬の調教の度合いや耐久力とスピード、人馬の余力が三日間にわたって審査される。これらに象徴されるように馬術競技は速さなどに特化された価値のみを求める競技スポーツとは異質である。千葉幹夫：日本の馬術，現代体育・スポーツ大系，第17巻，講談社，pp.17-18，1984。

^{注1093} 武市銀治郎：富国強馬--ウマから見た近代日本，講談社，pp.1-5，1999。

^{注1094} 前掲書，満洲国史(各論)，p.730，1971。

^{注1095} 同上。

^{注1096} 前掲書，武市銀治郎，富国強馬--ウマから見た近代日本，p.201。

程」の受け取り方によって幅がある。騎馬とは馬術・乗馬術であるから、騎道は「馬術の修業を通しての精神修養の道程」と考えられた。つまり、技を通して心を磨く、という日本武道の一つとして考えられていたことがわかる。

しかしながら、大日本武徳会案内の「武道家一覧表」（1941年3月末日現在）には武道を剣道以下14の武術に分類しているがそこに騎道は見えず、また、1942年に3月に新たに結成された武道総合団体「大日本武徳会」の種目にもそれを見ることはできない。^{注1097} 武道界の方では騎道を武道として考えてはいなかった。結局、騎道という言葉の使用は、対米戦争への準備から各種民間団体が統合されていく流れの中で、日本乗馬協会、日本国際馬術協会、日本学生馬術協会の三団体が合体して、1939（昭和14）年9月財団法人大日本騎道会が設立されることによって馬術にかわる用語として確立され、それが建大の訓練教育にも反映したものである。^{注1098} ただし「財団法人大日本騎道会寄付行為」には会の設立趣意や会の目的^{注1099} は記されているが、騎道の何たるかについては言及されていない。^{注1100}

2．授業としての騎道教育

(1) 導入の経緯

正規の授業としての騎道が始まったのは開学初年度の第二学期（8月1日開始）の10月12日（水）からと思われる。一期生長野直臣塾生日誌（1938年8月12日）には、

「今日からはじめて騎道が行はれ、生まれて始めて、手ばなしの馬というものに騎った。小さい時父に連れられてよく馬場に騎りに行ったものだったが、大人と一緒にのると、尻がいたくてうれしいやら泣きたいやらで閉口したことを覚えている。しかし馬も、側から見てみると何でもない様で、一人で扱って見ると一苦労する。下手をすとかみつく、ける、乗ると騒ぐ。始め乗る迄は、泣きたい様に言ふ事を聞かなかった。犬、猫だって考へてみればさうだ。まして体の大きい馬が一日でなつく筈がない。之が高尚になると、人を治める事ともなるのであろう。我々の前途は、ますます忍耐、決心、勇気が必要になってくるのだ。」

また、二期生「藤森孝一塾生日誌」（1940年1月30日）には、

「最初の騎道。馬を可愛がる事が騎道の第一前提だと思ふ。噛まれても、蹴られても、尚心から可愛がる人にして始めて馬もなついて来るのではないか。蹴られても怒らぬのは馬鹿かも知れぬ。しかし、この馬鹿になれなくては先覚者になれぬ。」

とある。さらに、二期生の森口謙二がその書簡で、「正規の授業（この時は同学年の学生

^{注1097} 渡辺一郎編、近世武道史研究資料集(), 1981.

^{注1098} 「財団法人大日本騎道会寄付行為」には農林省指令14馬第13558号による大日本騎道会設立の許可証の写しが収載されている。

^{注1099} 「本会八騎道精神ヲ作興シ馬術ノ向上ヲ図リ軍馬資源保護ニ関スル事業ノ目的達成ニ協力スルト共ニ民間乗馬団体ノ指導奨励ニ任ジ其ノ事業ヲ振作助成スルヲ以テ目的トス」（「財団法人大日本騎道会寄付行為」所収）

^{注1100} 武市氏は、1940（昭和15）年に開苑された馬事公苑の初代苑長山本寛陸軍少将は、「馬事公苑は騎道を通して日本精神の涵養に資せんとす」と理想を掲げたとしている。前掲書、武市銀治郎、富国強馬--ウマから見た近代日本、p.205 参照。また、昭和15年度の第二回騎手講習会時に掲げられた苑訓の第一ヶ条には「至誠以て騎道を作興すべし」とあったことを紹介しているが、騎道の解説があったかどうかには言及していない。

だけで、小倉さんはいない)と課外の騎道部の時間(この時は他学年も一緒に、いつも小倉さんがリーダー)と二つありました」^{注1101}と記し、また、騎道部の創設者で在学中リーダーであった一期生の小倉久弥が筆者との対談のなかで、騎道という授業の存在を厩舎に百頭以上の馬がいたことから証拠立て、「正規の乗馬を教えるのでなければそんなに沢山の馬はいらない」^{注1102}だろうと語っているように、前期の訓練科目の一つとして騎道が行われたことは間違いのないであろう。

騎道については大学教育の正式科目ではないとする論著もあるが、^{注1103}長野以外の塾生日誌にも正規の授業としての認識を示す記述^{注1104}があるように実際はもっと大らかなものであった。建大の訓練科目の一つ、武道訓練は柔道・剣道・合気武道を前期必修としたが、実際はこれ以外の訓練が適宜行われていた。季節によって行われた角力(元関脇天龍の指導)は異民族学生の相互融和の為という印象が濃い、二期生が確認するように、同一学年を対象にした授業が前期3年間に10回程度実施されたと思われる。^{注1105}このような騎道教育実施の裏に何が合ったのか、今は正確にはわからない。ただ、広大な満洲に根を下ろして生きるためには乗馬の必要度が高いことは事実であり、その素養を身につけさせようとする大学側の配慮^{注1106}があったものと思われる。なお、一期生らによると騎道訓練のことを馬事訓練ともいったという。

(2) 指導者たち

しかし長野・藤森両塾生日誌には教官の姿は示されていない。騎道部を創立して騎道一筋に建大時代5年半を送った一期生小倉によると、騎道の指導者は松岡幸市(50歳代)、白鳥昇、今泉勇(後二者は40歳前後)の三人の助教がおり、小倉ははじめ乗馬の基礎を主に松岡助教から教わったという。1941年7月刊行の建国大学要覧に紹介された職員リスト^{注1107}を見ると、助教の欄に、松岡幸市、今泉勇、白鳥昇の三名が並んでおり、小倉のいう三名は彼らに間違いのないであろう。

小倉が特に接したのは松岡助教で、彼は軍隊で言えば下士官クラスの小柄な人で穏やかな人柄だった。また陸軍の馬の部隊に長期間勤務した人のようで馬を上手に扱った。小倉に乗

^{注1101} 森口謙二書簡(2000年9月10日)

^{注1102} 志々田文明編、小倉久弥氏聞き取り調査記録, 2001.9.1作成。この記録は、一期生小倉久弥聞き取り調査(2000年8月22日)の録音テープを起こしたものに2000年9月3-4日の電話補充調査を注記して作成した。

^{注1103} 前掲書、宮沢恵理子、建国大学と民族協和, p.111.

^{注1104} また、二期生橋満雄書翰(2000年7月27日)は、「建国大学でも馬術部員ではない私が、障害はできないにしても、一通り馬に乗れるようになったのは、正課以外には考えられない」と記している。

^{注1105} 森口謙二聞き取り補充調査(2001年9月9日)。なお、橋満雄書翰(2000年7月27日)は「10回以上の訓練があったように思います」と記している。

^{注1106} 一期生百々和氏によると、「学校の指導層の内部でもいろいろ運営上の対立があったようです。学生の間でも建大に対する考え方がそれぞれ民族間、世代間で違い、対立があったようですが、同じ釜の飯を食い、寝食を共にしたという運命共同体的なものが根にあるものですから、イデオロギーは異にしている、八十歳になった今でも、同学として仲良くしているのが不思議です」という。百々和書簡(2002年5月頃)

^{注1107} 前掲、建国大学要覧(康德8年度版, 1941.7.25), p.54.

馬の参考書を紹介してくれたのも彼で、小倉は陸軍の馬術教範や遊佐幸平の本を取り寄せて勉強したという。^{注1108} 二期生森口謙二によると、松岡助教は秋田県出身で、「馬のことなら何でも知っている方で、人柄も穏やかで学生にとっても優しく、馬を非常に大切に扱っていました」という。^{注1109}

なお、馬術指導者として高名であった遊佐は、1941年11月現在で馬政局長の要職にあって、建大にも指導に現れていた。研究院月報には、「11月8日(土)遊佐局長を迎え、馬政並に馬術に関し種々教示を仰ぎ、本学学生一般に馬政に対する関心を一段と高からしめる所あった」^{注1110} とある。

白鳥助教については、一期生尹敬章によると、

「私の記憶では、白鳥先生はチャップリン髭をはやしておられ、助教ではなく[満洲国] 国軍の尉官クラスの教官であったと思います。^{注1111} そして彼は馬術の名人で、大学の普通の馬を駆って1メートル余の障碍を飛越えるのを見せてくれたことがあります。私は、西竹一がロスアンゼルス・オリンピックで大障碍に優勝した記録映画以外、始めて生の障碍越えを見て、大変感動したものです。」^{注1112}

と記している。二期生の森口は授業は松岡に習った思いが強く、白鳥はその存在は知っていても習った記憶は薄いという^{注1113} が、一期生村上和夫は白鳥から指導されたという。^{注1114} なお、今泉については小倉の証言以外に明かではない。

なお、他にスタッフとして馬の健康状態をみる獣医がいた。馬の世話や授業の準備などは助教の下に馬夫と呼ばれる作業員が行った。^{注1115} 当時、満人と呼ばれた漢民族を中心とする現地の人々であった。騎道教育は、日本人の助教らによって担われたと思われる。なお、当然ながら馬術の基本は陸軍式であった。

(3) 教場と馬

教場と馬についての基本的な記述は小倉の詩情あふれる随想に詳しい。

「大同大街の南端西、南湖の南に広がる校域は60万坪余、200ヘクタール余り、塾舎、校舎域、農場を除いても、馬を駆けさせるには十分の広さがある。地形の変化もあった」

「後列塾舎の裏(西側)の谷を隔てた向こう側に農場の建物がある。一番手前に厩舎の長い木造の建物が見える。食堂の裏手から谷をおりて、農場に通ずる路を行くと、向こうの上り

^{注1108} 小倉久弥, 天馬 空を翔かん, 建国大学同窓会編, 歡喜嶺遙か(上), p.353, 1991. および、志々田文明編, 小倉久弥聞き取り調査記録(2001年9月1日)。

^{注1109} 森口謙二書簡(2000年9月10日). この書簡及びその後のご教示(森口謙二書簡, 2003年4月6日)によると、「大学正門の柱、学内から見て左側の門柱の所に住宅が1~2軒あって、そこに松岡さんは奥さん、小学校高学年の女の子、もう一人(これは不確かです)男の子の4人で住んでいました」とあり、官舎に住んだ教官に比しての松岡の立場を伝える。

^{注1110} 建国大学研究院月報 14: 6, 1941年11月25日。

^{注1111} 建国大学要覧(康徳六年度版, 1939.6.15) p.36 には軍事訓練担当助手、白鳥正義の名前がある。

^{注1112} 尹敬章書簡(2000年9月14日). また、橘満雄書翰(2000年7月27日)には「騎道を指導してくれたのは白鳥某(助教ではなかったか?)」とある。

^{注1113} 森口謙二聞き取り補充調査(2001年9月9日)

^{注1114} 村上和夫書簡(2002年6月6日)

^{注1115} 前掲書, 歡喜嶺遙か(上巻), p.353, 1991.

坂のそばに十数本の大きな楊柳の木群が白い幹に緑の枝を繁らせている。厩舎には、時に増減はあったけれど、平均的には百数十頭の馬たちがいた。蒙古馬（満馬）を主に、日本種、アラブ系、サラブレッド系など大型馬が馬房に向かい合ってずらり。^{注1116} 白系統の多い蒙古馬に対して大型馬は、鹿毛・栗毛・青。せん馬に混じって牝馬、中に蒙古馬の牡馬も。この中に名馬もいるかも知れないな。」^{注1117}

「平均的には」と記してはいるが、小倉の馬数百数十頭の記述に対して、やや少な目の数字をあげる話もある。例えば、1941年入学の新制三期生で騎道部の平岡茂美は80頭くらいではないか、^{注1118} また、一期生尹敬章書簡でも、「80頭もなかった様に憶えております」とある。一期生越智通世は「二年目には騎道訓練も始まって、馬小屋は倍になり、黒レンガの農舎棟もできた。」^{注1119} と記し、馬小屋の増築即ち開学二年目の馬数の増大を示唆している。対応して小倉は、年度ははっきりしないが、「時には、蒙古馬を群ごと三、四十頭買ってくる」^{注1120} と記しており、開学二年目に馬が増えたことが分かる。初め何頭いて後に何頭に増やされたのかは厩舎の収容馬数でわかるが、この点に関する補充聞き取り調査で小倉は、^{注1121} 「二棟の厩舎で百数十頭の馬がいたから、一棟には七十頭くらいがいたと思う」と語っており、ここではその数字を採りたい。^{注1122} また小倉によれば、建大の馬の飼いは学生数やその利用状況からすると随分贅沢なものであったという。優秀な学生に優れた環境をという大学側の学生への配慮がここでも窺われる。

小倉は続けて厩舎の構造について、「厩舎の真ん中には事務室と馬糧倉庫があった」と語っている。厩舎については「厩舎は中央の通路に顔を向けて、両側に馬が並んでいる単純な構造だった」^{注1123}。事務室は管理室で、その中には馬具を保管するスペースや獣医のスペースがとられ同時に教員や小倉ら騎道部員の休憩室でもあったという。

(4) 教育内容

上に「訓練科目の一つとして騎道が行われた」と記したが、授業として行うためにどのようなカリキュラムが組まれ、どういう方針で行われたのかについては判然としない。しかし、教育の主内容については、既述の橘満雄書簡に見られるように乗馬の基礎指導であったと理解される。

^{注1116} 尹敬章氏は「馬は全部蒙古馬で」あったと異なった認識を示している。尹敬章書簡（2000年9月14日）

^{注1117} 前掲書、歡喜嶺遙か(上巻), p.353.

^{注1118} 筆者が小倉久弥氏の取材(2000年8月22日)を前提に平岡茂美氏に話を伺ったところ、「馬の数は80頭くらいか。百数十頭はいなかったと思う。大半が日本馬で、満馬は十数頭以下か。」とのご教示を得た。平岡茂美聞き取り調査(2000年9月3日)

^{注1119} 越智通世、藤田先生と農業訓練のこと、前掲書、歡喜嶺遙か(下巻), p.59, 1991.

^{注1120} 前掲書、歡喜嶺遙か(上巻), p.356.

^{注1121} 志々田文明編、小倉久弥聞き取り調査記録(2001年9月1日)の補充部分。

^{注1122} この点について島田重弘氏は、小倉氏の馬数の中には農事用の馬(耕地ないし収穫用)が含まれているのでは、との感想を寄せられた。島田重弘書簡(2002年6月4日)

^{注1123} 前掲、志々田文明編、小倉久弥聞き取り調査記録(2001年9月1日)の補充部分。

小倉によれば、^{注1124} 軍隊式の騎乗法が行われ、騎座を確実につくることから、鞍をつけての馬場での騎乗訓練が行われた。馬場の中での並脚（普通に歩く）、速脚（駆け足。体の反動をとらないと乗ってられない速度）から時に駆脚（四つの足で飛ぶように走る。騎座を締めておけば反動をとらなくても大丈夫）へと進んだ^{注1125}。また、こうした各々の走りで円や八字を稽古した。これは柵に沿って進み、途中で円や八字を描いて元に戻るといった馬場馬術の出発点であった。こうした稽古で騎座（膝）がきまり、脚や手綱の使い方も身についてくるわけである。馬場の中での訓練で馬になれてくると野外での訓練も行われ、これには配属将校の下で助教が引率した。

下記の対談に見えるように、^{注1126} 小倉は、教官が直接教育しない建大の教育体制は問題があったと考える。広大な満洲における人の足としての馬術の重要性を考えれば当然であろうが、大学側では、学生の心身鍛錬として、より実績のある武道を主教材とすれば、騎道を従にせざるを得なかったのかもしれない。

・志々田：でも、非常に沢山の学生が授業としても馬に乗ったということを考えると、もっとしっかりした教育という形を前面に立ててやってもよかったように思います・

・小倉：と、思いますね。私も思うんです。何でね、騎道については、柔・剣道のようなあるいは合気道のようなね、教授だとか助教授をもらえるような指導者がいないのかな、とそう思っていましたよ。

・志々田：小倉さん、最後に、建大で授業をやらせるときに、助教の様な形で指導されたときに一体何を教えるということを上から教えられたんですか。（注：小倉氏は実際に助教の助手の様なかたちで学生に教えた）

・小倉：ないんです。だからおかしいっていつているんです。柔道や剣道だったら曲がりなりにもそういうものをもっているでしょう。騎道が何だっていうと、それがね、曖昧というか、はっきり示されていないんです。そういう状態で騎道訓練をやる。それはもう、馬が乗れるという、それだけなものな。」

ただ、騎道部が出来、基礎をマスターした小倉のような部員が育ってくると、大学の軍事訓練教官は演習で部員を活用している。建大の軍事訓練で学生に求められたのは、日本の軍隊の大隊（約500名）単位の作戦・指揮ができることであった。尹敬章が「馬術を軍事訓練の一環として受け止めておりました」^{注1127} と記す通りの性格が騎道にはあったのである。

・小倉：こういう目標があったわけですよ。軍事教練には。その一環にね、火砲の扱いもさることながら・・・。火砲（大砲）はできなかつたんですよ。せいぜい機関銃までですな。その範囲で今度は騎馬隊を編成してね、これをどう使おうか、というのをやったんです。だから正課でみんなに乗馬を教えたわけです。特に満洲馬、蒙古馬の（乗馬）。ここにも書いておきましたけどね、30騎くらい。これを指揮してね。各隊に配属して、斥候やなんかをや

^{注1124} 前掲書、歡喜嶺遙が(上巻), p.353. 及び、志々田文明編、小倉久弥聞き取り調査記録(2001年9月1日)

^{注1125} さらに進むと襲歩（全力疾走）になる。乗り方は駆脚と同じで反動をとらなくても大丈夫だったという。前掲、志々田文明編、小倉久弥聞き取り調査記録（2001年9月1日）

^{注1126} 同上。

^{注1127} 尹敬章書簡（2000年9月14日）

らせたんです。各大隊なり中隊にね、乗馬隊を配属して。それを斥候に使ってもらったんですよ。

・志々田：その場合の乗馬隊というのは・・・

・小倉：学生ですよ。僕はね、馬から何から全部編成して、分けてやるんです。斥候というのはせいぜい2、3騎で飛び出だされるわけですよ。30騎も一遍に出るほどのことはないからね。2、3騎ずつ斥候に出してやるわけです。そういうのを配属してやるわけですね。」^{注1128}

(5) 学生にとっての騎道

騎道教育は概ね学生には好評であった。しかし乗馬はそれほど簡単なものではなく、危険性をも伴った。長野直臣塾生日誌には次のようにある。

・(1940年11月30日・木・晴)「本日は騎道にて、辻閣下より、馬に乗っていないで馬にのせられているといふ小言を頂戴した。言はれて見れば成程と思ふが、まだまだ馬を気持ちで压するといふ事が足りないと思ふし馬が他人の様な気がする。あんな小さい馬にまで馬鹿にされている様で情けなかった。」

また一期生単希平が、「蒙古馬の背中から落ちてから騎道は怖くなったのです。」と記すように、^{注1129}馬の扱いに苦しんだり怖がったりする学生もいた。こうした感想は馬の調教具合による影響が大のようで、二期生藤森孝一塾生日誌は次のように述べている。

・(1940年2月20日・火)「騎道。今日で二回目だが、馬がとてもよい馬だった為に、思ふ存分乗る事が出来た。」

・(1940年3月25日・月)「午後は三時半より三年生〔一期生のこと〕の後直ぐに騎道。鏡が外れたり、踝、膝の締める力が少しでも緩むと、すぐに暴れ出す。二、三回正に落馬せんとした。実に油断のならぬ馬であった。然ししっかり締めて居ればよく云ふ事をきいた。終わってから首筋を叩いて糞を食わはしてやったら嬉しさうにボリボリと喰って居た。心さへ繋がって居れば馬は決して落ちるものでも又云ふことを聞かぬものでもないと思った。手綱二分、足八分が名人の力の入れ方だと聞いて今更ながら、一道に達することのむつかしさを感じず。人の目に見えぬ所に本当の苦心が要るのだ。之が一道の極秘(マ)であらう。」

藤森の日誌には、当時の日本人学生が騎道を武道のように一つの道として受けとめている様子が窺える。それは実用的かつ心身鍛練に有効な教材であったといえよう。

しかし満系学生の場合にはこうした受け止め方はされていなかったようである。一期生尹敬章は、「考えてみれば、騎道の道を考えたこともなく、只軍事教練の一部と考えておりました。只我々満洲民族は馬上で天下を取ったのであり、馬に対しては特別の感情があり、

^{注1128} これに対応する話は平岡茂美氏の「愛馬日記抄」にある。「[1941年] 8月13日 午前中大体密集教練。乗馬隊は偵察のため出発、全員28名。途中敵の二個小隊に遭遇。次々と伝令が本部に向う。自分も小倉斥候第五報告を持って本部へ駆けた。」平岡茂美、愛馬日記抄、前掲書、歡喜嶺 遙か(上巻)、p.387.

^{注1129} 単希平、私と剣道、前掲書、歡喜嶺 遙か(上巻)、pp.375.

(中略)馬には一応乗れるし、相当興味を持っていただけです」と記している。また期が下がって四期の轟長林の場合は、騎道“班”のもつ政治的機能に考えが及んでいたようで、次のように記している。

「課外活動に騎道班があると知っていたが、参加しなかった。というのは、当時、柔道、剣道、合気武道などの教官たちの説教には、わざ“道”に乗せると神道につながれ、そして八紘一宇に導れ、おしまいに日本の侵略拡充政策の一役を担わせることになってしまう。」

注1130

いずれにしろ、日中戦争の泥沼化によって、建大の建学以来の課題であった「民族協和」の実践が困難になり、「王道楽土」の実現は夢物語と思われる現実は加速していった。建大のあらゆる教育は少なからざる日系学生のその実現への真摯な思いに反して空転せざるを得ない状況にあった。1940年晩秋には満系学生の反満抗日運動が顕在化し、翌1941年末、更に42年以降逮捕学生が続出したことによって、学生間の対話も形骸化して行くからである。騎道教育も建学の精神の実現という観点からみれば空転した教材であったのかも知れない。しかし、騎道教育が学生の情操を育んだのも事実であった。以下、課外活動にその一端を見てみたい。

3. 課外活動としての騎道教育

(1) 草創の頃

騎道部は一期生小倉によって創部されるが、小倉ははじめ全くの素人であった。「入学して幾日もたたない一日、校域の南端、経緯度原点の櫓の辺りで兎狩りをやった。見事仕留めた兎を片手に、蒙古馬に乗せてもらった」。^{注1131} 農事訓練助手の北原勝男が「おい、お前あの馬へ乗って帰れ」といった、と小倉は以下のように語る。^{注1132}

「よしきた、っていうわけでね。僕が兎を左手にぶら下げて。耳をね、持って。それでよいこらっしょ、っと、木の鞍ですよ。初めて跨った。ここにも書いておいたけど、落ちないで帰って来たんですよ。馬は走りますからね。厩舎の方向、自分のねぐらに向かって駆け回りますから。落ちもしないで何とか兎を持ったままでね。厩舎へ何とか駆け戻ったんですよ。それが始めですよ。^{注1133} それから私は厩舎へ通うようにして馬に乗ったんですよ。その時助教と仲良くなってね。教えてもらったわけです。軍隊式の乗り方を。」

これが機縁となって小倉は馬を習うことを決意、毎日の厩舎通いとなり、騎道部を作ることになる。

「騎道部といっても、難しい入部規程や規則をつくったわけではない。行きがかり上、私がお山の、いやお馬の大將役をやったけれど、参加したい者よ集まれ方式。長く熱心に続い

^{注1130} 轟長林書簡(2002年6月28日)

^{注1131} 前掲書, 歡喜嶺遙か(上巻), p.352.

^{注1132} 志々田文明編, 小倉久弥聞き取り調査記録(2001年9月1日)

^{注1133} 「兎片手に躍るばかり。厩舎に駆け込んでやっとなめてくれた。獲物の兎は必死でぶらさげていた。よくぞ落馬しなかったと冷や汗。これが馬との初対面、初乗りだった。」前掲書, 歡喜嶺遙か(上巻), p.352.

たか否かだけのもの。日満蒙鮮露系学生たちが適宜集まった。」^{注1134}

この小倉を評して騎道部新制三期の藤田進は、「新三期は馬をやった者が多い。騎道部は小倉さんでもっていた。理論家で哲学者でした」と語っている。^{注1135}

指導者は授業の章で述べたように、学生たちにとっては曖昧な形であったようだが、松岡助教らが小倉らの相談役になったとはいえよう。平岡茂美は、「雨が降りだしたので厩の中で松岡教官から、馬についての失敗談や自慢話を面白く聞く。飯を食うのも忘れて練習した頃のこと。自分の世話してやる馬が如何に可愛いものか、等々二時間半。」^{注1136}と、そうした模様を記している。部員たちの回顧に白鳥上尉の指導する姿は見えない。

小倉によれば、部員らの教科書は、助教らの照会で入手した陸軍馬術教範、騎兵操典、遊佐幸平の著書などであった。^{注1137}

(2) 部員と活動内容

既に記したように、建大での授業・騎道訓練には武道訓練のような教授、助教授が指導するといったはっきりした教官の姿が見えず、小倉らは戸惑った。だがそのことが逆に小倉を騎道部活動に一層駆り立て、強力な個性で部を引っ張っていくことになった。小倉は記す。

「部員は、馬に乗るだけではなく馬の飼育をしっかりとやらなくてはならない。馬体の手入れは欠かせない。鞍傷など生じないように馬具の使用と管理に留意する。馬房の清掃、敷藁の交換もやる。飼付も馬夫たちだけにたよるのでなく、部員もかいば作りから始めよう。蹄鉄の着け方、健康チェック、怪我の手当。傷の縫合くらいできなくては……。乗馬と共に、馬耕も習おう。大車[ダーチョ]も馬車も操ろう。」^{注1138}

集まった部員について小倉の一年後輩の二期生森口謙二は、^{注1139}「少ない時で10人あまり、多い時でも25人くらい」で「日系の学生が大部分でした」という。具体的氏名を特定することはできなかったが、三期生楓元夫は、^{注1140}「文字通り毎日、既に通い、授業よりも騎道に打ち込んでいた学生」藤田進を挙げている。漢民族系や蒙古系の学生部員を資料で見いだすことはできない。^{注1141}部員の意欲については森口は、^{注1142}「小倉さんのように熱心に取り組んでやっていた方もいましたが、課外活動なので、柔道剣道合気〔武〕道などの格闘技に向かない者が、乗馬の方が新しい体験であるし、また気楽にやれると思って入っていたようです」とし、自身は「小倉さんを先頭に一列になって、少し起伏のある広大な畠の中の道や楡

^{注1134} 前掲書、歡喜嶺遙か(上巻), p.353.

^{注1135} 歡喜嶺訪中団随行聞き取り調査(1992年9月21日)

^{注1136} 前掲書、歡喜嶺遙か(上巻), pp.388.

^{注1137} 前掲、志々田文明編、小倉久弥聞き取り調査記録(2001年9月1日)

^{注1138} 前掲書、歡喜嶺遙か(上巻), p.353.

^{注1139} 森口謙二書簡(2000年9月10日)

^{注1140} 楓元夫書簡(2002年5月31日)

^{注1141} 課外活動ではなく授業でのことであるが、二期生森口氏は「蒙系のジャルガル君のように馬乗りは朝飯前の者もいて、揃った授業を系統的に進めていくことは難しいように」思ったと記すように乗馬に堪能な満系学生がいたはずであるが、小倉氏にも部員として記憶されていない。森口謙二書簡(2000年9月10日)

^{注1142} 前掲、森口謙二書簡(2000年9月10日)

の木のをばを馬に乗って回ってくる遠乗りが最高でした。他の部員も乗馬の上達もさることながら、この乗馬の楽しみで参加していた者が多かったように思います」と記し、スポーツの楽しさを求める青年の姿を率直に伝えている。他の部と同様に部員各自の自主性が重んじられていたといえよう。

乗馬は裸馬から始め、授業の章で紹介した鞍を付けての内容へ、さらには軽度の障害へと進んだ。時には難しい高等馬術の稽古をし、また密集隊形での襲歩突進の真似事をもしたが基本の段階が中心であった。^{注1143} 授業では馬術だけでよいわけだが、小倉は「馬の臭い、厩の臭いが体中にしみ込んで鼻をつく」ほどの馬への愛情を部員に求めた。そして実際、騎道部三期の益村春蔵は、「何時も馬屋に行きブンブン臭いをさせて」塾舎に帰って来たという。

^{注1144}

『建国大学年表』1939年3月20日の項には、「澤木興道師来学、四日間に亘り座禅及び訓話あり」^{注1145} とあるが、小倉が禅の修行を志したわけではないが、思想的には「禅的な境地」を目指したと次のように記す。

「馬はなかなか思う通りに動いてくれぬ。鞭も拍車も馬を脅えさせるばかりだとなるとつい腹をたててしまう。・・・馬はますます脅えて失敗する。怒れば負けだ。はては己に腹が立つ。何のために馬に乗る？ ただ好きだからでよいのか？ ・・・馬とは何だ？ 人馬一体とは何だ？ 疑問が疑問を生む。」

「禅でも組むか。みんな多かれ少なかれ馬にいらだち、心を乱す。誰いうともなく『馬上禅だ』と。」「馬上禅。動中静を求め、己を御し動じない心、かくてはじめて馬を愛する心も本物になるというわけだ。」^{注1146}

それは騎道に禅的なものを結びつけた解釈といえよう。だが小倉の場合、その「馬上禅」は、加えて「民族協和」に実践的に関連づけられていた。

「我々は塾で生活をしながらね、実際その日漢蒙云々の五族というものと一緒にやれるということに熱中したわけですからね。これは将来のアジアなり何なり考えた場合にどうしても大事だろうと、こう思ってそれを一生懸命追求したわけですよ。生活の中で、学業受けながら、その一環で馬にも乗ったんです。だから我々はね、民族協和とか王道楽土とかいったことが、本当にどうやって実現するんだっていうことが基本にあつての全てじゃないのか、って行ってやったもんですね。（中略）何とかその五族協和というか、民族の共存共栄を図れる方法を探ろうと。またそれは可能かということを探求したんですよ。」^{注1147}

小倉は筆者に対し、「我々は、ただ馬を楽しむというだけではなく、民族協和を考え、人

^{注1143} 「しかし実際の馬っていうのはね、そんなに優れた馬ばかりいるわけじゃあないでしょう。まして蒙古馬なんていうのは野馬みたいなもんですからね。だからなかなか高等馬術までいかないんですよ。」前掲、志々田文明編、小倉久弥聞き取り調査記録（2001年9月1日）

^{注1144} 松原隆氏の発言。「益村[春蔵]君というとき馬術が得意で、何時も馬屋に行きブンブン臭いをさせて塾舎に帰ってくる姿を思い出す。」前掲、会誌（三期会誌）康徳、p.5, 1992.

^{注1145} 前掲書、建国大学年表、p.138.

^{注1146} 前掲書、歡喜嶺 遙か(上巻)、p.355.

^{注1147} 前掲、志々田文明編、小倉久弥聞き取り調査記録（2001年9月1日）

間はどのような風にあるべきか、死生観を考えた」^{注1148}と語った。また、平岡茂美の「愛馬日記抄」(1942年6月13日の項)にも、

「『騎道を行ずるに当たって、建大の塾生活と遊離したものとして考えるならば、むしろ、この道は潔く放棄すべきであり、あくまでも塾生活の一環としての騎道でなければならぬ』と小倉さんの話。」^{注1149}

とあるが、そこには「行」と「禅」としての騎道が、現実すなわち民族協和実践の現場である塾生活と遊離しないことを求める一青年の真剣な生き様があった。

4．教育的意義

建大の建学の指針について、副総長作田莊一は「満洲国」皇帝溥儀から賜った開学勅書を解説して、次のように記している。

「この勅書では、建学の使命として満洲国が日本国と一徳一心の關係に立ち、在住諸民族の協和に力め、王道国家を昭示せる「天の道」を尊重し、東西の識に通じて現代教学に一生面を開くべき満洲国学を興し、以て実済(マ)の国土を養成するにあることを高調せるものであった。」^{注1150}

ここには国土養成の手段としての「民族協和」が重要視されている。^{注1151} 民族協和は、日本の軍事力を背景にした当時の満洲における日本人の絶対的優越、一方中国、朝鮮等の民族からすれば民族差別という現実の共有の中で唱えられ、その実現を求められた。その思いに差があるのは当然であろうが、一期生齋藤精一によれば、^{注1152} 少なくとも開学1, 2年目ぐらいまでは少なからざる建大生がその実現を真剣に受けとめたという。「民族協和」という言葉は「満洲」という当時の社会のなかで生きていこうとする心ある日本人にとって実現すべき現実的理念であったし、日本の属国的性格をもった「満洲国」において生きようとする異民族学生にとっても、現実の差別を克服するかのような魅力をもったその言葉それ自体は必ずしも否定さるべきものではなかったと思われる。

しかしながら、こうした日系学生の真摯さも、1940年を分岐点として、「民族協和」は後に反満抗日運動に参加した学生のみならず多くの満系学生にとってのめり込む真理としての力を失っていた。太平洋戦争突入以後日本の敗色は次第に顕在化してくるが、そうした情報はひしひしと学生の身辺に届いた。1941年12月、日米戦争へ突入、1943年6月、一期生繰り上げ卒業、12月1日には学徒出陣。この時代、小倉をはじめ日系学生は死を意識し、武士道、

^{注1148} 小倉久弥聞き取り調査(2000年9月4日)

^{注1149} 前掲書, 歡喜嶺 遙か(上巻), p.390.

^{注1150} 前掲書, 建国大学年表, p.76.

^{注1151} 一期生越智通世氏より、国土養成の手段ではなく理念であったのが実感であった、との指摘を頂いた。実際民族協和は多くの人々にとって理念であったしそう機能したわけであるが、その政治イデオロギー的機能は別としても、民族協和を実践を通して体持している国土の養成こそが作田のねらいであったと考える。

^{注1152} 筆者は1990年に建国大学を巡る一連の研究を開始して以来この十年間、齋藤精一氏から何度もこのように伺ったが、その変化の様子は湯治万蔵編『建国大学年表』収載の記事からも読みとれる。

葉隠の思想に思いを馳せ、軍務に服していった。状況は日系学生にそれ以外の思考を許さなかったともいえよう。

一方、満系学生にとっては、民族協和などの言葉はイデオロギーの欺瞞性をもつものとして無視されていくものとなる。そしてその「欺瞞性」は戦後の新生中華人民共和国においていっそう強く刻印されて過去に投影され、今日的認識を築いているといえよう。例えば四期生聶長林の記した『幻の学園・建国大学』は建国大学教育の全体を批判したその種の認識の代表的論著といえよう。聶長林は記す。

「中国学生たちは、統治される立場に身を置かれ、日本侵略者の残虐行為を目で見たばかりではなく、身をもって体験した。学校の先生たちが『民族協和』だの、『王道楽土』だの、いかに舌を簧のように振っても、中国学生たちは疑惑の態度で聞いて、決して軽々しく信ずることはなかった。現実は全くその逆であるから。」^{注1153}

聶長林は執筆の「真意」は「『建大』という一側面から、日本帝国主義の侵略犯罪を暴露し、歴史を改竄しようとする企てを、批判することにあつた」^{注1154}と述べている。聶は他方で、「当校に学んだ学生は、日本人であろうと中国人であろうと、いずれも無邪気な青年で、日本ファッショ思想毒害の被害者であつた」と記し、^{注1155}民族協和などの看板に騙されて海を渡ったとして同学の立場を擁護している^{注1156}が、少なくとも一期生、二期生の理想と希望に燃えて建国大学を基盤に満洲国を変えていこうとしていた学生たち、すなわち聶の記す「徹底的に毒化され、かつそこで凝ってしまった人」にとっては、聶の認識は必ずしも承服できないものであろう。

聶長林は1941年1月に入学し、「抗日救国の進路を探すとの決心」^{注1157}で1943年12月に建大から出奔した学生である。一期生齋藤らとの入学年代差はわずか3年弱であるが、その間の学内・外の変化は大きなものがあつた。齋藤らが異民族学生と口角沫を飛ばして取っ組み合いの喧嘩をしながらも民族協和の実現について考えてきた^{注1158}のに対して、第二次試験を建大で寝泊まりして受験した聶は、この段階で故郷の先輩に接して「『建大』の優遇のためにおのれの亡国奴の地位と、祖国同胞たちが苦境に喘いでいることを、忘れてはならぬと、直接間接的にほのめか」され、これが「それからの私の生活にも、深い影響を与えられることとな」つたという。^{注1159} わずか三年間の変化が、建大の歴史認識に微妙ではあるが大きな差を生

^{注1153} 前掲、聶長林(1997)幻の学園・建国大学, 建国大学四期生会誌・楊柳(別冊), p.16.

^{注1154} 同上, p.90.

^{注1155} 同上, p.16.

^{注1156} 聶長林氏のご指摘。筆者は、聶長林氏より拙稿「建国大学に於ける騎道教育」に対する丁寧な感想を記した書簡を頂戴した。聶長林書簡(2002年6月28日)

^{注1157} 前掲、聶長林, 幻の学園建国大学, p.77.

^{注1158} 一期生尹敬章書簡(2000年9月14日)は、「私は、建大6年間の教育を通じて、民族協和とか王道楽土とか日滿一心とかのお題目よりも、自らの民族と異民族のことを知り、このような独立自主の精神が、そして生涯の知己を得たことが、最大の収穫であつたと考えております」と記しているが、尹氏らの「生涯の知己」は、出自を異にした学生が様々な悩みを背景にぶつかり合った一期生同士の信頼と友情によって得られたのであろう。

^{注1159} 前掲、聶長林(1997)幻の学園建国大学, p.59.

みだしているといえる。轟は自らの著述を、「見たところ聞いたところと体験したところは、いずれも客観的事実であり、分析判断も客観的事実に依拠したものであって、憶測に立つものではない」^{注1160}と記している。しかし自らの体験を自らが語る時それは主観的事実というべきではないか。また、歴史に於ける個人の体験は事実の断片でしかなく、その解釈には自らがもつ個人的価値判断がつきまとうことを認識すべきではないだろうか。というのは「毒化された」学生たちも同様にまた、「見たところ聞いたところと体験したところは、いずれも客観的事実であり、分析判断も客観的事実に依拠したものであって、憶測に立つものではない」と考えているものであるからである。建大が存在した8年間の教育を総括しようとするときに、異なった意見の人の間で共通言語をもって認識の共有をはかろうとする時には、少なくとも自らが限られた体験しかしていないということ、また、8年間の状況の変化を的確に押さえた上でなされる必要がある。

その上で騎道教育の意義を考えると、筆者は、騎道という人間の武道実践を時代の価値思想「民族協和」との関係で考え悩みそして生き抜こうとしたリーダー小倉青年の姿勢に学ぶことにあると思う。日本武道では「わざ（実践）」を通して「みち」に至ろうとすることが修業者の態度とされる。小倉も騎道実践によって個人的な求道の無我の境地に至ろうとした。それは彼にとって民族協和を実践するための有効な方法であり、それ以外に方法がなかったともいえよう。

しかし日本人学生中心の騎道実践だけでは諸民族の協和には至るまい。その実現には、人間や社会の構造、機能、関係についての別個の学習に基づく教養や思索が必要である。学生は幸い塾での異民族共同生活を送っているから、議論の場を持って自他の思考力を鍛えることができた。小倉は騎道を「馬上禅」と意義づけることによって、民族の抗争を超越する精神の拠り所を求めた。彼は、騎道、学問、塾を総合して生きる中に民族協和を実践しようとし、騎道教育をそのような関係の中に置くことによって、個人的逃避に陥り勝ちな武道の求道性を乗り越えようとしたのであろう。筆者はそのような騎道に対する態度に当時における価値を認めるし、今日における教育的価値もその点にあると考えるのである。

さて、授業としての騎道が、学校側のどのような意図の下に計画されたかを明らかにすることは難しい。この点について、一期生百々和は筆者宛書簡に、^{注1161}「彼自身は馬術を騎道にまで高める努力をした人だと思いますが、学校当局の主流派はそこまで考えておらず、満洲で活躍するには乗馬が絶対必要だから、というようなことから、正課の一部として導入し、更に乗ればそれでよいと考えていたのではないのでしょうか」と記し、道として捉えた小倉の場合の特殊性を提起している。また、同じく一期生越智通世も、「実感として生活教養としての意味が深く、休日等半日以上にも及ぶ近郊農村訪問を楽しんだり、地方への実習旅行中も乗馬の機会は少なくありませんでした。このことは大同学院が乗馬教育を重視していたことと軌を一にします」と記し、一般学生の認識は生活教養であったことを教えている。

いずれにしる結果的に、課外活動の物質的基盤（人的・物的施設）を保証し、学生に軍事

^{注1160} 同上, p.17.

^{注1161} 百々和書簡(2002年5月頃). この書簡には、拙稿(2002) 建国大学に於ける騎道教育, 武道学研究 に対する所見が書かれている。

技術としての乗馬のみならず「満洲国」における生活教養としての乗馬の基礎を教えた。このことは、潤沢な資金と学生への愛情が教育の成功の要諦であるという一般的真理を教えているといえよう。

第12章 角力の教育 -- 人格涵養としての角力

建国大学の時代は、戦前から戦中期における日本の帝国主義的膨張期であり、その意味で「国際化」の時代でもあった。日本が進出したアジア諸国の諸民族との間には大きな摩擦があったが、特に、建大の教育は日、漢、蒙、鮮、白露の諸民族のエリート学生に対する教育であり、そうした矛盾が渦巻いていた。

本稿では、角力の教育についてその実態をより詳細に明らかにする。特に、その指導者として教員・学生から関心を集めた元関脇天龍、和久田三郎（1903-1989）の履歴とその思想について明確にしたい。天龍は戦前の相撲界革新運動「春秋園事件」の中心人物であり、東京の相撲協会を向こうに回して驚くべき活動を展開した魅力的な人物である。その面を考察することによって建大の角力教育の意味を考える縁としたい。そして、彼の行った授業としての角力教育、彼を慕って集まった学生たちの課外活動の実態についてそれぞれ解明する。

注1162

1. 元関脇天龍・和久田三郎

建国大学の創設に関わり、実質的な最高指導者であった副総長・作田荘一は、晩年の回顧録『道の言葉』第六の巻において、「訓練場の教育は、日本の大学や高等諸学校には見られない多くの特色を持って居た」とし、武道訓練の一つ、角力について、次のように記している。

「聊か奇抜と見られたのは相撲(マ)部であり、これには専門家の天龍関取を聘して、随意の一訓練科目としたが、その教え方が甚だ立派であり、各民族の青年学生が悦んでこの訓練に加か{わ}った。この相撲訓練が腰を据える鍛錬として他の武道訓練に共通する基礎となったことは、予想以上の成功であった。」^{注1163}

見られるように角力は随意科目であり、剣道・柔道・合気武道のように必修科目として行われたわけではなかった。陽気の良い5月下旬に、屋外に造成された土俵の上で、基本練習がなされ、塾対抗のような形で角力大会が行われた。もちろん和久田の指導である。それは平素の教授・学習を中心とした生活のリズムをうち破る楽しみのある場であり、小柄な日本人の常識を覆す巨躯の指導者・和久田三郎の名指導ぶりと相俟って、学生にはより強いインパクトを与えた。

さて、建大では「相撲」に代わって「角力」の語が用いられた。相撲は儒家の経典『礼記』の「月令」にみえる語で、力くらべの意味である^{注1164}。和久田は渡満以前から「角力」の語を使用し、満洲でも同様であった。その理由を、「私はどうもこの相撲という文字のうちに、今までの相撲につきまとうすべての因襲と腐敗がこもっているような気がし、それへの

^{注1162} 本章は1996年度日本武道学会第29回大会（1996年9月5日報告、於東海大学）における筆者の発表（「『満洲国』建国大学と合気武道及び相撲教育」）の際に配布した資料（論考）を大幅に加筆・発展させたものである。

^{注1163} 作田荘一(1967)道の言葉(第六の巻), 作田荘一著「道の言葉」刊行会: 京都, p.220. なお、ここで作田は相撲の語を使用している。

^{注1164} 新田一郎(1994)相撲の歴史, p.13.

反撥からしてこれまでの仕事にも関西角力協会の名を付した」としている。^{注1165}はじめに、和久田三郎という人物について見ておきたい。

(1) 恩師の訓戒と春秋園事件

和久田三郎^{注1166}は1903（明治36）年11月1日、静岡県浜名郡神久呂村大字大久保に、和久田米治郎、里美の次男として生まれた。その自伝『相撲風雲録』によれば、生家は中の上程度の百姓家で、父は厳父、母は慈母であったという。「子供の時から学科が大好きで」あったが「生来の呑気者で、ただ素直に、先生の教える通りをそのまま勉強していた程度」^{注1167}でなかったというが、後に相撲界改革の風雲児となることを考えるとき、幼い頃からの利発さ、素直さ、そしてストレスに耐える呑気さがその後の成長の下地となったものと、筆者には思える。

1919年、和久田は16歳で出羽の海部屋に入門した。二代目出羽の海親方は横綱常陸山である。彼は1922年6月に死去するが、その間和久田はその親方の影響を強く受けた。特に19歳の時に直接受けた次の訓戒は、彼のその後の相撲界革新運動の契機となる。その主旨を和久田は次のように記している。

「力士というものは読んで字のように、立派なサムライでなくてはならぬ。断じて道楽商売とおもってはいけない。武士道精神でつらぬくべきである。現在の多くの力士どもは、みな幫間か末社のような気持ちで、鼻肩筋、後援会の旦那衆のご機嫌とりにうつつをぬかしているが、そんなことでは国技の伝統をまもり続けていくことは出来にくい。つねに、力士が一個のサムライであるという毅然たる誇りをもって、まず、相撲のワザと精神を鍛えあげねばならぬ。（中略）いいか、相撲が上手になるよりも、幕内力士や三役に出世するよりも、お前たちがまず立派な人間になって、その上で、世間が力士を見る態度、関取をとり扱う見方を改めさせるのだぞ。」^{注1168}

この自立心を求める教えが、入門以来、彼自身が相撲界の因襲に抱いていた疑問・問題点と結びつき、1932（昭和7）年に相撲界を震撼せしめたいわゆる「春秋園事件」を惹起させることになる。彼が捉えた問題点とは例えば、相撲協会に「どれだけの収入があって、運営の面にまた人件費として、はたしてどれほど支出しているのであるか、法人だから理事があり監事もあり、また評議員もあるが、責任のある収支の報告が嘗て出されたことがない」ということ、「年寄りは何もしないで、協会から相当の分け前金を貰っている」こと、「力士が三役に進んですら到底一人なみの生活ができなく、「収入が極端に低いから、そこで力士は卑屈になり、旦那衆にペコペコ頭をさげ、鼻肩筋のお子さんに対しても、玄関番以下の

^{注1165} 和久田三郎（1955）相撲風雲録、池田書店、p.248.

^{注1166} 和久田の関係の記事引用は特に断らない限り、和久田の一代を克明に記した自伝である同上書、相撲風雲録に拠った。その他に天龍と大日本相撲協会を描いたものとして右がある。天龍三郎（1988）読物・大日本相撲協会、「文芸春秋」にみるスポーツ昭和史、No.1., 文芸春秋、pp.106-117.

^{注1167} 同上、p.13.

^{注1168} 同上、p.81.

便佞阿諛を重ねるほかはない」こと等であった。^{注1169}

大関を目前の実力に到達した関脇天龍は、西方の大関大の里を戴いて以下主力力士の大半を率いて春秋園という料亭に立て籠もり、協会に要求書を送った事件である。その内容は上述の問題を含む下記の10箇条に及んで、今日の言葉で言えば協会の民主化、近代化を求めるものであった。

- 協会の会計制度を確立されたい
- 興行時間を改正されたい
- 入場料を低下して、大衆の角力であらしめたい
- 相撲茶屋を撤廃されたい
- 年寄制度を漸次撤廃されたい
- 養老年金制度を確立されたい
- 地方巡業制度を根本的に改められたい
- 力士の生活を安定されたい
- 冗員を努めて整理されたい
- 力士協会を設立し、もっぱら力士の共済制度を確立されたい

運用の工夫で解決できる問題から、観客へのサービスの問題、制度の問題、構成員の福利の問題と、さまざまなレベルの要求が無秩序に並んでいるのは、これらの問題が相互に結びついてきたからであろう。力士の福利問題を後段に持ってきて、我利のための行動と思われることを憚ったと思われる。^{注1170}

典型的タテ社会といってよい相撲界で、恩義ある親方らに反旗を翻す企てが起こったのである。相撲協会の幹部は狼狽し大混乱に陥った。「なにを生意気な、まだ世間も口々に知らぬ相撲取りの分際で」^{注1171}という憤怒感を心底に置いてさまざまの懐柔の策がとられたが、天龍らは力士のシンボルとも言える鬘を切って結束を固め初志を貫いた。天龍らは、1932年2月、新興力士団による最初の興行を行った。そこでは同門同士を対戦させない旧来のしきたりから総当たり制の採用など新競技法や新趣向が試みられ成功であった。

その後大日本角力連盟、また大阪に大日本関西角力協会を設立し、その後1937年までの5年間にわたって角力興行に奮闘するが、結局はその年12月に解散の終止符をうった。

和久田によれば時局の急迫という面子を潰さない表向きの解散理由^{注1172}があった。帝都東京を震撼せしめた1936年の「2.26事件」の発生、翌1937年7月の日中戦争（日支事変）の始まり、11月、日独伊防共協定成立と、戦時色が濃くなるなかで、相撲界が対立して争う状況は避けるべきとの判断であった。1月、彼は17名の力士を連れて出羽ノ海親方と会い、頭を下げて力士の帰参を申し出で、了承されて、満洲に渡るのである。^{注1173}

^{注1169} 同上, pp.94-98.

^{注1170} 天龍らの掲げた要求は、戦後の1957年に国会でこうした問題が取り上げられたことから改革案が示されたことによって初めてその誠意ある回答を得、日の目を見て今日の角界の人々に恩恵を与えることになった。

^{注1171} 同上, p.100.

^{注1172} 同上, p.220.

^{注1173} 同上, pp.128-222.

政治思想史家の丸山真男は、「国家権力から追い掛けられることよりも、世間からの孤立、多数からの孤立感の方が怖いのです」（朝日新聞1996.8.19社説）と記すが、人はその怖さからしばしば長いものには巻かれ、強いものにはこびへつらう。この傾向は日本的な悪しき国民性として、古くは福沢諭吉が、新しくは丸山真男が告発し、近代的人格としての強い「個人」の確立によってその克服を求められたものであった。

和久田は相撲社会の閉じられた集団のコンフォーミズム（順応主義）のなかで一人立ち向かう形になった。戦前のこの時代における困難さは今日の比ではないだろう。和久田の履歴からは彼が近代思想家の著作を読み、思想を高めた形跡は見られない。彼が見せた非凡な勇氣と行動力は、日本人の強い人格を示す事例として注目されよう。

(2) 満洲国における和久田三郎

和久田が満洲に渡ったのは建大開学の四ヶ月前の1938年1月である。知人の「満洲国」最高官吏・星野直樹総務庁長官を頼っての渡満であった。星野の紹介ですぐに国務総理張景恵の私設秘書となった彼は、おりから組織化されつつあった満洲体育連盟（民政部所管）の囑託となり、間もなく民政部高級囑託となった。水を得た和久田はさっそく体育連盟の中に角力部門を確立しようとする。この考えが発展して、新京に堂々たる満洲国技館を建設する計画にまで発展したという。^{注1174} 渡満の年、彼は名目上は民政部の外郭団体、体育保健協会の指導員にすぎなかったが、彼は、総務庁と関東軍の要請で蒙古の奥地に宣撫工作にでかけるなど評価を得るようになり、めきめき地位の上昇をみた^{注1175} が、こうした政府と軍部への協力が、彼の行動力の後ろ盾として強い力を発揮したと思われる。

1938年9月18日の満洲事変記念日に、和久田は満洲角道会を発足させた。この会は、満洲国に従来存在した社会人主体の満洲相撲協会、満鉄中心の満洲相撲連盟の2団体を解消して作ったものである。和久田は、「相撲をスポーツとし、本来の武道の昔にかえらしむべく、2団体の幹部を新京にお呼びして、趣旨を私が、また政府の意図を星野長官にお話していただいたところ直ちに了解・同調、そこで民生部の教育司長皆川氏、新京特別市副市長関谷氏、吉林省次長の飯沢氏、大連の有力家鈴木氏、体育連盟主事の田中氏、武道会の藤田氏その他の協力をもとめ」て作ったという。

彼は角力会において、日本での相撲改革の経験を生かして、行司を廃して審判制をとる、呼び出しをアナウンスにかえる、試合における待ったの全廃などの改革を行い、11月には角道審判規定並びに試合規定を制定した。^{注1176} さらに同月、満洲角力会は満洲帝国武道会（1934年発足）に合流し、その角力部（部長和久田三郎）となった。

1989年の天龍の話^{注1177}を記しておこう。

・天龍：私が昭和13年に満洲国にはいて、その時には満洲帝国武道会というのが、その時

^{注1174} 前掲書、和久田三郎、相撲風雲録、p.237.

^{注1175} 同上、p.246.

^{注1176} 同上、pp.247-248.

^{注1177} 元関脇天龍・和久田三郎聞き取り調査（1989年2月12日、於和久田邸）

にはもうあったんですよ。あの時もね、相撲は武道である。相撲は武士道であるということ
はね、私は師匠の常陸山から懇々と指導を受けておりますから、だから当時はね、体育連盟
に相撲をひっぱり出したんですよ。体育連盟の方で相撲部をつくらうということをね、申
し込んできたんですよ。私は相撲は武道だから武道会がある以上は武道会の相撲部として今後
やっていくということで、満洲帝国武道会に相撲部の部長として入ったんですよ。

『満洲国史』（各論）の執筆者は、^{注1178}「建国大学その他の学校では、柔剣道とともに正課
の一つとして各民族の学生生徒にまで普及された。すなわち満洲の角力会には興行相撲はな
く、武道の一つとして奨励された」。また「蒙古相撲には従前から伝わる独特の蒙古相撲が
奨励された」というが、いずれも和久田がかかわってなされたものと思われる。

このような経緯を経て和久田は建大の学生たちの前にその巨躯を現すことになるのであ
るが、ここでは続けてその後の彼の歩みを見ておく。

1940年（昭和15）6月、大日本相撲協会の出羽の海組合の先乗りとして新京を訪ねた年寄
りと話し合った和久田は、満洲準本場所を15日間打つ構想を固めて協力、翌月に決行され
た。玄関口の大連を振り出しに、鞍山、奉天、ハルビンと興行し、最後の5日間を新京で行う
もので、彼は得意であったという。1941年6月過ぎには協会の顧問に任命された。^{注1179}

1940年秋に、日本の紀元二千六百年を記念して「奉祝武道使節団」を日本に派遣した際に
は、和久田は角道部の代表監督として参加した。この年11月23日には新京市牡丹公園地内
に、満洲国の中央道場「神武殿」が竣工した。柔道、剣道、銃剣道、弓道の四大部門にむろ
ん角道が加えられ、角力道場開きには肥後熊本の吉田司家を招いて厳粛なる式典が行われ
た。

当初の角力部員は部長大迫幸男（新京特別市副市長）、主任師範和久田三郎、師範八尾秀
雄、^{注1180}委員長和久田三郎、常務委員英一雄（新京市保健係長）、同岡田菊次郎（満洲労務興
国会幹事）、その他に奉天、撫順、佳木斯、ハルビン等の各地区から有力者16名の委員があ
げられた。^{注1181}

1942年には建国十周年記念と銘打った日満武道大会が行われた。彼によると、この頃には
「主として満洲国の学童諸君を主に、教育的角技の普及を徹底化するにおよんで、私たちの
使命はいよいよ重きを加えるに至った」。この大会では、「まずこの学童試合をもって満洲
皇帝陛下の上覧に入れた。参加児童は新京大和通り国民学校の中国人児童十余名であった。
審判は八尾秀雄と中国人官吏李克民があたった。その直後に模範試合を見せたところ、溥儀

^{注1178} 前掲書、満洲国史(各論), p.1188.

^{注1179} 前掲書、和久田三郎、相撲風雲録, pp.238-241.

^{注1180} 八尾秀雄は『国民学校体錬科相撲教材の指導』（東京精文堂、1948.9）、『学童相撲指導法』
（東京精文堂、1934年初版、40年4版）を著している相撲界の論客である。後者の1938年「改訂増補
にあたりて」には、「全く相撲は真の日本人をつくるに好適な体育教材で、裸一貫となって土俵に立っ
たとき、誰も「日本人だ」といふ誇りと力強さを感じずるものである。日本男子として生まれたもの
には、是非、この褌を締めた雄々しい気持ちを体験させたいものである。」とある。（同書8頁）

^{注1181} 和久田三郎、相撲風雲録, pp.249-250.

帝は「このように面白いものを、しばらくぶりで観た！」と語った。こうした彼の努力によって、たちまちのうちに全満洲の主要都市には東京明治神宮相撲場に少しも劣らぬ野外相撲場ができ、各地の学校には勿論関東軍の兵舎にも土俵のないものはなくなったという。^{注1182}

2. 角力の教育

(1) 授業として

建大では和久田を兼務講師に迎えて角力の授業が行われた。それは剣道、柔道、合気武道のように正課必修ではなく随意科目であったが、副総長作田の前記の言のように期待を持っておかれ、異民族学生間の融和に成果を上げたものと思われる。

『建国大学年表』には角力に関する記事も散見される。初出からいくつか拾ってみる。

- ・1938年5月26日（木）：「土俵造り（27日完成）」（高山）
- ・同年6月28日（火）：「（午後2時30分から）土俵開きを行なう。五塾優勝・高橋、小林三人抜き、隋五人抜き。大同学院対抗四対一負」（高山）

「（高山）」とは一期生高山信義日記に拠ったという意味で、出典を表してしている。

『写真集建国大学』p.89^{注1183}の角力風景写真の行司が高山であった。この時の様子を復元してみよう。土俵造りについては、一期生の中国人（満洲族）学生尹敬章によると、次のようであった。^{注1184}

「先生が建大に請われて、山羊髭をはやした専門の職人を連れてこられ、二塾の前、つまり前期塾のほぼ中間に四本柱だけの土俵を造って下さったのは前期一年の夏休み前であったと記憶しております。そしてせっかく植え付けた俵がすぐ腐ってしまうのをどうしたらよいかとお尋ねした所、先生は屋根を取り付けたら良いのだといわれましたが、建大の経費がどんどん逼迫していったせいか、屋根付きの土俵は遂に最後まで実現でき」なかったという。

土俵に四本の柱とあるが、これは和久田が新興力士団旗揚げの際に取った方針^{注1185}からみると伝統への回帰であり、満洲での和久田の落ち着きを感じさせる。

その約一ヶ月後の6月28日（火）の記事を見ると、午後、訓練科目の時間に、土俵開きが行われている。齋藤精一によると、^{注1186}「大相撲では土俵開きの際に関取が廻しを締めて俵に添って向かい合って立つようだが、同様に学生がこれを行った。その際の写真は『写真集建国大学』[p.88]にある」という。なお、廻しは、一期生尾崎照夫によると、^{注1187}「一期生が百五十名で、先生を入れて200本位」が用意されていたという。

「五塾優勝」の記事から、塾対抗戦が行われたことがわかる。この団体戦では五塾が優勝

^{注1182} 同上。

^{注1183} 建国大学同窓会, 写真集建国大学, p.89.

^{注1184} 尹敬章, 和久田三郎先生を弔う, 前掲書, 歡喜嶺 遙か(下巻), pp.29-31.

^{注1185} 当時の和久田の考え方は、「土俵にも四本柱などなく、檜太鼓なども一切廃止した。チョン髷のない新興相撲に、そんなものは無用である」であった。前掲書, 相撲風雲録, p.138.

^{注1186} 齋藤精一聞き取り調査(2003年3月20日)

^{注1187} 尾崎照夫氏書簡(1990年12月1日)

した。メンバーは、齋藤精一によると、^{注1188} 星野正一、安光鎬（朝鮮系）、尾崎照夫、中垣芳治、齋藤精一自身の五人であった。星野と安は共に角力部の主将格であった。五塾は賞品として、ドイツ語の登張竹風教授から、白地に筆で三国志の曹操の言葉「力拔山 氣蓋世（力山を抜き、氣世を蓋う）」^{注1189} という文言が書かれた旗を貰ったという。

「高橋、小林三人抜き、隋五人抜き」の記事は個人戦で、柔道部最強の高橋武雄（二塾）、同じく柔道部の猛者小林軍治（四塾）、隋永禄（六塾）がそれぞれ三人、五人を抜いたという意味である。

以上、高山日記の記事に基づいて調査によって明らかにしたが、異説もある。尾崎照夫書簡を見よう。^{注1190}

「中国人は角力も好きで、一期の隋永禄というのが一度五人抜きをしました。最初の五人抜きは私でした。今のプロレスのタッグマッチのように、どこからかかってもよいという、一種の遊びのようなもので、和久田先生がつくり出されたもので、各民族とも喜んでやりました。つまり、弱い相手が連続して土俵に上がって貰えた奴が手にするラッキー賞で、ワイワイ盛り[上]がったものです。和久田先生は殆んど蒙古に巡業されていて、年一度ひょっこり現れて指導されました。」

尾崎も五人抜きであった。

さらに尹敬章は、「土俵開きの日、（中略）私も良くやりましたが、最も良く勝ち抜いたのは隋永禄と星野で、隋永禄は中学の時は、バスケットのキャプテンを三年も務めただけに腕の力が滅法強く、専ら腰を据えて手でさばきましたが、星野は皆の知らない蹴た繰りで相手の力を上手く利用して勝ち進みました。」と星野正一（五塾）の敢闘を伝えている。異説が出ること、また、尾崎のいう「一種の遊びのようなもの」に、この大会が民族間の融和を図るような友好的な性格であったことが理解される。なお、上に何度も登場した隋永禄を評して、同塾（六塾）の作田良夫は、^{注1191} 「背から肩、腰にかけては筋肉はのびのびと発達していて、小生等は振り回された。又柔道でも体が浮く位、引きつけられたものである」と回想している。

さて、蒙古人は強かったのかという筆者の問いに対して、齋藤精一は、^{注1192} 「中国人の長身、趙嘉禾、ロシア人のセレデキンなども出ていた。自分はセレデキンと戦ったが内股のような技で投げつけることが出来た。一期生の蒙古人はそれほど大きくなく角力に強い印象はない。中学で角力をやってきた者はいなかった。六塾の広瀬[信義]や高木（清田）友一（柔道部）は非常に強く、腰を下ろして、相手を自分の後ろに仰け反って投げる業は見事でやられたことがある」という。二期では、同様の質問に対して水野潔（柔道部）は、^{注1193} 蒙古相撲の

^{注1188} 前掲、齋藤精一聞き取り調査（2003年3月20日）

^{注1189} 同様の指摘は、中垣芳治書簡（1991年6月1日）にある。

^{注1190} 前掲、尾崎照夫書簡（1990年12月1日）

^{注1191} 作田良夫、六塾亡友録、歓喜嶺（建国大学第一期生文集）、p.46. なお、隋永禄は文化大革命において迫害のため憤死したといわれる。

^{注1192} 前掲、齋藤精一聞き取り調査（2003年3月20日）。齋藤氏は後日高木（清田）友一を追加された。

^{注1193} 水野潔書簡（1990年12月2日）

ある内蒙古のジャルガラが強かったという。また、一期齋藤精一は、^{注1194}「はじめは満系（漢系）の学生をこころ投げられたが覚えてくると次第に強くなってそのうちかなわなくなった。」と語っている。

授業の様子について高山信義は、^{注1195}「和久田先生の指導は、授業として、押し方や四股の踏み方を教えるというものではなかった。準備運動などなく、ただ集まると自分で四股を行った。そうしたことは日本人は皆知っていた。和久田先生は、稽古はなされたが、お話はあまり好きではなかった。ただ雑談はよくされた。」と語っている。

一方、齋藤精一は、^{注1196}「土俵開きの後に裸になって廻しを締めて押し方を教わった。角力の授業は全員ではなく好きな者を集めて参加させた。何カ月かたって運動会のようなときに、塾対抗の試合があった」と語っている。

日系以外の民族は初体験である者も多いわけで、齋藤のいうことも当然であろう。また初回を除いては一般的に高山のいうとおりであったと思われる。

和久田、即ち天龍について学生はどのように見たのであろうか。次に、塾生日誌等で見よう。

(2) 学生の見た天龍と角力

一期生長野直臣塾生日誌には、開学初年度秋の角力大会が挙行されたことが記されているが、満洲に有意義なものとしての角力を評し、和久田に感謝している。

・1938年10月15日・土・晴

「本日午後角力の本年度最後の大会を行った。天龍関が来て講演、実施指導をしたが、その昔、武蔵山関と大関争いをしただけにさすがに強くがっちりした惜しい力士だ。人間の生活にも色々あるが、角力こそ天下に最も潔い、さっぱりした国技であると思ふ。腰の強い人間は何事にも利がある。畳の上の生活武道角力等の修行こそ現在若い東洋人の根本となるべき運動であると思ふ。満洲のために尽くされる天龍関に感謝する。」

続いて、和久田の角力指導に対する、二人の二期生の評を見よう。

藤井歡一塾生日誌。

・1939年4月29日・土・風強し曇

「天長の佳節、聖壽の彌栄かさ言祝ぎ奉る。相撲大会有り。天龍来る。一人一人稽古をつけられたが、彼も我も人間なのに、その懸隔の甚大さに驚く。超人間的と言ふのか。ほればれする。」

藤森孝一塾生日誌。

・1939年4月29日・土・快晴暖風

「天長節。式終了後土俵開きを行ふ。相撲こそ、全身の力を以て相手にぶつかって行くものだ。俺達は相撲によって此の精神を養いたい。自分のすべてのもの、肉体も精神も何も彼

^{注1194} 齋藤精一聞き取り調査（1996年9月2日）

^{注1195} 高山信義聞き取り調査（1996年9月3日）

^{注1196} 齋藤精一聞き取り調査（1996年9月2日）

もすべてを出し尽くして相手に突進するのだ。天龍関がお見えになって、いろいろと指導して下さる。誰がぶつかって行ってもびくともしない。鍛錬の力は凄いものだ。」

同じく藤森孝一塾生日誌。

・1939年6月8日・木・晴

「五時より天龍関が来られて角力の稽古をつけて下さる。自分も身体さえよければ飛び出して行ってあの巨大な体躯にぶつかるのだが、何しろこのひよろひよろでは。実に癩だ。どうしてももっとしっかりしないのか。身体を頑丈にすべき方法があったら何でもやってみたいやうな気がする。それと共に勉強もしたい。」

・1940年9月28日・金・秋晴

「角道。角力と角道。見て喜ぶことと自らの修業をすること。術と道との相違はすべて此処に存す。学問も然り。すっ裸で大地を踏みしめて立ち正々堂々と相闘ふ気持といふものは到底忘るることの出来ぬものであると和久田先生も云はれた。鹿児島と角力。西郷南洲翁、東郷大将の相撲。之こそ勝負の精神の鍛錬には最もよきものである。しかもすっ裸だ。誰にも出来て而も最も難しいのは相撲だと和久田先生は云はる。漢民族のあのぐづぐづした常に装っている口達者な性質、勝負の精神の不十分、国家に殉ずる純忠の欠如を救うには小さい時より角力をやらせるが最もよいのではないか。他の道も可。然しすっ裸で力いっぱいぶつつき当る、この天真爛漫なる気持ちこそ満洲建国、東亜建設には最も大事ではないか。外交上の掛引といふやうなものも決して単なる口の上での交渉ではないと思ふ。」

これらの日誌から次のことが理解される。まず、和久田が一人一人に直接指導を行っていたことである。こうした文字どおり体験を通しての指導が、学生たちに和久田の「超人性」を感じさせたのであろう。一期生高山信義もまた、「168センチ、60キロ。相撲をする体格ではありません。天龍氏に何度ぶつかっても巖の如く、一步も動かず犬ころ扱いでした。二期以下の強豪の参加で面目一新。相撲部へ入ったお陰で土俵開きの行司を務めさせていただきました。」^{注1197}と記している。

次に、長野や藤森が、角力の特性を「潔さ」、素っ裸の「天真爛漫さ」に認め、角力が、漢民族の資質改善に有効性を感じていたところがある。日本人の価値観に基づく一方的な評価には漢民族から抗議が寄せられたであろうが、これらは日本人の内面に秘められた思いであったと思われる。

満洲族の尹敬章は、和久田を評して、「先生は人格高潔にして謙虚、終生黙々と理想を追い求められました」^{注1198}と深い敬意を表している。また、角力が授業としておかれたことを評して、「先生を建大に招き、そして相撲[マ]を柔道・剣道・合気道に並列させたことは(中略)誠に一つの立派な見識であったと今でも思っております」^{注1199}と記している。

^{注1197} 前掲、高山信義、『塾友たち』のこと--付 柴・楊の運動について、歡喜嶺(建国大学第一期生文集), p.183.

^{注1198} 前掲、尹敬章、和久田三郎先生を弔う、前掲、歡喜嶺 遙か(下巻), p.31.

^{注1199} 同上, p.30.

さて、和久田の学生への指導は、閉学の年まで継続された。『建国大学年表』1945年5月31日（木）の項には、「午後一時から三時まで天龍関（和久田氏、元大関^{注1200}）の角道の講習を受く（山田）」とある。これを解説して七期生片桐松薫は、^{注1201}

「和久田先生を出迎え、講習が終わって馬車で帰られる先生をお見送りしたのは私であった。謂わば相撲講習会の世話掛を仰せ仕ったが、受講者は七、八期生で大部分は日系学生以外だったから、余り熱が入らず、講習を終えた先生は黙々と馬車に乗り身を委ねて帰られたことを思い出す」

という。敗戦まで二ヶ月余りであった。

(2) 角力部

1) 角力部の発足

一期生高山信義（一塾）によると、^{注1202}「星野[正一]兄は、天竜氏が新京におられ、拓大その他の相撲部のOBがいることを知って、相撲部なるものを作り、尾崎・尹敬章、そして小生に白羽の矢を立てたのです」という。

角力部創立のより詳しい事情については、一期生五塾の安光鎬書簡^{注1203}で見ることができる。既述のように、土俵開きの際に星野正一の属する五塾が優勝した。

「その夜、新京市内の星野総務長官官舎で祝賀会（星野正一の尊父）を行っているが、その席で、角力好きの長官が、『どうだい。角力の強いのは日系ばかりでなく満系もいれば鮮系もいるし露系のセレデキンも強いじゃないか。それに蒙古のアリゴンチナトラも強いし建大にしか出来ない角力部をつくってはどうか』といった具合に話が進められて、星野正一が自然にリーダーとなって角力部が編成されていったようだ。」

一塾の尹敬章は、その後の具体的なプロセスを自らの体験に即して記している。^{注1204}

「土俵開き[1938年6月28日]の合間に、私が二塾の寝室で一人だけ一息入れていたら、星野が入って来て『おい、尹敬章、今日相撲らしい相撲を取ったのはお前と俺だけだ』といいました。それまでは彼をあまり知らなかったのですが、それ以来意気投合するようになりました。（中略）土俵開き後間もなく星野と二人で相撲部を作ろうと謀り、方々駆けずり廻ったが、特に印象に残っているのは、大同公園の北側にあった[和久田]先生のお宅に押し掛けたことです。当時先生は結婚された許り[1940年2月15日結婚]ですが、何の前触れもなく真夜中にいきなり駆け込んだ我々を、いやな顔一つされずに招き入れて相談に乗って下さいました」

安光鎬は、^{注1205}「熱心でぼくとつな人柄」の和久田以外の指導者あるいは協力者として米沢

^{注1200}天龍は関西角力協会において大関であったといわれる。

^{注1201}片桐松薫書簡（1993年8月14日）

^{注1202}高山信義、『塾友たち』のこと--付 柴・楊の運動について、歡喜嶺（建国大学第一期生文集），p.183.

^{注1203}安光鎬書簡（1991年6月か。消印不明）

^{注1204}前掲、尹敬章、和久田三郎先生を弔う、前掲、歡喜嶺 遙か（下巻），p.30.

^{注1205}前掲、安光鎬書簡（1991年6月か。消印不明）

四郎の存在を、「特に書き残しておきたいことは故米沢四郎教官^{注1206}の善意と角力に対する愛情です。ご本人が角力が好きだったばかりか、頼まれもしないのに角力部と一緒に汗を流され地方県庁赴任直前までお宅に招いて食事をさせ[てくれ]たり人生観を語られるなど現代風の開拓者を思はせる先輩でした」と評価している。

また安光鎬は、「優勝した五塾の角力選手を振り出しに、星野正一の角力部作りに共鳴して卒業まで同塾だった彼と土俵を一緒にし乍ら、敬愛する同期の柔剣道や合気道の猛者連中と肩を並べる意気込みで角力部活動に尽力したものでした」と記しており、以上から、星野の情熱を中核に安光鎬、尹敬章ら有志が集って角力部が立ち上げられたことが理解される。

2) 角力部の性格

実際に活動に加わった有力メンバーの一人、柔道部の尾崎照夫が筆者の質問に答えて寄せた書簡によると、^{注1207}

「角力部は、季節的臨時編成の部で、柔道部が主体で編成され、キャプテンは星野正一で、私もその一人でした。」

また、柔道部の二期生近藤多一郎も、^{注1208}「和久田先生は一ヶ月の間に、一、二、三回位の来校ではなかったでしょうか。安さん星野さんも他に本業を持って、季節労働者の出稼ぎの様に角力部をしていたのではないのでしょうか。」と、同様の認識を示している。

ただ二期生椿武は、^{注1209}

「角力部については一期の安光鎬さんが主将であり、極めて熱心、かつ強かったことを憶えています。日系では星野さんが、共に双壁として強かったことが思い出されます。言うなればこの二人がリーダーでした。」

と記しており、この部もまた明確に主将が決められていたわけではないようである。

さて尾崎の記した、「季節的臨時編成の部」という性格を巡っては、異論がある。

二期生で柔道部に籍のあった尾野定司の書簡^{注1210}によれば、尾野は校内の5人抜き大会で一期生の最長身の趙嘉禾との決勝で勝ち優勝している。その時の写真が前述のように『写真集 建国大学』に掲載され、趙嘉禾の相手は「誰か」とされていたのが彼である。書簡受理後の尾野への聞き取り調査^{注1211}によれば、当時このための角力の稽古を特別にしていたことはあまり思い出せないという。これは少なくとも柔道部が優勝をさらったことを意味し、角力部の存在が意識の外にあることが理解される。

こうした認識の確認のために意見を求めたところ、寄せられたのが、度々引用した一期生

^{注1206} 小樽商大から1933年大同学院卒(二期生)。1936年6月建国大学事務官。1941年5月理事官、庶務科長として校務に当たった。1942年3月承德県副県長、同年8月28日同県冷口泉での交戦で殉職。前掲書、建国大学年表、p.369。

^{注1207} 前掲、尾崎照夫書簡(1990年12月1日)

^{注1208} 前掲、近藤多一郎書簡「志々田先生に対する回答」(1990年12月)

^{注1209} 椿武書簡(1991年2月1日)

^{注1210} 尾野定司書簡(1991年2月4日)

^{注1211} 尾野定司聞き取り調査(1991年2月。書簡受理後に実施)

安光鎬の書簡である。そこでは以下のような認識を示している。^{注1212}

「ともすれば『季節的臨時編成の部のようなもので柔道部が主体で編成された』部のよう
にみられがちなのをきらって、満系の尹敬章、趙嘉禾、蒙系のオルトニバト、露系のセレデ
キン、日系の高山信義、清田友一など同好の士にスカウトをはじめている」

「部員名簿や写真などを生憎韓国戦争の時全部焼かれてしまったので正確なことを述べら
れないのが残念ですが、一期の尹敬章が熱心に満系の後輩を部員に勧誘しましたし鮮系では
二期の薫玩氏など小生の誘いに応じて熱心に稽古されておりました。その他蒙古系、露系の
後輩の名前を記憶できないことを残念に思いますが、記録によれば昭和十九年五月二日の開
学記念行事として角力大会を開催したことが伝えられていることから推して、開学初年に
我々何名かが発心制作した角力部が日陰者ではなく堂々と大学と命脈を共にしてくれたこと
を知って感慨無量であります。」

剣道部、柔道部、合気武道部ではむしろその存在を否定された嫌いのある「部員名簿」の
存在が気になるところである。彼ら中核メンバーは継続して卒業まで行っており、その間で
は、それだけ「部」意識が強かったと考えられよう。ともかく先に引用した「敬愛する同期
の柔・剣道や合気武道の猛者連中と肩をならべる意気込みで」尽力したという文言と合わせ
て、熱心な活動が行われたことが理解される。そう考えると、「季節的臨時編成の部」の印
象は、創部一年目など初期においてそのような性格があったというように理解すべきと思わ
れる。次に具体的活動を見よう。

3) 活動

安光鎬は記す。^{注1213}

「練習場所は校庭の土俵が主であったから五月から十月までの限られた時期^{注1214}で、学習訓
練の余暇に校内大会の前後の時期に好きな者同志が集まってやっていた。後年[1940]新京市
内の神武殿内に土俵が設けられた時は、冬でも部員達が出かけて行って和久田先生の指導の
下に稽古をしている。多い時は二十人位はいた」

と記し、和久田と角力部員との関係その後も続いていたことを示唆している。また、尹敬
章は前記の屋根付き土俵が出来なかったことに続いて、^{注1215}「我々相撲部は毎日十軒の道のり
を物ともせず、大同公園の南側にあった武道場の室内土俵で稽古をしたものでした。」と安
光鎬と同様のことを記している。

一期生高山信義は中学では剣道をやっていたが、親しかった星野に誘われ始めの2年間ぐら
い角力部で活動したという（後期は剣道を選択）。高山信義聞き取り調査によれば^{注1216}、和久
田が建大で指導したのは約一年位で、始めは週に2日ぐらいであったが、その後月に2回と

^{注1212} 安光鎬書簡（1991年6月か。消印不明）

^{注1213} 安光鎬書簡（1991年6月か。消印不明）

^{注1214} 近藤多一朗書簡「志々田先生に対する回答」（1990年12月）では、「十月から三月まで約半年、
屋外で裸になることは無理です」という。寒さのためである。

^{注1215} 前掲、尹敬章、和久田三郎先生を弔う、前掲、歡喜嶺 遙か(下巻), p.30.

^{注1216} 高山信義聞き取り調査(1991年, 月日不詳). 聞き取り内容は、前掲、拙稿(1992) 建国大学における
武道・課外活動, 早稲田大学人間科学部研究 5 (1) : 117. に高山談として引用した。

なった。その後は春秋に各一回及び校内大会が催される時であった。部の活動は一日置きぐらいで、拓大角力部出身の社会人が指導に来てくれていた。部員数は2年目の時で、一期生が5、6人、二期が3、4人で、社会人との対抗戦があると柔道部の高橋武雄、尾崎照夫（各一期）、尾野定司（二期）が応援出場した、という。また、「二期以下強豪の参加で面目一新」^{注1217}であったという。

以上、学生らの回想と、1989年に筆者が和久田に行った聞き取り調査^{注1218}での発言とを比較してみよう。和久田は語る。

・志々田：[昭和]16年になると稽古できなくなるのは、結局天龍さんが忙しくなられたからですか。

・天龍：そうですね。（中略）北満に青少年開拓義勇団。これが北満のソ満国境にずっと隊をなしておったからですからね。それを慰問かたがた相撲の指導に私は見て回ったんですよ。だからね、合気道をやってる^{注1219}暇もなかった。第一線に皆引っぱり出されて、やらざるを得ないような情勢だったからね。

・志々田：ご勤務はどちらに。

・天龍：民政部といってね。終戦の前はね、主としてもう神武殿に籠もりっきり。もうここにおってね。皆、・・・振興、気力の充実、みんな集めてね、しっかりやろうということだね。・・・ようにみんなでもう鼓舞しあったですね。

以上から、和久田が半ば公務、半ば満洲国人としての自覚で北満に角力の巡回指導に行つて、首都での角力普及に集中できる環境になかったことが理解される。そのためであろうか、彼は建大の学生に、建大の土俵あるいは神武殿の道場に稽古に来るよう促している。また、建大の学生に角力を教えることに大きな意義を感じていたことが、次の発言から理解される。

・天龍：建大の相撲部[の連中]に[建大の土俵或いは神武殿に]来いと言ったから、もう亡くなったけど星野長官（の子息）がね、相撲部において、盛んにやった方なんですよ。星野正一[という]。これも相撲好きでね。それから朝鮮系の連中が多かったなあ。それからロシア系。彼らをね、私が上手く、こう育てるのが任務みたいなものでしたよ。だから建大によく行きましたよ。あの当時の卒業生で朝鮮で偉くなった者がいますよ。

1940年9月2日、創立・開学^{注1220}二周年記念式典が行われた。研究院月報 (No.3)に次の記事がある。

^{注1217} 前掲、高山信義、『塾友たち』のこと--付 柴・楊の運動について、歡喜嶺 (建国大学第一期生文集), p.183.

^{注1218} 元関脇天龍・和久田三郎聞き取り調査 (1989年2月12日, 於和久田邸)

^{注1219} 和久田は富木謙治の稽古会に参加し、1941年前の約二年間合気武道の指導を受けていた。

^{注1220} 1939年8月1日、創立及び開学記念日を9月2日と制定。前掲書、建国大学年表, p.176.

「角力 天竜和久田三郎氏をコーチに其の後めざましい精進振りを続けて居る角力部に於いては各行事で人員不足の為め紅白試合を中止。和久田氏の行司にて日満、蒙露の学生入り乱れて五人抜き勝負を争ひ、三年尾崎君が勝ち抜きの栄誉を担った」p.5.

紅白試合の中止は、部員の各行事への出場による分散のためであろう。校内のこうした行事は民族協和への盛り上がりには有効な機能を発揮していたといえよう。

次に、対外試合について見ておこう。尹敬章は記す。^{注1221}

「相撲部を作ってから、奉天農大か何処かの大学の相撲部が交歓試合に来校したことがありましたが、反りの大変上手いのが居て皆よくやられました。このことは同じ相撲仲間であった安光鎬や同じく反りを得意とした高山はまだ憶えているかも知れません。その時私はとっさの智慧で立ち合いから右半身を引いて左の出し投げで勝ちましたが、後で反りに対する対策を討論した時、[和久田]先生は何気なく『「八双」に構えたら良いんだよ』といわれたのを成るほどと感じ入ったのを今でも憶えております。その後南嶺にある兵舎へ軍旗祭りに招かれて相撲の交歓試合をしたのですが、我々の方が断然優勢で、出る者出る者が皆勝ちました。その時負けた兵隊が『大学生だもんなあ』とぼやいたのを耳にしましたが、私は『大学生だからというよりも俺たちには良い師匠がついているからだよ』と思ったものでした。」

ただ、後輩部員たちのニュアンスはかなり異なる。1941年前期2年入学の新制三期阿部康男によると、満洲では角力は全くの新興武道であり決して盛んではなく、大会も少なかったという。また自身については、「相撲は決して得意ではなかった。ただ、元気がよいので孫悟空のあだ名があった。入学時に塾対抗の相撲試合（10人位参加）のト - ナメント戦で12塾が優勝した。先鋒ででて、牛若丸のようにして勝ったことがある。星野さん安光鎬さんが熱心で、呼び出されて参加した方であった。決して相撲に積極的であった訳ではなかった。五期の吉田泰三氏は相撲をやっていた」^{注1222} という。

角力が満洲国で盛んでなかったのは、1938年の和久田の渡満と共に始まったわけであるから当然であろう。郷里の先輩であった阿部康男の勤めで角力部に入部したという1943年前期2年入学の五期生本庄幸人は次のように記している。

「体の大きいのは、先生の天龍さんぐらいで、大将の星野さん始め、尹敬章さん、安光鎬さん、阿部康男さん、みな小兵であった。しばしば対外試合と称して、新京工業大学、法政大学とり - グ戦をやったが、優勝したことは一度もなかった。」^{注1223}

建大での青春のはけ口を角力に求めた者と、そうしたリーダーに引っ張られてついていった者たちとの違いであろうか。

3 . 角力教育の特性

^{注1221} 前掲、尹敬章、和久田三郎先生を弔う、前掲、歡喜嶺 遙か(下巻), p.30.

^{注1222} 歡喜嶺訪中団随行聞き取り調査(1992年9月21日)

^{注1223} 本庄幸人、眉間の傷、前掲、歡喜嶺 遙か(下巻), p.164.

他民族が角力を好んだ理由として、安光鎬は三つの点を上げている。

・「柔道、剣道、合気道など日本伝来の武道の高段者にいためつけられている連中には、一種の突破口の様なものに映ったのではないかと思ふ。」

・「その頃はまだ角力をとらせ乍ら神道だとか、その頃流行の日本精神に直接結びつける理論を押しつけることもなく、むしろ蒙古、満洲の風土にもなじみ易い民俗[族]性を持った運動だといふので、益々時局の厳しさを加えてゆくにつれ校内大会或ひは角力部の稽古場は人気があったようだ。とにかく愉しんで貰えたようだ。」

・「それに何と云っても裸同志[士]でぶつかり合ふ角力の特殊性と、土俵の上で土の上に転がって鍛える角力の基本性から誰にも自由で平等である雰囲気は他部に較べると強かったのではなかろうか。」

第1の点は、弓道、合気道、銃剣道などが、剣道、柔道に比べて目新しい武道に見られたものであった。第2の点は、道のつくすすべての武道に対していえることであるから、相撲をあえて武道としての「角道」とした角力にも該当するものであったが、第3の点にみえる「特殊性」や「基本性」が異民族が入りやすい独特の雰囲気を醸し出したのであろう。

第2の点に現れた、日本精神との関連で角力の教説を説かれるのを忌避する異民族の内心の気持ちは、多くの学生に共通するものであった。しかし日本精神とは別に、建大で角力に取り組み、武道の持つ「道」の精神に一貫して敬意を表する者もいる。

・尹敬章：私はね、日本人が武術を武道に高めたことに対して敬意をもっている。昔から。というのは、中国にも武術があるんです。4000年の伝統があるんです。しかし中国の武術はね、道にまで高められておりません。歴史的にみてもそうです。これはね、しまいには必ず墮落します。和久田先生の師匠である、有名な横綱・常陸山が和久田先生の若いときにおっしゃった言葉に、角力は武士道だ、太鼓持ちじゃないんだ。今の角力はね、ご鼻屑のご機嫌取りに一生懸命になっているけれど、これじゃあ角力は本当のものにならない。ということをおっしゃったでしょう。こういう高い段階に高めたのは日本人です。中国の武術はどうかというと、現在カンフー（功夫）という。中国で最高の武術の賞を得たものがいまハリウッドで一流のスターになっている。チョウレンキという人だ。武術がカンフーになってしまった。

日本はね、そういう危険におかれているのは角力だけです。常陸山の言葉に反して、和久田先生の志に反して、角力道としての発展は非常に立ち後れているんです。興行的な面ばかりが大発展しているんです。国技館だなどといっても、あそこで音楽会を開いているでしょう。ライブとか。あの興行と角力の興行とは本質的に同じですよ（笑う）。我々の若いときに角力部をつくった当時はね、そんな軽業じゃあなかったですよ。

・志々田：やっぱり人格の修養ですね。

・尹：ええ、術を磨くと同時に、少なくとも人格の涵養を考えておりました。^{注1224}

尹敬章は、武道としてのあり方に、勝ち負けを競う技術ではなく、人格を涵養する道である。^{注1224} 尹敬章聞き取り調査（2001年9月16日、中国洛陽） なおこの調査の一部は右の対談に収載される予定。志々田文明（2003）[対談]建国大学一期生尹敬章氏に伺う、早稲田大学体育局研究紀要 35。

るところに民族文化を越えた価値を見ている。換言すれば「わざ」から「みち」への武道あるいはスポーツ文化の価値であろう。それは四期生（柔道部）森崎湊の下記の日記にも見られるように、他の武道の愛好者の多くが等しく見いだしたものであった。

（1943年3月22日・月・朝雪、晴）

「武道納会。柔道、剣道、銃剣道、合気武道、弓道の型および基本稽古。柔道、剣道、塾對抗試合、学年對抗試合、部員紅白試合、銃剣道試合。副総長、賞状授与。

みな気合いがあって、愉快を禁じ得ない。男は闊達明朗でありたいものだ。剣道、柔道、合気道、いずれにしてもその道の究極において一に帰一するといわれる。しかし、自分にはその技術の相違のみが目につく。技術を求めるのなら、同一人間が、柔道も剣道も合気道も、銃剣術も射撃もみんな一通りやらねばなるまい。しかし、道を求めるなら、剣といい柔といい、花道、能、茶道、・・・禅道、みな一であるといわれる。狭小な一小自己ながら、ただ、この言を信じて一事に打ち込んで行こうと思う。」^{注1225}

^{注1225} 森崎湊 (1971) 遺書, 図書出版社, p.79.

第13章 講義「武道論」と武道研究

本論文の第5章では建国大学教育における武道訓練の位置づけを捉え、第6章から第12章では、武道訓練あるいは軍事訓練の一科目として実施された武道に関する科目の教育実態を解明してきた。本章では、講義科目による武道教育及び武道に関する研究活動状況、とりわけ研究院に設置された武学研究班の活動状況を解明する。

1. 武学研究班と武道論

(1) 武学研究班設置のプロセス

既に第3章において見たように、建大には教員と学外の有識者を含んで研究する組織として研究院が設置されていた。1939年6月末現在の「建国大学研究院要報」によると、研究院には以下の研究班が記され、研究主題、研究項目、研究班員、研究状況、業績の内容がそれぞれ記されている。^{注1226}

建国原理、反共、民族、国民構成、満洲経済、公社企業、支那政治経済、哲学、言語、歴史、興亜建設勤労奉仕隊事業、思想国防、経済原理。^{注1227}

研究院では各班の個別活動の外に全体研究報告会を月二回実施した。これには研究部員樽教官^{注1228}の外に総ての教官の出席が求められている。^{注1229}これらの研究班の中には、武道に関する内容は見られない。ただ富木謙治、石中廣次の名が哲学研究班の班員の中に見え、武道は哲学のレベルで取り扱われている。翌1940年5月17日の各研究部総会において決定された各研究班の構成は、^{注1230}研究組織として、まず、大きく基礎研究部、文教研究部、政治研究部、経済研究部、総合研究部に分かれ、各部に研究班が設けられた。このうち基礎研究部には、建国原理班、日本精神班、哲学班、歴史班、民族班、国家社会班、国土班、武教班、図表班の9班が置かれ、武教班なる研究グループが次のように創設されることになった。^{注1231}なお、武教とは武学教育或いは武道教育を略記したものと思われる。

・班長：富木謙治

・班員：松平紹光、富木謙治、万田勝、原浄一、長坂炳範、尾本研二、吉川武徳

が配置された。なお、松平は1940年9月には辞任している。^{注1232}

1941年4月1日現在の常置研究班所属班員一覧^{注1233}によると、基礎研究部の班は、哲学、地理、歴史、民族、国家社会、心理、武学の7研究班に縮小されている。また、前年に武教で

^{注1226} 前掲書、建国大学年表、pp.159-170.

^{注1227} 班の創立時期は ~ は1939年4月上旬、 ~ は同年5月、 ~ は同年6月下旬と思われる。同上書、p.162, pp.167-170.

^{注1228} 恐らくは研究院勤務が任命又は囑託された28名の主要教官等。同上書、pp.161-162.

^{注1229} 同上書、pp.170-171.

^{注1230} 同上書、pp.229-231.

^{注1231} 同上書、p.229.

^{注1232} 同上書、p.259.

^{注1233} 同上書、pp.288-291.

あった班の名称は武学となってより明確化した。この武学研究班はさらに軍事分班と武道分班に分かれた。これは宮本武蔵『五輪書』水の巻のいうところの兵法の分類、大分の兵法、一分の兵法^{注1234}に倣ったものであろう。武学研究班全体を統括する班長及び軍事分班長には原浄一、武道分班長には富木謙治が就任し、それぞれ以下の班員（括弧内は1941年5月1日現在^{注1235}）で構成された。

- ・班長：原浄一（講師，軍戦論・国防論担当）^{注1236}
- ・軍事分班長：原浄一（同上）
- ・班員：角田慶福（訓務科長，教授，軍事訓練担当，陸軍少佐）、尾本研二（講師，軍事訓練担当，陸軍少佐）、長坂炳範（助教授，戦略論・戦術論担当，陸軍大尉）、成島甚之介（助教授，軍事訓練担当）
- ・武道分班長：富木謙治（助教授，塾訓練・武道訓練担当，副師導，政治学士）
- ・班員：浅子治郎（講師，武道訓練担当）、石中廣次（教授，塾訓練・武道訓練担当，師導，工学士）、万田勝（助教授，武道訓練担当）、吉川武徳（助教授，塾訓練・武道訓練担当，副師導）、^{注1237}小野壽人（助教授，日本史担当，文学士）、^{注1238}加川満喜（助手，武道訓練担当）

軍事分班長原浄一は退役陸軍少佐である。^{注1239}原の指導を受けた二期生湯治万蔵によると、石原戦争学を徹底的に批判した。「石原将軍は、日本の『やあやあ、我こそは・・・』式の戦争をスポーツみたいなものだとしたが、原先生は、その石原を日本書紀などを引いて批判した」。そのために学生には人気がなかったという。^{注1240}

武道分班メンバーは武道訓練を担当あるいは補助した教員で占められているが、武道に関する論述をなす者は富木以外にいなかった。

作田は戦後に『道の言葉』において、「研究院が発足した直後には、教育陣と研究陣との間に少しは疎隔を来したが、これは塾や訓練を担当する教員からも教育事項を研究する為に研究院に入って貰い、また研究を主とする教員からも一年ぐらい交替して塾に出て貰うこととして調和が出来た」^{注1241}と回想している。建国大学教育の要に位置する塾教育と訓練教育の担当教員からの不満が引き金になったものと思われる。

作田のこの方針変更は同時に、塾教育の在り方を根本から変えるものとなった。選抜かれた個性派の専任的塾頭によって前期の塾教育を行う体制は解体され、教員なら誰でもよいという体制になったからである。副総長の立場から見たとき、藤田松二など強い個性の塾頭に学生が引きずられることは由々しき問題であったのであろう。しかし結果的に見た場合、

^{注1234} 宮本武蔵著、渡辺一郎校注、五輪書、岩波文庫、1991、p.75

^{注1235} 前掲書、建国大学要覧(康徳8年度版,1941.7.25), pp.38-56.

^{注1236} 石原莞爾と同級生といわれる。

^{注1237} 大同学院二期生の官吏から赴任。剣道担当、1939年には二期生十塾塾頭。

^{注1238} 歴史学教官。小野壽人は基礎研究部歴史研究班日本史分班班員並びに文教研究部東方文化研究班日本文化分班の班員でもある。

^{注1239} 建国大学要覧建国大学研究院要覧（康徳十年度）（1943.6.1）p.54. 左は鈴木昭治郎氏のご教示。

^{注1240} 湯治万蔵聞き取り調査（1997年8月13日，於熊本）

^{注1241} 前掲書，作田荘一，道の言葉（巻の六），p.231.

そのことが研究・教育の垣根を低くして人の交流を促し、教員間の人間関係を円滑化し、恐らくは研究経験のないあるいは乏しい訓練担当者に新しい可能性を生み出す方向に機能したものである。因みに、小野壽人は平泉門下の日本史家であるが剣道に熟達していたことからこのメンバーに加わったものと思われる。

1943年1月からの新年度には、各研究部部会で協議された6項目の研究題目と6研究班が設けられた。基礎研究部には国民精神研究班（題目・国本顕揚に関する基礎的研究）が置かれ、武学研究班からは富木のみが班員に任命されている。これは、1941年12月の日米戦争開戦、翌年1942年6月の副総長作田の解任、退役陸軍中将尾高亀蔵の着任を受けて、日本の敗色が色濃くなっていく中での研究体制の変化に伴う施策と理解される。

(2) 武学研究班の活動

武学研究班及び主要研究者の活動状況は「建国大学研究院月報」によって知ることができる。以下それを見てみよう。

< 建国大学研究院月報 (No.8), 1941年4月25日 >

- ・「武道訓練について/助教授 富木謙治」の論考掲載。p.3.

< 建国大学研究院月報 (No.16), 1942年2月25日 >

- ・「武学研究班/武学研究班に於いては12月10日午後2時より作田公館に於いて原講師の『武の本質』と題する研究発表を行った。出席者 原、角田、富木、長坂、万田、成島、浅子、加川」p.6.

< 建国大学研究院月報 (No.21), 1942年8月25日 >

- ・「植芝先生にものを聴く 合気武道の創始者植芝盛平先生に、今日に大成せる修業の過程を聴くべく、8月15日午後二時半より武道班の主催にて研究会を開催、[植芝先生は] 武道修業に於ける直感力について興味深い体験談を発表した。出席者、尾高院長、森、富木教授、森田、小系助教授、西川助手」p.7.^{注1242}

- ・「訓務分班研究会/武道及農作業教育改善の件」「武学研究班の分班として、訓務一般の研究に当って来た本班は、8月17日午前8時半より大学会議室に於いて武道及び農作業の教育に関する当面の諸問題について協議した。」p.7.

< 建国大学研究院月報 (No.24), 1942年11月25日 >

- ・「康德9年度出版物一覧 各研究班報告」の第12号に「柔道に於ける離隔態勢の技の体系的研究（武道研究班）/教授 富木謙治」p.4.

< 建国大学研究院月報 (No.25), 1943年1月25日 >

- ・「康德10年度年度研究題目決定 新部員発令進捗す」p.4. 研究班は国民精神, 国民編制, 戦時経済国策, 満洲国固有産業, 興亜教育, 総力戦の六つ。「部員は近く発令の見込み」とある。

< 建国大学研究院月報 (No.26), 1943年2月25日 >

- ・「総力戦・興亜教育・固有工業 新課題を加へて年度研究開始」「本年度は、大東亜戦の

^{注1242} この月の研究院月報は、p.7のみ上段欄外に第20号、10月25日等と誤った記載がなされている。

長期化に伴ふ総力戦体制の要請に於いては各部よりの研究参加によって総力戦研究を、（中略）基礎研究部に於いては国本顕揚に関する研究・・・」p.2.

なお、基礎研究部国民精神研究班の班長は千葉教授、班員は名誉教授作田莊一を筆頭に17名。武道では富木の名が見える。

< 建国大学研究院月報 (No.30), 1943年6月25日 >

- ・「『形』と理法/教授 富木謙治」の論考 p.7.
- ・「武学分班 5月12日午後3時から研究院会議室に於いて、富木教授の「芸術としての日本武道の研究」と題する発表あり、約2時間に亘り武道と絵畫を通じた日本精神の説明並びに実技の公開があった。」p.8
- ・「武道会消息 本年4月14日に従来内容的には充実せるも形に於いて稍かくるものがあった武道会の新役員並改正規定が発表された。/会長に尾高副総長を戴き、副会長石中、富木両教授、顧問千葉教授、その他各部役員の新陣容を整えて益々自重精進の決意をかためた。尚3月からの関係行事は、3月10日第3回全満南北対抗武道大会、4月4日第1回武道祭参加、在新京の学校会社関係対抗試合では柔道が優勝、5月30日忠霊塔春季大祭奉納武道大会には柔剣道共に優勝し5月23日の5大学試合(建大, 工大, 法大, 医大, 獣医大)にも優勝した」p.8.

< 建国大学研究院月報 (No.32), 1943年8月25日 >

- ・研究院彙報欄の「近刊」欄『研究院期報第五輯』の6論文のなかに「一、日本武道の美と力 富木教授」p.23.

< 建国大学研究院月報 (No.39), 1944年5月25日 >

- ・発令欄に、第二回卒業証書授与式要員任命。その中で武道班及び農場班についての発令は次の通りである。「武道班主任 富木謙治/委員, 浅子, 後藤, 八木, 中島, 櫻井, 山田, 岩井」/「農場班主任 藤田松二 委員, 松岡, 今泉, 藤森, 松田」p.29.

< 建国大学研究院月報 (No.40), 1944年6月25日 >

- ・発令欄に、康德11(1944)年度卒業生成績総合判定委員(20名)任命。その中に、「訓務科長 教授 富木謙治/農務主任 教授 藤田松二/助教授 加川満喜/講師 浅子治郎(康德11.6.9)」p.27.

< 建国大学研究院月報 (No.41), 1944年7月25日 >

- ・大学・研究院彙報欄に、「建国精神の徹底を企図し夏季大学講座開催/講義科目並に担当講師/建国史(森克己教授)、建国精神の基本問題(福富教授)、惟神の道(重松教授)、皇道と王道(森信教授)、詔書謹解(小系助教授)、民族協和の基本問題(協和会富永参事)、道義国家論(村井教授)、国内民族の性格(安倍教授)、国内諸民族の宗教及習俗(大間知教授)、大東亜地政学(宮川教授)、満洲の思想問題(筒井助教授)、皇国思想戦の根本義(野一色助教授)、日本武道の本質(富木教授)、農事訓練(藤田教授)」p.37.

上記下線部はいずれも富木の執筆した論考で、「柔道に於ける離隔態勢の技の体系的研究」と「日本武道の美と力」は学術的な研究論文であった。前者は合気武道の技を嘉納治五郎の包括的な柔道論の中に位置づけたもので、従来の接近格闘を前提とした柔道の概念をう

ち破る、いわば極めて斬新な理論であった。後者は富木の芸術論を武道と関連づけて述べられたものである。武学研究班は富木のリーダーシップで研究活動が始まりつつあった中で、満洲国の崩壊と共に終わりを迎えたのである。

2. 講義「武道論」と武学

1941年から始まる後期の学科目編成は1939年12月には具体的に提示された。それによると、「後期学科ハコレヲ基礎学科ト専門学科ト二分ツ 基礎学科ハコレヲ三ケ年ニ配当シ、初メ多クシ、後少クシ、各学年ノ全学生ニ課ス」とし、専門学科については「コレヲ政治学科、経済学科、文教学科ノ三ツニ分ケ、学生ヲシテ其一ヲ履修セシム」^{注1243}とある。また、実施に当たっては、「学科編成表ニ列挙セル科目ハ多数ニ上ルモ、コレヲ其ノママ教授スルニアラズ。ニ以上ノ学科ヲ併合シテ教授スルコトモアリ、（中略）実際ノ授業科目ハ三年間ノ授業時数及ビ学生ノ受業能力ニ応ジテ適当ニ之ヲ定ム」と、弾力的対応が認められていた。

さて、基礎学科には、教学、哲学、地理学、史学、国家学、文学、武学、実学が置かれ、武学という領域名が示されていた。武学を構成する内容は、

- 1) 武道及武術論（武道訓練ト相須ツテ教授ス）
- 2) 戦史（典型的ナル交戦ノ史記及史論）
- 3) 軍戦論（主トシテ戦道、殊ニ皇戦道ヲ教ユ）
- 4) 戦略及戦術論（軍事訓練ト相須ツテ教授ス）

とある。基礎学科（共通学科）の一つである武学は、政治、経済、文教の三学科の何れの学生も選択が可能であったものと思われる。個人の戦いである武道論から戦争論へと展開される武学のこの内容は、そのまま1940年5月10日制定の「建国大学学則」に記された。^{注1244}

では、「武道及武術論（武道訓練ト相須ツテ教授ス）」に相当する授業は、どのように展開されたのであろうか。このことについて筆者は、一期生村上和夫から授業実施の様子を以下のように聞いた。^{注1245}

・村上：富木先生が理論的に教えたことはよかったのではないかと。体系的にあれだけ話す人はちょっといないのではないかと。富木先生の『武学』の講義プリントはどこかにないだろうか。武道論だったかな。何回かに分けて習った。剣道との関連については間合いを非常に強調されていた。柔道との関係については関節技との関係を強調された。^{注1246}

・志々田：富木先生の武道論についての学生の評価あるいは気持ちはどうだったのでしょうか。

^{注1243} 前掲書、建国大学年表、p.193.

^{注1244} 同上書、p.226. 但し、武学構成四項目を記すのみで各項目の付記・要領は学則には記載されていない。

^{注1245} 歓喜嶺訪中団随行聞き取り調査（1992年9月20日）メモ。この内容は録音テープ起こしのものでない。

^{注1246} 歓喜嶺訪中団随行聞き取り調査（1992年9月20日）

・村上：富木先生の武道論はあまりさぼる者はいなかったのじゃないかな。もっとも試験がないのだから気楽に聞いたでしょうな。僕には興味深い、武道とはかくなるものかと、合理的な体系の上に先生が考えられたと、非常に感心して聞いていました。内容はもう忘れたけどね。名講義だったですよ。非常に落ち着いた、静かな講義でね。/何回ぐらいかな。一単位だからね。恐らくは十時間以上あったのではないかな。要所要所は黒板に書かれた記憶がありますね。達筆だから。一回の授業は50分ですね。授業は先生の時計で始め、終わった。/授業は後期のはじめの方で聞きましたね。武学といったかなあ。研究院の発表では武学というのを使っているのかなあ。武道論という名前だったかもしれませんね。武蔵の五輪書も話してましたね。関節技のことも話されたなあ。/後期の時より前期の時かもしれませんな。うん、前期の時。

・志々田：カリキュラムの上では富木先生の授業が入る余地はないように思いますが。

・村上：前期の時じゃないかなあ。定かではないですが。その点百々[和]君に確かめたいんじゃないかな。

一方、百々和によると^{注1247}講義科目・武道論は受講していないし、あったことも知らないという。あったとすれば、毎日富木と稽古する身には必要性を感じなかったということであろう。受講した李水清によると、

・「富木先生は私供建大後期の時に（昭和16年頃）”武学”の講義をされました。その講義のプリントを下さいましたが戦後の混乱で紛失しました。」^{注1248}

・「私供[一期生]の後期二年か三年か、よく憶えていませんが、富木先生の“武学”と原浄一先生の“戦争学”の講義がありました。講義のプリントもありました。富木先生の“武学”は大へんりっぱな講義でありました。」^{注1249}
という。

また、講義内容については、二期の水野潔が、「富木先生の武学で私が覚えていることは『神武不殺』、原[浄一]講師の戦争学では『悦服』という言葉がおぼろに残っています。」^{注1250}と記している。

村上、李両氏の指摘も、武道に関する講義は、武道論か武学か、また、前期か後期かについて、必ずしも明確なものではなかったが、少なくとも後期の学生の一部は武学としての武道論を選択した。では、「名講義」あるいは「りっぱな講義」の実際はどうであったのか。前者の点を明確にしてくれたのが、この1992年10月9日に行った一期生弓削晃への聞き取り調査である。そこで弓削は次のような発言をしている。^{注1251}

・弓削：武学の時期は前期のおわりです。何回かありました。受講者は全員、約150人が受け

^{注1247} 百々和聞き取り調査(2003年3月31日)

^{注1248} 李水清書簡(1988年8月22日)

^{注1249} 李水清書簡(1995年6月24日)

^{注1250} 水野潔葉書(1991年10月11日)

^{注1251} 志々田文明編(1994)建国大学一期生弓削力氏との対談, 早稲田大学体育学研究紀要 26:112. なお、弓削氏の力という名前は建大時代の名前。戦後に晃と改名した。

ました。教室は正門前の左側の教室の二階の一番端です。

- ・ 編者：4、5回ありましたか。
- ・ 弓削：もっとあったと思います。
- ・ 編者：一期の村上和夫さんが、武学という名称の記憶がなくて、武道論かなあ、と言われていますが。
- ・ 弓削：そうです。武道論ということで前期の（3年生の）後半にやっています。武学というのは後期に入って文教部でやったはずです。^{注1252}
- ・ 編者：武道論の授業のときにプリントはでましたか。
- ・ 弓削：はっきりしませんが、なかったと思います。

弓削の記憶に従えば、前期三年の第二学期（1940年8月12日から）に設置されたものと思われる。1940年の早い時期かそれ以前に、恐らくは選択科目として、武道訓練の講義科目としての武道論を富木に教授せしめる決定がなされたのであろう。もしそうだとすると、富木に講義を担当させるに当たっては、1937年の「合気武術教程」の刊行^{注1253}や満洲日々新聞における「柔道の将来と合気武道」の連載記事^{注1254}などが評価され、教務担当者に富木への研究に対する信頼が寄せられていたと思われる。

因みにこの年1940年8月24日に、後期授業研究班第二回全体会議において決定された「後期第一学年学科目」中の、基礎学科12科目、政治学科14科目、経済学科9科目、文教学科14科目、選択科（予定）2科目、随意科1科目のどこにも、武学あるいは武道論の科目を見いだすことは出来ない。^{注1255}なお、1942年1月の後期第二学年（第一期生）第一学期講義リストには、政治・経済・文教の三学科に配当された基礎学科リストの中に民族協和論、地人論と並んで軍武学（担当角田教授）があり軍事学としての武学が置かれていたことは確認できるが、武道論は見えないし、後期第一学年（第二期生）第一学期講義リストには、軍武学も見ることができない。

しかしながら、二期生で1943年に後期の文教部に進学した^{注1256}藤井歆一はその塾生日誌に、

- ・ 1943年6月2日・水
「加藤寛治氏の話。/夜、武道の宿題を考へる。纏まらず。」
- ・ 同年6月4日・金
「武道修行論--精神発達のことを記して提出す。」

と記しており、後期に進学した文教部の学生のための必修的な科目の一つとして富木の武道論が置かれたものと理解される。

さて、弓削が、プリントはなかったのでは、としていたのを上に見たが、李水清は富木の

^{注1252} 弓削晃氏は建大後期の専門課程で経済学科に進んだ。

^{注1253} 富木謙治(1937) 合気武術教程, 自刊.

^{注1254} この連載は、講道館の機関誌「柔道」に転載して連載された。柔道の将来と合気武道, 柔道, 1938年4, 5, 8, 9, 10号に連載。

^{注1255} 前掲書, 建国大学年表, pp.253-255.

^{注1256} 藤井歆一は病氣療養で一年休学したため、後期進学が遅れている。

プリントがあったことを指摘していた。この問題を解決してくれたのが、最近筆者が入手した富木の詳細な講義プリント「武道論講義要綱」（資料13-1）である。^{注1257} このプリントを東洋文庫に寄贈する際の仕事に携わった建大同窓会の鈴木昭治郎によると、この資料は一期生長野直臣の遺族からの提供されたものであった。^{注1258} 百々和によると、^{注1259} 建大では特に小規模の講義はどのような講義もその概要を文章にして配布したという。これは特に日本語の講義の聞き取りが比較的困難な満系の学生に対する大学としての配慮であり、大教室での講義の場合は、例えば作田荘一の「修身道德」の講義のように、後で速記記録を印刷して渡したという。ただ、二期生藤森孝一によると、^{注1260} 後期の授業ではプリントがあったが、前期の場合には、例えば稲葉君山の「満洲史」の授業はプリントがなかったと記憶するという。教師によって若干の違いがあったものと思われる。

以下富木の講義プリントの分析によって、講義の内容を検討してみよう。

（参照 資料13-1：武道論講義要綱）

3．講義プリント「武道論講義要綱」

(1) 「武道論講義要綱」の内容

この史料は、B4サイズより一回り小さい紙に、ガリ版刷りで縦書きに書かれている。第一行目には標題、武道論講義要綱が、二行目下方には、富木、とのみある。以下は第一章から第十三章までそれぞれ標題と小見出しが掲載されていて説明はなされていないが、内容は11頁に及んでかなり詳しい。

第一章・武道の定義では、字義、諸説の検討から自説の提示へ展開されて明快である。第二章では、生命活動としての人生を、武道における「術から道へ」の教えと関連づけて説いたものであろう。人生の目的の第四段階（恐らくは最終段階）としての造化は、作田荘一の修身道德に説く理論と同様である。作田によると、^{注1261} 「造化とは創造開化の略で」創造とは「新たに尚良きものを造り出すこと」、「開化とは我が心の内に創造物を摂取することによって、我が心が一段と開けて高位のものに化すること」であり、人生の目的の最後最高の段階となる。芸術の場合の事例^{注1262} は武道にそのまま当てはまるものであり、富木は建大において非常に高い説得性と評価を得て信奉されていた作田の論を取り入れている。第三章の国家論も同様であろう。個人主義を否定し、個人の上に国家を置く作田の国家論また生命活動

^{注1257} この資料は、建大同窓会が、2002年に（財）東洋文庫に寄贈された建国大学関係資料の一つである。

^{注1258} 武道論が1940年以後、前期3年の学生に選択科目のような形で置かれたとすれば、毎年内容が修正されていると思われるが、この資料がいつ使用されたものかはわからない。

^{注1259} 百々和聞き取り調査（2003年3月31日）

^{注1260} 藤森孝一聞き取り調査（2003年3月31日）

^{注1261} 前掲書、作田荘一、修身道德、pp.176-227.

^{注1262} 「画を描くものが、先ず頭の中で何を描こうかといふことを考へて、それから筆を取って、其觀念を紙かカンパスの上に現はして行く。出来上がったら自分でこれを觀賞する。さうすると言ふと、自分の描いたものであり乍ら、其の画が其の画家の頭の中にずっと入って行く、それが本当の意味で絵を鑑賞するのである。さうすると、其の画家の我は画かない前よりも一段と広い一層高いものに進んで行くのである。只だ頭の中で描いていただけでは足りない。」同上書、p.190.

と国家の関係の講義展開が想像される。第四章は人間論が闘争との関連で、述べられるのであろう。第五章では、個人あるいは国家の闘争を絶滅するための方途を述べ、(二)1以下から国家がそれに関与すべきとする展開と推測される。絶対平和という言葉に富木の理想主義を見ることができる。第六章は武国という性格の国家が論じられている。これは武人としての人間像を求める考え方に倣って国家とりわけ日本国及び満洲国に当てはめて武国としての像を考えたものであろう。以上の第二章から第六章に及ぶ国家論への言及には作田学といわれた作田思想の影響が色濃く窺える。^{注1263}

第七章は文字どおり、日本精神に於ける武の本質を説く。神話から出発して神人合一が国民の使命との関連で意義づけられているところであろうか。第八章は武術と武道との関係、武術と民族性の関係に冠する講義であろう。戦後の学校武道論においてスタート台となる部分である。第九章は日本武道の特性を日本精神の顕現として断じたイデオロギッシュな部分である。日本精神は当時殆どの日本人が肯定し、建大生もまたその優秀性を信じて疑わない思想であった。^{注1264} 第十章は富木の得意な芸道との関係が結論で論じられる所であるが、武道の側からの考察を中心に比較される構成が見える。第十一章の標題は生活化であり生涯学習論とも見える。古今の武士の規範(武士道)から武道の生活化の姿を学び、臨戦態勢下に生かそうとしている。第十二章は修行論を方法論にまで展開している。第十三章は文字どおりの結語で、建大の武道修行場としての養正堂堂訓を解釈して、授業の締めくくりとしたのであろう。

以上の特徴を考えると、次のことがいえよう。

a. 内容が非常に広範に及んでいることが注目される。武道を単なる個人のスポーツ競技の分析ではなく、広義の武道論ともいべき論が、人間論や国家論との関係で説かれている点が注目される。

具体的には、武道論(第一章、第七章、第八章、第九章、第十二章)、比較芸道論(第十章)、武士道論(第十一章)が、人間論・人生論・生涯学習論(第二章、第四章、第十一章)、国家論(第三章、第四章、第五章、第六章)と関連づけて展開されている。

b. 前章までの建大における七つの武道教育に見た、「堂々たる」「養正」「神武不殺」「身心合一」などの個々の特性や指導内容がきちんと包含されている。

c. 養正堂の開場は1941年6月であることから、「養正」の言葉を使用したこのプリントそのものはそれ以後に作成されたものであろう。恐らくは後期学生の為のものであると思われる。勿論、それ以前に富木が同種のプリントを作成していた可能性は排除できない。

こうした広範な内容を計画し、充実した授業を行うためには周到な準備があったとして

^{注1263} 作田の建大学生及び教官への影響について一期生越智通世は、「心血を注がれた『満洲国学』の構成、展開も、先生においては究極は惟神道に基づくものであった。当時の学生の大部分は作田学に従[ママ]し、教官の多数の研究も、その国学の構成体系に組み込まれた形のものであった」という。越智通世書簡(1994年3月22日)。

^{注1264} 藤井歎一塾生日誌に日本精神理解の一端を見ておこう。「勝負に捕らはれず堂々たる態度を以て」(1939年9月25日)、「その神髓は忠」(1942年4月3日)、「恋愛を日本精神は豊富に、仏教はこれを捨てしめるか」(1942年9月19日)。

も、それに先立つ相当の教養が必要とされよう。それが行われたとしても僅か十回（一回50分授業）程度でカバーすることは至難の業であるものと思われる。それを考えると、この講義要綱は富木自身が研究上でカバーすべき目標・内容であったと考えるべきであろう。むしろこの内容をアレンジして授業が展開されたと考えるのが妥当であろう。三期生奥村繁信は筆者に、富木の講義で「不動智神妙録」を学習したと語ったことがあると語った^{注1265}が、この内容も原文資料を配付して扱えば有に一回分の授業を要するわけで、こうした題材を柱に各方面に話が及んだものと想像される。

(2) 武道論批判への回答

一期生弓削晃は、1992年時の談話で興味深い発言をしている。

・弓削：弓という武道で初めて武というものの一端を知りえたということで、私は武道論なんていうものもあるべきものじゃないと思っていたんですよ。武道というものはそれぞれあるけれども、それらは格闘技であって、それを理論づけるようなこと自体がね……。その頃の考えですよ。

・志々田：富木先生の武道論の授業を聞いたのではないですか。

・弓削：講義の授業ではなしに、合気武道をやっているときに、全部そういうことは先生が言われますね。その頃の合気武道という授業はもちろん術というものはありますけど、術に対してはすべてそういうあれ[解説]から入って来られるでしょう。[しかし]あえて武道論というものが成り立つものなのか。それはまた別個の哲学というものであって独立してあるものではない、という考え方を持っていました。それをレポートに書きました。

志々田：ということは個々の実技はあってもよいけれども、武道論としてあえてやる必要はないということですね。

・弓削：そうです。だけれども弓というものをやり始めて、初めてそういう武から入る哲学があるということがわかった、ということですか。

・志々田：武から入る哲学。

・弓削：結局は同じことだと思っんですよ。どこから入るにしても。

・志々田：なるほど。自分は合気じゃなくて弓から学んだ。合気や柔道から入ることもあり得る。それはよい。しかしそれらを統合した武道論というものは必要ないということですね。

・弓削：そうです。

実技を伴わない理論だけの武道論は必要ないのではないか、あるいは成立しないのではな

^{注1265} この時のメモによると、「前期の時に話を聞いた。不動智をやったのを憶えている」とある。奥村繁信聞き取り調査(1990年7月13日)

いか、という当時の弓削が考えた指摘の核心は、次の点で重要である。それはこの批判^{注1266}が、今日でいえばスポーツに対するスポーツ理論乃至スポーツ科学の不要論を準備しているからである。戦前の社会においては、スポーツは遊戯でありまた実践することであって、理論化するとすれば教育的意義を説くことがせいぜいであった。スポーツは科学的考察の対象になるような価値を認識されていなかったのである。それは今日的な目から見た場合、なお漠然と社会に残っている偏見といえる^{注1267}が、当時においては常識的な考えであった。戦前の日本の大学においては、予科教育は別にして本科に体育科目は設置されていない。高等教育部門において設置されていたのは高等師範学校や武道専門学校など一部の専門学校においてであった。弓削が武道論を受講したのは建国大学の前期、つまり予科相当の時期ではあったが、大学という所は学問の府であり体育やスポーツは関係ないとする考え方が一般的であった時代においては、弓削の批判は出るべくして出たものであったと思われる。このように考えたとき、先に見た富木の講義要綱の内容が幅広く充実していることの意味もわかる。弓削は最近、富木の武道論講義要綱の内容を見て、「此の様に肉付けされた形になったものは知りません。幾度かの講義の中で形成されて行ったものと思います」^{注1268}と感想を述べているが、彼の武道論講義構想が、国家に枢要な国家論のみならず既に価値評価が為されている芸道論などの分野と幅広く関係して展開している背景には、弓削に見られるような社会的認識に対して応えたものであり、先に見た講義要綱は一つの回答であったと考えることができよう。戦後の民主主義教育の中で再考された富木の武道論は、体育学会、武道学会、また体育関係雑誌で独自の論陣を張ることになるが、^{注1269}戦前における彼の研究の上になされたことが窺えよう。

なお、残念ながら異民族の受講者については不明である。合気武道を熱心に稽古した満系（中国人）一期生楊えつ及び二期生銭端本への聞き取り調査^{注1270}では武道論の存在は認識されていなかった。

^{注1266} 弓削晃書簡（2003年4月8日）は、「私は武道論批判をしたものではありません〔必修の柔道、剣道、合気武道に加えて〕前期三年では選択科目となり弓もその中に入れられ、その対物的な非格闘技が、私の体質、性格に適合して居り、積極的に取り組める事、登り口は別々であるが、目指す山は一つであることを論じた様に記憶しています。」と記している。富木を尊敬していたことから誤解を避けるための一文と思われる。

^{注1267} 2000年頃の筆者の早稲田大学体育局教務スタッフとしての体験を述べよう。体育局のスポーツ方法実習（実技の授業）は9つの学部で学生がそれぞれ受講できる授業科目の一として位置づけられたが、ある学部においてはノン・アカデミック科目のジャンルに位置づけられていた。科学的に分析され、理論づけられて教えられている実態を考えれば不適切なジャンル設定といえるが、こうしたことがなされる底流には社会に漠然と広がっているスポーツに対する認識の低さを見ることが出来よう。

^{注1268} 前掲、弓削晃書簡（2003年4月8日）

^{注1269} 志々田文明(199)富木謙治著作目録、富木謙治、武道論、大修館書店、pp.285-290.

^{注1270} 前掲、楊えつ聞き取り調査（1992年9月22日）

第14章 建国大学に於ける武道の教育力

建国大学の武道教育の実態がどのようなものであったかについては、前章まででおおよそ明らかにすることができた。本章では残された課題である「武道の教育力」について考察する。教育力とは「文化の力」と同様に曖昧な概念である。例えば数学の教育力というのであれば、学力の伸びなどを数量化して計り、それによって客観的評価を下せないわけではないであろうが、本研究ではそのようなことは資料欠如の関係からできないし、また本研究の狙いでもない。ここでは武道が建大の学生たちに与えた影響を考察することからその「教育力」を考えてみたい。この場合の影響は、学生がどのように反応・変化したか、価値的な用語を用いれば成長したかを資料から判断することによって計られる。しかし影響という言葉も、以下に示すように組織だった仕掛け（構造）の許では被教育者が何らかの影響を受けるのは当然であり、影響の意味や評価も考察者の観点で異なってくることを考えると、また曖昧なのである。そこでここでは筆者の観点を明らかにすることから始めたい。

筆者の武道に対する立場・態度は、武道は日本独特の教材であり、グローバル化しつつある日本社会のなかで武道は、日本人が日本人としてのアイデンティティと矜持をもって生きていくために大切な文化であるという信念を有しているのである。つまりこれは、国民国家あるいは民族としての日本への筆者の現在におけるコミットメントの表明である。そうした態度で筆者は、武道の将来のために何を守り、何は変容させていくことが許されるのかについてわずかではあるが考えてきた。^{注1271} 本研究はこのような問題意識の延長線上で行われたものであり、筆者が明らかにしようとする武道の教育力を敢えて満洲国・建国大学という特殊な場において個別武道の教育実態を解明するなかで見ようとしたのである。

以下では、武道教育から人生にとって有意義な影響を受けたとする学生の幾多の記述、口述の中から典型的な事例を取り出し、その意味を考察するという方法でこれを行う。また使用した資料は極力前章までの引用との重複を避けた。武道は近代になって歴史と伝統に基づく教育システムを個別武道においてそれぞれ形成してきたが、建大における教師の指導力はその成果の一端であろうし、各部の主将格の学生に見られた心身の成長にもそれを見取ることができよう。武道教育は近代の歴史の中で既に洗練されており、その教育力は日本人にとっていわば自明のことである。もし敢えて説明しようとしても、武道教育の方法を説明する同語反復的な事態から逃れることはできないであろう。問題は、日本人学生と共に学んだ異民族学生に対して武道がどのように教育力を発揮し得たかという点にある。そこで、聞き取り調査の事例に限りはあるが、日本と満洲国に敵対意識を持っていた中国人学生を主に取り上げた。

なお、本章でははじめに考察の前提となる武道の特性について明確にした。

1. 日本武道と建大の武道

^{注1271} 例えば右書。武道に於ける「失われてはならない独自性」、日本文化の独自性, pp.111-154, 1998. また、「国際化」と武道の変容, 早稲田大学体育学研究紀要 31 : 31-38, 1999.

(1) 武道の構造

武道とは、歴史的には人間の闘争の手段としての武術に発し、中世以降芸道的性格を帯びた武芸的側面を持つようになり、近世以降は教育的側面が強化され、特に近・現代になって近代教育の教材としてその地位を確立した。^{注1272} 学校における武道教育は、明治期に近代教育制度が発足して以来剣術を正科教材に編入させようとする運動の中で起こった。しかしその道程は険しく、1884（明治17）年の秋田県に対して秋田病院長が行った回答では、「幼年学徒」に剣道を習わせる場合の嫌忌すべき要点を「頭脳ノ震盪」とし、また同年の体操伝習所の答申では、剣道は勝利至上主義的傾向、教授法が流派によりバラバラであること、児童・生徒の発育・発達を考慮した体育運動ではないこと、などから正科には不向きとされたのである。^{注1273} こうした武道への否定的見解はやがて影を潜めるようになったが、これは日清・日露戦争や日本の対外膨張政策の中で日本固有のものに対する政治的必要性が認められたことにあった。欧米人に比して劣弱な体格・体力しか持たない日本人に自信を持たせるためには何がよいか。政治的指導者は、この課題を解決するには武道が有効であると判断したものである。それは、武道は体力を技で補い体格を気力・精神力で補いうるのみならず、師匠・弟子、先輩・後輩の縦の秩序を重視し、また日本の社会慣習としての礼儀作法を組織的に植え付けるのにも有効であると理解したからであろう。

では、その武道とは一体どのような性格の文化であるのか。筆者は、少なくとも近代以降の武道教育の特性を構成する要素は、実践方法としての試合及び形、実践に伴う態度としての修行及び礼法の四つから構成されると考える。

試合は「勝負」として行われる。戦場などの実戦においては生死を分けることになり、稽古としての模擬実戦においては、時代にかかわらず実践者の態度によって非常な危険性を有する。一方、近現代における競技試合は、競技ルールによって競技者の安全性の確保が配慮される。一般に試合においては、勝つことによって当事者が顕彰されまた名誉とされるために勝敗にこだわる習性を生みやすく、そこから暴力的墮落の負の価値性が生じる。しかし反面、勝つための要素としての敢闘精神や合理的思考力の獲得といった正の価値性を認められる。

形は、技に熟達するための一連の運動（型）を実施することによって現象・再生される。相対練習においては、ひたすら反復することが求められ、その中でその技法に熟達させたり、技法の裏面にある理合^{注1274}を正しく修得させまた伝承させることが可能となる。形は実戦とも試合とも異なるため態度の真剣が要請され、また反復のもつ興味の欠如に耐えて行う忍耐強さが求められる結果、忍耐力が身に付く可能性がある。しかし他方で、工夫や新しい発想を排する形はルーティンワークに陥り、実戦や競技試合における実用に供しえず、形骸化

^{注1272} 剣道が中心ではあるが日本武道史に関する典拠的な基本文献としては、富永堅吾(1972)剣道五百年史、百泉書房、今村嘉雄(1969)十九世紀に於ける日本体育の研究、不昧堂、(財)全日本剣道連盟編(2003)剣道の歴史、等がある。

^{注1273} 中村民雄(1994)剣道事典-技術と文化の歴史、pp.175-180。また、中村民雄(1985)史料近代剣道史、島津書房、pp.115-116。

^{注1274} 理合は技の筋道、訳、理由、といった意味。従って技が効果を発揮する理由となる方法に相即する思想と理解される。

に陥りやすい。試合においては、形におけるように相手との暗黙の約束がないために、攻撃防御における無限の変化を視野の中におかねばならないため、生きた理合を体得しやすい。一方、形においてはそれが難しく、かたちは素晴らしいが競技試合では何も技をかけられないという事態が起こりうるのである。したがって、剣道、柔道、弓道、銃剣道、角力（そして恐らくは騎道も）いずれにおいても両者の実践はいわば当然の理であり前提となっている。

因みに実践については、仏教者が悟りを求めて行う実践を修行というようである。^{注1275} 武道における修行はこれに倣って上記三つの事柄を行う際の態度ということができる。仏道修行の場を道場というが、武道修行の場は近世では稽古場、演武場などといった。道場というようになったのは明治末期以降のことであり、^{注1276} 近代以降に道場の概念が武道に取り入れられてくるのに伴う、修行として稽古を捉えることになったと解される。建大において行われた寒稽古も勿論、元来は仏教における寒行を倣って剣道、柔道界などで行われていた当時（1937-1945）の慣行を導入したものであった。

この武道の具体的実践を整序する起居・動作の規範が礼法である。これは試合、形の両者を実践する際に表れるものであり、試合場や稽古場を離れてもなお生活において維持することが良いとされている。相手を敬う礼式の対象は、仲間から指導者、上長者へと高まり、ついには神・仏など形而上の対象に至って終わるのが常である。この慣行は稽古者に謙虚さを生み、また秩序に対して従順な精神性を生み出す。企業や警察など目的の遂行が上意下達で行われる集団において、武道有段者が一般にいわば順良な兵隊^{注1277}として好まれる所以である。

以上を総括すれば、近代における武道教育は、礼法という規範が支配する試合と形による技法修行の場で行われる人間形成システムということができる。これを比喩によって構造化すると、一つの架空の枇杷の実を武道と見立てることができよう。中に二つの大きな種がありそれが中味の大半を占拠している。これが試合と形である。その種を修行という果肉が覆っている。ところが大きな種は有毒危険な要素も含むため、時にその要素が修行の果肉を破って毀れ出てくる恐れがある。そこで蜜柑色の薄皮、即ち礼法で綺麗に包むのである。

以上のような理解に立ったとき、前章までに見た建大の武道とどのような関係を持つのであろうか。

(2) 建大武道教育の特徴

^{注1275} インド、中国、日本の仏教との関係を述べたより詳細な考察は湯浅泰雄の『身体論』に見える。それによると「修行とは、世俗的な日常経験の場における生活規範より以上のきびしい拘束を自己の心身に対して課すること」という。湯浅泰雄(1990)身体論-東洋の心身論と現代、講談社学術文庫、p.123.

^{注1276} 前掲書、中村民雄(1994)剣道事典-技術と文化の歴史、pp.36-37.

^{注1277} 明六社に参加した阪谷素は1875年という明治初期の論文「養精神一説」で近代制度下の体操科に武術が必要であることを主張した。武術を教える必要性の論拠は、「順良ノ習、強勇ノ気自ラ並ビ長ジ」で軍人として役立たせることが出来ることであった。建大で作田が掲げた武道教育の狙いの背景にはこのような思想の拡散があったと思われる。前掲書、中村民雄(1994)剣道事典-技術と文化の歴史、p.173.

筆者は建国大学に於ける七つの武道の個々の特徴をなるべく短く一言で表現しようと試みた。それが各章のサブタイトルとした下記の言葉である。

- ・ 剣道 -- 練武・堂々
- ・ 柔道 -- 闘志・自主・自律
- ・ 合気武道 -- 非合理主義から合理主義へ
- ・ 弓道 -- 身心合一・正射必中
- ・ 銃剣道 -- 将校の銃剣道
- ・ 騎道 -- 民族協和する馬上禅
- ・ 角力 -- 人格涵養としての角力

これらの特徴は指導者によって求められた理念性を含む思想であり、前章までに見たように、少なくともしっかりと取り組んだ学生たちによって正しく受け止められたものであった。

剣道では試合（競技）、基本稽古いずれのためにも「堂々」たる態度で「武を練る」ことが求められた。修行態度の教えであり、柔剣道における「将校」の態度と同質といえよう。

「闘志」は建大の武道訓練に期待された鋭気（副総長作田の言）に通ずるものであり、柔道を行う際にはそれなしには相手の果敢な攻めによって立ってられないと考えられる必須の精神であった。「自主・自律」はその前提であろう。これも武道修行の一般的態度といってよいものである。

合気武道に対して富木が行った説明の「合理性」は、他の武道においては既に確立されており、その意味では全ての武道に通底する常識的な思想であった。富木はこの新興武道を理解させるために技法の合理的分析と教育法の確立に努めつつ、徹底した形の稽古を学生に求めそのシステムを形成していった。合理的思索と形の反復稽古の要請が彼の指導であった。

弓道の「正射必中」は「身心合一」した正しい「型」の修練が「必中」という結果を生むということを示している。これもまた正しい形＝型の反復要請である。

銃剣道における「将校」の意味は、一般に下士官の武道と認識されていた銃剣道を、将来の指導者「将校」にやらせるに際して求めた、堂々たる稽古態度を示したものであろう。そのような振る舞いは建大生すべてに期待されていることでもあった。

騎道のリーダーが求めた「民族協和」は、建大生が日々実践を求められた課題である。それを明示することによって学生が個人的解脱にとどまり、小乗的閉鎖性に陥るのをいさめた。

ややもすると日本の遊戯ととらえられる相撲は、武道として、あるいは修養道＝「人格涵養」（尹敬章）の道・角力として行われることが期待された。騎道、角力、いずれも修行における態度である。

以上、建大の武道教育の特徴をさらに分類整理すれば、

- a. 個人的態度としての「堂々」「闘志」「自主自律」
- b. 修行態度としての「身心合一」「練武」「形の反復」

c. 目的としての「人格の陶冶 = 精神の涵養」^{注1278}

d. 建大独自の課題としての「民族協和」

の四点になる。c はそのまま先に見た武道構造における修行であろう。建大の武道は、「人格の涵養」と「民族協和」を如何にして実践していくかを課題とし、特に日本人において様々に悩みもがいた実践であったということが出来る。

ある日本人学生は武道を、

「武道週間感想 / (中略) 建大の訓練の中、農訓、軍訓は共に、その為す所自らを修得するを第一義とする。即ち百姓、軍人になることと教へられた。剣の道、柔の道は如何である。自分は嘗て疑惑の念を懐いた。 / 然し武道週間中にそれは分明となった。それを修める所は精神の修養、特に日本精神の体得になくなくてはならぬ。武道週間の最終の日、武道大会開催の初めにあって辻少将が『勝負に捕らはれず堂々たる態度を以て云々』と言はれた言は屢に耳にする所であるがこれは如上の考へであることを示すものである。又両顧問が共に言及された武道現在の墮落は精神を忘れてそれを玩弄視するに到ったからとは又それである。」 <二期生・藤井歆一塾生日誌 (1939年9月, 日付記載なし) >

と的確にポイントを捉えている。スポーツであれ武道であれおよそ大筋を動かす身体活動は身体の発育発達を促すことができる。しかし武道はただ行って強い武士になればよいのではない。「勝負にとらわれない」精神の修養がなされた将校としての堂々たる武道でなくてはならず、その意味でも武道の「教育力」は精神的側面への効果を見なくてはならない。藤井青年の上の一文は、彼が教官の語る「堂々たる態度」の後ろに潜在する「精神の修養」 = 「日本精神の体得」を模範的に理解したことを表している。理解の程度は人により様々であろうが、日本人に関しては概ねこのように了解されていたと思われる。

では、異民族の場合は、どのように受け止めたのであろうか。初めに一つの事例を示そう。

・建大教授中野清一

「新京での私の初めての官舎は南湖湖畔にあった。大学の教務科に勤めていた岡田君、朝鮮名では宋君が同居していた。毎朝の味噌汁に宋君が漸く馴れる頃、同君から私は多くのことを学びとっていた。日本人が得々として説く弓道、精神を練るのが主眼なら標的を何故置くのか、宋君はそういう疑問をぶちまけた。(中略) 宋君がつれてきた蒙古系学生三人と日本の相撲道、特に土俵を設けることの可否についての議論が沸騰した。民族交流の現実 is 難しいと、それまで本ばかりに埋もれていた私の目が醒めた。」^{注1279}

日本人にとって当たり前のことが異民族にとっては自明でないということ、我々はその事実から考察を出発しなくてはならない。こうした考えの背景に彼らの祖国にある民族武術との暗黙の比較があることは間違いないだろう。満洲ではそれを行うことが事実上難しい。上の言は、個人の間にあった言論の自由の空間において、率直に噴出した武道批判といえる。

^{注1278} 本論文では「人格の涵養」という言葉を使用しているが、涵養は忍耐力、道徳心など精神に関する事柄に用いられる言葉であり、人格の場合は陶冶を用いた方が日本語としてより適切であると思われることからこのように表記した。鈴木昭治郎氏の教示による。

^{注1279} 前掲書、建国大学年表, p.376.

建大ではどうであったのか。以下この点を掘り下げて考察する。

2. 異民族の武道受容

(1) 評価と留保

中国人三期生魏連元は、筆者の武道に関する取材に対して、「武道に関しては漢民族の学生はあんまり関心を持たなかったんです」と語った。^{注1280} 1992年の歡喜嶺訪中団随訪中調査でのことである。その言葉に一瞬戸惑った筆者であったが、戸惑っていたのはむしろ彼らの方であると気づくのにさほど時間はかからなかった。中国人の建大に対する思いは複雑であり、語ることを拒否したり好まない人は独り中国人に止まらない。まして鬪争から発した戦いの身体活動である武道は、中国の君子の為すべき事柄ではなく、中国人は一般的に武道を含む訓練科目に積極的ではなかった。加えて彼ら中国人は、日系学生と異なり武道などに中学時代から慣れ親しんでいなかった。その間の事情の一端を、一期生長野直臣（1939年11月10日）^{注1281} は、

「満洲人は、即漢族では階級の差が金によってはげしく、労働は賤しいものの一つと考えているので、金さえたまると遊びたがる。之を思ふに武道などさんざんいじめられるものはきれいなもの一つと思はれる。（中略）殊に運動精神の鈍感なのが多い事は教へる方でもいやになる事が屡ある。だからしていざやるとなると剣道よりも柔道をする様になる。もう少し体を動かす事を練習すべきと思ふ。大陸的にのんきなのだ。」

と記している。日本人学生に打ちのめされる苦痛の科目であっても必修科目であれば避けることは出来なかったのである。再び中国人学生の受け止め方を見てみよう。

・一期生単希平

「初めは剣道の基本動作は不器用でしたが、頑張ってやって一年、二年たつうちに段々楽になりました。（中略）忘れられないのはあの夏稽古と寒稽古！特に寒稽古は朝の太鼓の音に起こされて、外はまだ暗くて、零下30度」。「懐かしい我が青年時期の大学生生活、忘れられない苦しみと後の楽しさ。（中略）剣道は私の一生の生活と思想に対して影響を与えた点が少なくないと思います。」^{注1282}

・三期生徳長春（筆名）

「各種の武道・軍事・農事訓練等に積極的に参加した。濟世救国の有力者となるにはただ理論だけあっては何にもならぬ、堅強なる意志力と実践的体力と魄力が必要であると思ひ、これを培うには各種の訓練が欠くべからざるものとした。（中略）そのため訓練場においてはどれにも強い相手にもこわがることなしにどの同窓にも劣らないほど鍛えられ、体もだん

^{注1280} 志々田文明編(1991)1990第一回聞き取り調査記録---長春・旧「建国大学」への旅(1991.7.5作成), 未刊行.

^{注1281} 長野直臣塾生日誌。筆者は1938年5月2日の開学式から1939年末までの日誌コピー（一部欠落）を参照した。

^{注1282} 前掲書, 歡喜嶺 遙か(上巻), pp.375-376.

だん強くなってめったに病気に罹らないほどになった。」^{注1283}

徳長春は後期になって合気道を選択した学生であるが、選択の動機として、富木が「非常にいい先生と感じたこと」と「合気武道はそんなに激しくない。体に余分な力を使わない」ことの二点をあげ、次のように語っている。

「我々の武道を修行する考えとしてはね、武道でも軍訓でも農訓でもバスケットでもバレーでも何でも、運動は体を健康にする手段である。これは今でもこういう考え方ですよ。」^{注1284}

この時の徳長春の話には「意志力」、「魄力」の言葉もあったが、「実践的体力」こそが彼が武道から得ようとした眼目であった。それによって意志力も魄力も生じてくるからであろう。このような感想は勿論日系も同様であり、一期生齋藤精一ほか多くの者に共通した感想であった。

こうした側面の獲得は、特に指導者が優れていた場合の効果は大きかったようで、副総長作田も軍事訓練の教官として学生に尊敬された松平紹光少佐の指導について、「満人系の学生の中には、あれだけの猛訓練を受けても自分の心身が克く堪え得ることを確めて快心に堪えぬと告白したものも居た」^{注1285}と回顧している。訓練科目の教官は概ね優れた者が多かったといえよう。単希平も徳長春も、一期生百々和のように部員として専門的に武道をやったわけではない。彼らは与えられた条件の中で積極的に取り組み、上のような意義付けをして武道から自分にとっての価値を生み出したといえる。

ただ注意しなくてはならないのは、徳長春の評価も当時の彼らの置かれた弱者としての立場によって理解停止状態に置かれていたことである。

「武道についても、恥ずかしいことだけれども、そのとき私は富木先生の指導の下に合気武道をやった。しかし、武道として、一つの道として習う気持ちは全然なかったんです。この点は自分もいつも考えて居るんだけど、日本人は武道にしても色々の学問にしても、何とかしてやって後世に残したいと考える。何をやってもその究極を極めたいと考える。我々としてはなかなかそれまでには至らないんですよ。それで国民の素質だとか何とかいうんだけどね。昔はその考えもなかったし、わからなかったんだ。でも今考えるとね、やっぱり民族としても国民としても素質が確かにあるんだ。それがどういう風に形成されてくるかははっきり言えないんだけど、とにかく現実としてはそういう素質が存在するんだ。

私としても、そういう所を突っ込んで話すと、日本人同窓には及ばないところがあるんです。だから満洲国の時代は、あの時はこういうことは決していわない。日本人はこういう点は偉いけれど、[反対に]なんだ貴様！、何だ日本人！。こういうような話が一般ですよ。かえて今になってね、なるほど我々中国人はやれない。そこまで至っていない。今になって自分はようやくわかってきた。」

^{注1283} 同上, p.178. なお、同氏は筆者に、「色々な訓練科目はその後の自分に非常に役に立った。今日70歳になっても健康でいられるのはこれのお陰だ」と語っている。

^{注1284} 徳長春聞き取り調査 (1990年8月21日)

^{注1285} 前掲書, 作田荘一, 道の言葉 巻の六, p.225.

中日両国が相争う当時の状況の中で、日本人の後塵を拝することは何事といえども潔しとしなかった。これは民族としての面子の問題であろうか。日本人に思想的にも実践的にも一日の長があると感じられたことと指導民族としての優越感が見え隠れする日本人への反撥が、道としてつまり修行としての武道に対する理解停止あるいは忌避を引き起こしたものと思われる。それは当時の彼らの置かれた立場からして極めて自然な思いであった。

次の合気武道の稽古者・一期生李水清は二人と趣を異にする。それは「精神の修養」の観点から評価が明確に示されているからである。

・一期生李水清（台湾）

「建大の武道教育について申し上げたいことは、『試合に勝つ』ことがその目標ではなく、『己に克つ』ことが訓練 [訓練科目] の目的であったように思われます。例えば剣道では必ず、『面を打って体当たりせよ』と訓練されました。技よりも臨戦の心構えと気魄を養成するのが目的であったやうであります。」<李水清書簡（1991年2月15日）>

「己に克つ」とは精神を錬磨し優れた人格を形成する自己修養を意味しよう。加えて気魄があった。李水清は建大の武道について、期せずして日本人藤井歓一とほぼ同様の認識を示しているといえる。李はまた、恩師の教えに潜む武道の特性を次のように指摘している。^{注1286}

「(1) 昔、富木先生は私に、日本武道家は“水の流れ”を眺めて、その極意を悟ろうとするが、中国は“禽獣の動作”を見て、それ（特技）を得ようとする傾向があると云はれたことがありました。当時私は、“水の流れ”に学ぶのは“心術”であり、“禽獣の動作”に学ぶのは“技法”を探求することだと自分なりに解釈しました。また私は武道は相手に勝つより己に克つ鍛錬だと心得ていました。

(2) しかし中国武術は流派が多いが、少林寺の系統が主流のようで、少林寺は“禅”が基本で武は派生して来たものと云ふべきでありますから、心法が基本で技法は派生だとも云へるかもしれません。」<李水清書簡（1994年3月16日）>

李水清は非常な努力で専検をパスして建大に合格した人物で、上の文章に見られる見識と日本的教養とは当時も今日も日本人をはるかに超えたものがある。行間を読んで彼の理解度の深さを示しておこう。李が記す富木の教えはあくまで傾向性を示したもので例外は無数にみられるだろうが、それは中国武術における套路（武術の一連の動作、手順、やり方。日本の形または型に相当）の性格を的確に示したものである。^{注1287} 中国思想の碩学・金谷治は、儒教の現実主義や老荘の現実関心を踏まえて、「中国思想は現実的な人生問題を第一として、超越的な世界や抽象的な理論を好まなかった」と記している。^{注1288} 人間より優れた動きをする現実の鳥や獣の動きから、その能力を実際的に身につけようとする姿勢には現実的思考が窺えよう。対して日本武道は、現実の奥に潜む意味を探り出そうと努める過程で勝負における

^{注1286} 李水清書簡（1994年3月16日）

^{注1287} 中国武術の主要な特徴については右論文参照。鄭旭旭ほか(2002)近現代中国武術及び日本武道の発展の比較研究, 早稲田大学体育学研究紀要, pp.98-99.

^{注1288} 金谷治(1993)中国思想を考える, 中公新書(1120), p.56.

心を練り、心法を学ぶものといえる。武道には「技心一如」の教えがあり、^{注1289} 上に見たようにその学習に「修行＝実践」が伴う日本武道の特徴を正しく受け止めたのであろう。^{注1290}

以上の事例に含まれる学生の傾向性は「評価と留保」という形でまとめられる。まず、中国人学生の中にも実践的体力養成の側面や意志力・魄レベルの精神的側面における「教育力」を実感する者がいた。しかしこれは徳長春が語るようにこれはその他のスポーツでも同様に養成されるものであり、武道だけの特長とはなっていない。また彼らの置かれた立場は、その時代において異文化（日本文化）としての武道を評価するなどという状況にはななかったといえる。他方、台湾学生李水清の場合は、武道の持つ「克己」「気魄」などの個人的精神性を的確に把握し評価していた。台湾に居住する漢民族の李水清には、中国人学生と異なる歴史観・世界観・人生観が育まれてきている。そうしたものが李をして、武道教育者の教えを率直に評価する姿勢へと導いたものと思われる。

さて、7つの武道の章で見たように、満系学生（即ち漢・蒙・白露）の課外活動としての武道への参加は、各民族それぞれ立場の違いはあるにしても結果としてかなり少なかった。精神修養としての武道の精神性は、全て近代日本の教育制度の中で行われ日本人に求められてきたいわば常識的な事柄であった。しかし中国人建大生の中には、特に軍人副総長尾高亀蔵の着任以後において明確にこれを拒否した学生らがいた。それは日本の教育が異民族の日本人への同化ではないか、という疑念があったからである。では武道はそうした学生に如何なる「教育力」を発揮したのであろうか。

(2) 「日本人化」の手段としての武道とその忌避

既に見た江原節之助や聶長林の文章から、朝鮮人や中国人が日本の同化政策、すなわち満洲国にいる日本以外の民族を日本人に同化させるように持っていかうとする意図を感じたり、憤っていたことが理解される。戦後の回顧ではあるが、角力を指導した和久田三郎もまた、同様の認識を示している。

・志々田「武道会というのはどういう活動をしたのですか。」
・天龍「ご承知のように満洲国の構成は五民族あるわけですね。五族協和でしょう。だから五族協和に対して、武道を通じてその精神を発揮させるんだと言われれば、（録音テープ聞き取り不能）、日本人化しようとしたんですよ。今にしていえばね。中国人も、ロシア人も、蒙古人も、皆やらせたんだから。相撲もやらせる、柔道もやらせる、剣道もやらせる、

^{注1289} 宮本武蔵(1645頃)五輪書, 岩波文庫, p.43. に「兵法の道において、心の持ちやうは、常の心に替る事なかれ」とあるが、勝負において平常心が崩れたために平素の実力が出せずに負けることから技心一如の思想が惹起したと思われる。

^{注1290} 柳生宗矩(1632)兵法家伝書, 岩波文庫 に「様々の習をつくして、習稽古の修行、功つもりぬれば（中略）何事もするわざ自由也」として技法の熟達に徹底した形修行の必要を説いているが、こうした教えが近現代に伝承されている。

合気道もやらせる。みなやらせたんですよ。」^{注1291}

みなやらせたのは建大でのことであった。ここには、各民族の民族的個性（文化）を薄めて日本人化するための手段として、武道が採用されたという見方が可能なことを示している。しかも、当時の日本人はそのことを決して悪いこととは考えていない。「精神の修養」のどこが悪いのか、その点こそが日本人の卓越性ではないか、というのが恐らく日本人の普通の考えであろう。それは、日本人には自らが東亜の指導民族であるという矜持があり、指導民族の優れた文化で遅れた人々を欧米列強より救うのだという大義への確信があったからである。^{注1292} 次の長野直臣塾生日誌（1939年4月7日）には当時の指導者意識がはっきりと見て取れる。

「午後七時より塾と別れの会を行った。二年生としての態度について話合ったが、結局自分はいか思ふのである。日本国は東亜の日本であり、世界の日本である。今の所東亜を指導して行くのは日本だ。しかして建国大学にても充分之が摘要(マ)されると思ふ。更に建大内の諸形式が内地で経験したり見たりしたのあるものであるから、他民族の面倒をみてやるにもよいが、そういふ点で建大は学生より成立し、発展し、学生は日本人の援助協和により、よい指導により進むべきものと思っている。それにはどうすればよいか。塾頭が云われた様に口では駄目なのだ。態度を以て示さねばならぬ。即日本人たることを自覚して身を以て実践指導をし、倒れて後やまずの気力である。・・・/満人が規律とか上級生といふものに慣れていないと聞いたが、それを改めるのが建大だ。内地では今までやって来たスパルタ式教育も自分には自己を磨くのに最も効あったと思ふ。スパルタ式を本校に用いてよいものかは考えていないが、権威といふものを以て、徹底した自己を持って示す様にしたいと思っている。」

指導民族に同化した異民族は、恐らくは当分の間（何百年もか）、同心円の中心部に層をなす日本人の外側に「各々所を得しめて」、第二指導民族、第三指導民族等々と位置づくことになる。^{注1293} 例えば、自らの地位は第二指導民族として中心により遠くとも、自らより外縁にいる第三指導民族の存在より上位であるのだから感謝しなくてはならない、というわけである。

^{注1291} 和久田三郎聞き取り調査（1989年2月12日、於和久田邸）。和久田は、総務長官星野直樹の肝煎りもあってその社会的地位を急速に上昇させ、1939年頃には満洲帝国武道会常務理事、武道会角力部の委員長兼主席師範、武道会の要路の人であった。

^{注1292} 藤森孝一塾生日誌（1941年10月19日）には、軍人の意識にこれがはっきりと見える。「十一時より軍人会館で藤村少将閣下の御話をきく。」話の要点は、「日本人の指導性、之は事実だ。」「他民族を毛嫌ひする態度。」「日本人の教育は指導者教育として、他民族の教育より別にせねばならぬ。」「朝鮮民族---数に於ても質に於ても日本人を凌駕せんを目指しつつある。之を生かし使って行かねばならぬ。漢民族---量の力。相手の斃れるのを待つ強靱なる忍耐力。だが官を恐れるといふ風が強い。蒙古民族---馬鹿といってよい程朴訥である。誠意を以て導かねばならぬ。」

^{注1293} 日本国天皇を中心に地位の低い者がより外側に同心円上に広がる秩序の図柄は、丸山真男が戦後すぐに著した「超国家主義の論理と真理」が明らかにしており、筆者も教えられた。丸山真男(1946)超国家主義の論理と真理、丸山真男、増補版現代政治の思想と行動、1987.

いうまでもなく同化とは、他を感化して自分と同じようにすることをいうが、これを政治的文脈で用いたのが同化政策である。同化政策とは、本国が植民地民族に対して、自己の生活様式や思想などに同化させようとする政策をいう。日本国がその植民地の民族に対して行う政策は、これを「日本人化」^{注1294}とすることができる。圧倒的少数者の日本人が、九割以上の人口を占める漢民族を同化させることは困難と思われるかもしれないが、統治機構を押さえていたエリートの日本人には教育の力によってそれが可能であった。周囲に日本化された人間が増えていくのは心強いことであり、満洲国統治上有意義なことであったと思われる。

日本の植民地で行った教育は、台湾、朝鮮では民族の差別を基本とし、日本を中心とした同心円を強化するものであった。だが満洲国は傀儡ではあっても独立国家の体裁をとったために同心円の外にあるはずであり、理屈の上ではそうした差別の外にあらねばならなかった。従って、日本が形式上は独立国である満洲国でこれを行ったとすれば、^{注1295} それこそ満洲国の植民地的性格あるいは傀儡国家的性格を物語る証拠といえるかもしれない。だが、実際は日本軍隊・関東軍の軍事支配の下に日本人中心の階層構造が出来上がっていた。そこでは日本文化こそが価値であり、日本人は満洲国の指導民族であって、国内の異民族も「日本人化」することによって将来が約束されるという構造があった。

しかし、このような論理は異民族に通用せず中国人学生により拒否された。四期生聶長林は記す。

・「当時、柔道、剣道、合気武道などの教官たちの説教には、わざと“道”に乗せ[られ]ると神道、皇道につながれて、そして八紘一宇に導かれ、おしまいに日本の侵略拡充政策の一役を担わせ[られ]ることになってしまう」^{注1296}

・「私は多くの中国同学と同じように、武道訓練の時には意識的に時間をつぶすことに専念した。同じ気持ちの中国同学を相手に、教官の目を避けながら、あちこちを廻ったり休んだりしていた。技というものが学べないのはあたりまえのことで、精神なんて言うに及ばずだった。」^{注1297}

彼らにとっての武道の危険性を認識していたことが理解される。満系の先輩たちの息の長い努力によって学内で秘密裏に行われていた中国人学生らの読書会の反満抗日＝愛国運動^{注1298}等によって民族自決意識が覚醒し、反満抗日意識が広がっていったからである。こうした事例として既に我々は騎道教育の章で聶長林を見たが、日米戦争が始まっている1942年入学の彼の場合は、早くからそのような思想的下地ができあがっていた。反満抗日意識は聶一人のことではない。彼によれば、「中国人学生の中には、おのれの身分を高めようと思って、日

^{注1294} 朝鮮における同化政策を教育史では特に皇民化と呼ぶ。建大創設の前年、日中戦争が始まるとその展開とともに朝鮮では同化政策を強化し「内鮮一体」が提唱された。満洲国だけがそうした流れと無縁とはいえないだろう。宮田節子(1985)朝鮮民衆と「皇民化」政策, 未来社. 参照。

^{注1295} そのような意図で政策が行われる場合は、相手側にわからないように行われなくては反発を生むだけで得策ではないため、隠然として行われる場合が一般であろう。

^{注1296} 前掲, 聶長林書簡(2002年6月28日)

^{注1297} 前掲書, 聶長林, 幻の学園・建国大学-中国人学生の証言, p.31.

^{注1298} その発端については右のインタビュー、その後の詳細については聶長林回想を参照。志々田文明(1994)孫群(孫宝珍)氏 建国大学時代を語る、「満洲国」教育史研究, 東海教育研究所, pp.110-115. 前掲書, 聶長林(1997)幻の学園建国大学, pp.64-66.

本同学と『協和』しようと努力する者もいたが、それはごく少数であったと断言できる」^{注1299}という。また、四期生で各塾別をなくした連合読書会をつくと、三期、二期の「ブロックは、私たちの活躍ぶりを聞いて、皆励まし、全面的に支持する」と言ったという。

聶長林は、「柔道、剣道、相撲、いずれも日本独特の、体と意志を鍛えるすぐれた運動である」とその長所も認める一方で、「日本民族が昔から創造してきた優れた文化伝統は、すべて侵略戦争に奉仕させられた」と記している。^{注1300}ここで我々は、武道が「日本人化」の道具として政治的に利用される側面を強く持つ一方で、その中立的な価値を確認することができる。「日本の侵略拡充政策の一役を」担わせられることが、武道の「道」を忌避する中国人たちの立場であった。

(3) 充実への逃避 -- 朝鮮人の立場

二期生柔道部・洪椿植。彼は日本の文治政策が軌道に乗り始めた1921年、木川の地に生まれた。木川公立普通学校を卒業した彼は名門の京城第一公立高等普通学校（現在の京畿中・高等学校）に入学した。教員の大部分は日本人で、「韓語の使用は校内は勿論、校外でも禁ぜられ、歴史は日本歴史のみを教えられ」た。^{注1301}彼によると、「韓人エリート青年を皇民化する事は、日本の韓国統治に絶対必要の命題で」あり、日本人教師は有能な者が選ばれて赴任し、「誠心誠意」教えたため、「在学中、日本人先生から、鮮人扱い^{注1302}されて不快な気分を持った事は一度も無かった」という。^{注1303}建大への入学動機は「こせこせした韓半島で無く、大草原と砂漠を見れる広い台地に住みたい」という単純な考えからで、勉学以外の事に白紙状態であった彼は、「好奇心だけを持って」その門をくぐったという。入学以来日本軍に入隊するまでの丸5年間、建大で得たものは学問ではなく、「異民族との交わりと、農事訓練、武道、教練で叩き込まれた『竹槍』精神」であった。中国人学生は次第に彼に接近し、ある者は政治的な情報をもたらしたり、別の者はあまり日本人振る舞いするなと蔑んだりした。しかし彼は日本人ではなく、建大での生活は「心的苦痛そのもの」であった。^{注1304}彼は記す。

「建国大学の丸五年の共同塾生活は、国を失った民の悲しみを痛切に味わいました。自然と私は農耕や武術や教練の時間には充実に[マ] 加わりました。そこでは何か充実な時の流れを感じたのです。」^{注1305}

洪椿植のこの書には柔道についての記述は見られないが、柔道を中心に武道の稽古にも熱心であった様子が窺える。武道等に打ち込むことによって「充実の時」に没入していくという彼と同じ姿勢を、剣道部四期生で主将格であった江口弘の一文に見ることができる。

^{注1299} 前掲書、聶長林、幻の学園・建国大学 - 中国人学生の証言, p.45.

^{注1300} 同上, p.46.

^{注1301} 洪椿植 (1999.10) ハンキョレ (はらから) の世界 ああ日本, 私家版, p.15.

^{注1302} 鮮人は朝鮮人の略語であるが、賤民と発音が同じであるため、常識のない日本人が蔑称として用いた。同上.

^{注1303} 同上, p.15.

^{注1304} 同上, pp.27-28.

^{注1305} 同上, pp.28-29.

「私は歡喜嶺の生活の中で剣道に熱中した。それは一種の逃避であったことを今にして強く感じている」^{注1306}

江口は、五族協和の旗印と満洲における現地農民が「理解を超えた」扱いに苦しむ姿との矛盾の中で、「日本人としてどう生きるのか、何をしなければならないのか」と悩んでいた。この言葉は、武道の「教育力」が社会生活の中で持つ限界を語ったものといえる。「精神の修養」は、建大生活の中では逃避でしかなかったことを示すこの言明は、修行は、矛盾した現実に苦しむことをしばしの稽古の間忘れさせてくれる場であったということである。

しかし、洪椿植において、朝鮮民族の武術ではない日本武道は、そこに逃避して「心的苦痛」に病んだ精神を休めるためには十分なものではなかったであろう。それはいわば「充実への逃避」であり、彼は武道修行に没入することにより、身心の安定を求めたと理解される。

3 . 他者感覚の涵養

前節で特に見たように、建国大学に於ける武道教育の「教育力」を総括的に評価すると、武道を育んだ日本の民族には概ね受け入れられ、異民族にはその身心の強化に関わる価値のみが評価された。一方で、異民族には修行的特性について理解停止や忌避に陥らせる側面があった。しかしそこには、この時代の特殊で複雑な歴史的状況、時代思潮、またその下で育ったそれぞれの民族学生たちの意識と彼ら同士の交流とが彼らの民族意識を覚醒させ、彼らにとって異民族の文化である武道の魅力を楽しむことを妨げてきたことは間違いあるまい。このように考察するとき、建大において武道の教育力をより高めるための条件は何であったのかという問題が立ち現れる。本節ではこの問いに立ち向かうが、そのことは、建大の武道がその教育力を発揮するにおいて必要であったものを明確化し、また同時に今後の課題を明確にすることになる。

一期生楊増志。中国人で最初に柔道初段となり二段まで進んだスポーツ万能にして屈強の彼は、1941年12月、最初に反満抗日活動で逮捕された学生であった。始めにその言葉を聞こう。

・楊増志：1937年7月7日。中国の言葉では7.7事件といえます。その時から両国の談判は不可能となる。そして日本国はどんどん中国を軍事攻撃しました。上海開戦、上海陥落。南京開戦、南京陥落。徐州陥落。武漢陥落。そしてね、新聞はこういう報道ばかりです。中国人である我々はこれをなんというか。そうでしょう。日本は勝った。中国は敗戦した。とにかくですね。中国にとっては陥落ばかり。（笑）

日本人にとっては万歳、万歳。これはお祝いの事ですから。しかし敗戦国たる我々中国人

^{注1306} 前掲、江口弘(1991)剣道に熱中したが、前掲書、歡喜嶺 遙か(下巻), p.40.

の気持ちはどうですか。それは想像されるでしょう。そして新聞報道によって日本人学生は喜んでるんです。中国人の学生はこれを聞いてどういう気持ちになるんですか。

だからね、共同的语言はありません。友人は友人であり、同窓は同窓であります。国の事柄に接しない方がよい。ですからね、満洲国の国土を養成する[といっても]、日本人以外満洲国の国土になることができますか。そうでしょう。もし中国の学生が満洲国の国土になれば、中国の歴史では、中国の立場からでは漢奸だ。指弾され、罵られる。」

日本人には他者感覚がないといわれる。実際、建大の誰が楊増志の内面にあったこの気持ちを付度できたのであろうか。建大創設に関わった東京帝大教授平泉澄(国史)は1940年の講話で、「満洲国という五族協和ということは決して目新しいことでない。日本は何千年の昔からこれを実行してきた。」と語っている。^{注1307} また、1942年には副総長尾高亀蔵は、「諸君は民族問題に拘泥し過ぎている。民族問題など捨てておけば自然に解決する。/かつて徴兵令が創設されたときのことを考えてみよ。当時、明治の新政府で優位に立っていた薩長の土族は、農工商を土百姓、素町人と言って下に見ていた。それが、徴兵令によって差別なく対等に軍務につくようになり、一丸となって強い国を造ろうと努力する内に自然に今日のような冠たる国家になったのである。」と語っている。^{注1308} 小熊英二が『単一民族神話の起源』の冒頭に引用したように、尾高の語ったこの年には、「大日本帝国は単一民族の国家でもなく、民族主義の国でもない。(中略)我々の遠い祖先が或はツングウスであり、蒙古人であり、インドネシア人であり、(中略)帰化人のいかに多かったかを知ることができるし、日本は諸民族をその内部にとりいれ、相互に混血し、融合しかくして学者の所謂現代日本民族が生まれたのである」^{注1309} といった考えが憚られることなく流通していた。平泉や尾高の言説は海外に多くの植民地を持ち、植民地ではないが日本人が「指導」すべきと考える満洲国に住む日本人にとっては普通の考えであったのである。

たしかに、建大生はそうではなかった。楊増志の同期生の齋藤精一は、「学外で見聞する差別の横行や、強制、虐待の現実」に憤り、「切齒扼腕するも、学生の身分としては、力及ばざるところが多かった」が、「しよせん、民族協和は、長い忍耐の積み上げによるものと、思い知って、なお失望することなく、将来を期して努力を続けた」^{注1310} という。このような他者感覚は、多くの建大生が持っていたものであった。銃剣道部山下光一の日誌(1944年3月9日)を見よう。

「大東亜共栄圏といい、八紘宇為といい、雄大な名目をかかげているが、徒に抽象的なことをいっている。他民族を導くには、先ずその国民性をみて、具体的方策を与えることだ。」

「『各々所を得しめる』などといっても、他民族はそれをもって国家的な支配と違ってし

^{注1307} 谷口勉(二期生)日誌(1940年4月6日)収載の右文献参照。谷口勉, わが書き遺す歡喜嶺, 前掲書, 歡喜嶺 遙か(上巻), p.273.

^{注1308} 鈴木博建大日記. 建国大学四期生会誌(1996), 29: 51-52. この柔道青年は、末尾に一言「シラける。」と記していた。

^{注1309} 小熊英二(1995)単一民族神話の起源-<日本人>の自画像の系譜, 新曜社, p.3.

^{注1310} 前掲, 齋藤精一, 悲しく、懐かしい歴史を想う, 前掲書, 歡喜嶺 遙か(上巻), p.122.

まう。われわれは、日本人のみに通用することを言いすぎることを、深く反省すべきだ。」

注1311

当時の山下が、「雄大な名目」を疑っているわけではないだろう。社会生活の中で施された教育の力によって、それは多くの日本人建大生には確信であったはずである。だが、彼らには他民族がどう思うか、どう行動するか、という感覚があった。建大における民族共塾の成果^{注1312}と言わざるをえないであろう。

筆者は、騎道の教育の章で、「日本人学生中心の騎道実践だけでは諸民族の協和には至るまい。その実現には、人間や社会の構造、機能、関係についての別個の学習に基づく教養や思索が必要である。・・・彼[一期生小倉久弥]は、騎道、学問、塾を総合して生きる中に民族協和を実践しようとし、騎道教育をそのような関係の中に置くことによって、個人的逃避に陥り勝ちな武道の求道性を乗り越えようとしたのであろう。筆者はそのような騎道に対する態度に当時における価値を認めるし、今日における教育的価値もその点にある」と述べた。協和の実践とは、個人とその属する民族を尊重し、その文化、慣習を尊重することに他ならない。しかし現実にはいつの世の人々も、単に文化・慣習などの違いを見るだけに止まらず、同時に価値の上下を判断する。見識のある者はその見識によって、ないものは自らの個人的好悪のレベルの価値観によって。先に見たように尹敬章^{注1313}や李水清は、武道の愛好者である筆者に対する激励の意味も多少はあるにしても、日本武道のもつ精神性を高く評価し、それをはっきりと示してくれた。我々日本人はこの評価に思い上がることなく、他民族に自己の価値観を押しつけない姿勢が何よりも必要であろう。その小さな事例として、我々は既に合気武道の章(3.合気武道部(2))で、中国人学生劉興潭と齋藤精一の言葉を通して中国人学生に及ぼした武道教官富木謙治の教育力を見てきた。それだけではない。富木は建大の外、関東軍の憲兵隊、警察などでも指導を行っていたが、そのことを多くの学生は知らなかったようである。1990年の訪中で筆者は、こうしたことが噂として耳に入っているもお富木に親しみを感じていたという中国人学生徳長春の存在を知った。徳は語る。

「恐らく富木先生ほど人格の重い先生はあんまり多くないですね。[それは]あなたが資料の中に書いたこと。^{注1314}我々も四、五年くらい接しているけれど、まとまって言うことはできなかったんだ。ああ、成るほどと思いました。先生が怒るような顔は一回も見たことはなかったんだ。確かに。/富木先生は関東軍に非常に重要視されていたらしいんですよ。そういう先生でありながら、我々に対してはそういうことなんかはちっとも見られなかったんです

注1311 前掲書、建国大学年表、p.478.

注1312 それを我々は本論文第3章1(6)2)において一期生楊えつ氏と銭端本氏の対談で既に見た。

注1313 「尹敬章：私はね、日本人が武術を武道に高めたことに対して敬意をもっている。昔から。というのは、中国にも武術があるんです。4000年の伝統があるんです。しかし中国の武術はね、道にまで高められておりません。(中略)[当時の角力は]術を磨くと同時に、少なくとも人格の涵養を考えておりました」前掲、尹敬章聞き取り調査(2001年9月16日、中国洛陽) なおこの調査の一部は右の対談に収録される予定。志々田文明(2003)[対談]建国大学一期生尹敬章氏に伺う、早稲田大学体育局研究紀要35.

注1314 これは早大柔道部の富木先生の先輩・伊藤動機早大教授の富木謙治評で、長くつきあってきたが、富木が人の悪口を言ったことを聞いたことがなく、怒った顔を見たことがない、ことを挙げ、人間として難しい事としている。志々田文明、武道と富木謙治、前掲書、武道論、p.271.

よ。」

筆者は富木の人格が武道の修養のみによって創られたとは思わない。知識の習得と思索によって形成される深い教養なくしてはあり得ないことであろう。他人の立場に立って考える。また行動する。これらの言葉くらい繰り返し強調される徳目はないであろうが、これほどその実践が難しい徳目は少ない。

世界がグローバル化したいま、日本社会の環境の中には既に具体的な問題がおこっている。ムスリムが武道を学ぶとき神前や正面に何を仮定すると彼らに説明するのか、海外で日本武道をどのように指導するのが適切なのか、というような問題である。^{注1315} 今日でも多くの武道指導者は、武道は武道であり一切変える必要はない、という考えが強いように思われる。他方で、放っておけば自然に変わるという意見もあろう。前者は、武道はよく修行し理解した我々日本人が教えるのは当然という誇りからくるもので一見妥当性がある。しかしこれこそが自らを指導民族の高みにおく他者感覚の欠如した戦前の日本人の中に見られた姿勢そのものではないか。広く諸民族の歴史と文化を学び、自己と自文化を相対化した上で、日本武道の発揮すべき独自性と教育力を再考する必要がある。

実際、建大の時代の優秀で良心的な日本人の多くは、多くの建大生がそうであったように、自らが指導民族として満系学生らに範を垂れることが彼ら後進民族の為になると信じていたのであり、そこに立場を換えて考え行動することの難しさがある。建大の武道教育は異民族に示した富木の「教育力」によってこの点一定の機能を発揮したといえよう。そのことは武道教育の方向を指し示す一つの灯りであり、筆者が他者感覚の涵養を武道実践者・指導者の課題として掲げる所以でもある。

^{注1315} この問題は既に右稿で「シェイクハングスの礼法」の可能性にまで立ち入って論じた。志々田文明(1999)「国際化」と武道の変容, 早稲田大学体育学研究紀要 31 : 31-38.

図・表一覧

*表記凡例：

図、表及び写真の初めの番号は章を指す。ハイフンの後の番号は掲載順である。

記

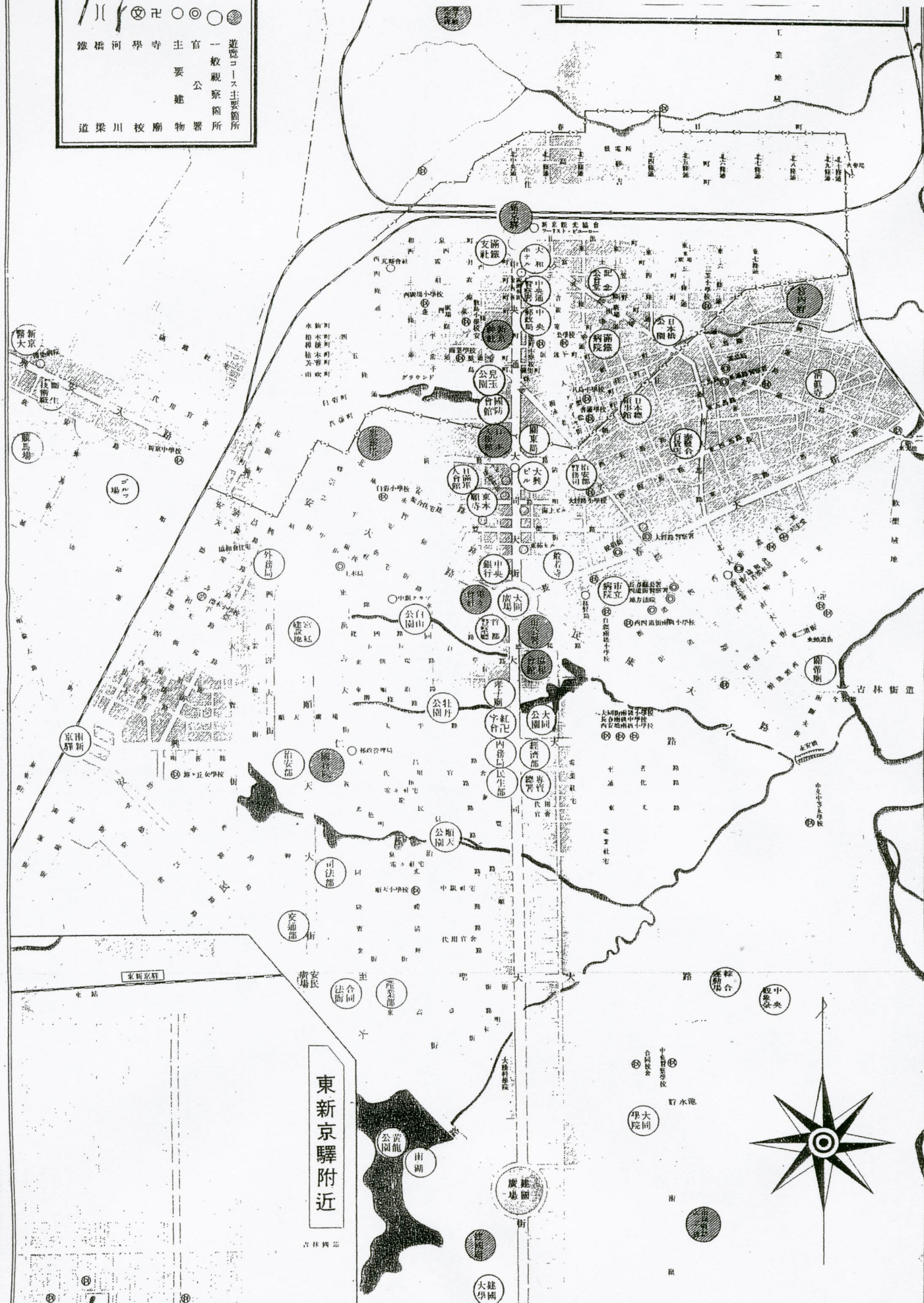
- 図1-1：新京案内地図と建国大学（『新京案内』1939, 巻末に付載）
- 表1-1：満洲国民族構成比（1940年10月1日現在）
- 表2-1：高等教育機関と私立大学の概要(1939年度)
- 図3-1：建国大学敷地・校舎俯瞰図（『建国大学と民族協和』p.87）
- 図3-2：前期塾舎の配置と塾舎の構造（『楽久我記』p.120）
- 表3-1：一期生(前期)の民族構成（『歡喜嶺』pp.301-305）
- 表3-2：一期生担当塾頭及び助手の履歴
- 表4-1：前期生の授業科目配当時間数及び割合(1940年以前と以後)
- 表4-2：1938年前期1年生授業実施概要(長野直臣塾生日誌より)
- 表4-3：1939年前期1年生授業実施概要(藤森孝一塾生日誌より)
- 表4-4：1939年前期1年生授業実施概要(西村十郎『楽久我記』より)
- 表4-5：1939年前期1年生授業実施概要(藤井歡一塾生日誌より)
- 表4-6：塾生活の日程表
- 表6-1：島谷八十八年譜
- 表7-1：福島清三郎年譜
- 表8-1：植芝盛平 年譜
- 表10-1：建国大学・銃剣道教育略年表
- 資料13-1：武道論講義要綱

図1-1：新京案内地図と建国大学（『新京案内』1939, 巻末に付載）

例 凡

川	河	學	寺	主	官	一	遊
鐵	橋	橋	橋	橋	橋	橋	橋
道	梁	川	校	廟	物	署	所

鐵橋河學寺主官一遊
道梁川校廟物署所
要公觀視察簡所
建建察簡所
遊覽コース主要箇所



東新京驛附近



表1-1：満洲国民族構成比（1940年10月1日現在）					
			総数（*は内数）	総人口	総人口に対する%
満洲国人				43202880	100
	満洲人		40856473		94.57
		漢人	* 36870978		85.34
		満洲旗人	* 2677288		6.2
		回教人	* 194473		0.45
		蒙古人	* 1065792		2.47
	日本人		2271495		5.26
		朝鮮人	* 1450384		3.36
		内地人	* 819614		1.9
	無国籍		69180		0.16
	第三人		3732		0
注1：本表は『満洲国史』各論 (pp.58-59) 所収の1940年10月1日現在の国勢調査に基づく数字から作成した。					
注2：満洲国人の内訳分類は上記資料の記載に従った。なお総人口に対する%は各論の記載を一部訂正した。					

表2-1：高等教育機関と私立大学の概要(1939年度)				
	校名	場所	修業年限	学科
民生部直轄 (14校)	師道高等学校	吉林市外	3年	
	奉天農業大学	奉天市靖安区	3年	農学科,林学科,獣医学科
	哈爾濱工業大学	哈爾濱市南崗公司街	4年	土木,建築,電氣,機械,応用化学,採鋇冶金
	新京医科大学	新京特別市	4年	
	新京法政大学	新京特別市	本科3年, 特修科2年	法学部、経済学部
	国立大学哈爾濱学院	哈爾濱市馬家溝. 旧制哈爾濱学院康德7年度まで併置	4年	
	国立大学新京工鋇技術院	新京特別市南嶺	3年	採鋇科,冶金科,電氣科,機械科,応用化学科,土木科,建築科
	国立大学奉天工鋇技術院	奉天城内	3年	採鋇科,冶金科,電氣科,機械科,応用化学科
	王爺廟興安学院	興安南省王爺廟	5年	
	奉天臨時農業教師養成所	奉天市靖安区. 奉天農業大学内に設置	1年	
	奉天臨時商業教師養成所	奉天市大南般若寺. 奉天商科高級中学校内に設置	1年	
	中央師道訓練所	新京特別市北大街	1月乃至1年	
	留学生予備校	新京特別市	1年	
	本溪湖工業実習所	奉天省本溪湖	3年	機械科,電氣科,採鋇科
私立大学並 二之二類ス ル特別教育 施設及大学 特修科二類 スル特別教 育施設(7校)	哈爾濱医科大学	(財)哈爾濱医科大学	4年	
	哈爾濱医科大学付設哈爾濱医科医学院	(財)哈爾濱医科大学	3年	
	奉天医科大学	スコットランド教会 外国伝道団	4年	
	滿洲国北滿学院	哈爾濱白系露人事務 所	商業部3年, 工業部4年	
	奉天薬剤師養成所	滿洲薬育機関設立期 成財団	3年	
	哈爾濱基督教青年会専門 学院	斉藤惣一	3年	
	奉天商科学院	松本豊三	2年	
注1：民生部が作成の1939(康德6)年度「中等程度以上各種教育施設設置表」から作成。				
注2：上記設置表は、「滿洲・滿洲国」教育資料集成, 第8巻, pp.597--641.				

図3-1：建国大学敷地・校舎俯瞰図（宮沢恵理子著『建国大学と民族協和』p.87）

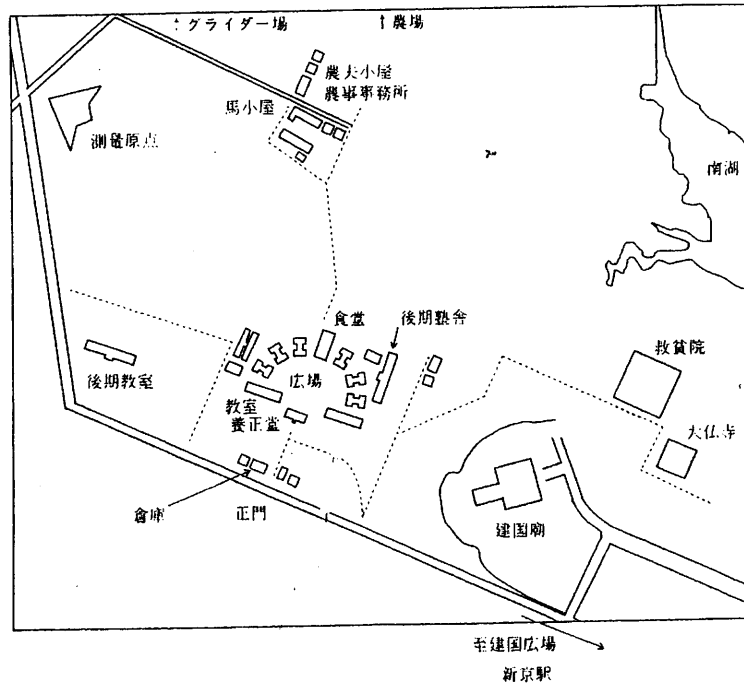
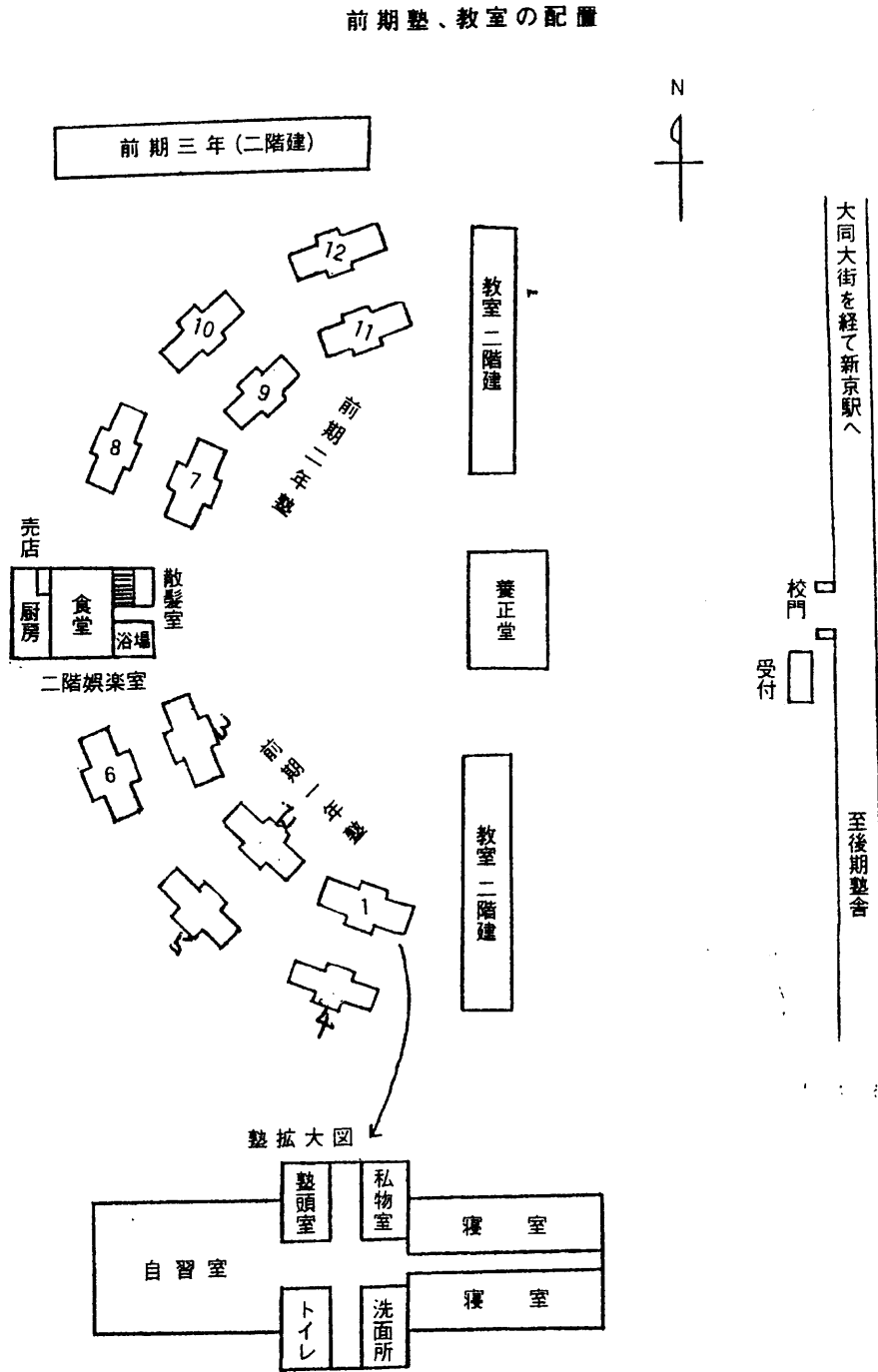


図3-2：前期塾舎の配置と塾舎の構造（西村十郎著『楽久我記』p.120）



昭和14年

表3-1：一期生(前期)の民族構成							
	日本	朝鮮	台湾	漢	蒙古	白系ロシア	合計
1 塾	11	0	2	8	0	3	24
2 塾	11	2	1	7	0	2	23
3 塾	12	2	0	8	2	0	24
4 塾	12	2	0	7	3	0	24
5 塾	12	2	0	7	2	0	23
6 塾	12	2	0	9	0	0	23
合計	70	10	3	46	7	5	141
民族構成比	49.6	7.1	2.1	32.6	5	3.5	100
注1：建大第一期生会編(1989)歡喜嶺，建国大学第一期生文集の巻末の名簿を斉藤精一氏の教示により分類。							
注2：上記文集で1塾の那庚辰氏は王玉埼氏の誤り。那氏は後期入学。後期入学者は那氏を入れて4名。							
注3：個別民族比は小数点第二位を四捨五入した。							
注4：建大では表中の日本、台湾、朝鮮は日系と呼ばれ、漢、蒙古、白系ロシアは満系と呼ばれた。							

表3-2：一期生担当塾頭及び助手の履歴			
担当塾	塾頭名(着任時資格)	助手(補佐官)	赴任までの学歴・経歴
1塾・4塾	石中廣次 (助教授)		1902年熊本県に誕生,熊本県五高卒,剣道部員,沢木興道に師事,1928年東京帝大工学部卒. 数学専攻. 1929年水戸高校教授,剣道部長. 開学前,建大東京創立事務所長. 1937年11月助教授
		工藤定雄	中央大卒, 貴族議員の秘書, 松平紹光らと親しく開学時に赴任. 工藤は4塾が居室.
		斉藤英一	水戸高校卒,石中の教え子. 東京帝大文学部卒. 秋頃から赴任. 1塾を主として担当した
	富木謙治 (助教授)		1900年秋田県に誕生, 早稲田大学政経学部卒. この間柔道の選手生活. その後植芝盛平に師事し大東流合気柔術修行. 県立角館中学校教諭を経て1939年赴任.
2塾・5塾	江原節之助 (助教授)		名古屋幼年学校時代で辻政信と同期生. 陸軍士官学校病氣中退. 難波高校教員. 辻の懇請で赴任
		浜崎武士	1935年広島高師卒,兵役を経て大同学院六期生. 満洲国の行政官(東京)から1937年11月1日建大属官,以後開学に関わる. 江原の依頼で塾頭助手,正式就任は8月1日.
	安倍三郎 (助教授)		東北帝大卒. 千葉胤成教授の弟子, 心理学. 1935,吉林師導大学教授
3塾・6塾	藤田松二 (助教授)		鹿児島県の農学校から高等農林を経て京都帝大農学部卒, 農業経済専攻. 石原莞爾の推薦で宮城県農学寮から赴任.
		北原勝男	鹿児島県七高卒,柔道部. 京都帝大農学部, 農業経済専攻. ハルピンの開拓訓練所の農場主任から1938年6月に着任. 越智道雄によると5月途中に着任し6塾塾頭室に入った.
		幡掛正浩	1931年東筑中学4年修了,1934年熊本県五高卒,1938年京都帝大文学部哲学科卒, 内務省神社局嘱託. 北原の推薦で1939年に赴任. 越智によると北原と交代するように塾頭室に入った,北原は止めるつもりで呼んだのではないかという
注1：本表は拙稿「満洲国」建大における武道教育(1991)の「表1:一期生担当塾頭及び助手履歴」を補正して作成.			
注2：塾頭は正式には副師道(作田荘一「建国大学における石中教授」,『石中廣次先生追悼文並遺文集』所収参照)			
注3：助手(補佐官)の表記は、塾頭江原は助手と記し一期生は補佐官と認識していることによる。二期生以後この制度は解消.			
注4：安倍三郎の塾頭代行の記述は長野直臣日誌にある安倍の押印日時を参考にした。			

表4-1：前期生の授業科目配当時間数及び割合（1940年以前と以後）					
科目分類	科目	前期3カ年合計 (1938-1939)	全配当時間に 占める割合 (%)	前期3カ年合計(1940-)	全配当時間に占 める割合 (%)
訓練科目	精神訓練			80	2.2
	軍事訓練	460	12.6	430	12.7
	武道訓練	270	7.4	260	7.1
	作業訓練	370	10.1	330	9
		小計1100	小計30.1	小計1100	小計30.1
講義科目	精神講話	80	2.2	95	2.6
	自然科学及数学	180	4.9	365	10
	人文科学	610	16.7	120	3.3
	歴史	290	7.9	330	9
	地理	120	3.3	220	6
		小計1280	小計35.0	小計1130	小計30.9
語学	日文	230	6.3	300	8.2
	漢文	230	6.3	300	8.2
	第一語学	480	13.1	535	14.6
	第二語学	340	9.3	295	8.1
		小計1280	小計35.0	小計1430	小計39.1
	合計	3660	100	3660	100
注1：建国大学学則(1940.5.10)第26条の表より作成。建国大学年表, p.224参照。					
注2：人文科学は1940年学則の区分。旧学則にはその区分の統計がないため論理,心理,哲学 国家,政治,経済,文教,国防の各概論及び現代思潮の数値をこれに入れた。					
注3：%は小数点第二位を四捨五入した。					

表4-2：1938年前期1年生授業実施概要(長野直臣塾生日誌より)								
		月	火	水	木	金	土	日
1限8:00-9:00	前期	精神講話(作田, 終講, 時限不明) 5.23	仏蘭西語(時限不明)6.28	漢語(2時間, 時限不明)7.6		漢文(程, 3時間 続けての授業, 時限不明)5.27	漢語(普, 時限不明)11.19	
	後期	精神講話(西, 時限不明)9.26. 西は9.30終了						
2限9:00-10:00	前期							
	後期							
3限10:00-11:00	前期							
	後期							
4限11:00-12:00	前期					漢文(佐藤, 時限不明)5.27		
	後期							
昼食12:00								
5限1:00/1:30~	前期	農訓(4時間ぶつつづけ)5.9		武訓5.18		武訓/ 剣道5.6		
5限1:00/1:30~	後期	武道週間 10.31-11.4	騎道11.8	騎道(今日から始めて)10.12	軍訓 9.22	農訓9.30	軍訓9.3 角力(本年度最後の大会) 10.15 武道大会 11.5	全満武道大会9.25
注1：本表は一期生(第2塾)の長野直臣氏の塾生日誌(1938年分原本コピー)から作成した。								
注2：長野日誌には授業の記事は少なくかつ具体的でないものが多い。反面中国人学生への言及は多かった。								

表4-3：1939年前期1年生授業実施概要(藤森孝一塾生日誌より)							
		月	火	水	木	金	土
1限8:00-9:00	前期			論理4.12, 6.7			
	後期	自然科学(宇田)8.26	精神講話(作田)8.8, 8.15以後森	自然科学(時限は不明)12.13	精神講話(時限は不明)11.9	徐先生より発音練習11.10	独逸語(齊藤)11.25
2限9:00-10:00	前期	満洲史(稲葉)4.17, 4.24休講, 5.15				論理5.12	
	後期	自然科学(宇田)8.26					満洲史(時限は不明)10.7
3限10:00-11:00	前期	満洲史(稲葉)			満洲史5.4	論理5.12	満語4.15
	後期						
4限11:00-12:00	前期					独逸語6.2	満語4.15
	後期						精神講話(森)8.26, 9.23
昼食12:00							
5限1:00/1:30~	前期	農訓4.17	入学式4.11	軍訓4.12(6,7限)	農訓4.20	軍訓4.14	軍訓4.8
	前期	農訓4.24	武訓/柔道4.18	軍訓4.19	農訓5.11	武訓/剣道4.21	軍訓5.13
	前期	農訓5.22	武訓/剣道6.6	軍訓4.26	農訓5.18	武訓/剣道5.19	軍訓5.20
	前期	農訓5.29	武訓6.13	軍訓5.3	農訓5.25	軍訓5.26	角力及柔剣道大会5.27
	前期	農訓6.5		農訓5.17	農訓6.22	軍訓6.2	軍訓6.3
	前期			農訓5.24	農訓6.29(今学期最後)	軍訓6.9(1,2年對抗の攻防演習)	
	前期			軍訓5.31		軍訓6.23	
	前期			農訓6.28		教職員学生一同3週間の予定で黒河方面へ勤労奉仕7.1-22	
5限1:00/1:30~	後期	早朝起床で陛下の東方御巡狩を送る行事。午後2時間漢語8.21	農訓8.15	軍訓8.9	農訓8.24	武訓/剣道8.11(松平指導)	武道大会9.30
	後期	軍訓のち武訓/柔道(福島)9.25	農訓8.22	農訓8.16	軍訓(許教官)11.2	軍訓(満人教官)9.15	農訓10.21
	後期	農訓10.9	農訓9.5	武訓/剣道9.20	武訓/剣道12.14	軍訓(新田)9.16	軍訓(最後)12.16

	後期	武訓/剣道(野試合)10.30	武訓/剣道(島谷)9.26	農訓(大豆の刈り取り)10.4		軍訓のち武訓/剣道(島谷)9.29	
	後期	"体訓は軍隊体操"11.20	訓練なし明日からの秋季演習の準備10.10-15	農訓11.1		農訓(大豆の刈り取り)10.6	
	後期		農訓11.7	農訓11.8			
	後期		農訓11.14(終り)				
	後期		武訓/柔道11.21				
	後期		体訓12.12				
注1：本表は二期生(第12塾)の藤森孝一氏の塾生日誌(1939年分原本コピー)から作成した。							
注2：第5限の開始時間は1939.5.23より昼食後1時間の午睡時間が設けられた。それを1時30分と推定							
注3：第5限以後については藤森日誌に掲載されている訓練科目と月日を順次掲載した。							
注4：火曜日は1-4限まで漢(満)語を中心に独逸語等語学が配置の様。5.23,独逸語,漢語4時間実施							
の記載あり。							
注5：体訓の意味について藤森氏に問い合わせたが不明。							

表4-4：1939年前期1年生授業実施概要(西村十郎『楽久我記』より)						
	月	火	水	木	金	土
前期						
1限8:00-9:00	英語(中村)4.24		英語4.19	英語6.22, 6.29	英語4.14	漢文(時限は不明)5.20
2限9:00-10:00	満洲史(稲葉)4.24		漢語(普康)4.26	漢語(普康)6.22	論理(前田)4.14	漢語(安倍,時限は不明)5.20
3限10:00-11:00	満洲史(稲葉)4.24			満洲史(稲葉)4.20	論理4.14	
4限11:00-12:00	精神講話(作田)4.24			満洲史(稲葉)4.20	学則の注意(光安)4.14	
昼食12:00						
5限1:00/1:30~	農訓4.10	入学式4.11	軍訓4.19	農訓5.18	軍訓4.14	軍訓4.8
	農訓4.17	武訓/剣道4.18	軍訓5.10	農訓5.25	軍訓4.21	軍訓5.20
	農訓6.5	武訓/剣道6.6	変更で農訓5.17	農訓6.1	軍訓3時迄, 農訓7時迄4.28	武道大会5.27
	農訓6.19	武訓6.13	軍訓5.31	農訓6.15	軍訓5.26	武訓/柔道6.3
			農訓6.28	農訓6.22	軍訓6.2	
				農訓6.29	軍訓6.9	
					軍訓6.16	
					教職員学生一同3週間の予定で黒河方面へ勤労奉仕7.1-22	
後期						
1限8:00-9:00	英語10.3	精神講話(作田)8.8			英語(時限は不明)9.29-10.6休講	自然科学(宇田)8.12/精神講話10.7
2限9:00-10:00		漢文(時限は不明)8.15	英語9.6	漢語(安倍)8.10	英語(時限は不明)10.6	英語8.12, 9.9,10.7
3限10:00-11:00						満洲史8.12
4限11:00-12:00	数学(中山)10.9	数学(時限は不明)10.10				満洲史8.12, 9.9
昼食12:00						
5限1:00/1:30~	農訓8.14	武訓/剣道8.8, 新学期初日	農訓8.16	武訓/柔道8.10	農訓8.18	農訓8.19
	武道週間9.25-	農訓9.5	軍訓8.23,のち角力の稽古	農訓8.24	夕方から角力の稽古8.25	各塾対抗武道大会9.30
	農訓10.9	農訓9.12	軍訓9.6	農訓9.14	農訓9.8	軍訓10.7
	武訓/柔道11.13	農訓11.14(今年最後)	軍訓9.20	武訓/剣道10.26	柔道のあと軍訓9.29	農訓10.21

			秋季野外演習 10.11-15迄	軍訓11.9	農訓10.6	武訓/剣道1026
			農訓10.18	武訓/剣道 11.16	軍訓(学科)11.10	
			武訓11.8			
注1：本表は二期生(第9塾)の西村十郎氏の塾生日誌抄の『楽久我記』(1991)から作成.						
注2：第5限の開始時間は1939.5.23より昼食後1時間の午睡時間が設けられた. それを						
1時30分と推定した						
注3：第5限以後については『楽久我記』に掲載の訓練科目と月日を順次掲載した.						
注4：火曜日は1-4限まで漢語を中心に語学. 月・木の訓練は農訓, 火は武訓, 水・土は						
軍訓の様様.						
注5：満語の普康(満洲族.北京官話)は1939年7月3日死去。『建国大学年表』p.172.						

表4-5：1939年前期1年生授業実施概要(藤井歓一塾生日誌より)							
		月	火	水	木	金	土
1限8.00-9:00	前期			論理4.12/ 4.19	論理(前田,時 限不明)8.10	仏語4.14 終日満洲史 11.3	
	後期				自然科学(時 間割変更によ る)10.26		
2限9:00-10:00	前期			支那語4.19			
	後期				自然科学(時 間割変更によ る)10.26		
3限10:00-11:00	前期			漢文4.19	満洲史4.20休 講		
	後期						
4限11:00-12:00	前期				満洲史4.20休 講		
	後期						
昼食12:00							
5限1:00/1:30～	前期	農訓4.24	入学式4.11	軍訓4.19/ 5.24 農訓5.3	農訓4.20	軍訓4.21	軍訓4.8
	後期			農訓10.18	武訓,戦闘教練 10.26	軍訓(新田) 9.15. しかし 藤森日誌には 9.16に新田の 軍訓あり	軍訓(辻少将) 10.28
				農訓11.1			
注1：本表は二期生(第10塾)の藤井歓一氏の塾生日誌(1939年分原本コピー.宮沢理恵子 氏恵贈)から作成.							
注2：藤井日誌は当初は整然と記されていたが,身心の悩みから5月頃から乱れる.							

表4-6：塾生活の日程表	
前期	
起床6:00(第2学期は30分遅れて6:30)	太鼓の合図で起床、洗面、掃除。長野直臣塾生日誌1938年8月1日に「第二学期始まる。六時半起床」。
	「日本人は率先して掃除を行ったが、中国人は一般に掃除を嫌がった。ところがある時楊増志が俺もやると申し出で、変わった」(斉藤精一談)
	一期生長野日誌「第二学期始まる。六時半起床、国旗掲揚(中略)つづいて塾頭の塾則朗読」(1938.8.1)
点呼6:30	国旗掲揚台の前に集合
東方・宮廷府遙拝 (国旗掲揚)	日本天皇皇居と満洲国皇帝宮廷府に対して 祝祭日と月曜日に実施
建国体操	天突き体操ともいわれた。三期生阿蘇谷博塾生日誌(1940年5月20日)に「毎朝経天緯地の体操を行う/号令『天を突け』『地球を回わせ』」
駆け足	全員で駆け足。二期生藤森日誌「経緯度の原点を示す櫓の所まで走る」(1939.4.12)「南嶺広場まで駆足」(同4.14)。七期生田山実「我々の時代は校庭一周程度だった」(03.2.11談)
勅書奉読	塾に戻って実施。「満系が当番の時は満語で勅書奉読した」(斉藤精一談)
自習時間	事実上の自由時間であり、課外活動に行く者もいた
朝食7:00	食事前に天照大神賛歌の和歌朗誦。「いつの間にか前期にこういう慣習ができた」(斉藤精一談)。「現在では只黙祷のみに止める」(竹山増太郎の報告,1942.2)
学科授業開始 1限 8:00/2限9:00/3限 10:00/4限11:00	
昼食12:00	
5限1:00/1:30	西村日誌によると、1939.5.23より昼食後1時間の午睡時間が設けられた。12時半から1時間であろう。これがいつまで続いたかは不明
6限2:00/2:30-	
自由時間3:00-	3時までが訓練の時間であったが、農訓など実際にはそれを過ぎることが多かった模様
夕食5:30(冬6:00)	藤田の農訓は農繁期などにはしばしば食事時間にずれ込んだ。
	西村日誌「一時半より八時半まで将に七時間の作業。先生は私等の身体を一体何と考えて居るのだろうか。・・・私等には今日の復習、明日の予習があるのに」(1939.6.5)
	西村日誌「四時半に終わったが、農訓最短記録」(1939.10.18)
夕食後自由時間	「一期生の時は食堂の二階は娯楽室で何でもすることができた」(斉藤精一談)
自習時間7-9	「自習室で勉強するのが主であるが、外部から人を呼んできて講話をしてもらった」(斉藤精一談)
	「中山優、岩間徳也、大間知篤三ら教授・助教授の方々、政府の人、軍人など。茶と南京豆などを買ってきて寝室であぐらかいて話を聞いた」(斉藤精一談)
	「辻政信参謀や、転向者といわれた林房雄、小林秀雄らの講話を興味深く聞いた」(村上和夫談)
	西村日誌「夜の自習時間はいつも英語の予習と復習に大半を使ってしまう」(1939.4.27)
点呼9:30/(黙想/故郷遙拝)/塾頭の訓示	「塾頭あるいは週番塾頭による点呼。軍隊式に正座して。塾頭の訓示の実施は時と場合、また塾頭によった。故郷遙拝の記憶はない」(藤森孝一談)
消灯10:00	「就寝時間は守られなかった。自習室で夜遅くまで粘っている者もいた。また塾舎にあった物入れに入り込んでだべっている者もいた」(斉藤精一談)
	「二度目の指導学生の時、就寝時間後卒業論文作成のため自分一人自習室で勉強していた。寺田塾頭が回ってきて激励された」(斉藤精一談)
注1：本表は以下の資料から作成した。竹山増太郎、塾教育を中核とせる建国大学指導者教育、興亜教育、1942.2、宮沢恵理子、建大と民族協和、p.199、一期生長野直臣塾生日誌、二期生藤森孝一塾生日誌、同西村十郎塾生日誌抄『楽久我記』。一期生斉藤精一、村上和夫、越智道雄の各氏及び二期生藤森孝一、七期生田山実氏の談話。八期生の時には朝食前、消灯時間に若干の違いがある。	

表6-1：島谷八十八年譜	
1870 (明治 3)年	12月15日、薩摩藩土村上斎之丞 (示現流) の4男として生まれる
1880 (明治13)年	健児社に入門、前田龍五郎に真影流を習う一方、示現流を始める
1885 (明治18)年 - 1889年	鹿児島演武館にて、一刀流杉持八郎師に指南を受ける
1890 (明治23)年	鹿児島中学、三州義塾卒業
1893 (明治26)年	奈良県巡査拝命。島谷うのと結婚、島谷家を継ぐ
1897 (明治30)年	大日本武徳会正会員となる
1899 (明治32)年	奈良県警部に任官、県剣術教授。警察署長は従兄の丸野新太郎
1901 (明治34)年 - 1905年	村井光知及び佐瀬政春 (浅山一伝流) 師の指南を受ける (於奈良県武徳殿)。佐瀬は天下逸品と称せられた突き名人であった
1905 (明治38)年 - 1906年	数えで36歳で武徳会本部の武術教員養成所 (第一期生) 入所。内藤高治師 (北辰一刀流) の指南を受ける。最年少は18歳の齋村五郎。島谷は1年間で三段となる (教師の資格。当時の養成所卒業資格は三段で最高段位は五段)
1906 (明治39)年	奈良武徳殿剣術教授となる
1907 (明治40)年頃	奈良県立郡山中学校剣道師範。1945 (昭和20)年までの約38年間
1916 (大正 5)年	剣道教士号
1917 (大正 6)年	この年夏より5力年間武徳会本部にて内藤高治師の下で修行、また学生の指導にあたる。なお大正7年に武術専門学校 (翌年武道専門学校に改称) は撃剣および柔術教員の無試験検定許可校に許可される。中村民雄 (1994) 剣道事典 -- 技術と文化の歴史, p.215.
1920 (大正 9)年	武道専門学校剣道科教授就任。武徳会本部剣道教授も?この項は道畑氏の年譜では「大正5年夏より5力年間、大日本武徳会本部剣道教授兼武道専門学校剣道科教授」となっているが、玉利嘉章範士の談話では武道専門学校教授は1年ほどで奈良支部に帰ったとある
1923 (大正12)年	5月、武徳祭演武大会 (於京都武徳殿) で、当時上段で無敵といわれた高野茂義と試合
	この年か翌年の夏、郡山中学校剣道部、夏の特別稽古において、助手の芳村一郎 (後に範士) に、面・小手・胴をはずし、素面・素後手で稽古する。芳村は正眼、下段、上段と先生に追いつめられる」と述懐している
1925 (大正14)年	郡山中学校剣道部、全国青年演武大会中学の部 (大日本武徳会主催) で初の団体優勝。島谷の長年の指導稔る
1926 (大正15)年	5月、大日本武徳会剣道範士号を授与される
1929 (昭和 4)年	御大礼記念武道天覧試合に宮内庁の推挙で榮譽の指定選士並びに審判員として出場 (5月4・5両日)
1930 (昭和 5)年	大日本右武会 (4段以上) の副会長就任
1933 (昭和 8)年	大日本帝国剣道形の調査委員。12名の一人に選ばれ現在の日本剣道形の基本となる「加註・増補」制定に参画した。大日本右武会会長就任
1934 (昭和 9)年	第一回全国少年剣道大会開催 (於橿原建国会館)。島谷の発案。6月1日、奈良県巡査教習所における教習生に対して「武に関する大道」について講演
1937 (昭和12)年	九段允許。天理外国語学校剣道師範 (昭和15年まで)
1938 (昭和13)年	満洲帝国に建国大学創立。剣道を代表する武道顧問に委嘱される
1942 (昭和17)年	治安部大臣以下日満系諸官を一堂に会して、剣の大道について約半時間の講演 (於治安部)。胆石手術後であったにもかかわらず、その後猛者連の稽古を受ける。曰く「病後でもやれると言う気力を示したかったから」
1946 (昭和21)年	6月2日死去 (享年77歳)
註：本表は『大道』所収の「島谷八十八先生履歴」に同書記載の記事を補筆し、建国大学関係記事を加えて作成した。表記の仕方は若干変更したものもある。	

表7-1：福島清三郎年譜			
1890(明治23)年	2月8日	生誕(原籍：熊本県飽託郡川尻町二百五拾八番地)	
1896(明治29)年	4月1日	川尻尋常小学校へ入学	6歳
1902(明治35)年	3月25日	同校卒業	
	4月4日	飽田南部高等小学校入学	12歳
1904(明治37)年	3月25日	同校卒業	
	4月9日	熊本錦城学館一学年入学	14歳
1908(明治41)年	3月25日	同四学年修業家事都合二依り退学	18歳
1910(明治43)年	7月29日	大日本武徳会武術教員養成所入学	20歳
	12月9日	柔道初段允許(大日本武徳会長)	
1911(明治44)年	8月20日	同所卒業。柔術二段允許(大日本武徳会長)	21歳
		8月21日より大正8年8月末日迄大日本武徳会本部講習生として柔道研究す	
1913(大正2)年	3月25日	柔術三段允許(大日本武徳会長)	23歳
	5月17日	京都平安中学校柔道教師任命	
1915(大正4)年	6月30日	柔術精錬証授与さる(大日本武徳会総裁)	25歳
1916(大正5)年	1月9日	柔術四段允許(大日本武徳会長)	26歳
1919(大正8)年	9月1日	大日本武徳会武道専門学校助教授任命	29歳
	11月7日	柔術五段允許(大日本武徳会長)	
1920(大正9)年	5月7日	柔道教士称号ヲ授与さる(大日本武徳会総裁)	30歳
	5月29日	大日本武徳会武道専門学校教授任命	
1926(大正15)年	12月15日	柔道六段允許(大日本武徳会長)	36歳
1933(昭和8)年	6月1日	柔道七段允許(大日本武徳会長)	43歳
1937(昭和12)年	春	大日本武徳会武道専門学校及び平安中学校退職か	47歳
	12月22日	柔道八段允許(大日本武徳会長)	
1938(昭和13)年	10月1日	建国大学武道顧問委嘱	48歳
1939(昭和14)年	7月5日	柔道範士称号を授与さる(大日本武徳会総裁)	49歳
1948(昭和23)年	5月4日	柔道「九段に列す」(講道館長)	58歳
1950(昭和25)年	8月27日	死去	60歳

表8-1：植芝盛平		年譜（植芝吉祥丸著『合気道開祖植芝盛平伝』巻末年譜より作成）	
西暦	年号	年齢	
1883	明治16	13 17	12月14日、和歌山県西弁婁郡西ノ谷村四四一（現・和歌山県田辺市元町）に植芝与六の第四子、長男として出生。
1896 1900	29 33		新設の県立田辺中学校に入学、在校1年たらずで実学を志して中退、みずからの意志にしたがい吉田珠算研究所に通ってソロバンを習得、その後、田辺税務署に就職。
1902	35	19	蔵前に一戸を借りて「植芝商会」を設立。武道への強い関心がめばえ浅草七曲に住む起倒流の戸張滝三郎師範の門より古流柔術を習得。また神田飯田町の新陰流道場で剣術を学んだ。
1903 1906	36 39	20 23	大阪第44師団管下第37連隊（紀州連隊）に入営。銃剣術は隊内一と謳われ、“兵隊の神様”といわれる。明治38年8月、大阪第44師団和歌山第61連隊に配属されて日露戦争に従軍。
			この4年間にわたる兵役の間、外出時は堺にある柳生流の中井正勝師範の道場に通り古流柔術を練磨、免許を得た。
1907 1909	40 42	24 26	実家にあつて農耕に従事、田辺に来遊中の柔道家高木喜代氏（のち九段）を招いて自宅納屋改造の道場を開設、講道館柔道の指導を受けた。
			明治42年ごろより政府が神社合祀策、青年たちおよび地元民を率いて反対運動を推進。
1910 1911	43 44	27 28	政府の北海道開拓移住住民団体募集計画の呼びかけに関心。明治44年春、北海道に渡り入植地選定のため下調査の旅。
1912	45	29	5月20日ごろ、北海道北見国紋別郡湧別村白滝原野増画地。
1915 1916	大正4 5	32 33	大正4年2月、所用にて合宿中の遠軽町久田旅館で大東流の武田惣角と出会う。秘技に感服して滞在を1ヶ月延長し、同師範より大東流柔術の教授を受ける。私設道場を提供、村内有志十数名とともに研鑽修行した。
1917 1918	6 7	34 35	1918年6月、上湧別村村会議員に当選。
1919	8	36	11月中旬、故郷田辺より父与六危篤の報に接し、離道して帰郷を決意。急ぎ田辺に向かう途中「綾部に大本教の出口王仁三郎という鎮魂帰神の大人物がいる」と聞き、帰郷に先立って12月27、28日ごろ京都府下嵯部に立寄る。
1920	9	37	1月2日、父与六（76歳）死去。春、心機一転を信仰生活に求め、嵯部への一家を上げての移住を決意。出口王仁三郎の厚情をうけて大本聖域内の本宮山麓、小学校裏の一軒家に移転。
			昭和2年上京するまでの足かけ8年間ここに居住、秋ごろ自宅の一部を改造、18畳の「植芝塾」道場を開設。
1921	10	38	2月11日、第一次大本教事件（当局による大本教弾圧）
			この頃までに植芝の武術は喧伝され入門者は信者以外にまで広がりはじめた。
1922	11	39	綾部に恩師武田惣角が来訪。この年春以来半年間の指導を受け、9月15日、大東流合気柔術教授代理を授与される。この間の講習会で海軍将官らも指導を受け、噂が東京に伝えられた。
1924	13	41	2月13日、王仁三郎師の随員の一人として綾部を出立し満蒙の地へ入る。だが6月20日中国官兵に一同逮捕され、危うく死刑にされかけた。この間、再三にわたる死線の体験を通じて「弾丸よりも一瞬早く飛来する白い光のツブテ」を直感し直覚する悟達を得たという。
			この頃、従来の体術に加えて新たに槍術の習得に励む。
1925	14	42	井戸端において行水中、黄金の気につつまれ、我が身もまた黄金体と化したかの感応を覚えたという。
			早稲田大学柔道部の西村秀太郎、富木謙治ら若手柔道家入門。秋、竹下勇海軍大将の招請に応じて単身上京し演武会を開催、感動を与えた。

1927	昭和2	44	2月,稜部を去り東京での生活を決意、一家をあげて上京。
1928	3	45	1月、芝三田網町にある内海勝二男爵邸隣の借家を提供されて転居、8畳2間を改造して仮設道場とした。海軍大学の武道講師として招聘され1937年まで指導。 後援会名であった相生流の名で相生流合気武術を宣言。大東流からの独立を図った。この頃入門を乞う者が相次いだ。
1929	4	46	2月,芝高輪車町、泉岳寺脇の家に移転、8畳2間を改造して仮設道場とした。この頃入門者相次ぐ。
1930	5	47	牛込若松町の旧小笠原家下屋敷跡を借用し(後入手)新道場の建設を進めた。
			10月,講道館柔道創始者嘉納治五郎来訪、植芝の演武を見学。その後門下の武田二郎、望月稔を研修のために長期派遣した。
1931	6	48	4月,牛込区若松町102(現・新宿区若松町102)に、80畳の本格的な合気道場が完成。「皇武館」として発足。
			3月から4月にかけて武田惣角植芝を指導。皇武館にて武田惣角の講習会が行われる。
1932		49	この頃東京では飯田橋の富士見町道場(畔柳久五郎氏の斡旋による)、小石川大塚の大塚道場(野間清治講談社々長の提供による)、大阪では曾根崎道場、吹田道場、茶臼山道場ほか数カ所が支部ないし支部的拠点あった。
			8月13日,出口王仁三郎の懇請で大日本武道宣揚会を組織(事務局は稜部および亀岡)。会長に就任。
1933	8	50	5月,兵庫県朝来郡竹田町に本格的な道場を開設。
1935	10	52	12月8日,第二次大本教事件
1938	13	55	10月,満洲国建国大学武道顧問として渡満。同大学の武道週間を初めて指導
1939	14	56	軍・官・政・財界各最上層部にある門弟あるいは後援者により、皇武会法人化の議が積極的に推進された
			4月,満洲国主唱で開催された公開武道大会に日本の武道界の達人(剣道の高野佐三郎,柔道の磯貝一ほか)に混じって植芝も招聘される。
			その折満洲国武道会常務理事の和久田三郎(元関脇天竜)は植芝の技量に敬服して入門、その後70日間に渡り内弟子修行に励んだ。
1940	15	57	2月11日,高弟富木謙治、湯川勉に初の八段を授与。段位制を採用し、大東流と事実上の決別となる。
1940	15	57	9月,日本紀元二千六百年慶祝記念事業の一つとして催された武道演武大会に招かれて再度渡満。建国大学武道週間(9月23-28日)指導。
			11月23日,神武殿落成式。各武道の演武及び全満大学対抗武道大会挙行。植芝は富木謙治と形の演武、天龍も受けに使い満堂の観衆をうならせたという。
1942	17	59	8月8日,建国十周年慶祝日満交歓武道大会(於神武殿)が満洲国皇帝、関東軍、政府などの最高幹部が悉く臨席する中で挙行。植芝は建大助教の大庭英雄と演武
			8月15日,建大研究院武道班主催の研究会で講演。武道修業における直感力について体験談を発表した。
			大日本武徳会は合気武道を合気道と改称することを要請、武徳会合気道部となりはじめて合気道と呼称した。
			植芝は道統維持の拠点を茨城県西茨城郡岩間に定めた。
1948	23	65	2月9日,文部省から「財団法人合気会」認可。
1956	31	73	9月,財団法人合気会としては戦後初の一般公開演武会を東京日本橋高島屋屋上において5日間にわたり開催。
1969	44	86	4月26日,死去

表10-1：建国大学・銃剣道教育略年表	
1937/昭和12/康德4	(1932/昭和7「満洲国」建国) 7月、日中戦争(支那事変)
1938/昭和13/康德5	5月、建大入学式。一期生約150名、前期1年入学。作田荘一副総長
1939/昭和14/康德6	一期生、前期2年へ進級。二期生、前期1年入学
1940/昭和15/康德7	一期生、前期3年へ進級。
1941/昭和16/康德8	一期生、後期1年に進級。12月、太平洋戦争
1942/昭和17/康德9	一期生、後期2年に進級。6月、作田に代わって退役中将尾高亀蔵副総長就任
	中国系学生が反満抗日運動で逮捕されたことによる。
1943/昭和18/康德10	6月、一期生卒業式。11月、入営学生に対し仮卒業証書、12月、学徒出陣
	3月、春季武道大会で銃剣道実施(『建国大学年表』初出)
	4月25日付けで一期生齊藤精一銃剣道初段証書授与される
1944/昭和19/康德11	5月、午後、銃剣道大会(於養正堂)各学年四十名の対抗試合。前期三年優勝。
	5月30日、新京忠霊塔春季例祭後に銃剣道試合、建大生参加
	9月10日、武道週間始まる。毎朝銃剣道
1945/昭和20/康德12	3月10日、午後、銃剣術大会。8月、日本敗戦、建大閉学、「満洲国」崩壊

資料13-1：武道論講義要綱

* 志々田注：原文は縦書き、ガリ版刷り、長野直臣氏遺族が建国大学同窓会に寄贈

武道論講義要綱

富木

第一章 武道の定義

(一) 武の字義

1. 武の字義
2. 武を表はす古語

(二) 文と武との関係につきての諸説

1. 文武一徳説
2. 両輪説
3. 主文説
4. 主武説
 - 一. 國性説
 - 二. 神武説

(三) 武道とは養正振武の道である

1. 養正の意義
 - 一. 天業恢弘東遷の詔
 - 二. 國体と建国精神
 - 三. 養正とは国家の使命である
2. 振武の意義
振武は正を弘めるために汎ゆる
障碍を起克して進まうとする生
命力の發規である

第二章 生命活動の帰着点

(一) 生命活動体としての人生

1. 本能の種類とその性質
2. 三つの根本慾望とその方向
3. 絶對的生命實現への希求

(二) 道と術

1. 道と眞理
2. 道と術
3. 道と和
4. 道と眞善美
5. 道と神
6. 道の体得と安立造化

(三) 人生の目的

1. 生存・・・・・・第一段階
2. 幸福・・・・・・第二段階
3. 安立・・・・・・第三段階
4. 造化・・・・・・第四段階

第三章 生命活動の最高示現としての國家

(一) 國家成立の動因としてんぼ外的条件

1. 社會的動因
2. 經濟的動因

(二) 國家成立の動因としての内的條件

1. 支配慾
2. 功利性
3. 相愛性

(三) 國家成立の根本動因としての生命活動

1. 生命活動の展開と國家
2. 生命活動の極限と絶對的國家

第四章 生命活動と闘争

- (一) 生命活動と闘争の必然性
- (二) 生存幸福のための闘争
 1. 自然による障碍との闘争
 2. 人爲による障害との闘争
- (三) 安立造化のための闘争
 1. 解脱を防ぐる煩惱との闘争

第五章 絶對平和の實現と國家の使命

- (一) 闘争絶滅の二途
 1. 闘争絶滅の意義
 2. 個人の教育
 3. 社會の改造
- (二) 闘争絶滅と道德宗教
 1. 人類の平和と道德宗教
 2. 國家の力なくして終局的に絶滅の力があるか
- (四) 闘争絶滅と國家
 1. 絶滅の資格なき國家
 2. 絶滅の資格ある國家

第六章 武國としての日本國及び滿州國

- (一) 武國の意義
 1. 武と文化の發達
 2. 個人としての大丈夫
 3. 國家としての大丈夫(道義國家)
- (二) 武國としての精神的要素
 1. 絶對の眞理によりて建つ國
 2. 國民の歸依信順
 3. 國民の資質
- (三) 武國としての物質的要素
 1. 物質力
 2. 地の利

第七章 日本精神に於ける武の本質

- (一) 武と日本精神
- (二) 神話にあらわれた武(須佐之男命の御こと)
- (三)
 1. まこと
 2. まつり
 3. むすび
 4. 直昆靈と行
- (四) 神意發現と三種神器
- (五) 一靈四魂三元八力の説
- (六) 國民の使命と神人合一

第八章 狭義の武は武術として現はれる

- (一) 武術の意義
- (二) 武術の種類
- (三) 武道と武術
- (四) 武術と民族性

第九章 日本精神の技術的顯現としての日本武道

- (一) 神武不殺の精神
 1. 心構及持身の態度と活人劍
 2. 技術的展開としての神武不殺
- (二) 滅私奉公の精神

1. 没我捨身と武道の極意
2. 相打ち体当りの精神的意義
- (三) 必勝の精神
 1. 武道の原動力としての負けじ魂
 2. 自主的精神と「先」の極意
 3. 必勝に対する信仰
- (四) 名誉を重する精神
 1. 本能的満足の勝利と道義的勝利
 2. 闘争の道義化としての武道
- (五) 礼儀を重する精神
 1. 武道の礼儀にあらはれた和の精神
 2. 武道精神と秩序統一

第十章 藝道としての日本武道

- (一) 武道の術理的極到
 1. 剣の氣 -- 超克の氣
 2. 柔の理 -- 順應の理
 3. 神人合一の境地
- (二) 武道の心法と禅
- (三) 武道に表現された力と正と美
- (四) 武道と日本藝術の特質

第十一章 武道の生活化

- (一) 古代に於ける武士道
- (二) 封建時代に於ける武士道
- (三) 明治以降に於ける武士道
- (四) 現代國民の臨戦態勢下に於ける生活と武道
- (五) 國防競技の核心としての武道

第十二章 武道の修行

- (一) 國民の修行道としての武道の意義
- (二) 武道修行の目標
- (三) 武道の技術的本質
- (四) 武道の修行法

第十三章 結語

- (一) 養正堂々訓